

博士論文

妖怪文化の現代的活用に関する研究

—地域住民を主体とする妖怪存在の再創造の事例から—

平成 25 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

市川寛也

筑波大学

目次

序論	1	研究の背景	6
	2	研究の目的	7
	3	先行研究	
		1) 学術用語としての「妖怪」の概念形成	9
		2) 多様化する妖怪研究の背景—民俗文化／大衆文化	11
		3) 妖怪文化の再創造をめぐる議論—妖怪のフォークロリズム	13
	4	論文の構成—研究の対象と方法	18
第1章	妖怪文化の現代的活用の歴史的展開と背景		
	本章の目的と方法		22
第1節	妖怪文化の現代的活用の萌芽期—ふるさとの再生に向けて		
	1	旅と伝説に対する関心の高まり	
		—妖怪文化の現代的活用の前史として	22
	2	地域を楽しむ人々の出現	
		—福岡県田主丸町における「河童族」の結成	24
	3	温泉観光地における新たな伝承の創造	
		—北海道札幌市定山溪温泉の取り組みから	25
第2節	行政主導による妖怪文化の活用		
	—ふるさとイメージの活用からコンテンツ・ツーリズムへの移行		
	1	地域開発における外発性と内発性	
		—1960年代以降の「地域」の発見	30
	2	民話のふるさとの内と外	
		—岩手県遠野市の取り組みを中心に	32
	3	ミニ独立国からふるさと創生事業へ	
		—地域の個性の表出	36
	4	コンテンツとしての妖怪の可能性	
		—鳥取県境港市の取り組みを事例に	43
第3節	地域密着型の妖怪文化の再創造		
	—コンテンツ重視からコミュニティ重視へ		
	1	2000年代以降の文化芸術によるまちづくり	45
	2	外発的なコンテンツを通じた地域価値の再発見	
		—広島県三次市「物怪プロジェクト三次」の活動から	46
	3	地域住民による妖怪伝承の再発見と地域学習	
		—大分県臼杵市「臼杵ミワリークラブ」の活動から	48

4 アートプロジェクトを通した妖怪文化へのアプローチ	
―物語消費から物語創造へ向けた主体性の回復・	48
第1章のまとめ・	50
第2章 歴史とともに転生を繰り返す妖怪文化―鵺の再創造の過程を事例に	
本章の目的と方法・	55
第1節 鵺退治説話の生成と伝播	
1 歴史の中の鵺―『平家物語』に至るまで・	55
2 鵺退治説話の解釈―史実と創作のあいだで・	58
3 謡曲「鵺」の成立―演劇を通した再創造・	59
第2節 鵺の可視化―「怪鳥」から「怪獣」へ	
1 鵺の記述をめぐって・	60
2 絵馬に描かれた鵺―造形を通した再創造・	63
3 鵺の図像の展開―表現媒体の多様化・	67
第3節 鵺説話の拡散―民間伝承としての定着	
1 民間伝承における鵺・	70
2 京都府京都市―物語の舞台として・	72
3 大阪府大阪市都島区―史跡鵺塚保存会の結成・	74
第4節 現代の地域社会における鵺の再生―静岡県伊豆の国市の事例から	
1 戦前の伊豆長岡温泉開発略史・	78
2 第二次世界大戦後の伊豆長岡温泉の復興・	79
3 鵺ばらい祭りの誕生―ふるさとの祭りのフォークロリズム・	81
第5節 鵺ばらい祭りを通した地域の物語の再創造	
1 地域に合わせてアレンジされる鵺の物語・	83
2 鵺ばらい祭りの展開・	84
3 受け継がれる「伝統」・	86
第6節 地域行事を通して形成される妖怪観―中学校における調査から	
1 調査の概要―目的と方法・	87
2 中学生にとっての妖怪観・	88
3 鵺ばらい祭りを通した鵺のイメージ形成・	92
第2章のまとめ・	94
第3章 妖怪文化の活用における地域性と大衆性―山城・大歩危妖怪村の事例から	
本章の目的と方法・	100
第1節 妖怪伝承の原像―民俗学者による記述を中心に	
1 山城町の地域性―「秘境」と「伝説」・	101

2	山城町の妖怪伝承の実態―柳田國男「妖怪名彙」ほか	102
第2節	妖怪伝承の図像化―伝承と創作	
1	民俗（学）的妖怪像の大衆化 ―1960年代の妖怪ブームを中心に	103
2	妖怪ブーム期における妖怪存在の再創造 ―物語からキャラクターへ	105
3	水木しげるによる「こなきじじい」の創造以降 ―知識としての妖怪へ	107
第3節	妖怪伝承の資源化―地域再生の素材として	
1	伝承の再発見―地域性の回復	110
2	伝承空間の環境整備 ―四国の秘境山城・大歩危妖怪村の誕生	111
3	妖怪屋敷の開館―「道の駅博物館」としての機能	112
4	エコミュージアムとしての山城大歩危妖怪村	116
第4節	地域社会における妖怪観の質的变化の構造	
1	今日の妖怪伝承の実態―小学校での調査を通して	119
2	地域に内在するもうひとつの妖怪観 ―伝承者の語りとフォークイメージ	126
3	妖怪文化の継承と現代的活用の限界	128
第3章のまとめ		132

第4章 地域住民を主体とする妖怪存在の再創造

―地域の記憶を可視化するアートプロジェクトの開発

本章の目的と方法	138
第1節 地域密着型の妖怪文化の創造	
1 伝承の創造に向かう心意	138
2 滋賀県八日市市における取り組み—ほない会による「ガオ」の再生	140
3 岩手県胆沢郡金ケ崎町における取り組み —金ケ崎まちづくり研究会の活動から	146
第2節 アートプロジェクトの民俗学—「限界芸術」領域との接触を中心に	
1 地域におけるアートプロジェクトの目的	152
2 アートプロジェクトを通じた「限界芸術」の現代的再生	155
3 アートプロジェクトを通じた新しい民俗の創出 —妖怪は「限界芸術」の対象となり得るのか	159
第3節 隅田川妖怪絵巻の構想	
1 実施体制—NPO 法人千住すみだ川の概要	160

2	隅田川をめぐる伝承	162
3	実施地域について—南千住の今昔	164
第4節	妖怪伝承の生成過程の分析—共同ナラティブとしての妖怪	
1	プロジェクトの実施方法と調査内容—会話分析	169
2	プロジェクトの実施状況と活動の成果物	170
3	妖怪存在の生成過程の分析	175
第4章	のまとめ	178
結章	1 本論のまとめ	183
	2 地域文化としての妖怪文化	185
	3 課題と展望	187
	図表一覧	189
	参考文献一覧	194
	謝辞	200

凡例

- 1 本論文は、筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻芸術支援領域博士後期課程の博士論文として2014年3月25日に提出されたものである。
- 2 本論は4章構成とする。第1章では、戦後の日本における妖怪文化の活用の歴史的な展開について概観した。第2章では、鶴を事例に妖怪文化の地域伝播と定着の過程を明らかにした。第3章では徳島県三好市山城町を事例に妖怪文化の民俗性と大衆性の関係について明らかにした。第4章では地域住民による妖怪文化の再創造について実践研究を通して明らかにした。
- 3 脚注については各章末に記した。
- 4 著作物は『 』、論文は「 」で括っている。
- 5 展覧会名は「 」で括っている。
- 6 引用文は本文中で用いる際は「 」で括っている。また、引用が長い場合はインデントを2文字下げてあらわしている。
- 7 引用文中の「 」は『 』であらわした。
- 8 参照したURLについては、2013年8月31日現在接続が確認されたものとする。
- 9 本文中に記載された人物の役職・肩書については、特記がない場合2013年現在のものとする。
- 10 掲載写真は特記されたもの以外は全て筆者による撮影である。
- 11 附録として、質問紙調査の原紙ならびに回答結果、事例調査地の関係各機関への聞き取り調査の全文書き起こしを掲載したので、適宜参照されたい。

序論

1. 研究の背景

妖怪は、時代に応じて再創造を繰り返しながら生きた文化として受け継がれてきた。では、現代社会において妖怪はどのように再生されているのだろうか。

近年、「妖怪」をテーマとする展覧会が各地で続々と開催されている。2013年に限っても、「幽霊・妖怪画大全集」(福岡市博物館／2012年6月30日－9月2日、大阪歴史博物館／2013年4月20日－6月9日、そごう美術館／2013年7月27日－9月1日)、「日本の「妖怪」を追え！」(横須賀美術館／2013年7月13日－9月1日)、「大妖怪展」(三井記念美術館)(兵庫県立博物館)など、全国各地で活況を呈している。

展覧会に限らず様々なイベントでも妖怪が「活用」されている。井の頭自然文化園では夏休みの特別企画として「動物園怪談画劇ー井之頭百物語」と題したスタンプラリーが開催されていた。このように、近年では様々な領域において妖怪文化を活用する現象が生じている。NHKの連続テレビ小説「ゲゲゲの女房」でますます多くの観光客が訪れるようになった鳥取県境港市の水木しげるロードも、「妖怪でまちおこし」といった言説とともに数々のメディアを賑わせていることから、コンテンツ・ツーリズムを中心とする観光資源としての妖怪キャラクターにも人々の関心が集まっている。また、妖怪文化を活用した地域づくりに取り組んでいる徳島県三好市山城町は、2013年に「サントリー地域文化賞」を受賞した。このように、今や妖怪は地域文化として受容されつつある。

無論、妖怪文化の「活用」は現代に限った現象ではない。物理的な実体を伴わない妖怪は、人々の想像力によって生かされてきた。その意味において、ここでいう活用とは「再創造」という言葉に置き換えることができるだろう。例えば、物理学者の寺田寅彦(1878-1935)は、1929年に発表した随筆「化物の進化」の中で「人間文化の進歩の道程において発明され創作された色々の作品の中でも『化物』などは最も優れた傑作と云わなければなるまい」と述べている。その心は「自然界の不可解な現象を化物の所業として説明した¹⁾」先人の知恵に向けられたものではあるが、化物(妖怪)を「作品」と断言する寺田寅彦の視点は、芸術学の研究対象として妖怪文化と向き合う上で示唆に富むものである。

また、柳田國男は『妖怪談義』の冒頭において「けだし我々の文化閱歴のうちで、これが近年最も閑却せられたる部面であり、従つて或民族が新らたに自己反省を企つる場合に、特に意外なる多くの暗示を供與する資源」であると述べている²⁾。その後、柳田が民俗学の対象として学術的に位置づけてきた「妖怪」は、術語としての範疇を越えて様々な場面で使われていく。とりわけ、戦後の日本において、妖怪は大衆文化を中心に様々なメディアに乗って活躍していくことになった。その立役者の一人となったのが水木しげるであることに反論の余地はない。水木の生み出した妖怪たちは、マンガやアニメを通して人々の日常的な生活の中に入り込んでいく。そこでは、かつて柳田が日本人の心性を読み解くための「資源」と見なした妖怪文化に、その他の様々な「資源性」が見出されていくことにな

る。

その結果、妖怪はそれが語られてきた民間伝承の場を離れて、目に見える形で様々な場所で活用されていくことになる。無論、現代の妖怪画展で展示されるような《百鬼夜行絵巻》や鳥山石燕の『画図百鬼夜行』シリーズ、浮世絵に描かれた妖怪たちも、不可視の存在の可視化という点においては広い意味での活用に含まれるが、本論では現代に固有の活用方法に目を向けていく。例えば、まちづくりや観光の手段として妖怪が用いられているのは、現代的活用の事例と見なすことができよう。果たして、そうした現場において、妖怪文化はどのように再創造されているのであろうか。

2. 研究の目的

そもそも、本研究は「妖怪がいる／いない」という問いに答えを見出そうとするものではない。それよりも、人々がつくりあげてきた「作品」として妖怪を位置付けることにより、それぞれの時代や地域において再創造され続けてきた生きた文化としての側面を明らかにすることを目指すものである。それゆえに、妖怪存在そのものについて言及するよりも、それらを生み出したてきた人々の活動を研究の対象として据えた。そこには妖怪が本当に「いる」と信じてきた人々による「語り」も含まれるし、妖怪は「いない」と思いながらもそれらを活用しようとする人々による営みも含まれてくる。

とりわけ、本論では妖怪文化の現代的活用にスポットを当てていく。無論、「妖怪」という言葉が学術用語として位置付けられたのは近代以降のことだが、その基盤には身の回りで起こる不思議なできごとに解釈を加えることによって生み出されてきた「民間伝承」の蓄積がある。言わば、未知の世界に対する畏怖・恐怖の感覚から生じる人々の心意に基づく妖怪文化と言えよう。その一方で、江戸時代になるとこうした心意とは独立したベクトルを持つ娯楽としての妖怪文化が生み出されるようになっていく。妖怪文化の持つ娯楽性は、視覚文化としてその後の「大衆文化」にも受け継がれていく。今日では、むしろ「妖怪＝キャラクター」という認識が一般的であると言っても過言ではない。妖怪文化を考察する上で、それらの内包する「民間伝承」としての側面と「大衆文化」としての側面の両者を意識することは不可欠の課題となる。

妖怪文化の「活用」の事例を分析する指針として「民間伝承／大衆文化」という軸を設定するのは有効ではあるが、こと現代的活用に限って見ると、大衆文化偏重の傾向があることは紛れもない事実である。もちろん、活用の前提として可視化がなされていることは重要な条件の一つであると言えよう。ただし、本来の民間伝承までもが「キャラクター」に塗り替えられつつある可能性があることは看過できない。ここには、妖怪文化の「伝承」と「創造」をめぐる大きな課題が秘められている。

とは言え、他の多くの無形民俗文化財と同様に、民間伝承としての妖怪文化の担い手となるのは地域住民に他ならない。そこで、本研究では、地域住民を主体とする妖怪文化の再創造の事例に着目する。まちづくりの素材として、観光資源として、あるいは地域学習

の対象として、妖怪は地域社会においてどのように再生されているのだろうか。その手法は多岐にわたるが、本論では「物語消費モデル」と「物語創造モデル」という二つの型を想定することとしたい。従来の妖怪文化の活用の多くは、既存のコンテンツを活用し、そうした物語を場所と結びつけることで消費の対象として確立させてきた。ここには、民間伝承としての妖怪も大衆文化としての妖怪も含まれることになる。ここでは、その地に訪れる観光客のみならず、地域住民さえもが物語の消費者となっている。その一方で、物語創造モデルでは、物語のつくり手としての地域住民の主体性が回復されることになる。

ここで改めて、以上に掲げた内容をまとめると、以下のようなモデルを想定することができる。

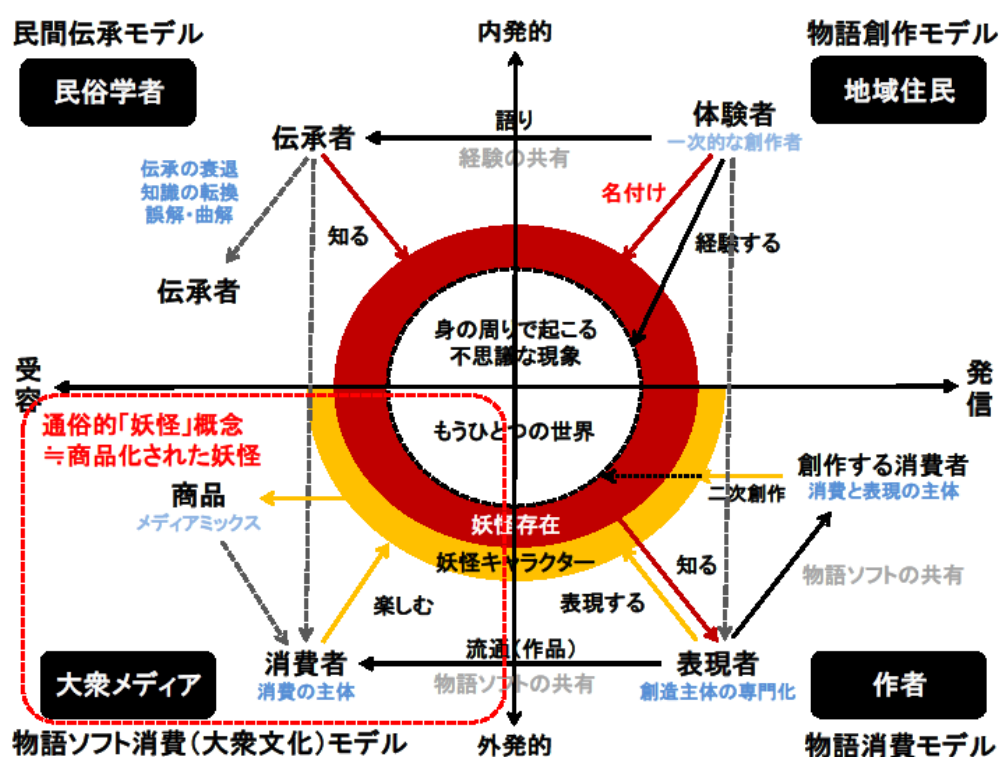


図0-1 妖怪文化の創造と伝承と活用のモデル

縦の軸は、妖怪文化そのものが内発的に生まれたものなのか、外発的に導入されてきたものなのかの区別を示している。横の軸は妖怪文化の発信者と受容者の区別を示している。そして、それぞれに対応する立場として、身の周りの不思議を体験する地域住民の存在、それらを情報として集約させる民俗学者の存在、そうした妖怪に関する情報を創作の素材とする作者の存在、そしてそれらを商品として流通させる大衆メディアの存在を当てはめることができる。こうしたモデルを想定した上で、妖怪文化の現代的活用の特徴を抽出していくことを目指す。

現代では、様々なメディアを介して情報が行き渡り、大衆文化としての妖怪が基礎知識

として蓄積されており、外発的かつ受動的な妖怪文化が主流を占めているが、その一方で独自の地域文化として妖怪を位置づけようとする事例が見られる点は注目すべきである。本論では、そうした物語創造型の事例について考察を進めながら、地域を表現する手段としての妖怪文化について考察を進めていく。

3. 先行研究

3-1. 学術用語としての「妖怪」の概念形成

妖怪を学問の対象として扱ったのは、哲学者の井上円了の功績による部分が多い。とは言え、円了が対象としていた「妖怪」は、現在一般に認識されているところよりもずっと広い範疇を視野に入れたものであり、「占い」や「心霊現象」などを含むものであった。こうした様々な「現象」を近代科学の目から「説明」していった円了の仕事の背景には、前近代的な「迷信」に惑わされ続けていた当時の状況に対する批判があった。これらを整理するために円了が構想したのは、妖怪を「実怪」と「虚怪」とに分類するという視点である。更に、「実怪」は「真怪」と「仮怪」に、「虚怪」は「偽怪」と「誤怪」に分けられる。「真怪」とは「超理的妖怪」のことであり、哲学の対象とすべき真理である。「仮怪」は「自然的妖怪」のことであり、ここには「物理的妖怪」と「心理的妖怪」の二種類が含まれる。「偽怪」は「人為的妖怪」のことであり、「人の工夫より色々作り出したる妖怪にして、あるいは私欲のため、あるいは政略のため、あるいは虚名のために無き妖怪を有る様に言い触らし、針小の妖怪を棒大に述べ立て」た類の妖怪と分類する³。「誤怪」は「偶然的妖怪」のことであり、「妖怪にあらざるものを誤り認めて妖怪となせるの類」として分類している。妖怪を虚実によって区分することで、世の大部分を占めている「虚怪」を切り捨てるのが円了の取った立場である。円了自身、「迷信教が行はれ妄説詐術を以て愚民を誑惑するため、愚民は益々迷信に迷信を重ねるに至り、教育道德の進路を妨げ、社會に害毒を流すやうになるを免れぬ、是れ余が妖怪の真相を明かにして、迷信の害を除かんことを勉めたる所以」と語っている⁴。円了は日本全国の妖怪伝承を渉猟しながら事例収集に努めたのだが、そこでは対象を「明治維新後に起つた出来事に限り」、昔話については「もとより信ずることが出来ぬ」としている⁵。

一方で、民俗学者の柳田國男は民俗の心意現象の発現として妖怪を位置付けている。また、その対象も円了が切り捨てた昔話や伝説を含むものであった。柳田は「昔話」と「伝説」について、前者は「作りごと、フィクション、夢、文芸であるという意識を根底に持つて居る⁶」のに対して、後者は「目に見えるものにくつつく傾向」があり、「其周囲の利害関係のある者は之を信ずる」としている⁷。もちろん、伝説を「信ずる者がなくなる」ことで昔話化されることも少なくないが、「説く者聴く者の態度が共に全く別であった」ために、「昔話はどうせ現世の事でないと思っているから、できるだけ奇抜な又心地良い形にして伝えようとしているに反し、伝説は今でも若干は信ずる者があるので、怪異をありそうな区域に制限する」のである⁸。いわゆる妖怪伝承の中にも、「昔話」としての性質を持つもの

と「伝説」としての性質を持つもの、そして同時代を語った「世間話」としての性質をもつものがあることは留意すべきである。

柳田は、民俗資料を分類する上で「三部分類」の方法を採用している。第一部は「目に映ずる資料」であり、「有形文化とも生活技術誌或は生活諸相」が相当する。第二部は「耳に聞こえる言語資料」であり、「言語芸術或は口承文芸」が該当する。第三部は「心意感覚に訴へて始めて理解出来るもの」であり、「生活諸様式・生活解説・生活観念」と呼ぶこともできる⁹。中でも、柳田が「同郷人の学」と呼ぶ第三部は、「心意諸現象」とあらわされ、柳田をして「郷土研究の意義の根本」と言わしめる領域である¹⁰。上原輝男は心意伝承を「目的に向わせる感情の流し方、伴わせ方」であるとしている¹¹。すなわち、ここでは伝承がある目的性を持っており、それに関わる人の意識が重視されているわけである。このことは「傳えんとする意志と、承けようとする意志とが、おのずから一致しないでは伝承は成立しない」という指摘からも導き出すことができよう¹²。心意伝承はあらゆる文化継承の根幹をなす意識作用であるが、こうした意識は個人の内側から湧出するものであって外側から強制することはできない。例えば、井之口章次は心意伝承の内容として次のような項目を挙げている。

- 一、知識と技術一兆・占・禁・呪・妖怪・憑物など。
- 二、感情一喜怒哀楽、恥、嫉妬、笑いなど。
- 三、道徳一礼儀作法、挨拶仁義、義理人情など。

これらの多くは、基本的には年長者から若年者へと、共同体の暮らしの中で、場合によっては無意識的に受け継がれていくものである。井之口は心意伝承は「とらえどころがない」と指摘しながらも、それを具現化する方法として「ライフ・ヒストリー」の可能性について言及している。これは「個人の観察や体験を、その人の感性と意見とを通して表現したもの」であり、ここで語られる事象の中に自ずと見出される要素が心意現象として位置づけられる¹³。

民俗学の研究対象としての妖怪は柳田によって体系化され、それが後世の妖怪研究にも大きな影響力を持つことになる。しかし、その思想は無批判に受け入れられてきたわけではなく、むしろ比較対象として据えられることによって妖怪研究の支柱を担ってきた。神と妖怪との関係に着目すれば、柳田は、妖怪を分類する上で信仰の濃淡をその基準の一つとして設定し、妖怪を「前代信仰の零落した末期現象」として解釈している。これに対して、小松和彦は日本の妖怪が「流動的・可変的性格」を有していることを指摘している¹⁴。

小松が構想する「妖怪学」は、「人間が想像（創造）した妖怪、つまり文化現象としての妖怪を研究する学問」であり、「妖怪を通じて人間の理解を深める『人間学』」であると位置付けられる¹⁵。さらに、その研究領域は大きく二つに分けられている。第一に「現実世界における妖怪を信じている人々の研究」であり、第二に「そうした妖怪信仰の影響を受け

て作られた、妖怪の登場する物語や儀礼、芸能、絵画などの研究」である。前者は「ノンフィクション」としての妖怪研究であり、後者は「フィクション」としての妖怪研究であるわけだが、両者は互いに影響関係にあるため、独立して存在しているわけではない¹⁶。本論が対象とする妖怪文化の活用もまた、両者の境界線上に立ち現われるものと言えよう。

小松は、妖怪を「妖怪現象」と「妖怪存在」という二つの段階に構造化した。前者は、ありとあらゆる不思議な現象を含むものであり、その中から何らかの現象が抽出され、そこに超自然的な存在が想起された時にいわゆる「妖怪」が生まれる。本論文における「妖怪」も、基本的にはこうして生成された「妖怪存在」を対象とするものである。

3-2. 多様化する妖怪研究の背景—民俗文化／大衆文化

柳田が調査の対象としていたのは、山や森といった農村地帯であったが、江戸時代における妖怪文化の開花がそうであったように、基本的に妖怪文化は都市の中で花開いてきた。近代以降も、民俗学の対象として「発見」された学術用語としての「妖怪」と同時並行的に、都市の暮らしの中で「妖怪」という言葉が用いられてきた。しかしながら、戦前のそれは必ずしも現代人が思い描くような「妖怪」を対象とするものではなかった。例えば、1938年に『少年倶楽部』に掲載されていた江戸川乱歩の「妖怪博士」では、変身上手な「怪人」を指して「妖怪」という言葉が用いられている¹⁷。加太こうじは、昭和初期の「エロ・グロブーム」について、紙芝居に象徴されるような「前近代的感覚」と江戸川乱歩の怪奇探偵小説に象徴されるような「近代的感覚」とを比較して、前者が『庶民』としての紙芝居の作者の生活環境に由来する見世物的草双紙的古めかしさに根差しているのに対して、後者は古い見世物小屋や一寸法師といったテーマが「新奇を求めるモダニズムの裏返し」として「懐古趣味的」に用いることによって成立していることを指摘している¹⁸。これらはいずれも町で生まれた文化であることは間違いないが、ここから「古めかしさ」が「懐古趣味的」に再生するようになるにはまだ時間が必要であった。

戦後になると、農村型の価値観に代わって都市型の価値観が大多数を占めるようになると、それに伴い大衆文化も隆盛をきわめていくことになる。そこでは、従来の民俗社会に置き換わって大衆メディアが妖怪文化の再生装置として機能していった。特に、大衆文化とその受け手としての「大衆」を生み出す上で大きな役割を果たしたのがテレビ放送であった。1953年に始まったテレビ放送は、1961年度には約50%の普及率を達成するに至った。鶴見俊輔は、テレビというメディアが「日本の現在のまとまり、日本人としての統一をつくり出す仕組み」として機能していることを指摘している¹⁹。そこではまさに全国共通の文化が「大衆」によって享受される構造が生み出されている。1972年に太平出版社から出された『通俗の構造』においても、テレビ番組「夫婦善哉」を扱った山本明による論考や「松竹新喜劇アワー」について分析した鶴見の論考が掲載されている。この本のあとがきにおいて、「大衆文化・芸術といわれるものが内包する『俗性』とはなにか」と同時に「対象としたものが一般にあびせられる『低級』『下品』『俗悪』といった評価の基準とな

っている『聖性』とはなにか」という課題が提示されている²⁰。近年でこそ、「サブカルチャー」という領域が「ハイカルチャー」に勝るとも劣らない「コンテンツ産業」として発信されつつあるが、その背景に「通俗」と見なされてきた歴史があることは言を俟たない。

妖怪もまたこうした時代を経て「通俗化」していくことになる。とは言え、そもそも妖怪は「純粋芸術」や「ハイカルチャー」に属する文化ではなかったはずである。それ自体、民「俗」文化の中で育まれてきたものであるわけだが、果たして「民俗」と「通俗」はいかなる点で区別されるべきなのだろうか。例えば、「通俗」の用法に目を向けると「一般の人々にわかりやすくすること。大衆化。(popularization)」「安っぽくなること (become cheap)」として「通俗化」という言葉がある²¹。ここでは、「通俗」に対照する何らかの概念、例えば「純粋芸術」や「ハイカルチャー」が想定され、そこからの「変化 (variation)」として「通俗」が位置付けられると読むことができるだろう。これは「純文学」に対する「通俗小説」といった言説にもあらわれている。一方で、「民俗」とは「民間の生活に結びついた信仰・習慣・風俗・技術・伝承文化などの総称」とされ、それ自体で独立した概念として提示されるべきものである。その意味において、「民俗文化」は「純粋文化」とも「大衆文化」とも異なる第三局として位置付けられるべきであった。

これについては、鶴見俊輔が 1956 年に発表した『限界芸術論』においても議論されている。鶴見が限界芸術を構想する上で、比較対象としての民俗文化を念頭に置いていたことは明らかである。真鍋昌賢は、「大衆文化論が、戦後復興あるいは高度経済成長における社会を理解する重要な手段のひとつとなっていくなかで、理論面での議論として代表的なものが限界芸術論であった」と指摘した上で、それに対する批判的な検討から民俗学と「大衆文化」との関係をとらえなおすきっかけを生み出すことを重視している²²。

民間伝承として語られてきた妖怪は、確かに「限界芸術的」存在と言えるのかもしれない。しかし、その一方で現代人の思い描く一般的な妖怪はむしろ「限界芸術」としてのそれではなく、「大衆化」あるいは「通俗化」された妖怪であると言えよう。その立役者となったのが水木しげるであることは間違いない。1922 年に生まれた水木しげるは、幼少期に育った鳥取県境港において、家に出入りしていた景山ふさ（のんのんばあ）の話を聞き、不思議な世界に関心を持つようになる。その後、1943 年に召集令状が届き、補充兵としてラバウルに送られ、空爆に遭い左腕を失う。戦後、1950 年から 57 年にかけては紙芝居作者として活動し、後の有名マンガの前身となる「ハカバ奇太郎²³」（1954 年）や「河童の三平」（1955 年）を書いている。紙芝居の衰退とともに、貸本マンガに移行した水木は、1958 年に兎月書房から出版された『ロケットマン』でデビューする。デビュー後しばらくは作品が売れず極貧生活を送るも、1965 年に『別冊少年マガジン』に掲載した「テレビくん」が第 6 回講談社児童漫画賞を受賞し、これを機に貸本から雑誌へと活躍の場を移すことになる。1966 年から『週刊少年マガジン』に「墓場の鬼太郎」が断続的に連載され、1968 年にテレビアニメ化されると同時に一大妖怪ブームが巻き起こる。

こうして、「妖怪」という言葉がマンガやアニメを通して大衆に介されていくことになる。

とは言え、水木しげるの描く妖怪たちの多くは、まったくの創作ではなく、過去の資料に基づいている。2013年に三井記念美術館で開催された「大妖怪展―鬼と妖怪そしてゲゲゲ」では、能面から水木しげるの妖怪画までを展覧する企画だったのだが、水木しげるの妖怪画に付した解説文中には鳥山石燕の『画図百鬼夜行』や歌川国吉の「相馬の古内裏」といった具合に、それぞれのイメージソースが紹介されている²⁴。言わば、過去に描かれてきた妖怪画や柳田國男によって記録された妖怪語彙に新たな絵を与えたことによって妖怪文化を現代に再生させた点に水木しげるの功績を認めることができる。そして、氏が生み出した妖怪イメージは、それまでの妖怪観をすっかり塗り替えるほどの影響力を持つものであったと言えよう。

作家の京極夏彦は、「通俗的『妖怪』概念」という言葉によって現在の一般化された妖怪認識を明らかにしている。そこでは、第一に「前近代的存在であること」、第二に「民俗学的なイメージを持っていること」、第三に、上記の「条件を備えたキャラクターが確立していること」が揃って初めて人々に「妖怪」あるいは「妖怪的」と認識されることが指摘されている²⁵。そこでは、井上円了や柳田國男によって「術語」として形成されてきた妖怪概念がマンガやアニメを通して大衆化されることによって「通俗語」として広がっていった過程が考察されている。その意味において、1970年代以降の妖怪は、学術的な研究対象としてのそれと通俗化された大衆文化としてのそれとに大きく分けることができる。

ここで提唱されている「通俗的『妖怪』概念」は、今日の妖怪研究をする一つの軸になり得るものである。香川雅信は、「妖怪観の変遷という視点から妖怪研究をおこなう場合には、その通俗的な『妖怪』概念自体が、現代の妖怪観を示す一つの事例となりうる」ことを指摘している²⁶。実際、妖怪文化の現代的活用について考察する上でも、そこで「活用」されている対象の多くがこうした通俗的な妖怪概念に根差していることは重視すべきだろう。そこでは、妖怪文化の持つ心意現象としての側面（不可視的側面）よりも、キャラクターとしての側面（可視的側面）に関心が寄せられている。

3-3. 妖怪文化の再創造をめぐる議論―妖怪のフォークロリズム

妖怪文化の活用は、地域社会を基盤とする民俗文化とは独立し、大衆文化との融合を図りながら成立してきた。とは言え、そうしてつくられた妖怪文化そのものもまた「民俗」であることは紛れもない事実である。香川雅信は「妖怪／フィギュア論」と題した論考で、近世から近代にかけて「人形」に対する人々の感覚について、明治期における「江戸時代に対するノスタルジア」から大正期における「郷土」への関心、昭和期における「フィギュア」の誕生を経て現代の海洋堂へと至る過程を指摘し、そこに「民俗的世界観から断絶することによって成立した現代のフィギュア」が「新たな『民俗』を創り出そうとしている」と分析している²⁷。

ここで、香川が「新たな『民俗』」の創出として述べている動向は、本論の主たる関心対象でもある活用の問題とも関わってくる。では、本来であれば「伝承」に根差していた「民

俗」は、果たして「創出」あるいは「創造」の対象となり得るのであろうか。広末保は、1980年に発行された『悪場所の発想』の中で、「意識的な創造行為は、もともと伝承行為と対立する側面をもつ」とした上で、「近代的な創造主体は、なんらかの意味で、伝承的発想からの脱出によって形成されたが、そのような創造主体が、伝承されたものを素材として生かすということは、伝承されたものをあくまで反伝承的な発想にもとづく個性的創造のための『素材』として生かす」としている²⁸。ここで言う「伝承されたものを素材として生かす」ことは、「ふるさと」への関心の高まりとともに現代社会において様々な形で取り組まれている。

例えば、1966年に始まったNHKのテレビ番組「ふるさとの歌まつり」は、それぞれの地域に伝わる民謡や伝統芸能と同時代のスターによる歌番組とを融合させた人気番組であった。この番組について、松平誠は「TVメディアによる地域文化掘り起こしの画期的な実験であると同時に、地域文化が都市化の中で持続していく契機を提供したのもであった」と指摘している²⁹。松平は、柳田の祝祭論における「ケンブツ」の発生が、祭りを「スル」集団と「ミル集団」とに分化させた流れの先に、「スル」集団の意識の変化とともに「ミセル」祭りが生まれたことに着目しているが、これは「観光」の視点にも直結する議論であると言えよう³⁰。「ふるさとの歌まつり」は、まさに神のために演じられていた郷土芸能をテレビの向こうにいる大衆に「ミセル」ための舞台芸術として変質させたわけだが、ここには「都市」から「地方（ふるさと）」へという視線を見ることができる。

ある種の「ふるさとの商品化」とでも呼ぶべきこうした現象は、1970年代に「ディスカバー・ジャパン」の旗印の下に展開された旅行ブームにも引き継がれていく。そこでは、「旅に出ると心のふるさがふえます³¹」といったキャッチフレーズとともに、いわゆる名所旧跡ではない日本のどこかにある風景がポスターのイメージとして用いられている。川森博司は、「イメージ化された民俗文化をめぐる中央と地方の関係を、ある意味で典型的に示す」事例として岩手県遠野市を挙げている³²。その経緯を辿ると、1971年に遠野駅前に『遠野物語』の碑が建立されたのを皮切りに、1980年には民俗専門博物館として遠野市立博物館が開館、1984年には『遠野物語』の舞台となった土淵地区に伝承園が開館し、同年から「遠野昔ばなし祭り」が始まっている。1986年には市立博物館の近くに「語り部」の拠点としてとおの昔話村が開かれ、1996年には遠野ふるさと村が開かれた。このように、「昔話」や「ふるさと」を標榜する施設が各地に建てられるのと並行して、『遠野物語』に登場する河童や座敷童子といった妖怪存在が、まちづくりの素材として活用されてきた。無論、それらは単に「もの」として扱われているだけではなく、「語り」としての活動をも対象とするものであるが、石井正巳が観光消費財と指摘する「語り部」が誕生したのもこの時期であった。石井は「家庭の中で昔話をするのではなく、主に観光と結びついて、外からやって来たお客さんを前に昔話を披露する形態」として「民話」と「語り部」という「制度」が生まれたことを指摘している³³。家族や地域社会といった共同体の内側における伝承形態が変質することによって、地域の外側に向けてある種の地域資源として「語り」の独立が生

じているわけだが、こうした問題は先に挙げた大衆文化の隆盛と表裏一体の関係にある。

1970年代の高度経済成長期に各地でなされた地域開発は、「外発的発展」と「内発的発展」の二つの流れを認めることができる。後藤春彦は「まちづくり」の3つの流れを示している。第一に「居住環境からの発想」であり、「住まいの延長上に集まって暮らす舞台としての『まち』を位置づけ、居住環境の改善を主たるテーマ」にするものである。第二に「地域再生からの発想」であり、「社会の衰退の悪循環を断ち切り、かつての活力を地域社会がいかに取り戻すか」を主たるテーマとするものである。これらの二つの流れについて、「前者が未成熟なところに新しいコミュニティを育て上げていく動きなのに対し、後者は閉鎖的に硬着化した既存のコミュニティを解体再生していく傾向」を見出している。第三の流れが「公共事業からの発想」によるものであり、「国土開発や都市開発など各種の公共事業」を指している³⁴。

妖怪文化を活用したまちづくりについては、内発的な資源を活用した取り組みとして位置付けることができる。1970年代には、文化を地域資源として観光目的で活用するような事例も見られるようになってきた。文化を「活用」という現象は、それぞれの時代の要請に応じて様々な手段で行われている。その中には、一過性の「ブーム」として終わるものもあれば、その後に地域文化として定着することによって継続していくものもある。その中でも、1970年代から80年代にかけて全国を席卷した「ミニ独立国運動」は、「高度経済成長期の都市中心主義により取り残された農山村が、過疎化のなかで自律的にその存在を主張するための手法」として位置付けられる³⁵。この時期には、それぞれの「地域の顔」として様々な要素が選出されていった。その中でも、「河童」を地域の象徴と据えた「独立国」が多かった点は注目に値する。

例えば、1988年に熊本県八代市で「建国」された「河童共和国」は、河童九千坊の伝承に基づくまちづくりを掲げる取り組みであった。白石太良は、「ミニ独立国」の多くが「ネーミングの面白さとユーモアあるイベントで人々を引きつけ、知名度を高め、また経済的効果を上げることに焦点を当て」ているのに対して、「文化的背景を歴史学や民俗学の立場をふまえて追求し、その住む水環境を人間生活の舞台に当てはめて考え、自らの主張を明らかにする活動に重点がおかれている」点に「河童共和国」の独自性を認めている³⁶。

斎藤次男は『妖怪都市計画論—おばけからのまちづくり』（1996年）の序章において「妖怪を切り口としてまちづくりの在り方を探り当てようとすることは、従来の正史と呼ばれるものの裏側から物事を見ようとすることであり」、「妖怪を単なる妖怪の分野に限定するのではなく、それを現代の社会との関わり合いの中でとらえ、その中から未来を照らす光りを発見していこうとする」と述べている³⁷。例えば、大江山の酒呑童子にしても、「それは過去の国から現在の我々に真実の報告をもたらすメッセンジャー」であり、「鬼は単なる鬼ではなく現在山村地域に生きている人々そのものを語ることであり、鬼は姿・形を変えながら今もなお生きている」として、現代の地域社会に妖怪のはらむメッセージを適用させることを重視している³⁸。これは、小松左京の言葉を借りれば「自然の中で人間と共存し

ていた一人間はむしろ新参者だったかも知れない―物の怪、妖怪、闇の精霊たちを追いはい、封じこめ、征服したもう一つの歴史」だったのかもしれない³⁹。とは言え、ここではむしろ伝説研究と地域との関係に言及している点において、まちづくり研究とは異なる視点と言うべきだろう。

川村清志は、「民俗学が『現在』を主題化する方途として提示された二つの流れ」として、1980年代を通じて民俗学の重要なトピックとなった「都市民俗学」と1990年代後半から2000年代前半にかけて主張されるようになった「フォークロリズム」を挙げている⁴⁰。宮田登は、都市民俗学の可能性として二つのアプローチを掲げている。第一に「都市に対する歴史的アプローチによるもの」であり、「都市民の原型というべき存在とその心意に関わる属性を、歴史的的研究によって把握することは、民俗の通時的生活を考える上でかなり重要なこと」としている。もう一つが「都市の民俗に共時的なアプローチを試みるやり方」であり、その方法は今和次朗の「考現学」に学ぶべきとしている⁴¹。都市民俗学と考現学との出会いは、ある側面に置いて「路上観察」という行為の中にも見出すことができよう。宮田は、「民俗は再生産されていくもの⁴²」として、農村、山村、漁村が都市化のプロセスの中で顕在化し、破壊されてしまったような聖域が「魔所」となり、「都市民の想像力に投影」されることによって新たな妖怪の出現を指摘している。

これに対して、1990年代に入ると必ずしも「都市」に限らない多様な対象が民俗学の射程に入っていた。「フォークロリズム」と呼ばれる新しい民俗学の対象は、1960年代に当時の西ドイツの民俗学会において生み出された術語である。これは、「セカンド・ハンドによる民俗文化の継承と演出」あるいは「民俗的な文化物象が〈本来それが定着していた場所の外で、新しい機能をもち、新しい目的のためにおこなわれること〉」を意味する⁴³。川村は、『日本民俗学』第236号における多岐にわたる論考を概観した上で、「現代の民俗学は、近代のなかで、市場経済のなかで、マス／マルチ・メディアのなかで、日本のなかで、再創造される存在としての『民俗』、ないしはフォークロリズムと向かい合うしかない」と指摘している⁴⁴。

現代の地域社会において、「民俗」を「活用」する手法はむしろ国家的な施策として推進されてきた側面が大きい。1992年に制定された「地域伝統芸能などを活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律（通称「お祭り法」）」などを通して、民俗芸能をはじめとする「無形民俗文化財」は「保存」から「活用」へと大きく舵を切っている。しかし、澁谷美紀も指摘しているように、そうした施策は「伝承地住民の主体性を前提としているようにみえながら、その実、住民に都市の論理と必要性への対応を要求する」取り組みに直結するものであった⁴⁵。そもそも、ここで語られているような「主体」そのものが極めて難しい問題を孕んでおり、八木康幸の言葉を借りれば「演者の意志、地元住民の意識、自治体の意向、県の意図、国の思惑などが複雑に絡み合う状況」の上に民俗文化の「活用」も立っているわけである⁴⁶。

この意味において、「民俗」と「伝統」が相反する概念であることは特筆すべき観点であ

ろう。そもそも、「民俗」は常に変化し続けるべき対象であり、そうした変化のシステムの中に民俗の本質があると言っても過言ではない。まちづくりや観光といった現代の民俗を研究対象として据える視点について、津城寛文は「フォークロリズムがしだいにノスタルジアの対象となって『真正』のフォークロアになっていくもの」とすると、フォークロア形成の因子を分析するには、現在進行中のフォークロリズムが恰好の材料となる」ことを指摘している⁴⁷。では、妖怪文化の現代的活用を研究する上で、「フォークロリズム」はどのように位置づけられるのであろうか。そもそも、水木しげるが生み出した妖怪画そのものが「フォークロリズム」の産物であるとも見ることもできるだろう。これは、京極夏彦の「通俗的『妖怪』概念」からも導き出される観点であるが、水木しげる以降の「妖怪」は、民俗学的な性格を帯びたイメージとしての地位を確立している。

近年の研究動向として、「民俗」の「再創造」は避けては通れないテーマとなっている。そこでは、マスメディアやインターネットといった「場」の果たす役割も決して小さなものではない。飯倉義之は、2000年代における「都市伝説ブーム」が「都市伝説ライター」や「都市伝説芸人」によって、「先行する資料や、インターネットの掲示板から都市伝説を拾い上げてマスメディアで発信する行為」が主流になってきたことを指摘し、それらを「陰謀論的思考」と結び付けている。飯倉は、『『大きな物語』という、社会で共有化された準拠の喪失は、個々人を等身大の『小さな物語』へ後退させるのではなく、個人の『小さな物語』が世界（社会・世間）全体と等価なものとして通用するという錯誤、小さな物語の肥大化」へとつながっていくことを指摘する⁴⁸。また、飯倉は「都市伝説」が「お金を払って楽しむべき娯楽」すなわち「コンテンツ」としての市場価値を有している現状について、「口伝で世間に囁かれた説話、という含意は失われ」、「日常の説話であった原義を乖離して、世界の〈裏面〉を語ると称する世界的なスケールの『陰謀論』との近接を深めていく」ことに対して、「再び、口頭のコミュニケーションが生起する契機として『都市伝説／現代伝説』を捉え」ることの重要性を指摘している⁴⁹。

今日では、妖怪文化の活用の方法も多様化しているが、その背景には芸術文化活動の多様化の影響を指摘することができる。特に、地域住民を主体とする新たな妖怪文化の創造がなされるようになったことによって、必ずしも「伝説」や「民間伝承」に限定されない取り組みが見られるようになった。地域研究の視点から妖怪を扱った先行研究としては、松村薫子による論文「妖怪町おこしにおける妖怪文化の創造」があるが、そこでは広島県三次市を事例に挙げながら「妖怪町おこし」について言及されている。松村の言葉を借りれば「妖怪町おこし」とは「古くから伝えられている妖怪伝承を活用している行為」であり、これらについての考察を進めることによって「現代における伝統的な妖怪文化のとらえ方や現代の妖怪文化の創造のされ方を知ることができる」と指摘する⁵⁰。

ここにも、現代の地域社会における「民俗の創出」の現場を見ることができるのではないだろうか。そこでは、観光名所として「コンテンツ」を消費するのではなく、そこに暮らす住民の生の声に根差した「コミュニティ」への関心の移行を見ることができる。ただ

し、そこで構築されるコミュニティは、必ずしも既存の地域共同体に根差したものではなく、様々な活動を経て地域の内外の人々が交流しながら構築されていく新しいコミュニティである点は注目すべきであろう。

4. 本論の構成—研究の対象と方法

本論では、妖怪文化の現代的活用について地域社会との関わりを中心に明らかにすることを目指す。以上のように、近年では妖怪研究に対する多様なアプローチが試みられている。これらの研究を概観すると、今日の妖怪研究の対象は大きく 3 つの属性に分けられるのではないだろうか。第一に「民間伝承」として語られてきた妖怪であり、主に民俗学や文化人類学によってアプローチすることができる。第二に「創作活動」を通して表象されてきた妖怪であり、表象文化論や文学、美術史、あるいは大衆文化研究の方法によって明らかにすることができる。第三に、地域社会の実情に合わせて「再創造」される妖怪である。本論では、地域住民を主体とする妖怪文化の再創造の事例に着目し、現代社会における妖怪観の一端を明らかにしていく。

第 1 章では、戦後の日本における妖怪文化の活用の歴史的な展開を概観し、事例进行分类する視点を明らかにした。先行研究を概観する中でも、それぞれの時代における妖怪文化の活用手法は変化していることが分かるが、本論では大きく三段階に分けて分析を試みた。第一に、戦後の地域復興の中、地域住民による妖怪文化の活用が試みられた萌芽期。第二に、高度経済成長期からバブル経済期にかけて、地方自治体による地域開発の中に「妖怪」が取り込まれていった展開期。第三に、2000 年代を前後して始まった地域住民を主体とする取り組みである。こうした段階に沿って妖怪文化の活用を概観することで、事例研究に向けた理論モデルを構築する。特に、民間伝承や大衆化されたキャラクターといった既存のコンテンツの活用に主眼を置いていた従来の「物語消費モデル」から、地域コミュニティに根差した「物語創作モデル」への展開に着目する。

とは言え、妖怪文化の活用は現代固有の現象ではなく、歴史的に見ても絵巻や謡曲、歌舞伎などを通して、それぞれの時代の必要性に応じて活用され続けてきた。そこで、第 2 章では、文学、演劇、美術とジャンルの垣根を越えて表象されてきた鶴に焦点を当て、妖怪観の形成過程を辿っていく。本論では、鶴伝承の生成の過程を文献調査によって明らかにした上で、そうして形成された妖怪像が各地域でどのように受容されているのかについて考察を行った。また、鶴伝承の現代的活用の事例として、静岡県伊豆の国市における「鶴ばらい祭り」を取り上げ、温泉観光地のまちづくりに活用されるという現代的な現象についても検証した。鶴が「コンテンツ」として活用されてきた歴史を紐解くことによって、妖怪文化の現代的活用の特徴を抽出する。

第 3 章では、妖怪文化の民俗性と大衆性について、徳島県三好市山城町における事例調査を踏まえて考察を行った。山城町では、2000 年に「こなきじじい」の伝承が発掘されたことから、妖怪をテーマに据えた村おこしが始まった。そこでは、水木しげるによるマン

がおよびアニメの「ゲゲゲの鬼太郎」に登場する有名妖怪を出発点としながらも、その活動の根幹にあるのは地域文化への誇りを高めることにある。その結果、それまで埋もれていた様々な民間伝承が発掘され、伝承の場が再生されつつある。本来、「語り」を通じて伝承されてきた妖怪文化は、不可視の対象であるため、必ずしも容易に活用できる代物ではないが、山城町では大衆文化で表象されている妖怪と地域住民によって制作された妖怪イメージとを組み合わせることによって、地域文化としての再構築がなされ、エコミュージアムの手法に基づき文化の保存と活用がなされている。ここには、物語消費から物語創造へ向けた地域内部での価値転換を見ることができる。

しかしながら、既存のコンテンツから独立して、純粋に物語創造型の活用に取り組んでいる事例は必ずしも多くはない。第4章では、そうした数少ない事例の中でも、継続的な取り組みが見られる二つの地域に着目した。滋賀県東近江市では忘れ去られつつあった民俗語彙の「ガオ」を地域行事として再生する取り組みが見られ、岩手県胆沢郡金ケ崎町では地域住民による幽霊・化け物・妖怪画展が開催されている。ここでは、地域住民を主体とする活動を通して、新たな妖怪文化が構築されつつある。こうした活動は、2000年代以降に顕著にみられるようになったのだが、この背景には文化芸術振興基本法をはじめとする地域文化振興の流れを指摘することができるだろう。そもそも、妖怪文化を人々の想像力の産物として見なした場合、それらはどこかで誰かによって創作された存在である。しかしながら、物語消費型の活用モデルでは、地域住民さえもが消費者となり、物語を創作する主体性を失いつつあると言っても過言ではない。これに対して、近年各地で開催されているアートプロジェクトは、地域住民自身の物語創造に係る主体性を回復させる起爆剤としての可能性を秘めている。そこで、荒川区南千住におけるアートプロジェクト《隅田川妖怪絵巻》の企画運営を通して、妖怪文化の再創造に関する実践研究を行った。

結章では、以上の各章の考察を踏まえ、現代の地域社会における妖怪文化の再創造の可能性についてまとめる。「伝承」と「創造」は相反する概念ではあるが、妖怪文化もまたどこかの段階で生み出された創作物である。そうして生み出された妖怪たちは、特定の共同体に属する人々が語り継ぎ、ある種の共同編集の過程を経ることで「妖怪存在」としての強度を増してきた。とは言え、伝承の基盤となる地域共同体の構造自体が変質している現代にあっては、その手法も変化せざるを得ない。その上で、地域住民を主体とする妖怪文化の再創造が起こっている背景には、妖怪文化の在り方が新たな局面を迎えていることを指摘できるのではないだろうか。

¹ 『寺田寅彦』筑摩書房、2009年、313頁。

² 柳田國男『妖怪談義』修道社、1956年、13頁。

³ 井上円了「おばけの正体」国書刊行会、1985年、181頁。

⁴ 井上円了『新編妖怪叢書6 お化けの正体』国書刊行会、1983年、184頁。

⁵ 同上、2頁。

⁶ 柳田國男『民間伝承論』第三書館、1986年、186頁。

-
- 7 同上、194 頁。
- 8 柳田國男『妖怪談義』27 頁。
- 9 柳田國男『民間伝承論』119-120 頁。
- 10 同上、120 頁。
- 11 上原輝男『藝談の研究—心意傳承考—』早稲田大学出版部、1972 年、12 頁。
- 12 同上、12 頁。
- 13 井之口章次「心意傳承論—庶民の平衡感覚」日本民俗研究大系編集委員会『日本民俗研究大系 第 8 卷心意傳承』国學院大學、1988 年、14 頁。
- 14 小松和彦『異人論—民俗社会の心性』青土社、1985 年、231 頁。
- 15 小松和彦『妖怪学新考—妖怪からみる日本人の心—』小学館、1994 年、8 頁。
- 16 同上、8-10 頁。
- 17 例えば、「お察しのとおり、それはあのおそろしい妖怪博士蛭田でした。いうまでもない、二十面相が化けているのです」（「妖怪博士」『少年倶楽部』134 頁）といった用法が見られる。
- 18 加太こうじ『紙芝居昭和史』立風書房、1971 年。
- 19 鶴見俊輔、『限界芸術論』、122 頁。
- 20 石子順造ほか『通俗の構造—日本型大衆文化』太平出版社、1972 年。
- 21 梅棹忠夫、金田一春彦ほか（監）『日本語大辞典』講談社、1989 年、1289 頁。
- 22 真鍋昌賢「特集について」『比較日本文化研究』第 15 号、比較日本文化研究会、2012 年、11 頁。
- 23 水木しげるは「墓場奇太郎」を構想する上で、1933 年から 35 年頃にかけて制作された伊藤正美による紙芝居「ハカバキタロー」を参照している。このことについて、加太こうじは次のように証言している。「鈴木（勝丸）は伊藤正美作『ハカバキタロー』の荒筋を水木に話したので、水木はかれの台本で『墓場奇太郎』を描いた。のちに上京して貸本用単行本の仕事をしたとき、伊藤正美の諒解を得て文字づらを変えて『墓場の鬼太郎』としたときいている。」（加太こうじ『紙芝居昭和史』259-260 頁）
- 24 公益財団法人三井文庫三井記念美術館（編集発行）『特別展 大妖怪展—鬼と妖怪そしてゲゲゲ』2013 年。
- 25 京極夏彦「通俗的『妖怪』概念の成立に関する一考察」小松和彦（編）『日本妖怪学大全』小学館、2003 年、574 頁。
- 26 香川雅信、同上、18 頁。
- 27 香川雅信「妖怪／フィギュア論」『比較日本文化研究』第 15 号、比較日本文化研究会、2012 年、16-35 頁。
- 28 広末保『悪場所の発想—伝承の創造的回復』三省堂、1980 年、18-19 頁。
- 29 松平誠「地域文化の再生とテレビ—NHK 番組『ふるさとの歌まつり』の社会文化的実証研究—」『女子栄養大学紀要』第 27 号、香川栄養学園、1996 年、159 頁。
- 30 松平誠『祭りのゆくえ—都市祝祭新論』中央公論新社、2008 年、20-21 頁。
- 31 ディスカバー・ジャパンの初期のポスターに用いられていたキャッチコピー。
- 32 川森博司「町が化ける—まちづくりの中の民俗文化」常光徹（編）『妖怪変化』筑摩書房、1999 年、136 頁。
- 33 石井正巳『昔話と観光—語り部の肖像』三弥生書店、2002 年、30 頁。
- 34 後藤春彦『景観まちづくり論』学芸出版社、2007 年、101-103 頁。
- 35 白石太良「地域づくり型ミニ独立国運動の変容」『流通科学大学論集—人文・自然編—』第 4 巻第 1 号、1991 年 9 月、19 頁。
- 36 白石太良「地域づくり型ミニ独立国運動の変容（Ⅱ）」『流通科学大学論集—人文・自然編—』第 5 巻第 1 号、1992 年 9 月、8 頁。
- 37 斎藤次男『妖怪都市計画論—おばけからのまちづくり』彩流社、1996 年、4-5 頁。
- 38 同上、28-29 頁。
- 39 小松左京「私の民話論 妖怪との対話」瀬川拓男、松谷みよ子『日本の民話 7 妖怪と人間』角川書店、1973 年、253 頁。

-
- 40 川村清志「都市民俗学からフォークロリズムへーその共通点と切断面」小池淳一（編）『〈歴博フォーラム〉民俗学的想像力』せりか書房、2009年、60頁。
- 41 宮田登『都市民俗論の課題』未来社、1982年、80-83頁。
- 42 宮田登『妖怪の民俗学 旅とトポスの精神史』岩波書店、1985年、236頁。
- 43 河野眞「フォークロリズムの生成風景ー概念の原産地への探訪からー」日本民俗学会（編集発行）『日本民俗学』第236号、2003年、4頁。
- 44 川村清志「都市民俗学からフォークロリズムへーその共通点と切断面」前掲書、80頁。
- 45 澁谷美紀『民俗芸能の伝承活動と地域生活』農村漁村文化協会、2006年、5頁。
- 46 八木康幸「祭りと踊りの地域文化ー地方博覧会とフォークロリズム」宮田登（編）『現代民俗学の視点3 民俗の思想』朝倉書店、1998年、143頁。
- 47 津城寛文「深層心意論」宮田登（編）『現代民俗学の視点3 民俗の思想』朝倉書店、1998年、22頁。
- 48 飯倉義之「都市伝説化する「想像力」ー「大きな物語の喪失」と陰謀論的想像力」『比較日本文化研究』第15号、比較日本文化研究会、2012年、53-63頁。
- 49 飯倉義之「都市伝説が「コンテンツ」になるまでー「都市伝説」の一九八八～二〇一二ー」『口承文芸研究』第36号、口承文芸学会、2013年。
- 50 松村薫子「妖怪町おこしにおける妖怪文化の創造 広島県三次市を中心に」小松和彦（編）『妖怪文化の伝統と創造ー絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』せりか書房、2010年。

第1章 妖怪文化の現代的活用の歴史的展開と背景

本章の目的と方法

2010年にNHKの連続テレビドラマ小説で「ゲゲゲの女房」が放映されて以降、「妖怪でまちおこし」といった言説とともに鳥取県境港市の取り組みがテレビや雑誌で取り上げられる機会がますます増えていった。確かに、妖怪のブロンズ像が並ぶ「水木しげるロード」をはじめ、キャラクターを活用したまちづくりの成果は注目に値するが、これは妖怪文化を活用したまちづくりの一つの側面にしか光りが当てられていない。

ここで改めて地域社会と妖怪との関係に目を向けると、そこには大きく分けて地域住民によって語られてきた民間伝承としての側面とマンガやアニメを通じた大衆文化としての側面が存在している。境港の事例は、後者の側面に重心を置いた「コンテンツ・ツーリズム」の代表事例として位置付けるべきであろう。では、そもそも民間伝承として語られてきたような妖怪文化は、果たして活用の対象になり得るのだろうか。第1章では、戦後の日本における妖怪文化の活用の歴史的展開とその背景について概観することによって、事例研究に向けた指針を構築することとしたい。

一口に妖怪文化の活用事例と言っても、その対象は多岐にわたるが、ここでは便宜上三つの時期に分けて整理することを試みる。第1節では、妖怪文化の現代的活用の萌芽期として位置付けられる1950年代から60年代半ばにかけての事例を取り上げる。第2節では、行政主導によるまちづくりが各地で展開されていった1970年代の高度経済成長期から1990年代初頭のバブル経済期にかけての事例を取り上げる。第3節では、地域住民を主体とする活動が各地で始まった2000年代以降の事例を取り上げる。これらについて、文献調査と実地調査によってそれぞれの事例の特徴を抽出し、議論の枠組みを構築することが本章の目的である。

第1節 妖怪文化の現代的活用の萌芽期—ふるさとの再生に向けて

1-1. 旅と伝説に対する関心の高まり—妖怪文化の現代的活用の前史として

妖怪伝承の中には、大江山の酒呑童子や安達が原の鬼婆のように、特定の場所と結びついた「伝説」として語られているものも少なくない。それらは、名所旧跡と同様に物語を内包した場所として「旅」の文化と結びつき、近代以降多くの人々が物見遊山に訪れてきた。1929年に鉄道省が刊行を開始した『日本案内記』は、鉄道路線に沿って各地の名所旧跡を記したガイドブックであり、多くの旅行者に旅の手引きとして愛用されていた。また、1940年に同じく鉄道省によって編纂された『郷土の傳説』（東亜旅行社、1940年）には、茂林寺の「分福茶釜」や鬼婆伝説の残る「安達が原」などが最寄駅からの案内とともに記されている¹。そうした旅先では、絵葉書や土産物などが売られ、それぞれの地域に根差した伝説が活用されている。ここでは、場所と密接に関わった物語を消費することによって観光商品が成立している。

このように、妖怪文化の活用の背景には、地域と結びついた伝説に対する関心を指摘することができる。その中には、新しく「発見」されたものも含まれている。例えば、香川県高松市の女木島は今では「鬼が島」として知られているのだが、これもまた 1931 年に当時小学校の教員をしていた橋本仙太郎によって「発見」されたものであった。橋本は、1930 年の 9 月から 11 月にかけて、『四国民報』紙上において「童話『桃太郎』の発祥地は讃岐の鬼無」と題する論文を掲載している。その中で、1931 年に女木島で大洞窟を発見したことから、当地を桃太郎伝説地として発表したものであった²。1932 年 4 月に発行された雑誌『旅』の誌上には磯野光雄による『『鬼無』と『鬼が島』に就て』と題する論文が掲載されており、そこでは鬼が島が「発見」された経緯等についての記述が見られる。このように、様々な媒体を通して女木島は鬼が島として全国に知られるところとなり、多くの観光客が訪れるに至った。実際、先に挙げた『郷土の傳説』においても、写真とともに女木島が紹介されている。現在も、同地に訪れると「ようこそ、おにが島へ」といった看板とともに可愛らしい鬼のキャラクターが出迎えてくれるが、ここには伝説（物語）の発掘あるいは創造を通じた新たな地域価値の創出を見ることができる。このように、場所と伝説とを結びつけるような手法は、謡曲に題を得た那須野が原の殺生石にも共通するのではないだろうか。

戦後の日本における妖怪文化の活用も、基本的には物語消費の文脈で語ることができるが、その対象は必ずしも歴史上名高い伝説だけに限らなくなっていった。1950 年代には、漫画家の清水崑による「河童天国」が「朝日新聞」に連載されたことなどから河童ブームが起こり、全国各地で「河童こけし」などの郷土玩具が作りだされた。また、1950 年代から 70 年代にかけての「民芸ブーム」では、「エキゾチック」な妖怪玩具がつくられている。香川雅信は、これらの作例を引き合いに、当時の妖怪が「キッチュな『郷土』イメージを表象する格好の題材」であったと指摘している³。そこでは、民間伝承として語り継がれてこなかったような物語をも創作し、民俗性を帯びた新たな地域文化として妖怪が再生されている。



図 1-1 鬼が島遠景 (2010 年 7 月 22 日撮影、香川県高松市女木島)



図 1-2 鬼ヶ島謎の洞窟出口 (2010 年 7 月 22 日撮影、香川県高松市女木島)

1-2. 地域を楽しむ人々の出現—福岡県田主丸町における「河童族」の結成

福岡県田主丸町（現在の久留米市）では、1955 年 7 月 13 日に地域住民によって「田主丸河童族」が結成されて以来、河童が地域の象徴として活用されてきた。『田主丸町誌』は、結成のきっかけについて「火野葦平との出会いに触発された田主丸の小さなグループの間に河童信仰の遺産を掘り起す機運が一気に高揚した」と記している⁴。ここであえて「河童信仰」という言葉が用いられていることから分かるように、河童は地域に根差した信仰として祀られてきた対象であり、歴史的には「妖怪」というよりもむしろ「神様」として認知されてきた存在である。実際、町内には近世から伝えられる「カワンドノサン（川ん殿さん）」の木像が残されている。田主丸における河童信仰は、久留米に本山がある水天宮信仰との関係が深く、水神信仰として成立してきた。そうした信仰は近代以降も受け継がれ、1953（昭和 28）年に田主丸を大水害が襲った際には「28 河童」という石像がつけられた。

河童族の具体的な活動としては、月例の放談会に加えて、土産物の考案や田主丸駅前の河童の石像の建立（1956 年）が挙げられている。これらは、まさに 1950 年代の「河童ブーム」と呼応するような動きである。ただし、「実質的には火野葦平を精神的支柱とする風雅人たちの集まりに近かった」という⁵。ここでの「風雅人」とは「変わり者」や「数寄者」といった意味合いで用いられているのだが、結成当時の「河童族」は多様な職種の人々によって構成されていた。加えて、火野葦平も顧問として関わっている。

地域の歴史や民俗を発掘する郷土研究者の集団としての側面も有しており、1982 年には「田主丸青年郷土史会」のメンバーによって「田主丸子河童族」が結成された⁶。当初はいわゆる「（親）河童族」と「子河童族」が併存していたのだが、高齢化に伴い「子河童族」が「河童族」の後継を担う形となり、現在も脈々と受け継がれている⁷。その引き継ぎの際に、「巨瀬川のほとりに河童族の祠を建てること」「河童族の主催による河童まつりを開催すること」「地域の活性化のために地元のお祭りに参加すること」が要望されたという。1986 年には第一回目の「河童まつり」が開催されており、それ以降は 8 月 8 日に開催されている⁸。年毎に交代する河童族の頭に代々受け継がれている「九千坊本山田主丸河童族訓」に

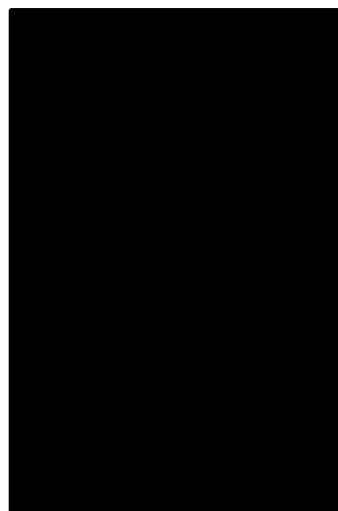


図 1-3 カワンドノサン



図 1-4 28河童（2013 年 8 月 8 日撮影、福岡県久留米市田主丸）

は、以下のように記されている。

河童大明神大祭は八月八日と定めきうりなす鯉酒をそなえ、頭は上下着用し世の平和
楽土を祈り河中に酒を酌みかわし幸福に感謝し一日のかっぱ天国を現生すべし⁹

現在も、宮司による神事が執り行われた後、地元の小学生によって河童神輿が担がれ、商店街を練り歩く。また、巨瀬川に水上ステージが設けられ、地域行事として実施されている。この日に限っては、子どもたちも自由に川で遊ぶことができる。

こうした取り組みは、必ずしも地域の外側から人を呼ぶための観光事業として取り組んできたわけではなく、田主丸に暮らす地域住民の楽しみとして行われてきたものである。しかしながら、こうした活動を通して田主丸を象徴する地域資源として河童が認知されるに伴い、地域の外側からの客観的な評価も受けるようになる。1986年には、当時の自治省による「まちづくり特別対策事業」として「緑とかっぱのまちづくり」が採択されている。その後、「ふるさと創生事業」が行われた際には河童を活用した事業を行い、河童の形をした駅舎が整備された。民間ベースで始まった取り組みが行政にも影響を与えた事例と見なすことができる。2005年には合併に伴い久留米市に編入されたが、市のイメージキャラクターとして河童をモチーフにした「くるっぱ¹⁰」が採用されるなど、地域アイデンティティとして受け継がれている。

田主丸の事例は、河童の持つ「水神」としての側面と「キャラクター」としての側面が共存することによって成立してきた。それゆえに、後者の側面だけを見て妖怪文化の現代的活用の事例として位置付けることはできないが、民間信仰と不可分の関係にあった「河童」という存在が時代とともに地域の象徴として変遷していく過程を辿ることによって、現代の地域社会における妖怪文化の在り方を考察する視点を提示している。

1－3．温泉観光地における新たな伝承の創造—北海道札幌市定山溪温泉の取り組みから

田主丸における「河童族」の取り組みは、地域住民によるある種の生活改善運動であったのに対して、北海道札幌市にある定山溪温泉では観光資源として「河童」が活用されて



図 1-5 河童まつり（2013 年 8 月 8 日、福岡県久留米市田主丸）



図 1-6 JR 田主丸駅（2013 年 8 月 8 日撮影、福岡県久留米市田主丸）

きた。定山溪温泉が河童をモチーフにしたまちづくりを始めたのは1965年のことなのだが、この背景には当時の地域課題が深く関係している。

そもそも、「定山溪」という地名は、温泉地の開祖とされる修験僧の美泉定山にちなんで命名された。無論、美泉定山の以前にも、1857（安政 4）年に瀬川伊兵衛という漁師によって豊平川東岸沿いに刈分路が開かれたり、松浦武四郎が温泉を発見したりと、人跡未踏であったわけではないが、本格的に温泉の開発へと踏み切ったのは定山その人であった¹¹。定山が当時の判官、岩村通俊に温泉開発の陳情をしたのは1871（明治 4）年のことである。その後、定山溪温泉の開発の歴史は地域の発展と歩みを一にするものであった。その後、明治 13 年頃には、3 軒の湯治場があったと記録されている¹²。

開発当初の定山溪温泉は、湯治場としての機能を担っていたわけだが、1909（明治 42）年に豊平川に水力発電所が設立されることによって、地域は新たなステップへと足を踏み入れていくことになる。もともと、定山溪温泉の周辺地域は、急速に開発が進みつつあった札幌に木材を提供する林業地帯であったわけだが、発電所の開設により豊平川を利用した流送が困難となった。また、この地域には鉱床があることが確認されており、そうした地下資源を開発するために1914（大正 3）年には豊羽鉱山の開発が始められた。これらはいずれも大規模な輸送を必要とする産業であったため、必然的に鉄道の開設に向けた準備も進められていくことになる。1915（大正 4）年には、資本金 30 万円で「定山溪鉄道株式会社」が設立された。

1923 年には、当時の小樽新聞社が創立 30 周年を記念して公募した「北海道三景」として、「利尻富士」「洞爺湖」に並んで「定山溪」が選出されている¹³。現在でも、温泉街を見渡すことができる場所に「北海道三景之碑」が残されている。1929 年に定山溪鉄道の電化がなされ、東札幌一定山溪間を定員 100 名の電車が通ったことで、温泉客が増加し、「札幌の奥座敷」としての位置を確立していくことになる。

このように、右肩上がりの成長を続けてきた定山溪温泉であったが、1960 年代半ばになると少しずつ状況が変化していった。その背景として、モータリゼーションの進行を挙げることができる。庄司宣誉の回想によれば、「昭和三十五年頃からの自動車の発達で、客と貨物の定鉄（電車）

ばなれがはじまり、昭和三十八年（一九六三）に札幌～定山溪の国道拡幅、舗装されると、定鉄はいっそう斜陽化していった」とある¹⁴。また、洞爺湖温泉における「湖水まつり」に続いて1964年に登別温泉で「地獄まつり」が始まったことから、定山溪温泉にも次第に「危機意識」が募っていった¹⁵。こうした状況をきっかけに、それまでは必ずしも一枚岩とは言えなかった地域が一丸となって、観光行事を行う機運が高まっていった¹⁶。そこで、当時の



図 1-7 北海道三景之碑（2013 年 10 月 5 日撮影、北海道札幌市）

旅館組合長が札幌出身のマンガ家、おおば比呂司に相談することを提案した。おおば比呂司の発言内容の要約は以下の通りである。

定山溪は溪谷であり湧があればかっぱが住んでいる…といっても少しも不思議なことではない。もともと「かっぱ」いうのは架空の動物だからどのように空想しても一向に差支えない。定山溪の溪流に住んでいるかっぱの一族が夏の一夜浮れ出て群れをなして踊り狂うという趣向にした行事は面白いではないか¹⁷

このような発言を受けて、1965年8月には、第一回目の「かっぱ祭り」が開催された。「総て遊び心でやりなさい¹⁸」と語るおおばの助言に従い、本人の描いたかっぱの絵柄が入った浴衣が制作され、山上路夫の作詞、いづみたくの作曲による「かっぱ音頭」に合わせて「かっぱ大群舞」のパレードが行われた。また、「かっぱ祭り」が始まる直前の7月29日には、温泉街全町に渡って、かっぱが描かれた1500個もの提灯が飾り付けられ、「定山溪全町が一大不夜城として浮き上り壮観を呈した」とある。また、当日はおおば比呂司をはじめ漫画集団の面々も参加したという¹⁹。この大群舞には、事前に従業員から踊りの手ほどきを受けた宿泊客も参加していたとあり、体験型のイベントとしても機能していた。こうした祭りが開催されると合わせて、本来は語られていなかった河童伝承もつくりだされた。例えば、温泉街を流れる豊平川には、「かっぱ湧」と呼ばれるスポットがつけられた。

その後も、「かっぱ祭り」は定山溪を代表するイベントとして長く続けられ、かっぱは定山溪を象徴するイメージとして定着されていった。これと並行して、温泉街の各地に河童のモニュメントがつけられていった。1969年に観光協会によってつけられた「かっぱ大王」を皮切りに、1985年には札幌市によって「かっぱ太郎」がつけられた。1991年には「メルヘンかっぱ像」が温泉街各所に設置され、これらをめぐるオリエンテーリングも実施された。



図 1-8 二見吊橋から展望した豊平川のかっぱ湧 (2013年10月5日撮影、北海道札幌市定山溪温泉)



図 1-9 かっぱ大王 (2013年10月5日撮影、北海道札幌市定山溪温泉)

表 1-1 定山溪かっぱ祭りの変遷

開催年月日	事業費（円）	概要および地域概況
1965 年 8 月 6-8 日	9,284,000	札幌市出身の漫画家、おおば比呂司のアイディアによって「定山溪かっぱ祭り」が始まる。かっぱ音頭が発表され、かっぱ大群舞パレード初披露。
1966 年 8 月 5-7 日	6,104,000	かっぱ大群舞パレード、熊本県人吉市と交流。
1967 年 8 月 4-6 日	5,505,000	かっぱ大群舞パレード、人吉市、小林、耶馬溪からかっぱ祭りの代表が訪れる。
1968 年 8 月 3-4 日	4,439,000	かっぱ大群舞パレード。札幌市創建百周年記念行事などが開催され、札幌が観光ブームに沸く。
1969 年 8 月 4-5 日	4,698,000	かっぱ大群舞パレード、かっぱ大王入魂式が行われ、現在のかっぱ大王像が設置される。また、この年の 10 月 31 日に定山溪鉄道が廃止され、国道 230 号全線開通。
1970 年 8 月 4-5 日	3,005,000	かっぱ大群舞パレード、全国民謡ショー
1971 年 8 月 4-5 日	3,234,000	かっぱ大群舞パレード
1972 年 8 月 4-5 日	3,086,000	かっぱ大群舞パレード。第 11 回冬季オリンピック札幌大会が開催される。札幌市が政令指定都市になる。豊平峡ダムが完成。
1973 年 8 月 4-5 日	4,794,000	かっぱ大群舞パレード。この年の 5 月 17 日に有馬温泉との提携書に調印された。
1974 年 8 月 4-5 日	7,053,000	かっぱ大群舞パレード
1975 年 8 月 4-5 日	7,528,000	かっぱ大群舞パレード、
1976 年 8 月 4-5 日	6,967,000	かっぱ大群舞パレード、
1977 年 8 月 5-6 日	4,314,000	かっぱ大群舞パレード、民謡まつり、ロックフェスティバル
1978 年 8 月 5-6 日	5,139,000	かっぱ大群舞パレード、ジャンボヒーローフェスティバル。朝里岳に札幌国際スキー場がオープン。
1979 年 8 月 4-5 日	4,025,000	かっぱ大群舞パレード
1980 年 8 月 2-3 日	10,420,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会、川下り大会ほか。この頃から、スポーツ関連のイベントが活性化する。
1981 年 8 月 8-9 日	4,844,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会、オリエンテーリング大会ほか。
1982 年 8 月 7-8 日	9,442,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会、にじます釣り大会ほか。
1983 年 8 月 6-7 日	9,196,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会、にじます釣り大会ほか。
1984 年 7 月 28 日－ 8 月 16 日	29,825,000	定山溪ニューかっぱ祭りに改称。内容も、かっぱ大群舞パレードから火おどりに変更される。月見橋カフェバー、マラソン大会、ゲートボール大会ほか。
1985 年 7 月 27 日－ 8 月 4 日	18,394,000	火おどりにあわせてかっぱ大群舞も実施。かふえばあーぐるめ、マラソン大会、ゲートボール大会、綱引き大会、小金湯ゴールドフェスティバルほか。
1986 年 7 月 26 日－ 8 月 3 日	16,020,000	火おどりにあわせてかっぱ大群舞も実施。かふえばあーぐるめ、マラソン大会、ゲートボール大会、綱引き大会、小金湯ゴールドフェスティバルほか。
1987 年 8 月 5-9 日	15,145,000	定山溪かっぱ祭りに改称。火おどりは廃止し、かっぱ大群舞が行われる。マラソン大会、ゲートボール大会、小金湯ゴールドフェスティバルほか。
1988 年 8 月 3-7 日	17,226,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会、ゲートボール大会、小金湯ゴールドフェスティバルほか。
1989 年 8 月 2-6 日	16,361,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会、ゲートボール大会、小金湯ゴールドフェスティバルほか。

1990 年 8 月 1-5 日	13,458,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会、小金湯ゴールドフェスティバルほか。
1991 年 8 月 1-2 日	16,242,000	かっぱ大群舞パレード、マラソン大会（最終大会）、小金湯ゴールドフェスティバルほか。メルヘンかっぱ像が町内各所に設置され、それに伴い「メルヘンかっぱオリエンテーリング」が実施される。
1992 年 8 月 1-2 日	14,827,000	かっぱ大群舞パレード、川下り大会、小金湯ゴールドフェスティバル、メルヘンかっぱオリエンテーリングほか。
1993 年 8 月 2-3 日	14,980,000	かっぱ大群舞パレード、パークゴルフ大会、小金湯ゴールドフェスティバル、メルヘンかっぱオリエンテーリングほか。
1994 年 8 月 1-2 日	19,074,000	かっぱ大群舞パレード、小金湯ゴールドフェスティバル、メルヘンかっぱオリエンテーリングほか。河童サミットが開催される。
1995 年 8 月 1-2 日	13,713,000	かっぱ大群舞にあわせてよさこいが実施される。小金湯ゴールドフェスティバル、メルヘンかっぱオリエンテーリングほか。
1996 年 8 月 1-2 日	13,661,000	かっぱ大群舞&よさこい、小金湯ゴールドフェスティバル、メルヘンかっぱオリエンテーリング、健康と文化教養講座ほか。開湯 130 年を記念して、「温泉健康保養地宣言」を発表。
1997 年 8 月 1-2 日	11,474,000	かっぱ大群舞&よさこい、小金湯ゴールドフェスティバル、メルヘンかっぱオリエンテーリング、健康と文化教養講座ほか。
1998 年 8 月 1-2 日	4,642,000	トレイルフェスティバル
1999 年 8 月 1-2 日	3,779,000	かっぱ大群舞&よさこい
2000 年 8 月 1-2 日	3,547,000	かっぱ大群舞&よさこい
2001 年 8 月 1-2 日	2,913,000	かっぱ大群舞&よさこい。「かっぱ家族の願かけ手湯」が完成。
2002 年 8 月 3-4 日	2,813,000	かっぱ大群舞&よさこい、湯けむり太鼓共演。「長寿と健康の足つぼの湯」が完成。
2003 年 8 月 2-3 日	2,345,000	かっぱ大群舞&よさこい、かっぱ市。「足のふれあい太郎の湯」が完成。
2004 年 8 月 5-6 日	3,773,000	かっぱ大群舞&よさこい、かっぱ市
2005 年 8 月 5-10 日	904,000	定山生誕 200 年記念式典、源泉公園オープニング。この年をもって、かっぱ祭りは休止する。

かっぱ祭りは、2005 年の第 41 回目の開催をもって休止となった。定山溪観光協会は、休止の理由について以下の点を挙げている。第一に「地域の住民が減少、高齢化し体力的にイベントを維持できない」こと、第二に「観光地のイベントとして、他地域と比べ著しく見劣りする」こと、第三に「集客の対費用効果がまったく無い」こと、第四に「地域のモチベーションが無くなり行事が盛り上がらない」こと、第五に「21 世紀にふさわしい新たなイベントを考えたい」ことである。既に述べてきたように、定山溪における河童伝説は、地域の民間伝承に根差したものではなく、1965 年の時点で観光振興のために拵えられた新しい「物語」である。「かっぱ」というキャラクターを活用することによって、定山溪



図 1-10 定山溪かっぱ祭りの様子 画像提供：定山溪温泉観光協会

温泉を他の温泉地と個別化する一定の役割は果たしたが、時とともに消費されつつあるのかもしれない。とは言え、近年では定山溪温泉のPR隊長として、河童をモチーフにした新しいキャラクター「かっぱん」が生み出され、「かっぱんラリー」の実施や「かっぱバス」の運行がなされているため、地域のシンボルとしては機能している。

定山溪温泉のかっぱによるまちづくりは、一つの時代を終え、次の段階に向けた準備を進めつつあるが、ここには時代の要請に応じて柔軟に対応してきた温泉観光地の宿命を見ることができる。本論の第2章で取り上げる静岡県伊豆の国市も、伊豆長岡温泉の振興のために1966年から「鶴ばらい祭り」を実施しているが、こちらの事例では1992年の段階に祭りの担い手が中学生へと移行したことによって、地域の「伝統」として今日まで脈々と受け継がれている。その意味において定山溪温泉とは好対照と言えよう。

第2節 行政主導による妖怪文化の活用

—ふるさとイメージの活用からコンテンツ・ツーリズムへの移行

2-1. 地域開発における外発性と内発性—1960年代以降の「地域」の発見

地域開発の手法には、大きく分けて「外発的発展」と「内発的発展」という二つの極を設定することができる。1960年に掲げられた「所得倍增計画」を受けて、1962年に発表された「全国総合開発計画」は、高度経済成長への移行を目指し、地域間の均衡ある発展を目指したものであった。この路線を引き継いで1969年に発表された「新全国総合開発計画」は、人口や産業の大都市への集中を受けて、豊かな環境の創造を目指すものであり、新幹線や高速道路等の地域を結ぶネットワークを整備し、地域間の格差を解消する大規模なプロジェクトが構想された。しかしながら、全国の均衡ある発展は、その一方で大都市に依存する没個性型の地域を生み出すことと表裏一体の関係にあった。

では、外発的発展が推進された1960年代を通して、「地域」はどのように形成されてきたのだろうか。道場親信は、松下圭一らが提唱した「地域民主主義」論の受容の分析を通して、「地域住民組織の叢生・成長への注目」から「自治体改革」へと至る過程を明らかにしている。道場は、1960年代半ばにおける「革新自治体」の増加が「地域組織」への着目から「自治体政策の探究という実践的なニーズを切迫したものにする」とにより、「自治体」の比重が大きくされていったと指摘する。そこでは、「住民」は「規範的な『人間類型』を描く形で抽象的な関わり、あるいは啓蒙主義的な態度を強めていった」と推論している。これにより、「地域の発見」は「自治体の発見」として純化されていくことになる。その結果として、1960年代の「地域」の発見が『自治体』と『住民（運動）／生活者』という二つのモメントを析出していった」とする道場の分析は、その後の地域開発を考察する上での指針になり得る²⁰。

1960年代の大規模な開発は、各地で地域環境の変化をもたらし、住民の側からの地域への関心も高まっていった。1960年代後半になると「革新自治体」における「住民運動」という形でその対立が顕在化していくことになる。その一方で、「革新」的な自治体にはなり

得なかった「地方」では、都市化が進められなかったことによる「原風景」が新たな「ふるさと」として人々の関心を集めていくことになる。これは、思想上では「外発的発展」に対立する「内発的発展」論に根差したものではあるが、その実情は必ずしも「内発的」と呼べるものではなかった。

1960年代から70年代にかけては、高度経済成長による都市化と対比されるように、日本の「ふるさと」に対する関心が高まった時代でもあった。1966年に始まったNHKの「ふるさとの歌まつり」は人気番組として高い視聴率を記録し、1970年に始まった「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンは人々を地方の旅へと駆り立てた。そうした都市の人々に提供される「ふるさと」づくりは、一見すると内発的な資源を活用しているようには見えても、その実は外発的な眼差しによって規定されたものであるという点は無視できない。澁谷美紀が「消費型ふるさと」として指摘しているように「伝統芸能」「地場産業」「郷土料理」「民話伝説」といった素材が都市住民の目線によって選別されてきた²¹。

1970年代に創設された「ふるさと村」と称する施設もこうした動向を象徴している。松崎憲三は、「都市人の故郷志向に対応するかたちで、故郷の側から提示された施策のひとつ」として「ふるさと村」の創設を挙げている²²。この施策を先進的に展開した岡山県では1974年から5年間にわたる再整備事業の期間に、「大高下ふるさと村」「越畑ふるさと村」「八塔寺ふるさと村」（以上、1974年4月）「石火矢町ふるさと村」「吹屋ふるさと村」（1974年12月）「真鍋島ふるさと村」（1978年5月）「円城ふるさと村」（1980年3月）の七か所が指定された。こうした動向は、当時の「町並み保存運動」とも同調しながら、歴史や文化が地域資源として活用されていくことになる。

1977年に発表された「第三次全国総合開発計画」では、人間居住の総合的環境の整備を目指し、地域社会での定住を謳う「定住圏構想」が打ち出された。ここでいうところの人間居住の総合的環境の整備とは、「自然環境の保全と共に、雇用の場の確保、住居および生活関連施設の整備、さらには教育、文化、医療等の水準の確保」に基づくものとされる²³。これは、大都市と対置すべき拠り所としての「ふるさと」の自立に主眼を置いたという点において、従来の開発計画とは方向性を異にするように思われる。しかし、ここで「歴史とともに、形成されたそれぞれの地域に固有の伝統と風土を維持し、発展させる」のは住民一人ひとりの役割であって、三全総ではむしろそれ以外の「共通の基盤を作成する」ことに重きを置いているという解釈もできる。その意味において新全総の流れを明らかに汲むものであるという指摘もなされている²⁴。

この時期には、大分県の「一村一品運動」のように地場産業への関心の高まりとしてあらわれていった。ただし、北田耕也も指摘しているように、「ふるさとづくり」には「上からのもの」と「下からのもの」が存在する。言わば、1970年代に端を発する行政主導による地域振興施策の実施を通して、『地場産業』を興し、それによって『自立的』に地域の発展をめざせという、上からの『ふるさとづくり』の骨子はしだいに明確なものとなり、そういう観点から、『伝統文化の掘りおこし』、『生涯教育の推進』、『家庭基盤の充実』、『コ

コミュニティ活動の活発化』等の必要性も説かれるようになった」わけである²⁵。このように、「上からの『地域づくり』と『文化的統合』がよそおいをあらたにおしすすめられようとしている状況のもとで、地域の文化的力量を凝縮して、これを下からのものに切り替えるためのとりくみがきわめて重要なものになってきた」のである²⁶。

このような流れの中で、妖怪もまた「ふるさと」を象徴するキャラクターとして活用されてきた。以下、具体的な事例に基づき、「ふるさと」を象徴する妖怪文化について考察を進めていく。

2-2. 民話のふるさとの内と外—岩手県遠野市の取り組みを中心に

1975年に発行された『遠野路—民話のふるさと』の前書きには、「近年、遠野を訪れる人々が、年と共に数を増してきている」と記されている²⁷。実際、1970年代を通して遠野は観光地へと変貌を遂げていくことになるのだが、その背景として1967年に当時の遠野市長によって掲げられた「トオノピアプラン」を挙げることができる。「トオノピアプラン」とは「遠野市総合計画新基本計画」の愛称であり、「自然的、歴史的、社会的、経済的、人間的総和と循環と調和の相乗効果をもとめ、地域社会の主体性を確保しながら長期的展望にたって総合的、計画的に進める」ことを目指したものであった²⁸。この計画の三本柱の一つとして掲げられた「自然と歴史と民俗の博物公園都市」では、以下のような方向性が示されている。

原始の姿をとどめる大自然、盆地に繰り広げられたむらの歴史、まちの歴史、宿場町の歴史、城下町の歴史、そして先人たちがその長い歴史の中で培ってきた生活の智慧、庶民の語り草一どのひとつひとつにも、自然と人間の織りなした壮大なドラマがある。この貴重な遺産は今日の基礎でもあり、その適切な保存と活用によりさらに新しい歴史の展開を図りながら、地域社会連帯のきずなとするとともに、広く国民的観点にたった《自然と心のふるさと》の博物公園都市をめざす²⁹

地域の自然や歴史、人々の語りなどを「遺産」と見なしている点は、後の「世界遺産」概念を髣髴とさせる。そして、こうした「遺産」の「適切な保存と活用」によって達成されようとしているのは、「広く国民的観点にたった《自然と心のふるさと》」であるとされている。ここでは、「遠野」という場所がそこに暮らす人々にとっての生活の場であると同時に、ある意味において国民共有の「遺産」としても機能し得るものであることを暗示している。こうした構想は、1971年にフランスのジョルジュ・アンリ・リヴィエールによって提唱された「エコミュージアム」の理念にも通じるものと言えよう。

行政主導によるまちづくりと並行して、1970年代を通して国鉄と電通によって展開された「DISCOVER JAPAN（以下DJ）」は、遠野の観光地化を促進する契機となっている。DJは、「ポスト万国博の乗客減を防止する対策で、海外に奪われがちな国民の目をもう一

度国内の自然美、伝統、人情などに向けさせ、鉄道旅行のブーム」を起こし、「かくれた日本のよさをみんなで発見し、それを守り育てようというキャンペーン」であった³⁰。当時発行された機関紙『国有鉄道』には、DJ の目的について次のように記されている。

今までの国鉄の宣伝は乗客だけを対象にしていました。駅に來たり電車に乗りさえすれば目に見ることができました。しかし、現在では、それだけでは取り残されてしまうので、やはりテレビなどを使用して家庭に浸透していかなければよりよい効果をあげることができないわけです。（筆者註：テレビのほかにも）新聞広告や、雑誌広告があります。これは主として商品宣伝というより、ムード宣伝に重点を置いています。³¹

いわゆる有名観光地ではなく、日本らしい「風景」を旅先として提示したこのキャンペーンは、テレビをはじめとする新たな大衆メディアの隆盛とともに全国各地で展開されていた³²。時期を同じくして創刊された『アンアン』や『ノンノ』と相まって、若者たちを「日本探し」の旅へと駆り立てた³³。例えば 1973 年 3 月号の『アンアン』に掲載された「遠野観光のすすめ」では「いまでもさまざまな民話や伝説が残っています」というキャッチフレーズとともに現代になって設えられた遠野の「名所」が紹介され、多くの「アンノン族」が遠野を訪れた³⁴。

表 1-2 岩手県遠野市における文化によるまちづくりの動向

西暦	できごと
1954	遠野町と周辺 7 ヲ村と合併し市制がしかれる（行政）
1956	当時の土淵小学校校長の菊池勇治によって小学校二階に「土淵郷土博物館」が設置され、その後「土淵文化財保存会」が組織される。（地域住民） ▶▶▶ここで収集された資料は 1965 年に遠野市立図書館に移転され、後の博物館建設につながる。
1967	工藤千蔵市長（当時）が「トオノピアプラン」を提示（行政） ▶▶▶自然的、歴史的、社会的、経済的、人間的総和と循環と調和の相乗効果をもとめ、地域社会の主体性を確保しながら長期的展望にたって総合的、計画的に進める
1971	『遠野物語』刊行 60 周年記念事業として、遠野駅前に遠野物語碑を建設（行政） 鈴木サツ、ラジオで昔話を語り始める（民間）
1974	市民センター開設（行政）
1976	第一回遠野物語ファンタジーが開催される（協働） ▶▶▶原作、脚本、スタッフ、キャスト等をすべて無償の市民参加によって制作される舞台として 1976 年以来今日まで継続されている。遠野に伝わる民話をモチーフに、発祥地を順次めぐる形で制作されている。1983 年には「サントリー地域文化賞」を受賞。 森山大道『遠野物語』（朝日ソノラマ）発行
1980	遠野市立図書館博物館開館（行政）
1981	遠野市総合計画において「農村日常生活圏におけるカントリーパークに、それぞれの地

	域の特性を生かした農村民俗資料館の整備を図る」として、「トオノピアプラン」における「博物公園都市構想」が継承される。(行政) ▶▶▶文化はコミュニティーと住民が一体となってもかもし出す、風土、風景、風味、風俗であり、新しい形での復活のため、行政全体を文化的な視点での見直しを図りながら行政の文化化を推進する
1982	村野鐵太郎監督による映画「遠野物語」が公開(民間) ▶▶▶第 35 回イタリア・サレルノ国際映画祭でグランプリを受賞。これをきっかけに、1984 年には遠野市とサレルノ市が姉妹都市となる。
1983	内藤正敏『写真集 遠野物語』(春秋社)発行(民間)
1984	伝承園が開園し、第一回遠野昔ばなし祭りが開催される(行政) 遠野ふるさと公社設立(民間) ▶▶▶伝承園とともに任意団体として設立され、伝承園の管理運営業務を委託された。1988 年に社団法人として登記され現在に至る。
1986	とおの昔話村が開村(行政)
1987	遠野常民大学開講(民間) ▶▶▶(1) 柳田学を柱とした常民(そこに住んでいる人、生活者)学びを目指し(2) 異業種、異世代の集まる広い学びの場を持つことにより(3) この新たな歩みの中から明日の遠野の確かな生き方を考える力を醸成する
1990	青笹町民俗館開設(行政) ▶▶▶かつての「青笹民族資料室」が収集していた民具等を保存公開する場所として 1987 年に旧地区センターの建物活用の一環として設立される。
1992	世界民話博
1995	遠野物語研究所
1996	遠野ふるさと村が開村 ▶▶▶「まぶりっと」が活躍
1997	後藤総一郎の監修による『注釈遠野物語』発行
2000	いろり火の会が発足 ▶▶▶ TMO(タウンマネージメント機関)の予算を得て空き店舗対策として語り部のいる休み処を開設
2001	遠野市総合計画(第 3 次基本構想・第 6 次基本計画)において「ふるさとミュージアムプラン」が掲げられる ▶▶▶将来に伝えるべきものとして、遠野市を丸ごと次代に引き継いでいく資産と考え、市民の手によって自然・歴史・風土・生活などの要素を再発見し、総合的なふるさととしてネットワークづくりを推進していくことを目指す
2003	日本のふるさと再生特区認定
2005	遠野市と宮守村が合併
2007	遠野遺産認定条例制定 NHK の連続テレビドラマ小説で「どんど晴れ」が放送される
2009	遠野「語り部」1000 人プロジェクト
2010	遠野市立博物館リニューアルオープン

今や遠野を代表する観光地となった「カップパ淵」も、こうした時代の産物である。物語と景観をセットにすることで現地に訪れる価値を高めるこの手法について、菊池新一は「グリーン・ツーリズム的観光地」という言葉を用いて、「何の変哲も無い小川が観光地となる。しかしそこにはカップパ伝説の物語がある。訪れた人々はその物語の生まれた背景、当時の人々の暮らしぶりを思いやり、しばしの間、感慨にふける」と指摘している³⁵。また、「カップパ淵のまぶりと



図 1-11 カップパ淵で来訪者の対応をするまぶりと (2013 年 8 月 13 日撮影、岩手県遠野市)

(守り人)」を務める運萬治男はカップパ淵について「夢を託す」観光施設と称している³⁶。カップパ淵に訪れた観光客は、そこにある自然景観を素材に、河童がいると伝えられてきた物語の世界を自らの心の中で再構築しているのである³⁷。そこではもはや河童は遠野の風景の一部と化していると言えよう。こうして、1970 年代以降の遠野の地域形成は『遠野物語』というコンテンツを起点にしながら、それを物語る風景を観光と結びつけることによって成立していった。

ここにはある種の「パブリック・フォークロア (Public Folklore)」の力学が働いていると言えよう。パブリック・フォークロアとは、「民俗文化の生まれた地域の内外において、新しい文脈で活用／表象される民俗」である³⁸。特に、遠野の場合は、「トオノピアプラン」に始まり現在に至るまで、行政の主導によって様々な施策が推進されてきた。1981 年に発表された「遠野市新基本計画」では、「農村日常生活圏におけるカントリパークに、それぞれの地域の特性を生かした農村民俗資料館の整備を図る」とあり、地区ごとに環境整備の一環として資料館の建設することが想定されていた³⁹。神崎宣武は、遠野市のカントリパーク構想について「各地区に個性豊かな資料館が計画どおりに誕生すれば、訪れた人びとは遠野を周遊することで遠野全体の古い生活様式を地区ごとに比較しながら見る事が可能に

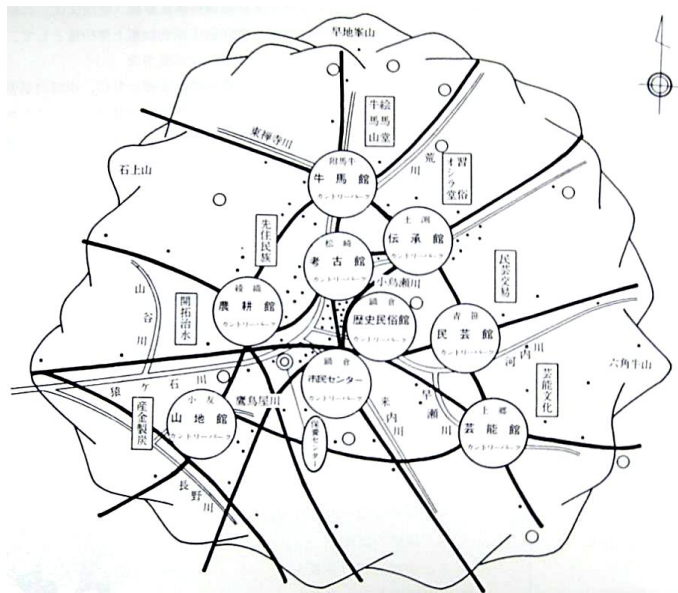


図 1-12 遠野盆地民俗博物公園構想 (遠野市新基本計画策定委員会、遠野市企画財政課 (編)『遠野市総合計画』遠野市、1981 年、124 頁、(第 16 図 遠野盆地民俗博物公園構想))

なるだろう。つまり、そこではじめて遠野市そのものが、自然と歴史と民俗の総和した博物館になる⁴⁰」と指摘しているが、結果的には土淵地区に伝承園が設置されただけに留まっている。

例えば、民俗芸能を本来の文脈から切り離して舞台芸術として「見せる」ことも一つのパブリック・フォークロアであるが、まちづくりで活用される妖怪もまた、本来それが語られてきた伝承の場から独立して、キャラクター性が強調されることによって成立してきた。

2-3. ミニ独立国からふるさと創生事業へ—地域の個性の表出

1987年に打ち出された「第四次全国総合開発計画（以下、四全総）」を受けて実施された「ふるさと創生事業」は、「ふるさと」とまちづくりの関係を考える上で意義深い。この事業は、四全総の第IV章第2節第1項の「地域特性を生かした個性豊かな地域づくり」や「地域の主体性と創意工夫を基軸とした地域づくり」が根拠となっている。ここでの「主体性」については、「地域の住民、企業、団体をはじめとする多様な主体の参加を図ることが効果的である」と記されている。この中で国が果たすべき役割は「地域の個性形成事業への取組みを側面より支援する立場」としてのものであった⁴¹。

実際、国の主導ではなく、地域に主導権を委ねることに主眼を置いた「ふるさと創生事業」では、1988年度に2000万円、1989年度に8000万円を地方交付税の基準財源需要額に上乗せするという財政支援の方法がとられた。このことから「一億円事業」として名を残していくことになるのだが、当初は「新しい地域発展の構想が、一億円事業が契機となって、『ふるさと学』によって裏打ちされ地域主導、自主、自立により作り上げられるものと期待される」ものであった⁴²。各々の地域では特色ある「ふるさとづくり」が展開されていたわけだが、ここに至る前段階として、1970年代から80年代にかけての「ミニ独立国」ブームについて触れておく。

「ミニ独立国」とは、地域を象徴するモチーフなどを冠して、各々の地域が独立した「国家」の建設を宣言する一連のまちづくり動向である。その多くは行政主導によって始められたものではないが、何を以て地域のイメージを象徴するのかを図る上では一つの指標になり得る。概して見れば、ここには1970年代的な「一村一品運動」の名残としての地域への関心と、「ミニ独立国」という手法そのものへの関心の高まりの両方を見ることができる。そもそも、ミニ独立国ブームの一つの発端となっているのは、井上ひさしによる小説『吉里吉里国』であった。この作品に触発され、吉里吉里の地名が残る大槌町の観光協会が1981年12月に「吉里吉里国賢人会議」なる会議を開いた。これを受けて、翌年の6月に発足したのが「吉里吉里国」であり、「東北新幹線大宮—盛岡間開業を知名度向上の機会ととらえ、観光と物産の振興を目的」として建国されたものであった⁴³。この時期と前後して、各地で様々なテーマに基づく「ミニ独立国」が開かれている。ここで、主な「ミニ独立国」を時系列に沿ってまとめていくと以下の通りである。

表 1-3 ミニ独立国の建国状況

独立国名	所在地	建国年月	特徴
自然の国	長崎県西海町	1972 年 7 月	自然を相手に自給自足の生活をしながらユートピアを目指して建国。1976 年 1 月に憲法も制定されている。
ホジネランド	秋田県大森町	1977 年 5 月	秋田の方言で「しっかりしたところがない」を意味する「ほじねえ」から命名。自然の中に自分が働く場所を生み出していった一人の活動から始まる。
新邪馬台国	大分県宇佐市	1977 年 8 月	1976 年 10 月に結成された新邪馬台国建設公団によって、「邪馬台国」に名を借りたまちおこし運動。通貨単位は「シャーマ」。1983 年 4 月には、全国のミニ独立国を一堂に会して「第一回後進国首脳会議（USA サミット）」を開催。
アホーツク共和国	北海道美幌町	1978 年 4 月	カラマツやエゾマツの原生林の保護を主たる目的とする。
マンボウ・リューベック・セタガヤ・マブゼ共和国	東京都世田谷区	1981 年 1 月	作家の北杜夫の自宅を国土とする共産国。通貨単位は「マブゼ」で、谷内六郎の絵による硬貨と紙幣がある。
ニコニコ共和国	福島県二本松市 岳温泉	1982 年 4 月	二本松駅が新幹線の通過駅になってしまったことに不安を抱いた温泉地が独立を宣言。通貨単位は「コスモ」。
吉里吉里国	岩手県大槌町	1982 年 6 月	井上ひさしの小説『吉里吉里人』に想を得て、大槌町観光協会によって 1981 年に「吉里吉里国賢人会議」が開かれる。
マンガ王国	長野県白馬村	1982 年 7 月	1932 年に結成された「漫画集団（新漫画派集団から改称）」の結成 50 年を記念して開国。
かに王国	兵庫県城崎町	1982 年 11 月	松葉カニが水揚げされる城崎温泉にて、町のイメージを高めるために建国。
阿波邪馬壱国	徳島県徳島市	1983 年 1 月	邪馬台国論争が高まる中、徳島に邪馬台国があったと打ち出し、観光目的で建国。
トカシク共和国	沖縄県渡嘉敷村	1983 年 3 月	南国の環境を活かし、観光客のさらなる誘致と経済発展を目指して建国。春の海開きの際に共和国祭が行われる。
ヨロンパナウル王国	鹿児島県与論町	1983 年 3 月	与論町の町制 20 周年の記念事業として建国。「パナ」は「花」、「ウル」は「サンゴ」の意で、自然保護と花にあふれた島への願いを込めた。通貨単位は「スター」。
そやんか合衆国	大阪府大阪市 大正区	1983 年 4 月	若者（バカモノ）による若者（バカモノ）のための国づくりを目指して建国。
アルコール共和国	新潟県真野町	1983 年 4 月	地区内にある 4 か所の蔵元を見学するツアーの開催がきっかけとなって建国。通貨単位は「ALCO」。
パパラギ共和国	愛知県名古屋市	1983 年 4 月	1981 年に岡崎輝男の翻訳によって発行された『パパラギ』（立風書房）に感銘を受け、各地でコンサートを開催していた笠木透によって建国。
奄美サンサン王国	鹿児島県奄美諸島	1983 年 4 月	1953 年 12 月に奄美諸島が日本に復帰してから 30 年を経て、改めて「奄美」を見直し、島民

			全体で「島おこし」をすることを目指して建国。
ラフマニア共和国	神戸市灘区	1983 年 4 月	笑いを追求する国家として独立。
ジバング国会津 芦ノ牧藩	福島県会津若松市	1983 年 5 月	城下町としての歴史を背景に、地域の活性化と芦ノ牧温泉の関連産業の振興を図るため、温泉組合長を藩主に建国。
あやめおとぎの国	山形県長井市	1983 年 6 月	あやめ公園で初夏に開催されるあやめ祭りの期間だけ開国。通貨単位は「フローラ」。
カセットボーイ共和国	東京都千代田区	1983 年 7 月	音響機器メーカーが開発したヘッドホンステレオ「カセットボーイ」を利用して若者のコミュニケーションを図ることを目指した領土を持たない国家。
サンテラス共和国	静岡県清水市	1983 年 7 月	国道 1 号沿いの商業施設「ユニーサンテラス駿東店」に入っているテナントが協力して建国。通貨単位は「TERRACE」。
のびのび王国	静岡県熱海市	1983 年 7 月	子どもたちにのびのびと過ごしてもらう事を目指して熱海の温泉旅館「金城館」に建国。
とんでるカントリー	北海道上士幌町	1983 年 8 月	1974 年に始まった熱気球フェスティバルの十周年記念。大統領は赤塚不二夫。
青空共和国	滋賀県栗東町	1983 年 8 月	1980 年から心身障害児を対象とする療養キャンプをもとに期間限定で開国。通貨単位は「キャン」。
秋田カエル村	秋田県西仙北町	1983 年 10 月	現代生活を省みて、もっと自然にカエル、今の生活をカエルことを目指す。
さんさい共和国	新潟県入道瀬村	1983 年 10 月	1981 年に始まったふるさと会員制度「ふるさと入道瀬村の会」を母体に、山菜による地域振興を目指して建国。
対馬ヒオウギ王国	長崎県美津島町	1983 年 11 月	対馬の中央にある浅茅湾で産出されるヒオウギ貝を特産品として売り出すことを目指して建国。
銀杏国	東京都八王子市	1983 年 11 月	甲州街道沿いの銀杏並木に想を得て、英語で「MAIDEN LADY」を意味することから、6 人の女性によって建国。
みゃんじょチクリン村	鹿児島県宮之城町	1983 年 11 月	孟宗竹の産地であることから、商工会によってまちおこしの一環として建国。「門松普及キャンペーン」などを展開。
ニイガタ首長国連邦	新潟県岩船郡朝日村、北蒲原郡黒川村、笹神村、南魚沼郡大和町、中魚沼郡津南町、東頸城郡牧村	1984 年 1 月	上越新幹線の開業、関越自動車道、北陸自動車道の開通によって、沿線が恩恵を受ける一方で、ますます過疎化が進行することに危機感を覚えた 6 町村が連邦制を布いた。
なかしべつ・ゆう・もあ王国	北海道中標津町	1984 年 2 月	1963 年に結成された「ゆう、もあ、くらぶ」の活性化を図るため、シンクタンクとして独立宣言。
LINAHA・リナハ	沖縄県竹富町	1984 年 2 月	Last Island in Natural And Healthy Atmosphere の頭文字をとって命名。無人島となった内離島と外離島が領土。
ニセコ連邦 クサ	北海道倶知安町	1984 年 3 月	国民認定税 (1 万円)、国民健康税 (1 万 2 千円)

ダ・ラーケ共和国			を支払えば誰でも国民になり、産地直送のサービスを受けることができる。
新堀芸術連邦響和国	新潟県大島村	1984 年 5 月	過疎化に伴い廃校となった空間を利用する方法を公募したところ、新堀芸術学院による構想が採択された。
無税国家一北アメリカ？ 合衆国	富山県滑川市	1984 年 5 月	滑川商工会議所の青年部会によって、「N-AMERIKA-WA」という言葉遊びから建国。
オリーブ王国	香川県小豆島	1984 年 7 月	本州四国間の架橋ルートから外れた小豆島が、海を渡らなければ行けない観光地を発信するために独立。
ラヂウム共和国	福島県石川町	1984 年 8 月	ラヂウムを含む温泉が湧出することから、「ラヂウム米」の販売をはじめ、ふるさとを見直す運動として展開。通貨単位は「DAPPE」。
いずもオロチ王国	島根県出雲市	1984 年 8 月	1983 年に地域一丸となって始まった「いずもオロチまつり」の一環として、まつりの期間のみ開国。
星のくに	大阪府吹田市里南	1984 年 8 月	星和地所と星和住宅の共同で、マンション団地「星和プラネタウン千里南」の入居者を国民とする独立国。
おけさ民宿共和国	新潟県両津市	1984 年 9 月	佐渡島に点在する 18 軒の民宿による「佐渡島ろばた民宿会」を母体に建国。佐渡島では二つ目の独立国となる。
カナソ・ハイニノ国	兵庫県中町	1984 年 11 月	利用率の減少によって廃止路線の対象となっていた鍛冶屋線を存続させるために建国。沿線の鍛冶屋、中村町、曾我井、羽安、市原、西脇、野村の各駅の頭文字をとって国名としている。

※三省堂（編集発行）『にっぽん「独立国」事典』1985 年を参照して筆者が作成。

1980 年代前半はまさにミニ独立国の建国ラッシュの様相を呈している。『にっぽん「独立国」事典』のまえがきでは、こうしたブームが「ローカリズムの第三の波」であるという指摘がなされている⁴⁴。確かに、「ミニ独立国」はある側面において当時の「地域」に対する関心の高まりを示しているが、その一方で「開国」することが手段ではなく目的化しつつある事例も散見される。このように一つの手法が広く伝播していく構造には、昨今の B 級グルメやご当地アイドルなどの流行との近似性を見ることができるのかもしれない。

ミニ独立国の建国ラッシュが一段落した後、1980 年代後半には各地で「かっぱ村」と呼ばれる組織が創設されている。1988 年 9 月 9 日には、河童連邦共和国が結成されているのだが、以下に示す表は各地で開かれた「かっぱ村」をまとめたものである。

表 1-4 全国のかっぱ村

村名	所在地	開村年	特徴
旭川かっぱ村	北海道旭川市	1985 年 6 月	旭川市商工部、商工会議所、商工会議所、観光協会の協力を得て開村。
牛久かっぱ村	茨城県牛久市	1989 年 2 月	小川芋銭とのゆかりから河童をモチーフにしたまちづくりに取り組む。1981 年から開催され

			ている「かっぱ祭り」にも参加している。
新治かっぱ村	群馬県新治		
川越かっぱ村	埼玉県川越市	1989 年 5 月	
浅草かっぱ村	東京都台東区	1988 年	かっぱ橋本通り商店街を中心とする「一店一かっぱ運動」を展開。
上野かっぱ村	東京都台東区		
利根川かっぱ村	利根川流域	1988 年 9 月	河童連邦共和国の建国と同時に発足。
駒ヶ根天竜かっぱ村	長野県		
越前かっぱ村	福井県	1989 年	木村捷一を村長に、木村病院の職員によって組織。
奥飛騨かっぱ村	岐阜県		
みの河童村	岐阜県	1990 年 6 月	1989 年に開催された第二回びわ湖サミット開催をきっかけに揖斐川水系で発足。揖斐川町では 1962 年に「カッパ祭り」を復活している。
藤橋かっぱ村	岐阜県	1989 年 10 月	古くから地域に伝わる河童伝説を具象化するために河童大明神を祀ったことから活動が始まる。
熱海かっぱ村	静岡県熱海市		
静岡かっぱ村	静岡県静岡市	1986 年 11 月	版画家の中川雄太郎によって静岡の河童伝承が掘り起こされ、1958 年には「静岡かっぱ祭り」が始まる。中川を敬愛する芸術家を中心に結成されたため、創作活動が中心。
紀泉かっぱ村	大阪府堺市	1990 年 4 月	1990 年 4 月に「堺かっぱ村」に改称。河童研究家の和田寛が村長を務める。
明石かっぱ村	兵庫県明石市		
八代・河童共和国	熊本県八代市	1988 年 2 月	1987 年 6 月に建国の呼びかけ。「河童九千坊」の伝承を活かした町おこしと水環境擁護、親水思想の普及を行う。
川内がらっぱ王国	鹿児島県川内市		

※河童連邦共和国（監）『日本のかっぱ—水と神のフォークロー—』1991 年を参照して筆者が作成。

かっぱ村の多くは 1980 年代の後半に同時多発的に開かれており、それぞれの地域同士でネットワークが形成されていった。そこでは、水環境の保全や地域の伝承を象徴する存在として河童が用いられている。本章の第一節で取り上げた福岡県田主丸町や北海道札幌市の定山溪温泉も、こうした取り組みの先進事例として他の地域との交流を深めていくこととなる。

1980 年代のまちづくりの一つの特徴として、地域とゆかりのあるモチーフを探し出し、それらを様々な目的に応じて資源的に活用しようとする方向性を導き出すことができる。マスメディアの発達によって、それまで以上に情報を共有しやすくなったことによって、社会現象として様々な「ブーム」が巻き起こった 80 年代において、まちおこしの方法もま

たそうした「ブーム」に吸収されていったことは興味深い。また、これらはその後に訪れるべき「テーマパーク」の時代をも予感させる。例えば、1990年4月に福岡県北九州市に宇宙をテーマにした「スペース・ワールド」が開業、1991年には大分県日出市に一村一品運動による地場産品や風物を映像や展示で紹介する「ハーモニーランド」（新日鉄が事業主体として関わる）が開業、1992年には長崎県佐世保市においてオランダの暮らしを再現した「ハウス・テンボス」、三重県磯部町にはスペインを再現した「志摩スペイン村」（近鉄が事業主体として関わる）、岡山県岡山市にはデンマークのチボリ公園を模したテーマパークが建設された。これらは、ある意味においてバブル経済の産物でもあったわけだが、当時の人々の余暇活動の予先を知る上では重要な要素であると言えよう。

こうした時代的背景の中で取り組まれたのが件の「ふるさと創生事業」であったことは注視すべきである。実際、そこでは「ふるさと≒地域社会」とは何かという問いかけの下、各地で地域を象徴するモチーフ探しが始まった。それらの中には、「一村一品運動」や「ミニ独立国」の遺伝子を受け継ぐような「ふるさとテーマパーク」が数多く見られる。ここで改めてその用途をまとめると、以下の通りである。

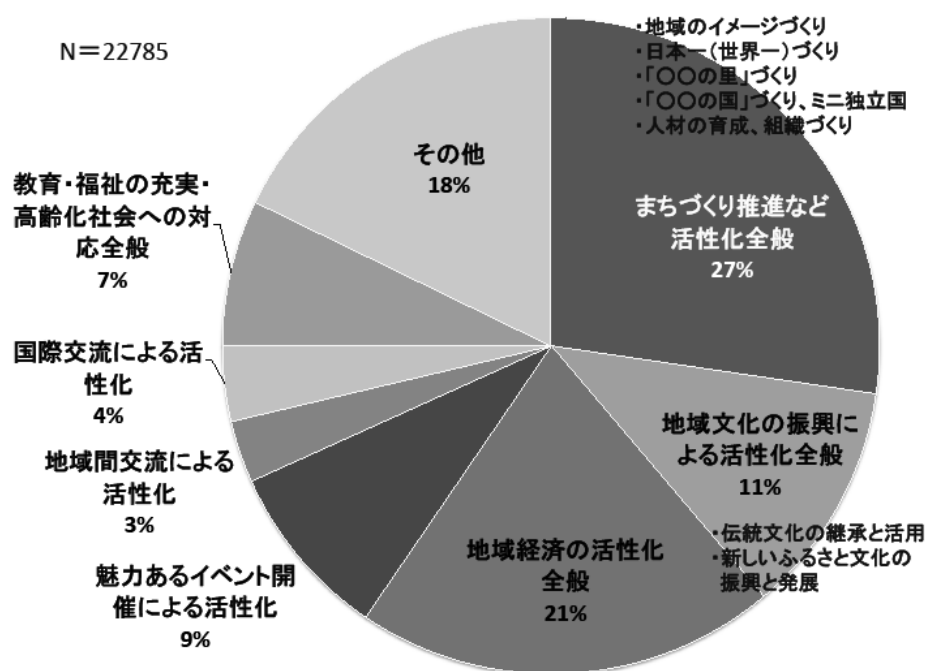


表 1-5 「ふるさと創生事業」における 1 億円の用途に関する調査

地方自治制度研究会（編）『地方自治』519号、ぎょうせい、1991年2月、18-19頁を参照。

この中でも、「地域文化の振興による活性化」の中に、地域で語られてきた妖怪伝説を活用した取り組みも見られる。例えば、酒吞童子伝説で知られる京都府大江町では、1980年代以降「鬼伝説イメージ戦略」に基づくまちづくりが推進されてきた。渡辺信夫はその過程を三段階に分けている。第一段階は、1982年から1990年にかけて、「町役場主導の鬼伝説によるイメージ戦略の段階」であり、この時期に「大江山酒吞童子祭り」が始まり、1990年には「大江山鬼伝説一千年祭」が開催された。

この時期に「ふるさと創生事業」の予算がもたらされたことで、大規模なイベントを通して町を挙げての地域イメージの発信が進められていった。そのような中で、平成元年度には、京都府観光関連施設整備事業の一環として、成田亨の制作による「鬼のモニュメント」が設置された。第二段階は、1991年から1994年にかけて、「行政主導から住民参加型の町づくりへと」展開し、「緑と伝説の大江塾」が発足された。第三段階として、1995年以降の地域経済をつくる新しい段階が想定されている⁴⁵。

同様に、「鬼」にスポットを当てた事例として、岩手県北上市（旧和賀町）では、1988年に第四次和賀町総合開発計画の重点プロジェクトとして「鬼と平和の里づくり事業」が策定された。これは、和賀町が民俗芸能「鬼剣舞」の「発祥」の地であることから、「鬼のもつユニークさやおもしろさをいかした町の活性化を目指し、地域の文化の見直しと、平和で幸福な町づくり」を推進することを目的とするものであった。ふるさと創生を受けて町民からアイデアを募集した結果、「鬼の館」をシンボル施設として据えるプランが採用され、1990年には「鬼と平和の里づくり推進委員会」が発足し、1994年に「鬼の館」の開館へと至った⁴⁶。条例でも規定されているように、「鬼の館」は学術文化の向上に寄与することを目的とするものであり、単なる観光施設に留まらない意味を持っている。鬼と平和の里づくり推進委員会の委員長を務めた高橋富雄が「鬼観念へのチャレンジの場⁴⁷」と述べているように、展示内容も多角的な視点から「鬼」



図 1-13 鬼のモニュメント（2008年7月15日撮影、京都府大江町）



図 1-14 鬼の交流博物館（2008年7月15日撮影、京都府大江町）



図 1-15 北上市立鬼の館（2012年6月8日撮影、岩手県北上市）

にアプローチしている。

無論、これらの事例における「鬼」は、必ずしも妖怪としての側面を持つだけでなく、神や精霊等、様々な意味を持つ存在ではあるが、「ふるさと」の象徴としてこうした異形の存在に新たな光を当てる心意には、本章の第1節で見た女木島の鬼が島にも近い構造を持っている。

2-4. コンテンツとしての妖怪の可能性―鳥取県境港市の取り組みを事例に

鳥取県境港市では、「地域の特性を最大限に活かした個性豊かで魅力あふれる街を創造してゆく⁴⁸⁾」ことを目指して、1988年度に市役所職員によって「緑と文化のまちづくり委員会」が発足された。同年の市報では市民に対してまちづくりのアイデアを募集しているのだが、そこで重視されていたのは「アメニティ（快適環境）の高いまちづくり」であった⁴⁹⁾。年度末に打ち出された基本方針とモデル実施計画には、「歩道幅を広げるとともに、ブロンズ彫刻を数点配置⁵⁰⁾」するプランが掲載されている。これは同時期に他の自治体でも実施されていた野外彫刻の設置と同調する動きであると言えよう。

そのような折にもたらされた「ふるさと創生事業」は、1989年度に開始した「緑と文化のまちづくり」に反映されることになった⁵¹⁾。その事業の一環として同年10月に実施された「緑と文化のまちづくりフォーラム」では、パネリストの一人として水木しげるも招かれているのだが、この段階に至っても「妖怪」はその他の要素の一つに過ぎない。1990年に策定された「境港市美術館等基本構想」では「海をテーマとした美術館」という方向性が示されている⁵²⁾。結果的に美術館の建設は見送られたが、それと入れ替わるように1992年に始まったのが「水木しげるロード」の整備である。



図 1-16 水木しげるロード（2012年9月9日撮影、鳥取県境港市）

しかし、妖怪でまちづくりという発想は、はじめから受け入れられていたわけではなかった。関係者の記述によれば、「今でさえ空き店舗がいっぱいあるのに、お化けの町になって人に忌み嫌われ、人が来なくなったらどうするんだ⁵³⁾」などと言われたと回想されている。しかし、市の職員が地道に説明を繰り返していった結果、地域住民の理解を得て、1992年に6体の妖怪ブロンズ像を設置することができた。翌年には17体が追加され、少しずつ地域の妖怪色も高まっていった。その後、JR西日本の境線に鬼太郎列車が運行されるなど、行政だけではなく民間事業者による協力も追隨していくことになる。実質的に、境港への入込客数も年々増加し、水木しげるロードが完成した1996年には年間38万人を超える観光客が訪れている。

表 1-6 鳥取県境港市における妖怪文化を活用したまちづくりの動向

西暦	まちづくりの動向	入込客数
1988	街づくりプロジェクト委員会設置	
1990	緑と文化の街づくりフォーラム開催 ▶▶▶パネラーとして水木しげるが出演	
1992	妖怪ブロンズ像の設置開始（6 体設置）	
1993	妖怪ブロンズ像追加で 17 体設置 ▶▶▶ブロンズ像の盗難・損壊事件が多発し、メディアを賑わせる JR 西日本の境線に鬼太郎列車	
1994	妖怪ブロンズ像追加で 17 体設置	
1995	妖怪ブロンズ像追加で 31 体設置	297,680
1996	妖怪ブロンズ像追加で 9 体設置 8 月に水木しげるロード完成式	380,344
1997		467,572
1998		463,185
1999		435,866
2000	妖怪神社開設	610,311
2001		603,414
2002		614,555
2003	水木しげる記念館開館	854,474
2004	妖怪ブロンズ像増設公募	779,364
2005		855,207
2006	妖怪そっくりコンテストの実施 境港商工会議所設立百周年記念行事として「妖怪検定」が始まる ▶▶▶妖怪ファンの聖地というイメージの醸成、妖怪の説明ができる人材の育成	926,909
2007		1,478,330
2008		1,721,725
2009	ハイ・サービス日本 300 選選出	1,574,710
2010	NHK の連続テレビドラマ小説で「ゲゲゲの女房」が放送される	3,724,196
2011		3,221,428

とは言え、堺港で用いられる妖怪のイメージは水木しげるが生み出したキャラクターとしてのそれであり、いわゆる妖怪伝承を活用したまちづくりの文脈とは異なる。それよりもむしろ、「コンテンツを活用した地域振興の成功事例」として評価されるべきであろう⁵⁴。2005 年に国土交通局総合政策局、経済産業省商務情報政策局、文化庁文化部の三者による「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」の中で、コンテンツ・ツーリズムの成功事例として境港の水木しげる記念館が挙げられている。そもそも、コンテンツ・ツーリズムとは「地域や場所がメディアになり、そこに付与されたコンテンツ（物語性）を、人々が現地で五感を通して感じ、人と人の間、人とある対象の間でコン

テンツを共有することで、感情的繋がりを創り出す」現象を指している⁵⁵。この定義に従えば岩手県遠野市もコンテンツ・ツーリズムの代表事例として位置付けられるが、実質的には映画、マンガ、アニメといったコンテンツ産業を指している場合が多い。

コンテンツ・ツーリズムの隆盛とともに聞かれるようになった「聖地巡礼」だが、松浦妙子によれば「その地域が登場するアニメ作品を好きな“オタク”と言われる人々が、作品を観るだけに留まらず、地域への興味を持って当地にやってきて、作品の舞台となった場所、昔からある神社や古民家や何でもないただの路地を訪れ、そこに興味関心や居場所を見つけていくさま」と定義されている⁵⁶。境港の場合、そこに展開されているのは水木作品全般であるため、必ずしも厳密な意味での「聖地」には該当しないが、「小さな個々の地域が、元々地域になかった新しい視線・発想を取り入れて、それぞれの地域資源を見つめなおすプロセスの中で、その地域に住む人にとって何が大切なのかを再発見し提言⁵⁷」しているという点から聖地としての条件を備えている。

1970年代の旅が「ディスカバー・ジャパン」の旗の下に民話や民謡を手にした若い女性をターゲットにしていたのに対して、今日では「聖地巡礼」の名の下にマンガやアニメを手にした「オタク」たちが旅するようになったとも言えよう。

第3節 地域密着型の妖怪文化の創造—コンテンツ重視からコミュニティ重視へ

3-1. 2000年代以降の文化芸術によるまちづくり

コンテンツ・ツーリズムは、既存のコンテンツの求心力によって地域の外側から作家や作品のファンを呼び込むことに大きな目的がある。ただし、増淵敏之が指摘しているように、「地域住民の関わりがなければ、単なるビジネスマターの施策展開に終始してしまう」ため、事業を継続的に実施していくためには「地域住民の理解、参加を重視していくこと」が必要不可欠である。大衆文化を通して普及していった妖怪文化にとって、そうして外発的に生み出された「コンテンツ」を活用しようとする動きが生じることは必然的だが、その一方で地域文化としての側面にはどのように光が当てられていくのだろうか。

近年では、まちづくりの手法も多様化し、地域住民の主導による様々な活動が実施されるようになってきた。こうした傾向の背景には、地方自治体の財政難に伴い、以前のようにハード整備に潤沢な資金を投入することができなくなってきたことも指摘できるが、それと同時に地域住民自身の地域に対する関心の高まりも無視することはできない。こうした動きに同調するように2001年に制定されたのが文化芸術振興基本法である。これは、「文化芸術に関する活動（以下「文化芸術活動」という。）を行う者（文化芸術活動を行う団体を含む。以下同じ。）の自主的な活動の促進を旨」とする法律である。従来の文化行政が、文化財保護法にせよ博物館法にせよ、「もの」を中心に据えていたのに対して、ここでは人々の活動（「こと」）に力点が置かれている点は注目すべきであろう。

文化芸術振興基本法では、そもそも「文化芸術」とは何かという「定義」については言及されていないが、その対象とすべき文化芸術活動については、従来の「文化財保護法」

の対象領域を超えて、様々な生活文化やメディア芸術についても並列で取り上げている。

中村淳は、この基本方針の背後に「伝統的生活文化・伝統的生業を、周囲の景観や自然とセットにして整備・保持せよ」というメッセージを読み取り、「都市民の〈癒しの場〉として農山漁村（≡地域社会）を機能させる」ことを目的とするものであると指摘する⁵⁸。そして、こうした方向性を決定づけた要因として、1998年3月に閣議決定された「二十一世紀の国土のグランドデザイン―地域の自立の促進と美しい国土の創造―」を挙げている。そこでは、「多自然居住地域」として農山漁村が位置付けられ、「伝統的生業・伝統的景観が息づく〈癒しの場〉というテーマパークの管理人役を強制的に割り当てられた」とある⁵⁹。また、2005年に文化財保護法が改正され、「文化的景観」が新しいカテゴリーとして設けられたことから分かるように、こうして地域で育まれてきた「文化」が国民共有の財産として価値づけられた。そして、そうした国民共有の財産を継承していく主体として位置付けられたのがまさに地域住民であったわけである。

三全総の「定住圏構想」に端を発する「地域の自立」を目指した「上からのふるさとづくり」に向かう力学は、四全総を受けて実施された「ふるさと創生事業」を経て、「美しい国」を志向する上からの方針として「伝統文化」は、中村が用いるところの「強いられた主体性」によって保存継承していくことが求められつつある⁶⁰。では、具体的にどのような方法によってそれらは達成されていくのであろうか。ここで注目すべき動向が、2000年代以降に各地で展開されるようになった「文化芸術によるまちづくり」である。例えば、2003年に文化庁が始めた「文化芸術による創造のまち」支援事業では「地域における文化芸術の創造、発信及び交流を通じた文化芸術活動の活性化を図ることにより、我が国の文化水準の向上を図ること」を目指し、「地域文化リーダー（指導者）の育成」「地域の文化芸術団体の育成」「地域の文化芸術活動の発信・交流」「大学と地域との交流・連携の促進」に係る事業を支援するものであった⁶¹。

しかしながら、「妖怪文化」は幸か不幸か前述するような「伝統文化」の中心的な対象としては据えられていない。それゆえに、妖怪文化の保存継承および活用については、「強いられた主体性」によって取り組まれるものではなく、地域住民の自発性や主体性のもとに実践されているものが多い。以下に挙げる事例は、いずれも地域住民によって立ち上げられ、継続されている活動である。それらは、地域の外から人を呼び込むための観光地を目指す取り組みというよりも、住民自身が楽しむことを出発点としているものが多い。それゆえに、そこで活用される妖怪文化も、外発的なキャラクターではなく、地域密着型の妖怪文化へと関心の軸足が移りつつある。ここでは、妖怪文化の地域文化としての読み替えがなされていると言えよう。

3-2. 外発的なコンテンツを通じた地域価値の再発見

一広島県三次市「物怪プロジェクト三次」の活動から

江戸時代後期に制作された《稻生物怪録》は、寛永2（1749）年7月、備後三次に住む

16歳の少年、稲生平太郎が次々と襲り来る怪異と対峙する様子を描いた絵巻である。現在でも、広島県三次市には稲生平太郎の旧家跡や物語ゆかりの場所が伝えられている。しかし、こうした物語が地域資源として活用されるようになったのは近年のことである。

その一つの契機となったのが、1998年に水木しげるが《稲生物怪録》をもとにマンガ化した『木槌の誘い』の発表であった。あの水木しげるが三次を舞台にしたマンガを描いているということが大きな動機となって、2000年に「物怪プロジェクト三次」が結成された。これは、地域ゆかりの物語である《稲生物怪録》を活用したまちづくりに取り組むために地域住民によって組織された任意の団体である。

さらに、2000年にマンガ家の宇河弘樹によって『朝霧の巫女』が発表され、続いてテレビアニメ化されたことにより、三次は「聖地」として新たな展開を見せていくことになる。作中に登場した場所をめぐるスタンプラリーなどのイベントを実施したことで、作品のファンが三次に訪れるようになった。プロジェクトの初代代表を務めた小田伸次は、その構成員について「アニメファンの人と、どちらかと言えば学術部門のファンの人々が混在」していると述べている⁶²。実際、三次の取り組みは郷土研究の対象としての《稲生物怪録》とマンガコンテンツとしての『木槌の誘い』や『朝霧の巫女』への関心が共存しながら、地域住民の自由な解釈によって新しい地域活動へと展開してきた。松村薫子は、こうした動向について「伝統的な妖怪文化を用いながらも、他地域の妖怪や漫画家の描く妖怪、妖怪以外のものなども加える形で、新たな妖怪文化を『創造』している行為」と指摘している⁶³。

ここには、原典としての《稲生物怪録》から二次創作物としての『朝霧の巫女』へのコンテンツの拡張という現象を見ることができる。現在の日本におけるコンテンツ・ツーリズムを考える上で、「二次創作」という視点は欠かすことができない。出口弘は、和歌の「本歌取り」や歌舞伎の「ないませ」と現代の同人的文化との間に「作品世界の物語の型を共有しつつ趣向を変え遊ぶ」という共通性を見出し、様々な二次創作的手法を駆使して「作品世界を読者の知っている世界に接続させる努力」を見ている⁶⁴。三次の場合、江戸時代に創作された《稲生物怪録》という文化財を有しながらも、それをもとに創作された現代の作品にも等しく関心を寄せることによって、重層的な層に支えられたコンテンツ・ツーリズムが展開されてきた。

三次の事例では、《稲生物怪録》という既存のコンテンツに基づきながらも、地域の外側で洗練された妖怪文化を受容するだけでなく、地域住民や参加者が思う一般的な妖怪観が反映されている。ここでは、「コンテンツ」への関心から「コミュニティ」活動の活性化



図 1-17 『朝霧の巫女』の作中に登場する商店の前で解説するプロジェクトのメンバー（2012年8月26日撮影、広島県三次市）

への移行を見ることが出来る。同様の事例として、本論の第3章で取り上げる徳島県三好市山城町における取り組みを挙げることができる。

3-3. 地域住民による妖怪伝承の再発見と地域学習

—大分県臼杵市「臼杵ミワリークラブ」の活動から

これまでの事例は、いずれも特定のコンテンツを活用することによって地域の外側から人を呼ぶことに主眼が置かれている。一方、今日ではコンテンツに基づかない取り組みが見られるようになった。例えば、大分県臼杵市では、地域住民によって1998年に結成された「臼杵ミワリークラブ」による「妖怪共存活動」が実践されている。

これは、「大分県臼杵市に伝わる妖怪、怪談、物の怪、守護神などを後世へ伝えながら、これらを育てた歴史が変わらず残されている町並みを活かし、市内外へ向け『歴史の町・臼杵』の一味違う楽しみ方を提案する」ことを目的に設立された団体である⁶⁵。ここでは、文献調査や会員の聞き取り調査によって抽出された様々な伝承を活用することによって、地域の魅力を新しい視点からあぶり出す取り組みがなされている。

その活動の一環として、毎年夏に「夜会」と称するまち歩きイベントを実施している。地域の児童向けに実施されるこのプログラムでは、日が暮れた後に臼杵の町並みを歩きながら、様々な怪異が起こった現地で物語るイベントである。例えば、『臼杵町誌』や『臼杵市史』にも記述がある「切通しの馬の首」が現われた場所では、紙芝居を使って効果的に話がなされている。



図1-18 夜会（2011年8月29日撮影、大分県臼杵市）

既存のコンテンツに基づかない地域密着型の取り組みは、妖怪文化の現代的活用において重要な位置を占める手法として位置付けることができる。そこでは、大衆化された妖怪文化とは異なり、改めて地域住民が妖怪文化の創造主体となることによって、その多様性が確保されている。本論の第4章で取り上げる滋賀県東近江市（旧八日市市）の「ほない会」や岩手県胆沢郡金ケ崎町の「金ケ崎まちづくり研究所」も同様の事例として位置付けられる。

3-4. アートプロジェクトを通じた地域住民の主体性の回復

—物語消費モデルから物語創作モデルへ

妖怪文化の活用の歴史は、大きく見れば過去に蓄積されてきた膨大な情報量を持つ物語を消費することに主軸が置かれてきた。そこでは、地域で語られてきた、あるいは記述されてきた伝承であれ、地域の外側から輸入された大衆文化であれ、基本的には既存のコンテンツに根差してきた。しかしながら、そこに訪れる人々のみならず、地域住民までもが

物語消費の文脈に乗り、地域で語られてきた「小さな物語」がまちづくりや観光コンテンツといった「大きな物語」へと置換されつつある。言わば、ここでは物語の創造主体は地域の外部に設定されていくことになる。これに対して、先に見た臼杵ミワリークラブのように地域の伝承を自ら発掘しているような事例は、伝承の担い手としての地域住民の主体性を回復した事例として位置付けることもできよう。

その一方で、近年では妖怪文化の創作の枠組みを活用するように新たな物語が創作される事例も見られる。例えば、「フェスティバル/トーキョー2013（以下、F/T13）」で発表された『四谷雑談集』と『四家の怪談』という演劇作品は、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』を現代の新から解釈した「ツアーパフォーマンス」であった。そもそも、『東海道四谷怪談』は、四谷を舞台とする『四谷雑談集』をはじめとする既存の怪談をもとに、場所を現在の豊島区にあった四ツ谷に置き換えたことによって成立したものであった。ドラマトルクスの長島確は、こうした構造について次のように解釈を加えている。

噂など断片的なエピソード、つまり「小さな物語」が街の中から湧き、語り継がれ、普遍的な『四谷怪談』という「大きな物語」へたどりつくという成り立ちがある⁶⁶

こうした解釈に基づき構成された今回の演目では、現在の四谷を歩くまち歩きツアーの『四谷雑談集』と足立区の四家を舞台とする創作民話『四家の怪談』によって構成されている。

前者は、『東海道四谷怪談』の元ネタの一つとされる『四谷雑談集』の舞台を歩くわけだが、演劇に先だって参加者には物語のあらすじをまとめ、写真家による四ツ谷の風景が納められた小冊子が配布され、道中では中野成樹と長島確によるガイドが行われる。後者は、南北が『東海道四谷怪談』を創作するにあたって舞台を移したように、「四家」の地名が残る東京都足立区を舞台にした物語が中野によって書き下ろされた。参加者は、その物語が記された本とその舞台を記した地図を手に、めいめいにまちを歩いていく。これは、彼らがしばしば用いている「誤意識」と称される手法に基づくものであるが、その道中にガイド役はおらず、物語とまちを重ねあわせるのは他ならぬ参加者自身である。それ故に、参加者は物語の中に描かれたマンガと実際の風景を照らし合わせたり、主人公がご飯を食べたお店に入ったりし



図 1-19 『四谷雑談集』の目的地となったお岩稲荷（2013 年 11 月 14 日撮影、東京都新宿区）



図 1-20 『四家の怪談』の舞台の一つとなった四家の交差点（2013 年 11 月 20 日撮影、東京都足立区）

ながら、それぞれの物語を見出していく。

これが最終的に「怪談」に還元し得るのかどうかは別問題として、新しい物語が生じ得る化学反応としては実験的な演目であった。例えば、筆者もこのツアーに参加し、物語中に登場する中華料理屋で食事をとっていたのだが、その店員から興味深い話を耳にすることができた。『四家の怪談』は、言うまでもなく中野成樹によって 2013 年に著された創作民話であるわけだが、こうした話を耳にしたある客が、「この四家にお岩さんがいたんだよ」という話を始めたという。もちろん、こうした飲み屋の話を鵜呑みにすることはできないものの、虚構が現実へと転移していくような物語創作型の演劇モデルとしては興味深い事例である。

ここで挙げた『四家の怪談』は、国際演劇祭としての「F/T13」の演目の一つとして、演劇の専門家によって設えられたものである。それゆえに、そこには四谷や四家の地域住民が必ずしも関与しているわけではなく、その鑑賞者も地域外の人々によって占められている。とは言え、そこから派生するように、また新たな「地域の物語」が語られているような現場を見ると、こうした「ツアーパフォーマンス」(アートプロジェクトとも呼ぶことができる)が「小さな物語」を生み出す起爆剤として機能している可能性を指摘できる。妖怪文化の活用における物語消費型から物語創作型への展開には、あるいはこうした現代芸術の介入の意義を認めることができるのではないだろうか。

第1章のまとめ

現代に通じる「妖怪」という概念が形成されたのはそんなに昔のことではない。妖怪種目がキャラクター化し、娯楽の対象として成立したのも近世以降の現象であるし、ましてやまちづくりや観光の中で妖怪文化が活用されるようになったのはせいぜいここ百年ほどの現象である。しかしながら、そうした妖怪文化の活用の現代史を概観していくと、民俗文化でも大衆文化でもない、地域文化としての妖怪文化の再創造のダイナミズムの過程を見ることができる。そして、その背景にはそれぞれの時代に応じた人々の地域への関心の持ち方が少なからず投影されているわけである。

戦後の復興期、福岡県田主丸町において始まった「河童族」の取り組みは、火野葦平という精神的支柱を得ることによって、地域固有の文化としての水神信仰を復興するものであった。その意味において、この事例は必ずしも妖怪文化の現代的活用と括することはできないのかもしれない。しかし、次第に妖怪キャラクターとしての「河童」イメージに置き換わる形で地域が変化していった過程には、妖怪文化の活用に向かう力学を見ることができよう。

その後、経済状況も安定してくると、人々の間に経済的なゆとりができ、その結果として旅行ブームが到来することになる。その旅行先として人気を集めたのが温泉地であり、各々の新興温泉地は観光地としての個別化を図るために様々な催しを行うようになる。そのような中で始まったのが定山溪温泉の「かっぱ祭り」や本論の第2章で取り上げる伊豆

長岡温泉の「鶴ばらい祭り」である。これらは、地域にもともと伝わっている民間伝承ではなく、観光商品としてつくりだされた創作民話である。

1970年代の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンと同調するように「民話のふるさと」としての地域づくりに邁進した岩手県遠野市、1980年代末から90年代初頭にかけての「ふるさと創生事業」によって「ふるさと」の象徴として妖怪文化を採用した京都府大江町や岩手県和賀町、90年代を通して「コンテンツ」を活用した観光地づくりに取り組み、今や成功事例の一つとして挙げられている鳥取県境港市、そして地域住民を主体とする多様なまちづくりが展開されるようになった2000年代以降は、各地で様々な取り組みがなされるようになってきた。

このように、それぞれの時代に応じた方法で再生されてきた妖怪文化であるが、それらは「実施主体」と「活用形態」によって分類することができるだろう。まず、実施主体に着目すると、大きく行政主導型のものと地域住民主導型のものとに分けることができる。基本的に、前者はハード整備なども含む大きなまちづくり（公共事業）の一環として妖怪が「コンテンツ」として活用される事例が多い。一方で、後者は地域住民による様々な地域活動を通して達成されていくものであり、「コミュニティ活動」を重視する事例が多い。

また、その活用形態に着目すると、民間伝承を重視するものと大衆文化を重視するもの、そして新しい妖怪文化の創造を含むものの三つの属性に分けることができる。民間伝承を重視する取り組みは、グリーン・ツーリズムやエコミュージアムの手法をとるものが多く、ここには無形民俗文化財の保存継承も含んだ活用という視点を導入することができる。大衆文化を重視する取り組みは、コンテンツ・ツーリズムの手法をとるものが多く、ここではキャラクターとしての妖怪存在に最大の力点が置かれる。新しい妖怪文化の創造を含む取り組みは、行政主導によってなされる場合にはいわゆる「ゆるキャラ」のような形で実現されることも少なくないが、本論ではむしろ地域住民を主体とする妖怪文化の再創造に関心の中心を据える。そこでは、アートプロジェクト型の活用形態によって、妖怪文化の創造主体をより多くの地域住民に開く回路が築かれつつあると言えよう。

観光客や旅行者といった外部の眼差しを意識した観光開発型のまちづくりから、地域住民自身の興味に基づく地域発着型のまちづくりへと展開していく過程には、人々の地域社会との関わり方の変化を重ねることができる。そこでは、様々なメディアを通して提供される大衆文化の消費者としての意識から、自らが物語の発信者となり得る時代の変化にも対応しているのかもしれない。妖怪文化の現代的活用について見ても、2000年代以降の実践を概観すると、そこからは地域住民を主体とする物語創造型の活用モデルを一つの特徴として抽出することができるだろう。それらは、最終的にはその地域の実態を少しずつ可視化していくことにもつながっていく。本来は「目に見えない存在」であるはずの妖怪を可視化するという営みを通して「地域」そのものを問いかける妖怪まちづくりの実践には、新しい民俗文化の創造の場を見ることができる。

表 1-7 実施主体と活用形態による妖怪文化の現代的活用の分類

	行政主導型	地域住民主導型
	特徴：ハード整備を伴う場合が多い。 年代：1970 年代から 90 年代初頭 背景：高度経済成長とバブル経済にかけての豊かな財政状況。	特徴：ソフト（地域活動）がメイン。 年代：1950-60 年代、2000 年代以降 背景：戦後の地域復興
民間伝承重視	活用形態：グリーン・ツーリズム、エコミュージアム 目的：無形民俗文化財の保存継承と観光事業への活用 事例：岩手県遠野市	活用形態：グリーン・ツーリズム、エコミュージアム 目的：地域固有の伝承の発掘と普及 事例：大分県臼杵市
		活用形態：コンテンツ・ツーリズム、地域イベントの開催 目的：地域活性化 事例：広島県三次市、徳島県三好市山城町
大衆文化重視	活用形態：コンテンツ・ツーリズム 目的：キャラクター文化を活用した観光振興 事例：鳥取県境港市	活用形態：コンテンツ・ツーリズム 目的：キャラクター文化を活用した観光振興
		活用形態：アートプロジェクト 目的：地域住民による地域学習 事例：滋賀県東近江市、岩手県胆沢郡金ケ崎町
新しい妖怪文化の創造	活用形態：ご当地キャラクター（ゆるキャラ）の制作、イベントの開催 目的：地域のアピール 事例：	

¹ 鐵道省（編）『郷土の傳説』東亜旅行社、1940 年、目次。

² 古川克行「桃太郎伝説地を訪ねて」おかやま桃太郎研究会『桃太郎は今も元気だ』岡山市デジタルミュージアム、2005 年を参照。

³ 香川雅信「郷土玩具と妖怪 妖怪文化の〈伝統の創造〉」小松和彦（編）『妖怪文化の伝統と創造』せりか書房、2010 年、582 頁。

⁴ 田主丸町誌編集委員会（編）『田主丸町誌 第一巻 川の記憶』田主丸町、1996 年、881 頁。なお、『田主丸町誌』は、いわゆる市町村史とは異なり、いくつかのテーマに絞った特徴的な編集がなされている。このように、制度史ではなく民衆史の視点から歴史を記述した点が「自治体史の在り方を意欲的に模索した画期的な試み」であるとして、1997 年に「第 56 回西日本文化賞」社会文化部門を受賞している。

⁵ 同上、884 頁。

⁶ 同上、903-904 頁。

⁷ 2013 年 8 月 7 日時点の調査において、河童族は 27 名のメンバーによって構成されている。

⁸ 8 月 8 日に開催される理由については、八が末広がり縁起がいいことと、「ハッパ」と「カッパ」の語感から定められたという。

⁹ 2013 年 8 月 7 日の実地調査において、河童族の頭より実見の機会を得た。

¹⁰ イメージキャラクターの愛称は公募によって定められ、2013 年 3 月 16 日に報道発表された。

¹¹ 札幌市教育委員会文化資料室（編）『さっぽろ文庫 59 定山溪温泉』札幌市、札幌市教育委員会、1991 年、180-185 頁。

¹² 美泉定山の未亡人から宿を譲り受けた佐藤伊勢造による佐藤温泉（現在の定山溪ホテル）、能坂三郎の能坂温泉（現在の鹿の湯）、高山キンの高山温泉の 3 軒である。桐原西次『HTB まめ本④定山溪鉄道』北海道テレビ、1970 年、2 頁を参照。

-
- 13 札幌市教育委員会文化資料室（編）前掲書、205 頁。
- 14 札幌市教育委員会文化資料室（編）前掲書、214 頁。
- 15 2013 年 10 月 4 日に実施した定山溪観光協会における聞き取り調査に基づく。
- 16 定山溪第一ホテルを創業した布村久雄の回想によれば、1950 年代の定山溪は、章月を主体とする「定山溪観光協会」と定山溪ホテルを主体とする「定山溪温泉観光協会」とに二分されていたという。札幌市教育委員会文化資料室（編）前掲書、245 頁。
- 17 当時の定山溪観光協会事務局長を務めていた桐原西次による自筆の回想録に基づく。定山溪観光協会より資料の提供を受けた。
- 18 当時の定山溪観光協会事務局長を務めていた桐原西次による自筆の回想録に基づく。定山溪観光協会より資料の提供を受けた。
- 19 札幌市教育委員会文化資料室（編）前掲書、260 頁。
- 20 道場親信「一九六〇年代における「地域」の発見と「公共性」の再定義 未決のアポリアをめぐって」『現代思想』第 30 号第 6 巻、青土社、2002 年 5 月。
- 21 澁谷美紀『民俗芸能の伝承活動と地域生活』農村漁村文化協会、2006 年、6 頁。
- 22 岩井宏實（編）『日本列島活性化シリーズ 博物館づくりと地域おこし』ぎょうせい、1991 年、240 頁。
- 23 森浩「第三次全国総合開発計画について」『生活と環境』23 巻 1 号、日本環境衛生センター、1978 年 1 月、6 頁。
- 24 中川晴夫「地域づくり政策と社会教育実践の課題」『月刊社会教育』第 285 号、国土社、1981 年 1 月、36 頁。
- 25 北田耕也『大衆文化を超えて 民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986 年、126 頁。
- 26 北田耕也「文化の変革と社会教育」『月刊社会教育』第 243 号、国土社、1977 年 11 月、21 頁。
- 27 菊池幹『遠野路—民話のふるさと』海南書房、1975 年、11 頁。
- 28 日本地域開発センター（編）『トオノピアプラン自立する都市・遠野からの報告』清文社、1982 年、42 頁。
- 29 同上、42 頁。
- 30 「毎日新聞」1970 年 10 月 7 日。
- 31 『国有鉄道』第 28 巻第 11 号（通巻 257 号）、交通協力会、1970 年 11 月、25 頁。
- 32 1970 年 8 月 1 日発行の『国有鉄道』第 28 巻第 8 号では、鉄道商品の周知を図るために「各支社間の連けいを密にした計画的、広域的な宣伝活動を行なう必要があり、マスコミ特に、テレビの宣伝力に着目して、これを大いに利用することが効果的と思われる」（10 頁）とある。
- 33 DISCOVER JAPAN の仕掛け人である藤岡和賀夫は、当時の『アンアン』編集長である木滑良久の「旅は物見遊山から、自分がドラマの主人公のように見知らぬ町を歩くことに変わった」という分析を引用し、一連の現象が当時の「時代の気分」であったと指摘している。（藤岡和賀夫『DISCOVER JAPAN 40 周年記念カタログ』PHP 研究所、2010 年、17 頁。）
- 34 『アンアン』第 4 巻第 13 号、1973 年
- 35 菊池一新『遠野まちづくり実践塾』無明舎出版、2007 年、155 頁。
- 36 パハヤチニカ編集委員会（編集発行）『パハヤチニカ』Vol.23、2009 年、17 頁。
- 37 このことは、カップ淵の畔にある「乳神様」の祠に設置されたノートに書かれた記述を見ても明らかにされる。
- 38 Robert Baron, Nick Spitzer, *Public Folklore*, University Press of Mississippi, 2007, p.viii.
- 39 遠野市新基本計画策定委員会、遠野市企画財政課（編）『遠野市総合計画』遠野市、1981 年、123 頁。
- 40 神崎宣武『「地域おこし」のフォークロア』ぎょうせい、1988 年、119-120 頁。
- 41 この段落における四全総の引用は、いずれも『ふるさと創生事業報告書 第 1 巻』（財団法人地域活性化センター、平成 2 年）の 8 頁に掲載された抜粋に基づいている。
- 42 芦尾長司「「ふるさと創生」考」地方自治制度研究会（編）『地方自治』512 号、ぎょうせい、1990 年、14 頁。

-
- 43 白石太良「地域づくり型ミニ独立国運動の変容」『流通科学大学論集—人文・自然編—』第4巻第1号、流通科学大学学術研究会、1991年9月、20頁。
- 44 三省堂（編集発行）『にっぽん「独立国」事典』1985年、3頁。
- 45 21 ふるさと京都塾（編）『ふるさとづくり読本⑤緑と伝説の大江塾—京都府大江町の町づくりと塾運動』かもがわ出版、1995年、96-97頁。
- 46 鬼の館の設立経緯については、岩手県北上市発行の『要覧 北上市立鬼の館』による。条例（平成6年3月22日）によれば、鬼の館は「鬼に関する資料の収集、保存及び展示等を行い、学術文化の向上に寄与する」ことを目的に設置された。
- 47 北上市立鬼の館（編集発行）『北上市立鬼の館常設展示図録』1995年、8頁。
- 48 境港市（編集発行）『境港市三十五周年史』1991年、196頁。
- 49 鳥取県境港市『市報さかいみなど』687号、1988年5月6日、3頁。
- 50 鳥取県境港市役所『市報さかいみなど』707号、1989年3月。
- 51 同上。
- 52 境港市（編集発行）『境港市三十五年史』1991年、204-205頁。
- 53 桝田知身『水木しげるロード奮闘記—妖怪によるまちづくり 境港市観光協会の挑戦—』境港市観光協会、2010年、15頁。
- 54 中山光治「コンテンツを活用した地域振興について」社団法人中国地方総合研究センター（編集発行）『季刊中国総研』2010年9月、25頁。
- 55 山村高淑『アニメ・マンガで地域振興～まちのファンを生むコンテンツツーリズム開発法～』東京法令出版株式会社、2011年、172-173頁をもとに要約。
- 56 松浦妙子「「聖地巡礼」は新世紀の「ディスカバー・ジャパン」か？」社団法人中国地方総合研究センター（編集発行）『季刊中国総研』2010年9月、12頁。
- 57 同上、13頁。
- 58 中村淳「文化という名の下に—日本の地域社会に課せられた二つの課題—」岩本通弥（編）『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館、2007年、30頁。
- 59 同上、30-31頁。
- 60 同上、33頁。
- 61 「文化芸術による創造のまち」支援事業実施要項（兵背15年4月1日文化庁長官決定、平成16年4月1日一部改正、平成19年4月1日一部改正、平成21年4月1日一部改正）より引用。
- 62 小田伸次「物怪プロジェクト三次の歩みと今後」社団法人中国地方総合研究センター（編集発行）『季刊中国総研』2010年9月35頁。
- 63 松村薫子「妖怪町おこしにおける妖怪文化の創造 広島県三次市を中心に」小松和彦（編）『妖怪文化の伝統と創造』せりか書房、2010年、621頁。
- 64 出口弘「絵物語空間の進化と深化—絵双紙からマンガ・アニメ・フィギュア・ライトノベルまで—」出口弘、田中秀幸、小山友介（編）『コンテンツ産業論 混沌と伝播の日本型モデル』東京大学出版会、2009年、307-308頁。
- 65 臼杵妖怪共存地区管理委員会、臼杵ミワリークラブ（編集発行）『亀城下異談』2009年、50頁。
- 66 中野成樹、長島確、『四谷雑談集』+『四家の怪談』、フェスティバル/トーキョー実行委員会、2013年、2頁。

第2章 歴史とともに転生を繰り返す妖怪文化—鵺の再創造の過程を事例に

本章の目的

妖怪文化の再創造は現代に限った現象ではなく、多くの妖怪はそれぞれの時代のメディアや表現形式に応じてあたかも転生するように生きた文化として受け継がれてきた。本章では、様々な媒体に乗り換えながら再生され、現在もなお各地に伝承が残されている鵺を事例に、妖怪観の形成史と受容史について考察する。

妖怪は目には見えない存在であるが、言葉や造形を介して共有可能なテキストへ変換されることで、「妖怪存在」として認識されるようになる。鵺の場合も、その出発点は夜に鳴く鳥の鳴き声であった。それが『平家物語』をはじめとする文学の世界に登場し、そこから派生した民間伝承、謡曲や歌舞伎といった演劇の世界、絵馬や浮世絵といった美術の世界、近年ではマンガの世界にも描かれることによって、多種多様な鵺の像が生み出されてきた。その意味において、鵺は幾世代にもわたって再創造され続けてきた「作品」であると言えよう。

本章では、各々の表現媒体に応じた表象の変化に着目し、現段階の調査までに明らかにされた資料をもとに鵺のイメージが確立した経緯を辿っていく。第1節では文字として記述されてきた鵺を手掛かりに、鵺退治説話の生成と伝播の過程について明らかにする。第2節では、鵺の図像化の過程に着目し、現在の鵺のイメージがどのような経緯を経て形成されてきたのかを時系列に沿って整理する。第3節では、民間伝承における鵺を取り上げ、それぞれの地域での伝承成立の背景について文献調査および実地調査に基づき考察を行う。以上を通じて、想像の産物である鵺の歴史的背景と現代の地域社会における受容とを一つの線として結ぶことを試みる。

第4節では、今日の地域社会における事例として、1966年に静岡県伊豆長岡町（現在の伊豆の国市）で始まった「鵺ばらい祭り」を取り上げる。ここでは、歴史上の「伝説」として広く知られている鵺退治のモチーフが、温泉観光地における地域振興のためのイベントを通して再創造されている。無論、これは戦後になって新しくつくられた行事ではあるが、温泉観光地の形成を語る因子でもあることは間違いない。また、1992年には祭りの担い手が中学生に移ったことで、今では地域の「伝統」として価値づけられている。この事例から、妖怪文化の現代的活用を通じたコンテンツの生成と地域への定着の過程を明らかにすることを目指す。

第1節 鵺退治説話の生成と伝播

1-1. 歴史の中の鵺—『平家物語』に至るまで

今、辞書で「鵺」の項目を引いてみると、「①トラツグミの異称。②源頼政が紫宸殿上で射取ったという伝説上の怪獣。③転じて、正体不明の人物やあいまいな態度にいう」とある。このような語義が形成された背景には、鵺が辿ってきた歴史がある。そもそも、「ぬえ」

という言葉は古くから使われており、『古事記』の中にその記述を見ることができる。『古事記』の「八千矛神の歌」には「阿遠夜麻邇 奴延波那伎奴（あおやまにぬえはなきぬ／青山に鶴は鳴きぬ）」とあるが、ここでは鶴が夜から朝にかけて鳴くことから、夜明けが近いことを告げるものとして用いられている¹。このように、鶴は本来妖怪ではなく、夜に鳴く鳥を指していた。

鶴の鳴き声が古代の日本人にとって特別な意味を持っていたことは、『万葉集』の中で枕詞として用いられていることから導き出される。そこでは、鶴が夜中に寂しげな声で鳴くことから「うらなく」「片恋」「のどよふ」にかかる枕詞として用いられており、いわゆる「貧窮問答歌」（5-892）にも「ぬえ鳥の のどよひ居るに」という箇所がある。この他にも「ぬえどり うらなけ居れば」（1-5）、「ぬえどりの 片恋婦」（2-196）、「ぬえどりの うら泣きましつ」（10-1997）、「ぬえどりの うらなけしつつ」（17-3978）に見られる。

鶴の鳴き声に由来する聴覚的な連想から感情表現へと昇華させているという点には、文学的表現を通した自然観の表象を見出すことができる。このように、古代の日本において、鶴の鳴き声はある種の「心意現象」として人々の間に共有されていたようである。そして、その鳴き声は悲しみの感情表現だけではなく、怪異現象としても認識されるようになっていった。例えば、『徒然草』第 210 段には次のような一節がある。

「喚子鳥は春のものなり」とばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし。
ある真言書の中に、喚子鳥鳴く時、招魂の法をばおこなふ次第あり。これは鶴なり。
万葉集の長歌に、「霞立つ、長き春日の²」などつづけたり。鶴鳥も喚子鳥のことざまに通ひてきこゆ。³

ここでは、「喚子鳥」すなわち「鶴鳥」と人の死が結び付けられている。また、『吾妻鏡』の仁治元年（1240 年）の項を見ると、4 月 8 日の「子の刻に前武州（北条泰時）の御邸宅の御厩侍で鶴が鳴いた」とあり、翌 9 日には「鶴の怪異により前武州（北条泰時）の公文所で百怪祭が行われた」と記されている⁴。「百怪祭」とは百怪を鎮めるために行われる陰陽道の祭祀のことであり、ここでもやはり鶴の鳴き声が怪異と結び付けられている。

このように、怪鳥としての鶴はしばしば歴史の中に登場してきた。藤沢衛彦の『図説日本民俗学全集第四巻 民間信仰・妖怪編』（あかね書房、1960 年）に掲載された「妖怪出現年表」によれば、鶴の出現史は以下のようにまとめられる。

表 2-1 鶴出現年表

西暦	和暦	できごと
905 年	延喜 5 年	2 月 2 日、空で恠鳥（ぬえ）が鳴いたので、15 日に諸社に弊を奉った（日本紀略）。
1115 年	永久 3 年	6 月 25 日、鶴が鳴いて後鳥羽院わたる（殿暦）。 7 月、洛中に鶴あらわる（拾芥抄）。

1144 年	天養元年	6 月 18 日、鵺が鳴く（台記）。
1153 年	仁平 3 年	4 月、毎夜、鵺という化鳥、宮中にあらわれ、源頼政、帝命によって、これを退治した（平家物語）。
1212 年	建暦 2 年	8 月 7 日、西方で鵺が鳴いた（玉葉）。
1231 年	寛喜 3 年	4 月 8 日、鵺があらわる（吾妻鏡）。
1240 年	延応 2 年	4 月 8 日、前武州御亭で鵺が鳴いたので 9 日に百怪祭をおこなう（吾妻鏡）。
1333 年	元弘 3 年	7 月、紫宸殿上で鵺が鳴く（太平記）。
1416 年	応永 23 年	4 月 25 日、北野社に鵺あらわれ、宮仕が射落す。頭は猫、身は鶏、眼は大きくて不気味に光る（看聞日記）。 このころ、禁中に、しばしば鵺鳴き、頼政召されてこれを捕える（平家物語）。
1774 年	安永 3 年	4 月、京都御所の屋根に手車をひくような声で、鵺が鳴いた（閑窓自語）。

藤沢衛彦『図説日本民俗学全集第四巻 民間信仰・妖怪編』（あかね書房、1960 年）をもとに作成

鵺の鳴き声と妖怪現象とが結び付けられるようになった文脈上に『平家物語』の鵺退治説話も位置付けられる。『平家物語』には多くの異本があるが、本論では特に断りがない場合は、流布本の記述に従った。流布本には、二度に渡る鵺退治の場面が描かれているため、以下にその概要を記す⁵。なお、便宜的に年表上の時期が早い順にそれぞれ「第一説話」「第二説話」と呼ぶこととしたい。

第一説話 仁平年間（1151-1155）

近衛天皇が、夜毎に東三条の森の一角に湧出し、御殿の屋根を包む黒雲に脅かされたため、源頼政が招集され、変化退治の勅命を受けた。頼政は遠近国の猪早太を同行させて二本の弓矢を携えて紫宸殿の大床に控えた。その夜に黒雲の中の物影を目指して矢を放ったところ、頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿をし、鳴く声が鵺に似た化物が落ちてきた。

第二説話 応保年間（1161-1163）

二条天皇の在位中、宮中で鵺が鳴いて天皇の御心を悩ましたため、先例によって頼政を招集し、退治を命じた。闇夜で姿形を見定めることのできない頼政は計略をめぐらして二本の鎗矢を用いることで鵺を射抜いた。その後、頼政は伊豆の国を拝領し、自らは三位に昇叙した。

第一説話に記述されているのが、現在広く知られているところの鵺退治であり、「頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿をし、鳴く声が鵺に似た化物」が登場する。一方で、第二説話ではこうした化物は登場していないことが分かる。ただし、いずれの説話でも頼政が鵺退治に使っている道具は弓であり、武士による妖怪退治の典型的なパターンとして位

置付けられる。以下、これらを前提に論を進めていく。

1-2. 鶴退治説話の解釈―史実と創作のあいだで

「軍記物語」として語られてきた『平家物語』は、史実と創作とが交差しながら成立してきた。例えば、福田晃は『軍記物語と民間伝承』の中で「平家物語と言えどもそれが語りの一であるかぎり、この民俗的発生的パターンと無縁であるまい」と指摘している⁶。では、頼政による鶴退治は何らかの史実に基づいているのであろうか。ここで、参考すべき比較対象として『十訓抄』における鶴退治説話を引用する。

高倉院の御時、御殿の上に鶴の鳴きけるを、あしき事なりとて、(中略) 或人頼政に射させらるべきよし申しければ、さりなんとて、めされて参りにけり。(中略) 昼だにもちひさき鳥なれば得がたきを、五月の空闇深く、雨さへふりていふばかりなし。(中略) 声を尋ねて矢をはなつ。こたふるやうに覚えければ、よりて見るに、あやまたずあたりにけり。⁷

例のごとく、鶴の鳴き声が「あしき事」として解釈されているが、鶴そのものに関する記述については『平家物語』のように「頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎」といった表現は見られない。国文学では、両説話について『十訓抄』所収の説話を原型と見る立場と『平家物語』所収の説話を原型と見る立場とがある。ここには、頼政による鶴退治が何らかの史実に基づいているのか、どこかの段階で創作された物語に根差しているのかをめぐる二つの立場が示されていると言えよう。なお、赤松俊秀の説によれば、『十訓抄』の説話が「平家物語の鶴退治を史実に基づいた実話らしく思わせるために、双方の説話を整理・総合・改訂した」可能性があるとして、『平家物語』を原型と見る立場をとっている⁸。

ここで、頼政が生きた時代背景に目を向けると、当時は院政期の只中にあり、公家の時代から武家の時代へと向かう転換期にあたる。1129年に白河上皇の後を受け鳥羽上皇が院政を敷き、1141年には崇徳天皇が鳥羽上皇に譲位を強いられて新院となっている。その際に若干3歳にして即位したのが近衛天皇なのだが、1155年には17歳で崩御している。その後、後白河天皇の即位をめぐる争いから1156年に保元の乱が勃発し、これに敗れた崇徳院は讃岐に流された。なお、頼政はこの戦において後白河天皇側に加わっている。二条天皇の即位後、1159年に平治の乱が起こった際には、頼政ははじめ源義朝側に立っていたが、離反して平清盛側についた。これにより、清盛からの信頼を得て、1166年には正五位下に叙され、1178年には従三位まで昇進している。しかし、1180年に以仁王を奉じて反平氏の兵を挙げたが失敗し、宇治で敗死している⁹。こうした激動の時代を背景として語られているのが鶴退治の説話であり、那谷敏郎が指摘するように「鳥への畏敬と政権の転変への予測が、こうした怪鳥を生んだ」のかもしれない¹⁰。

頼政による一度目の鶴退治が行われたのは近衛天皇在位中の1153(仁平3)年のことだ

が、当時の頼政は必ずしも高名ではなかった。むしろ、その後の保元・平治の乱を経て、源氏と平氏の間を渡り歩いたことで、平家隆盛の最中で源氏としては異例の昇進を続けた。草森伸一は「彼（頼政）の隠忍で深慮な政治性が、つまりぬえ性というものが、（中略）長い目でみれば、この頼政の生きかたが、源氏の再興とも結びついた」と指摘し、頼政自身を鶴に重ねている¹¹。『平家物語』では「鶴退治」の功績が頼政の昇進の一因として語られており、鶴的な立場を貫くことで出世していった源頼政を象徴する物語として読み解くこともできるだろう。実際、柳田國男が『木思石語』に記しているように、頼政の母親が鶴に化けて、自らの命を犠牲に頼政の出世の機会を演出したという民間伝承も語られている¹²。このように、鶴説話は源平が入り乱れた時代に生きて、最後は敗死した頼政の象徴として、鶴退治の物語が人々の関心を集めてきた可能性は否定できない。

現段階では、頼政の鶴退治を裏付ける史実を証明する資料は皆無であり、弓の名手として知られる頼政を語るために「作者が創作した虚構」¹³と見るべきであろう。頼政による鶴退治が史実ではなく創作に基づく記述であったとしても、その後も繰り返し鶴退治説話が語られ、各地に広がっていったことは紛れもない事実である。むしろ、これを『平家物語』の文学的側面によって脚色された「物語」として解釈することによって、そこに込められたメッセージを読み取ることができる。とりわけ、鶴と頼政との類似性は、その後の謡曲にも少なからぬ影響を与えていると考えられる。

1-3. 謡曲「鶴」の成立—演劇を通じた再創造

鶴の伝承は、世阿弥による夢幻能として表現されることで新たな物語としての広がりを見せていく。『平家物語』の鶴退治説話を脚色して謡曲の「鶴」が成立しているのは明らかだが、両者には語りの主体に大きな違いがある。前者では無名の語り手が頼政の鶴退治を語っているのに対して、後者では亡霊と化した鶴が自らの死へと至る過程を語る形式をとっている。その意味において、頼政によって身を滅ぼされた鶴が、魂となった後日譚として謡曲を位置づけることもできよう。

主役を演じるシテは「鶴」、その相手方を演じるワキは「旅の僧」、狂言まわしのアイとして「芦屋の里の者」が登場する謡曲の「鶴」は、旅の僧が熊野へ参詣した後、都への帰路の途中、芦屋の里に到着し、一夜の宿を乞う場面から舞台が始まる。その後、里の者とのやりとりで夜毎に川から化物が現れるという洲崎の御堂へ泊ることになるのだが、案の定その晩に空舟に乗った舟人が現れる。はじめに、その舟人は「芦屋の灘の塩焼く海人¹⁴」と名乗るが、その後の問答から頼政に退治された鶴の亡魂であることが明らかにされる。そして、自ら鶴退治の様子を語り、旅の僧に供養されるという構成になっている。非業の死を遂げた異形の存在としての鶴とそれを退治したことをきっかけに成功を手にした源頼政との対比が描き出されている¹⁵。

ここで、謡曲「鶴」との関係から謡曲「頼政」を見てみると、そこには少なからぬ関係性を読み取ることができる。これは宇治で自刃した頼政の悲劇的末期を叙述した修羅物で

あり、その無念を表現するために目に金の入ったアヤカシ系統の面が用いられている¹⁶。両作には、無念のうちに命を落とした敗者に対する眼差しが貫かれている。いずれも、盛者必衰の時代に生きた敗者の視点から芸能として仕立てることで、見る者の関心を引いたと考えられる。あるいは、謡曲における「鶴」と「頼政」は互いに対になった演目として構想された可能性もある。

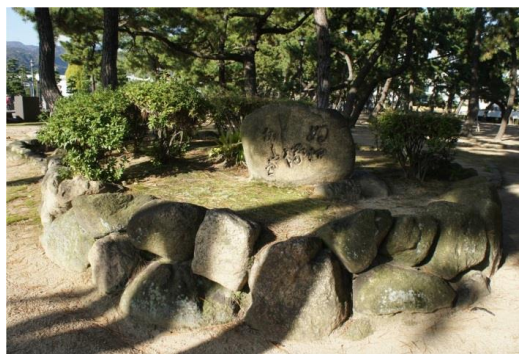


図 2-1 鶴塚（兵庫県芦屋市）

芦屋を舞台とする謡曲が成立したことによって、兵庫県芦屋市には現在も「鶴塚」が残されている。鶴の伝承があって謡曲が生まれたのか、謡曲から派生して鶴塚が生まれたのかは断定できないが、既に述べてきたように謡曲の鶴が『平家物語』を脚色した文学作品であることを踏まえれば、謡曲の誕生を先と見るのが妥当であろう。ただし、1701（元禄 14）年に刊行された『摂陽群談』の「鶴塚」の項目には「兎原郡蘆屋・住吉両河の間にあり。俗傳云、近衛院御宇仁平三年、源三位頼政公の矢に射落とされし化鳥ウツロブネに入て、西海に流す。此浦に流寄て、留る事暫あり。浦人取之、是に埋み、鶴塚と成し、側に就て祀祭の所傳たり¹⁷」とあり、比較的早い段階から民間に膾炙していたことが分かる¹⁸。現在では芦屋公園の中にひっそりと鎮座しているのだが、『摂津名所図会』によれば本来は異なる場所に存していたことが分かる。その真偽はともかく、謡曲の舞台となった芦屋に鶴塚が残されているという事実は伝承の伝播を考える上で興味深い。そこには、有名な作品と地域とを結びつけるという点において、今日で言うところの「コンテンツ」の活用の一例と見ることもできるのかもしれない。

『芦屋と古典文学』では、「頼政の勝利感と得意さの一方で、目的の挫折からくる、くやしく、にがい敗北感をかみしめるほかない鶴の立場」に「人間的哀切さ」を読み取り、芦屋川畔の「ぬえ塚」についても「単に鶴の怪奇性と「たたり」を恐れて葬塚を建てたものだという立場から早く脱皮して、世阿弥のように鶴を人間として扱い、反逆者として不慮の惨死をとげた敗者の復活をねがいながら「ぬえ塚」を再認識したい」と解釈を加えている¹⁹。このように、地域の外側でつくられた物語が逆輸入されながら、芦屋の地で鶴をめぐる民間伝承が生まれ、それらが地域に定着している状況は、伝承と創作を考察する上で示唆に富んでいる²⁰。

第2節 鶴の可視化―「怪鳥」から「怪獣」へ

2-1. 鶴の記述をめぐる

鶴退治説話が人々の関心を集めた理由の一つとして、様々な動物の要素を併せ持った合成獣としてのインパクトを挙げることができるだろう。一般的には、流布本に従って「頭

が猿、手足が虎、胴が狸、尾が蛇」の姿で認識されているが、異本によってその組み合わせにはいくつものバリエーションがあり、必ずしも表記が統一していたわけではない。『源平盛衰記』では「頭が猿、背は虎、足は狸、尾は狐²¹」、『源平闘争録』では「頭は猿、身は狸、尾は狐、足は猫、腹は蛇、鳴く声は鵄にてぞ有りける²²」とある。中野貢は、各伝本における鵄の身体的特徴について以下の通りまとめている。

表 2-2 鵄の表象の諸本比較

	頭	胴	腹	手足	尾	鳴き声	
流布本	猿	狸		虎	蛇	鵄に似る	怪獣性がある
十訓抄	ちいさき鳥					鵄	怪獣性はない
百二十句本	鵄といふ怪鳥					鵄に似る	怪獣性はない
源平闘争録	猿	狸	蛇	猫	狐	鵄	怪獣性がある
屋代本	鵄と云鳥					鵄	怪獣性はない
長門本	怪鳥						怪獣性はない
源平盛衰記	猿	狸・虎		狸	狐	鵄	怪獣性がある

※中野貢「源三位頼政《鵄退治》と郎従・猪早太考—三ケ日町の伝説及び伊豆長岡鵄ばらい祭に寄せて—」

現在広く知られているものだけではなく、多様な組み合わせが存在することが分かるが、いずれも複数の動物を組み合わせることで正体不明の化け物であることがいっそう強調されている。これについて、阿部正路は「四神の妖怪化したもの²³」としているが、白虎と玄武を除いてその対応は必ずしも明確ではない。また、那谷敏郎は鵄の構成要素について「すべてが妖異をもたらす動物たち」であることに注目している²⁴。頼政による鵄退治の場면을聴衆に対して視覚的に印象付けるために、正体不明の妖怪現象に対して怪異性を帯びた動物を寄せ集め、架空の怪物を創作したとも考えられる。無論、平家を「語る」上で、聴衆の関心を引くために表現が誇張されていった可能性も大いにある。

一方で、「猿」「虎」「蛇」という動物に着目し、その組み合わせから意味を読み取ろうとした試みもある。江戸時代後期に刊行された志賀忍による『理斎随筆』は、干支との関係に着目しながら鵄について考察を加えている。そこでは、頼政が弓矢の名人であったことから、「屋越の墓目」と関連付けて鵄説話が次のように解釈されている。

屋越の墓目といへるは、天地四方を射るなり。また四隅をも射るなり。四隅の形様を表して、丑トラ未サル辰ミ戌イ。扱この亥のかたちなき故に、猪の早太といへる郎党の名を入るものなるべしと思はる。²⁵

ここでは、「申」「寅」「巳」を干支と見なし、それらが示す方角と射芸の名人とされていた頼政の「弓の徳」とを結びつけた逸話であると考察している。山田奨治は、墓目の矢に用

いられる鵺の起源は中国大陆の騎馬民族に認めることができるが、「鵺矢に妖魔払いの意味を持たせたのは、鳴弦と同じく日本人の独創であろう」と指摘する²⁶。また、山田は『平家物語』の諸本を比較した上で、鳥としての「鵺」を退治する物語のバリエーションの中では、「多くの場合、墓目は鳥を傷付けずに射倒す、もしくは音で驚かす用途に用いられたに過ぎず、標的を射切ったのは、小鵺ないしは尖り矢であった」と分析している²⁷。墓目という行為そのものは鵺の肉体を退治したわけではなく、むしろ儀式的に用いられていたと考えることができる。

その意味において、鵺を構成する動物を干支と関連付ける観点は、鵺という妖魔が生み出された背景を考える上で含蓄のある指摘である。さらに、鵺にとどめをさした郎党が「猪早太」であることを鑑みれば、なおさら「干支説」は説得力を持つてくる。これに加えて、「申」「寅」「巳」がそれぞれ時刻を示していると思われ、帝の御悩が「申の刻」に始まり、「寅の刻」に激しくなり、「巳の刻」まで続いたとする解釈も紹介されている。方角や時刻など当時の生活文化と密接に関わりあっている干支は、純粋な動物であることを超えて、きわめて多くの情報を語っている。しかしながら、既述したように狸や狐など干支に登場しない動物も含まれていることを考慮すれば、この説もまた想像の域を脱し得ない。

今日では、鵺を構成する動物の組み合わせは「猿」「虎」「狸」「蛇」でほぼ定型化されているが、この背景には鵺退治の図像のバイアスがかかっていることが想定される。実際、『平家物語』における具体的かつ視覚的な記述に従って度々図像化されたことによって、鵺は聴覚的な怪異から視覚的な妖怪存在へとその姿を変えてきた。しかしながら、既に述べてきた通り、「鵺」そのものは合成獣の姿をした異形の存在ではなく、鳥として記述されていたため、その初期の段階では必ずしも上記の組み合わせで描かれていたわけではなかった。例えば、江戸時代初期の屏風絵《大森彦七屏風》では、怪鳥としての「鵺」が図像化されている。この屏風絵は制作年代が不明はあるが、必ずしも鵺の図像がはじめから統一されていたわけではなかったことを証する資料と言える。なお、この図像は後に鳥山石燕が『今昔画図続百鬼』において「鵺」と対をなして描かれている「以津真天」との類似性も見られる。石燕の場合は、『太平記』において「いつまでいつまで」と鳴き、広有によって射落とされた怪鳥に「以津真天」という名前を与え、図像化しているのだが、そのイメージの源泉には《大森彦七図屏風》に描かれたような怪鳥の表象があるのかもしれない。

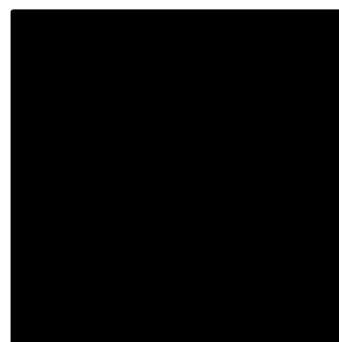


図 2-2 《大森彦七屏風》(部分)

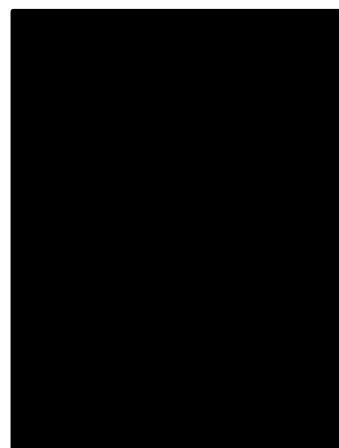


図 2-3 鳥山石燕『今昔画図続百鬼』より「以津真天」

2-2. 絵馬に描かれた鵺—造形を通した再創造

鵺退治の図像が成立する過程では、絵馬が重要な役割を果たしていたと考えられる。絵馬には小絵馬と大絵馬の二種類があるが、そこには大きさの違いだけではなく、少なからぬ機能の違いもあると考えられている。例えば、石子順造は小絵馬が民間信仰に根差しているのに対して、大絵馬は「絵のできぐあいに重点がおかれ、有名な画家の作品として評価された」と指摘している²⁸。実際、大絵馬には「大江山の鬼退治」や「八岐大蛇退治」など、神話や伝説に着想を得た画題も少なくない。

鵺退治もその多くが大絵馬として描かれており、中でも1635（寛永12）年に清水寺に奉納されたものは「猿」「虎」「蛇」型の鵺を描いた絵馬の初期の作例として認められる²⁹。猪早太と思われる従者が押さえ込む鵺の首筋に一本の矢が突き刺さり、その傍らで目を見開いて立っている人物の手にもう一本の矢が描かれていることから、この場面が『平家物語』における仁平年間の鵺退治（第一説話）を図像化したものであることは明らかである。なお、

『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』では、「彼の変化の物をば清水寺の岡に埋められにけり」とあり、清水寺に鵺退治の絵馬が奉納されたのもこうした物語的な背景を受けてのことなのかもしれない。

清水寺の作例から、遅くともこの時期には鵺退治の図像の一つの型が生み出されていたことが分かる。このことは、同時代につくられた根津美術館所蔵の「鵺退治図小柄」からも導き出される視点である。清水寺の絵馬が制作された翌年の制作されたこの小柄は、資料の大きさこそ異なるものの、鵺の取り押さえ方や従者の手の配置など、その構図には類似する部分が多い。無論、清水寺の絵馬がその後の鵺退治の図像の原型であると断定することはできないが、少なくとも17世紀前半にはある程度の図像の形式が仕上がっており、これがその後の鵺退治の絵馬に影響を与えている可能性は高い。

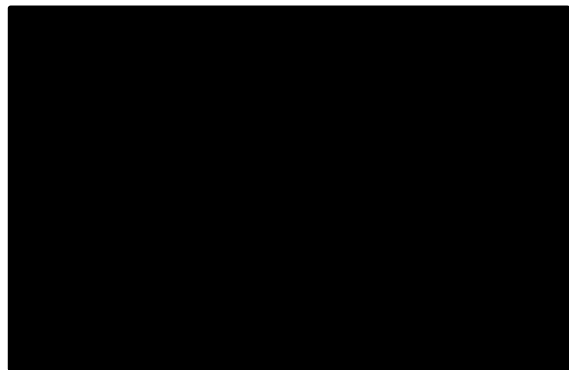


図 2-4 海北友雪「頼政怪獣退治図」1635（寛永12）年、清水寺蔵

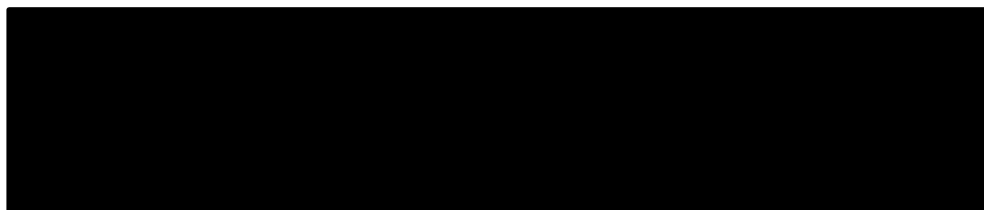


図 2-5 後藤頭乗「鵺退治図小柄」寛永13（1636）年、根津美術館蔵

清水寺の絵馬は海北友松を祖とする流派に属する海北友雪（1598-1677）によって描かれたものであり、土居次義は「江戸時代初期の武者絵の絵馬としては代表作のひとつにかぞえるべきものであろう」と評している³⁰。こうした評価からも窺えるように、清水寺の絵馬は少なからぬ影響力を持っていた。1716（正徳 6）年に刊行された『花洛繪馬評判』（三巻三冊）にも掲載されている。いわゆる「京都本」として知られる『花洛繪馬評判』は、京都の神社仏閣にある絵馬を描き写したものである³¹。また、1821（文政 4）年に発刊された『扁額軌範』（全二編四卷五冊、付録一冊）にも同図版が掲載されており、清水寺の鶴退治の絵馬は、大絵馬の代表的な作例として、現地に訪れなくとも目にする機会が多かったと言えよう³²。

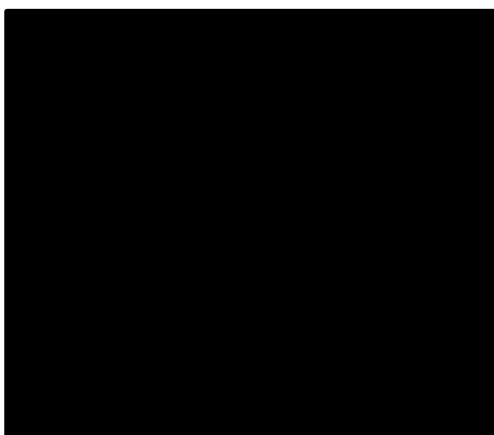


図 2-6 『花洛繪馬評判』正徳 6（1716）年

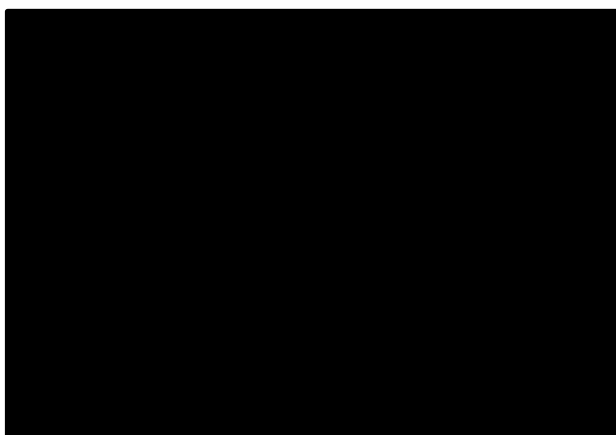


図 2-7 『扁額軌範』二編卷之上、文政 4（1821）年

京都市内の北野天満宮にも鶴退治を描いた絵馬が奉納されており、すっかり摩耗してはいるものの、清水寺と同様の構図を持っていることが判別できる。もちろん、鶴退治を描いた絵馬は京都に限らず各地にその作例が残されている（資料 2-1 を参照）。例えば、仙台市の愛宕神社には仙台藩五代藩主の伊達吉村によって奉納された絵馬（図 2-10）が残されているのだが、背景に松明を持った人物が描かれているものの、全体の構図は清水寺のものと類似している。時の藩主によって「鶴退治」の絵馬が奉納されているという点に着目すれば、この図像が特別な意味を持っていたことが想像される。三重県鈴鹿市の江島若宮八幡神社に奉納された絵馬も同様である。

絵馬は本来信仰の対象であるため、鶴が描かれた絵馬もまた「厄除け」や「立身出世」などの願いが込められていたことが想像される。例えば、群馬県高崎市の妙見社に奉納された鶴の絵馬について、鈴木繁は『理斎随筆』を引用しながら、方位除けを象徴する鶴と「諸星方位をつかさどる菩薩」を結びつけ、「妙見さまにふさわしい奉納物」とであると結んでいる³³。鶴の絵馬が各地に奉納されているという事実は、『平家物語』から派生した説話が視覚的に各地に伝播していたことを物語っている。

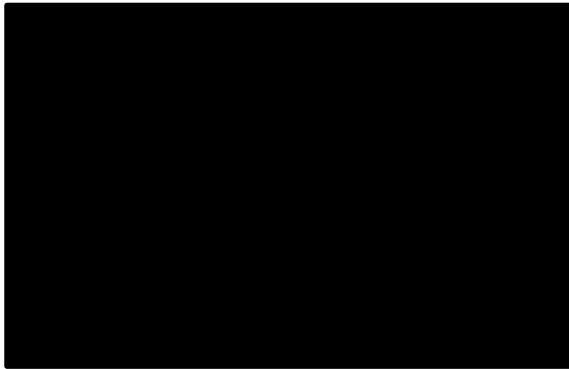


図 2-8 「源頼政鶴退治」1700 年 北野天満宮（京都府京都市）蔵

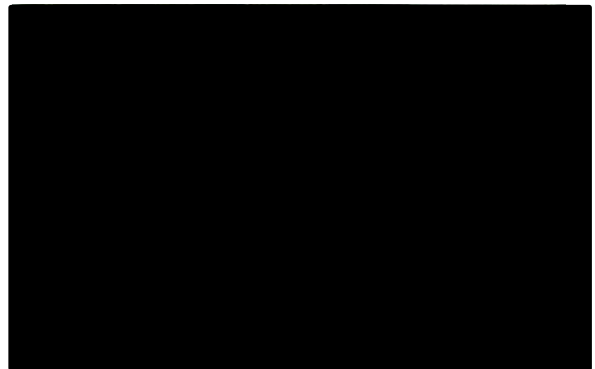


図 2-10 「源頼政鶴退治図絵馬」1724 (享保 9) 年、愛宕神社（宮城県仙台市）蔵

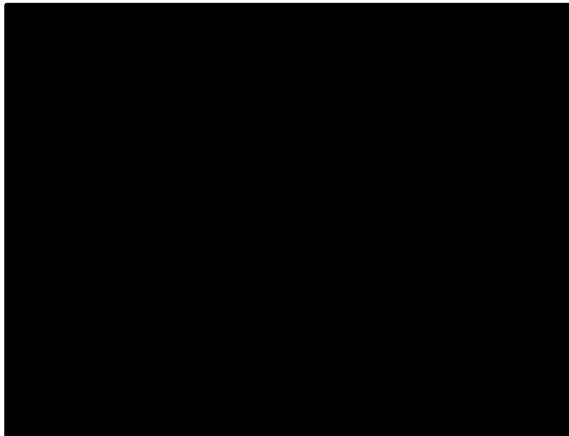


図 2-9 「鶴退治図」正徳甲午（1714）年、愛宕神社（岩手県江刺市）蔵

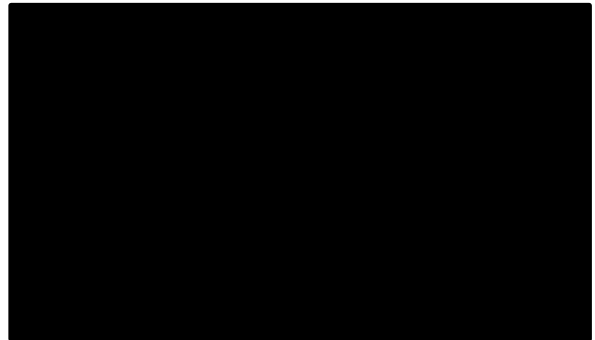


図 2-11 「鶴退治図」1733 (享保 18) 年、江島若宮八幡神社（三重県鈴鹿市）蔵

清水寺と並んで鶴退治を描いた絵馬の代表的な作例として名高いのが、浅草寺に奉納された高嵩谷の筆による作例である。1787（天明 7）年に奉納されたこの絵馬では、清水寺と同様に、鶴を退治する瞬間が描かれている。明石染人はこの作例について「端嚴、繊細な畫風を示し天明、享和の彼の畫境を示してゐる」と評している³⁴。以下、1941 年 6 月に発行された『演藝畫報』には以下のような逸話が掲載されている。

浅草の觀音堂には藤原^{マフ}崇谷の畫いた鶴退治の額がありますが、あれが掲げられると忽ち市中の大評判になつた。所がある日一人の武士が仰ぎ見て、「これでは怪鳥は愚か、豆腐も切れん」と云つたのを聞いて、崇谷は苦心の額を引下し、ズタ―に切裂いた。其後幾月、再び畫いたのが現在の物で、前のと違ふ所は早太が小刀を逆手に振上げて居たのが、今のは喉元を目がけて只一突に突かうとして居るだけの相違であります。

これらが民間伝承として語られていたかどうかは確認できないが、清水寺と浅草寺の絵馬を比較する上では興味深い逸話である。確かに、清水寺の鶴退治の絵馬では、早太がその小刀を逆手に振り上げているのに対して、浅草寺の場合は喉元に突き刺している。逸話に従えば、高嵩谷は、はじめ清水寺のスタイルに基づく絵馬を描きながらも、その後表現を改めたということになる。無論、嵩谷の描いた劇的な描写を誇張するための作り話に過ぎないのかもしれないが、こうした伝承そのものが鶴退治の図像を分析する一つの観点になるであろう。

1808（文化 5）年に刊行された芍薬亭長根による『國字鶴物語』では、従来の鶴伝説が脚色され、新たな物語へと再生されている。ここでは既述した『理斎随筆』にも掲載されている「東宮の御悩、申の刻にはじまりて、寅の刻に甚しく、巳の刻に終ると云々³⁵」といった解釈を基盤に据えながら、「寅の刻に生れたるを長節竹。巳の刻に生れしを浅茅。申の刻に生れしを小枝と乳名呼びたる」という設定がなされている³⁶。その中で鶴の形状が画工によって意図的に造作されてきたことが分析されており、仁平年間に出現した鶴を「鶴に非鶴」とし、描かれた鶴の姿について次のように記している。

後代画工の描ところ。猿虎蛇に拠て。熊狐狸をいふものなし。頭の猿のみいによく似たればこそ諸説たがわざりけれ。其余の不肖おして知べし。中にも尾の蛇に似たるといへるは。蛇尾に似たるなるべきを。やがて蛇頭に画なせるおぼつかなし。さらば尾狐に似たりとて尾頭に狐の面を画くべき事かは。画工の造意誣たりとやいはん。³⁷

ここでは、描かれた鶴について考察がなされており、特に鶴の尾の描かれ方に関心を寄せている。「尾は蛇」であるという『平家物語』の記述に対して、後世の画工がどのように解釈し、描いてきたのかという点に注目すると、確かに鶴の尾を「蛇の尾」として描くのではなく、「蛇の頭」として描いていることが分かる。ここには、視覚的な面白さを追求し

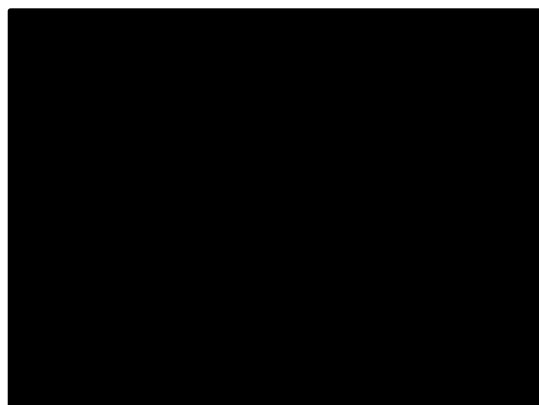


図 2-12 高嵩谷「鶴退治」1787（天明 7）年、浅草寺（東京都台東区）蔵

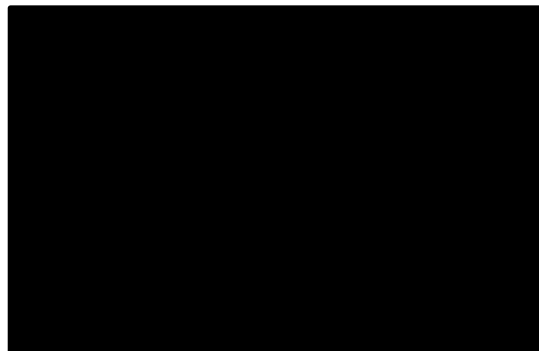


図 2-13 芍薬亭長根（作）、葛飾北斎（画）『國文字鶴物語』1808（文化 5）年

た「画工の造意」が象徴的にあらわれている。この記述に呼応するように、同書の挿絵を担当した葛飾北斎は「蛇の尾」を持つ鵠を描いている³⁸。その描写を見ると、鵠の首筋に小刀が突きつけられていることから、清水寺の系譜ではなく、浅草寺の系譜に位置していることが分かる。発行年は浅草寺の絵馬の制作以降であることから、地理的な関係も鑑みて、北斎が浅草寺の絵馬を参考にした可能性は否定できない。

近代以降の興味深い作例として、『東京パック』に掲載された風刺画を挙げることができる。そこでは、浅草寺の鵠退治の絵馬をもとに、虎の柄を用いて文字が構成されており、退治されようとする鵠には「同志会」、黒雲に乗って傍観する鵠には「政友会」とある。このことから、この絵が大正政変を表象したものであることが分かる。既に述べてきたように、鵠退治説話の生成に当時の政変が深く関わっていたことを踏まえれば、そうした背景も含めたパロディになっているのかもしれない。同様に、政治風刺の言説において「鵠」という用語が使用される例も散見される。このように、本来の物語とは別の文脈においても「鵠退治」というテーマとそれが内包する物語が広く大衆に共有されている背景を読み取ることができるだろう。これもまた、妖怪文化の活用の一形態である。

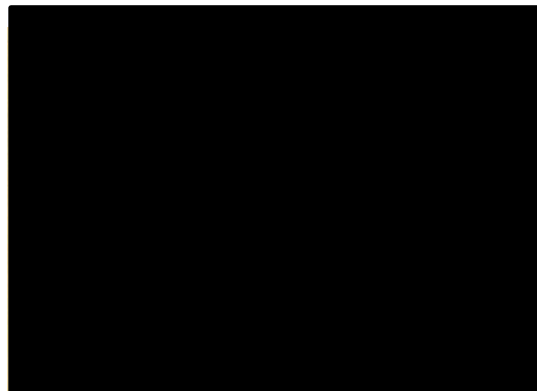


図 2-14 『東京パック』9 巻 6 号、東京パック社、1913 年 2 月発行、国立国会図書館蔵

2-3. 鵠の図像の展開—表現媒体の多様化

1686（貞享 3）年に発行された山岡元隣の『古今百物語評判』は、古今の不思議な話について当代の知識人の立場から註釈を加えた随筆なのだが、その中に「鵠の事」と題した項目があり、「深山幽谷に、すめる化鳥」として鵠を紹介している。そこでは、鵠をはじめとする妖怪が墓目の音を恐れる理由として、弓矢が古来の製法をとどめているためと解釈を加えている³⁹。そこに付された挿絵には御殿の上空で黒雲に乗る鵠が描かれており、その下で矢をつがえている人物が配されている。既に見てきたような絵馬に描かれている構図とは異なり、射落とされる直前の鵠を描くことで、弓矢によって退治されたことが強調されていると言えよう。しかし、頼政と思われる人物が数本の矢を背負っている点には『平家物語』の記述との齟齬が見られる。

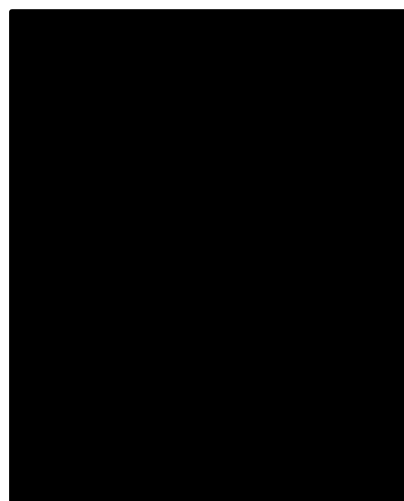


図 2-15 『古今百物語評判』巻四、貞享 3（1686）年 6 月

1779（安永 8）年に刊行された鳥山石燕の『今昔画図続

百鬼』にも「鵺」が描かれている。「深山にすめる化鳥なり」という説明文には『古今百物語評判』との関連が認められる。実際、石燕の『百鬼夜行』シリーズの中には『古今百物語評判』を情報源とするものもあるため、「鵺」の項目を立てる上でも同書を参考にした可能性は高い。しかしながら、図像化にあたっては石燕の絵師としての関心が発揮され、妖怪としての鵺の存在に焦点が当てられている。そのため、鵺を仕留める人物など物語を象徴する要素は省略されており、建物の屋根を思わせる構造物が残されるのみである。ここには、あたかも妖怪図鑑を見るように、鵺そのものに対する関心があると思われる。

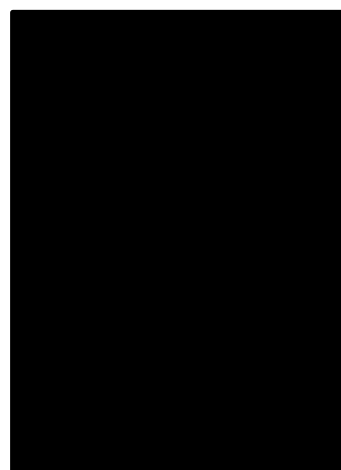


図 2-16 鳥山石燕『今昔画図続百鬼』（1779 年）より「鵺」

度重なる図像化を経て、鵺はもはや「怪鳥」としてではなく「怪獣」として認識されるようになっていった。既に江戸時代には「頭が猿、胴体が狸、手足が虎、尻尾が蛇」というイメージが定着していた。その結果、鳥としての側面は薄くなり、1923 年に発刊された江馬務の『日本妖怪変化史』でも獣の妖怪として分類されている⁴⁰。

近代以降も、鵺はその表現媒体を変えながら様々に表象されていった。明治時代には、歌舞伎の題材として鵺退治の演目が生み出された。『歌舞伎名作事典』によれば、「鵺退治」の演目は福地桜痴の作により、1899（明治 32）年に歌舞伎座で封切られた舞台であり、九代目市川団十郎が源頼政を、五代目尾上菊五郎が猪早太を演じた⁴¹。幕末から明治にかけては、能で演じられていた曲目の歌舞伎化が積極的になされていたが、「鵺退治」もそうした流れの中に位置づけることができる。『新撰長唄全集』にその内容が掲載されているので、以下に引用する。

懸巻も、あやに畏し仁平の、帝御在位まします頃、夜な夜な御惱頻りなり 御惱は丑三ツ小夜更けて、黒雲ひとむら立來り、大内守護の頼政は、勅錠うけて伺候なし、尖矢取つて打つかひ、へうと放てば過たず、得たりや應と矢叫びし、落る所を猪早太、すかさず寄て押へしは、勇ましかりける次第なり 痛手は負へど化性の物、怒りをなしてかけ廻り、飛鳥の如くに身を外し、寄らば裂かんと齒爪をならし、猛り狂ふぞすさまじき、大力無雙の猪早太、ものものしやと引組んで、弱る所を取つて押へ、一刀二タ刀、九ノ刀ぞ刺したりける 應と答へて司の下部、松明ふり照らし、所體いかにと馳來れば 呼はる聲に人々は、恐れながらに立寄つて 桑の弓よもぎの矢、アラ有難や有難や、イザや我等もけいやうが射術を傳へん 弓張月の優しくも、雲の上まで名を上る、弓矢の家や武士の、八十氏川の流れまで、水かみ清き月の弓、治る御代の時とかや、弓矢八幡大菩薩、千代に八千代の岩清水、流れの末こそ久しけれ⁴²

この長唄を見る限り、当時の「鶴退治」の演目は、頼政の射術に最大の関心事が置かれていることが分かる。一方で、1926（大正 15）年 2 月に本郷座で上演された「顔揃大歌舞伎」の序章を飾った大薩摩連中による「鶴退治」では、鶴退治に成功した頼政が、菖蒲御前と結ばれる場面までを描いている。1926 年 3 月発行の『演藝畫報』に掲載された舞台写真を見ると、演者が鶴の着ぐるみを身に付けている。能による鶴の表現が抽象化された面によるものだったのに対して、歌舞伎では具体的なイメージを伴った鶴退治が演じられている⁴³。

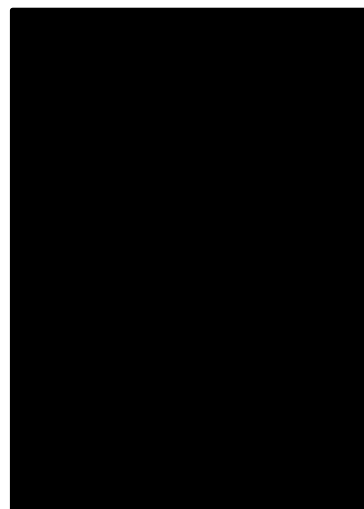


図 2-17 「鶴退治」舞台写真、『演藝畫報』第 20 巻第 3 号、1926 年 3 月、演藝畫報社

鶴退治の演目は、その後も各地で開催されており、1935（昭和 10）年には大阪市中座の新春企画として、同じく大薩摩連中による「鶴退治」が演じられている。その角書において「当る干支の亥年に絵馬の姿をその儘に」と記されている⁴⁴。ここで、歌舞伎における「鶴退治」が、「絵馬」

に着想を得ている点は、当時の民衆の間における受容を考える上で興味深い。1940（昭和 15）年には年の瀬迫る 12 月に京都市の南座において同じく大薩摩連中による「鶴退治」が演じられている。「武勇日本の古代色を独特の歌舞伎様式に映し典雅壮麗の美をつくす」として演じられたこの演目は、皇紀二千六百年奉祝芸能祭として位置付けられている⁴⁵。

大正期には児童雑誌においても鶴退治の物語が掲載されていた事例を見ることができる。例えば、1915（大正 4）年に発行された『幼年世界』では、酒吞童子を退治した源頼光の子孫であるという点を強調して、頼政による鶴退治を取り上げ、立身出世の物語として脚色されている。また、その文末には以下のような付則が記されている。

口繪にあるお猿の顔は世間で云ふ「猿、虎、蛇」から思ひついて、わざとあゝかいたので、ほんとうは鶴と云ふ鳥だとも云ひます。⁴⁶

そもそも、日本には合成獣型の妖怪が少ないため、視覚的なインパクトのある鶴は怪獣ブームなどを背景に 1960 年代以降に出版された妖怪図鑑の常連となっていた。1966 年に発行された『怪獣大図鑑』に選ばれていることから、鶴が怪獣として認識されていることを窺える⁴⁷。また、1967 年 10 月 8 日発行の『週刊少年マガジン』では、「火炎をはき、黒煙をふく」といった具合に本来の文脈とは関係のない怪獣性も付与されている⁴⁸。

手塚治虫の『どろろ』では、その最後が「ぬえの章」で締めくくられている。『どろろ』の場合、魔神の呪いによって身体の 48 か所を失った百鬼丸が、妖怪を退治する度に身体の一部を取り戻していくという設定であるため、「ぬえ」もまたそうした妖怪の一つとして登場する。この作品における妖怪の多くは、民間伝承に根差したものではなく手塚の創作に

よるものがほとんどなのだが、その中でも「ぬえ」は実在の妖怪をモチーフにしている点においても特徴的である。1976年に秋田書店が発行した文庫本の表紙には、柳樗二によるカバーイラストが描かれている。また、花輪和一の『鵺』は、従来の合成獣型のイメージとは異なる解釈によって「鵺」を描き出している。敗者の視点から描き出しているという点において、謡曲の『鵺』に通じるところがある。

このように、戦後の大衆文化においても再生され続けてきた鵺であるが、改めてその名前が人々に知れ渡ったのは、1981年に公開された横溝正史原作の映画『悪霊島』のキャッチコピーとして「鵺の鳴く夜は恐ろしい」が用いられたことによるところが大きい。無論、ここでは怪獣としての鵺が出現するわけではなく、むしろ鳴き声だけの存在としての原点に回帰している。その後も、真倉翔原作、岡野剛作画による『地獄先生ぬ〜べ〜』では主人公の霊能力教師に対して「鵺野鳴介」という名前が付けられたり、椎橋寛の『ぬらりひょんの孫』では京妖怪の大玉として「鵺⁴⁹」が登場したりと、近年の妖怪マンガ中에서도度々その名前を見ることができる。

このように、妖怪の名前としての鵺の影響力は決して小さなものではなく、伝承の場を時代に応じて変化させながら再生され続けてきたという点に、鵺という妖怪観の形成と継承の経緯を見ることができる。

第3節 鵺説話の拡散—民間伝承としての定着

3-1. 民間伝承における鵺

文学作品上の存在であった鵺だが、『平家物語』や謡曲の伝播に伴い各地で民間伝承として語られるようになっていった。鵺説話の伝播を考える上で、頼政にまつわる伝承についても言及しておきたい。柳田國男は、『郷土研究』第1巻第9号に掲載した「頼政の墓」の中で頼政にまつわる伝承を並べて紹介している。

その中で最初に取り上げているのが、下総古賀（現在の茨城県古河市）に存在していた「頼政廓」である。古賀の頼政伝承は、家来の下河邊藤三郎行吉が頼政の首を笈に入れてこの地まで負ってきたところ、突然笈が重くなったためにその場で祀ったというものである。柳田は、この伝承について「ふとした事が絲口となつて、『さうだらう』『さうに違無い』から『さうだ』と極まり、終に記念碑が立つ」事例の一つと見なしている。ただし、「江戸に近く且つ官道の往來に接して居た爲に、學者有力者が寄つてたかつて動かぬ者にしてしまつた」と推論している⁵⁰。同じく茨城県稲敷郡竜ヶ崎町にも「頼政塚」があり、ここはかつて下河邊の領地であったとされる。

この他にも、頼政塚や頼政の墓と呼ばれる場所は下総印旛郡船穂村結縁寺（現在の千葉県印西市）、丹波桑田郡矢代荘、美濃山縣郡蓮華院（現在の岐阜県山県市）にも存在する。柳田は、「此人は事變の當時から奥州に立退いたとも沙汰せられた人であるから其筈でもあるが、曾て頼政が住んだと云ふ地が弘く全國に分布して居る⁵¹」として、栃木県那須塩原市の源三穴あるいは源三位穴⁵²、会津郡福永の頼政の岩城、讃岐仲多度郡四箇村三井田中（現

在の香川県仲多度郡)の頼政の屋敷跡などを挙げている。また、伊豫上浮穴郡久万山(現在の愛媛県上浮穴郡久万高原町)の麻生ヶ池には池大明神と崇められた大蛇が住んでいたのだが、その大蛇がもとは頼政の母であったとする伝承がある。

各地に頼政ゆかりの地や塚や墓が所在していることについて、柳田は頼政が「身の成る果」の誠に気の毒な人であったがために、「前代の思想に従へば御霊として祀るのに極めて似つかはしい人である」と推論している⁵³。しかし、それ以上に柳田の想像力を喚起させたのは、頼政とヨリマシとの関係である。ヨリマシとは「童子や成人男女など人に一時的に神霊などを憑依させ、その間に、人びとに神意を伝えたり表意するなど、一定の宗教的役割を果たす人物」のことである⁵⁴。そのヨリマシが降霊する際の章句に「よりまさは早寄りませやさらは木のはらの山にさはりくまなく」(風俗問状答)というものが伝えられているという。柳田説によれば、「若し此類の降神曲が假に各地に行はれて居たものとすれば巫女に託する神を頼政と誤断するに殊に容易であつたらう」として、「頼政塚はヨリマシの神を祀った場處に過ぎぬ」と指摘している⁵⁵。

例えば、横田傳松の「伊予の伝説」には、鶴をめぐる次のような伝承が記されている。

伊豫の人浮穴四朗爲世の孫、寺町加賀守宗綱は京都に於て任官し、其女が源仲政の妻となり頼政を生んだのである頼政の母は平家の榮華を見るに忍びず、縁故の地である伊豫上浮穴郡中津村黒藤川の二ツ野に幽居したのである。常に源氏の武運を祈り、此處に生じた竹を伐り矢を作つて頼政に送つた。其後母の病ひが篤かつりし時、近所の遊ぶが池に、頭は猿、尾は蛇に似た鶴と稱する怪獣が晨旦に來て栖み夜は飛び去つた。偶々京都の紫宸殿の上でその怪獣が夜の三更に鳴いた、頼政は帝の召に應じ仁平三年四月七日の夜、母の送つた矢を以て鶴を射落した。其夜母も他界したそれから怪獣も來なくなつたと。一説には此の池のほとりで鶴は生れたと、豫陽郡郷俚諺集にはある。頼政は退治した鶴を斬つて攝津の河尻へ流したが、四國に漂着して祟りをなしたとか、其頭は讃岐に着き猿神、尾は伊豫に着いて蛇神となり。手足等は阿波、土佐に着いて犬神といふ奇病に禍ひされるやうになつたと云ふことだ。⁵⁶

頼政の母親が鶴に化けて自ら頼政に退治されたという口碑は、柳田國男も記しているが、これもまた、鶴伝承の伝播の一例と見なすことができる。また、退治された鶴が川に流された場面までは、『平家物語』の記述に倣っているのだが、バラバラにされたその死骸が瀬戸内海を渡って四国まで流れ着いたという伝承は、合成獣としての鶴の視覚的イメージから発想されたものであろうか。鶴の体が方々に飛び散つたとする伝承は他の地域でも伝えられている。例えば、静岡県引佐郡鎮玉村には鶴に関わる地名譚が伝えられている。『静岡県伝説昔話集』によれば、「昔、源三位頼政が鶴といふ怪物を退治した時、矢が當つて鶴の體は三つに飛び散り、頭が落ちた處を鶴代と云ひ、尾の落ちた處が尾奈となり、胴の落ちた處が胴先となつた」とある⁵⁷。このように、鶴の部位が各地に分散していったという伝承

が地名の由来とともに語られる例もある。

鶴の場合、実際に鶴が出現して何かをなしたという伝承よりも、地名譚や伝説として語られている場合が多い。文学作品上で創作された存在が繰り返し再生されながら虚構と現実の境界を越えて民間伝承へと帰着していく過程は、一般的な妖怪伝承の生成とは異なるアプローチをとっている。以下、現代の地域社会における鶴伝承の形成と今日における受容について考察を進めていく。

図 2-18 鶴伝承分布図



3-2. 京都府京都市一物語の舞台として

京都市は『平家物語』における鶴退治の舞台になっていることから、鶴にまつわる多くの伝承が語られてきた。例えば、戦前に発行された絵葉書の中に、京都御所の紫宸殿の写真とともに鶴退治の場面が描かれているものがある。無論、現在の京都御所の位置はかつてとは異なるわけだが、歴史上有名な「伝説」の舞台として認識されていたことを窺わせる資料である。



図 2-19 戦前の京都の絵葉書

また、伝説上の存在である鶴は民間伝承とても語られるようになっていく。1665(寛文 5)年に浅井了意によって著された京都の観光案内書『京雀』巻第五では、「西押小路町」の項目の中で「此町の西は烏丸通にて行當也世にいふ此理は鶴のかよひける道にてふさがれしといへりそれにはあらず昔烏丸の西は鴨居殿東三條院閑院堀河院とて南北二町つゝの家立續て侍へりし跡なる故に町屋になりても尚さがりたるものなり」と記されている⁵⁸。1685(貞享 2)年に発行された京都の名所案内記『京羽二重』では、巻二「閑院古跡」の項目の中で「近衛院御宇東三條林頭より鶴禁裏に災をなし此閑院殿築山の大石に休しとなん其ぬえの通道なればとて押小路は烏丸を限りに西の方ふさがりたと云此俗説信じがたし空飛鳥の押小路ふさがればとて留らんや」と記されている⁵⁹。実際、江戸時代に描かれた京都の地図を見てみると、押小路は現在の烏丸通で行き止まりになっている⁶⁰。『京都坊目誌』には宝永 5 年 3 月の大火後に油小路まで道が開通したとあり、それ以前は烏丸以西の道がないことは事実であった⁶¹。こうした現実の環境を地域にゆかりのある鶴説話と関連付けることで「鶴の通り道」をめぐる俗説が生じていったと考えられる。

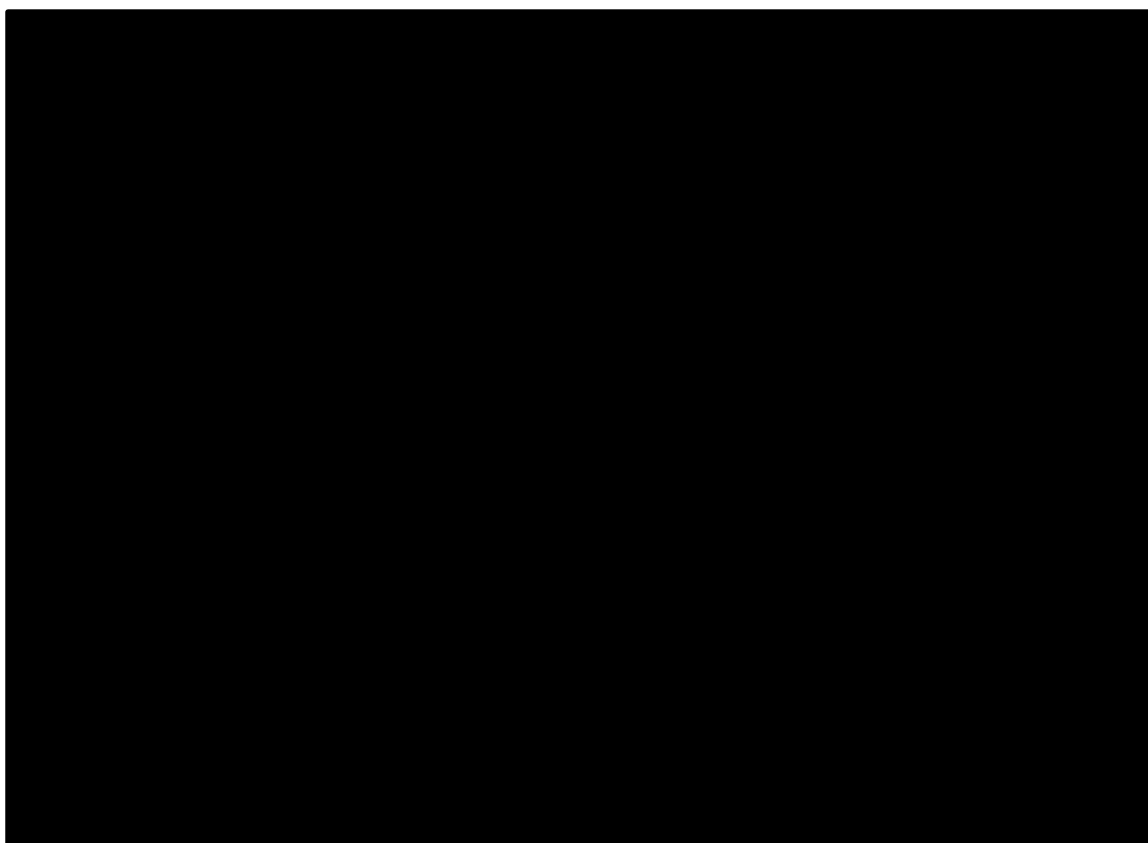


図 2-20 都記(寛永平安町古図)に筆者が加筆

現在も、京都市内には鶴との関わりを示す場所が点在している。神明神社には頼政によって奉じられたと伝えられる矢が残されており、9 月に開催される祭礼の際に一般公開され

ている。同地は鶴が住んでいたとされる東三條の近くにあり、地理的な関係性もある。また、境内には 1974 年に奉納された絵馬が掲げられている。

また、二条城の近くにある公園には血の付いた鏃を洗ったとされる鶴池が整備されている。鶴池の中央には 1700 (元禄 13) 年に建立された「鶴池碑」が立っているが、現在は摩耗して読むことができない。その近くに 1936 年 3 月に建立されたもう一つの石碑があり、それによって原碑の碑文の概要を知ることができる。



図 2-21 神明神社に奉納された矢じり

筆者（松崎正祐）の主君である丹波篠山藩主の松平紀伊守が京都に赴任していた際、家臣の太田毎資も京都に滞在し、その時に住んでいた官舎の庭に鶴池と呼ばれる池があった。毎資は太田道灌の 7 世の孫であり、源頼政の末裔にあたるため、これを知り大いに喜ぶとともに、この池の伝承が消失することを心配し、石碑を建てた⁶²

江戸時代の京都では鶴にまつわる様々な民間伝承が語られていたが、既述した京都の地誌を読んでも、この「鶴池」についてはほとんど語られていない。この理由について、鶴池碑は「徳川時代のもと、京都所司代屋敷の敷地にあったため」と記している。その後、明治時代に入り、同地には監獄が建てられ、1927 年に山科に移転するまで、鶴池は監獄の中に存在し続けてきた。1934 年に二条公園が整備された頃には碑文がほとんど読



図 2-22 現在の鶴池の様子

めなくなっていたため、元看守長の青山咸懐が在職中に書いてあった手記と碑文とを照らし合わせることで、1936 年に鶴池碑が再建されるに至った。その後も、鶴池は二条公園の一角で子どもたちの遊び場として親しまれてきた。2005 年には整備されて現在の形になり、池のほとりには鶴の伝説を伝える案内板が設置された。現在の鶴池は、地下水をポンプでくみ上げているのだが、月に二回程度地元のボランティアによる清掃が行われている。

本来は文学的存在であったはずの鶴の「伝説」が、時代を経て口碑として継承されていく中で、あたかも「民間伝承」のように共有されてきたという点に、鶴を考察する一つの視点が示されている。

3-3. 大阪府都島区一史跡鶴塚保存会の結成

頼政に退治され、淀川に流された鶴が漂着したとされる場所には鶴塚にまつわる伝承が

あり、江戸時代に書かれた地誌『芦分船』にも記述が見られる。大阪府都島区では現在でも鶴塚が祭られているのだが、その経緯については1962年に地域住民を中心に結成された史蹟鶴塚顕彰會による『ぬえづか譚』に詳しい。そこに掲載された『史蹟』鶴塚祭祀趣意書によれば、「源三位頼政公が命を受け、これを退治し、その屍を洛中洛外に引廻した末、うつろ船にて淀川に流棄したる処、流れ流れてこの地、滓上江村の渚なる葦の入江に漂着せり。当時疫病蔓延したるを以って之が邪気を払ひ霊を慰むる為、村人相集い土中に埋め叢祠を建て、この祀塚をねんごろに奉祭して『鶴塚』と名付け、手厚く葬った所、不思議にも厄病は退散消滅せり」とある⁶³。

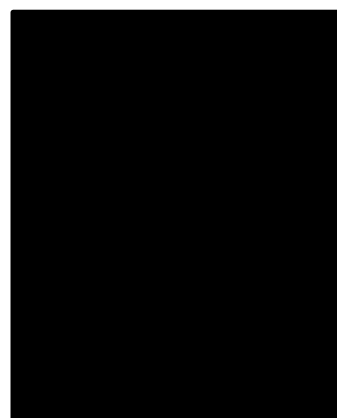


図 2-23 「ぬえ塚」『芦分船』

そもそも、琵琶湖から大阪湾に流れ出る「淀川」は、京都と大阪との物理的なつながりを象徴する河川であると言えよう。その後、明治時代に時の渡辺昇大阪府知事によって自然石に「ぬえづか」の名が刻まれたとされる。1926（大正15）年に修築され、以来祭礼が行われていたが、1945年に焼失したため、1956年に「鶴塚改修の保存世話人会」が結成され、現在の形になった。また、『ぬえづか譚』が発行された昭和37年度からは「居住地に在る史蹟を顕彰する事から郷土愛運動にまで発展して、地域社会の環境浄化と福祉増進につながる明るい街造り運動の一環として、有益な各種行事を通じて、会員相互の有機的親睦と信愛の交歓を深める旁ら、町の振興発展に役立つ環境作りを積極的に推進」しつづけると記されている⁶⁴。

この「鶴塚改修の保存世話人会」の結成と時期を同じくして、1956年9月には宝塚歌劇の星組公演の舞踊劇として「うつぼ舟（ぬえ塚物語）」が上演されている。長尾和明の作・演出による本作は「大阪府都島区にのこる「ぬえづか」にちなむ伝説」に基づいて舞踊劇化したものである⁶⁵。作者は、制作の動機について同年春に芸能課の壁に貼られていた「「鶴塚物語」脚本募集」の掲示板がきっかけであったと述べている。そこに、参考

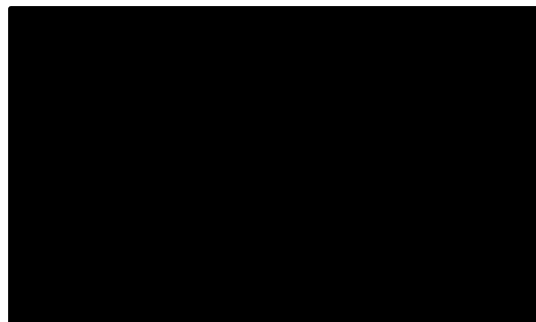


図 2-24 宝塚大歌劇星組 舞踊劇 舞台写真（第3場）「うつぼ舟（ぬえ塚物語）」1956年9月

資料として新聞の切り抜きが掲示されていたようで、そこには鶴退治にまつわる異説や後日談が掲載されていたという。鶴の正体が頼政の母親であるという説話、鶴の死骸が流れ着いた難波の里に塚を建ててその霊を慰めたことなど、「集った幾つかの資料をもとに何か書いて見ようと思った」とある⁶⁶。

この舞台は「弓張月」「精霊会」「空船」という3つの場面によって構成されている。第一場では『平家物語』になぞった頼政による鶴退治の過程が描かれており、その幕の最後

に頼政が語る「これなる変化の骸、のち――祟りのあるやも知れず、空船にのせ、賀茂の大川に流されるのがよろしいと存じます⁶⁷」という台詞が後の幕の伏線となっている。第二場では、「蓮の花笠を被り、燈籠をもつた童たち」（甲内、乙内、丙内）が精霊流しを見ながら掛け合う様が演じられる。以下に、その掛け合いの一部を引用する⁶⁸。

乙内「その鵺の祟りゆえ、源頼政と紙に書いて家の軒にはつておくだけで、疫病には、かゝらずにすむ、とこういうわけだな」

丙内「いや、それだけではない、もろもろの災いから免れることが出来るということだ」

頼政と書いた紙を貼ることで厄除けとするという民間伝承は、柳田國男をはじめ多くの民俗学者が書き記しているところであり、こうした場面もそのような情報をもとに構築されたものと思われる。

これに続く第三場は「空船と難波、難波江の葭、葭原に浮ぶ空船と発展させて⁶⁹」できたものであり、都島の鵺塚という地域性へと結びつける創作がなされている。「難波江の／葭にかゝりし 月かげを／のせて流るる 空船／末はいずこの 瀬にうかぶ⁷⁰」という唄から始まるこの幕では、頼政と従者の早太が葭原で一人の女と出会う。この女を怪しんだ頼政が鵺退治の褒美で賜った「獅子王の剣」を突きつけると、空船が現れ、女が正体をあらわす。「されど頼政 少しも屈せず／切立て 切立て なぎ立てれば／さしもの妖怪 敵わじと／雲に打のり 飛び去れば／後にたゆとう 空船／難波の里に ぬえ塚と／誉れを世々に 残しける⁷¹」として、鵺は宙吊りで飛び去っていく。

『宝塚グラフ』に掲載されている舞台写真を見る限り、歌舞伎の「鵺退治」よりも謡曲に近い印象を受けるが、凝ったつくりの舞台美術や宙吊りアクションなどには宝塚歌劇らしさを見受けることができる。同年 11 月発行の『宝塚グラフ』の読者投稿欄では「うつば舟」について「昔の絵巻物を見ている感じ」という感想が紹介されている⁷²。この演目は当時の新聞にも取り上げられており、都島区にある鵺塚への関心が高まっていったことと決して無関係ではないだろう。実際、『ぬえづか譚』にも「当『鵺塚』は浪速の史跡として、其の発祥由来等に関しては嘗って毎日、読売、日経各新聞誌上に掲載世に弘く喧傳報道され、曩にも宝塚歌劇団並びに中座等に於ても劇化公演され多大の感銘と好評を博した事は既に御高承の次第である（傍線部筆者注）」と掲載されているように、一つの動機になっていることは間違いない⁷³。

以上の鵺塚建設の経緯をたどると、『平家物語』に端を発する民間伝承が地域に定着し、地域創造の手段として活用されていく過程を見出すことができる。『大阪伝承地誌集成』では、都島の鵺塚について『平家物語』の鵺死骸琉棄話と謡曲「鵺」が融合して、謡曲の流行した室町時代に伝承が生じ、好事家が作為的に設営したものであろう」と推察している⁷⁴。顕彰会の顧問を務めていた畑中良一は都島の鵺塚について川に遺棄した都の人とは対照的

に手厚く葬った都島の人々が持つ「絶対意の境地、博愛の精神」と解釈している⁷⁵。このように、各々の伝承地において様々に解釈されることで、当該地域社会における妖怪観が形成されてきた。

現在、この地域では商店街活性化の一環として「ぬえっち」と名付けられたキャラクターが活用されている。妖怪としての鶴は図像として特徴的であるため、キャラクターとして再生されやすい。しかし、このような形での伝承の活用は、必ずしも地域住民全員には受け入れられていないようである。このことは、周辺での聞き取り調査からも明らかにされる。

昔のことで、あそこの鶴塚さんに子どもがおしっこをして、そんなんでもその子が病気になったとか、亡くなったとか、なんかけっこうそういう怖いことも、あるらしいですよ。そこの全然悪いこともあるし、鶴塚さん恐ろしいとか、そういう話を聞いたこともある。うちらは、ここに来てまだ新しいからそういうことは知らないんですけど、古い方は、そういうなんか鶴塚さんをそういう馬鹿にしたらあかんとか、そういうことは色々言っではる。⁷⁶

民間伝承としての妖怪を活用する場合、そのキャラクター性に重心が置かれることで、本来の信仰的な意味合いが軽視される事例は少なくない。ここには、まちづくりにおける妖怪文化の二重性を見ることができよう。現在も毎年8月24日には史跡鶴塚保存会によって「鶴塚まつり」が開催されている。



図2-25 鶴塚まつり(2012年8月24日撮影、大阪府大阪市都島区)

現在では、鶴塚は都島を象徴する史跡の一つとして位置付けられている。例えば、大阪で実施されているまち歩きプロジェクト「大阪あそ歩」

の中に、都島のまち歩きルートとして「妖怪<ぬえ>が眠るまち・都島」と題されたコースがある。「大阪あそ歩」では、地区ごとに地域住民によってまち歩きのルートが提案され、それらがメニュー化されることによって「コミュニティ・ツーリズム」が実践されている。都島の場合、地域の主婦を中心に都島からの情報発信を行っている「都島区.com」のスタッフがルートプランの作成を行ったという。

当日は、参加者にオリジナルマップが配布され、予め設定されたコースをガイドと一緒に歩く。都島ルートの場合、鶴塚に限らず、渡辺綱の駒つなぎの楠や母恩寺、都島神社といった歴史のある文化資源から地域の産業に関わるスポットまで、2時間程度のまち歩きコースが設定されている。その道中では、ガイドによる案内のみならず、参加者同士での対話が促進されていく。大阪あそ歩では、こうしたまち歩きをまちづくりのための方法とし

て活用することによって、活動型の文化資源が構築されている。都島のルートも、1 回限りで終わるのではなく、それを繰り返し提供することで、より多くの人に地域の魅力を発信できるとともに、既述したようなまち歩きマップ等を通して、コンテンツとして活用されている。

第4節 現代の地域社会における鵺の再生－静岡県伊豆の国市の事例から

4－1．戦前の伊豆長岡温泉開発略史

伊豆半島の北部に位置する静岡県伊豆の国市は、2005 年に伊豆長岡町、菰山町、大仁町が合併して誕生した。本節が中心的に取り上げるのは、この中でも旧伊豆長岡町に該当する地域である。静岡県伊豆の国市では民間伝承としての鵺は語られていないが、源頼政と結ばれたとされる菰蒲御前との縁をたどり、毎年 1 月 28 日に「鵺ばらい祭り」が行われている。伊豆長岡は、古くは湯治場としての古奈温泉として知られ、明治時代の後半に温泉の穿掘が開始されて以降は、長岡温泉として発展を遂げてきた。山村順次は、日本における温泉地は「療養温泉地（湯治場）から保養温泉地へ、さらに観光温泉地にいたる発達過程をたどってきた」とまとめているが、伊豆長岡も同様の発展を遂げてきた地域であると言えよう⁷⁷。



図 2-26 鵺ばらい祭り（2012 年 1 月 28 日撮影、静岡県伊豆の国市）

実際、温泉地が観光地として発展していく上で、交通網の発達が重要な意味を持っていたことは既に指摘されている通りである⁷⁸。とりわけ、伊豆半島の場合、首都圏からの交通の便がよいため、団体客向けの温泉観光地が形成されていくことになる。例えば、1916 年には当時の駿豆鉄道の「南条駅」が「伊豆長岡駅」に改称されたのだが、これは同年に組織された「長岡温泉旅館組合が、湯治客に長岡温泉を周知させることを目的に、駿台鉄道重役を介して土地有志たちと諮り、古奈温泉や南条区民の反対を押し切って」進められたものである⁷⁹。これもまた、地域イメージの形成に向けた一つの取り組みと言えよう。

温泉地を観光地としてブランディングしていく上で、1929 年 12 月から『国民新聞』で展開された「全国温泉十六佳選」というキャンペーンは少なからぬ役割を果たしていた。これは、1927 年に大阪毎日新聞社と東京日日新聞社の主催、鉄道省の後援によって行われた「日本新八景」の選出に続くマスメディアイベントとして位置付けられる。ただし、関戸明子が指摘しているように、「日本新八景」が「東西の有力紙によるイベントとして、全国的な展開」が見られたのに対して、「全国温泉十六佳選」は「国民新聞社単独の企画であったため、西日本の温泉のほとんどで、このイベントへの積極的な参加はみられない」という実情であった⁸⁰。また、読者からの投票結果が直接的に順位に反映されることもあり、

組織票が動いたことも事実である。関戸は、「新興の温泉地、小規模な温泉地にとって、絶交の宣伝の機会と捉えられたのではないだろうか」と推察しているが、伊豆長岡も懸命な投票活動の末、10 番手に食い込み、十六佳選の地位を手に行っている⁸¹。ここには温泉観光地としての地域活性化に熱を入れる民間レベルでの意識の高さがあらわれていると言えよう。

伊豆長岡温泉が観光地としての誘客を目的として 1934 年に始めたのが「あやめ祭り」である。これは、地域に伝承される菖蒲御前の名前を冠した祭りであるが、信仰に根差したものではなく、むしろ「美女」であったと語られるところに焦点化されたイベントであった。そもそも、菖蒲御前をめぐる伝承は各地に残されており、柳田國男が 1913 年に発行された『郷土研究』（第 1 巻第 9 号）に「頼政の墓」と題した報告を掲載している。そこには、頼政と合わせて語られる菖蒲御前の伝承も掲載されており、例えば越後西蒲原峯岡村竹野町（現在の新潟県新潟市）の金仙寺の裏には、菖蒲塚と菖蒲観音というお堂があったという。柳田は、菖蒲の名が「諸國に於て頼政の口碑と共に傳へられるのは、以前は名の不明な一美人であった處、後人がさも有りなんの名を附與したものと解するの外は無い」としている⁸²。伊豆長岡の場合も、菖蒲御前の伝承を活用することによって新しい地域文化がつけられたことになる。

伊豆長岡温泉が近代以降につくられた新しい温泉地であることは既に述べてきた通りだが、そうした地域において多くの観光客を誘致する上で様々な工夫がなされてきたことは想像に難くない。『町史資料第 5 集「温泉編」』には、当時の村長の「当地は浴客誘致に特別なものがないので、差し当たって桃色戦術で、世の中に売り出そう」という掛け声に呼応して、花柳界方面が急速に発展したという記述がある⁸³。こうした動向と菖蒲御前の伝承が結びつくことにより、「美女」を祭りの中心に据えたイベントが考え出されたのであろう。この祭りは観光商品としても成立しており、例えば 1966 年には日本交通公社によって「伊豆長岡温泉のあやめ祭りと芦の湖スカイラインの旅」と題するパック旅行が売り出されている。

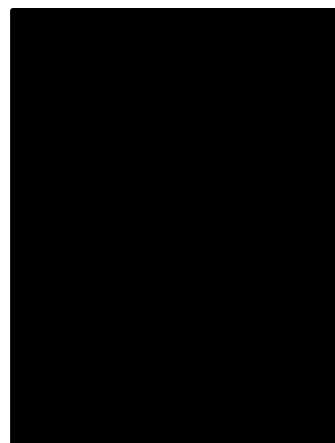


図 2-27 日本交通公社広告『読売新聞』1966 年 6 月 19 日朝刊

4-2. 第二次世界大戦後の伊豆長岡温泉の復興

戦後の伊豆長岡では、観光地としての地域開発が推進されていく。そうした姿勢を象徴するように、1946 年には観光協会が設立された。この時期には駿豆鉄道が温泉地経営に積極的に関わるようになり、1947 年には古奈で旅館の経営を始め、1955 年には長岡でホテルを開業している。一方で、地元の資本による開発も進められ、1951 年に設立された古奈温泉開発協同組合では、9 本の堀さくと分湯事業を行っている。この背景には、戦後の復興に

伴う安定した生活の回復を見ることができる。1956年版の『経済白書』が打ち出した「もはや戦後ではない」にも象徴されるように、人々の消費活動も活性化し、その効果は観光にもあらわれていく。1950年代には職場の慰安旅行をはじめとする団体観光客が温泉地へ向かうことになる。

1960年代に入ると、旅行の大衆化はますます進んでいった。1962年には「旅行商品券」の販売が始まり、予め乗り物と旅程と旅館とをセットにした「セット旅行」が売り出されるなど、「量産化され規格化された旅」が商品として売り出されるようになる⁸⁴。こうした流れの中で、各温泉地では大衆の興味を引くために、個性的なテーマに基づくまちづくりが推進されていった。例えば、1965年には北海道札幌市の定山溪温泉で「定山溪かっぱ祭り」というイベントが始まっている。この背景には、同じく北海道にある洞爺湖温泉の「湖水まつり」や登別温泉の「地獄まつり」が始まったことが少なからぬ影響を与えている。そこで、札幌出身のマンガ家であるおおば比呂司の助言により、定山溪の景観から新たな河童伝説を創出し、地域一丸となったイベントが始められた⁸⁵。

温泉観光地の場合、温泉の効能も去ることながら、それに付随する「物語」も誘客にとっての重要なファクターになり得る。言わば、日常生活から離れて、ゆっくりと温泉につき、非日常的な体験をすることが、温泉観光地の大きな役割の一つであり、それは現代社会にとってのハレの場と言い換えることもできよう。個性的な地域イベントは、こうしたハレの機能を高める演出であり、温泉観光地が観光客に提供すべき商品と見なすこともできる。

伊豆長岡温泉でも、1950年代後半には観光協会の活動が盛んになり、それに伴い「あやめ祭り」も豪華さを増していった。1960年代前半には祭りも最盛期を迎え、頼政の子孫（輝貞）が上野国高崎城主であったというゆかりから、高崎市との人的交流も始まった。当時の芸妓組合会員は、その頃の祭りの様子について次のように振り返っている。

高崎からやって来た頼政をあやめ御前（玉千代姐さん）が東宝砦撮影所で出迎え、オープンカーで数寄屋橋をパレード、そのまま車を連ねて伊豆長岡まで帰ってきた。次の年はヘリコプターで南小学校校庭に降り立った頼政をあやめ御前（ミスあやめ）や芸妓神輿、大名行列、ヌエ踊りの一行二〇〇人が出迎え、御所車を先頭に二五台の車を連ねて伊豆長岡の町をパレードした。⁸⁶

これを見ると、きわめて豪華な祭りの様子を伺うことができ、まさしくハレの舞台である。山村は、「新興温泉としての鬼怒川・伊豆長岡は、とくに観光宣伝活動に力を入れており、このような積極的な観光市場開拓の前向きの姿勢が観光産業の高度化・温泉観光集落化を促進させることになる」と指摘している⁸⁷。

あるいは、『伊豆長岡町史』が長岡温泉と古奈温泉の歴史的背景を比較して、「古奈は上品で静かな旅館が多く、長岡は歓楽ムードがあふれている」と述べているように、積極的

に地域の外側に対して発信していく取り組みについては長岡温泉の主導による部分が大きかった⁸⁸。1962年には観光スポットとして葛城山に全長1800mに及ぶロープウェイが開通した。高度経済成長期を象徴する産物だったが、思ったように客足は伸びず、1969年には株式会社伊豆長岡ケーブルに引き継がれている。また、1964年には地元の資本によって観光会館が建てられ、観光は地域の基幹産業として発展を見せることになる。ただし、この同じ年に静岡県温泉審議会によって、修善寺・伊豆長岡の温泉地一帯が温泉保護地域に指定され、以後新たな堀さくは行われていない⁸⁹。

1960年代から70年代にかけての高度経済成長期には、消費行動の活性化に伴い、観光形態の多様化が見られるようになった。例えば、日本観光協会による「観光の実態と志向」に関する調査から、「今後希望する観光旅行の内容」の推移を概観すると、1964年の調査では「自然の風景をみる旅行」（47.3%）に次いで「温泉旅行」（46.3%）が位置していたのだが、1970年の調査では「自然の風景をみる旅行」（49.6%）、「名所旧跡めぐりをする旅行」（44.5%）に次いで第三位に位置してはいるものの、その割合は29.2%と減少傾向が見られる。これに対して、この期間に大きな伸びを示しているのが「お祭りや行事等風俗習慣をみる旅行」であり、1964年の4.9%から1970年の10.4%まで増加している⁹⁰。こうした数値の変動の背景には、1960年代後半の「ふるさと」ブームを指摘することができる。温泉観光地への求心力を補完するように、新たな祭りが創造されていくことも必然的な流れであったわけである。

4-3. 鶴ばらい祭りの誕生—ふるさとの祭りのフォークロリズム

第二次世界大戦を経て、各地で行われていた多くの祭りは第二次世界大戦を機に衰退を余儀なくされたが、戦後になると各地で少しずつ祭りの復興も見られるようになった。例えば、1950年には文化庁の企画による全国民俗芸能大会が始まっている。笹原亮二は、この前身とも言うべき「郷土舞踊と民謡の会」について詳細な考察を加えている。1925年に日本青年館の開館記念行事として始まったこの大会は、笠原の言葉を借りれば「各地で行われていた芸能を現地の文脈から引き剥がし、それに対して研究資料、あるいは政治的な運動という新たな意味を付与して全国的規模で流通させた催し物であった」⁹¹。笠原は、こうした状況について「舞台の芸能」という言葉を当てはめているのだが、そこでは各地の芸能が「享受の対象」として消費され、「演者と観者という極めて演劇的な関係を現出させることになった」⁹²。

戦後に始まった全国民俗芸能大会も、各地の芸能を舞台芸術として演じるイベントであった。このように、各地の芸能や祭礼は、もはや共同体の内部だけでとどまることなく、「見る—見せる」の関係性に置き換えられていくことになる。その結果として、各地で「観光」のための新しい祭りがつくられるようになったことも必然の流れと言えよう。例えば、現在では北海道の冬の風物詩として知られる「さっぽろ雪まつり」も、1950年に札幌市観光協会と札幌市の主催によって始められたものであった。ここには、信仰に根差したかつて

の祭礼から地域振興を目指したイベントへの価値転換を見ることができよう。同年には、当時の鳥羽市長の肝いりで「鳥羽みなとまつり」も始められている。これも観光振興による地域活性化に主眼を置いたものである。

また、現在では徳島観光を代表する「阿波おどり」も、多数の「連」による集団連続行進の形式が確立されたのは1950年代のことであった。その後、阿波おどりは「高円寺阿波おどり」(1957年)、「しもきた阿波おどり」(1964年)、「三鷹阿波おどり」(1969年)、「大塚阿波おどり」(1974年)など、各地に伝播していった。松平誠は、このように各地で阿波おどりが始まった背景として、東京都が1968年に明治百年記念事業として、「各地の商店街振興会を活性化するため、新たな催しを育成するよう指導したこと」を要因の一つとして挙げている⁹³。

かつて、柳田國男は「する」祭りから「見る」祭りへの価値転換を論じていたが、1950年代を通して生み出されてきた新たな地域の祭りは、むしろ祭りの担い手自体が「見せる」ことを前提としたスタイルが確立された。この背景には戦時下に抑圧されてきた民衆のエネルギーの発露を見ることができると同時に、そうした楽しみを享受できる精神的な復興が達成されつつあったことを意味しているのかもしれない。

1960年代後半は郷土芸能や民謡といった「ふるさと文化」に人々の関心が集まった時代でもあった。とは言え、そこで提供される「ふるさと」が民俗社会から独立して外部に向けて発信されるものであった点は注視すべきである。例えば、福岡県博多の博多どんたく港祭、石川県金沢市の加賀百万石祭、尾張一宮七夕祭など、「観光化、あるいは商業化した祭り」が伝統的な祭りにもまして勢力を増していった⁹⁴。無論、こうした地方都市型の祭りに限らず、1968年には昭和元祿四大祭りとして「大銀座まつり」(銀座)、「大新宿祭」(新宿)、「ノアノアフエスティバル」(池袋)、「わんわんカーニバル」(渋谷)が開催されるなど、大都市でもイベント型の新しい祭りが花盛りであった。河内正広は、こうした状況の背景に「大衆消費社会」の到来によって「余暇活動における提供者と受け手との間に社会的関係が成立した」ことを指摘している⁹⁵。

このように新しい祭りに人々の関心が集まったのは、高度経済成長による時代の気分の高まりを指摘することもできる一方で、人口の都市部への集中による共同体の枠組みの脱構築も影響しているものと考えられる。1977年に打ちだされた「第三次全国総合開発計画」において人口の地域格差を緩和すべく「定住圏構想」が打ち出されたことにも象徴されるように、高度経済成長期を通して地方の人口は次々と都市部へと流入していった。言わば、この時期になると都市住民の多くは生まれ故郷(ふるさと)から離れた人々によって占められているのである。そうした時代にあって、NHKで放送されたテレビ番組「ふるさとの歌まつり」は、テレビというマスメディアを媒介とする地域文化の再生を地域の外側から支えてきた。松平誠は「ふるさとの歌まつり」について次のような考察を加えている。

この番組は、今日でいう村起し、町起しのさきがけであり、先駆的な地方文化の再興

運動ということになる。(中略)それは、TV メディアによる地域文化掘り起こしの画期的な実験であると同時に、地域文化が都市化の中で持続していく契機を提供したものであったのである。

この時期には、各地で新しいご当地祭りが生み出されている。それらは、民俗文化の気色を装いながらも、大衆化されたイベントとして受容されていくことになる。「鶴ばらい祭り」もそうした文脈の中に位置づけられ、民俗行事としてではなく、地域振興のためのイベントとして、第三者に「見せる」ことを前提とするものである。実際、1969年2月4日に三島で「ふるさとの歌まつり」が収録された際には、その舞台上で「鶴ばらい」も披露されている。

このように、鶴ばらいという行事自体は「真正」な民俗文化ではないが、獅子舞や虎舞を髣髴とさせる郷土芸能の装いを呈したことによって、「ふるさと」の文化として受容されている。ここには、1960年代初頭のドイツ民俗学において概念化された「フォークロリズム」の理論を当てはめることができる。バウジンガーによれば、フォークロリズムとは「なんらかの民俗的な文化事象が、本来それが定着していた場所の外で、新しい機能を持ち、また新しい目的のためにおこなわれること」とされる⁹⁶。このような観点から見た場合、鶴ばらい祭りは、1960年代の伊豆長岡温泉の観光地形成の中で、伝統的な物語から引用した鶴と地域とのゆかりを紡いでつくられた新たな民俗文化として位置付けることができる。以下、こうして形成された民俗文化が地域の伝統として定着してきた過程を明らかにしていく。

5. 鶴ばらい祭りを通じた地域の物語の再創造

5-1. 地域に合わせてアレンジされる鶴の物語

鶴という素材はきわめて柔軟にその表現形式を変えながら現代まで受け継がれてきた。本来は夜に鳴く鳥を指す総称として用いられていた「鶴」だが、その鳴き声が寂しげに聞こえることから、『万葉集』では「うらなく」や「かたこい」を導く枕詞として用いられている。その一方で、鶴の鳴き声は人の死や不吉なできごととも結びつくようになり、そうした認識の延長線上に『平家物語』における鶴退治説話も位置づけられる。

鶴退治説話は、謡曲や歌舞伎を通して再生されてきたのだが、その鶴はいよいよ地域振興の素材として活用されていくことになった。伊豆長岡の場合は民間伝承としての鶴が語られてきたわけではないため、その由来も含めて総合的に再創造されている点に大きな特徴がある。1966年2月20日付の町報には、「ぬえばらい」について次のように記されている。

この村に不慮の災害が相ついで起こり、更に疫病が流行して猛威をふるっておりまして。豪農佐兵衛も病の床に倒れ、日毎に衰弱するさまに近親一同憂慮の中に沈みきつ

ておりました。昏々と眠る佐兵衛が急に、ぬえ、ぬえ……と呼び又眠り又呼びました…^ここ^ろで父親は村の衆にお願いしてその昔京都にて帝を悩ました頭は猿、胴は虎、尾は蛇の怪物ヌエを源頼政が退治したので、帝の病も平癒されたことを話し、佐兵衛の病も、このぬえの仕業かも知れませぬ早くこれを追い払い多くの村人たちの苦悩^{ママ}と除き死から救ってやりたいと、村人たちと相談してヌエを作った。(中略)その夜父親は弓を引きしぼってぬえを射とめました。(中略)この「ぬえ」退治をしてから不思議にも災難疫病も治まり再び静かな村となりました。村人たちは新年を迎えるにあたって、この様な不幸な年でないように、毎年一月二十八日に「ぬえばらい」をする風習となったのであります。⁹⁷

ここではまことしやかに「ぬえばらい」の由緒が語られているが、現段階でこのような民間伝承は発見されておらず、観光客誘致のために創作された物語として読むべきであろう。しかしながら、完全な創作ではなく、例えば、文中で言及されている「不慮の災害」は1958年に伊豆長岡に大きな被害をもたらした狩野川台風を髣髴とさせる。地元での聞き取り調査を進めていく中で、鶴ばらい祭りが狩野川台風からの復興を祈念して始まったものだとする声を聞くこともできた⁹⁸。

5-2. 鶴ばらい祭りの展開

1966年に鶴ばらい祭りが始まった当初は、観光協会を中心に「鶴」をモチーフにした地域の宣伝活動が行われていた。そこでは、鶴のイラストをあしらったステッカーをつくり、観光協会傘下の旅館や商店のみならず、多くの住民の協力を得て、一般の乗用車などにも貼られていた。この時期に伊豆長岡温泉の入口に設置された看板を見ると、その上部に鶴のデザインが採用されていることが分かる。このように、キャラクターとしての鶴に焦点が当たるのと並行して「鶴ばらい祭り」も始まっている。

そこには、新しい由緒を創作することによって地域の歴史に組み込まれた民衆文化の創造の力学が働いていると言えよう。本稿では、伊豆長岡の観光協会の会長などを歴任した伊豆長岡温泉にある旅館の経営者 M に対する聞き取りをもとに、鶴ばらい祭りの変遷を辿っていく。まず、そもそもの祭りが始まった経緯については次のように語られている。

やはりあの、お祭りはなるべく、年間を通じて観光地ですから、色々あった方がいいということで、あの本来ですとあやめ祭りの中で一環としてやっていくべくが本当だったと思います。



図 2-28 伊豆長岡温泉入口看板 (2013 年 7 月 1 日撮影、静岡県伊豆の国市)

(中略) そもそもがこの鶴が、色んな意味でこの、頼政公と菖蒲御前のいわゆる、一種のきっかけとなっておりますので、で、鶴退治のご褒美に菖蒲御前を朝廷から貰い受けたというのがいきさつですから。⁹⁹

ここでも明らかにされているように、鶴ばらい祭りは観光行事として始まったものであった。そのため、当初は旅館組合に所属する青年部を中心に演じられ、場合によっては各旅館から社員が参加することもあった。当初は、現在のように「鶴おどり」が行われていたわけではなく、鶴に豆をぶつけながらまちを練り歩く節分行事のようなイベントであり、文字どおりの「鶴ばらい」であった。

その後、「鶴ばらい祭り」は演劇性を帯びた「鶴おどり」として形式が整えられていく。1972年に観光会館前で鶴退治の式が行われた際には、「今年も温泉客でにぎわうよう祈願した」とあるが、おおよそこの頃に「鶴おどり」の原型がつくられた¹⁰⁰。

M は、鶴おどりが始まった最初期の段階において、大鶴の前足を担当していたという。このように「舞台芸術」として成立していった過程については次のように語っている。

いわゆるコマーシャルベースでどっか行ってイベントの中でやるにはちょうどいい時間なんです、実は。人が立って見るには。要は、ちゃんと構えて座って物語的にやるものではなくて、小イベントとして、やるにはちょうど時間的にもそれから音の問題も含めてマッチしてました。他の観光地の旅館組合の方々には羨ましがられました。もともとそんな歴史も何もへったくれもないところで、けっこう内容的には見えるものでしたんで。¹⁰¹

1969年に「ふるさとの歌まつり」の舞台上で「鶴ばらい」が披露されていることも、舞台芸術化を図る一因になっているのかもしれない。

1979年の「鶴ばらい祭り」では、当時の町長が源頼政役を務め、観光会館前の頼政公歌碑の前で供養祭を行った後、西林寺の裏山にひそむ大小3匹の鶴を追いつき、弓や長刀で大立廻りを演じ、暴れまわる鶴にとどめがさされた¹⁰²。ここでは、地域を舞台にした物語として仕上げ



図 2-29 鶴ばらい祭り (1970 年 1 月 28 日)
伊豆長岡町役場 (編集発行)『町報伊豆長岡』
第 81 号、1970 年 2 月 20 日



図 2-30 鶴ばらい祭り (1979 年 1 月 28 日)
伊豆長岡町役場 (編集発行)『広報伊豆長岡』
第 173 号、1979 年 2 月 15 日

られていることが分かる。ただし、こうした物語も時代によって変化があったと語る。

この鶴に関しては、妖怪を神様めいたものにしちゃうところが面白いところで、最後に鶴が生き返って妖怪がいわゆる善玉になるんですよ。で、そこまでのストーリーで終わるんですが、実はね、これね、15年ぐらいかな、最近なんです。そうなったのは。当初の10年ぐらいはね、実は、悪玉で終わってたんです。で、悪玉で終わっちゃうと、なんからしくないでしょ。それで、要は、その打ち取られた後、善玉になってその地元の人を守ったということにしようということで、ストーリーを変えてしまった。そこら辺は、だからそのコマーシャルベースのいい加減さというか、そういったところなんですけどね。¹⁰³

これは民俗芸能の視点から見ればコマーシャルベースのまがい物になるかもしれないが、温泉観光地のフォークロリズムとして見た場合、典型的な事例として位置付けることができるだろう。また、それぞれの時代の表現手段にあわせて再生されてきた鶴の歴史を鑑みれば、これもまた現代的活用の一例と見なすことができる。

5-3. 受け継がれる「伝統」

1992年以降、鶴ばらい祭りの担い手は地元の中学生に引き継がれてきた。当時の町報を読むと、「今年から若者にも伝統芸能を引き継いでもらおう」と書かれているが、この時期には既に「伝統」として認識されていたようである¹⁰⁴。ここで、祭りの主体が旅館組合の青年部から中学生へと転換したことは、鶴ばらい祭りが現在まで継続する要因の一つとなっている。「もしわれわれの業界がそれを担っていたとしたらもうとっくにないでしょうね」と語るMは、この主体の転換に至った背景について次のように指摘している¹⁰⁵。

一番分かりやすいのは、やるやつがいなくなったんですよ。飽きちゃうんですよ、やっぱり。イベントって飽きるんだよ。だって、本来文化伝統じゃなくて、これはコマーシャルイベントなんだから。イベントの一環として、踊りを考えたことであって、本来そこにあった伝統を育てたわけでもなんでもないから。

ここでも繰り返されているように、旅館組合や観光協会の立場から見た場合、鶴ばらい祭りの目的は「観光」にあるのであって、「伝統」ではない。これは、「鶴ばらい祭り」の成立に直接携わった第一世代にとっては必然的に生じる視点であると言えよう。しかし、それを学校教育と連動させることによって、地域の「伝統」へと価値転換がなされていった点に、鶴ばらい祭りの再生を見ることができる。

中学生が担い手となることによって、鶴が地域の伝統文化として継承される受け皿が整えられていった。近年では、伊豆の国市商工会青年部によって鶴をモチーフにした創作民

話プロジェクトが進められ、2006年には「伊豆長岡むかし噺」として『伊豆長岡温泉鶴悲哀物語』（さかいとみちこ：文／井上裕子：絵）が発行された。「むかしむかし平安時代のお話です…」から始まるこの物語は、『平家物語』における鶴退治説話を脚色し、伊豆長岡を舞台に据え、菖蒲御前と鶴との関係に焦点を当てたものとなっている。あらすじは以下の通りである。

かつて、伊豆長岡の森にあった「鶴の岩」を京都のお城に持ち帰ったところ、夜ごとに不気味な鳴き声が聞こえるようになり、殿さまが重い病にかかり寝込んでしまった。これを鶴のたたりとおそれた家来は、その岩を割るも、事態はますますひどくなるいっぽう。そこで、殿さまの家来で一番の弓の名手である頼政が召され、見事に鶴を退治するのだが、実はこの鶴はお城に仕えている菖蒲を幼少期に救ってくれた心優しい存在であった。菖蒲は鶴を助けることができず、抱き上げて泣いていたところ、その異形のものは一羽のトラツグミへと姿を変え、空へと飛んで行った。その後、鶴の岩は伊豆長岡の森へと帰されることになり、頼政は菖蒲と結ばれて末永く幸せに暮らしたという。

これは創作民話であり、「鶴の岩」も実在するものではない。頼政による鶴退治をベースとしながら、伊豆長岡出身の菖蒲御前をめぐるエピソードとして再構築することによって、新たな物語として再構築されている。伊豆の国市商工会では、この他にも鶴の着ぐるみをつくって地域の学校等で普及活動を行ったり、マグネットやお札を制作して鶴ばらい祭りの会場で販売したりと、新しい活用を行っている。

今野圓輔は「ヌエみtainな化け物が実在するはずはないと思いながら源三位頼政のヌエ退治の話を現在もなお語り伝え、たとえそれが客寄せにもせよヌエ払いという年中行事がまじめに行われているところに、妖怪を考える一方面を暗示している」と指摘しているが、地域における妖怪文化の再創造と定着という点から見た場合、伊豆長岡の興味は尽きない¹⁰⁶。次章では、地域の「伝統」へと価値転換を遂げた鶴ばらい祭りの受容について、現在の祭りの担い手となっている中学生へのアンケート調査を通して明らかにしていく。

6. 地域行事を通して形成される妖怪観—中学校における調査から

6-1. 調査の概要—目的と方法

長い歴史を持つ「鶴」を新しい地域行事として再生させてきた伊豆長岡の取り組みは、新しい「コンテンツ」の創作に基づく妖怪文化の活用事例として位置付けられる。それらは「つくられた民俗」ではあるが、既に50年近くの歴史を経て「伝統」として定着しつつある事実を無視することはできない。

では、鶴ばらい祭りが既に「伝統」として存在している世代にとって、鶴はどのように認識されているのだろうか。かつて、「コマーシャルイベント」として始まった鶴ばらい祭

りは、1992年の段階で中学生にバトンが引き継がれることで、地域の「伝統芸能」としての新たな段階へと展開してきた。ただし、祭りへの参加は任意であり、教育課程内の学習には含まれていないため、必ずしも全ての生徒が同じ体験を共有しているわけではない。そこで、本稿では、伊豆の国市内のN中学校におけるアンケート調査を通して、鵺がどのように地域の中で受容されているのかを明らかにすることを目指した。

上記の目的を達成するために、質問紙では、妖怪一般に関する質問項目から次第に地域の妖怪、鵺ばらい祭りへと対象を絞っていく構造をとった。調査結果の分析にあたっては、妖怪一般に対する知識およびその情報源と地域の妖怪に関する知識およびその情報源を比較することにより、鵺ばらい祭りという行事が地域固有の妖怪観の形成に果たす役割について考察を進めていく。また、鵺そのものや鵺ばらい祭りに対する記述に基づき、伝統化の現状を可視化する。

調査の実施にあたっては、伊豆の国市教育委員会の協力を得て、郵送法によって行った。調査対象校は、鵺ばらい祭りに参加している市立の中学校である。学年毎に1クラスずつ任意抽出でアンケートを実施し、1年生25名、2年生28名、3年生33名の計86名から有効回答を得ることができた。

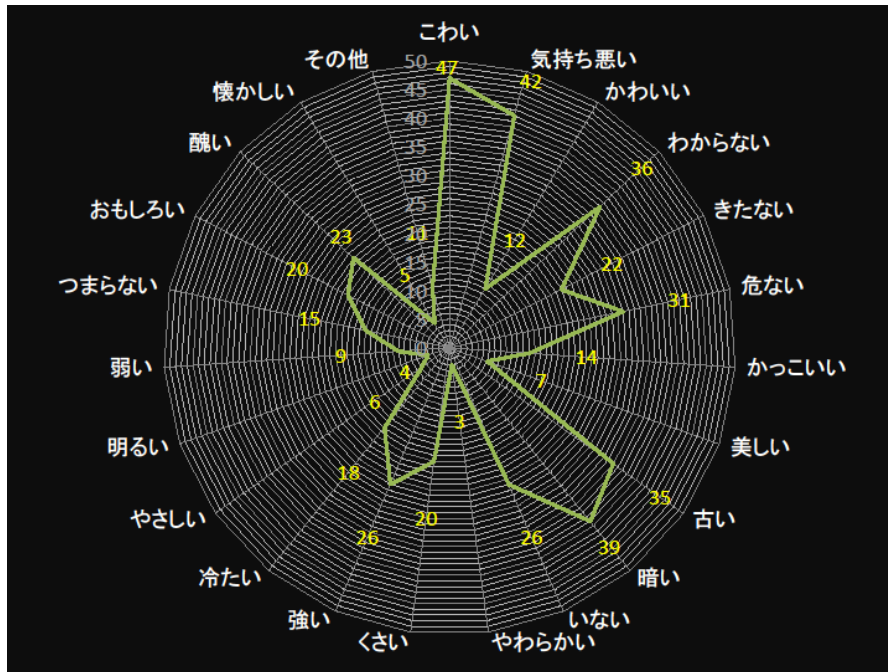
6-2. 中学生にとっての妖怪観

そもそも、中学生にとって妖怪はどのように認識されているのだろうか。まず、妖怪に対する興味について問う質問に対しては、学年ごとに【表2-3】のような回答結果を得ることができた。続いて、「妖怪についてどのように思いますか」という選択肢式の質問項目に対する回答では、「こわい」(47件)、「気持ち悪い」(42件)、「暗い」(39件)、「わからない」(36件)、「古い」(35件)、「危ない」(31件)、「いない」「強い」(26件)、「醜い」(23件)、「きたない」(22件)といった言葉が選ばれている。一方、回答の少なかった選択肢としては、「やわらかい」(3件)、「明るい」(4件)、「懐かしい」(5件)、「やさしい」(6件)、「美しい」(7件)といった言葉が選ばれている。「明るい／暗い」「美しい／醜い」といった対概念で比較すると、妖怪に対するネガティブな認識が浮かび上がる。また、「わからない」「いない」といった実在性に関わる項目に対する回答が多いことも一つの特徴と言えよう。

表 2-3 質問1に対する回答結果

	1年生	2年生	3年生	合計
興味がある	3	9	10	22
どちらかというに興味がある	12	5	8	25
どちらかというに興味はない	8	4	8	20
興味はない	2	10	7	19

表 2-4 質問 2 に対する回答結果



次に、知っている妖怪の名前を自由に挙げる質問紙項目に対しては【表 2-5】のような回答が得られた。ここで上位を占めているのは「いったんもめん」「すなかけばばあ」「ぬりかべ」「きたろう」「めだまおやじ」「ねずみおとこ」「ねこむすめ」など、「ゲゲゲの鬼太郎」に登場するキャラクターであり、テレビアニメ等の影響が見られる。また、「ぬりひょん」の回答数が多いのは、「ゲゲゲの鬼太郎」に登場することに加えて、『週刊少年ジャンプ』に連載されている椎橋寛のマンガ「ぬりひょんの孫」が影響している可能性もある。また、「妖怪人間ベム」や「さだこ」など、テレビや映画といった大衆メディア由来のキャラクターも「妖怪」として認識されている。その一方で、「鶴」を回答している生徒は 5 名に留まり、必ずしも妖怪としての知名度は高くない。

続いて、これらの妖怪に関する知識の情報源を問う項目に対しては、【表 2-6】のような回答結果を得ることができた（複数回答）。この中でも、特に多くの生徒が情報源として挙げているのが「テレビ」であり、86 名中 74 名が回答している。これに続いて 37 名が「マンガ」と回答している。この結果は、自由記述における妖怪の名前にも合致する。また、予想以上に「自分で体験した」と回答している生徒が多く見られるが、ここで言う「体験」は「テレビを見る」「マンガを読む」といったレベルでの「体験」であると考えられる。実際、現在の中学生在が小学生の頃には、テレビアニメで「ゲゲゲの鬼太郎」が放送されていたこともあり、これは回答している生徒のほとんどが「小学校時代」に体験したと答えていることから推測される。一方、情報源として「地域の行事やイベント」を挙げている生徒は少なく、9 名に過ぎなかった。その中でも、「鶴ばらい祭り」と回答している生徒は 2 名のみである。

表 2-5 知っている妖怪の名前を挙げる質問項目に対する回答結果（自由記述／回答数上位 20 位まで）

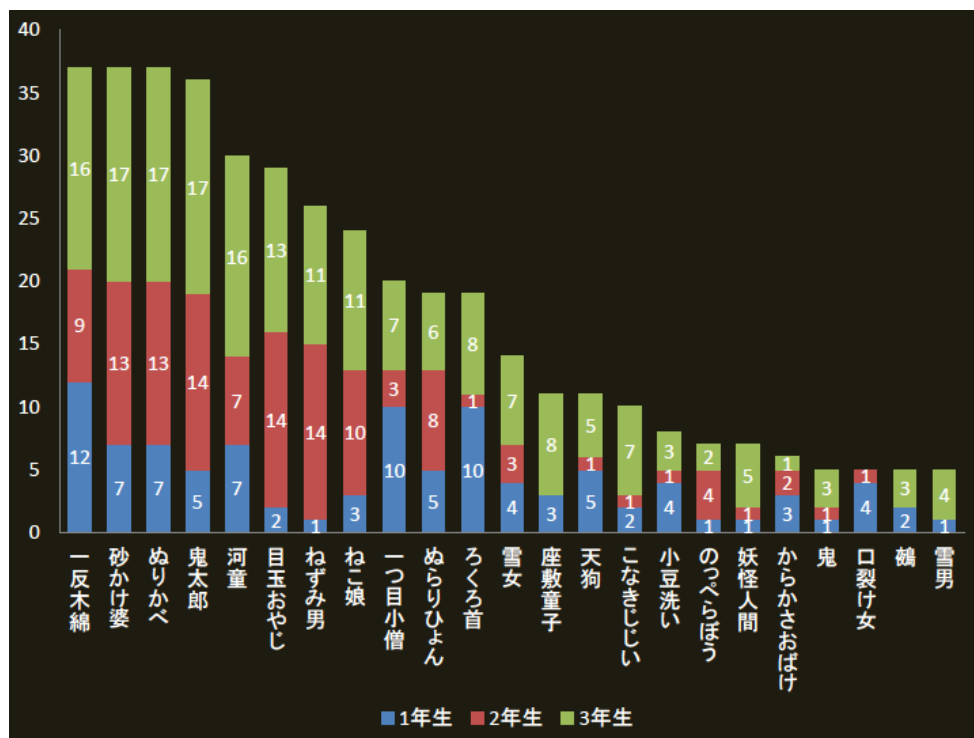
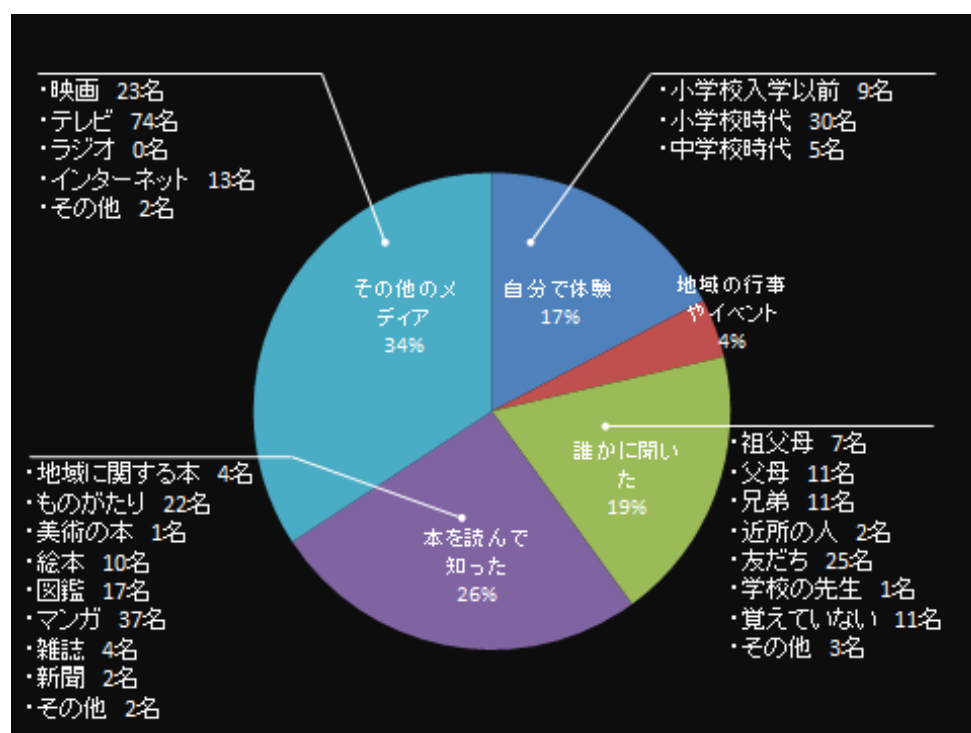


表 2-6 上記の妖怪に関する情報源を問う質問項目に対する回答結果（選択肢式）



続いて、伊豆の国市（伊豆長岡）に関する妖怪の知識の有無を問う項目に対しては、29名の生徒が知っているという回答しており、そのうちの26名が「ぬえ」の名前を挙げている。先ほどの自由記述の中で「ぬえ」の名前を挙げている生徒が5名であったことを踏まえると、地域の妖怪という回路を通すことで「ぬえ」に関する知識が引き出されていることが予想される。

ここで、「ぬえ」に関する記述を見ると、「みなもと氏が京都のあやめごぜんをどうにかしたようなかんじ」と物語の内容に関わる記述も見られる一方で、多くの回答が「頭がサル、体がトラ、しっぽがへび」である点を特徴として挙げており、視覚的なイメージに関心が集中していることが分かる。また、その情報源については、8名の生徒が「鶴ばらい祭り」を挙げ、7名の生徒は「学校で習った」としている。ここには、「鶴ばらい祭り」が地域学習の一環として行われている影響が見られ、行事が地域の妖怪観を形成する機能を担っていることが分かる。

表 2-7 鶴について知っていることやその情報源に関する回答結果

名前	特徴	情報源
ヌエ	頭がサル、体がトラ、しっぽが蛇	ヌエ祭り、自動車
ヌエ	頭はたしか、さるで体がとらでしっぽがへびでという感じです。	家族から聞いてイベントがあることも知った（ヌエばらい）。
ぬえ	3つの生き物がつながってできている。（へび、とら、?）	聞いた（→友、お母さん）。おまつりでみた。テレビでやってた。新聞にのってた。
鶴（ぬえ）	しっぽが蛇で、顔が猿で体がトラ	近所のお祭りなどで（商工祭）
ぬえ	頭がさるで体がトラでしっぽがへびの妖怪	お祭り、おばあちゃんからきいた
ぬえ	頭がとらで体はさるでしっぽがへび	
ぬえ	何種類かの動物の体の一部がある。	学校の勉強で知った。（小学校）
ぬえ	頭がさるで、体がとらで、しっぽがへび	学校行事にあるので
ぬえ	頭がサル、体がとら、しっぽがへび	小学校で話をうけた
ぬえ	顔がさるで体がとらでしっぽがへび	ぬえばらいまつり
ぬえ		学校 イベント
ぬえ	顔さる 体トラ 尾へび	学校
ぬえ	トラとへびとサルがまざったもの	小学校でしった
ぬえ	しっぽがへびで体がとら	地域のシンボルみたいになっているから。
鶴	顔がサル、体がトラ、しっぽがへび	本など。
ぬえ	顔・・・さる 体・・・とら しっぽ・・・へび	学校で習った
ぬえ	特徴は分からないが色々と動物がまざっている	友達に聞いた。
ぬえ	へび、さる、トラ	何か知ってた
ぬえ	頭・・・さる 胴・・・とら 尾・・・へび	テレビ（忍たま乱太郎）

ぬえ	さるととらとへび	見た。にせものを。
ぬえ	みなもと氏が京都のあやめごぜんをどうにかしたようなかんじ 体→虎、尾→へび、顔→さる	分らない ただしってた。
ぬえ	しっぽはへび あたま（さる） からだはとらのばけもの	ぬえばらいまつりでしった。
ぬえ		地域にぬえたいじの行事があるから
ぬえ		父がしょうこうさいのやくいんでそのようなしごとをしているから
ぬえ	頭がトラ 体がサル しっぽがへび	地域の「ぬえばらい祭り」を長中の生徒が行っていて知った

6-3. 鶴ばらい祭りを通した鶴のイメージ形成

質問3に対する回答で「鶴」の名前を挙げた生徒が5名であったのに対して、ここでは地域にゆかりのある妖怪として26名が「鶴」の名前を挙げている。その情報源の多くは「鶴ばらい祭り」を介してのものであり、この地域行事が地域の妖怪観を形成する機能を担っていることが分かる。

では、具体的に「鶴ばらい祭り」を通してどのような鶴のイメージが形成されているのだろうか。「鶴ばらい祭りを知っていますか」という質問に対しては、76名の生徒が知っていると回答し、うち9名は祭りに参加したことがあると回答し、51名の生徒が見たことがあると回答している。ここで「知っている」と答えた生徒に対して、「鶴は妖怪だと思いますか」という質問を行った結果、56名の生徒が鶴は妖怪だと「思う」と答え、21名の生徒が妖怪だと「思わない」を選んでいる。

さらに、鶴を妖怪と「思う」「思わない」のそれぞれの立場から「鶴についてどのように思いますか」という自由記述式の質問項目に対しては、それぞれ以下のような回答が得られた。

◆鶴を妖怪だと思う場合

・ぬえはみにくいかんじがします。どうぶつが三しゅるいぐらいまざってることを聞いたから。(1年)

- ・古い、昔のこと (1年)
- ・見た目かわいい (2年)
- ・きもーい！！ (2年)
- ・妖怪にしてはカッコいい。(2年)
- ・なぜとらとさるとへびが合体するのかがわからない (3年)
- ・どうぶつなのか、妖怪か、はっきりしてほしい (3年)
- ・こわいけど、かわいい (3年)
- ・かわいくて、たいじしなくてもいいと思う。(3年)

◆鶴を妖怪だと思わない場合

- ・伊豆長岡の、歴史ある物。(1年)
- ・ぬえは怖くないから。(2年)
- ・だって本物見たことないから。(2年)
- ・だってニセモノだし。架空のもの。(2年)
- ・動物!! もうじゅう。(3年)
- ・ただ動物があわさったいきもの (3年)
- ・妖怪なのか、神様なのかわからない。(3年)
- ・きもちわるい、こわい (3年)
- ・ししまいみたいな感じをしている。(3年)

ここには、鶴ばらい祭りを通して形成された鶴のイメージが反映されていると考えられる。「見た目がかわいい」「こわいけど、かわいい」「かわいくて、たいじしなくてもいいと思う」といった回答には、鶴ばらい祭りにおける着ぐるみの影響が見られる。一方で、「ぬえは怖くないから」妖怪ではないという回答も見られ、同じものを見てもその解釈は多様である。

また、鶴ばらい祭りが「伝統」として定着しつつあることを裏付ける回答として、「古い、昔のこと」「伊豆長岡の、歴史ある物」という二つの記述に注目したい。これらはいずれも、祭りが古くから行なわれていることに焦点を当てているが、「古い」から妖怪であると見なす立場と「歴史ある物」だから妖怪ではないと見なす立場とに分かれている。このことは、鶴を「神様」と見なす回答にも象徴的にあらわれていると言えよう。「妖怪なのか、神様なのかわからない」といった回答は、鶴ばらい祭りを通して表象される鶴のイメージに由来する。ここには、「打ち取られた後、善玉になってその地元の人を守ったということにしようということで、ストーリーを変えてしまった」とする鶴ばらい祭りの物語の影響が見られる。また、「ししまいみたいな感じをしている」という回答は、妖怪というよりもむしろ獅子舞や虎舞といった郷土芸能の装いに彩られた特徴に基づくものと言えよう。こうした点から、鶴を古くから伝わる神様として認識する視点も生じるのである。

最後に、「今の鶴ばらい祭りについて思うこと、これからの鶴ばらい祭りに望むこと」について自由記述式で回答する質問項目の結果を見てみると、「伊豆の国市の伝統」「長岡の伝統行事として定着してほしい」といった具合に、「伝統」という言葉を挙げている回答が14件あった。また、「伝統」という言葉は用いていないものの、「長く続けている祭だから、やめる必要もないと思う」「毎年こうらしいの行事で、ふるくから伝わってきたものを急にやめるのはよくないから」といった回答など、古くから続いてきた祭りであることに言及する回答が10件見られた。この他にも、「伊豆の国市の大事なイベントだから」「地域の行事として大切に続けていってほしい」「ここ伊豆の国市で有名にしたいから」「伊豆の国市以

外の人たちに知ってもらえて、その人たちが観光をしにきていて、いいから」「この行事によって、長岡が発展していったらうれしいから」など、「地域」(8件)、「伊豆の国」(5件)、「伊豆長岡」(4件)など、地域アイデンティティを構成する要素として認識されている実態を読み取ることもできる。

鶴ばらい祭りが始まってから約半世紀を迎える現在、温泉観光地が形成される過程で生み出された新たなイベントは、今では地域文化として定着しつつある。とりわけ、1992年の段階でその担い手を中学生に委ねたことによって、他の多くの「ふるさとの祭り」が抱える担い手不足による衰退を免れたのみならず、伝統化を促進する効果ももたらしたのではないだろうか。

第2章のまとめ

民間伝承に由来する妖怪の多くは、特定の共同体に属する人々が、ある状況や環境に対する不可思議な感覚を共有する過程で生み出されてきた。一方で、鶴は『平家物語』で創作された存在が様々なメディアによって増幅されながら、その妖怪像が構築されてきた。その意味において、「大きな物語」の中に組み込まれた妖怪存在と言えよう。そこでは、夜に鳴く鳥の鳴き声から発想された聴覚的怪異が、文学作品上の記述を経て視覚的妖怪へと推移する過程を重ねることができる。そのため、それぞれの時代の解釈に応じて再生されてきた鶴の姿があり、そのどれもが真正な存在である。このように、鶴が数百年にわたって人々の関心を集め続けてきたという事実には、時代を超えても絶えることのない想像力の作用を見出すことができる。近年の地域社会における妖怪文化の受容も、そうした新たな創造的伝承行為の一つとして位置付けられるのではないだろうか。

妖怪文化の活用の根幹には、妖怪キャラクターに対する関心が多かれ少なかれ存在する。本章で見てきたように、「鶴」が何百年にも渡ってある種の文化資源として受け継がれてきた背景には、この妖怪の持つ存在感があることを否定できない。さらに、そうした「鶴」をめぐる伝承が各地に伝播し、定着しているという事実には、今日の言葉を使えば「コンテンツ・ツーリズム」の力学が働いていると言えるのではないだろうか。そもそも、妖怪伝承の中には特定の場所と結びついた「伝説」として語られているものも少なくないが、そうした場所との結びつきに着目し、有名な物語と地域とを接続させることによって妖怪文化の再創造がなされてきた点に、妖怪文化の活用を考える視点を見出すことができる。

『平家物語』の鶴退治説話は、絵馬に描かれたり、謡曲や歌舞伎として演じられたりしながら、歴史上の伝説として各地に伝播してきた。それらは、各々の時代の必要性に応じて、多様な表現手段を通して再生されてきたわけだが、伊豆長岡温泉の場合、地域ゆかりの菖蒲御前と結びつけることで「鶴ばらい祭り」として再創造された。1966年に始まったこの祭りの背景には、温泉観光地としての個性を形成していく上での「コマーシャルイベント」の創設とふるさとへの関心の高まりとともに生じた民衆文化再興の動きを指摘することができる。

ここで改めて、鶴という妖怪が再創造されてきた過程を辿ると、以下のようにまとめることができる。はじめに、夜ごとに不思議な音が聞こえるという「体験」（物語上の体験ではあるが）があり、その場面が鶴退治の説話として『平家物語』の一部を構成することになる。その後、そうして創作された物語は琵琶法師による語りや絵馬を通して各地に伝播していくことになる。また、世阿弥によって謡曲として再創造されることで、有名な物語として人々に親しまれることになる。さらに、伊豆長岡の場合は、周知の物語としての鶴退治を地域の祭りとして活用することで、新たな地域資源として再生させている。

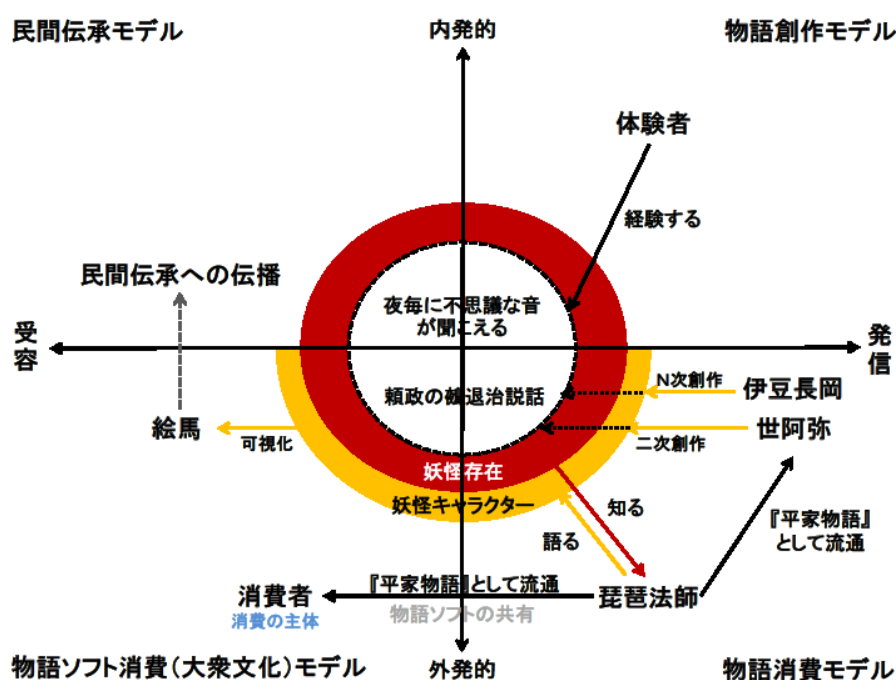


図 2-31 鶴の再創造モデル

従来の地域社会では語られていなかった新たな物語が生み出されているという点から見れば、ここで演じられている鶴は歴史的に見ても民俗学的に見ても真正な伝承に基づくものではない。しかし、伊豆長岡温泉の地域形成史の一部をなすこの祭りには、1960年代の温泉観光地の記憶を伝える文化資源としての価値を見出すことができる。その後、地域を取り巻く状況が変化しながらも、1992年に中学生に引き継がれ、現在まで脈々と受け継がれているという事実は、鶴ばらい祭りが地域文化として定着しつつある現状を事例そのものが語っている。

また、現在の祭りの担い手である中学生に対するアンケート調査からも明らかにされたように、今や鶴ばらい祭りは地域の「伝統」として価値づけられている。温泉観光地の活性化のためにつくりだされた新しいイベントが、約 50 年を経て伝統芸能へと移行しつつある過程には、地域社会における民衆文化の創造に向けたダイナミズムを重ねることができ

るのではないだろうか。

- 1 西郷信綱『古事記注釈 第三巻』筑摩書房、2005 年、97 頁。
- 2 『万葉集』における「讃岐の国の安益の郡に幸す時に、軍王が山を見て作る歌」(1-5)を指している。
- 3 『新潮日本古典集成 徒然草』(木藤才蔵校注)新潮社、1977 年、221-222 頁。
- 4 五味文彦ほか(編)『現代語訳 吾妻鏡 11 将軍と執権』吉川弘文館、2012 年。
- 5 このように二種の説話を連記しているのは、「延喜本」「覚一本」「平松本」「平がな百二十句本」「城方本」「佐佐木本」等がある。これに対して、頼政挙兵の巻に第一説話のみを収録するのは「源平盛衰記」「四部本」「百二十句本」「中院本」である。赤松俊秀「頼政説話について(下) 平家物語の原本についての続論」『文学』第 40 巻第 8 号、岩波書店、1972 年、73-93 頁。
- 6 福田晃『軍記物語と民間伝承』岩崎美術社、1972 年、22 頁。
- 7 『十訓抄全註釈』(河村全二註釈)新典社、1994 年、707-708 頁
- 8 赤松俊秀「頼政説話について(下) 平家物語の原本についての続論」前掲書、91 頁。
- 9 この場面に基づいて謡曲「頼政」が作曲されている。
- 10 那谷敏郎『「魔」の世界』新潮選書、1986 年、192 頁。
- 11 草森伸一「妖怪退治論」粕三平『お化け図絵』芳賀書店、1973 年、167 頁。
- 12 柳田國男『木思石語』三元社、1942 年、159 頁。
- 13 赤松、前掲書、92 頁。
- 14 この部分は、『伊勢物語』87 段における在原業平の歌「芦の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄揚の小櫛はささで来にけり」に着想を得ていることが指摘されている。
- 15 謡曲の「鶴」にも様々な解釈がなされている。例えば、金関猛は鶴に怯えているのが近衛天皇だけである点に注目し、「夜毎、怯えて泣き叫ぶ少年には、鶴の声で鳴きながらうつお舟に押し込められる化生の者の姿が重なり合う」と指摘している。また、近衛天皇の崩御後、保元の乱をきかっけに讃岐に流され天狗になった崇徳院をめぐる謡曲「松山天狗」を引用し、空の怪としての鶴と天狗の連続性に注目している。金関猛「鶴と天狗とヒルコと一能を中心に」『文学』第 2 巻第 6 号、岩波書店、2001 年。
- 16 野上豊一郎(編)『解註・謡曲全集 巻二』中央公論社、1949 年、101-114 頁。
- 17 蘆田伊人(編集校訂)『大日本地誌大系 38 摂陽群談』雄山閣、1971 年、160 頁。
- 18 例えば、巖谷小波は『東洋口碑大全』(上巻、博文館、1913 年、792-793 頁)の中で「鶴神の社」について「摂津葦屋浦に鶴神の社と云ふがある。昔し仁平三年近衛院の時、兵庫頭源頼政が射た鶴を、うつぼ舟に入れて西海へお流しになつた。所が夫れが此の浦へ漂着して、之に觸る者は悉く病にかかつたのである。そこで村民共は、之を地中に埋め、社を建てて鶴神社と崇め、又塚を築いて鶴塚と呼んだ。葦屋と西河との間にある」と記している。
- 19 芦屋市教育研究所『芦屋と古典文学』1978 年、109 頁。
- 20 近年では、芦屋市商工会と神戸芸術工科大学との産学連携事業として行われている「“芦屋四姉妹物語”制作プロジェクト」において、芦屋市内の商店街活性化や集客支援を目指した地域密着型のマンガの中に「鶴塚から逃げ出した妖怪」としてキャラクターとしての「ぬえ」が登場している。
- 21 松尾葦江『参考 源平盛衰記』臨川書店、1982 年。
- 22 「闘諍録」では、第十八段に「頼政、変化の者を射る事」として記載されている。福田豊彦、服部幸造『源平闘諍録(上)』講談社、1999 年、253 頁。
- 23 福田アジオほか(編)『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館、2000 年、295 頁。
- 24 那谷敏郎『「魔」の世界』新潮選書、1986 年、192 頁。
- 25 志賀忍「理斎随筆」日本随筆大成編輯部(編)『日本随筆大成 新装版』(第三期)1、吉川弘文館、1995 年、276 頁。
- 26 山田奨治「鳴弦臺目と鶴退治—俗信の生成過程—」小松和彦(編)『日本妖怪学大全』小学館、2003 年、519 頁。

-
- 27 同上、526 頁。
- 28 石子順造『小絵馬図譜』芳賀書店、1972 年、164 頁。
- 29 江戸時代初期の屏風絵《大森彦七屏風》には、『太平記』の記述に基づき、怪鳥としての「鶴」が図像化されているが、化鳥を取り巻く人々の配置などには清水寺の絵馬との構図上の類似性が見られる。この屏風絵は制作年代が不明であり、直接的な影響関係を断定することはできないが、清水寺以前に鶴が描かれていた可能性は否定できない。《大森彦七屏風》については美濃部重克、美濃部智子『酒呑童子絵を読む まつろわぬものの時空』三弥井書店、2009 年を参照。
- 30 土居次義『絵馬―清水寺―』清水寺、1981 年、105 頁。
- 31 『花洛繪馬評判』に掲載されている図版について、野間光辰は「解題」の中で「その縮圖は、比較的損傷剥落の少なき頃の状を寫し得て『扁額軌範』の圖を補ひ訂すことが出来る」と記している。
- 32 「扁額軌範」二編卷之上、新修京都叢書刊行會『新修京都叢書〔第 8 卷〕』臨川書店、1968 年所収。
- 33 鈴木繁『上毛俗話』第 17 集、上毛古文化協会、1961 年、12 頁。
- 34 明石染人『民藝としての繪馬の考察』芸艸堂、1929 年、98 頁。
- 35 志賀忍「理齋隨筆」前掲書、276 頁。
- 36 日野龍夫『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第 4 卷、臨川書店、1995 年、34 頁。
- 37 同上、39-40 頁。
- 38 一方で、粕三平は『お化け図絵』の中で北斎の『國文字鶴物語』の図版を引用しているが、文中では『源平盛衰記』に従い、「頭は猿、背中は虎、しっぽが狐で足は狸」（186 頁）としている。
- 39 山岡元隣「古今百物語評判」朝倉治彦『仮名草子集成』第 29 卷、東京堂出版、2001 年、54-55 頁。
- 40 江馬務『日本妖怪変化史』中央公論新社、13-14 頁、2004 年（原著 1923 年）。
- 41 金沢康隆『歌舞伎名作事典』青蛙房、1982 年（5 版）、224 頁。
- 42 關根默庵、小谷青楓（編）『新撰長唄全集』いろは書房、1916 年、152-153 頁。
- 43 小田治部太（編）『演藝畫報』第 20 年第 3 号、演藝畫報社、1926 年 3 月。同号に掲載された鬼太郎による「本郷座二月興行」の中で「新右衛門の鶴は、皮が重い故か、案外動けぬ」と評されている。
- 44 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室（編）『近代歌舞伎年表 大阪編 第八卷』八木書店、1993 年、486 頁。
- 45 国立劇場調査養成部調査資料課近代歌舞伎年表編纂室（編）『近代歌舞伎年表 京都編 第十卷』八木書店、2004 年、537 頁。
- 46 『幼年世界』（第二次）5 卷 6 号、博文館、1915 年 6 月、37 頁。
- 47 『怪獣大図鑑』朝日ソノラマ、1966 年（『大復刻 怪獣大図鑑』1997 年）。
- 48 『週刊少年マガジン』第 9 卷第 46 号（1967 年 10 月 8 日発行）に、「四谷怪談ウルトラ妖怪画報」（構成：大伴昌司、絵：南村喬之）と題した特集が組まれた中で、屋根の上から主人公の伊右衛門を攻撃する存在として「ぬえ」が登場する。
- 49 ただし、その正体は「安倍晴明」とであるという設定となっている。作中には「ただ“鶴”ってのは得体の知れねえもののふたつ名でな…」といったセリフが見られる。
- 50 柳田國男（川村杳樹名義）「頼政の墓（巫女考の九）」『郷土研究』第 1 卷第 9 号、1913 年 11 月、1 頁。
- 51 同上、4 頁。
- 52 頼政が隠れていたとされる窟。
- 53 柳田國男「頼政の墓（巫女考の九）」前掲書、6 頁。
- 54 福田アジオほか（編）『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館、2000 年、789 頁（菅原壽清）。
- 55 柳田國男「頼政の墓（巫女考の九）」前掲書、10 頁。
- 56 横田傳松「伊予の伝説」『旅と伝説』4 卷 1 号、三元社、1931 年、58 頁。

-
- 57 静岡県女子師範学校郷土史研究会（編）『静岡県伝説昔話集』長倉書店、1975年（原版1920年）、201頁。
- 58 浅井了意「京雀」寛文5年『新修京都叢書』第一巻、臨川書店、1965年、244頁。
- 59 孤松子（撰）「京羽二重」貞享2年『新修京都叢書』第二巻、臨川書店、1969年、64頁。
- 60 例えば、『元禄十四年實測大絵図』（慶應義塾大学図書館蔵）では、押小路は烏丸通を境に行き止まりになっている。
- 61 『日本歴史地名大系第二七巻 京都市の地名』平凡社、1979年、691頁。
- 62 鶴池碑をはじめ、京都市内の石碑については、京都市歴史資料館が運用する「いしぶみデータベース」に詳しい。
- 63 史蹟鶴塚頭彰會『ぬえづか譚』1962年、8頁。
- 64 同上、9頁。
- 65 宝塚大劇場『宝塚歌劇 解説と配役 9月星組公演』1956年、12頁。
- 66 長尾和明「「うつぼ舟」上演について」『歌劇』9月号（通巻372号）、宝塚歌劇団出版部、1956年、117頁。
- 67 宝塚大劇場『宝塚歌劇脚本集 9月星組公演』1956年、18頁。
- 68 同上、19頁。
- 69 長尾和明、前掲書、117頁。
- 70 脚本集、19頁。
- 71 脚本集、20頁。
- 72 『宝塚グラフ』11月号（通巻114号）、1956年、89頁。
- 73 『ぬえづか譚』。
- 74 三善貞司『大阪伝承地誌集成』清文堂、280頁、2008年。
- 75 史蹟鶴塚頭彰會、前掲書、14頁。
- 76 2011年11月22日に行った大阪府都島区での実地調査における聞き取りに基づく。
- 77 山村順次「日本における温泉地の発達と温泉地域社会の構築」『地理』52巻6号、古今書院、2007年6月、22頁。
- 78 例えば、白坂蕃は「大正～昭和初期には、当時の社会・経済事情を反映して、交通事情の改善が、温泉地の浴客の増加に直接的役割をはたすようになってきている」と指摘している。「伊豆半島における温泉観光集落の発達」『東京学芸大学紀要』第3部門 社会科学 第26集、1974年、80-115頁。
- 79 伊豆長岡町教育委員会（編集発行）『伊豆長岡町史 下巻』2005年、225頁。
- 80 関戸明子『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版、2007年、118頁。
- 81 同上、119頁。
- 82 柳田國男「頼政の墓（巫女考の九）」『郷土研究』第1巻第9号、1913年11月、6頁。
- 83 伊豆長岡町文化財保護審議会（編）『町史資料第5集「温泉編」』田方郡伊豆長岡町教育委員会、1993年、56-57頁。
- 84 石川弘義（編）『余暇の戦後史』東京書籍株式会社、1979年、152-153頁。
- 85 当時の定山溪観光協会の事務局長を務めた桐原西次の自筆の回想録（定山溪観光協会蔵）の記述を参照した。
- 86 伊豆長岡町教育委員会（編集発行）『伊豆長岡町史 下巻』2005年、636頁。
- 87 山村順二『温泉観光集落の発達と構造に関する研究—伊香保・鬼怒川・修善寺・伊豆長岡の比較—』東京教育大学学位論文、1968年、147頁。
- 88 『伊豆長岡町史』102頁。
- 89 伊豆長岡温泉の歴史については、以下の文献を参考資料として用いた。山村順二『温泉観光集落の発達と構造に関する研究—伊香保・鬼怒川・修善寺・伊豆長岡の比較—』（東京教育大学学位論文、1968年）
- 90 日本観光協会（編）『観光要覧（昭和47年版）』帝国地方行政学会、1972年、309頁。
- 91 笠原亮二「芸能を巡るもうひとつの『近代』—郷土舞踊と民謡の会の時代—」『藝能史研究』119号、1992年、49頁。

-
- ⁹² 同上、50 頁。
- ⁹³ 松平誠『祭りのゆくえー都市祝祭論』中央公論新社、2008 年、50 頁。
- ⁹⁴ 石川弘義、前掲書（注 6）、206-207 頁。
- ⁹⁵ 同上、207 頁。
- ⁹⁶ Bausinger, H. *Folk Culture in a World of Technology*, Indiana University Press, 1990, p.187。訳文は、河野眞「フォークロリズムからみた今日の民俗文化ードイツ民俗学の視角から」『三河民俗』3 号、1992 年を参照。
- ⁹⁷ 伊豆長岡町役場広報室（編集）『町報伊豆長岡』第 37 号、伊豆長岡町役場、1966 年 2 月。
- ⁹⁸ 2013 年 7 月 1 日に行った聞き取り調査より引用。聞き取り調査の対象人物の選出にあたっては、事前に伊豆の国市観光協会に連絡し、鶴ばらい祭りの歴史を語るに適した人物の紹介を受けた。
- ⁹⁹ 2013 年 7 月 1 日に行った聞き取り調査より引用。
- ¹⁰⁰ 伊豆長岡町役場（編集発行）『広報いずながおか』第 99 号、1972 年 2 月。
- ¹⁰¹ 2013 年 7 月 1 日に行った聞き取り調査より引用。
- ¹⁰² 伊豆長岡町役場（編集発行）『広報いずながおか』第 173 号、1979 年 2 月。
- ¹⁰³ 2013 年 7 月 1 日に行った聞き取り調査より引用。
- ¹⁰⁴ 伊豆長岡町役場（編集発行）『広報いずながおか』第 329 号、1992 年 2 月。
- ¹⁰⁵ 2013 年 7 月 1 日に行った聞き取り調査より引用。
- ¹⁰⁶ 今野圓輔『日本怪談集ー妖怪篇ー』社会思想社、1981 年、280 頁。

第3章 妖怪文化の現代的活用における地域性と大衆性—山城・大歩危妖怪村の事例から

本章の目的と方法

民俗文化として語られ、記録されてきた妖怪の多くは、民間信仰や共同体の記憶と密接に関わるものであった。ただし、その「民俗」の真正性に目を向けると、それらは必ずしも自明のものではないことが分かる。無論、「民俗」は常に変化していくべきものであるわけだが、時代や地域の要請に応じて「民俗の創出」とでも呼ぶべき現象が生じてきたことは既に指摘されている通りである。とりわけ、現代の妖怪文化を考察する場合、民間伝承としてのそれが大衆文化に置き換わりつつあることは注視すべきである。

本章では、徳島県三好市山城町を事例に、妖怪文化の現代的活用における地域性（あるいは民俗性）と大衆性との関係について考察を進めていく。剣山国立公園（1964年指定）の一部をなすこの地域は、大歩危小歩危に代表される景勝地や急流を活かしたラフティングが観光資源として売り出されているが、それと並行して2000年代以降は妖怪文化を地域資源として活用した取り組みを行っている。妖怪文化の資源化はいくつかの段階を経て達成されてきた。第1節では、民俗学者による文字化の段階について考察する。第2節では、マンガ家による画像化を中心に、大衆化の過程を辿る。第3節では、「こなきじじい」の伝承が再発見され、地域資源として活用されていく過程を考察する。その主体を担っているのが、任意の団体としての「四国の秘境山城・大歩危妖怪村」であり、2010



図3-1 大歩危遠景

年には博物館類似施設としての「妖怪屋敷」が開館された。山城町における妖怪文化の活用は、はじめは水木しげるのキャラクターに根差したコンテンツ・ツーリズムの様態を取っていたが、次第に地域固有の文化としての妖怪へと関心が移行しつつある。こうした取り組みが評価され、2013年には「サントリー地域文化賞」を受賞している。

確かに、現在では「民俗文化」と「大衆文化」が融合しながら、「地域文化」としての妖怪文化が創出されているわけだが、それでもなお地域性（あるいは民俗性）と大衆性との間のある種のゆらぎを見ることができる。第4節では、地域社会内部における妖怪観の多重性を図るために、地域住民への聞き取り調査を通して、現代の伝承の実態を明らかにした。これは、地域社会という共同体を対象とする妖怪文化の質的研究に向けた試みでもある。以上の観点から、民間伝承としての妖怪が地域文化に置き換わる活用モデルを提示することとしたい。

第1節 妖怪伝承の原像—民俗学者による記述を中心に

1-1. 山城町の地域性—「秘境」と「伝説」

民間伝承としての妖怪は、それが語られる環境と深い関係を持っていることも少なくない。山城町の場合、そうした伝承は地理的環境と歴史的要因に基づき形成されてきた。地理的環境として挙げられるのは、吉野川が長い時間をかけて大地を侵食したことにより形成された大小様々な谷地である。これらは、地質学的にも重要な意味を持っている。そうした自然環境が生み出した奇観は、今でこそ名勝「大歩危・小歩危¹⁾」として観光地化しているが、本質的に危険な地域であることは間違いない。そうした場所では、しばしば落石や土砂崩れといった自然災害が発生しており、それに巻き込まれるなどした共同体の記憶が伝承に託されて語られてきたことは想像に難くない。

そうした自然環境に加えて、「平家落人」に象徴される山に伝わる様々な物語が語り継がれてきた。例えば、壇ノ浦で入水したとされる安徳天皇が平国盛の導引によって祖谷山に入山したという口碑は、いわゆる史実とは異なるものの、当該地域では広く信じられてきた。実際、東祖谷には安徳天皇の火葬場跡とされる場所も残されている²⁾。こうした伝説の史実性に関する実証は別として、祖谷地方は少なくとも近世以前から様々な物語を内包する地域であった。

平家落人をめぐる伝説は各地でその類例が語られており、武田静澄が『落人伝説の旅』に掲載した「平家伝説地分布図」によれば、北は岩手県から南は奄美大島に至るまで、132か所もの地点が挙げられている³⁾。それゆえに、落人伝説そのものは、地域固有の文化である以上に、山深いことを示す物語の一つのパターンと見なすことができる。ただし、こうした物語が語られている背景には、この地域にも伝承の背景となる外部との人的交流があったことを裏付けている。実際、祖谷地方では「平家の赤旗」をめぐる伝承が信じられている。この存在が世に知られるようになったのは、1793（寛政 5）年に著された菊池武矩の『祖谷紀行』によるとされる⁴⁾。

近代になって道が整備されて以降、祖谷地方は「秘境」として人々の関心を集めてきた。例えば、1927年発行の『風景お國自慢』は、「祖谷溪」について「僻遠の深山に武家が逃げ込んだところとて、（中略）外來の文化に恵まるゝこともなく、いまだにその言語風俗は中世の遺風を留めて、一種の秘密境となつてゐる」と記している⁵⁾。また、1934年発行の『趣味の旅行案内』は、「祖谷溪」について「深山幽谷の奥にあるデルタ」であり、「人跡遠く千年以來、日本の文化と没交渉に、一團の人間が、古代そのまゝに生活してゐる特異の部落」とした上で、「五ヶの庄と共に、日本で不思議な原始生活の集團」と紹介している。また、「大歩危」「小歩危」については「奇怪極まりなき屈曲と、斷落の限りを展開して見せるところ」とある⁶⁾。

ここには、今日しばしば聞かれるような「三大秘境⁷⁾」といった言説は見られないが、「深山幽谷」「人跡遠く」といった地域イメージが形成されていたことが分かる。それまで外界とほとんど遮断されていた空間は、外側の眼差しによって「人跡未踏の地」として分類さ

れていった。もちろん、いわゆる「秘境」に対する関心は近代特有の現象ではなく、『遠山奇談』に代表されるように、近世の人々も都市から離れた山村に伝わる物語を記述してきた。柳田國男は、「東国古道記」の中で『遠山奇談』について「但しこの御蔭に遠山といふ山村が、急に京洛の人に著名になったといふことは有るかも知れない」と皮肉を帯びた表現とともに記しているのだが、秘境であることによって都市の人々の関心を集めやすいことは今も昔も変わらないようである。

そうした場所には「常民」とは異なる「山人」や「異人」が住まうとされ、柳田國男も吉野川上流を山人の「本據」の一つに挙げている⁸。そこには「山爺」と称される「形は瘦せたる老人なるが絶崖巉岩を行くこと平地の如」き異形の者がおり、「山民時として之を見る」と記されている⁹。

1-2. 山城町の妖怪伝承の実態—柳田國男「妖怪名彙」ほか

われわれは、文字として記録された資料を手掛かりに、かつての伝承を知ることができる。近代以降、山城町周辺にも民俗学者が足を踏み入れ、不可思議な現象や存在を語る民俗語彙が収集されていった。その一人である武田明は、1956年に刊行した『祖谷山民俗誌』の中で当時の状況について次のように記している。

祖谷山の如き山村ですら、もはや今日では、一人が話し出そうとするとそんなものはおきませんと真顔で打ち消す老人もあつた。しかし中には山中で逢つた妖怪変化のことを実感でもって熱心に話す人もある。¹⁰

ここには、当時の祖谷地方における地域住民自身の妖怪観があらわれている。ただ、既に述べてきたように多くの伝説を内包するこの地域には、潜在的に妖怪伝承を生み出し得る条件が備わっていた。

そもそも、妖怪伝承のほとんどは「常民」が暮らしの中で半ば無意識的に受け継いできた民俗語彙であり、そのごく一部が柳田國男の「妖怪名彙」等によって文字化され、今に伝えられている。そこで柳田が「資料¹¹」として掲げた妖怪の中には「ヤギョウサン」といった山城町ゆかりの伝承も採録されているのだが、本論では1938年6月20日付の『民間傳承』に掲載された「コナキヂヂ」に注目する。

コナキヂヂ 阿波の山分の村々で、山奥に居るといふ怪。形は爺だといふが赤兒の啼聲をする。或は赤兒の形に化けて山中で啼いてゐるともいふのはこしらへ話らしい。人が哀れに思つて抱上げると俄かに重く放さうとしてもしがみ付いて離れず、しまひには其人の命を取るなど、ウブメやウバリオンと近い話になつて居る。木屋平の村でゴギヤ啼きが來ると謂つて子供を嚇すのも、この兒啼爺のことをいふらしい。ゴギヤ——と啼いて山中をうろつく一本足の怪物といひ、又この物が啼くと地震があると

もいふ。¹²

この記述だけでは具体的な採話地域を判別することはできないが、同年 11 月 1 日付の『民間傳承』に掲載された武田明の「山村語彙」の中で「阿波三好郡三名村字平での聽書」として「コナキジジ」の名が挙げられている¹³。

コナキジジ 子供の啼聲を真似る怪。

これは、「妖怪名彙」を収集するにあたって「どうか是に近い話があつたら追加してもらいたい¹⁴」という柳田の発問に対する一つの返信と見ることもできるだろう¹⁵。柳田と武田が同じ地域で聞き取りを実施したのかは断定できないが、1938 年の段階で「コナキヂヂ」という民俗語彙が徳島県の山間部で語られていたという事実は認められる¹⁶。

実際、山城町の周辺に限らず、四国山中には赤児の泣き声にまつわる多くの伝承が残されている。高谷重夫は「祖谷山村の民俗」の中で「オギャアナキ」という妖怪について次のように記している¹⁷。

オギャアナキ 夜道で赤児のような泣き声をたてる。行ってみると姿が見えない。時には負うてくれと言って出て来る時もある。その時負い縄が短いから負えぬと云って断らねばならぬ。だから負い縄は片方を短く片方を長いように縋わなければならない（重末）。子供の時お祖母さんが栗拾いに行ったら真赤なボウズゴが泣いている（深淵）。

これも「コナキヂヂ」と同種の伝承として位置付けられるだろう。こうした音の正体については山鳥の鳴き声を聞き誤ったという説もある¹⁸。四国山中では広く語られる妖怪現象の一つであった。こうした現象をめぐる民俗語彙が文字化されることで、後世に受け継がれるべき基礎資料が形成された。

第 2 節 妖怪伝承の図像化－伝承と創作

2－1. 民俗（学）的妖怪像の大衆化－1960 年代の妖怪ブームを中心に

現代の妖怪観は民俗文化と大衆文化との間で揺れ動きながら形成されてきた。近代以降、柳田國男をはじめとする民俗学者によって収集されてきた妖怪伝承は、地域社会における生業や信仰に根差した民俗知識であり、民俗文化であった。その一方で、妖怪はキャラクターとして図像化されることで、そのイメージが視覚的に受容されてきた。こうして可視化されることにより、民衆の心意の反映であった妖怪が大衆文化として広く浸透していくことになる。

とりわけ、子どもを中心とする大衆文化の中に「妖怪」という言葉が氾濫していた 1960 年代後半の妖怪ブームに着目すると、そこでは、マンガ雑誌やテレビといった大衆文化の

発信装置を通して、妖怪イメージの構築が進められていった。この時期の特徴としては、怪獣、オバケ、スリラーといった雑多な要素が並立する中で、雑多な意味内容を含んでいた「妖怪」に一定の方向性が与えられていくことになる。1968年7月21日付の朝日新聞に次のような記事が掲載されている。

貸本屋のタナに妖怪変化が横行している。「少女スリラーもの」と呼ばれるマンガ単行本だ。最近、男の子向けのアクションものなどを抜き、貸本マンガ界の主流にのしあがった。ところが、このマンガの化け物、テレビマンガの妖怪と違って可愛げもユーモラスなところも皆無。底意地悪く、なんともうす気味が悪い。低学年では夜中にうなされる子どもまでいる。

ここで貸本マンガのジャンルとしての「怪奇スリラー」とテレビアニメの「オバケ」が混同しているように、多様なメディアを横断しながらブームが展開されることで、妖怪概念の多重性やゆらぎが生じていった。そこでは近代的感觉と前近代的感觉に加え、戦後文化に支えられた怪獣やオバケが誕生し、多種多様な「妖怪的なもの」が大衆文化として受容されていったが、最終的には「前近代的感觉」を備えた妖怪に収束していく。淘汰の過程を経て形成されてきた現代の妖怪観について、京極夏彦は「通俗的『妖怪』概念」という言葉を用いて考察している。学術用語としての「妖怪」が通俗語として解放される上で、1960年代後半の妖怪ブームは重要なターニングポイントであった。これらを体現しているのはまさに水木しげるの妖怪画なのだが、それらが「図鑑」を通して反復されることで、増幅、定着していった。

1960年代後半には、藤子不二雄「オバケのQ太郎¹⁹」（1964年『週刊少年サンデー』に連載開始）、手塚治虫「どろろ」（1967年『週刊少年サンデー』に連載開始）、椋図かずおの「猫目小僧」（1967年『少年画報』に連載開始）をはじめとする妖怪ものが同時多発的に生み出され、ブームの様相を呈していた。高橋明彦の言葉を借りれば「絶滅はしたが可能性としてあった『妖怪』のあり方²⁰」が交錯する妖怪概念の形成に向けた過渡期として位置付けることができる。

一方で、1966年に『週刊少年マガジン』誌上での連載が始まった「ゲゲゲの鬼太郎」は柳田國男をはじめとする伝承世界の妖怪を意識したものであった。伊藤正美の紙芝居に依拠したこの作品が自ずと前近代的な民間伝承に身を寄せていくのは必然的であった。しかし、同時代の批評の中には「ハカバキタロー²¹」と「墓場鬼太郎」を並べ、前者の「宗教的教訓臭を漂わせる“見世物”的グロテスク」と後者の「超現実絵画的なモダンさと反逆性」とを比較する言説も見られる²²。しかし、「ゲゲゲの鬼太郎」がテレビアニメ化されることによって、本来の「鬼太郎」が持っていた怪異性の大部分はそぎ落とされていくことになる。こうした状況について、石子順造は以下のように分析している。

鬼太郎シリーズが、テレビのマンガ番組となって流布されるや、たちまち初期のグロテスクさを失って、かわいすぎる正義の使者になり変っていく力学が、じつはキッチュのアクチュアリティでありながら、同時に大衆の思念の動性を、情報という形で管理していく社会構造そのものとしての「現代」のあらわれでもある。²³

言わば、大衆文化の構造の中に埋め込まれることによって、「ゲゲゲの鬼太郎」は大衆の人気を博していたわけだが、その背景にある種の情報操作を指摘した石子の視点は、今日の妖怪文化の背景を考える上でも示唆に富んでいる。「オバケの Q 太郎」と「ゲゲゲの鬼太郎」は、ともにテレビアニメ化を経て児童文化の中に妖怪やオバケという言葉を送らせていった。結果的に、両者の登場によってそれまでは曖昧だったオバケと妖怪の間に明確な認識の違いが生じていく。

2-2. 妖怪ブーム期における妖怪存在の再創造—物語からキャラクターへ

1960年代後半の大衆メディアを通じた現代の妖怪概念の形成期を経ることによって、それまでは少なからず体験や伝聞と共存していた妖怪文化は、知識や情報として集約されていった。そのような中で発行された佐藤有文の『日本妖怪図鑑』(1972年)は、「妖怪」に限らず「超能力」や「ミステリーゾーン」など、1970年代を席卷したオカルトブームと歩みを一にするものであった。そこでは、民俗学的な装いを帯びた水木しげるよろしい妖怪だけではなく、多様なイメージソースが用いられている。

『日本妖怪図鑑』に掲載された182の妖怪種目の中には、美術作品や文献からの引用が少なくない²⁴。これに加えて、マンガや映画などの同時代の大衆メディアも利用している。例えば、水木しげるが図像化した「あしまがり」に類似した画像が『日本妖怪図鑑』にも見られるのだが、そこでは妖怪の名前が「すねこすり」と記載されており、画像と名前のズレが生じていることが分かる。また、1960年代後半に公開された「妖怪百物語」「妖怪大戦争」「東海道お化け道中」のスチール写真がそのまま使われているものも見られる²⁵。佐藤自身が「いま大流行しているSF小説やマンガの主人公たちの先祖にあたるのが妖怪」とあると記しているように、『日本妖怪図鑑』はまさに古今の表象された妖怪たちを「図鑑」の名のもとに同列に配したものであった。その中には創作と思われる妖怪も含まれている。

佐藤有文と同時代で活動した山田野理夫は、1960年代から70年代にかけて怪談作家として著作を発表している。山田は、『怪談の世界』のあとがきの中で「民俗学・文学の融合、そしてその底流に美意識を汲み取って頂ける」ことを目的として掲げている²⁶。山田野理夫の著作の中でも1970年代に12巻にわたって発刊された『おばけ文庫』は、あたかも文章による妖怪名鑑の様相を呈している。例えば、「山のおばけ」を集めた第2巻には、「わいら」について以下のように掲載されている²⁷。

わいらのオスは土色で、メスは赤いそうだ。どちらも前足二本に一本ずつの、するど

いつめがはえている。

わいらはいつも山中にいて、ふもとはでてこない。

茨城県の野田元斎という医者がわいらのすがたをみた。

わいらは土をさくさくにぎって、モグラをたべていたという。

わいら妖怪については、まだくわしくはわかっていない。

石燕の『画图百鬼夜行』をもとに描かれた「わいら」について見てみると、水木しげるの『日本妖怪大全』では図像を踏襲しているのに対して、『日本妖怪図鑑』では羽が生え、あたかも怪獣のように誇張して描かれている。この絵を描いた石原豪人は同時代の少年マンガ雑誌において多くの怪獣や怪人を描いており、そうした体験が妖怪図鑑にも反映されている。今日でこそ、「わいら」は茨城県の妖怪として定着しているが、少なくとも現段階ではその伝承を裏付ける資料は発見されていない。山田野理夫は、京極夏彦との対談の中で「野田元斎」という固有名詞をつくったのかという質問に対して「いや、それはないな。忘れましたが、どこかで見たんでしょう、その名前を。」と答えている²⁸。「わいらを見た男」としての「石田元斎」も語りの対象となっている。

佐藤有文は『日本妖怪図鑑』の執筆にあたって、山田野理夫の『日本妖怪集』を参考にしたと考えられる。『日本妖怪集』では都道府県別に妖怪伝承が掲載されているのだが、このような分類によって妖怪を配列する手法はそれまでの妖怪本にはあまり見られないものであった。例えば、「火吹鳥」は、山田が『日本妖怪集』の中に掲載されている「肥前の火吹鳥」に基づいている。文化 13 年の話として肥前の国の上空に真赤な大鳥が飛んできて、するどいくちばしを開いて火を放ったという伝承が掲載されている²⁹。『日本妖怪図鑑』にも 1816 年のこととして、肥前の国の「火吹き鳥」が掲載されており、真っ赤で鋭いくちばしを持ち、口から炎を吐く怪獣さながらの妖怪が石原豪人によって描き出されている³⁰。ここでは、言葉の上での存在であった「火吹き鳥」が可視化され、挿絵画家の石原豪人によってあたかもフェニックスのように描かれている。

山田の怪談文学においても、ある程度の創作性が認められる。「頭白上人」については『郷土研究』1 巻 2 号において吉原頼雄による報告がある。近年では、つくば市桜古文書研究会による『頭白上人実録』と全国の子育て幽霊伝説」において詳細な考察がなされている。実際、この伝承は、かつて伊藤正美が「ハカバキタロー」において採用した怪談「子育て幽霊」と構造を等しくするものであり、江戸時代から定式化されてきた語りに依拠している。山田は、高木敏雄の記した「頭白山人」について「何幕物かの芝居を観る感じ」と評し、そこに「読物としての価値」を認めている³¹。実際、山田は『日本妖怪集』において茨城県を代表する妖怪伝承としてこの伝説を採録している。

山田の怪談文学について、文芸評論家の東雅夫は「確固たる怪談観・文学観にもとづいて書き継がれたこれらの著作が、文芸としての怪談啓蒙に果たした役割には多大なものがあつた」と記している³²。ここで、それらの怪談の情報源を辿っていくと、文字化された文

書によるものと口頭伝承を聞き取りしたものに分けることができる。文字化されているものについては、「頭白山人」のようにその典拠が明確に示されている場合、その由来を辿ることができるが、口頭伝承を記録したものについてはその情報源を辿ることは難しい。

佐藤有文の『日本妖怪図鑑』には、「頭白山人」に想を得たと思われる妖怪種目が掲載されている。「生き白子」と命名され、「築波山の地下のふかいところに、赤んぼうのまま百年間も生きていたという恐ろしい妖怪」とされ、「赤んぼうなのに、髪の毛が真っ白くて、地面の下から女の人の足をつかむ」とある³³。そこには、水木しげる風のイラストが付されることで妖怪存在としてのキャラクター化がなされているのだが、現段階では茨城県内の民俗誌の中に「生き白子」という言葉を見出すことはできない。しかし、筑波山が舞台とされていることと、髪の毛まで真っ白い赤子という設定には頭白山人伝説との類似性を指摘することができる。「生き白子」の場合、『日本妖怪図鑑』の中だけでの存在であり、その後の図鑑等に見ることはないが、民間伝承や伝説に由来する物語を脚色し、名前を与えて一個のキャラクターとして図像化していく過程には、書籍を媒介とする妖怪存在の再創造の一例を見ることができる。そうした書籍の読者が主に児童であったことから、体験に基づく伝承妖怪と情報に基づく創造妖怪とが曖昧になって受容されてきた。

結果的に、民俗学的ではあっても民俗学そのものではない妖怪が「図鑑」としてリスト化されることで妖怪伝承の地域固有性が均質化され、視覚的インパクトを持つキャラクターとして独り歩きしていくという現象が見られるようになる。高度経済成長期を通じた妖怪ブームは、それまでに蓄積されてきた妖怪文化を基盤に、マンガやアニメといった同時代のメディアを通して民俗学的妖怪観とは異なる大衆的な妖怪観へと再構築していった。それらはかわいいオバケやキッチュな怪獣として受容されながらも、最終的には水木しげるの作品へと集約されることで、確固たる妖怪イメージが形成されていくことになる。

2-3. 水木しげるによる「こなきじじい」の創造以降—知識としての妖怪へ

民俗語彙としての「コナキヂヂ」は確かに語られてはいたものの、その伝承が必ずしも地域全域に浸透していたわけではなかった。この地域には野鹿池の龍神など、集落全体に周知された伝説も存在しているのだが、それと比べて「コナキヂヂ」はきわめて個人的な体験に基づいており、何らかの信仰に基づく存在でもない。それゆえに、戦後になるとその語彙さえもがほとんど途絶えていくのだが、それにとって代わるように水木しげるのマンガが誕生した。

1966年3月20日付の『週刊少年マガジン』では、「深夜の墓場にあつまる妖怪たち」の中に「徳島県の山おくにいるおばけ」として「子なきじじい」が登場する³⁴。ここでは、読者層である子ども向けに柳田國男の文章が翻案されている。また、同年4月17日発行の『週刊少年マガジン』では、「墓場の鬼太郎」のキャラクターとして、「子なきじじい」「すなかけばあ」「一反もめん」「ぬりかべ」が「選出」されている³⁵。これらはいずれも柳田の「妖怪名彙」に採録されている妖怪を水木しげるが図像化したものである。

当時の『週刊少年マガジン』はマンガ雑誌としての成長期にあり、1966年12月24日発行号では100万部の大台を突破している³⁶。また、1968年には「ゲゲゲの鬼太郎」としてアニメ化されるなど、口頭伝承に代わって様々な大衆メディアによってその名前が拡散し、全国の少年たちの脳裏に定着していった。今や、「こなきじじい」を語る上で、そのイメージを抜きにしては考えられない。言わば、現在の「こなきじじい」像は水木しげるの手によって創造されたものなのである³⁷。

1968年に『週刊少年マガジン』の増刊号として発行された水木しげるの『日本妖怪大全』には98の妖怪種目が掲載された。『日本妖怪大全』に掲載された妖怪には、大きく分けて次の4つのタイプが存在する。第一に、過去に描かれていた画像を踏襲したものが62体存在する。その中でも鳥山石燕の『画図百鬼夜行』に題を得たものが57体を占めている。ただし、「山精」のように原典では一本足の妖怪と記述されているにもかかわらず、二本足で描かれているなど、若干のイメージのズレも見られる。また、竹原春泉の『絵本百物語』を底本とするものも5体描かれており、「小豆洗い」では画面上にオノマトペが描き込まれることでマンガ表現として再生されている。また、それまで名前のなかった妖怪に名前を与えた。「首かじり」と命名されたことは既に知られている通りである。この妖怪については、後述する佐藤有文の『日本妖怪図鑑』にも引き継がれ、ある種の日本妖怪のスタンダードとして成立していくことになる。第二に、柳田國男の「妖怪名彙」に記載がある妖怪を図像化したものが17体描かれている。最後に、出典不明の創作妖怪も含まれている。時代背景が異なる多種多様な妖怪を図鑑として一括りにすることで、妖怪観の一つの典型が生み出されてきた。

ここには柳田の「妖怪名彙」から水木の妖怪画への転生という新たな伝承形態が生じている。すなわち、「形は爺」という記述を手掛かりに、蓑や杖などの持物によって民俗学的な性質を帯びた図像として新たな「妖怪イメージ」が形成されているわけである。そして、そうした妖怪観が京極夏彦のいう「通俗的妖怪」として何の疑問もなく流布している点に、現代の妖怪伝承の大きな特徴がある。民俗学者の池田弥三郎は「伝説的・伝承的存在の妖怪が、描かれて妖怪画となるが、その画かれた妖怪が、逆に妖怪に影響を与えて、妖怪の特質をきめていったりする」ことを指摘している³⁸。水木しげるの妖怪画は、まさに「こなきじじい」という妖怪の特質を確定させたと言えよう。しかも、地域の外側において、である。

水木しげるによって、極めてマイナーな伝承が、一個のキャラクターとして昇華された。その意味において、それらのメディアにおける妖怪の出現率が多かれ少なかれ調査結果にもあらわれることになる。このように、大衆メディアを通して妖怪が再定義されてきた。その結果、個人の著作物であるはずの妖怪イメージが民間伝承そのものに置き換わりつつある現象が生じている。実際、水木以降に出版された妖怪図鑑の多くは、「ゴギャンナキ」や「オンギャンナキ」といった同種の伝承が存在しているにもかかわらず、「こなきじじい」の名前が選択されている。こうして一地域で語られていた「後世に残るはずもない個人的な

言説³⁹⁾が既成事実として形を得て、日本を代表する妖怪として認識されるようになっていった。

このように、大衆文化化の過程を経ることによって、民間伝承として語られる体験に基づく妖怪存在は、地域から離れた場所で知識や情報として提供されていくことになる。以下に示す表は、水木しげる以降に出版された妖怪図鑑における「こなきじじい」の掲載をまとめたものである。本節で取り上げてきた佐藤有文や山田野理夫をはじめ、多くの出版物に掲載された「こなきじじい」は、まさに日本妖怪のスタンダードとしての地位を確立していくわけである。

表 3-1 妖怪図鑑における「こなきじじい」の掲載状況

書名	編著者名	出版年	出版社	表記	備考
日本妖怪大全	水木しげる	1968 年	講談社	こなき爺	四国地方 ※週刊少年マガジン 臨時増刊として発行
日本妖怪図鑑	佐藤有文	1972 年	立風書房	子泣きじじい	徳島県
ふるさとの妖怪考	水木しげる	1974 年	じゃこめてい出版	子泣き爺	四国の山奥
水木しげるお化け絵文庫	水木しげる	1975 年	彌生書房	児啼爺	徳島県の山奥 児啼婆 ※1984 年に河出書房より 4 巻組の文庫として出版
おばけ文庫② ぬらりひょん	山田野理夫	1976 年	太平出版社	子なきじじ	徳島県
妖怪大全科	佐藤有文	1980 年	秋田書店	子泣きじじい	四国地方の山奥
妖怪・幽霊大百科	長瀬謙彰（編）	1982 年	勁文社	コナキジジ	深い山の中
日本の妖怪なぞとふしぎ	佐藤有文	1983 年		こなきじじい	
日本の妖怪大図鑑	中岡俊哉	1984 年	二見書房		
妖怪ぞくぞく事典	千葉幹夫（文） 三谷鞠彦（絵）	1989 年	小峰書店	子泣きじじい	四国 ごぎゃなき
幻想世界の住人たちⅣ	多田克己	1990 年	新紀元社	子泣き爺	徳島県 オギヤナキ／ゴギヤナキ
妖怪お化け雑学事典	千葉幹夫（文） 三谷鞠彦（絵）	1991 年	講談社	子啼き爺	徳島県 芥子坊主、ゴギヤナキと合わせて「山中にひびく赤ん坊の声」の怪異として紹介される。
妖怪クラブにおいでよ！	並木伸一郎（監修）	1993 年	学習研究社		
【妖怪】の謎と暗号	歴史の謎研究会	1997 年	青春出版社	こなきじじい	徳島県
妖怪の本		1999 年	学習研究社	子泣き爺	徳島県
百鬼夜行解体新書	村上健司	2000 年		子泣きじじい	

日本の妖怪百科 1 山の妖怪	岩井宏實（監修）	2000 年	河出書房新社	コナキ爺	徳島県 ゴギヤナキ、オギヤナキ、粉挽き爺
妖怪の大常識	日野日出志（監修）	2004 年	ポプラ社	こなきじじ／子泣爺	徳島県 ごぎやなき
につぼん妖怪大図鑑	常光徹（監修）			子泣き爺	四国

第3節 妖怪伝承の資源化—地域再生の素材として

3-1. 伝承の再発見—地域性の回復

潜伏期間を経て、改めてこなきじじい地域で日の目を浴びるきっかけとなったのが、郷土史家の多喜田昌裕による調査である。多喜田は柳田や武田の文献から山城町の上名平集落に辿りつき、実際に話を聞いたことがある3名の地域住民から聞き取りを行い、「こなきじじい」の伝承地を突き止めた⁴⁰。とは言え、そこから浮かび上がってきた伝承は、一般に流布しているイメージとは一致せず、語り手によってもその内容に違いがあった⁴¹。ここから、「不確かなものたちが偶然にも合体や誤解や言い間違いや聞き間違いなどにより武田明・柳田国男の妖怪となり、今日に至っている⁴²」と推論している。

この伝承の発掘をきっかけに妖怪を活用した地域おこしが始まる。活動の当初にその母体となっていたのは、1997年に結成された地域ボランティア団体「藤川谷の会」である。この会は、吉野川に注ぐ「藤川谷周辺の藤の花や、紅葉、山吹などを育てつつ清流をいかし溪谷美の保全発展⁴³」を目指し、紅葉の植樹や森林整備などを進めていた⁴⁴。1998年度以降は、「郷土の森林保全活動推進事業」と称して、山の木々の下刈り作業や間伐作業を行ってきた。藤川谷を取り囲む山々は、かつては一帯が集落共有の萱場であり、肥料や燃料の供給源として往時は頻繁に人の手が入り里山の環境が整えられていた。しかし、近年では化学肥料や人手不足などにより雑木林化が進行し、従来の機能はほとんど失われている。藤川谷の会に所属する地域住民の尽力もあり現在も萱場の一部が残っているが、人々が行き交っていた頃を取り戻すには至っていない。「こなきじじい」はその萱場と集落とをつなぐ道中に現れたとされる。



図 3-2 コナキジジの伝承が残るアザミ峠
(徳島県三好市山城町)

しかし、生活様式の変化とともにそこを通る住民がいなくなり、伝承活動も衰退していった。そんな中、藤川谷の会の活動と時期を同じくして「こなきじじい」が再発見されたことから、街道沿いに児啼爺の像を設立する運動へとつながっていった。「児啼爺除幕式経過報告」によれば、1999年10月に多喜田昌裕が児啼爺の伝承者に像の建立を提案し、設置場所等に関する検討が始まった。2001年3月に藤川谷の会の総会において同会が設置主

体となって児啼爺像を建立することが決まり、全国から寄付金を募り、同年 11 月には「もみじ祭り」において除幕式が行われた。こうした経緯を経て誕生した児啼爺像は地域を象徴する観光資源として多くのメディアに取り上げられ、藤川谷沿いにも足を運ぶ観光客が増えていった。

3-2. 伝承空間の環境整備—四国の秘境山城・大歩危妖怪村の誕生

石像の設置により、当初の目的であった紅葉と並行して妖怪というキーワードが藤川谷の会の活動指針となり、藤川谷沿いに妖怪街道を整備する事業が進められた。2002 年に提案された「妖怪街道（藤川街道）構想（案）」では「21 世紀はじめの年に藤川谷に児泣き爺像が建立された、今日珍しさもあって訪れる客はあるもののもっと時間をかけて散策するルートとしては極めて貧弱である」という課題を解決すべく「ラピス・まんなかを起点として半日程度で散策できるコース作り」が提案されている⁴⁵。この段階では「県道擁壁に妖怪の絵を書き妖怪街道として観光名所として売り出す」構想が打ち出されていたが、実際には木彫の妖怪像や案内板が作成され、道沿いに設置された。



図 3-3 街道沿いに設置された一つ目入道の像（徳島県三好市山城町）

妖怪を地域資源として活用する過程で、藤川谷の会が主催する「もみじ祭り」も 2002 年から「妖怪もみじ祭り」に名称を変更した。そこでは、地域住民が妖怪の着ぐるみを身にまとった妖怪パレードや小学生による妖怪みこしが披露されたり、「妖怪鍋⁴⁶」がふるまわれたりすることでのぎわいを創出している。2008 年には「過疎の進行を何とか食い止めるため、地域にある資源（地元に伝わる妖怪伝説等、険しい自然条件、高齢者を核とした地域力、大歩危祖谷の観光と連携）を掘り起こし、全国に無い地域の妖怪を中心とした町づくりに取り組み地域の再生を図る⁴⁷」ことを目指して「四国の秘境・山城大歩危村（以下、山城大歩危妖怪村）」が設立された。その計画書では「妖怪伝説」が地域資源の筆頭に挙げられ、「山城大歩危妖怪村」がその管理団体として示されている。



図 3-4 妖怪まつりの様子（2012 年 11 月 25 日撮影、徳島県三好市山城町）

このような取り組みは、いずれも妖怪伝承と地域社会とを結びつけることによって成立している。しかしながら、その出発点となっているのが大衆化された妖怪存在としての「児

啼爺」である点は注目すべきであろう。藤川谷沿いに建立された石像も、水木しげるの描いたイメージに基づくものであり、その意味において必ずしも民間伝承に根差したものではない。こうして生み出された地域性は、エドワード・レルフの言葉を借りれば「場所の大衆的アイデンティティ」に依拠したものと言えよう。レルフは、大衆化された場所について「マス・メディアによって多少とも既成のものとして与えられるため、直接経験とはほど遠い大衆的合意の上に立つものである」と同時に「場所アイデンティティの個人的経験や象徴的特質に入り込んでそれを蝕むために、広まりやすい」と分析している⁴⁸。その結果、「大衆の価値観と企まれた流行を反映し」、「本物性をもつ多様な場所づくりを捨てて、場所なき都市王国、汎世界的な景観、そして『没場所性』へと向かうことになる⁴⁹。

無論、大歩危の場合は急傾斜地に村落が形成された特異な景観を有しているため、外部資本が村落の内部にまで入り込むことはほとんどなく、少なくとも都市部でなされているような「没場所性」は起こりにくい。「児啼爺」の石像も、地域全体の場所性に影響を与えるものではなく、一つの撮影スポットに過ぎない。とは言え、既に述べてきたように、共同体で共有されてきた民間伝承と言い難い「コナキジジ」が、地域を代表する妖怪種目として発信され続けることによって、その後の伝承活動に場所の大衆化へと向かう力学が働くことは否定できない。こうした現象に対する危機感は、多かれ少なかれ活動の主体である「山城大歩危妖怪村」にも共有されている。例えば、妖怪まつりに登場する着ぐるみを一つとっても、2010年までは「鬼太郎」「ねずみ男」「砂かけばばあ」といったいわゆる「ゲゲゲファミリー」が顔を揃えていたのだが、それ以降は「児啼爺」のみが登場している。無論、こうした変化の背景にはキャラクターの使用に係るプロダクションとの契約もあるわけだが、それと同時に地域独自の妖怪種目に対する意識の高まりを指摘することもできよう。そこでは、地域住民による妖怪伝承の発掘と活用が同時並行的に実践されている。

3-3. 妖怪屋敷の開館―「道の駅博物館」としての機能

大歩危における妖怪文化の活用という点から、2010年に開館した博物館類似施設「妖怪屋敷」も注目に値する。そこでは、大歩危妖怪村のメンバーによって発掘された地域の妖怪伝承が、地域住民の手作り人形によって造形化され、出現場所によって分類、展示されている。

妖怪屋敷は「道の駅」に併設された展示施設である。そもそも、道の駅とは一般道路に設けられた誰にでも自由に立ち寄ることができる休憩場所であり、2013年3月現在で全国に1004か所設置されている。1991年に山口、岐阜、栃木県で実験



図 3-5 妖怪屋敷の展示風景

が行われ、1993 年 4 月に全国 103 か所が道の駅として登録されて以降、現在まで全国各地に設置され続けている。国土交通省道路局によれば道の駅には 3 つの機能があり、第一に道路利用者のための「休憩機能」、第二に道路利用者や地域住民のための「情報発信機能」、第三に「道の駅」をきっかけに町と町とが手を結び活力ある地域づくりを行うための「地域の連携機能」である⁵⁰。こうした機能を実現させるために、駐車場、トイレ、無料休憩所、飲食施設といった設備から、地域情報提供施設、温泉、公園、展望台、体験施設、宿泊施設等、地域によって個性的な機能を兼ね備えた道の駅も少なくない。酒本宏は地域産業振興の視点からこれからの「道の駅」に求められる基本的な機能として「地域の恵みを提供する直売所」「地域の新たなビジネスを秘める加工品販売」「地産地消のレストラン」を挙げている⁵¹。

また、道の駅には博物館や展示施設が併設されることもあり、現在では 174 か所の道の駅が博物館または展示施設を有している⁵²。道の駅に併設された博物館は、地域に関する「情報発信機能」を担う施設として位置づけられる。落合知子は郷土博物館としての役割を十分に果たし得る施設として「道の駅博物館」を位置づけ、そこに求められるのは地域文化の情報発信機能であり、その地域の特色のある博物館を設置することである⁵³。「道の駅博物館」は「単なる休憩所としての道の駅というイメージを払拭させる力を持つ」と指摘しているが、確かに道の駅の機能を拡張することにより、当該地域の文化発信の拠点として整備することも可能となるであろう⁵⁴。このことは、道の駅の新たな可能性を開拓するのみならず、地域博物館のあり方を考える上でも重要な視点を提供している。

妖怪屋敷も、「道の駅博物館」の一例として位置づけることができる。そもそも、妖怪屋敷の入っている「ラピス大歩危」は、1996 年に石の博物館と観光情報館の複合施設として建てられたものであり、道の駅として建てられたものではなかった。石の博物館は大歩危峡が結晶片岩系の大崩壊層の背斜構造を有した地質であることから、館長が世界各国で収集してきた石のコレクションを含む資料を扱う地質学の博物館として設置され、学芸員も配置されていた。しかし、開館以降来館者数が減少し続けたことにより、2006 年 3 月以降は館長や学芸員が配置されない状態が続いている。その結果、企画展を開催することができなくなり、企画展示室が空いたままになっていた。こうした状況下、利用者の増加を目的に打ち出された企画が地域住民による手づくりの妖怪人形を展示するというものであった⁵⁵。2007 年に始まった妖怪展示室の試みはラピス大歩危の 2 階にある企画展示室 1 室を利用し、妖怪まつりで使われる着ぐるみが展示され、石の博物館のリニューアル時まで継続された。

このラピス大歩危が 2008 年に「道の駅大歩危」として認定を受けたことをきっかけに、24 時間使用できるトイレを整備するために 2010 年にリニューアルが行われ、一階部分が妖怪屋敷として整備された。石の博物館は公設の建物を民間が運営する第三セクター方式をとっていた。リニューアルにあたって妖怪屋敷をつくる際にも、市から建物の無償使用の許可を得たわけだが、その改修にあたっては展示物の作成等も含めて、地域住民の主導

によって進められた。財源としては、2008 年度に実施された「農村漁村地域力発掘支援モデル事業」の予算が充てられた。しかし、翌年度の行政刷新会議、いわゆる事業仕分けによって廃止された。以下、現在の妖怪屋敷と石の博物館の平面図を示す。

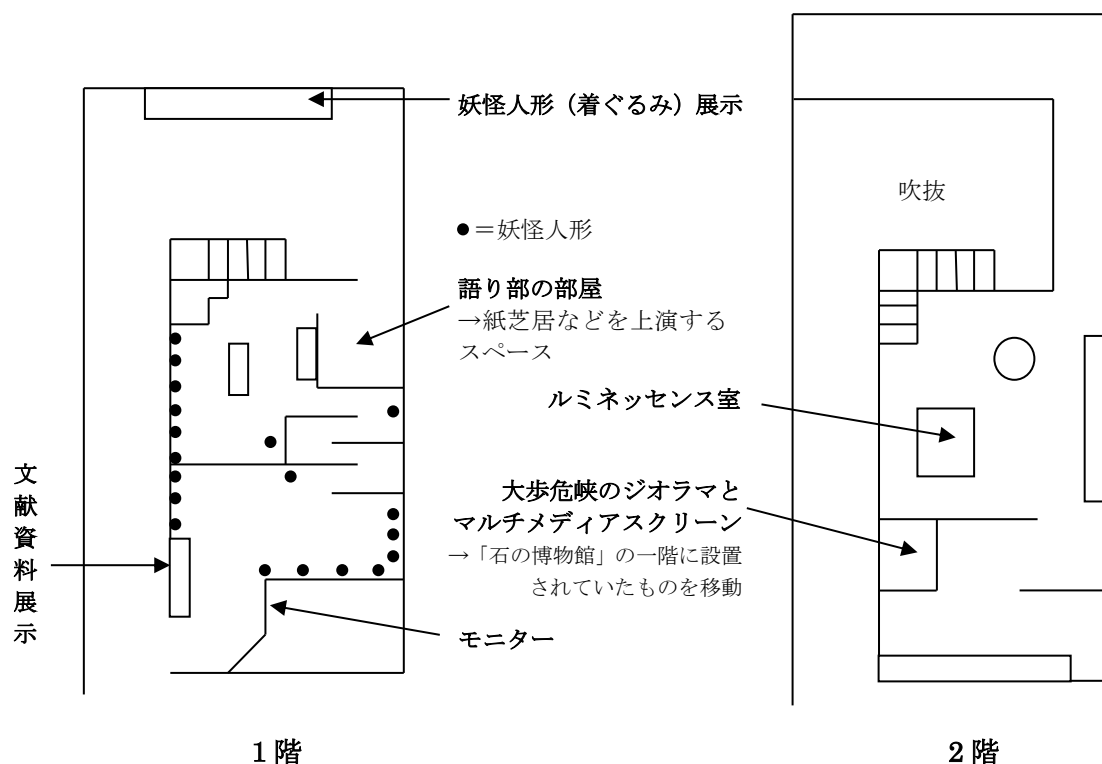
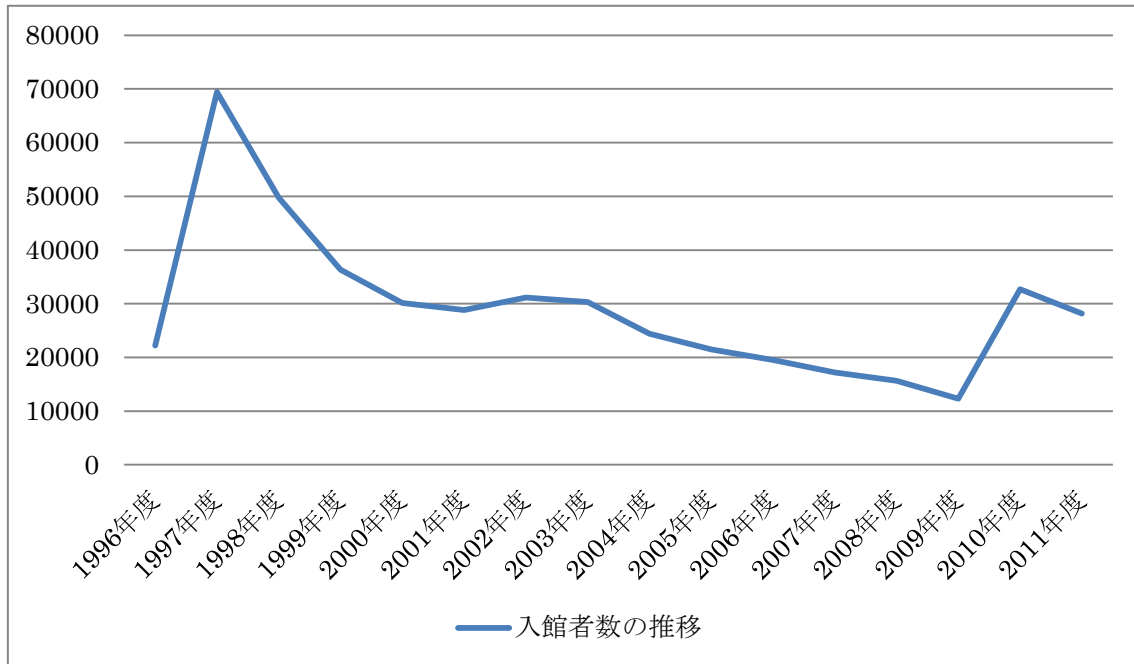


図 3-6 妖怪屋敷と石の博物館平面図

この大規模なリニューアルの背景には入館者数の減少に対する危惧を挙げることができる⁵⁶。【表 3-2】にも示したように、開館直後は 7 万人近い入館者数を数えていたが、その後の入館者数は減少を続けていることが分かる。こうした現象の背景には、展示の更新がほとんどなく、何度も足を運ぶリピーターが少ないことを挙げることができる。そのような課題を解決するためのリニューアルであったわけだが、そこで大きなテーマとして「妖怪」に着目した点にこの地域のブランディングの一つの方向性を見出すことができる。言わば、妖怪文化が資源的に活用されているわけである。

実際、リニューアル後の入館者数は、それまでの低迷に対して顕著な伸びを示している。無論、この背景には NHK の大河ドラマ「龍馬伝」による高知観光の増加と連続テレビドラマ小説「ゲゲゲの女房」による妖怪ブームなどのメディアに加えて、自動車専用道路の無料実験の影響を指摘することができる。また、リニューアル前に比べて子どもの入館者数が増加していることも一つの特徴である。

表 3-2 石の博物館・妖怪屋敷入館者数の推移



2010年11月22日と23日に実施した来館者調査では、有効回答数23件のうち、来館者の居住地域による割合は三好市内からの来館者が1件、三好市外で徳島県内在住の来館者が5件、徳島県外からの来館者が17件（内訳は香川6件、愛媛2件、高知1件、兵庫3件、広島1件、愛知1件、東京1件、無回答1件）であり、県外からの来館者の割合が高かった。山城町は四国の中心部に位置しているため、四国各県からの来館者が多いのは必然だが、遠方からの来館者も一定の割合を占めている。これは大歩危峡が観光地として既存の価値を有していることに由来する部分大きい。また、「道の駅」であることを踏まえれば、必ずしも妖怪屋敷に行くことを目的地として訪れるだけではなく、休憩のために偶々立ち寄った際に面白そうだから入館するというパターンも少なくない。「お化け屋敷」を髣髴とさせる「妖怪屋敷」とい名称もまた、人々の興味を引く一因になっていると考えられるが、それゆえに想像していたものと展示内容が異なるといった感想も聞かれた。

「妖怪屋敷」は大歩危観光の一端をなすことによって「道の駅博物館」としての役割を果たしている。その意味において、妖怪屋敷は「観光博物館」としての機能しているわけである。このことは、大歩危をめぐる観光ルートの中に「妖怪屋敷」が組み込まれていることから明らかにされる⁵⁷。大歩危を含む徳島県西部は、「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」として選定されている。そもそも、「観光圏」とは2008年に制定された「観光圏の整備による観光旅客の来訪及び滞在の促進に関する法律（観光圏整備法）」によれば、「滞在促進地区が存在し、かつ、自然、歴史、文化等において密接な関係が認められる観光地を一体とした区域であって、当該観光地相互間の連携により観光地の魅力と国際競争力を高めようとするもの」として定義されている⁵⁸。この法律に基づき、2013年に「新規観光圏

整備実施計画認定地域」の 6 地域のうちのひとつに選ばれたのが「にし阿波～剣山・吉野川観光圏（以下、にし阿波観光圏）」であった⁵⁹。

にし阿波観光圏の中で主たる滞在促進地区として想定されているのが「大歩危・祖谷滞在促進地区」であり、その中で「道の駅大歩危」はワンストップ窓口機能を持つ拠点として整備されることが予定されている。今や、大歩危は「観光」を主要産業の一つとして位置付けているわけであるが、そうした観光資源の構成要素の中に妖怪伝承が組み込まれている点に独自性を見出すことができる。急速に過疎化が進行する山城町は、地域社会そのものが消失するおそれがある限界集落であり、そうした危機意識が妖怪文化の活用による地域再生にもあらわれている。

3-4. エコミュージアムとしての山城大歩危妖怪村

しかし、妖怪屋敷は観光目的のみにおいて語ることはできない機能をも有している。すなわち、地域文化を継承し、学習する場としての側面である。観光も広い意味での学習活動であることは間違いないが、ここでは地域学習の拠点としての可能性に注目したい。その意味において、妖怪屋敷は「地域博物館」としても機能していることになる⁶⁰。

「妖怪屋敷」をはじめ、大歩危妖怪村が活用しようとしている対象は、物理的な「もの」として移動できるものではない。それらは共同体や家庭で伝承されてきた存在であるため、人々の語りを通して初めてその存在を感じることができる。そうした語りを文字化したり、それらを造形化したりすることは、その存在を共有可能な対象へと可視化することはできるが、本来の伝承は建物の中ではなく現地に点在している。しかも、そうした現場を訪れても、必ずしもモニュメンタルな対象を見ることはできない。そこでは、多かれ少なかれ場所と物語とをつなぐ実践が必要となるのだが、そうした側面を補完する活動として、「妖怪街道ウォーキング」といった取り組みは注目すべきであろう。そこでは、地域環境を踏まえた地域案内が大歩危妖怪村のメンバーによって実施されている。以下、ある日の道中における語りの一部を掲載する。



図 3-7 妖怪街道ウォーキングの様子

ここに、一つの彫り物がありまして、一つ目入道、蜘蛛とり淵の一つ目入道です。このお話は、これから約 6km 少々、この藤川谷に沿って奥に入りますと、この道路のすぐ下に、青々とした深い淵がございます。で、この淵にまつわる話でございます。で、ここに、昔ですね、山仕事をしながら生計を立てておりました、この集落の一人の男の人がおりました。ある日ですね、山仕事から帰って、昼の仕事に疲れたもんですから、うとうとと転寝をしておりました。ひゅいと目が覚めてみますとですね、自分の

足の親指と、それとその家の柱とをです、この間を蜘蛛が行ったり来たりしながら、この足をです、柱にこう縛り付けておる、いうことで、これはおかしいということになりまして、このですね、自分の足にかかっておった蜘蛛の糸を違う柱にかけときまして、で、またうとうとと寝込んでしまいました。そうしますと、夜中になりましてですね、大きな音とともに、家ごとこの淵の、家の前ですね、淵に引っ張り込まれました。で、この引っ張り込まれると同時にですね、この淵の中から、このような一つ目のですね、入道が出て参りまして、この人に襲い掛かりました。で、この方は命からがらですね、岸にはい上がりしましたが、やがてその淵の中に引っ張り込まれた事件がもとですね、息絶えてしまいました。で、この時のですね、これはいつ頃の話かと言いますと、大正 14 年の話でございまして、そこで住んでおったという方ですね、石碑がございまして、その石碑の死亡した年月日を見ますと、大正 14 年の、ここに書いてございますけれども、8 月の 2 日にこの事件がありましたので、まあ大正 14 年ということになりますと、まあだいたい 100 歳まではいきませんが、90 歳近い方ですと、まだ子供の頃に起こったような事件でございまして。この事件というのも、なぜこの事件が、事件というか事故があったかということなんですが、どうも、真実は、この地域は非常に雨量が多いです。ですからあの、川の近くに住居を立てておりますと、増水で、川の中に家ごと流されるという、こういう事態があったようございまして、そういうことのないように、川の近くには人家を建てるなよという、この戒めの話が、この蜘蛛とり淵の一つ目入道のお話と、こういうことがどうも落ちのようございまして。

妖怪街道ウォーキングのガイド役を務めているのは、必ずしも体験者や伝聞者自身ではない。しかし、これまでの活動を通して、いくつかの伝承がテキスト化されてきたことにより、そうした知識をもとに物語が成立している。このように、地域住民自身が「インタープリター」として来訪者を案内することにより、妖怪伝承が語られてきた環境を意識化することに成功している。

このように見ていくと、大歩危妖怪村の一連の活動は、「妖怪屋敷」をコア施設とするエコミュージアムの典型的な事例として位置付けることができる。『博物館学辞典』によれば、エコミュージアムとは「地域の文化や自然を保護し、住民やその居住地域について理論的、実践的に調査、地域の将来の問題をより深く理解することを住民に奨励するような、保存の場、研究所、学校という三つの機能を持つというもの」と定義される⁶¹。特定の領域内に存在するコア施設とサテライト（地域資源）をつなぐことによって地域全域を博物館化するエコミュージアムの実践は、野外博物館の特殊な事例と見なされることが多い。しかし、野外博物館の多くが従来の博物館の展示機能を拡張することに主眼を置いているのに対して、エコミュージアムは博物館そのものの考え方を拡張しているという点に特徴がある。ゆえに、野外博物館を伝統的博物館の一種として位置づけ、エコミュージアムと明確に区

別する研究者もいる⁶²。

そもそも、エコミュージアムは 1971 年に国際博物館会議で提唱された新しい構想による博物館概念であり、ユーク・ド・ヴァランやジョルジュ・アンリ・リヴィエールによって理論的な支柱が構築された。リヴィエールは、エコミュージアムを行政当局と住民がともに構想し、作り上げ、活用する手段であり、住民が自らを認識するために見つめ合う鏡であり、人と自然との表現であり、時間の表現であり、空間の解釈であり、研究所であり、保存機関であり、学校であると発展的に定義している（下線部筆者註）⁶³。エコミュージアムは特定の地域を構成する既存の資源を活用することが活動の本質をなしているため、資料の収集よりも地域との様々な関係性を構築することが重視される⁶⁴。エコミュージアムの整備にあたっては、新しい施設が立てられることもあるが、そうした「新しい博物館」の形態としてドミニク・プーロが挙げているのは「収集資料のない解説センター」と「住民が参加する環境博物館」である⁶⁵。前者は地域情報の発信に特化した「インタープリテーション・センター」と言い換えることができるだろう⁶⁶。しかしながら、クサビエ・グレフが述懐しているように、こうした「新しい博物館」はフランスでは「本当のミュージアムとしては認められてこなかった」のが実情であった⁶⁷。実際、エコミュージアムは博物館学の対象としてではなく、その成果を活用して地域の在り方を考える「新しい地域学」や「新しい社会学」として考察すべきだという指摘もなされている⁶⁸。

エコミュージアムの発想は、新しい地域づくりの方法としても有効であり、地域住民自身の学習活動の活性化という点からも意義深い動きと言える。大原一興は、従来の博物館が〈建物〉＋〈収集品〉＋〈専門化＋公衆〉であるのに対して、エコミュージアムでは〈領域〉＋〈遺産＋記憶〉＋〈住民〉が重視されるとして、「地域で博物館活動を進めることと住民自ら地域の生活文化を豊かにすること」を目的として据えている。このような観点から大歩危妖怪村の活動を見ると、そこではまさにエコミュージアムと呼ぶべき取り組みがなされていることが分かる。

まず、地域の窓口としても機能すべき「コア施設」として「道の駅大歩危」があり、地域の産物とともに「石の博物館」と「妖怪屋敷」という二つの分野に特化した博物館類似施設が整備されている。この施設自体は収蔵庫を持っているわけでもなく、資料収集も行っていないため、博物館の三大機能のうち「収集保存」に関する機能はほとんど担っていない。一方で、少なくとも「妖怪屋敷」に関して言えば、そこで展示されているのは、地域住民の調査によって発掘された民間伝承を可視化したものであり、地域住民の主導による博物館活動が実践されている。そして、それらが対象とする「資料」は、まさに地域全域に分散しながら点在している。その多くは地域住民の「語り」の中にもみ存在する無形文化ではあるが、大歩危妖怪村の活動を通して街道沿いに設置されたモニュメントが伝承環境を演出している。そうした地域を廻りながら、伝承の背景にある環境を体感することは、既述した「妖怪街道ウォーキング」においても意識的に取り組まれている。

妖怪伝承の発掘の中心人物である下岡昭一は、隆起と侵食の激しい大歩危小歩危が形成

した険しい景観が危ない場所を生み出し、その結果として妖怪伝承が生み出されたことに注目すべきだと語っている⁶⁹。その意味において、妖怪は地域環境を構成する要素として見なされていると言えよう。

第4節 現代の地域社会における妖怪観の継承に関する質的研究に向けて

4-1. 今日の妖怪伝承の実態—小学校での調査を通して

かつては暮らしの中で無意識的に語り伝えられてきた妖怪も、現在では妖怪まつりや妖怪屋敷などに伝承の場が移されている。では、その結果として継承される妖怪観とはどのようなものなのだろうか。例えば、地域にある K 小学校では、2004 年度（2004 年 4 月-2005 年 3 月）と 2008 年度（2008 年 4 月-2009 年 3 月）に「総合的な学習の時間」を使って妖怪学習に取り組んできた。これに先立って、児啼爺の石像が街道沿いに設置された 2001 年には児啼爺の伝承を発掘した多喜田昌裕による講演会が行われている。このように、山城町における妖怪伝承の発掘と並行して、それらが教材として活用されてきたことが分かる。この学校は 2011 年度を以て休校してしまったのだが、当時の授業を担当していた教諭への聞き取り等をもとに妖怪学習の概要をまとめる。

2004 年度は、児童が地域に残る妖怪伝承の調査を行い、それを発信するという学習活動が行われた。聞き取り調査については、児啼爺の伝承発祥地が校区内にある利点を活かし、伝承者に話を聞きに行く機会を得たという。実際に伝承の保持者から直接語りを聞くことで、地域人材の活用と多世代交流が達成されている。これらの学習成果は新聞やパンフレットにして配布された。

2008 年度は、「地域にかかわる体験的な活動を通して、主体的に課題を解決する能力と、郷土を愛する豊かな心を育て、自分のよりよい生き方を追求することができるようにする」ことが目標に掲げられ、平成 20 年度は「自分たちの住む地域の妖怪伝説に目を向け、地域に直接働きかける活動を通して、ふるさとを愛する豊かな心を育てる」ことが具体的な活動内容として設定された⁷⁰。そこでは、妖怪伝承を調べる班、妖怪まつりを調べる班、紙芝居について調べる班に分かれて学習活動を行った。この年に開催された文化祭では、下岡昭一による「上名の歴史と妖怪たち」と題した講演会が開催され、会場では妖怪まつり班の児童によって作成されたうちわが来場者に配布された。

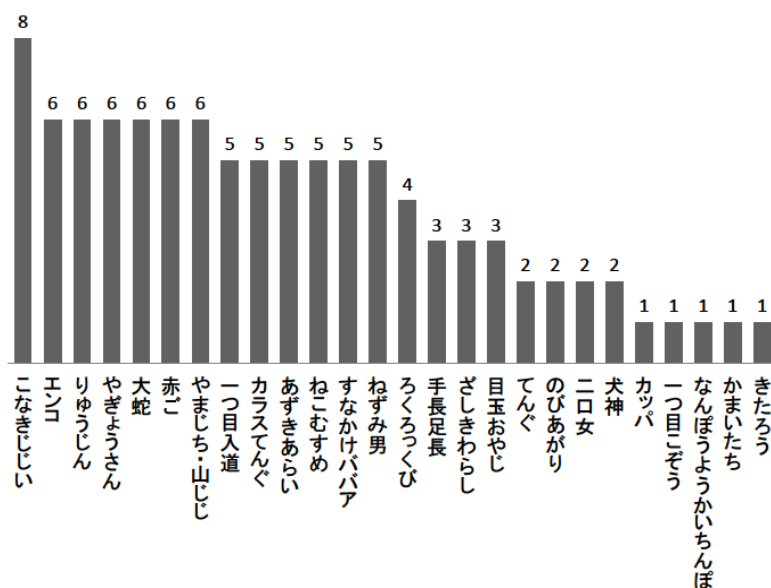
こうした学習活動は、学校と地域との深い関係の上に成り立っている。これらを可能にしている要因として、全校児童数が 10 名にも満たない小規模校であり、それゆえのフットワークの軽さを指摘できよう⁷¹。妖怪学習も地域住民の積極的な協力により成立しており、その一方で児童たちは毎年開催される「妖怪まつり」にも参加している⁷²。無論、K 小学校の総合的な学習の時間では、妖怪だけをテーマにしているわけではなく、2010 年度には地域住民の茶畑を借りて、年間を通して地場産業であるお茶づくりを体験し、収穫した茶葉は妖怪まつりの会場で児童の手によって販売された。このように、種々の地域文化学習の中に妖怪文化が組み込まれている点に、この地域の独自性を見ることができよう。

そもそも山城における妖怪伝承の多くは地域で生きる知恵を反映したものであり、子どもたちに危ない場所に近寄らないようにする教訓であったり、山道を歩く時に注意すべき場所を教えたりするための話であった。そのため、地域共同体にとって妖怪伝承を語ることとは無意識的な教育機能を担っているということになる。『日本民俗学入門』の中で、かつては妖怪や幽霊によって「児童を教育しようとしたことは決して小さい問題ではない」と述べられているように、妖怪伝承と教育あるいは躾は深い関係があった⁷³。しかし、今日では道路の舗装が進み上記のような危険な場所に近づく機会も減ったため、妖怪伝承の内包するメッセージは変質している。

今日では、妖怪文化を学ぶことによって地域学習を達成するという点に一つの価値を見出すことができる。ここには、妖怪そのものが教育の手段となっていたかつての躾の機能から、妖怪を学びの対象として位置付ける機能の転換がなされていると言えるだろう。すなわち、地域学習の入り口に妖怪伝承を位置づけることにより、地域の様々な側面に目を向けることができるようになる。例えば、妖怪伝承を学ぶ過程を通してかつての山の暮らしを学んだり、なぜ伝承が途絶えつつあるのかを考えたりすることによって、児童は自ずと地域生活の変化について学ぶことができる⁷⁴。言わば、妖怪文化を通して地域環境に対する理解が深められていくわけである。

そこで、地域における妖怪観の認識を明らかにするために、小学校の児童を対象とするアンケートとワークショップを実施した。当時の在籍児童数は8名であり、全校児童を対象に調査を行った。アンケートの結果、知っている妖怪の名前を問う項目については以下のような回答が得られた。

表 3-3 知っている妖怪の名前を挙げる質問項目に対する回答結果

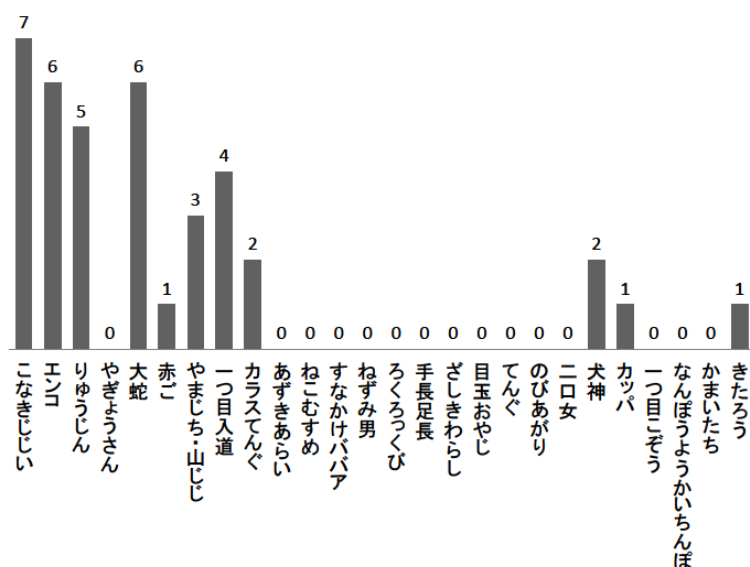


ここでは、8名全員が「こなきじい」を挙げている。これは、児啼爺が地域の象徴として

用いられていることから当然の結果と言えよう。その回答を概観すると、地域に縁のある妖怪と「ゲゲゲの鬼太郎」に登場する妖怪に大きく分けることができる。前者に該当するのは8名中6名が回答した「エンコ」「りゅうじん」「やぎょうさん」「大蛇」「赤ご」「やまじち」などである。一般名詞として広く流布している「河童」よりも地域固有の呼称である「エンコ」が挙げられている点には、妖怪学習の成果が反映されている。後者には、8名中5名が回答した「猫娘」「ねずみ男」「砂かけ婆」などが該当する。この結果からは、妖怪に関する知識の情報源として、大歩危妖怪村の活動によるものとテレビ等の大衆メディアによるものの二つが想定される。

続いて、地域の妖怪を問う項目に対しては、「こなきじじい」を除く「ゲゲゲファミリー」の多くがその対象から外れている。一方、高い回答率を示している「こなきじじい」「エンコ」「りゅうじん」「一つ目入道」「山じち」は、いずれも街道沿いに妖怪像が設置されており、日常的に目にする機会が多い妖怪たちである。それ以外の妖怪種目についても、妖怪屋敷や妖怪まつりで見ることができ、大歩危妖怪村の活動を通して発信されてきた妖怪観に基づいていることが分かる。

表 3-4 小学校の周りにいる妖怪の名前を挙げる質問項目に対する回答結果



こうしたアンケートを踏まえ、2011年10月14日に妖怪図鑑を作成するワークショップを実施した。地域の妖怪を伝えることを目標に掲げたこの学習活動では、ワークシートに妖怪の絵と説明を記入するという手法をとった。その結果、「こなきじじい」2点、「エンコ」2点、「夜行さん⁷⁵⁾」2点、「大蛇」2点、「龍神」1点、「一つ目入道」3点、「犬神」1点、「烏天狗」1点、「赤子」1点が選出された。以下、そこに描かれた妖怪を対象に分析する。

表 3-5 ワークショップで描かれた妖怪たち

No.	妖怪名	画像	説明
1	児啼爺		出現場所…ねずき山 ・赤ごの泣声をする。 ・人の体にくっつきだんだん石のようにして人をつぶす。 ・はだし
2	こなきじじい		出現場所…木の下 ひとのせなかにのっておもくしてひとがつぶれる。 せなかにみのをつけている。
3	エンコ		出現場所…どろめき谷 ・川に、ひきずりこまれる ・すもうがとくい
4	エンコ		出現場所…どろめき谷 ・手や足に水かきがついている。 ・きゅうりが大好き。 ・水の中にいる。
5	龍神		出現場所…野鹿の池山 角が生えている 雨をふらしてくれる うろこがある 野鹿の池山とは？ ・祭りが開かれる ・階段があつて上に上れる ・道の周りは沼

6	夜行さん		出現場所…夜の道 目は一つ つのがある かみやひげがある あずきをもっている
7	夜行さん		出現場所…夜道 頸のない馬に乗り馬の足で 人をける。 目は一つ 大きい
8	大蛇		出現場所…おはるの墓 ・大きい蛇 ・背中は青 ・人に化ける →下岡昭一さんに聞いた
9	大じゃ		出現場所…川のなか ひとをおどろかす。 ひとにばける。
10	赤子		出現場所…山おくの瀧 ・瀧のまわりを人が通ると泣く ・見た目は赤ちゃん

11	ひとつめに ゆどう		出現場所…川のなか ひとがねよるときにくもが きてじぶんのいとであしか らまいている。
12	ひとつめに ゆうど		出現場所…木のなか ひとがねよるのをじゃまを する
13	一つ目入道		出現場所…川辺 長が上い くもをつれている。 芦にくもが糸をまいてそれ をとってくう
14	からすてん ぐ		出現場所…ねずき山 からすの口がある 葉のうちわをもっている てんぐのように鼻が長い 変なぼうしをかぶっている 足は爪が長くからすのよう 黒い衣しょう
15	犬神		犬神を見た人は幸になる。

「こなきじじい」については、水木しげるのイメージを踏襲しており、とりわけ頭部がへこんで描かれている点には図像の形式化が見られる（No.1、No.2）。「エンコ」の場合、呼称は地域固有のものだが、描かれているのはいわゆる緑色の河童である。一般的に、四国のエンコは猿に似ているとも語られるが、図像化にあたってはエンコと河童を同一視する知識が反映されている。また、その鋭い眼光については、妖怪まつりに登場する着ぐるみとの類似性を指摘することができる。児童が妖怪を可視化する上で、妖怪まつり等を通してキャラクターとして成立したイメージがその描画にも大きな影響を与えることが分かる。

8名中3名が描いている「一つ目入道」については、蜘蛛の糸に引っ張られて家ごと谷底に引っ張り込まれたという民間伝承に基づく地域固有の妖怪存在が図像化されている。そこに添えられた説明文には「人がねよるのをじゃまする（傍点部筆者注）」といった記述があるのだが、ここには耳にした方言をそのまま文字化した痕跡が認められ、口頭伝承の定着を読み取ることができる。妖怪まつりや妖怪屋敷において地元の語り手による紙芝居が披露されることもあり、そうした体験が妖怪観の継承に効果をもたらしていることが考えられる。また、手の部分が黒く描かれている点にはエンコ同様に着ぐるみの影響が見られる。この他にも、「夜行さん」（No.6、No.7）、「一つ目入道」（No.11、No.12、No.13）など、「一つ目」の妖怪に対する関心が高く、ある種の異形性が妖怪を選出する基準になっているとも考えられる。

野鹿池の乙姫の伝承を図像化した「龍神」についても、妖怪まつりの際に児童がかつぐお神輿にならい、青い色で表現されている。このように、子どもたちの描く妖怪図鑑には、妖怪まつりで登場する着ぐるみなどが、新たなイメージとして受容、定着しつつある現状が反映され



図 3-8 ワークショップで描かれた「エンコ」（左）と妖怪まつりに登場する着ぐるみの「エンコ」（右）の比較



図 3-9 ワークショップで描かれた「一つ目入道」（左）と妖怪まつりに登場する着ぐるみの「一つ目入道」（右）の比較



図 3-10 妖怪まつりで担がれるお神輿

ている。ここには、地域社会内部における妖怪イメージの大衆化とでも呼ぶべき現象が生じているのではないだろうか。確かに、その多くが地域で生み出された妖怪であることは間違いないが、その一方で活用しやすいキャラクター（異形性を強調したもの）と本来の伝承との間に少なからぬ乖離が生じていることもまた事実である。

4-2. 地域に内在するもうひとつの妖怪観—伝承者の語りとフォークイメージ

児童に限らず、現在の山城町における「こなきじじい」表象には水木しげるが創作したイメージが逆輸入されている。これは、妖怪伝承を観光資源として活用するためには不可欠の判断であるが、既に述べてきたように実際の伝承者が思い描く「こなきじじい」像は大衆化されたキャラクターとは別物であった。そこで、筆者は2012年4月13日に、かつて多喜田が聞き取りを行った伝承者Aに対して、改めて聞き取り調査を行った。聞き取り調査の全文書き起こしを【資料3-1】に掲載したので、適宜参照されたい。その語りからは、個人のライフヒストリーに応じた伝承形態の変遷が浮かび上がってきた。以下、時系列に沿ってその変化を辿る。

伝承者Aは、「こなきじじい」という語彙について、山仕事の折に背負った子どもが言うことを聞かない時などに用いられた躰のための用語であったと語っている。ここには「駄々をこねるとオバケが来るぞ」といった類の言説が認められる。語り手が幼少期を過ごした昭和初期の山城町は、ようやく電気が通い始めた頃であり、夜の闇も深く、こうした環境が人々の恐怖心をかきたてたことは想像に難くない。また、現実には山々を渡り歩く行者が恐怖の対象であったとして、次のように振り返っている。

わしらの、うすうすの記憶にや、その髯生やしたり、袈裟かけてな、で、鞆かけて、その杖っちゅうのがな、あの、金の輪っぱみたいな、錫杖。あれの杖、提げていた。ジャカンジャカンやって来たんよ。それも怖かったな。⁷⁶

山伏のような恰好をして物乞いをしながら集落を渡り歩いている旅の者は、「お遍土さん（オヘンドサン）」などと呼ばれ、地域共同体にとってはある種の「異人」であった。定期的に家を訪ねてくる彼らの存在は、目の前にいる実在の人物であると同時に、子どもにとっては恐怖の対象でもあり、そうした感覚が「山からじじいがやってくる」話の一つの原点にもなっている。

しかし、伝承者自身の成長に加え、「戦争が激しうなつてな、ぱ一っとそんな話は消えてしもうたんよ⁷⁷」と語るように、戦後になるとそうした伝承のほとんどは途絶えてしまった。無論、こうした現象は山城町に限らず様々な地域で同時多発的に生じていたわけだが、こなきじじいの場合は水木しげるがキャラクターとして採用したことで、マンガやアニメを通して再会する機会を得ることになる。これに関しては、「テレビやで放映しよったけん、見て、ありや、こなきじじいっつうのがこんなとこへ出てきた⁷⁸」と認識しながらも、記憶

の中の伝承とテレビのキャラクターは別物であったと語っている。とは言え、既に民間伝承としては途絶えていたため、地域で話題に挙がることもほとんどなかったと振り返る。

ここに民俗文化と大衆文化の断絶が生じているのだが、今回の調査では地域社会で活用される妖怪イメージと個人の記憶との間にある認識の差異を可視化するために、聞き取りの過程で伝承者自身がかつて思い描いていた「こなきじじい」を図示するという手法をとった。近年では、心理学の質的研究の方法論として「イメージ描画法」が用いられることもある。山田洋子は、「イメージ描画法」の特徴の一つとして「イメージ画を、描いた個人を見るために使うのではなく、昔話や民俗芸能のように人び



図 3-11 伝承者が描く「こなきじじい」

とに共有されているフォークイメージとして扱う」点を挙げている⁷⁹。こうした「ビジュアルナラティブ」の方法を取ることによって、それぞれの世代における妖怪認識をある程度可視化することができるのではないだろうか。

民間伝承としての妖怪は語りの上での存在であるため、それらを「かたち」として捉えることはできないが、一度その存在について語られることによって、その話を受ける人々は何らかのイメージを喚起することになる。とは言え、今日の妖怪文化は視覚文化からの影響を大きく受けているため、純粋なフォークイメージを抽出することは容易ではない。先に挙げた山城町の小学生が描いた妖怪画には、大衆化された妖怪イメージと地域活動を通して形成されてきた妖怪イメージとが混在していた。

ここで特筆すべきは、山城町における妖怪表象が、民俗文化と大衆文化の双方からの影響を受けながら、新しい地域文化として構築されてきたイメージであるという点である。例えば、妖怪屋敷に展示されている妖怪や、妖怪まつりに登場する着ぐるみの妖怪は、確かに地域住民の手によってつくられたものではあるが、必ずしも伝承されてきたイメージに基づいているとは限らない。筆者が地域住民による制作現場に訪れた際には、駅前に接地するための児啼爺を彫刻しながら次のような会話がなされていた。

A「児啼爺の特徴じゃけん。このでこぼこが。あまりつるつるにはなっとらんわ。」

B「山におったらこんなのだろうけん。もっとも見た人はおらん。」

A「見た人おるんよ。もとの古いじいさんは会うたに言うてな。これに。あそこの上。

おるのはおったんじゃ。子どもの教育のためにつくったもんではあるんだろうけど、実際に根拠のないものは存在せんけんな。」

B「なんぼあったんだろうな。もとは。」

C「そしたら、児啼爺と彫らんでも見ただけで分かるは分かるか。」

B「まあ、児啼爺っちゅうのを全然想像してない人は分からんかも分からんな」。

誰かに「見せる」ことを意識して、「児啼爺の特徴」として頭部のでこぼことした造形がなされていることが分かる。言わば、水木しげるの「児啼爺」であることを示すアイコンとして頭部の形態が利用されているわけである。現在では、この木像は無人駅となった大歩危駅の駅長として観光客を出迎えている。ここには、観光を目的とする大衆化のバイアスがかかっていると言えよう。

一方で、伝承者によって描かれたイメージは、大衆化されたイメージとは対極に位置している。もちろん、実際に目で見たわけではないので、あくまでも個人のイメージに過ぎないが、そこで描かれたのは、少なくとも蓑を着て前掛けをしたおなじみの姿ではない。そのイメージの源泉について、描画をしながら次のように語っている。

まあ、人間の恰好して、とは思ったわな。それが大きいかこまいかは、まだその時じゃけん、区別ができなんだけんどな。確か、あの、歩いてくる行者を見たけんにゃ、あんな恐ろしい人だろうなとは、思ったわな。⁸⁰

実体験として、山々を渡り歩いていた行者の姿を得体の知れない「こなきじじい」のイメージに重ねることによって、怖い対象を把握していたと考えられる。それは、子どもたちが描く妖怪図鑑とは異なり、地味でキャラクターとしては認識しにくく、こうした図像に基づいた「こなきじじい」を駅前に設置したところで、それをそれと認識する人はほとんどいないだろう。その結果として、先に掲げたように外発的なイメージが優先されることになるわけだが、ここには地域社会内部における大衆化のバイアスがかかっていると見ることができよう。

4－3．妖怪文化の活用の限界点

事実、現在の山城町では、民俗文化と大衆文化とを両極に、その間で様々な段階に応じた妖怪認識が共存している。そうした認識は個人の妖怪観にも依拠しているため一概に括することはできないが、調査を進める中で観光のためにキャラクター化された妖怪に対する違和感を耳にすることも少なくない。例えば、「こなきじじい」の伝承の背後にいわゆる「子取り」の習俗を指摘する地域住民もいる。望まれざる子が生まれた際に投げ込んでいたとされる「赤子淵」は、徳島県内の他の地域でも語られており、そうした場所を通ると赤子の泣き声が聞こえるといった伝承も残されている⁸¹。ここには顕在化することのない地域の記憶が反映されており、容易に活用できない伝承の実態を物語っている。

ここでは、大歩危妖怪村の一部を構成する「山爺の里」を事例に、観光と伝承との問題について考察を進めていく。ラピス大歩危から藤川谷沿いを歩いていく途中に「山爺の里」

と書かれた案内板が設置されているが、水無集落に伝わる歩危の山爺伝説に関する遺物を残した場所として大歩危妖怪村の一部を構成している。

もともと四国地方の山間部には「ヤマジチ」や「ヤマチチ」と呼ばれる妖怪語彙が数多く伝わっており、武田明は『民間傳承』の中で「ヤマチチ」について「體一面に毛が生えてゐて子供を取って食べた」と云ふ。峠を越して土佐分にはヤマチチクボと云ふ地名があり昔山父が住んでゐた⁸²⁾と記述している。水無集落における山ジチ伝説は『三名村史』に「大歩危の山じち」として掲載されている。以下その部分を掲載する⁸³⁾。



図 3-12 山爺の里の案内板

今は昔、大歩危の山に 1 人の山男が現われた。顔も形もあまり常人と違わないがとにかく大男で、又それに似合ったバカ力を持っていた。吉野川を中にしたこの峽を片足もぬらさず対岸へ飛び渡ったと伝えられている。その巨人が歩危の村里に現われて田畑を荒らし、家畜をかすめ、はてはうら若い女をも襲うようになって村人の不安は日ごとに増してきた。村人はこの男を「山じち」と呼んで恐れた。この「山じち」退治のために、村人たちは神仏に祈願をこめるやら、修験者に頼んで封じこめようとするやら、あらゆる手段をつくしたが、いずれも何のかいもなかった。風のように現われて風のように去るこの巨人の恐ろしいいたずらに 6 人の村人と犬 4 匹が犠牲となった時のことであつた。

「わしが退治申そう」

と買ってでたのは、讃州の者とだけ名のる 1 人の山伏であつた。山伏は村人を集めて、吉野川の川原の白い丸ごろ石を拾わせ、その中の一つを示して、それに似た白団子を作らせた。やがて村人の差し出す数多くの白団子の中に、白石一つをまぜておいづるに入れ、それを背にして山伏は山じちのすむ山じちいわやを目ざして生い繁る夏草をかきわけて歩危の山に分け入った。村人たちは山伏のこの山いりに一すじの期待をかけ成功を祈った。

やがて夜と共に、歩危の山には山鳴りが起り、ものすごい地ひびきは里の家々にまで伝わってきた。山に異変が起つたのである。山伏の安否が気づかれたが人々はあまりの恐ろしさに家に閉じこもって神仏にいのりをささげたりして、ただふるえるばかりであつた。やがて恐ろしい一夜が明けた。村人はおそろおそろ山伏の後をたずねて山深くわけいった。登るにつれて木々は折られ草はふみあらされ、昨夜の恐ろしい出来事をもの語っていた。やがて山頂近くの岩蔭にのどをまっ赤に焼きぬかれて虚空をつかんで息たえた山じちのむくろとその山じちの側に倒れているかの山伏のいたま

しい姿を発見した。村人は今は仏となった 2 人を同じ塚に埋め白い丸ごろ石を供えて祭った。それからは歩危の里には平和な日がかえってきた。

大歩危で仰ぎ見るあの峨々とした岩山の中にある、白い川原石を積み重ねて祭る古い塚は、今は訪う人もなく落葉に埋れている。

この伝説は山爺が村里を襲い、村に訪れた山伏が村人の協力を得て山爺を退治し、山爺と山伏をともに祀る場面から構成されており、いわゆる異人退治の伝説に属すると考えられる。山爺を退治する場面で用いられる「焼いた丸石」は阿波から土佐にかけての山爺伝説の中でしばしば登場する道具である⁸⁴。また、武田明は『阿波の伝説』の中で山爺伝説について次のように記述している⁸⁵。

この大歩危の山には山じじがいて村里へ出て来ては荒らすので、村の人は困っていた。どこからともなく山伏がやって来て、おれがその山じじを退治してやるという。村の人がそれではお願いすると頼むと河原に行つて丸い白石を拾つて来てくれ、それから丸い握り飯をその丸石と同じような形にして持つて来てくれという。山じじを退治できるのならばそれぐらいはたやすいことと、村の人は山伏のいったとおりにして持つていくと、山伏はそれを持つて大歩危の山に登つていった。山小屋があつたのでその中に入つて火を焚き丸い白石を焼いているとあんのじょう、山じじがやって来た。山伏が丸い握り飯をムシャムシャと食べているのを見て山じじはわれにもそれをくれという。そこで火で焼いている丸石を指さすと山じじはそれを食べようとした。が、火の玉のようになっているので大きなうなり声を上げて死んでしまった。しかし山じじのうなり声で小屋は倒れ山伏も死んでしまった。

水無集落における山ヂチ伝説は、今もなおゆかりの場所が伝えられている。『三名村史』にも記載がある山伏が祀られている場所は「ヒジリゴウサン」「コモリサン」などと呼ばれている。また、そのすぐ下には石積みされた山爺の墓が祀られている。これに加えて、山ヂチによって退治された村人と犬を祀った「ミサキ神社」と呼ばれる祠が個人の敷地内で祀られている。そこには犬 2 匹と村人 5 人が葬られており、「七人ミサキ」などとも呼ばれている。四国山中にはいわゆる「ミサキ」信仰が多く伝えられている。それらはしばしば「行き逢い神」や「ひだる神」と混同されることも多い⁸⁶。その中には 7 人を誘い殺すまでは成仏できないといった類の伝承が語られることもあるが、水無集落においてはそのような話は残されていない。



図 3-13 山伏を祀るヒジリゴウサン

伝承は基本的に口頭によるものであり、その内容も人から人へと語り継がれていく過程で変化し得るものである。そのため、現在語られている内容も確固たるテキストに基づいているものではなく、「ミサキ神社⁸⁷」や「ヒジリ神社⁸⁸」といった呼称一つとっても語り手によって少しずつ異なっている。しかし、ここで重視すべきは語られている内容の信憑性よりも、現在まで脈々と語り継がれてきたという事実そのものであると言えよう。現在でも、4月14日と10月14日に氏神の祭礼が行われる際には、「ヒジリ神社」でもお祀りがなされている⁸⁹。

では、水無集落における伝承はどのように残されてきたのであろうか。2010年7月24日に実施した現地での聞き取り調査では、「ミサキ神社」について「家の守り神」という言葉が用いられている。これは「古いじいさんから聞いた」話として語られているのだが、ここではミサキ神社が地域の共同体に根差した伝説である以前に「家の守り神」であることが意識されている。また、七人ミサキの墓が個人宅で守り伝えてきた信仰であることは、家の記憶と結びついた語りによっても裏付けられる。例えば、祠の前に植えられた榊に関する語りには家という空間の履歴を読み取ることができる。



図 3-14 ミサキ神社

いや、これね、トイレを水洗した時にここホースが通つとるのをやっぱり神様の前を通るのは気になって、聞いたらこれを境に植えてあげたらええわ言うて、これあげてすっきり、植えてあげてすっきりして。

ここには、客観的な文化財的価値を保護するという意味ではなく、家の記憶を守り伝えるという意味での主観的な信仰心から生じる環境保存に向けた意識が見られる。このことは以下の語りからも明らかにされる。

まあ、地元にはやっぱり守っていかだつたらな、国で守る言うたってこんなのな。

山爺の里には文化財指定を受けるような「史跡」は存在しないが、家庭や地域社会の判断によって継承されてきた信仰があり、ミサキ神社やヒジリ神社といった場所を受け継ぐことによって地域固有の伝承が伝えられてきた。

しかしながら、それらは文字化されたテキストによるものではなく、主に口頭伝承によるものであるため、その伝承内容にはいくつものヴァリエーションがある。他の地域住民に対する聞き取りからは、また別の物語を聞くことができた。

古い人がそう言う、あの、七人も村人にとって食うたんや、近所の、面白半分で言うたんやどうか知らん、わしらが若い時、その金玉の皮をな、かぶせて、そして、したんやという話。⁹⁰

ここでは、あたかも狸の八畳敷きのように、山ヂチが村人を襲う場面が描き出されている。こうした話は、会議や寄合など多くの村人が集まる際に「古い人」によって語られたとされている。そうした席では当然のことながら酒も振る舞われ、飲めや踊れやの盛況を呈していたとあり、そのような中で話が面白おかしく語られた可能性も否定できない。

このように、多様な伝承内容を内包する「山ヂチ」であるが、こうした多様性をそのまま活用することはできないため、何らかの形でまとめる必要がある。その結果として、ここでも「山ヂチ」のイメージが形成されてきた。現在では、このデザインに基づき、着ぐるみやお土産がつくられており、山城町を代表する妖怪として選出されつつある。

観光資源として活用されている側面と、民間伝承として共同体の内部で語られてきた伝承との間には認識の違いがあるわけだが、これらの両者を射程に入れながら大歩危妖怪村としてのアイデンティティが構築されてきた。そこでは、地域再生の手段として民間伝承と大衆文化が融合した新たな妖怪文化が創造されているのだが、その活用の手法は視覚的なものに頼らざるを得ず、ここにある種の限界を見出すことができよう。むしろ、一次的な創造主体とも言える伝承保持者の「語り」をいかに活かしてことができるかが今後の課題である。



図 3-15 山ヂチの着ぐるみ

第3章のまとめ

山城町は、「こなきじい」の伝承の発掘によって「妖怪」に対する地域の関心が高まり、大歩危妖怪村という実践コミュニティが組織され、「児啼爺の里」としての地域アイデンティティが形成されてきた。ここには、大衆化されたキャラクターを活用した「コンテンツ・ツーリズム」の一つの形を見出すことができる。水木しげるが生み出したキャラクターを活用していることから、鳥取県境港市の取り組みと類似する点もあるが、近年ではむしろそうしたキャラクターから地域固有の妖怪種目へと重心が移りつつある。

山城町の妖怪伝承の基盤にあるのは、民俗社会の中で語り伝えられてきた様々な伝承であり、それらは必ずしも現代人が共有する妖怪観に適合するものだけではない。それらは個人の記憶であったり家庭内の教訓であったりと、極めて曖昧なものに依拠している。その意味において、それらはまさに無形民俗文化財としての側面を持っているわけだが、今では地域の外側で形成された妖怪イメージがすっかり逆輸入されている。そこでは、大衆

化された妖怪キャラクターが住民活動を通して再生産されることで、民俗学と大衆文化の成果が混合された地域資源としての妖怪観が形成されつつある。これは、民俗学的視点から見れば「意図的につくられた妖怪」として分類されるべき対象ではあるが、これも現代の地域社会における民俗文化の生成現場であることは間違いない。ここで、山城町における妖怪文化の活用の構造を図式化すると以下の通りとなる。

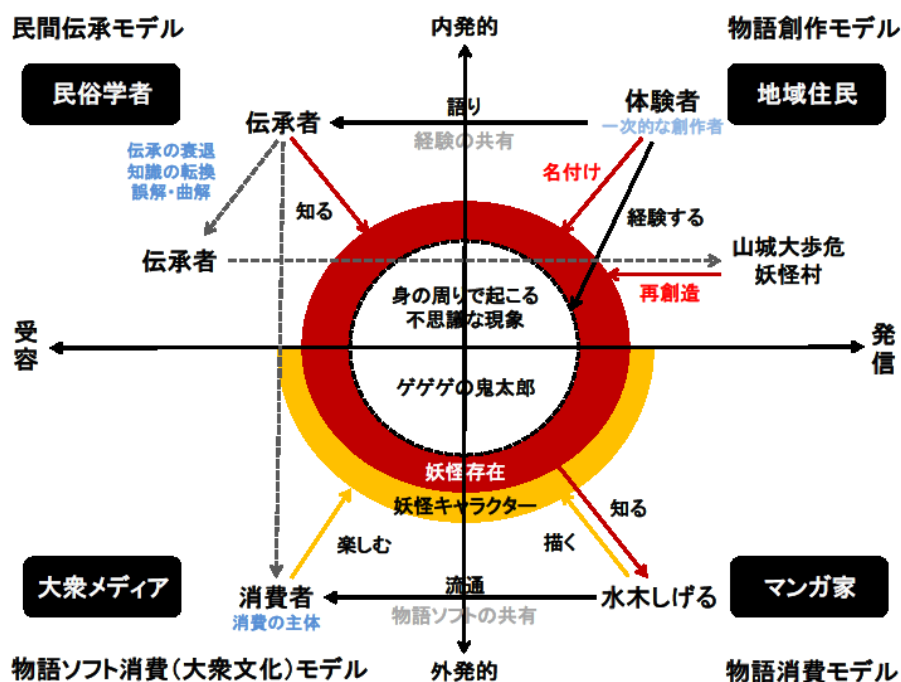


図 3-16 山城町における妖怪文化の活用モデル

無論、まちづくりの素材として活用されることで純粋な一次資料としての民俗文化が変質することは免れないが、それと同時に伝承の場が保たれているという事実は注視すべきであろう。山城大歩危妖怪村全体がエコミュージアムとしての構造を持っていることもそれを裏付けている。実際、地域住民の調査によってこれまで文字化されてこなかった妖怪伝承が発掘され、少しずつその数を増していると言えよう⁹¹。このように、地域の環境構成要素として妖怪文化を位置づけることで、改めて妖怪と場所との関係が意識化されていくのである。

伝承者の高齢化という待ったなしの状況を迎え、民間伝承中の妖怪が急速に衰退しつつある現代において、地域一丸となって取り組むまちづくりは伝承活動の意識化を促進する触媒としての可能性を秘めている。その効果と実態を明らかにすることで、無形民俗文化財としての妖怪伝承の有効な活用手法が開発されていくのではないだろうか。

⁹¹ 「ボケ」は古語で「崖」を意味する「ホキ」に由来しているともされる。

-
- 2 安徳天皇の入山をめぐる伝説については、谷口秋勝『秘境の祖谷山 神話と伝説』1986年（増補改訂版）に詳しい。
- 3 武田静澄『現代教養文庫 660 落人伝説の旅—平家谷秘話—』社会思想社、1969年。
- 4 同上、298頁。
- 5 東京日日新聞社会部『風景お國自慢』四海書房、1927年、102-103頁。
- 6 牧野武夫（編）『趣味の旅行案内』（『中央公論』第49年第6号附録）中央公論社、1934年、57頁。
- 7 祖谷は、「飛騨の白川郷」「肥後の五家荘」と合わせて「日本三大秘境」の一つに数えられている。
- 8 柳田国男（久米長目）「山人外傳資料」『郷土研究』第1巻第2号、郷土研究社、1913年、44頁。
- 9 同上、46頁。
- 10 武田明『祖谷山民俗誌』古今書院、1955年、114頁。
- 11 柳田は、「妖怪名彙」について「是は資料であり、説明といふものからは遠いのだが出所を掲げて置けば後の人の参考にはなるだらう」と述べている。民間傳承の会『民間傳承』第3巻第10号、1938年
- 12 民間傳承の会（編）『民間傳承』第3巻第10号、1938年（『民間傳承』第一巻、国書刊行会、1972年所収）
- 13 民間傳承の会『民間傳承』第3巻第12号、1938年。
- 14 民間傳承の会『民間傳承』第3巻第10号、1938年。
- 15 柳田が「コナキヂヂ」の名を初めて掲載したのは1938年6月20日発行の『民間傳承』誌上でのことであり、時期が近接していることから、二人の記録には関連性を認めることができる。
- 16 柳田が「阿波の山分の村々」と記述しているように、「コナキヂヂ」という伝承は数か所に点在していることが想像されるが、武田の記述からそのうちの一か所が「三好郡三名村字平」であることが分かる。
- 17 高谷重夫「祖谷山村の民俗—東祖谷山村深淵を中心として—」池田弥三郎、大藤時彦、和歌森太郎（監）『日本民俗誌大系 第10巻 未刊資料 I』角川書店、1976年、294頁。
- 18 山城町の伝承ではないが、木沢村沢谷に伝わる「高明橋のオギヤナキ」について、地域住民は「この辺りには、夜鳴くヨタカという鳥がおってな。そいつの鳴き声が赤ん坊の泣き声にそっくり。昔の人がその鳴き声を聞いて、オギヤナキの話を作ったんじゃないだろう」と語っている。（2002年10月14日付「徳島新聞」より）
- 19 藤子・F・不二雄は、『藤子不二雄自選集①』（小学館、1981年）の中で「ごくありふれた家庭の日常に、非日常その物のオバケがやってきてひき起こす波紋がこの作品の眼目になっている」と述べている。ここでは、「ドラえもん」や「キテレツ大百科」をはじめとする藤子作品の多くに登場する日常生活に介入する「非日常」を象徴するキャラクターとしての構造を重ねることができる。
- 20 高橋明彦「猫目小僧と妖怪ブーム 一九六八年の『少年キング』と少年的知識」小松和彦『妖怪文化の伝統と創造—絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』せりか書房、2010年、470頁。
- 21 自身も紙芝居作者である加太こうじは、当時を振り返り「鈴木（勝丸）は伊藤正美作『ハカバキタロー』の荒筋を水木に話したので、水木はかれの台本で『墓場奇太郎』を描いた。のちに上京して貸本用単行本の仕事をしたとき、伊藤正美の諒解を得て文字づらを変えて『墓場の鬼太郎』としたときいている」
- 22 藤川治水『子ども漫画論』三一書房、1967年、168頁。
- 23 石子順造「架空の動物」『キツチュ論』喇嘛舎、1986年、61頁。
- 24 ただし、その多くに出典元に関する情報は記されていない。
- 25 なお、これらの妖怪映画は、1960年代後半に発行された少年マンガ雑誌においても度々紹介されている。
- 26 山田野理夫『怪談の世界』時事通信社、1978年、240頁。
- 27 山田野理夫『おばけ文庫②ぬらりひょん』太平出版社、1976年、76頁。

-
- 28 京極夏彦『妖怪大談義』角川書店、2005 年、184 頁。
- 29 山田野理夫『日本妖怪集』潮文社、1969 年、200-201 頁。
- 30 佐藤、46-47 頁。
- 31 山田野理夫（編）『日本伝説集』宝文館、1990 年、282 頁。
- 32 山田野理夫『東北怪談全集』荒蝦夷、2010 年、442 頁。
- 33 佐藤有文『日本妖怪図鑑』立風書房、1972 年、195 頁。
- 34 『週刊少年マガジン』第 8 巻第 11 号（1966 年 3 月 20 日発行）、講談社。
- 35 水木しげる「墓場の鬼太郎 妖怪大戦争」『週刊少年マガジン』第 8 巻第 15 号（1966 年 4 月 17 日発行）、講談社。
- 36 講談社社史編纂委員会『クロニク講談社の 90 年』講談社、2001 年、360 頁。
- 37 歴史の謎研究会『【妖怪】の謎と暗号』（青春出版社、1997 年）では、昭和 40 年代以降に児啼爺がテレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」に「レギュラー出演」したことでその知名度が一変したと指摘している。また、村上健司『百鬼夜行解体新書』（光栄、2000 年）では、児啼爺を水木しげるの漫画や妖怪画によって一般にも知られるようになった妖怪の一つと位置付けている。このように、水木しげるの画像化による影響に言及した文献がある一方で、現在発行されている妖怪図鑑の多くは無意識的に水木しげるの画像を踏襲している。
- 38 水木しげる『水木しげるの妖怪画集』朝日ソノラマ、1970 年、254 頁。
- 39 京極夏彦「通俗的「妖怪」概念の成立に関する一考察」前掲書。
- 40 多喜田は、伝承者の特定にあたり、地域全域にチラシを配布している。
- 41 多喜田は松本実、平田五郎、平田辰一から聞き取りを行っているが、その他に伝承を聞いたことのある人には出会えなかったという。多喜田による調査結果は、2002 年に発行された『柴田亜美の「子泣き爺」報告と解説』に掲載されているが、これは一般に流通されている書籍ではなく、筆者は徳島県立図書館での調査によってこの資料を目にする機会を得た。
- 42 多喜田昌裕『柴田亜美の「子泣き爺」報告と解説』2002 年。
- 43 「藤川谷の会」会則（1997 年 10 月 13 日施行）。
- 44 先進事例として香嵐溪の視察を行っていることから、地域住民による植樹が会の主たる目標であったことが分かる。
- 45 妖怪街道（藤川街道）構想（案）、2002 年 7 月 13 日。大歩危妖怪村役場提供資料による。
- 46 地域で狩猟された猪の肉を煮込んでつくられている。2002 年 11 月 24 日に開催された「妖怪もみじ祭り」のチラシにも「妖怪汁」の名前を確認できる。
- 47 四国の秘境山城・大歩危妖怪村『妖怪村づくり計画書』2008 年、2 頁。
- 48 エドワード・レルフ（著）高野岳彦、阿部隆、石山美也子（訳）『場所の現象学』筑摩書房、1999 年、156-157 頁。
- 49 同上、184 頁。
- 50 道の駅の概要については http://www.mlit.go.jp/road/station/road-station_outl.html を参照（2010 年 10 月 16 日確認）。
- 51 酒本宏「地域産業振興と「道の駅」のこれから」関満博、酒本宏（編）『道の駅／地域産業振興と交流の拠点』新評論、2011 年、240-255 頁。
- 52 国土交通省道路局 web ページ <http://www.mlit.go.jp/road/station/road-station.html> を参照（2010 年 10 月 16 日確認）。
- 53 落合知子『野外博物館の研究』雄山閣、2009 年、222 頁。
- 54 同上、236 頁。
- 55 徳島新聞、2007 年 5 月 11 日。
- 56 石の博物館の展示が見直され、妖怪屋敷に改修された経緯について、道の駅大歩危の運営主体である株式会社山城しんこうの脇眞二は入館者数の減少を挙げている。2010 年 4 月 13 日に実施した聞き取り調査より。
- 57 例えば、JR 四国が発行する「ジパング倶楽部 四国再発見」では「語り継がれる妖怪伝説」と題して大歩危妖怪ツアーを紹介している。（JR 四国 ジパング倶楽部事務局「ジパング倶楽部 四国再発見」2010 年秋号、6 頁）

-
- ⁵⁸ 観光圏整備法第二条第一項より引用。
- ⁵⁹ その他、同時に選出されたのが、「富良野・美瑛観光圏」（北海道富良野市・美瑛町・上富良野町・中富良野町・南富良野町・占冠村）、「雪国観光圏」（新潟県魚沼市・南魚沼市・湯沢町・十日町市・津南町、群馬県みなかみ市、長野県栄村）、「八ヶ岳観光圏」（山梨県北杜市、長野県富士見町・原村）、「海風の国」佐世保・小値賀観光圏（長崎県佐世保市・小値賀町）、「阿蘇くじゅう観光圏」（熊本県阿蘇市・南小国町・小国町・産山村・高森町・西原村・南阿蘇村・山都町、大分県竹田市、宮崎県高千穂町）の5地域である。
- ⁶⁰ 地域博物館論を構築した伊藤寿郎は、博物館を「地域型」「中央型」「観光型」の三つに類型化している。
- ⁶¹ 倉田公裕（監）『博物館学事典』東京堂出版、1996年、17頁（執筆担当：葛秀、矢島國雄）。
- ⁶² 新井重三『実践 エコミュージアム入門—21世紀のまちおこし—』牧野出版、1995年、138頁。
- ⁶³ ジョルジュ・アンリ・リヴィエール「エコミュゼの発展的定義」（後藤尚人訳）1980年1月22日（大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会、1999年、12頁）
- ⁶⁴ 例えば、ドミニク・プーロは「新しい博物館が設立されることもあるが、資料の収集は二の次である」と指摘している。ドミニク・プーロ「博物館資料の充実」M.ブラン＝モンマイユール他（著）松本栄寿、小浜清子（訳）『フランスの博物館と図書館』、玉川大学出版部、2003年（原著1997年）、116頁。
- ⁶⁵ 同上、116頁。
- ⁶⁶ クサビエ・グレフはエコミュージアムに類似した博物館活動の形態としてインタープリテーション・センターとエコノミュージアムを挙げている。グレフの定義によれば、エコミュージアムとは過去の活動を象徴する建築群の中にある工芸や産業技術に関心を引くことを目的とする機関であり、インタープリテーション・センターはあらゆる媒体を利用して地域情報を伝達し、さまざまな人が地域の意味や価値を理解できるようにすることを目的とする機関であり、エコノミュージアムは小企業や家内工業の遺産を保存することを目的とする機関として三者を区別している。（クサビエ・グレフ（著）垣内恵美子（監訳）『フランスの文化政策 芸術作品の創造と文化的実践』水曜社、2007年、207-208頁）
- ⁶⁷ クサビエ・グレフ（著）垣内恵美子（監訳）『フランスの文化政策 芸術作品の創造と文化的実践』水曜社、2007年、208頁。
- ⁶⁸ 加藤有次『博物館学総論』雄山閣、1996年、123頁。
- ⁶⁹ 下岡昭一への聞き取り（2010年11月23日）による。
- ⁷⁰ 上名小学校「平成20年度 総合的な学習の時間 上名チャレンジタイム 全体計画」参照。
- ⁷¹ 例えば、校区内にある上名平集落では、条件が揃えば眼下に広がる雲海を見ることができのだが、地域住民と連絡を取り合いながら雲海が発生した日に児童を山の上へ連れて行くといった活動もなされている。
- ⁷² 妖怪まつりの開催日は登校日扱いとなり、全校児童が祭りに参加し、妖怪みこしの担ぎ手となるほか、学校での学習活動の発表の場としても機能する。2010年11月21日に開催された妖怪まつりでは、総合的な学習の時間で栽培したお茶を児童自ら販売していた。
- ⁷³ 柳田國男、關敬吾『日本民俗學入門』改造社、1942年、421頁。
- ⁷⁴ 児童が制作した壁新聞を読むと、「太平洋戦争の時に多くのひとがなくなり子泣きじじいを知る人が少なくなった」「戦後、『古い物はいらない。』と子泣きじじいのことはあまり話さなくなった」と地域の歴史と関連づけた考察がなされている。
- ⁷⁵ 厳密に言えば、「夜行さん」は山城町内の別の校区で語られてきた妖怪伝承であるが、一つ目でインパクトのあるイメージを持っているために、図鑑に選出されている。一方で、地域固有の妖怪伝承である「山ヂチ」については、図像化が難しいためか、選からはもれている。
- ⁷⁶ 2012年4月13日に実施した聞き取り調査に基づく。今回の調査は、大歩危妖怪村の構成員である平田政廣の協力を得て、山城町内にある伝承者の自宅で行った。
- ⁷⁷ 同上。
- ⁷⁸ 同上。

-
- ⁷⁹ やまだようこ（編）『この世とあの世のイメージ 描画のフォーク心理学』新曜社、2010年、18頁。
- ⁸⁰ 2012年4月13日に実施した聞き取り調査に基づく。
- ⁸¹ 例えば、徳島県三加茂町には「子どもが、たくさん生まれて、育てるのにたいへんだったので、生まれてまもない赤ちゃんを、そのふちへ投げ入れた」とされる赤子淵の話が残されている。三加茂町民話伝説収集委員会（編集発行）『手書き三加茂百話第三集』1988年、14頁。
- ⁸² 民間傳承の会『民間傳承』第四卷第二号、1938年
- ⁸³ 田村正（編）『三名村史』徳島県三好郡山城町役場、1968年、974-975頁。
- ⁸⁴ 市原麟一郎（編）『土佐の妖怪』一声社、1977年、pp.57-58にも同様の話が収録されている。
- ⁸⁵ 武田明、守川慎一郎『阿波の伝説』角川書店、1977年、100-101頁。
- ⁸⁶ 桜井徳太郎（編）『民間信仰辞典』東京堂出版、1980年、276-277頁。
- ⁸⁷ 犠牲になった村人と犬の数については記録によってばらつきがある。例えば、2003年2月17日付の「徳島新聞」では6人の村人と犬4匹が犠牲になったと書かれている。これは、既述の『三名村史』に基づいていると考えられる。
- ⁸⁸ 2003年2月17日付の徳島新聞では「ひじりごうさん」と呼ばれている。
- ⁸⁹ 祭礼の日程が現在のように定められたのは戦後のことであったとされる。2011年まではミサキ神社においても祭礼が行われていたが、2012年4月以降は行われなくなった。これも、地域社会の高齢化による一つの影響と言えよう。
- ⁹⁰ 2013年4月15日に実施した聞き取り調査より引用。
- ⁹¹ 2012年には、妖怪調査の中心人物である下岡昭一によって、これまでの調査の成果をまとめた書籍『おとろしや』が刊行された。

第4章 地域住民を主体とする妖怪存在の再創造

―地域の記憶を可視化するアートプロジェクトの開発

本章の目的と方法

2000年代以降、地域住民を主体とする妖怪文化の活用はますます多様化している。本章で特に注目するのは、「既存のコンテンツ」に基づかずに、妖怪文化を再創造している事例についてである。現在、伝承されている妖怪文化は、人々の想像力を以てどこかで誰かに創造されてきたものであり、その意味において共同体を主体とする創造的活動の産物として位置付けることができる。しかしながら、妖怪創造に向かう力学は、必ずしも「純粋芸術」の領域に該当するものではない。

本章では、はじめに滋賀県東近江市（旧八日市市）と岩手県胆沢郡金ヶ崎町の事例を通して、地域住民を主体とする妖怪文化の再創造の過程を明らかにする。とりわけ、伝承と創造という二つの視点から、地域を表現する素材として妖怪に着目する。その上で、こうした活動の背景として、2000年代以降の「アートプロジェクト」の隆盛に着目する。今日では、文化芸術によるまちづくりを実現する方法として各地で実践されているアートプロジェクトだが、そこでは芸術文化活動をきっかけに地域資源を掘り起こしたり、地域住民の参加を得たりすることによって、該当する地域コミュニティを活性化する機能を担っている。特に、近年では「地域」「記憶」「物語」といったキーワードとともに語られ、その創造活動の主体が地域住民に委ねられているものも少なくない。

妖怪文化の現代的活用との関係について言及した上で、本論では東京都荒川区南千住におけるアートプロジェクト《隅田川妖怪絵巻》の実践を通して、妖怪文化の現代的活用の手法を開発する。ここでは、地域社会の特性を踏まえて参加者がつくりだした新しい妖怪を分析し、妖怪創造のプロセスにおける共同ナラティブの実践を明らかにすることを目指す。

第1節 地域密着型の妖怪文化の創造

1-1. 伝承の創造に向かう心意

本来、伝承と創造は相反する概念ではあるが、伝承もまたどこかの段階で創作されたものであることは間違いない。ここで改めて、妖怪が創造される過程に目を向けることとしたい。例えば、寺田寅彦は「作業仮説」という言葉を用いているが、多くの妖怪伝承は人々が周囲の環境を解釈する過程で生み出されてきた。第2章第3節で言及した京都における鶴の通り道をめぐる伝承も、「道が行き止まりになっている」という地理的環境と伝説上の存在である鶴とを結びつけることで新たな「物語」として再構築されている。

妖怪をめぐる物語は、一方では個人の記憶に根差した「小さな物語」として、他方では歴史に直結するような「大きな物語」として語られてきた。鶴の通り道などは、ある種の遊び心を以て「小さな物語」として語られた物語として位置付けられる。ここで、「大きな

物語」と結び付けられた妖怪存在としては、各地で語られる巨人伝説を挙げることができる。例えば、『常陸国風土記』には以下のような記述が見られる。

平津の駅家の西一、二里のところ、大櫛という名の岡がある。昔、大男がいて、岡の上に立ったまま手をのばして海辺の砂浜の大蛤をくじって食べた。その貝殻が積もって岡となった。大きくくじったことから、大櫛の岡の名がついた。¹

現在でも、「大串」という地名で残っているこの場所には、大串貝塚と呼ばれる貝塚がある。古代に生きた人々は、海岸線から遠く離れた地に貝殻がたくさんあるという不可思議な状況を前に、想像力を働かせて「大男」の存在を想起した。無論、この大男をそのまま現代人が思い描くところの妖怪存在と同一視することはできないが、超自然的存在を想起する物語生成のパターンとしては一つの特徴的な事例である。同様の事例は他の地域にも見られる。

もう一つの事例として、群馬県富岡市にある「竜骨碑」を取り上げたい。江戸時代、この地で不思議な物体が発掘された。その正体について、当時の村の知識人が「竜の骨」として名付けたことから、1798（寛政10）年に竜骨碑が建立され、祭祀の対象となるに至った。そこでは、龍神にあやかって雨乞いの祭礼などが行われていたという。しかし、近代以降になって科学的な調査が進められたことにより、「竜骨」の正体は「オオツノシカ」の化石であることが判明した。こうした



図4-1 竜骨碑（2013年2月9日撮影、群馬県富岡市）

ことから、1975年には富岡市指定の天然記念物に指定された。現在では、現地に訪れると当局の教育委員会によって「オオツノシカ出土記念碑」という案内板が立てられているが、同じ「もの」を見たときに「竜の骨」と解釈する想像力と「オオツノシカの化石」であると判断する科学的な知識の間には次元の異なる評価が与えられるべきであろう。

もちろん、これらの事例は「妖怪」の範疇だけで語ることはできないが、身の回りで起こる不可思議な現象に対して何らかの想像力を働かせ、そうした現象に名前を付けて超自然的な存在（妖怪存在）を想起するプロセスには、妖怪伝承の創造モデルを見出すことができる。梅野光興は、「伝説の創造とは、過去から虚構の〈物語〉を呼び出し、それによって、当事者の現実を一遍の〈物語〉としてつむぎあげていくような」活動であるとしているが、現在各地に残る伝承のほとんどは、どこかのタイミングで共同体の必要性に応じて創作されたものであるという視点は重要である²。

しかし、近年の地域社会ではこういった「伝承」が生み出されるような「不思議」に遭遇

する機会もほとんどない。共同体の変質や知識の転換によって、伝承行為そのものが衰退し、それに代わってキャラクター化された妖怪存在が知識として受容されている。言わば、従来の民俗社会では妖怪文化の創造主体が伝承者と同一であったのに対して、現代の大衆社会においては妖怪創造の主体と受容者とがそれぞれ専門分化しているのである。これに対して、以下で取り上げる事例では、地域住民によって民間伝承が再発見されたり、新しく創造したりするような取り組みを通して、妖怪創造の主体性の回復を見ることができる。

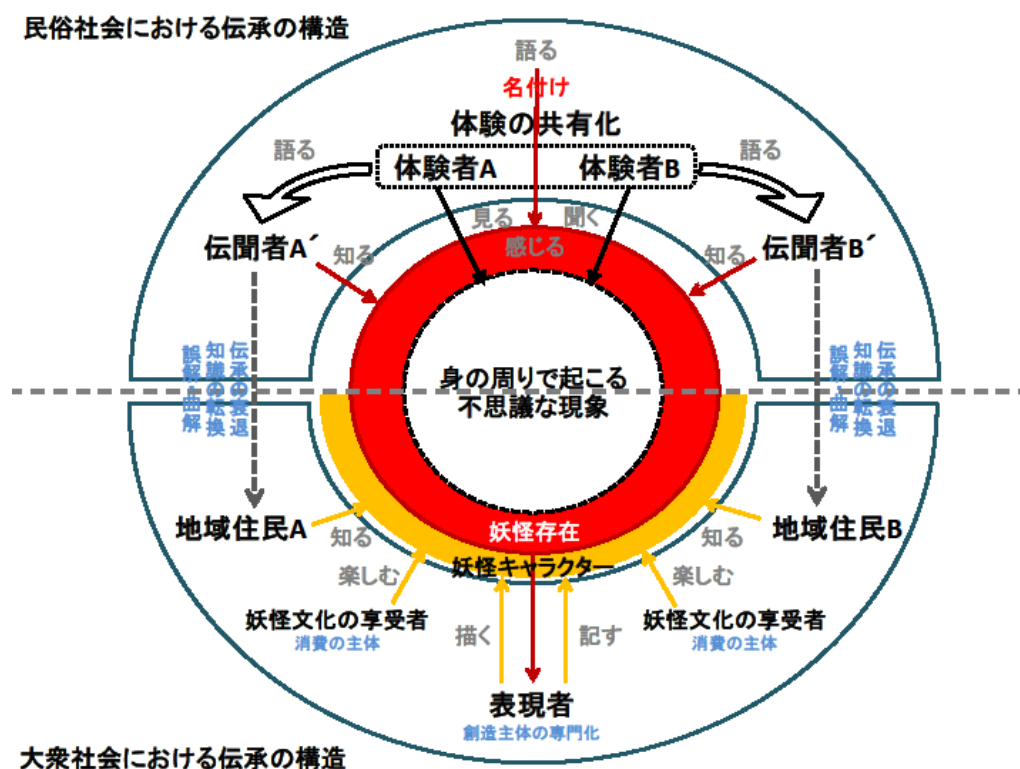


図 4-2 妖怪伝承の創造モデル

1-2. 滋賀県八日市市における取り組み—ほない会による「ガオ」の再生

滋賀県八日市市（2005年の市町村合併によって東近江市）では、「八日市」と「妖怪地」の語呂合わせから、2001年以来妖怪を活用したまちづくりに取り組んでいる。八日市が妖怪に着目したきっかけは言葉遊びであり、既存のコンテンツに基づいているわけではない。活動の主体を担っている「ほない会」は、地域の商店主を中心に構成された任意の団体であり、その活動の主たる目的も商店街の活性化にある。本節では、活動を推進してきた「ほない会」のメンバーへの聞き取り調査と、これまでの活動を伝える資料を用いながら、八日市における妖怪コンテンツの創造の過程を明らかにする。

既存のコンテンツに基づかない八日市では、はじめに地域の伝承を調査するところから活動が始まった。2001年には、老人会の協力を得て、地域の伝承を発掘するためのアンケート調査を実施している。このアンケート調査は、地域の妖怪伝承に関する情報を収集す

るために行われたものであるが、その結果に基づき「八日市不思議マップ」が作成された。

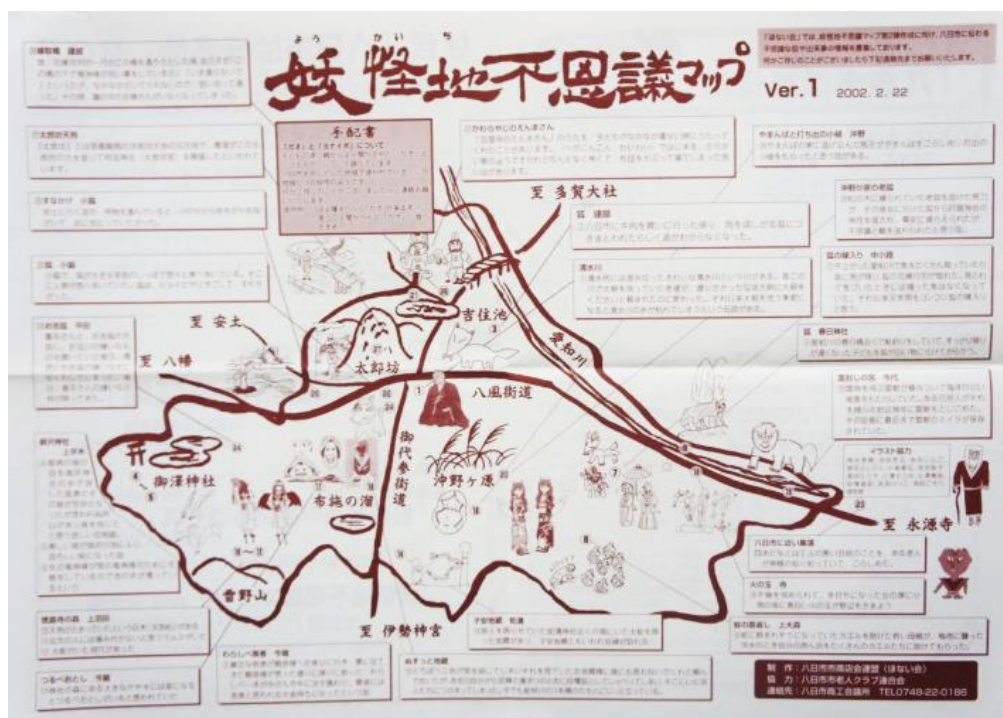


図 4-3 八日市不思議マップ

この地図は、2001 年に開催された開市記念祭「八日市は妖怪地」序章のチラシの裏面に掲載されたものである。そこには、開市の由来として聖徳太子をめぐる「伝承」に加えて、2001 年には「怪市（裏開市）」をめぐる新しい由緒がつくられている。

四天王寺の瓦を焼くためには霊験あらたかな土地の土が必要であった。そのためには箕作山一帯は最高の土地であったが、霊地であるが故に数多の妖怪（精霊）たちが棲んでおり、迂闊に人が踏み込める場所ではなかった。そこで聖徳太子は妖怪たちに「この土地は、おまえたち妖怪の土地『妖怪地』であることを認める。その代わりにこの地で瓦を焼かせてほしい。」と申し出られた。結果、その申し出が受け入れられ、『八日市は妖怪地』となった。³

そもそも、「ほない会」では妖怪に着手する前に、「八日市」という地名の由来にもなっている「開市」について、郷土史家の協力を仰いで勉強会を開催していた。その中で、聖徳太子をめぐる伝承について以下のような気付きがあったと語る。

八日市という八の日に市が立つという、聖徳太子伝承から伝わってくるという話なのですが、その先生曰く、別に聖徳太子がきはったこともないんやで、そういう資料は

一切ないし、という話を、ただ太子講とか色々あって、ここら辺、職人さんぎょうさん住んではったんで、そん中で聖徳太子にあやかって、そういう風な伝承ができてきたという話を言わはって、で、そっかと、もともとあるもんやなくて、ゼロからでもなんかできるんやなという、そういう昔から当たり前と思って、ほんまに事実かと思ってたことが、実は誰かがつくったことやという⁴

当たり前のように語られていた「伝承」も誰かによって「創作」されたものであることを認識したことから、先に掲げたような「怪市」をめぐる由緒も創作された。

このような出発点から始まっていることから分かるように、八日市では自由な解釈の下に妖怪を活用している。その中でも、妖怪伝承の再創造という点から興味深い取り組みが「ガオ」をめぐる活動である。先のアンケートの中で、「ガオ」と「ヨナイボ」という地域固有の妖怪種目に関する質問が設けられている。以下、「ほない会」からの提供を受けたアンケート原紙の分析に基づき、当時の地域社会における「ガオ」と「ヨナイボ」の認識について確認していく⁵。

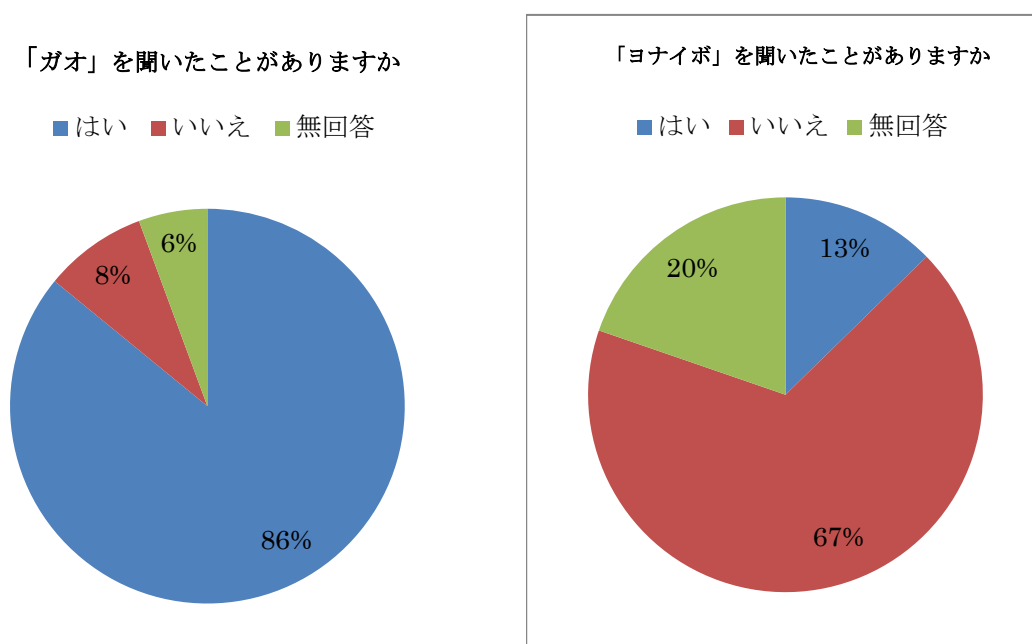


表 4-1 ほない会による「ガオ」「ヨナイボ」に関するアンケート結果 (n=142)

この調査から、「ガオ」という民俗語彙が広く認知されていることが分かる。一方で、「ヨナイボ」については伝承の範囲が限定的であった。この結果について、ほない会のメンバーは次のように語っている。

もともとはこのイベント一番最初始めるときに、妖怪って、八日市ってガオがおるでなあって言われて、僕ら小っちゃい時もそれで育てられたんだけど、忘れてたんで

すよ、全然。ガオってなんやろうなってみんなで話してて、その老人会のアンケートにもガオってなんですかってみたいいな話を書いたけど、結局正体不明のまま

アンケート調査では、「ガオ」について知っていることを記述する回答欄が設けられていたのだが、そこに記された内容には以下のようなものがある。

A-1 「ガオ」と言う話しは一年を通じての事ですが特に雪ふりの晩、猫の盛の泣^{ママ}声の事と思う「ガオ」が来るで早く寝よと言われました。天井裏には此の頃大ねずみがいて「ガオ」の声は小供には振いが来るほど怖いそんざいで散って蒲団にもぐり込み子供が熱を出し常に（ひやきよう丸）と言う子供薬を用位していた。

A-2 みんなも昔親から言ふ事をきかないとガオがきよるわるい事をしたらガオがきよるとよく言われてきて今又自分が親になって子供にも同じ事を言ってきました。みんなも何の事かわからないけれどガオガオとねこがなくのでねこのなき声かなの・・・

A-3 「ガオ」とは特定の妖怪の名ではなく、恐いものの総称であつた様に思う。例えば、猫の泣^{ママ}き声をして聞いても「それガオが来たからはよ寝よ」とか

A-4 ガオとは現在ねこの事思ます。2月3月頃になく

A-5 雪の降る夜はきつねやたぬきのなきごえはきいてました。私の生れた家は山のちかくです

A-6 親から子供、幼児の頃「泣いたらガオが噛みに来るよ」と言われました。「ガオ」とは獣の啼く声の事だと思います。

A-7 子供を驚かす時に、よく「ガオ」の話が出たことがあった。「ガオ」の実態は何なのか判らなかったが、「ガオ」とは化け物か妖怪の姿ではなく、その鳴声から出たことだろうと思う。

A-8 特に姿かたちはわからないが恐い物（動物）を言ったのです。

A-9 あまり夜おそくまで田んぼで仕事をして居ると「ヨタカ」(ガオ)が出てさらって行かれると云うように聞いて居りました。

A-10 近くに森があり夜になるとガオ（妖怪だろうと思う）がくるぞと言いつたえできき

ました。

A-11 何時も聞かされていたが、何んのことかよく分らない。「ガオ」とは化物の総称ではないかと思っていた。

A-12 河童でないかと思う？

A-13 ガオ＝河童（ガワタロ、ガオタロウの別名ある）水神祭や川、沼祭には、「ガオ」にキュリーを供へて水難の被害最小を祈る地区が多いと聞く。

A-14 子供心に（ガオ）は人をさらう鬼の様な怪物だと想像していました。夜にガオが来ると言われると親にしがみついて震へていた事を覚えています。

A-15 私の実家の隣りに楠木の古木があつて何でも子供の頃に父から聞いたのですけれど300年はしっかり経っていると言われていました。いたずらしたら「隣りのあの木から「ガオ」が出よるぞ」とよく言われました。本当に夜になるとガオガオとよく鳴く声が聞えて来ました。夜は外へ出るのをおびえていたのが記憶に残って居ります。

A-16 昔は私達の若い自分には暗い所へ行ったらガオが出てきよると云はれた事は覚えてゐる。

A-17 よく悪い事をしていると暗い所へつれていかれて（ガオ）が出るぞとおどされたものです。昔で云う（ガオ）とは（こわいやつ）と云う意味だと思います。

A-18 昔（ガオー）とは正体不明の話で今から思へば忠告のいましめではなかろうか。泣くと親から早く泣きやまんと（ガオー）が向いに来てつれて行くどと言つてなだめてくれた事を思い出します。又友達の所へ遊びに行つて来ると言ふと（ガオー）がまっているよと早く帰つてこいと忠告をして来れました。

A-19 祖母よりよく言うこと聞かんと「ガオ」が連れていくぞと注意された。黒い布を頭からかぶつてよく悪いことをすると「ガオ」が出たぞとおどろかされたこともあった。

A-20 脅し文句、子供の頃、手を前にだし手首からだらんと下にしてガオーと脅かされた

A-21 夫は家の外から、鳴き声を（ガオーの）出したり、雨戸をたたいたりして、演出し

たものだ。

A-22 (ガオ) と言うのは架空の動物で子供のしつけのため使われた用語です。

A-23 子供心に架空のものと思って居ました

「ガオ」に関する記述を概観すると、特定のイメージを持つものではなく、受け取る側によって様々なイメージされていることが分かる。ただし、回答の中には共通する要素を見ることが出来る。例えば、ガオの鳴き声については「猫」のものであるという記述が見られる(A-1、A-2、A-3、A-4)。その鳴き声が聞こえる時期としては「雪ふりの晩」(A-1)、「2月3月」(A-4)という回答が見られ、その他にも「雪の降る夜」(A-5)とある。さらに、「猫の盛の泣声」(A-4)とも解釈されているように、野生の猫の声が「ガオ」と呼ばれていた可能性もある。

出現場所については、特定の場所に限らず、「田んぼ」(A-9)、「森」(A-10)、「隣のあの木」(A-15)、「暗い所」(A-16)など、それぞれの身近な空間が想起されている。この背景には、ガオが子どもをしつけるために用いられる民俗語彙であり、それが語られる家庭ごとにアレンジされることによって、各人各様の「ガオ」像が形成されてきたことを指摘することができる。このことは、「忠告のいましめ」(A-18)、「脅し文句」(A-20)といった回答からも導き出される。中には「子供心に架空のものと思って居ました」(A-23)といった回答も見られるが、概して目には見えない怖い存在という認識は共通している。

しかし、近年では「ガオ」という言葉そのものを耳にする機会も減少し、聞き取り調査の中で用いられていた言葉を借りれば「絶滅危惧種」の語彙になりつつある。そのような中で、2009年から始まったのが「ガオが来るぞ！大作戦」である。これは、伝承の中の「ガオ」を再生させる試みでもあると同時に、地域の教育力を復権するプロジェクトでもある。現在では2月の第一日曜日の夜に実施されており、節分行事との関係性を指摘できると同時に、上記のアンケートにおける出現時期にも合致している。



図 4-4 ガオが来るぞ！大作戦（2013年2月3日撮影、滋賀県東近江市）

2012年以降は、野々宮神社で出立式が行われた後、ガオの使いの出で立ちをしたほない会のメンバーが5人程度のグループに分かれて、事前に打ち合わせを行っていた家々を回っていく。目的地に到着すると、「ガオー、ガオー」と声を挙げながら、家の玄関先に立ち、子どもの名前を呼び、玄関先に座らせる。そして、事前に保護者との打ち合わせで決めて

おいた「兄弟げんかをしない」「言うことを聞く」といった類の戒めを伝え、お札を渡して帰っていく。

子どもたちの反応としては、泣きじゃくる子や意外と平気な子などと様々だが、ほない会のメンバーと保護者が連携をとりながら、躰の場が生み出されている。ほない会が活動終了後に保護者に対して実施したアンケートには、「お札をみるとガオさんのことを思い出すようで少しは言うことを聞くようになりました」「悪いことばかりするとまたガオさんが来て怒るよと言うとピタッと止めます」といった回答が見られ、作戦の効果が語られている⁶。実際、ほない会のメンバーは、この取り組みの目的について次のように語っている。

僕らの狙いとしてはどっちかって言うと教育に、普段の生活の中でも使ってもらえるようになるのが、最近、たまにね、ほんまに使うてはる若いお母さんがいはるんです。聞くことあるんですよ。そんなことしたらガオ来よるでって。使うてはるやんって、ちょっとは効果が出てきたのかなって。⁷



図 4-5 ガオのお札

このように、ほない会の活動を通して「ガオ」という語彙が再生されつつあることは、妖怪文化の現代的活用の一つの方向性を示している。

1-3. 岩手県胆沢郡金ケ崎町における取り組み—金ケ崎まちづくり研究会の活動から

岩手県胆沢郡金ケ崎町も、既存のコンテンツに基づかない妖怪文化の再創造に取り組んでいる。金ケ崎町（人口 16,219 人／内 65 歳以上 4298 人、2012 年 10 月 31 日現在）は、北上川と胆沢川の合流地点の舌状台地に位置している。かつての伊達藩の北限にあたる要害跡に残る武家屋敷の典型的な町割を残しているとして、2001 年には国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）に選定された⁸。現在も、金ケ崎城址の周りには表小路、達小路、六軒丁、船戸小路、片平丁、裏小路、諏訪小路の 7 つの小路が存在する。伝建地区の選定に先だって行われた保存対策調査の報告書では、金ケ崎がこうした風景を保存できた要因の一つとして、「こじんまりとした共同体のもつ特色」を挙げている⁹。また、金ケ崎町中央生涯教育センターが編集した『金



図 4-6 金ケ崎表小路の景観（2012 年 6 月 8 日撮影、岩手県胆沢郡金ケ崎町）

『金ケ崎町生涯教育活動記録』では、「住民参加によるミクロコスモス的なまちづくりが求められる今日、良い意味で閉鎖的に完成されている金ケ崎町は極めて有利でありレベルの高いまちづくりが可能となる要素を十二分に秘めている」というコメントを引用している¹⁰。

こうした共同体の特性と相まって、地域住民による学習活動も地域を挙げて推進されてきた。その屋台骨として、1979年6月25日には早くも「生涯教育の町」が宣言されている¹¹。実際、重要伝統的建造物群保存地区への選定も、地域住民による学習の結実と見ることもできる。例えば、1985年には、行政の調査に先だって、城内自治会によって『城内史』が編纂発行されている。城内集会所の創立十周年の記念事業として位置付けられたこの出版物は、「郷土の財産」とすべく準備が進められたものであった¹²。金ケ崎町は、こうした「住民発意の歴史編纂及び保存地区の歴史的風致を高く評価し」、城内地域を中心とする町並み調査へと踏み切ることになった¹³。

こうした町並み調査を経ての伝建地区の選定となったわけだが、これが契機となって、地域住民による活動も活性化していった。2001年には、伝建地区内の活動拠点として「白糸まちなみ交流館」がオープンし、翌年には交流館での来訪者対応をするボランティア団体として「きらら」（2009年に「しらいと」に改称）が組織された¹⁴。また、公開住宅の管理等を目的とする「城内諏訪小路まちづくり実行委員会」が立ち上がるなど、構成員の異なる様々な組織が活動を始めている。このように、一つの保存地区に多様な活動体が存在していることには、生涯教育の町としての成果と見るができる。一方では、地区全域の統一性という観点からは少なからぬ弊害があることも指摘されている。

そうした中で、2002年に「白糸組」というボランティア団体も組織された。地域にあった白糸城の名を冠したこの団体は、「白糸まちなみ交流館」において伝建地区の見学客の対応などをしていたのだが、「どうせ留守番するなら何か催しを」という思いから2002年に「不思議展」を開催した¹⁵。ここでは、会員が持ち寄った仮面や民具、神仏像や妖怪フィギュアなどが展示されたのだが、その中で金ケ崎の「不思議所案内図」が作成された。編集にあたったのは、当時金ケ崎町中央生涯教育センターにおいて文化財を担当していた職員であり、文献調査や民間伝承に基づくものだけではなく、約3分の1は個人の「体験」に基づいているという¹⁶。文字化されていない個人の記憶を掲載することで新たな伝承が再発見され、2003年には『もっこくっぞ』として出版された。作者がかつて耳にした話など、文字化されていない個人の記憶を掲載することは、既存のコンテンツに頼らないという意味において従来の妖怪伝承の活用とは方法を異にしている。

この「不思議展」は単発の企画展として1回限りで終わっているのだが、その理念を引き継ぐ形で、2006年8月に金ケ崎要害活性化委員会の主催による「金ケ崎納涼祭一幽霊・化け物・妖怪画展」が開催された。これは、谷中の全生庵で開催されている「円朝まつり」に着想を得て始まったものであり、「金ケ崎江戸学の一翼」に位置づけられている¹⁷。企画の中核を担うメンバーへの聞き取り調査の中でも「ここがその、武家町、伝建のね、武家町というところの、武家のいわゆる江戸時代の文化というのに触発されたのが一番」と語

られている¹⁸。

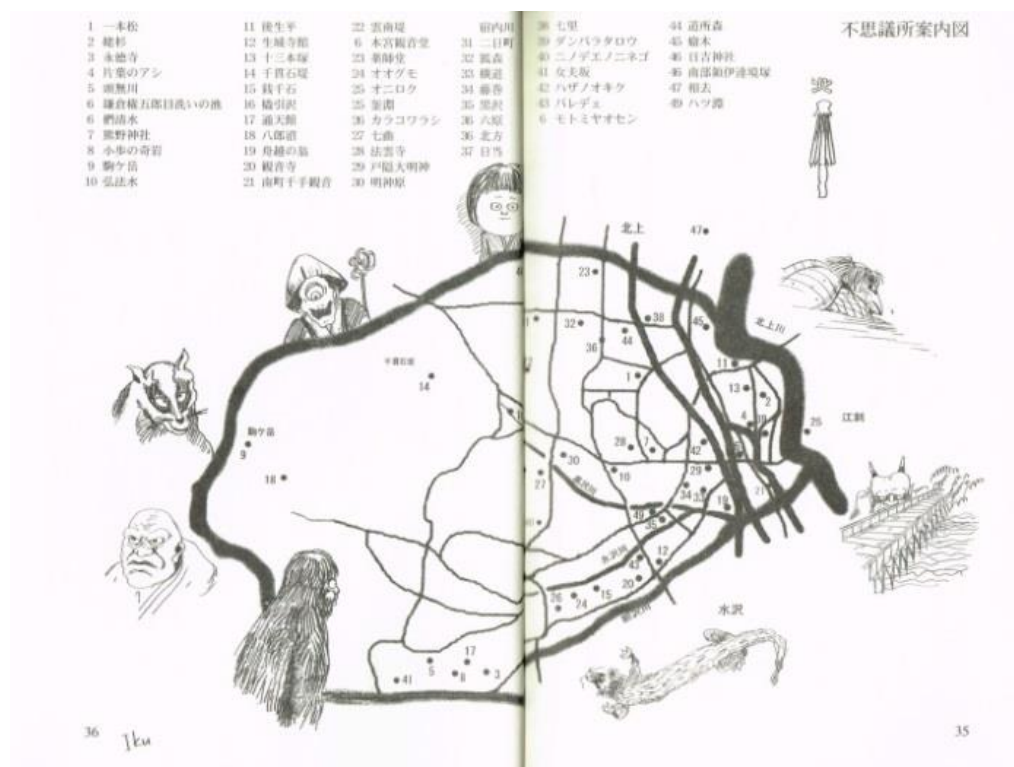


図 4-7 不思議所案内図

そもそも、金ケ崎ではどのような伝承が語られてきたのだろうか。1988年に岩手出版から発行された『岩手民話伝説事典』には、大小合わせて 135 の昔話や伝説が掲載されている¹⁹。このように、伝承のコンテンツ自体は必ずしも少なくはないが、2012年8月18日に実施したアンケート調査では、地域固有の妖怪伝承に対する回答は少なく、金ケ崎の妖怪として挙げられたのは「もうこ（もっこ）」と「ニノデノニネゴ」のみである。そのような状況下で、2006年に始まった「幽霊・化け物・妖怪画展」ではそれぞれの思い描く幽霊・化け物・妖怪画が自由に描かれ、伝建地区内の公開物件等で展示されている。2007年には、白糸組のメンバーを中心に「金ケ崎まちづくり研究会」が組織され、幽霊・化け物・妖怪画展も継続して開催されてきた。そもそも、金ケ崎まちづくり研究会は伝建地区内の建物の公開を目指した活動を行っており、会としての最初の活動は空き家だった「大松沢家住宅」を整備



図 4-8 幽霊・化け物・妖怪画展（2012年8月18日撮影、「大松沢家住宅」における展示風景）

公開することだった。研究会のメンバーは、当時の状況について次のように語る。

これが空き家になって、雑草ばあって背丈ぐらいの雑草で、屋根もない状態だったんですよ。ないというか、雨降ればざぶーんっていう状況で。で、持ち主が福島の方なんですけども、すごくいい場所だし、伝建群にとっても拠点でもあるし、門とかもいいんだけど、内部に江戸時代の庭園、そこに築山があるんですけども、これも外からじゃ見れないということで、何とかこれを見せてあげることできないかっていうことで、門を開いたと、それがまず最初の活動です。

このように、伝建地区として指定されて以降であっても、必ずしも公開物件が多くなかった状況に対して、具体的な活動を展開してきたのが金ケ崎まちづくり研究会であった。2010年4月には、「旧坂本家住宅」の復元公開を実現させ、現在では指定管理者としてその運営にあたっている。これらの「大松沢家住宅」と「旧坂本家住宅」が、幽霊・化け物・妖怪画展の主たる会場となっており、伝建地区内の回遊性を高めることも企画の趣旨の一つとなっている。



図 4-9 幽霊・化け物・妖怪画展（2012年8月17日撮影、「旧坂本家住宅」における展示風景）

幽霊・化け物・妖怪画展は、2013年までに計8回開催されており、これまでに累計出展者25名によって93点の作品が発表されている。出展者25名のうち、金ケ崎町内出身者が10名、金ケ崎町外岩手県内出身者が10名、県外出身者が5名である。また、出展時の居住地に従えば、町内在住者が15名、県内在住者が8名、県外在住者が1名である。なお、ここでの県外在住者1名は筆者自身であるため、本論の考察からは除外する。このように、出展作品の多くは、町内出身あるいは町内在住者によって描かれており、またそのほとんどが描画活動を生業としていない人物によって描かれているため、そこで発表された作品を分析することによって、地域社会における一般的な幽霊・化け物・妖怪観を明らかにすることができると思う。

ここで、これまでに発表された作品を分類すると、おおよそ以下の5つのカテゴリにまとめるができる。第一に既にイメージが確立しているキャラクターを描いたもの、第二に金ケ崎に残る民間伝承を描いたもの、第三に個人の体験や記憶に基づいて描いたもの（聞き書きを含む）、第四に金ケ崎の地域を舞台として描かれたもの、第五に作者の創作によるものである。その他、地獄を描いたものなど、このカテゴリに含まれない作品もある。

ここに出展された作品の全てが活動の本来の目的である江戸文化としての「化け物」を表象しているとは限らないが、こうした活動を通してそれまで表面化されることのなかつ

た地域の記憶が可視化されている点は注目に値する。例えば、2010年に開催された第5回展に出展された《黒沢の早朝お化け 悪羽妖》は、金ケ崎に住む住民が目撃したお化けとして描かれたものである。作者は、2012年8月18日に開催された「幽霊・化け物・妖怪会議」の席上で、この絵について次のように語っている。

描いてくれって言われた時に、描くものがなかったんで、知り合いを訪ね歩いたところ、こういうのがいたつうんで、それを聞いて、聞き書きっていうか、絵にしたんですけども、子どもの頃、夜っていうほかに、朝方っていうのも、何かこう、太陽が上がったあたり、夏ですね、ラジオ体操なんか行くあたりに、私の頃、記憶としては坂の前とかですね、何かちょっとこう、殺気というわけじゃないですけど、それを感じたもんですから、やっぱこういうのがいたのかなっていうイメージを膨らませて描いたんです²⁰



図 4-10 《黒沢の早朝お化け 悪羽妖》2010年

ここでは、「幽霊・化け物・妖怪画展」をきっかけに、出展者自身が聞き取りを行い、個人的な記憶に基づく新たな妖怪伝承が発掘されていると言えよう。さらに、そうして聞き取った話に作者自身の経験を重ね、「夏」の「朝方」に「ラジオ体操」に向かう頃を感じた不思議な感覚として共有されている点に新しい妖怪の創造を見ることができるのではないだろうか。言わば、身の回りで起こった不思議な体験に対して、時を経て名前と形が与えられたわけである。

あるいは、2013年に開催された第8回展に展示された《鬼石首の爪》は、地域に伝わる民話である「大工と鬼六」をもとにした創作民話となっている。「大工と鬼六」とは、金ケ崎などに伝わる昔話であり、絵本などを通して広く知られた民話の一つである。その概要をまとめると以下の通りである。

むかし、あるところに、流れのきつい大川があった。その川にはいくら橋を架けてもたちまち流されてしまったため、名人の大工に架橋を頼むことになった。大工はその頼みを引き受けてはみたものの、どう架けたらいいものかと川を眺めながら悩んでいたところ、水の中から大きな鬼が現われた。鬼が言うには、りっぱな橋を架ける代わりに、大工の目玉をくれという。大工はその交換条件をのんで、鬼の橋は完成した。しかし、鬼は自分の名前を当てることができれば目玉を取るのを勘弁すると言った。

その後、大工が深い森をさまよっていたところ、遠くから「寝ろてばや 寝ろてばや／鬼にも 名はある／涙もあるよ／はよう寝た子にや 鬼六が／目ン玉 おしゃぶり／持ってくる」という子守唄が聞こえてきた。これに合点を得た大工は、その翌日に見事に鬼の名前を当て、鬼はそのまま川に消えていった。²¹

この話は、当初は「鬼六と大工」として掲載されていたのだが、その後に国語の教科書などに掲載されたことによって広く知られる民話となった。こうした話に想を得て描いた絵について、作者は次のように語っている。

ま、その、妖怪とかね、お化けの話なんです、何で、鬼はね、その、えー、目玉を欲しかったのかなと、いうことで実は、私が最初に言ったのは、勝手に、創作した、これは話で、金ヶ崎の西根に、行く手ねえ鬼の童がいて、みんなでおいじめたら、仕返しに、角は折られる、目玉は取られると、いうので、そういう、ろくでない鬼の子どもが実は最後は石になってしまって、で、伝建群の中のどこかのどの石かどこかその辺の石になってしまったという話に、実は、つくりかえたわけで、で、お父さんは、の鬼は、きっと自分の子どもにね、世の中がよく見えるように、目玉を与えたいなと思ったのではなかろうかと、いう話にしようということで、実はこれはつくった話です²²

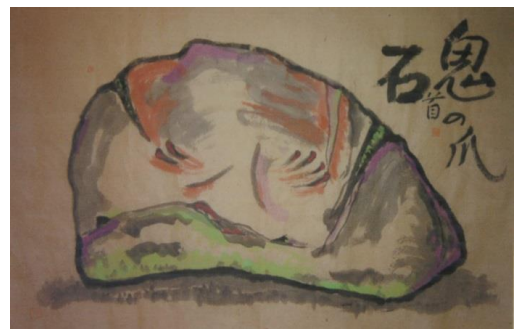


図 4-11 《鬼石首の爪》2013 年

ここでは、「大工と鬼六」の物語を解釈し、新たな物語として再生させた意図が語られている。金ヶ崎の西根に舞台を設定し、伝建地区内の「石」と結びつけた物語として完結させている点には昔話の伝説化とも見るべき趣向を見ることができる。もちろん、こうした「石」そのものも仮想のものではあるが、こうした物語を聞くことによって武家屋敷に置かれた石にも目を向けるきっかけが生み出されているとすれば、これもまた一つの効果と見ることができよう。

こうして、幽霊・化け物・妖怪画展を継続的に実施することによって、既に挙げた「不思議所案内図」に新たな情報が蓄積されている。これについて、金ヶ崎まちづくり研究会のメンバーは次のように語っている。

結局日常っていうか、今までそういう観点で見なかったんだけど、なんかこういう作業したり、妖怪のことをずっと考えたりすると、あっ、それが妖怪だったのかみたいなことがあって。あるいは、あの、こういうことやってると、いとこが俺こんな話聞

いたんだよ、みたいなね、そういうことがあって、あの何十という数が増えていくわけじゃないんだけど、ポツリポツリとね。²³

既存の物語が存在しない金ケ崎の場合、第三者から与えられる「妖怪図鑑」をそのまま受容するのではなく、個人の記憶や地域性に根差した妖怪を発掘（創造）し、リスト化していくことで、自由な発想により、新たな妖怪文化が形成されている。そうした活動をきっかけに、地域の些細な記憶を蓄積していくことで、土地に根差したまちづくりへと展開していく可能性を秘めている。

第2節 アートプロジェクトの民俗学―「限界芸術」領域との接触を中心に

2-1. 地域におけるアートプロジェクトの目的

前節で取り上げた活動は、いずれも地域住民を主体とする妖怪文化の再創造の事例として位置付けられる。そこでは、地域で伝えられてきた妖怪に対して現代的な視点から新しい解釈が加えられ、地域の実情に即した形で活用がなされている。こうした活動は、地域活性化のための取り組みであると同時に、地域住民を主体とする地域文化の創造としての価値を見出すことができる。本節では、こうした取り組みの背景に近年の芸術文化活動における地域文化（≒民俗文化）への関心の高まりを指摘し、生活と直接的に関わった領域における芸術活動としての「アートプロジェクト」との連続性を明らかにすることを目指す。

第1章第3節で述べた通り、2001年に「文化芸術振興基本法」が制定された前後から、文化芸術とまちづくりは深い関係を保ってきた。現在、日本各地で行われている「アートプロジェクト」には、少なくとも二重の意味が混在している。第一に、従来の「美術展」に代わる展覧会としての意味合いである。ここには、「越後妻有アートトリエンナーレ」や「瀬戸内国際芸術祭」などの大規模な国際野外美術展から美術館を拠点とする地方都市型のものまで様々な規模のものが含まれる。第二に、表現手法としての「プロジェクト」としての意味合いであり、必ずしも展覧会や展示を伴わない。無論、第二形式の表現が集積することで第一形式の展覧会が開催されることも少なくないが、用語の混乱を避けるために予め言及しておく。

では、地域社会にとってアートプロジェクトは何をもたらし得るのだろうか。以下、アートプロジェクトの理論的背景に触れながら、文化芸術と地域社会との関係について考察を進めていく。そもそも、現代美術史上、アートプロジェクトは「パブリック・アート」の延長線上に位置づけられる。これが芸術運動として位置付けられるのか、一過性の現象であるのかの判断は後世に委ねられるべきところだが、とりわけ2000年代以降の現代美術の動向を語る上でアートプロジェクトという用語が重要な位置を占めていることは間違いない。アートプロジェクトのほとんどは、美術館や劇場といった既存の芸術文化施設に留まらず、芸術のために設えられていない空間で実施されている。とは言え、こうした展示

空間をめぐる問題は必ずしもアートプロジェクトの本質的な関心事ではない。むしろ、こうした芸術文化活動を通して、芸術の専門家による閉じられた関係だけではなく、開かれた関係性を通して新たな「パブリック（公共圏）」が構築されていくことに大きな目的が据えられていると考えられる。

例えば、新潟県で 2000 年に始まった「越後妻有アートトリエンナーレ」は、「人間は自然に内包される」というテーマのもと、広大な自然環境を舞台とする野外美術展として 3 年ごとに開催されており、その度に多くの鑑賞者が現地に訪れている。そのような場所で成立するアートについて、北川は以下のように述べている。

他者の土地に作品をつくる。そのとき、その場は、その地域の関係者、土地の所有者、アーティスト、協力者にとってパブリックな場所となる。ここでのパブリックは市民的なという意味だろう。私達の政治、社会構造、手続、さまざまな局面でのドツボにはまった混乱の理由にパブリックな意識が歴史的に形成されてこなかったことがあげられるが、ここでのアートの成立は、その背景、協働性、関係性、展開からいってまさにその契機となりうるものだった。²⁴

美術が地域に介入することによって人々の間にパブリックな意識を生み出す契機をつくりだしていくという指摘である。これは一朝一夕に達成されるものではなく、プロジェクトの時間的な蓄積によって達成されるものである。

美術評論家の中原佑介は、「越後妻有アートトリエンナーレ 2000」について、その特徴の一つとして「都会美術として推進されてきた現代美術に非都会美術の可能性を開いたこと」を挙げている²⁵。実際、従来の「パブリック・アート」は、その多くが都市部で展開されてきたことは事実である。これに対して、中原の言葉を借りれば「非都会」としての農山漁村など、日本の「民俗」の原風景が残るような場所が芸術文化活動の舞台として脚光を集めたことは、確かに大きなパラダイムの転換であったと言えよう。しかしながら、都市で培われてきた「アート」の方法論は、必ずしも初めから地域社会に受け入れられたわけではなかった。

暮沢剛巳は、2000 年から 2006 年にかけての越後妻有アートトリエンナーレの変遷について、以下のようにまとめている。従来都市空間で設置されていたような野外作品を越後妻有へと移設してきたような野外作品が多くを占めていた第一回展（2000 年）、大規模な建築プロジェクトが立ち上げられ、地域の拠点となり得る場所が生み出された第二回展（2003 年）、「空家」や「廃校」といったキーワードの下に、地域再生のプロセスを作品化する試みが見られた第三回展（2006 年）という段階である。その上で、作品の設置場所が公園などの公共空間に限られていたところから次第に集落の中や各家屋の内部にまで入り込むものが多くなったことに注目し、こうした発達段階が「美術作品と公共空間の関係、さらには『公共圏』（public sphere）の実態そのものの変容をも物語っている」と論じている²⁶。こ

ここには、公共空間に設置されているという意味での「パブリック・アート」から、そこに住む人々の私的空間も含めて「公共圏」そのものへとアプローチするような「パブリック・アート」への転換を見ることができる。あるいは、「サイト」から「コミュニティ」への関心の移行と見ることもできよう。

そうした中で、「越後妻有アートトリエンナーレ 2009」に出展された大成哲雄と竹内美紀子による《上鰯池名画館》は、地域住民との高度な協働の末に完成された作品であった。これは、西洋美術の名画の舞台を、作品の展示場所となる集落に置き換え、地域住民を名画の登場人物として据えた写真作品である。例えば、ミレーの《落穂拾い》を《山菜採り》の場面に置き換えたり、レオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》を《田休み祭り》として再現したりするなど、単なる作品のパロディにとどまらず、集落の民俗を反映させている。これらの写真を撮影するにあたっては、「出演者に事前にモチーフである『名画』資料を配布、鑑賞してもらい、各々が普段の生活と重なるイメージ

を膨らませ臨んでもらった」という²⁷。例えば、先の《山菜採り》の場合、出演者自身が「作中と似た農作業袋をそれぞれ持参し」とある²⁸。「越後妻有アートトリエンナーレ」という大きな枠組み（展覧会）の中に組み込まれながらも、それ自体が独立した「プロジェクト」として機能している。

越後妻有のような大規模な取り組みに限らず、よりコンパクトな形で地域と結びついたプロジェクトも実施されている。例えば、岩手県花巻市東和町土沢地区で 2005 年から実施されている「街かど美術館 アート@つちざわ」は、「萬鉄五郎記念美術館と地元土沢地区の商店街、そしてアーティストが一体となり、街じゅうに美術空間を創りだすアート・プロジェクト」である²⁹。JR 土沢駅や美術館のほか、商店街の商店や空き家で作品を展示するこの企画は、初回の 2005 年と二回目の 2006 年は、公募による自由参加型の美術展の形式をとっており、それぞれ 130 名、200 名を超える作家が参加し、100 か所を超える地点に作品が展示された。こうしたプロジェクトが始まった背景について、門田秀雄は「平澤広（筆者註：萬鉄五郎記念美術館学芸員）を中心とした美術館解放の発想とそれに賛同し実現に向けて行動できる地元土沢の商店街を中心とした有志たちがいて、それと菅沼緑（筆者註：立体作家、土沢在住）らのアートと地域・環境との関係という問題意識が結びつき」から始まったものであると指摘する³⁰。

こうしたプロジェクトは、専門家による完成された美術作品を鑑賞するという関係性のみならず、そこに至るプロセスに市民が参加することによって、コミュニティ活動が活性化されていくような事例が多い。アートプロジェクトの持つこうした機能について、小林



図 4-12 大成哲雄、竹内美紀子《上鰯池名画館》2009 年

進は、「従来の私的領域と行政（政府）領域に加えて住民同士で地域の問題・課題を解決していく共同・公共（公益）的領域の活発化・拡大が注目されつつある」と指摘した上で、「相互性を通じて高めあう人間関係」を原理とした「地域市民の運営によるさまざまな活動」が、「従来の社会システムが生み出せないような学びの場を創出すること」を可能にすると述べている³¹。とは言え、ここで語られている「従来の社会システム」とは、言い換えれば近代以降に形成されてきた「個」を基準とするシステムに依拠したものなのではないだろうか。むしろ、「従来の民俗社会」では、地域住民（共同体の構成員）による様々な活動を通して人間関係が構築されてきた。アートプロジェクトの多くが、都会だけではなく農村においても受け入れられている背景には、共同制作の場を起点に据えた擬似的な共同体の再構築を指摘することもできるのではないだろうか。

2-2. アートプロジェクトを通した「限界芸術」の現代的再生

芸術と生活空間が直接結びついたことで、美術の専門家ではない多くの人々がアートとの接点を持つことになる。ここには、宮澤賢治が「農民芸術概論」において「職業芸術家は一度亡びねばならぬ／誰人もみな藝術家たる感受をなせ／個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ／然もめいめいそのときどきの藝術家である³²」と述べたところの現代的解釈と見なすこともできよう。1926年1月に花巻農学校で開校された岩手国民高等学校において、宮澤賢治が「農民芸術」を担当しているが、生前未発表のこの一文は賢治の芸術思想を表明した草稿である。

ただし、賢治の芸術理論としての「農民芸術」は、必ずしも農民だけを芸術の主体として据えたものではなく、「職業芸術家の否定のモチーフ」を重視する中で生み出された理念と考えられる。これについて、北川透は「農民芸術」が「賢治自身の詩法を直観的語ったことば」であり、取り立てて「農民」に限定する理由はないことを指摘している³³。詩人の高村光太郎は、賢治の「農民芸術」について次のように述べている。

普通、農民芸術といふと、農そのものの本質的藝術を指さないで、農に附随する諸般の藝術的事物を指すことになってゐるが、宮澤賢治の意味する農民芸術とは、別に外から持ち來して貧寒な農生活を豊かにするといふ程度のものではない。農そのものと、それを圍むわれらの生活と醇乎として美しい藝術に創り上げることである。³⁴

ここでは、生活の中で「美」が創り上げられていくことについて触れられている。無論、一連の「農民芸術」の背景に同時代の農民文学運動との関係を指摘することもできなくはないが、賢治が実際に農に生きることによってそれらを実践しようとしていた点は彼の独自性を際立たせている。

こうした賢治の理念と実践は、後に鶴見俊輔によって新たな解釈が加えられることになる。鶴見は、1967年に発表された『限界芸術論』において、「限界芸術の作家」として宮澤

賢治の名を挙げている。「芸術」を「純粋芸術」(Pure Art)、「大衆芸術」(Popular Art)、「限界芸術」(Marginal Art)に分類している。「専門的芸術家によってつくられ、それぞれの専門種目の作品の系列にたいして親しみをもつ」という「純粋芸術」、「専門的芸術家によってつくられはするが、制作過程はむしろ企業者と専門的芸術家の合作の形をとり、その享受者としては大衆をもつ」という「大衆芸術」に対して、「限界芸術」とは「芸術と生活との境界線」に位置づけられ、「非専門的芸術家によってつくられ、非専門的享受者によって享受される」と規定されている³⁵。ここでの「限界芸術」の主体が「非専門的芸術家」であるという点は、宮澤賢治の「農民芸術」の主体との比較を試みる上で意義深い。

そもそも、宮澤賢治が「農民芸術」を構想した 1920 年代は「農民」的な生活がスタンダードであったのに対して、鶴見が「限界芸術」を構想した 1950 年代から 60 年代にかけては、既に都市化が進行し、「農民」的な生活は必ずしもマジョリティではなくなっていた。とは言え、鶴見が「限界芸術」の対象を想定する上で、農村文化を念頭に置いていることは、「限界芸術」「大衆芸術」「純粋芸術」を分類した以下の表を見ても明らかである。

表 4-2 鶴見俊輔『限界芸術論』における「芸術の体系」

芸術のレベル 行動の種類	限界芸術	大衆芸術	純粋芸術
身体を動かす →みずからのう ごきを感じる	日常生活の身ぶり、労働のリズム、出ぞめ式、木やり、遊び、求愛行動、拍手、盆おどり、阿波おどり、竹馬、まりつき、すもう、獅子舞	東おどり、京おどり、ロカビリー、トゥイスト、チャンバラのタテ	バレエ、カブキ、能
建てる →住む、使う、 見る	家、町並、箱庭、盆栽、かざり、はなお、水中花、結び方、積木、生花、茶の湯、まゆだま、墓	都市計画、公園、インダストリアル・デザイン	庭師のつくる庭園、彫刻
かなでる、しゃ べる →きく	労働の相の手、エンヤコラの歌、ふしことば、早口言葉、替え歌、鼻歌、アダナ、どどいつ、漫才、声色	流行歌、歌ごえ、講談、浪花節、落語、ラジオ・ドラマ	交響楽、電子音楽、謡曲
えがく →みる	らくがき、絵馬、羽子板、おしんこざいく、風絵、年賀状、流燈	紙芝居、ポスター、錦絵	絵画
書く →読む	手紙、ゴシップ、月並俳句、書道、タナバタ	大衆小説、俳句、和歌	詩
演じる →見る 参加する	祭、葬式、見合、会議、家族アルバム、記録映画、いろはカルタ、百人一首、双六、福引、宝船、門火、墓まいり、デモ	時代物映画	文楽、人形芝居、前衛映画

鶴見俊輔『限界芸術論』70 頁を参照

ここでは、「ゴシップ」や「デモ」を除けば、「限界芸術」に属する芸術活動のほとんどが従来の民俗社会でなされてきた生活文化であることが分かる。無論、「阿波おどり」のよう

に本来は限界芸術的だったものが、次第に大衆化する事例も見られるため、これらは固定的なものではなく常に流動しているわけだが、「限界芸術」の屋台骨を支える柱として民俗文化が想定されていることは注目に値する。

こうした「限界芸術」に対する関心が、アートプロジェクトの隆盛とともに脚光を浴びるようになりつつある。小暮宣雄は「限界芸術」領域におけるアートマネジメントについて、加藤種男の実践に基づき考察している。

表 4-3 芸術分類と社会的公的投資の関係（加藤種男 1999.12、配布資料より）

芸術の種類	芸術の事例	市場との関係	社会的公的投資（メセナ）との関係
大衆芸術 popular art	ミュージカル、団体展、カラオケ、市民オペラ、県民文化祭、ピアノの稽古	市場が成立する	投資は市場を混乱させる（投資をしてはならない）
伝統芸術 traditional art	美術館、オーケストラ、能楽	市場は部分的に成立する	部分的な投資が必要であり効果的
先駆的芸術 experimental art	都市の芸術、メディア・アート、体験記憶の芸術	市場が成立しない	重点的かつ継続的な投資が必要
限界芸術 marginal art	宴会芸、祭、仕事歌、遊び歌、盆栽、立花、ストリート・アート、Eメール、庭園	市場になじまない（経済の範疇外）	先駆的芸術との連携による投資が有効（投資になじまなかった）

※小暮宣雄「『限界芸術』領域におけるアーツマネジメント理論の構築とその実践」日本アートマネジメント学会編集委員会（編）『アートマネジメント研究』第8号、美術出版社、2007年、55頁を参照して筆者が作成。

ここで加藤は、かつて鶴見が「純粹芸術」と括った領域を「伝統芸術」と「先駆的芸術」とに分類し、事例も1990年代に置き換えている。「大衆芸術」の中に「団体展」や「県民文化祭」などを含み、これらに対する投資は市場を混乱させるという指摘は、従来の芸術文化支援方策とは一線を画する刺激的なものである。ややもすると、非専門家の手になる市民を主体とする芸術文化活動が「限界芸術」の一領域として位置付けられかねないところを、「専門家の芸術があってそれを模倣する芸術は地域（中略）でけっこうさかんだが、これと『マージナル・アート』は違う」という解釈は重要である³⁶。

とりわけ、近年のアートプロジェクトでは、こうした「限界芸術」領域を対象とする取り組みもなされるようになってきている。「墨東まち見世」において村山修二郎によって取り組まれた《路地園芸術祭》は、軒先や路



図 4-13 墨東地区の路地園芸の例

地に置かれた「路地園芸」を「生活に根付いた文化であり、都市の人にとって欠かせない重要なコミュニケーションツール」であると見なし、「地で生まれたものを地で共有し、その中から新たな気づきを生む仕掛け」が創出された³⁷。無論、芸術の舞台としての「路上」の持つ可能性については、「路上観察学会」を挙げるまでもなく、既に数々の活動の蓄積がある。そのルーツは、今和次朗の提唱した「考現学」にまで回帰することができるわけだが、「限界芸術」の多くが路上から生まれてきたことは注目すべきであろう。

筆者が 2008 年から参与観察を行っている「小料理喫茶ワシントン」（茨城県水戸市）の事例も、まさに生活と芸術との接点の中で生み出されてきた路上の「限界芸術」とも呼ぶべき取り組みであった。これは、2008 年に水戸芸術館の主催で開催されたアートプロジェクト「カフェ・イン・水戸 2008」に出展された矢口克信による《祭後の家》という「作品」に端を発している。水戸市のまちなかにあった取り壊し寸前の空き家を舞台に展開されたこの作品は、かつて小料理屋として機能していた建物の記憶を取り戻すように「小料理喫茶」としての再生を図ったワーク・イン・プログレス型の作品であり、会期終了後も 2013 年まで「小料理喫茶ワシントン」としての営業が続けられた³⁸。そこでは、通常の小料理喫茶としての営業が不定期でなされるのと並行して、地域行事としての「サントピア通り de ワシントン祭り」の開催や地域メディアとしての「和心団新聞」の発行を通して、忘れられていた場所は人々が集う「場」へと変貌を遂げていった。



図 4-14 サントピア通り de ワシントン祭り
(2012 年 5 月 27 日撮影、茨城県水戸市)

5 年間にわたる活動を経て、「既存の利害関係とは異なるゆるやかな関係性を築きながら、従来の地域開発とは異なる手法による地域価値の創出」を通して、建物を起点とする新たなコミュニティが形成されてきた³⁹。アートプロジェクトが生み出し得る社会関係資本（ソーシャルキャピタル）については、既往研究でも指摘されているところであるが、そこに関わる人々の多くが現代美術プロパーではないという点は特筆すべきであろう。「小料理喫茶ワシントン」の場合も、隣りで営業している小料理屋の女将や向かいのマンションに住む住民など、まさにご近所付き合いの範囲で活動が展開されてきた。「サントピア通り de ワシントン祭り」についても、誰かに「見せる」ための祭りではなく、そこに集う人々が「する」ための祭りであるという点に重心が置かれている。これは、水戸のまちに「夜市の風景をもう一度」と謳った矢口自身の言葉からも導き出される。ここで志向されている芸術が「純粋芸術」としてのそれではなく「限界芸術」としてそれにより近いことは明らかである。と同時に、ここにはイーファー・トゥアンが「トポフィリア」という言葉を用いて分析したところの「物理的環境と人間との情緒的なつながり」を見出すこともできる⁴⁰。

アートプロジェクトはいわゆる「純粋芸術」の領域よりもむしろ、地域社会や民俗文化、

社会問題や教育、観光やまちづくりといった他の領域と結びつきながらその実像を形成してきた。そうした取り組みを通して、地域を見る新たな視点を構築することが、アートプロジェクトという表現手法の持つ一つの可能性であると言えよう。

2-3. アートプロジェクトを通した新しい民俗の創出

—妖怪は「限界芸術」の対象となり得るのか

今日開催されているアートプロジェクトの多くは、特定の空間に新たな「物語」を構築することによって、新たな場所の力を引き出すことに主眼が置かれている。例えば、2009年に大分県別府市で始まった現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」のディレクターを務めた芹沢高志は「別府の街のあちこちに潜んだ場所の力を、現代の魔術師たるアーティストが解放する」（傍線部筆者注）という期待を寄せている⁴¹。ここで言う「場所の力」については、美術評論家の小倉正史が別の言葉で次のような解釈を加えている。そこでは、「選んだ場所も含めてアーティストの作品になるわけであって、アーティストがそこでどれだけ深く、適切に、その場所を生かしているかということで評価をすることはできる」とした上で、さらに「その評価は、形式主義的な基準にもとづく判断とは異なり、場所を訪れた人の内面での受け取りかたに委ねられることになる」と加えている⁴²。

つまり、作品それ自体が内包する物語は、そこに訪れた鑑賞者に対して開かれているわけである。ここには、ウンベルト・エーコが「開かれた作品」と呼ぶ作品概念の現代的な解釈を見ることができよう。言わば、作品それ自体の物語性が美術史という「大きな物語」の中に吸収されていった主義や流派の近代美術に対して、現代美術ではむしろ個々の作品が独立した「小さな物語」として完結しているわけである。住友文彦は、1920年代と60年代の前衛美術が「外」との遭遇によって自らの存在を確かめた「民族誌家モデル」であったのに対して、今日では「アーティストが構築したフィクションによって、ここにあるのとは別の何かへ眼を向けさせ、私たちが現実に対して何か変容を加えるような実験が行われている気がしている」と指摘する⁴³。

アートプロジェクトはある意味において、こうした「フィクション」を生み出す触媒としても機能しているのである。そして、そこには民俗的な想像力とも呼ぶべき「集団的創造」あるいは「共同編集」のプロセスが内包されているわけである。無論、アートプロジェクトの場合、地域共同体の内外の人がある状況を共有しながら一篇の「物語」を編んでいくという点において民俗的な想像力とは異なるわけだが。

既に述べてきたように、「アートプロジェクト」と「限界芸術」が結びつきやすい背景には、こうした集団的創造原理が働いていると考えられる。この前提として、「限界芸術」の中に集団性に基づくもの（祭りなど）と個人の「趣味」の領域に属するもの（盆栽など）が並列されていることは注目すべきである。そして、こうした集団性は「語り」を通して共有されていくことになる。自らもアーティストとして活動してきた藤浩志は、「地域に存在する多種多様な場は、いろいろな体験や実験を重ねることで、そこから思わぬ物語

が発生する」とし、アートプロジェクトが「地域実験」として実践されることで「地域の独自の問題があぶりだされ」、「そのところどころで数多くの豊かな物語が発生する」と述べている⁴⁴。山本吉左右は「語られる物語の側からすると、それはすでにできあがった物語りであったが、同時に語られた瞬間、それは新しい創造でもあるわけで、文字以前の社会の伝承は、このように流動的であり、創造的であり、集団的創造に媒介されることによってしか生きることができなかった⁴⁵」と述べている。ここでは「集団的創造」という言葉が「文字以前の社会」に対して適用されているわけだが、これは同時に高度に文字化された現代社会にも応用し得る観点である。

ここで改めて地域社会において妖怪伝承が果たしてきた機能に目を向けると、そこにもやはり集団的創造原理が働いていたと見ることができる。しかも、それらの多くは場所に根差した物語として語られている。ここで改めて、アートプロジェクトにおける創造性と妖怪伝承の創造性とを比較しておきたい。

表 4-4 アートプロジェクトと妖怪伝承の比較

アートプロジェクト		妖怪伝承
作家（アーティスト）の存在	創造主体	作家（アーティスト）の不在 匿名性
必ずしも地縁に基づかず、更新され続けるコミュニティ	創造基盤	地縁に基づく共同体あるいは家庭
個人の関心に応じて様々なレベルでの関与（参加）の形がある	地域住民の関与	地域生活者による無意識的な（心意）伝承
地域外の人々が関わる回路が開かれている（鑑賞者、ボランティア等様々な形での参加の可能性）	地域外の人々の関与	地域外部からもたらされた情報や人的交流によって新しい伝承も発生することもある
作家自身の「作品」としてのヴィジョンとそこから波及するコミュニティの再構築や地域活性化	目的意識	地域の記憶を伝承することを通じた共同体の秩序の維持や家庭内における躰や娯楽

妖怪文化の現代的活用について考察する上で、アートプロジェクトの方法を援用することには 前節で掲げた二つの事例も、「職業芸術家」こそ関わっていないものの、先人が生み出し、語り継いできた妖怪を素材としながらも、現代の状況に合わせて再生させている点において、アートプロジェクトの力学が働いていると言えよう。以下の節では、このようなアートプロジェクトの構造を妖怪文化の再創造へと導入することによって、妖怪文化の現代的活用の手法の開発を試みる。

第3節 隅田川妖怪絵巻の構想

3-1. 実施体制—NPO 法人千住すみだ川の概要

本節では、NPO 法人千住すみだ川（以下、千住すみだ川）の主催による《隅田川妖怪絵

巻》の企画運営を通して、妖怪文化を活用したアートプロジェクトの手法の開発を試みる。近年、アート NPO による芸術文化活動が各地で盛んに実施されているが、その目的はそれぞれの地域が抱える課題によって様々である。

千住すみだ川については、その定款によれば「隅田川と日光街道の交差する町、千住を中心に隅田川・沿線地域を、芸術の力と地域・世代・ジャンルを超えた人々の志と協働によって、地域の歴史・風土・資源に光を当てる住民参加型の芸術文化活動を行い、自分たちの暮らす町らしさを考え、雇用の創出、子供達の育成を図ることで、住民が元気で誇りをもって暮らし、訪れる人々と夢や希望を分かち合える 21 世紀のモデル地域をつくることを目的とする」（傍線部筆者注）とある⁴⁶。

千住すみだ川が特定非営利活動法人としての法人格を取得したのは 2011 年のことだが、それ以前にも芸術文化による地域再生に取り組んできた。千住すみだ川としての最初の企画が生け花プロジェクトである。ここでは、町工場のある南千住の地域性を背景に、空き店舗を利用して生け花の展示を行った。また、2010 年に始まった《町の記憶プロジェクト》では、フロッタージュを表現手法として用いている美術家の酒百宏一との協働により、まちの中の記憶を擦り出す活動が行われた。

近年では、特定非営利活動法人によって展開されるアートプロジェクトも少なくないが、そこでは NPO はどのような役割を果たし得るのだろうか。加藤種男は、「創り手」と「受け手」の二つの立場から、今日の芸術活動において NPO に求められる立ち位置について分析している。まず、「創り手」の側から見た場合、「ボランティアとワークショップをプロジェクト成立の重要な要素とし、受け手の側の考えやアイディアを許容ないしは歓迎することによって、プロジェクトの変容を受け入れ」たり、「そもそも受け手の考えやアイディアこそが不可欠で、双方向性のコミュニケーションのうえに、創り手と受け手の完全な流動化をはかるアートが出現し」たりしたことが、「ラディカルな意味での NPO」が求められるようになったと指摘する。一方で、「受け手」の側からは、「アートの消費者としての受けてに留まらず、「創り手をパートナーとして創造の共有をはか」り、それらを継続していく上で NPO の組織化が求められる。こうした要請に対応するための「一連の活動と組織化こそが」NPO に求められる役割であると指摘する⁴⁷。この論考が発表されたのは 2001 年のことであり、当時の状況と現在とを比較すると、「つなぎ手」が機能すべき現場はますます増加しつつある。

千住すみだ川も、行政や企業などをつなぐことによって様々な実践を重ねてきた。そのような中で、2012 年 10 月に口火を切ったプロジェクトが《隅田川妖怪絵巻》である。この活動では、地域の記憶を表象する存在として「妖怪」を位置づけ、参加者との共同によって地域に学びながら新たな伝承を創作していくことを目指している。この活動では、アートプロジェクトの方法に基づき、「妖怪を創造する」という目的を共有したコミュニティを構築していく。

3-2. 隅田川をめぐる伝承

活動の拠点となる南千住には必ずしも多くの妖怪伝承が既存の「コンテンツ」として語られているわけではない。しかし、江戸を象徴する河川である隅田川には、古来様々な伝承が蓄積されてきた。例えば、謡曲「隅田川」のもとになっている「梅若伝説」も、隅田川沿いの木母寺に今なお梅若塚として残されている。はじめに、そうした伝承を概観しながら地域で語られてきた「物語」について考察を進めていきたい。

まず、隅田川界限で語られる「千住七不思議」について、『足立区史』は以下の七話を挙げている。

表 4-5 千住七不思議

題目	地域	内容
千住大橋と大亀	千住大橋	千住大橋が木の橋であった頃、橋杭が一か所特に広い所があったが、これは最初この橋をつくる時、大亀の甲に当たって橋杭を打ちこむことができず、災難もあったため、その場所を除けてその間だけ広くしたものであるという。
千住大橋と大緋鯉	千住大橋	千住大橋の上流に大緋鯉がいて、日夜橋杭を荒らして困ったので、大緋鯉を下流に行かせるために、橋杭の一部分だけを広くしたという。
片葉の葦	関谷	弘法大師が荒川（現在の隅田川）を渡った時、その御威光にひれふして、河原の葦葉までが一方になびき、そのまま片葉の葦として残ったものとして語られる。
子福様と油揚げ	千住	長延寺境内に子福様という稲荷社があった。この社は疲れや肩凝り、下の病気や子どもの病気に効いたことから、祈願する者が絶えなかったが、全快の礼に油揚げを奉納しないと再び同じ病に侵されるといわれていた。
置いてけ堀	堀切	堀切にあった池は「置いてけ堀」と呼ばれ、ここで釣りや網で魚をとって持って帰ろうとすると、後から「置いて行け！置いて行け！」という声をする。2、3匹の魚を置いていけば何のことはないが、置いていかないと芦原に迷い込んで帰れなくなったり、ひっくり返されて魚を全てとられてしまったりしたという。
お閻魔様とそば	千住	金蔵寺の閻魔に祈願をするときには、蕎麦をあげないと必ず盗難や災害に遭うといわれている。
牧の野の大蛇	千住緑町	千住二丁目に遊廓があった頃、そこにはお牧という遊女がいて、たいへんな人気があった。とうとう川越夜舟の船頭と結ばれることになり、ある夜駆け落ちをすることになったが、約束の場所に男は現れなかったため、お牧は荒川に身を投げてしまった。その後、川越夜舟がここを通ると一匹の大蛇が現れ、船の横腹にぶつかり転覆させるという事故が続いたため、人々はお牧の祟りを畏れ、川越に地藏一基を建立して冥福を祈ったという。

東京都足立区役所（編集発行）『足立区史』1955年、1052-1054頁を参照。

この中には、「片葉の葦」や「置いてけ堀」のように、多くの七不思議に共通するモチーフも含まれるが、その多くが川や水辺を舞台としていることはこの地域の環境を物語っている。例えば、「牧の野の大蛇」について『足立区史』は「荒川の流路と潮流の関係で入江の木材が河に出入し舟と衝突したのが、お牧を思い出した船頭の目に蛇と映ったのかもしれない」という解釈を加えている⁴⁸。

また、七不思議の中に千住大橋に関する動物の話が 2 話含まれていることも注目に値する。これらは、かつての千住大橋の橋桁の一部が広がったことから生まれた物語であると考えられるが、隅田川の「ぬし」をめぐるいくつかの伝承が残されている。例えば、左甚五郎が日光へ下る道すがら、千住の河原で渡し船を待ちながら砂地に描いた亀の絵が動きだし、それが川に入って主となった話などがある⁴⁹。また、「東京近郊名所図会」には次のように記されている。

大橋より荒川の上流を望めば、一帯の林樹を認むべし、是ぞ榛木山にて、深潭に沿へり。相伝、昔より此の潭底に大蛇ありて棲息し、時々榛木山に昇り来る。適々之に遇う者戦慄して遁逃するも、必らず熱病に罹ると因て荒川のぬしと称す。或はいふ。此大蛇のみならず一大赤鯉ありと。野村某の祖母洪水の際を望み居りしに、水面忽ち赤きを覚ふ。何ならむと驚きけるに、忽ち大尾を翻し、又巨頭を出せしを見れば、全く一大赤鯉なりしと、蓋し此鯉は扁目のよし。そは嘗て強暴なる船夫の為に鳶口を打込れしに因ると。

ここでは、榛木山の大蛇や片目の大緋鯉が隅田川のぬしとして認識されている。先の文献では大緋鯉が片目であったことには触れられていないため、必ずしも周知されていた伝承であるとは限らないが、「片目」であることによってその異形性が強調されている。神とも妖怪ともつかないような特徴を有している。「片目の魚」をめぐる伝承は各地に残されている。末広恭雄は『魚と伝説』の中で各地の片目魚の伝承について報告しているのだが、そこに鎌倉権五郎景政や弘法大師、徳川光圀といった歴史上の人物の伝説として語られているものも少なくない⁵⁰。隅田川の場合は、「強暴なる船夫」によって片目を潰された話や、大橋の架橋の際の事故で片目を失ったといった俗説が語られている。大緋鯉をしばしば暴れ川として人々を襲った自然の象徴と見なすのであれば、それに打ち勝ってきた人々の行為を語る中でこうした伝承が生み出された可能性もあるだろう。

また、隅田川が大きく湾曲している地点は鐘ヶ淵と呼ばれるが、ここにはいわゆる「沈鐘伝説」が伝えられている。『隅田川叢誌』には「昔此淵に釣鐘の落たるを引揚ること叶はずして捨置しが、ついに淵の主となり、水底にあり。是は水神おしみ給ふ故なりと、里俗の口碑なり」とある⁵¹。同様の伝説は各地に残されており、高木敏雄が『日本伝説集』の中で「沈鐘伝説」としていくつかの事例を挙げている⁵²。例えば、下総国香取郡（現在の千葉県香取郡神崎町）の利根川の沿岸には、「神崎の森」いう小高い森があるのだが、ここには

以下のような伝説が残されている。

むかし、或船頭が、どうしたものか、箱にも入れず、菰にも包まずに、鐘を裸の儘で船に積んで、利根川を通つてみると、此森の下にさしかゝつて、鐘が水鏡を見たかと思ふと、俄かに奇妙な声を立てゝ、船と共に沈んで了つた。それからと云ふものは、船頭は気をつけて、沈んだ鐘の上を通らぬことにしてゐる。

また、茨城県の霞ヶ浦の三叉沖にも「雨風激しい日の夕方になると、水底から、『府中恋しや国分寺』と悲しさうな音が聞える」という伝承が残されている。また、鐘とは別のパターンとして、富山県中新川郡釜ヶ淵村大字岩崎寺の岩崎寺神社には、釜をめぐる次のような伝承がある。

往昔は神社の入口の両側に、大釜が二個在つたさうだが、今は一つだけ残つてゐる。今一つの方は、数百年前に、近くを流れる常願寺川の水音を聞いて、自然に竜心を起し、終に或夜中に、常願寺川の深い淵に沈んだ。その当時までは、折々釜の音響が聞えたさうだ。

これらの事例は、いずれも不思議な音にまつわる現象とともに語られている。また、それぞれの伝承地の地形の多くはいずれも河川が湾曲している地点に位置しており、「曲ヶ淵」でもある。本章の第1節で取り上げた金ヶ崎も、北上川が湾曲した地点にあり、そうした環境が地名と結びついている説もある⁵³。隅田川の鐘ヶ淵も、綾瀬川との合流地点に位置していることから、不規則な水の流れが生じやすく、水運上の難所の一つでもあった。宮田登は隅田川の沈鐘伝説の背景に「境界を通過する人々の心意⁵⁴」を指摘しているが、そうした心意は地域環境から導き出されたものと言えよう。

3-3. 実施地域について—南千住の今昔

《隅田川妖怪絵巻》は、最終的には隅田川沿線で広域的に展開させていくことを目指したプロジェクトであるが、スタート期においては千住すみだ川が拠点を置く東京都荒川区南千住を中心に活動を行なった。現在の南千住は、駅前やウォーターフロントの再開発が進み、必ずしも特筆すべき「歴史的風致」を留めた観光名所ではないが、その歴史を振り返ると、江戸東京の周縁部としての独自の歴史的な蓄積があることが分かる。そこで、プロジェクトの背景となる実施地域について、その概略を確認しておきたい。

『東京都名所図会』は、南千住の範囲について「荒川を限り。千住大橋の南位に在るを以て名く。もと千住南組の擴大したるものなるよりかく稱せしなり。其の地は地方橋場、三ノ輪、千束、の内並に下谷通新町、潮入村を併合せしものに係る」と記されている⁵⁵。かつては、隅田川を挟んで千住北組、千住南組と称されていたのだが、それらが後に北千住、

南千住として、それぞれが足立区と荒川区に属している。なお、現在の南千住は、荒川区の東部の2.530 km²の範囲を占めている。

ここで近世の南千住の位置づけについて触れておくこととしたい。そこには、江戸の境界としてのまちの姿が見えてくる。文政元（1818）年に幕府が大江戸の範囲を定めたいわゆる「朱引線」は、隅田川の北千住側の岸を境に引かれており、「墨引線」は南千住を二分するように引かれている。言わば、南千住界限は江戸の御符内の周縁部に形成されたまちである。と同時に、このまちには日光街道（現在のコツ通り）が通っていることから分かるように、江戸の外に向かう通過点としての機能も担っていた。このことは、隅田川（大川）で最初に架橋されたのが千住大橋（大橋）であり、千住宿が形成されていたことから明らかである。また、このように都市の周縁部であったことから、南千住には幕府の「小塚原刑場」が置かれていた。『北豊島郡史』は、「江戸に於ける幕府の刑場は、初め今の日本橋區本町四丁目邊に在りしが、後淺草島越橋に移り、更に聖天町に轉じ、後又此の地に移りたり、刑場跡は街道の西側に在りて鐵道常磐線路の南に當れり」とある⁵⁶。このことは、次第に江戸が拡張していくとともに刑場の位置も変遷していったことを示している。実際、現在も同地には死罪となった罪人を供養するために、通称「首切り地蔵」と呼ばれる地蔵尊が配されている。



図 4-15 首切り地蔵（2012 年 8 月 27 日撮影、荒川区南千住）

また、南千住には長い歴史を有するいくつもの神社仏閣が集まっている。現在も隅田川沿いに社殿を構え、天照皇大神を祭神とする石浜神社は、社伝によれば創建は神亀元（724）年とされ、その歴史は中世にまでさかのぼることができる⁵⁷。この地には、かつて「石浜城」があったとされている。『江戸名所図会』にも「神明神社」として掲載されており、風光明媚な土地として多くの

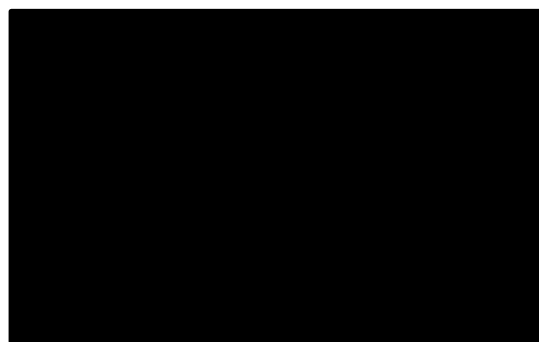


図 4-16 『江戸名所図会』1836（天保7）年

参詣客が集っていた。また、1926年に石浜神社に合祀されるまでは独立した社を構えていた「真先稻荷神社」も、名物の田楽とともに広く知られていた。この真先稻荷をめぐるのは、左甚五郎に関する伝承も残されている。『南千住の民俗』には、「畑を荒らす木彫の神馬」として「南千住の真先稻荷の絵馬殿内に、左甚五郎作と伝える木彫の神馬があった。夜になると出歩いて近所の田畑を踏荒らすと伝えて、暗い格子戸の中を覗くと、脚に太い鎖をつけて柱につないであった」という伝承を掲載している⁵⁸。

南千住の北側に鎮座し、大己貴命と事代主命を祀っている素盞雄神社も、「飛鳥社」の名で『江戸名所図会』にも掲載されている。古くは飛鳥権現や小塚原天王などと呼ばれ、現在も地元では「天王さん」の通称で親しまれている。その氏子の範囲は広く「以前の南千住町、三河島町、町屋、三の輪町」に及ぶ⁵⁹。また、現在は素盞雄神社の管理下にあるが、千住大橋のたもとには熊野神社が鎮座している。熊野神社は千住大橋との関わりが深く、「文禄年中荒川（筆者註＝現在の隅田川）にはじめて架橋する時、奉行伊奈備前守が当社に祈って功をなすを得、その残材を以て当社を修理した」とある⁶⁰。荒川史談会の高田隆成は「伊勢が表で、熊野が裏であるというのは荒川区内においても同様でして石浜が表で中心であり、天王社が裏にあたりました。しかし千住に大橋が架けられましてからは天王社が中心の位置になってしまった」と語っている⁶¹。

こうした地域構造は、近世以降引き継がれてきたものであり、現在と当時の地理を比較する上でも重要な基準になり得る。また、南千住と浅草との間には、かつての「新吉原」があり、人々は隅田川から日本堤を通ってそこに訪れた。その当時の様子について、タイムン・スクリーチの『江戸の大普請』の一節を引用する。

土手を歩いて吉原へ向かう場合、両側には海でも陸地でもない湿地帯が続いている。道はその曖昧な場を突き抜けている。談義本作者の捨楽斎は『当世穴噺』（一七七）の中で、日本堤を「化け物の道」と名づけた。ここではさまざまな変化が見られた。（中略）傾城は地女と化し遊山に出、男は女に化てイヨイヨお山と称られ、大小舟宿へあずけて町人と化、出家は医者と化。⁶²

ここでは、「新吉原」という場所の持つある種の異界性が強調されている。こうした地域の記憶は、「生きては苦界、死しては浄閑寺」という言葉とともに知られる「投込寺」こと浄閑寺の存在からも明らかにされる。こうした場所性について、廣末保は「境界の悪所」という言葉を当てはめている。

江戸庶民文化の母胎である芝居や遊里をそのころの人は悪所とよんでいた。それは支配秩序からみて悪の場所であったゆえに近世都市の中心部から追いやられた地理的にも境界の悪所でそこでは日常生活から奪われた祭りや呪術や解放の記憶と夢を追って特異な虚構された遊びの文化が生まれた。⁶³

これは、浅草や新吉原などが想定されているわけだが、そのさらに外側にあたる南千住に刑場が置かれていたことは、その周縁性をますます強調していると言えよう。『江戸東京学事典』は、この地について「浅草寺と千住宿にかけての都市の境界領域に、小塚原の刑場、弾左衛門と車善七の支配する被差別部落、江戸で公認された唯一の遊廓新吉原という江戸最大の闇の空間が形成されることになった」と記している⁶⁴。1843（天保 14）年の「天保

改正御江戸大絵図」には、上に掲げたような寺社が現在と同じ場所に位置しており、こうした古地図を手掛かりにかつての地域社会の姿を思い描くことができる。

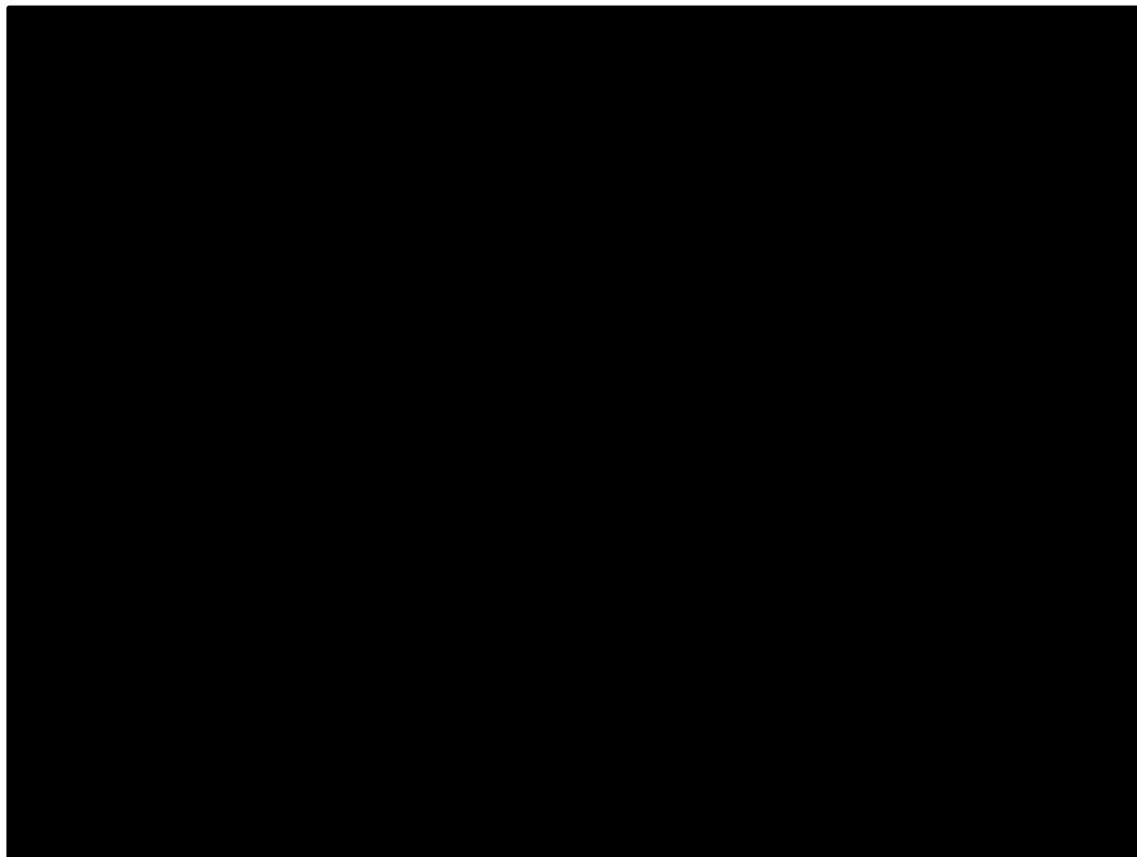


図 4-17 「天保改正御江戸大絵図」(部分)、1843(天保 14)年に筆者が加筆

近代以降は、鉄道が通ったこともあり、交通の要衝として発展していくことになる。幼少期に南千住汐入に住んでいた有馬頼寧は、明治期における地域の変遷を四段階に分けている。第一に 1877(明治 10)年に千住製絨所が設置されたことで従業員や出入の商人が移住してきた時期、第二に 1887(明治 20)年に火葬場が廃止されたことで「忌み地」となっていた周辺地域も含めて新しい宅地が造成されていった時期、第三に 1894(明治 27)年の隅田川駅の開設と翌年の常磐線の開通に伴い南千住駅が設置された時期、第四に 1906(明治 39)年に東京紡績会社が設立されたことで多くの職工が移住してきた時期である⁶⁵。宮田登は、この報告について、「江戸の近郊農村が、明治以降の都市化現象の中で、どのような姿を示したかを印象的に表現したもの」と指摘する⁶⁶。

近世の南千住が水運の要衝であったように、近代以降は水路と陸路の交差する地点としての地域性が顕著に見られることになる。1921(大正 10)年の地図を見てみると、隅田川の水が隅田川駅の内部にまで引き込まれていることが分かる。現在も、その当時の水門跡が残されているが、このような水の記憶を辿ることで地域の歴史を辿ることもできよう。

このように物流の拠点としての条件が整った千住界限には、必然的に「市」が形成されていくことになる。近世にも北千住側の街道沿いに「やっちゃ場」と呼ばれる市が立ち、「投師⁶⁷」による独自の流通が成立していたが、「忌み地」としての記憶も少しずつ薄れていった大正期には、多くの人家や商店がこの地に集っていった。例えば、かつて石川家の下屋敷が民間に払い下げられ、現在のジョイフル三ノ輪商店街の基礎となるまちが形成されたのもこの時期であった。

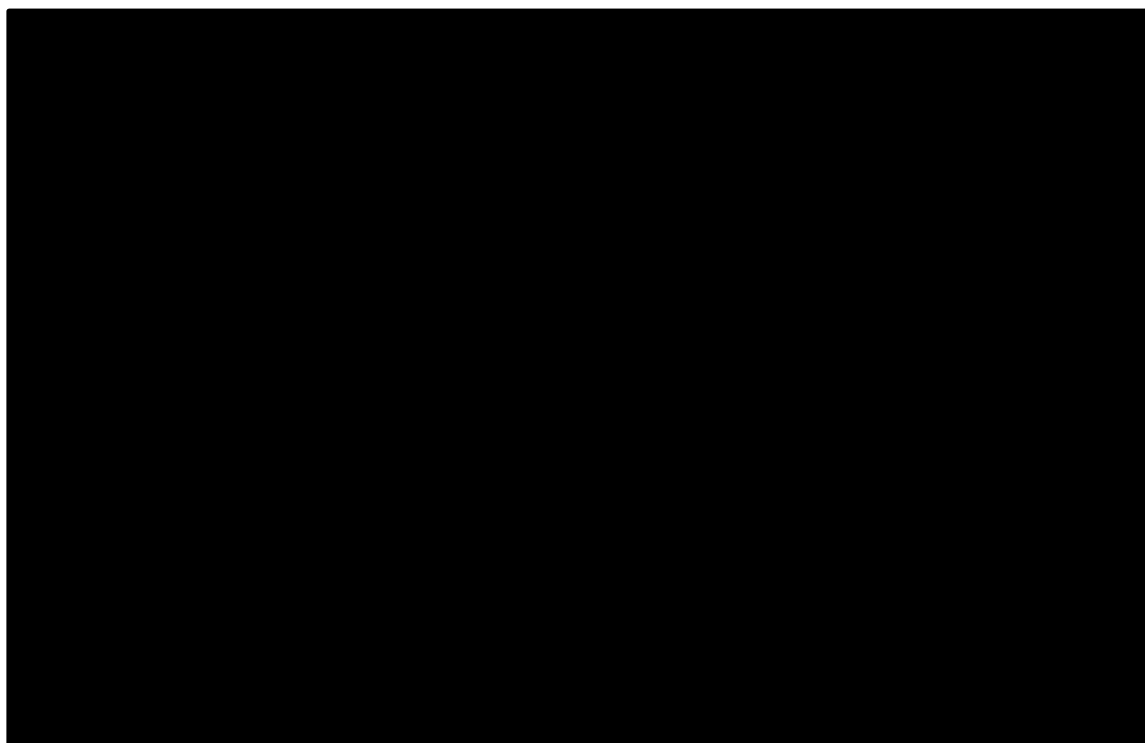


図 4-18 「早わかり番地入東京市全図」(部分)、1921(大正 10)年に筆者が加筆

このように、近世から近代にかけて、地域の機能は大きく変わっていったが、その歴史の軸をなす隅田川の形やかつての街道筋、神社仏閣の位置などは大きく変わることなく現代まで受け継がれている。その一方で、再開発によって都市化が進み、地域の記憶が見えにくくなっていることもまた事実である。そのような中で、まさに世がバブル景気にわいていた 1980 年代末から 90 年代初頭にかけて、地区ごとの民俗調査がなされている。「明治・大正・昭和という身近な過去が、文字にならないまま個人の思い出の中に消え去ろうとしている現状を知り、それらを共有の財産として形にしてゆくこと・保存してゆくこと」を目的に掲げ、「街の開発にともない徐々にな変わってゆく町並みと人々の暮らしぶり(民俗的な慣習・儀礼など)」を調査するこの事業は、昭和 60 年度から実施された。そして、その成果物として、『汐入の民俗』(昭和 62 年度)、『尾久の民俗』(平成 2 年度)、『町屋の民俗』(平成 4 年度)、『南千住の民俗』(平成 7 年度)が刊行されている⁶⁸。

この調査と時期を同じくして、昭和 63 年度には区内の小学生による民俗調査とでも呼ぶべき活動が実施されている。これは、「荒川区の子どもたちに、地域社会の一員としての自覚と、郷土を愛する精神を養う」ことを目指し、「世代を越えたふれあいの場を設け、子どもたちが近隣のお年寄りなどから、荒川区にまつわる言い伝えや、戦争・災害などの大きな出来事取材」という取り組みであり、その成果は『街かどで拾ったよもやま話集』としてまとめられている⁶⁹。

このような調査が実施され、文字化としてまとめられていることによって、今ではなかなか辿ることのできないまちの記憶を知ることができる。今回のプロジェクトにおいても、こうした過去の蓄積に学びながら活動を組み立てていくことになる。以下、具体的にプロジェクトを実践していく中で創作されていった地域の物語について考察を進めていく。

第4節 妖怪伝承の生成過程の分析—共同ナラティブとしての妖怪

4-1. プロジェクトの実施方法と調査内容—会話分析

《隅田川妖怪絵巻》は 2012 年 10 月 27 日に活動を開始し、以降月 1 回のペースで活動が続いている。各日程の活動内容は、それぞれ独立した完結型のプログラムとなっており、「学ぶ」「探す(歩く)」「つくる」という三段階を想定して組み立てられている。「学ぶ」の段階では、ファシリテーターを務める筆者が予め用意したパワーポイントを用いて、プロジェクトの概要や妖怪や地域について簡単なレクチャーを行う。これにより、その後のまち歩きに向けた基礎情報を共有することを目指す。また、参加者にはワークシートや古地図等を用意し、まち歩きの補助具とした。「探す」段階では、実際にまちを歩く中で、地域の特徴を探したり、まちの人の話を聞いたりしながら、妖怪の種を探し出していく。近年では、演劇の一ジャンルとして「ツアーパフォーマンス」という方法も実践されているが、このプロジェクトにおいても参加者一人ひとりが主体となって地域の物語を抽出していくという意味において虚構と現実が入り混じる演劇的な活動と言うこともできよう。



図 4-19 レクチャーの様子 (2013 年 5 月 18 日)



図 4-20 まち歩きの様子 (2013 年 6 月 22 日)

そのため、いわゆる歴史ガイドのように、「語る一聞く」の関係性が固定化されないような情報提供の按配については留意する必要がある。一方で、中にはガイドを期待する参加者もいるため、方法論の開発に当たっては一筋縄ではいかないところがある。一通りまち歩きを終えて、「つくる」段階に至ると、道中で観察したものや耳にした情報、個人的な体験などに基づき、参加者一人ひとりが新しい妖怪の物語をつくりあげていく。

ここでは、「妖怪をつくる」という目的を共有するコミュニティが形成されることになる。無論、それは従来の伝承を支えていたような共同体とは異なる、活動を通して形成された実践コミュニティであるわけだが、参加者同士での対話を重ねながら新しい物語が生み出されていく。地域から物語を生み出すという課題は、一定の想像力と語彙力が求められるため、一般参加者向けのワークショップとしては難度の高い活動となっている。それぞれの参加者の関心や経験に基づいたものとなっている。

4-2. プロジェクトの実施状況と活動の成果物

プロジェクトの実施にあたっては、毎回異なるエリアを設定してまち歩きを行った。各回3時間の活動時間の中で、まち歩きには1時間30分から2時間程度の時間を費やした。最後に参加者が考えた妖怪を発表してプログラムが完了する。以下、各回に歩いたルートの概要を示す。

表 4-6 各回の活動概要

活動日	参加者数	行程
2012年10月27日	10名	14:00 南千住駅集合→14:10 大黒湯着→14:45 大黒湯発～仲通り商店街～豊川稲荷～小塚原刑場～コツ通り～栗本商店→16:00 南千住第二中学校着～妖怪絵巻編集会議→17:00 解散
2012年11月11日	14名	14:00 南千住駅集合→14:10 大黒湯着→14:45 大黒湯発～仲通り商店街～ジョイフル三ノ輪商店街～都電三ノ輪橋駅～弁天湯跡～路地～井戸→16:00 ジョイフル三ノ輪会館着～妖怪絵巻編集会議→17:00 解散
2012年12月8日	10名	14:00 南千住集合→14:15 汐入小学校着→14:55 汐入小学校発～水門跡～お地蔵さん～隅田川沿い～水神大橋～カミソリ堤防～高田家鬼瓦→16:15 汐入小学校帰着～妖怪絵巻編集会議→17:00 解散
2013年1月14日	8名	13:00 南千住図書館集合→13:30 妖怪調査→16:00 解散
2013年2月23日	8名	13:00 南千住図書館集合→13:45 南千住図書館発～天王裏公園～熊野神社～山王神社～歯痛祠→15:20 南千住図書館着→16:00 解散
2013年3月20日	15名	14:00 南千住駅集合→14:20 汐入着→14:45 妖怪まち歩き～水神大橋～梅若塚（木母寺）～隅田川神社→16:15 妖怪絵巻編集会議→17:00 解散
2013年5月18日	11名	14:00 南千住駅集合→14:10 南千住図書館着→14:40 南千住図書館発～千住大橋～橋戸稲荷神社～足立市場～やっちゃ場緑道～やっちゃ場跡～河原町稲荷神社→16:15 妖怪絵巻編集会議→17:00 解散

2013 年 6 月 22 日	16 名	14:00 南千住駅集合→14:10 大黒湯着→14:30 大黒湯発～首切り地藏～汨橋～浄閑寺～常磐線ガード下～仲通り商店街～大黒湯着→16:15 妖怪絵巻編集会議→17:00 解散
2013 年 7 月 15 日	9 名	14:00 南千住駅集合→14:10 南千住ふれあい館着→14:30 南千住ふれあい館発～隅田川駅～汐入親水公園～石浜神社～汐入ふれあい館着→16:15 妖怪絵巻編集会議→17:00 解散

2013 年 7 月までに、参加者によって 127 体の妖怪がつくりだされた（資料 4-4 を参照）。それらは、活動の初めに行ったレクチャーやまちづくりを通して得られた様々な情報を素材としながら、まちの中に物語が配置されていくことになる。では、具体的にどのような環境から物語が想起されているのだろうか。ここで、ワークショップを通して創作された妖怪を分析すると、それらが出現するとされる場所は以下のように分類できる。

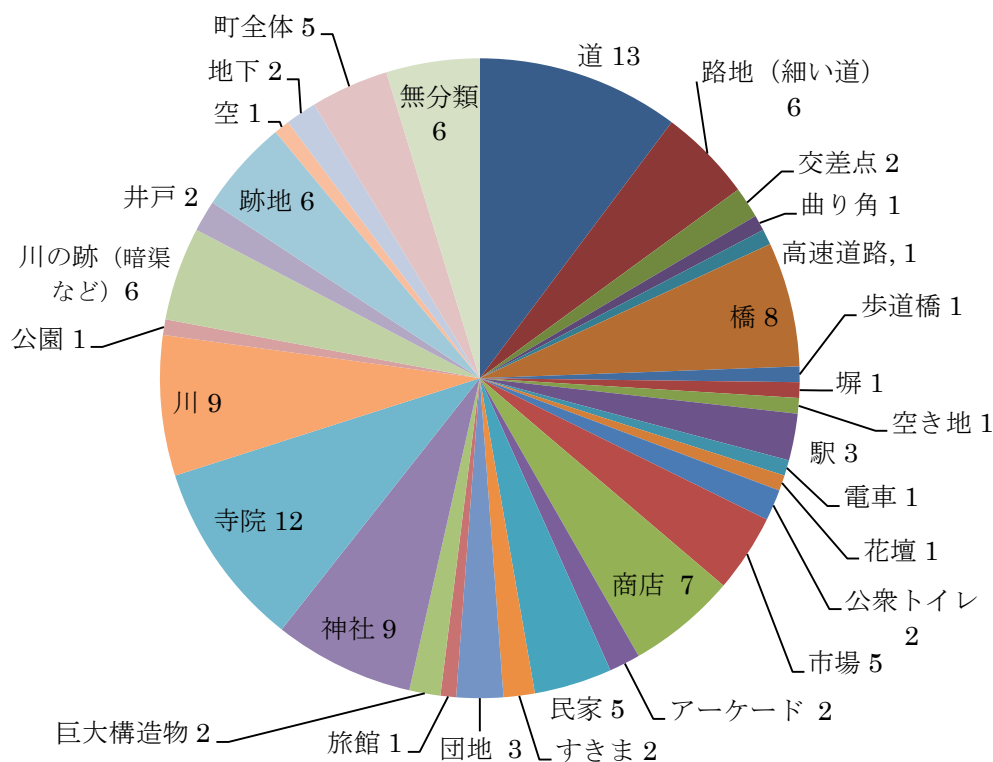


表 4-7 プロジェクトの中で妖怪の発想源になっている場所

これらを分類すると、道に関する場所（道、路地、交差点、曲がり角、高速道路、橋、歩道橋、塀、道沿いの空き地）、駅や電車に関する場所（駅、電車、駅の花壇、駅の公衆トイレ）、人々の暮らしに関する場所や建物（市場、商店、アーケード、民家、家と家のすきま、団地、旅館、巨大構造物）、神社仏閣、川や水に関する場所（川、川岸、親水公園、川の跡、井戸）、何かの跡地、空、地下、町全体とその他に分けられる。これらはいずれも南千住の

まちを歩く中で観察されたものであるため、ここから物語を発想しやすい場所を検討することができる。例えば、道や路地に現れるとされる妖怪が 19 件つくられているが、そのイメージソースとなっているのは南千住に残る下町らしい風景である。

また、妖怪の発想法についてもいくつかの方法が見られる。ここでは、試みに物語生成の手法を「歴史物語系」「路上観察系」「言葉遊び系」「付喪神系」「直感系」に分けてそれぞれの特徴を抽出することとしたい。無論、これらで全ての物語を網羅できているわけではないが、

まず、「歴史物語系」では地域の歴史を取り込みながら新しい物語が創作される。ここには、文献等を通して獲得される外的な情報と参加者個人の中に蓄積されてきた内的な知識に基づくものが含まれる。例えば、「手の道（道手）」と名付けられた妖怪は以下の物語とともに創作された。

日光街道に住みついている妖怪。自分の住居を破壊されたくない為、都電を延ばす時に工事を止めるように悪さをした。事故などをおこした。そのお礼に大空しゅうの時に被害から大きな手で守った。

これは、2012 年 11 月 11 日にジョイフル三ノ輪商店街でワークショップを行った際に創作されたものである。

次に、「路上観察系」については、まち歩きの中で気になったものや場所から発想を膨らませて新たな物語が創作されていく。例えば、「ヒキズリダコ」と名付けられた妖怪は、まち歩きの中で訪れた隅田川神社の境内にあった一対の赤い碇からイメージを膨らませたものである。

隅田川を上り下りする川船を水底に引きずりこむ。隅田川神社の水神により、体を真っ二つにされたが、二つに別れてなお、お互いを求め合い、間を通ろうとする船に、両側からとりつき沈めようとする。今は 1 対の赤いイカリに姿を変えられ、隅田川神社の境内の隅に身を潜めている。

これは、2013 年 3 月 20 日に向島界隈でワークショップを行った際に創作されたものである。隅田川神社は、かつて「水神様」や「水神の森」などとも呼ばれ、水運の守り神として信仰を集めてきた。現在は高速道路が通ってしまったために隅田川と面しているわけではないが、かつては川から直接境内に入ることができた。今ではなかなか想像できない隅田川神社と隅田川と



図 4-21 隅田川神社の赤いイカリ（2013 年 3 月 20 日、東京都墨田区）

の関係をも髣髴させ、そうした信仰も含めた物語として成立させている点に「ヒキズリダコ」が伝承として語られ得る可能性を見出すことができる。

続いて、「言葉遊び系」は、名付けの妙によって既存の地名に新たな解釈が加えられる。妖怪伝承の中には特定の環境や現象に対して名前を与えることで生成されたものが少なくないが、名付けをきっかけに物語を創作するという手法も有効である。例えば「千手の渡し」と名付けられた妖怪は、以下の物語とともに創作されている。

（大昔）橋が無かった時代、川を渡るのに存在した妖怪。千本の手で川岸を渡り、兩岸が栄える。川の上に橋が建てられ、行き場を失った「千手の渡し」があばれて水面が激しくゆれる。川に葦が多いのは、「千手の渡し」がイジけて... 逆立ちした「足」の名残りである。商売繁盛がモットー。

これは、2013年5月18日に千住大橋界隈でワークショップを行った際に創作されたものなのだが、ここでは「千住＝千手」という同音異義語から発想が展開されている。また、「足＝葦」をかけることで、千住七不思議の一つでもある「片葉の葦」をも髣髴させているという点において、重層的な物語が創作されていると言えよう。実際、北千住の勝専寺の千手観音が「千住」の由来になったという伝承もあり、こうした発想法は民俗的想像力においても脈々と受け継がれてきた。

続く「付喪神系」は、まちなかにある「もの」を妖怪化しているという点において路上観察の成果と見なすこともできる。ただし、「付喪神系」の場合、ものは場所から独立し、それ自体が擬人化される点に一つの特徴がある。まちを歩きながら妖怪が現れそうな場所を探すというプロセスは、とらえどころがなく難度の高い活動であるため、物語づくりのきっかけになるような具体的な事物からイメージを膨らませていくこともまた一つの方法である。例えば、「石濱入道」と名付けられた以下のような物語がある。

お参りに来る人を上から見下ろしている。たまに話しかけてくる。隣のガスホルダー、ほろが着物、神社と土地を入れかえた時おいてけぼりになった神様。

これは、2013年7月15日に石浜神社界隈でワークショップを行った際に創作されたものなのだが、石浜神社に隣接した東京ガス株式会社の敷地に見える「ガスホルダー」を擬人化し、妖怪（神様）と見立てている事例である。この物語は、石浜神社が遷座を繰り返してきたという歴史的背景も踏まえており、その意味において歴史物語系の要素も含んでいる。

最後に、「直感系」の妖怪については、必ずしも明白な根拠があるわけではないが、まちを歩く中で直感的に感じとった気配のようなものに基づいている。その中で、「細い道にしゃがんで土をほっているおじさん」として考えられた「コツほりヂヂイ」は、南千住を通

る「コツ通り」に現れると考えられた妖怪である。

細い道にしゃがんで土をほっているおじさんがいる。そのおじさんは、はげている。ほねが大すき。あつめてたべている。おじさんは、ほねを食べる前のようにきれいに
もどしてきえる。うすぐらいゆうがたにあらわれる。(5時～5時半ごろ) おじさんは、
すごくやせほそっている。(ほねみたい)

ここには、まち歩きの途中で、地域の人に「コツ通りには骨が埋まっている」という話を聞いたことから発想が広がっていったのだが、そうした物語を妖怪というキャラクターに凝縮することによって地域の記憶が可視化されている。

ここで改めて、プロジェクトを通して創作された妖怪の分類をまとめると以下のような表を想定することができる。ここでは、それぞれの妖怪を創作する上での事前知識の必要性、まち歩きを行う際のまちを見る視点、参加者の関心の対象のあり方及びそれらの創作を促す有効な活動支援方法について検証した。「歴史物語系」では、いわゆるガイド付きの歴史まち歩きやレクチャー、あるいは古地図等の情報から、地域の物語が再構築されていく。「路上観察系」では、考現学的関心からまちの細部を観察していくため、必ずしも事前の知識は必要ではないが、それがあることによって物語の深まりが期待できる。近年実施されているまち歩きワークショップの多くは、おおよそ以上の二つの観点からプログラムが組まれている。これに対して、「言葉遊び系」では地名や字名から新しい物語を創作する手法が取られることが多いため、少なくとも地名等に関する最低限の情報を提供する必要がある。「付喪神系」では、伝統的な妖怪創作の手法である擬人化の手法によるものが多いため、基本的な妖怪に関する知識を提供すると効果的となる。「直感系」では、事前知識よりもむしろまち歩きの過程における各人の感覚（怖い、何かがいそう、ジメジメしている等）が重視されるため、そうした感覚を物語に昇華させるためのサポートが必要となる。

表 4-8 プロジェクトにおける創作妖怪の分類

	事前知識	まち歩きの視点	関心の対象	有効な活動支援法
歴史物語系	必要（外発的／内発的の別がある）	歴史的な情報の確認作業	郷土史的関心	適切な情報提供や古地図等の補助具の活用
路上観察系	必ずしも必要ではないが、あると効果的	まちの細部を観察する	考現学的関心	独自の視点を引き出すための対話
言葉遊び系	地域に関わる最低限の知識は必要	地名や字名を基点にまちを見る	言語芸術（文芸）的関心	現在の地図と過去の地図の比較
付喪神系	必ずしも必要ではない	まちの細部を観察する	擬人化（戯画）的関心	妖怪づくりのポイントの共有
直感系	不要	まちの雰囲気を感じとる	アート（自由創作）的関心	直感を物語に昇華させるためのサポート

4-3. 妖怪存在の生成過程の分析

以上のように、様々な観点から新しい物語が創作されているわけだが、地域の記憶を可視化するようなものは容易に生み出せるものではない。地域に根差した物語をつくるためには、十分に地域の特性を理解する必要があるため、一回完結型のワークショップにおいてその完成度を参加者に求めることは難しく、また必ずしもそれを求める必要性もないだろう。しかしながら、中には何度も活動に取り組む中で「妖怪をつくる」という課題を共有し、独自の手法を確立していったような参加者も見られる。ここでは、参加者 E（昭和 25 年生まれ・男性・足立区在住）の物語生成の視点を辿りながら、新たな物語が創作されていく現場を分析していく。

参加者 E がプロジェクトに初めて参加したのは 2013 年 1 月 14 日の活動日である。当日は、悪天候のため、当初予定していたまち歩きは行わず、南千住図書館の地階にある活動室において、文献に基づく妖怪調査を行った。郷土史に関する書籍を読みながら、妖怪のネタとして使えそうな素材を洗い出していた。個人的な活動であったこともあり、なかなか対話の糸口がつかめなかったのだが、その中で参加者 E が幼少期の記憶をもとに「泪橋」の怪異をめぐる話題を挙げたことから具体的な会話が進められていった。以下、当日の録音をもとに、その時の対話の流れをテキスト化した。

あの一、いいですか。うちからでいいですか。私、子どもの頃ですね、ちょうど泪橋の交差点（筆者註：南千住駅の南側にある交差点で、現在は橋はない）ありますよね。それは、当時、その一、囚人が首はねられますよね。そこであの泪橋という名称そのものが、あの一処刑される人間と、親族、あるいはゆかりの人間が、最後にそこでお別れします。従ってあそこら辺は、ま、当時山谷（筆者註：南千住にある寄せ場、いわゆるドヤ街の呼称）とかいろいろ非常にね、ひょうひょうとしてたところです。そんな時に、子どもながらに、あそこのところを、あの、南千住の駅の方に、そこをやった時に、その一、電車の音とは違うような音が、聞こえたら、お前、注意しろよと。という話ってね、今でもね、なんか時々思いだし

このように、本人の幼少期の記憶を思い出しながら語るところから、まさに対話の口火が切られた。これに対して、別の参加者が「聞かれたことあるんですか」と問うと、参加者 E は「いやいや」と答え、「聞かれた、聞いたことはないんですけど、そういう、子どもだから、そういう気になっちゃうんですね」と続けている。

ここで話の舞台となっているのは、かつて仕置場に向かう囚人がこの世との別れを告げたと語られる「泪橋」である。今では橋もなくなり、交差点やバス停の名前にのみ留められているが、参加者 E は幼い頃にこの近くで「電車の音とは違うような音が、聞こえたら、お前、注意しろよ」と言われた話を語っている。実際、参加者 E は、荒川区の北側の足立区（千住）で生まれ育っており、南千住界限にもよく遊びに訪れていたという。そうした

中で耳にした「泪橋」の怪異は、必ずしも治安のよくなかった山谷地区で遅くまで遊ばないように語られた嫉妬のための話であった可能性も否定できないが、それでもなお現在まで記憶されるようなインパクトのある物語であったことは紛れもない事実である。こうした話は、いわゆる民間伝承として記されたようなものではなく、個人の記憶の中にのみ存在していた「小さな物語」である。プロジェクトを通してこうした物語が発掘されていくこともまた重要な役割と言えよう。

その後のプロセスで、この参加者はこうした記憶に基づいた妖怪「ことだま返し」を生み出した。ここには、以下のような物語が創作されている。

その昔、刑場に向かう最後の身内またはゆかりの人との別れが出来ない亡霊の変化
この妖怪は現世人との交信をするがその声が出せず、妖気で訴える。この異変を感じる人には悪さをしないが感じ取る事が出来ない人は耳を削ぎ取られてしまう。
この妖怪の発信方法は心霊波を人に発射するのが木霊(コダマ)の様なので波状的な異変を感じるのでこの名がついた。

泪橋付近で聞こえる怪音を「刑場に向かう最後の身内またはゆかりの人との別れが出来ない亡霊の変化」の仕業と解釈し、「心霊波を人に発射する」ことでメッセージを伝える存在として描写されている。ここには、これまで表面化することのなかった個人的な記憶の可視化を見ることができる。それと同時に、ここには南千住という場所が担ってきた仕置場としての記憶も内包されており、内発的な知識に基づく「歴史物語系」の創作に分類することができるだろう。

その後も、参加者 E は度々このワークショップに参加しているのだが、「泪橋から山谷あたり」をテーマにまち歩きを行った 2013 年 6 月 22 日には「語り手」としての役割を演じることになる。既述の通り、「泪橋」は南千住駅の南側にかつて存在していた橋のことであり、「思川」にかかっていた。「思川」は『江戸名所図会』にも掲載されているが、音無川から分岐した農業用水として用いられていた小さな川（溝）である。今では暗渠となって

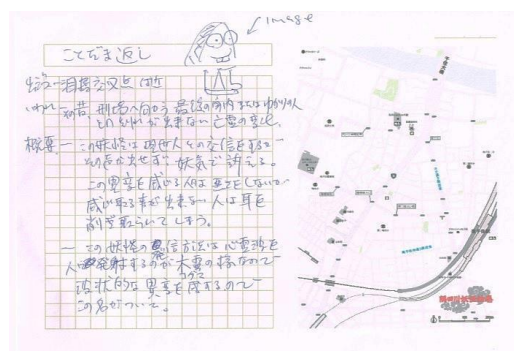


図 4-22 参加者 E のワークシート

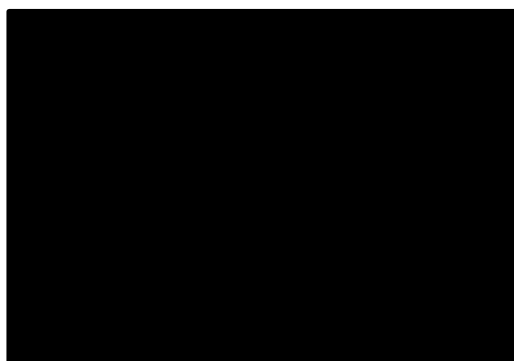


図 4-23 「思河」『江戸名所図会』

いるが、こうした水の記憶を辿りながら地域を歩くことを目指した。そのため、まち歩き
の補助具として、「天保改正御江戸大絵図」（図 4-17 を参照）を配布した。

道中では、地域景観の過去と現在をめぐる想像力をかきたてるような対話がなされてい
たのだが、その中で「ことだま返し」を創作した参加者 E が、汨橋交差点の近くでその物
語について次のように語っている。以下のテキストも当日の録音を文字起こししたもので
ある。

この、あの一、思川自体がですね、もう湿地帯だから、川があるようなないような、
そして、先ほど日本堤っていう、あの一、吉原の方まで行く堤を見ましたね、これは
氾濫を防ぐための堤をやったものですから、必然的に思川そのものが消滅しちゃった
と、そういうことは、私は古老から聞いています。えー、それとその、汨橋なんです
が、これは先ほど通ってきた回向院のところのガードがあったところに、ずーっと、も
う、子ども心に怖かったのがね、あの一、鉄道、この、メトロ線が入った時に工事を
しました。で、そこ、踏み切りあったんですけど、その時にね、おびたしい人骨が
整然と並べて出てきた、出てたんですね。で、そういうことから、私のその小さい時、
そのね、子ども心に怖かったのは、この下いっぺんがあそこのお仕置き場と、そこ
のお仕置きをされる人間が、向こうは川で、しかも、その千住の方はあれですからね、
あの一、御符内から外れてんですよ。郡外なんですよ。ここは、幕府直轄の御符内、
従ってお仕置きは、こちらの方から、ここのところから渡って、そこでお仕置きしま
す。人口は、向こうの方が多いですね。その時に、ここで、あの一、家族親類縁者、
それのところで別れるわけですね。で、そのところで、あの一、ことだま返しの私
の発想としては、子どもの頃に古老から聞いたのは、とにかく夜にここ歩いてると、
変な音がするねと、で、電車の音に近いんだけど、その時は貨物駅がありましたね、
それから常磐線のその一、ところもありました、本数は少なかったですが、そういう
音とはまた異様な音が聞こえたら、お前注意しろよと、ま、大人ですから、子どもの
躰でやったんでしょうけども、確かにそんなことをというのを、その、冬ですから、
もう雪がちょっと舞った時にはですね、空気が清浄ですよ、その時にやっぱり、緩
衝の様にするんですよ、なんか、車の、車だって少ないんですけど、昔のあの、ちょ
っとぐらいエンジンのね、で、そこでそういう音が聞こえたら、注意しなさいよと
いうんじゃないくて、そのところの伝承は、その、身内とかなんだ別れて、磔獄門に
されたならいいけども、まったくの天涯孤独の人間がするときにはあの世に行くのにも
つらいと、三途の川は渡れないと、そういう怨念こもっているから、声を出して感応
を調べるわけですね。今でいうレーダーですよ。それを、こっちで反響して、あって
言っとう、応えてやると、その魂は浮かばれるんですけど、もう怖がるから、みん
なちょっと敬遠しますね、音が聞こえたら、こうやって逃げるとか、そういうのをや
ると、それは浮かばれないというようなね、これはまあ、科学的根拠はまったくない

んでしょうが、そういう伝承が、そうですね、明治初年生まれのおじさんとか、えー、あるいは私の親父は85で亡くなりましたけど、その親父からも聞いたことがある。で、浅草に行くから、みんなここ通るんですよ。まさか親父が吉原行くとき連れてってもらえませんか、その時にですね、ここの前通るのはやっぱりいやだった。泪橋っていうのは。ということで、これ科学的根拠ありませんけど、こういう伝承がありますんで。

ここでは、参加者自身が「古老」から聞いたというかつての思川の様子が語られている。それによると、一帯はかつて湿地帯であり、堤が築かれることによって川自体が消滅したと語られている。実際、「天保改正御江戸大絵図」を見ても、一帯は「田」と記されているのみである。それに続いて、鉄道工事の際に南千住駅界隈で「おびたしい人骨」が発見された話へと展開していく。これは、南千住を通る通称「コツ通り」の人々にもしばしば語られる内容であり、先に挙げた「コツほりヂヂイ」の着想源にもなっている。このような地域の歴史を紹介した上で、「ことだま返し」の発想について語られている。ここでは、創作妖怪としての「ことだま返し」とその背景にある伝聞体験としての泪橋の怪音が合わせて語られており、ワークショップの参加者（受け手）から「語り手」への立場の移行を見ることができる。

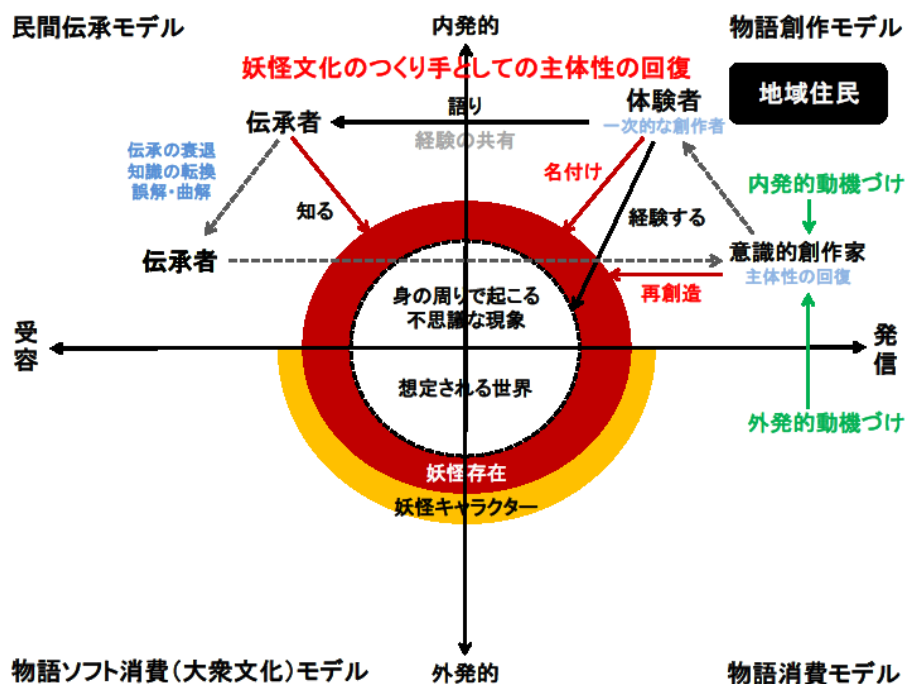
第4章のまとめ

従来、妖怪文化の活用は「物語消費」の構造を有してきた。そこでは、地域で語られてきた民間伝承や大衆文化として表現された既存のコンテンツを活用し、それらをまちづくりや観光といった文脈に組み込むことで商品として資源化されていく。しかしながら、本章の第1節で取り上げた滋賀県八日市市や岩手県胆沢郡金ヶ崎町の事例のように、近年では必ずしも既存のコンテンツに基づかない取り組みが見られるようになった。そこでは、地域住民の「経験」に基づく物語の再創造がなされているとすることができよう。このように新たな妖怪文化の創造がなされるようになった背景には、地域を表現する手段として妖怪の認識が変化してきたことを指摘することができるのではないだろうか。

新たな物語を創造し、それらを「場所⇄地域」と結び付けていく方法論にはアートプロジェクトとの親和性を認めることができる。仮に、「物語創作」型の取り組みとしてこれらの事例を位置づけるならば、そこには「小さな物語」の担い手としての地域住民の主体性の回復を見ることができる。物語創作型の妖怪文化の活用が対象とするのは、地域の外側から訪れる観光客というよりも、その地で暮らしてきた人々である。彼らの記憶や経験をもとに、「大きな物語」の中には組み込まれることのなかった多様な個人史が拾い上げられることによって、現代の妖怪文化を創造する基盤も生み出されていく。

《隅田川妖怪絵巻》も、「妖怪をつくる」というプロセスを通して、地域の記憶を可視化するアプローチを試みている。本章の冒頭でも述べたように、民俗社会における妖怪創造

は、身の回りで起こる不可思議な現象を解釈しようとする説明原理から生じたものである。そもそも、活動の主な舞台となる南千住の町並みは、必ずしもかつての姿をとどめているものではない。大規模な再開発がなされた地域もあり、エドワード・レルフの言葉を使えば「没場所性」が進みつつある。実際、ワークショップの参加者の中からは、「深川の七不思議様の感じを受ける様な処無く（宮部みゆき著）隅田川の大鯉（鬼平犯科帖）江戸の残り無く街並もからって妖怪出る処無し」といった意見もあった。このような中で、妖怪を創造し、定着させるのは必ずしも容易なことではないが、実際にプロジェクトを始動してみると、それぞれの参加者の関心に応じて、現在の地域から様々な妖怪が見出されていくことになる。それらは、参加者一人ひとりが生み出したキャラクターではあるが、その背後には多かれ少なかれ地域が育んできた記憶が反映されている。



ここでは、従来の妖怪文化の活用にしばしば見られたように、外発的に生み出された物語ソフトとしての妖怪キャラクターを活用するのではなく、地域住民の暮らしや記憶の中から内発的に見出されていく「小さな物語」に焦点が当てられていく。そのきっかけとして外的な要因が働くこともあり得るが、そうした活動の中心を担うべきは地域住民自身であり、それにより妖怪文化のつくり手としての主体性が回復されていくことになる。

¹ 『常陸國風土記』那賀郡より引用。

² 梅野光興「解釈の技法・記憶の技法—高知県大豊町の蛇淵伝説—」小松和彦（編）『記憶する民俗社会』人文書院、2000年、212頁。

³ 八日市市商店会連盟主催、平成13年度開市記念祭「八日市は妖怪地」序章のチラシより引用。

⁴ ほない会への聞き取り調査より引用。

⁵ アンケート結果の詳細については巻末付録4-1に掲載したので、適宜参照されたい。

⁶ ほない会提供のアンケート結果より引用。

⁷ ほない会への聞き取り調査より引用。

⁸ 金ケ崎町では、この他にも藩政時代の南部領と伊達領との境界を示すために寛永19（1642）年に築かれた「境塚」が2000年に国指定の史跡となっている。また、2013年には「鳥海柵跡」が国の史跡に指定された。鳥海柵跡は、1958年から65年にかけて実施された西根遺跡調査以来、既に半世紀以上に及ぶ調査の蓄積がある。

⁹ 金ケ崎伝統的建造物群保存対策調査委員会、東北大学建築学科伊藤邦明研究室（編）『旧仙台藩要害金ケ崎—城内・諏訪小路地区—伝統的建造物群保存対策調査報告書』金ケ崎町教育委員会、1997年、123頁。

¹⁰ 岩手県金ケ崎町中央生涯教育センター（編）『金ケ崎町生涯教育活動記録 人づくりまちづくりを求めて20年』岩手県金ケ崎町、1999年、97頁。

¹¹ なお、1979年4月には静岡県掛川市において「生涯学習都市宣言」が決議されているが、金ケ崎の宣言も全国に先駆けたものであった。

¹² 城内史編さん委員会（編）『城内史』城内自治会、1985年。

¹³ 『金ケ崎町城内諏訪小路伝統的建造物群保存地区関係例規集』（第2版）、金ケ崎町中央生涯教育センター、2003年、41頁。

¹⁴ 白糸まちなみ交流館は、開館当初は文化財担当の町職員が配置され、伝統的建造物群保存地区のセンター機能を担っていたが、現在では常駐の職員は配置されていない。

¹⁵ 「岩手日報」2002年11月15日（千葉周秋『もっこくっぞ—金ケ崎の不思議所 化物 伝承人』くらしと文化を記録する会、2003年、39頁所収）

¹⁶ 2012年6月8日に大松沢家住宅で実施した聞き取り調査より引用。

¹⁷ 千手鯛鮓『幽霊・化け物・妖怪画集 其乃参』金ケ崎まちづくり研究会、2008年。

¹⁸ 聞き取り調査より引用。

¹⁹ 佐藤秀昭（編）『岩手民話伝説事典』岩手出版、1988年。

²⁰ 2012年8月18日に大松沢家住宅で開催された「幽霊・化け物・妖怪会議」における作者の発言より引用。

²¹ 瀬川拓男、松谷みよ子（編）『日本の民話7 妖怪と人間』角川書店、1973年、68-73頁を参照して筆者が要約した。

²² 2013年8月17日に大松沢家住宅で開催された「第二回幽霊・化け物・妖怪会議」における作者の発言より引用。

²³ 2012年6月8日に実施した聞き取り調査より引用。

²⁴ 越後妻有大地の芸術祭実行委員会（編集発行）、前掲書、19頁。

²⁵ 中原佑介「脱都会の美術の活力」越後妻有大地の芸術祭実行委員会（編集発行）『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000』2001年、9頁。

²⁶ 暮沢剛巳、難波祐子（編著）『ビエンナーレの現在 美術をめぐるコミュニティの可能性』青

-
- 弓社、2008年、57-68頁。
- ²⁷ 大成哲雄「『上鰻池名画館』におけるアートプロジェクトの波及性」聖徳大学生涯学習研究所（編）『聖徳大学生涯学習研究所紀要—生涯学習研究』第8号、聖徳大学、2010年、52頁。
- ²⁸ 同上、52頁。
- ²⁹ 千葉瑞夫、菅沼緑、平澤広ほか（編）『街かど美術館 アート@つちざわ〈土澤〉advance』街かど美術館実行委員会、2008年、11頁。
- ³⁰ 同上、15頁。
- ³¹ 小林進『コミュニティ・アートマネジメント いかに地域文化を創造するか』中央法規出版、1998年、212-213頁。
- ³² 村上圭吾（編）『農民藝術 第一輯』農民藝術社、1946年、6頁。
- ³³ 北川透『『農民芸術概論』をめぐって 啓蒙家賢治との分裂』『現代詩読本—12 宮澤賢治』思潮社、1979年、200頁。
- ³⁴ 高村光太郎「第四次元の願望」村上圭吾（編）『農民藝術 第一輯』、11-12頁。
- ³⁵ 6-7頁。
- ³⁶ 小暮宣雄「『限界芸術』領域におけるアーツマネジメント理論の構築とその実践」日本アートマネジメント学会編集委員会（編）『アートマネジメント研究』第8号、美術出版社、2007年、55頁。
- ³⁷ 墨東まち見世編集部（編）『墨田のまちとアートプロジェクト [墨東まち見世 2009-2012 ドキュメント]』東京文化発信プロジェクト室、2013年、140-141頁。
- ³⁸ 2013年5月に解体が決まり、現在では「ワシントン跡地」が同地に残されている。
- ³⁹ 拙論「コミュニティ型アートプロジェクトのその後—「小料理喫茶ワシントン」をめぐる生活景の再生を中心に—」『文化資源学』第10号、2012年。
- ⁴⁰ イーファー・トゥアン（著）小野有五、阿部一（訳）『トポフィリア 人間と環境』筑摩書房、2008年（原著1974年）、179頁。
- ⁴¹ 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT『混浴温泉世界 場所とアートの魔術性』2010年、14頁。
- ⁴² 同上、42頁。
- ⁴³ フェスティバル／トーキョー実行委員会（監）『美術手帖 2013年11月号 F/T×美術手帖「物語を旅する」スペシャルガイドブック』美術出版社、2013年、23頁。
- ⁴⁴ 藤浩志、AAF ネットワーク『地域を変えるソフトパワー アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験』青幻社、2012年、7-8頁。
- ⁴⁵ 山本吉左右『『義経記』おぼえがき—文体と方法について』『伝統と現代』第47号、伝統と現代社、1982年、99頁。
- ⁴⁶ 特定非営利活動法人千住すみだ川定款第3条より引用。
- ⁴⁷ 加藤種男「アートNPOの可能性と課題」萩原康子、熊倉純子（編）『社会とアートのえんむすび 1996-2000—つなぎ手たちの実践』ドキュメント2000プロジェクト実行委員会、2001年、198-201頁。
- ⁴⁸ 東京都足立区役所（編集発行）『足立区史』1955年、1054頁。
- ⁴⁹ 荒川史談会（編集発行）『郷土あらかわを語る』1983年。
- ⁵⁰ 末広恭雄『魚と伝説』新潮社、1964年、89-92頁。
- ⁵¹ 荒川区教育委員会（編集発行）『南千住の民俗』1996年、209頁。
- ⁵² 高木敏雄『日本伝説集』宝文館出版、1990年、91-103頁。
- ⁵³ 北上川が、現在の三ヶ尻と矢来の境附近で直角に曲がっていることに着目して、「矩（かね）＝直角」の字と川に突き出た地形を意味する「崎」を付けた「矩崎」がやがて「金ヶ崎」となったという説もあるが、この呼称が発生した当時の北上川が果たして現在の流れのようであったかは疑問の残る説ではある（『金ヶ崎町史 3 近・現代』岩手県金ヶ崎町、2006年、9頁。
- ⁵⁴ 宮田登『歴史と民俗のあいだ 海と都市の視点から』吉川弘文館、1996年、158頁。
- ⁵⁵ 宮尾しげを（監修）『東京都名所図会 北郊之部』睦書房、1969年、5頁。
- ⁵⁶ 北豊島郡農会（編集発行）『北豊島郡史』1918年、317頁。
- ⁵⁷ 荒川区役所（編集発行）『新修荒川区史 下』1955年、1045頁。

-
- ⁵⁸ 荒川区民俗調査団『南千住の民俗』東京都荒川区教育委員会、1996年、208頁。
- ⁵⁹ 『三の輪町史』1968年、112頁。
- ⁶⁰ 荒川区役所（編集発行）『新修荒川区史 下』1955年、1058頁。
- ⁶¹ 荒川史談会（編集発行）『郷土あらかわを語る』1983年、31頁。
- ⁶² タイモン・スクリーチ（著）森下正昭（訳）『江戸の大普請 徳川都市計画の詩学』講談社、2007年。
- ⁶³ 廣末保『境界の悪所』平凡社、1973年。
- ⁶⁴ 『江戸東京学事典 新装版』三省堂、2003年、159頁。
- ⁶⁵ 宮田登『都市民俗論の課題』未来社、1982年、11-12頁。
- ⁶⁶ 同上、13頁。
- ⁶⁷ 投師とは千住の間屋で仕入れた品物を高価に取引されそうな市場へ入荷する商売をする者のことであり、その働きによって、千住市場へ集中した農作物を他の市場へ分配し、東京中に流通させる仕組みが成立していた。（足立区教育委員会文化課（編）『足立風土記稿一地区編 1 千住』足立区教育委員会、2004年、214頁を参照）
- ⁶⁸ 荒川区民俗調査団（編）『荒川区民俗調査報告書（四）南千住の民俗』東京都荒川区教育委員会、1996年、p. i。
- ⁶⁹ 「街かどで拾ったよもやま話集」編集委員会（編）『街かどで拾ったよもやま話集』東京都荒川区教育委員会、1990年、1頁。

結論

1. 本論のまとめ

第1章では、戦後の日本における妖怪文化の活用の歴史的な展開とその背景を概観した。そこには、大きく分けて3つの段階を設定することができる。第一に、1950年代から60年代にかけての萌芽期である。この時期には、戦後の地域社会の復興の中で、地域の連帯感の回復や地域活性化のために妖怪文化が活用されているような事例が見られる。

1955年に福岡県田主丸町で結成された「河童族」は、文人の火野葦平と地域住民との交流から、民間信仰として受け継がれてきた河童を改めて顕彰するために始まった取り組みであった。これは、「まちづくり」を声高に訴えるよりも、「風雅人」の集まりとしての側面が強く、そこで活用される河童もむしろ水神としての存在であった。しかしながら、その後の時代の流れとともに、信仰の対象としての河童が次第にキャラクターに置き換わっていった点は注視すべきであろう。ここには、民俗文化と大衆文化とのせめぎあいを見ることができるわけである。

1960年代に入ると、「もはや戦後ではない」というフレーズに象徴されるように、高度経済成長に向かい人々の消費活動も活性化していった。その中で、余暇活動の拠点を担っていた各地の温泉地では、観光客の誘致を図るための様々なイベントが実施されるようになった。北海道札幌市定山溪温泉における「河童」は、先の「河童族」とは異なり既存の民間伝承に一切根差していない点に大きな特徴がある。ここには、「創作民話」の手法による妖怪文化の再創造がなされていると言えよう。

続く第二段階として、1970年代から90年代初頭にかけて、高度経済成長期における行政主導型の妖怪文化の活用を挙げることができる。この時期には、まちづくりの大きな潮流として、日本全国の画一的な開発を志向する「外発的発展」と地域の個性に根差した「内発的発展」の二つの軸を想定することができる。その中で、妖怪文化は内発的な資源として、「ふるさと」イメージを象徴するキャラクターへと姿を変えていく。1970年代以降の岩手県遠野市におけるまちづくりは、「民話のふるさと」としての観光地化を推進する中で河童や座敷童子といった妖怪たちが地域を構成する要素として位置付けられていった。とは言え、ここで注目すべきは、それらがいかにも「ふるさと」らしい外観を伴ってはいるが、その多くは地域の外側に向けられていたという点であろう。

1980年代末に実施された「ふるさと創生事業」では、それぞれの「ふるさと≡地域」を発信する素材として妖怪文化を活用する事例が見られるようになる。先に挙げた田主丸の駅舎が河童の形に整備されたのもこの時期であるが、行政主導での妖怪まちづくりが推進される場合、その手法は往々にして視覚偏重のきらいがある。酒吞童子の伝説が残る京都府大江町や鬼剣舞の発祥の地であることを打ち出した岩手県和賀町では「鬼」に着目したまちづくりが推進されていった。これらの事例では、それぞれ「鬼の交流博物館」（1993年）と「鬼の館」（1994年）といった博物館類似施設が建てられている。このように、ハー

ド整備を伴うこともまた行政主導による活用の特徴であるが、この背後にバブル経済に支えられた潤沢な財政が控えていたことは言うまでもない。

1990年代に入ると、妖怪文化は「コンテンツ」として活用されるようになっていく。その中でも、水木しげるとのゆかりから妖怪をモチーフにしたまちづくりに取り組んできた鳥取県境港市はしばしば「妖怪でまちおこし」の成功事例として語られる。ただし、これはマンガに描かれたキャラクターの活用という点において、妖怪の持つキャラクターとしての側面に特化した「コンテンツ・ツーリズム」の代表事例として位置付けるべきであろう。

第三段階として挙げられるのは、2000年代以降、地域住民による多様な活動が展開されていった時期である。境港に多くの観光客が訪れるようになって以降、妖怪文化の「コンテンツ」としての価値には注目が集まりつつあった。そうした中で、2000年前後に活動の端緒が見られる《稲生物怪録》の舞台である広島県三次市における「物怪プロジェクト」や、「こなきじじい」伝承の発掘に端を発する徳島県三好市山城町の取り組みは、いずれも「コンテンツ」に対する関心から始まったものであった。しかし、活動を続けていく中で、次第に地域活動としての熟成が見られ、外発的なコンテンツからの自立が達成されていった過程は注目に値する。ここには、純粋な物語消費の文脈からの脱却を見ることができよう。

さらに、近年では地域住民を主体とする妖怪文化の再創造がなされるようになってきた。そこでは、地域の外側から人々を呼ぶことよりも、自らの手で地域文化を再生させようとする意識が見られる。大分県臼杵市における「臼杵ミワリークラブ」、滋賀県八日市市における「ほない会」、岩手県胆沢郡金ケ崎町における「金ケ崎まちづくり研究会」などの事例では、それぞれの地域で住民自身が自らの暮らす地域を深く理解し、楽しむ手段として妖怪文化が活用されている。

以上の通り、戦後の妖怪文化の活用状況を概観してきたが、妖怪文化の再創造は必ずしも現代に限った現象ではなく、歴史の中で幾度となく繰り返されてきた。第2章では、それぞれの時代に応じた媒体で表現されながら再生されてきた妖怪存在として、鶴に焦点を当てた。そもそも、夜に鳴く鳥の総称であった鶴は、その声の不気味に聞こえたことから、次第に怪異現象と結びつくようになり、そうした文脈で『平家物語』における鶴退治説話も生み出された。その意味で、当初の鶴は聴覚的な怪異に過ぎなかったのだが、次第に視覚的な記述に基づく怪獣化が進み、絵馬などを媒介に各地にイメージが広がっていった。同時に、謡曲の「鶴」や平家の語りとともに物語も伝播し、その先々で民間伝承として定着していく事例も見られる。さらに、本論では現代における特徴的な活用の事例として静岡県伊豆の国市における「鶴ばらい祭り」を取り上げた。源頼政と結ばれた菖蒲御前とのゆかりを辿って1966年に始められたこの祭りでは、鶴退治という周知の物語に基づき開発された新しいコンテンツが地域文化として定着していく過程を見ることができる。

第3章では、徳島県三好市山城町の事例を通して、民間伝承としての妖怪文化の現代的

活用に関わる問題を取り上げた。鶴のように「大きな物語」に組み込まれた妖怪存在は別として、多くの妖怪伝承は家庭や共同体などで「小さな物語」として語られてきた。山城町も、多様な妖怪伝承が語り伝えられてきた。その点では他の多くの民俗社会と大差ないのだが、近年に郷土史家によって「児啼爺」の伝承が再発見されたことにより、妖怪文化を活用した地域づくりが始まった。こうして、本来であれば「小さな物語」であるはずの民間伝承を「大きな物語」としての大衆文化へと変換することによって、観光資源として活用している点には、コンテンツ・ツーリズムとしての取り組みを見ることができる。一方で、活動を継続する中で地域住民の多様な伝承が掘り起こされていったことによって、今では地域に根差した妖怪文化が再構築されつつある。ここには、妖怪文化を起爆剤とした地域再生の試みを見ることができよう。

第4章では、地域住民による妖怪文化の再創造の事例の中でも、既存のコンテンツに基づかない事例を取り上げた。滋賀県東近江市では、「ほない会」という地域住民組織によって伝承調査がなされ、そこから抽出された「ガオ」を用いて新たな地域行事を創出した。岩手県胆沢郡金ケ崎町では、「金ケ崎まちづくり研究会」の活動の一環として「幽霊・化物・妖怪画展」を開催し、個人の記憶の中にあった様々な体験が可視化されつつある。こうした取り組みは、大衆化された妖怪文化から一線を画し、地域に根差した「小さな物語」の復権と見ることもできるだろう。

こうした傾向は、2000年代以降に各地で頻発しているアートプロジェクトの隆盛とも同調する動きであると考えられる。そこでは、妖怪が地域の記憶を可視化する存在としてのある種の「作品性」を帯びており、それらは地域住民による芸術文化活動を通して地域に還元されている。そこで、本論では「現代の地域社会の中から新しい妖怪を創造する」という仮説に基づき、《隅田川妖怪絵巻》と題するプロジェクトを通じた実践研究を行った。地域社会から新たな妖怪を創り出すという構想の下に実施したこのプロジェクトでは、妖怪という創作物を通して、参加者の個人的な記憶や興味関心に基づいた地域性が顕在化されている。

2. 地域文化としての妖怪文化

今やあらゆるものが地域資源になり得る時代となった。そこでは、これまでの旅の定番であった「郷土料理」「温泉」「観光名所」のみならず、「B級グルメ」「ゆるキャラ（ご当地キャラ）」「ご当地アイドル」など、それぞれの地域を売り出すための素材が続々と開発され、消費されている。そのような中で、妖怪文化を活用する意義は果たしてどこにあるのだろうか。この背景に、妖怪文化が民俗文化（≒地域文化）としての側面と大衆文化としての側面を併せ持っていることを指摘できるが、こうした要素それぞれに対して妖怪文化を活用する有効性を指摘することができる。

まず、大衆文化としての側面に着目すれば、そこにはコンテンツとしての可変性という有効性がある。第2章でも見てきたように、妖怪はその背後にさもありなんな物語を付与

することによって、いかようにも再創造可能な存在である。ここには、「もの」としての実体がないからこそ実現できるフレキシビリティがあると言えよう。あるいは、実態がはっきりとつかめない無中心性によって、様々な解釈を許容する物語の受け皿となっていると言い換えることができるのかもしれない。もちろん、安易に創作できるが故に、本来の民俗文化と混同し、結果的に地域文化の破壊につながる可能性も否定できないが、こうした活用の履歴も含めて今日の「フォークロリズム」の発現となっていることは重視すべきであろう。

第二に、民俗文化としての側面に対応する有効性としては、伝承基盤となり得るコミュニティ活動を活性化する触媒としての機能を見出すことができるのではないだろうか。第3章で見てきたように、農山漁村地域における妖怪文化の多くは、そこに暮らす人々によって民間伝承として語られてきたものである。しかしながら、そうした地域のほとんどは、高度経済成長期以降の地域社会の構造の変化によって、本来の伝承形態は成立しにくくなっている。それに代わって、地域住民による妖怪文化の活用という営みには、伝承の場の創造的な回復を見ることができる。そうした現場では、共同体に所属する地域住民が、妖怪文化の単なる消費者としてではなく、物語創造に向かう主体性を取り戻すことによって、妖怪文化は新たな局面を迎えるのではないだろうか。

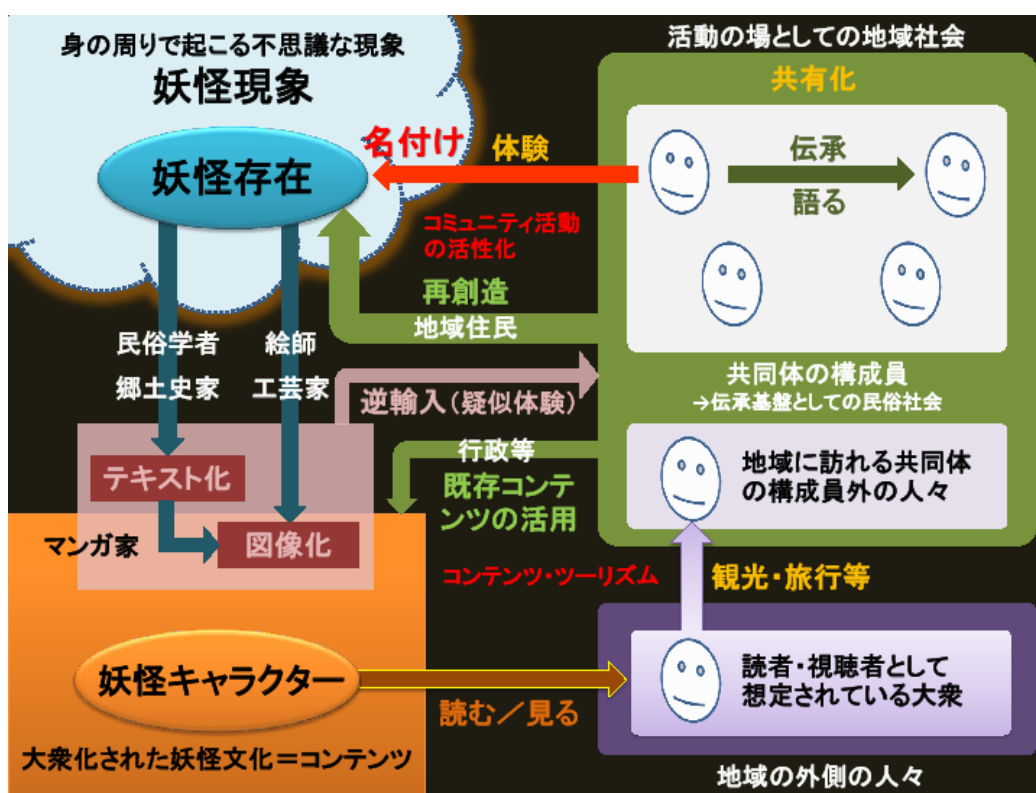


図 5-1 妖怪文化の現代的活用モデル

上に示したのは妖怪文化の現代的活用の構造をモデル化したものである。このようなモデルにも示されるように、妖怪文化の再創造へと至る過程にはいくつかの段階がある。一次的な伝承形態では、身の周りに起こる不思議な現象（妖怪現象）を体験し、それを名付けることによって妖怪存在が生み出される。そこで生み出された妖怪存在は、民俗学者や郷土史家によってテキスト化されたり、絵師によって図像化されたりすることで共有可能な対象として可視化されていく。

さらに、それらはマンガ家などの手によってキャラクター化されることにより、大衆化されたコンテンツとして成立していくことになる。近年では、行政がこうしたキャラクター化の主体を担うことも少なくないが、このように大衆化が促進されるほど、妖怪文化が本来持っていた地域性は知識や情報として均質化されていくことになる。そうして本来の伝承の外側で形成されたコンテンツを受容することによって、大衆的な妖怪イメージが伝播していく。そうして外部の目を通して生み出された妖怪文化をまちづくりや観光といった「大きな物語」の文脈に乗せ、それらを場所と結び付けることで消費の対象として活用することで「コンテンツ・ツーリズム」型の観光商品が生み出されてきた。

これに対して、近年では地域住民自身が妖怪文化の創造の主体を担っていく傾向が見られるようになった。そこでは、妖怪文化を地域文化として読み替えることによって、地域文化資源としての付加価値が見出されていく。こうした活動を通して、外側からの眼差しではなく、地域の内側からの眼差しから妖怪文化を照射することができた時、真の意味で内発的なコミュニティ活動が実現されていくのではないだろうか。妖怪という対象を用いながらも、その背後に地域そのものを見据えることによって、妖怪文化の現代的活用は大きな意味を持つてくるわけである。

3. 課題と展望

昨今の妖怪ブームに伴い、妖怪が活用される場はますます増えている。その一方で、地域固有の妖怪文化への検証が十分でないまま、表面上の視覚的側面を浚うだけの取り組みも少なくない。この背景には、かつては「マイナー」かつ、場合によっては忌み嫌われる存在であった妖怪が、ある種の「ポピュラリティ」を得ることで、人々の妖怪観を支える構造が一変したことを挙げることができよう。これは、妖怪の商品価値の向上に大きな役割を果たしている。もちろん、これは妖怪文化の裾野を広げるという意味では有効であり、時代に応じて変化を遂げてきた妖怪にとってはさほど大きな問題ではないのかもしれない。

しかし、民俗社会において妖怪伝承が生成されてきた背景に目を向けてみると、こうした表層的な側面に捉われることのない豊かな創造性を秘めてきたことが分かる。いつ誰によってつくられたかは分からない多種多様な物語が、既存のコミュニティにおける共同編集の過程を経て受け継がれてきたという事実は、今日の地域づくりにとっても見るべきところが大きい。こうした源流にある創造性に着目することによって、妖怪文化の現代的活用がとるべき方向性も見えてくるのではないだろうか。

とりわけ、地域住民による妖怪文化の再創造が各地で始まりつつあるという状況は、民間伝承としての妖怪が持つ地域文化としての本質に回帰するという意味でも、文化多様性を回復するという意味でも、注目すべき動向である。とりわけ、物語消費型から物語創造型への転換は、妖怪文化とアートプロジェクトとの接点を考える上でも重要な観点である。ただし、それらはまだ活動としての蓄積が浅いため、それぞれの事例がもたらした効果は十分に検証されていると言い難い。本論における論考が一つの契機となって、今後はそれぞれの地域が情報交換を図りながら、今日の地域社会に応じた妖怪の活用法を構築していきたい。

図表一覧

序章

図 0-1 妖怪文化の創造と伝承と活用のモデル 筆者作成

第 1 章

図 1-1 鬼が島遠景 (2010 年 7 月 22 日撮影、香川県高松市女木島)

図 1-2 鬼ヶ島謎の洞窟出口 (2010 年 7 月 22 日撮影、香川県高松市女木島)

図 1-3 カワンドノサン 画像提供：田主丸河童族

図 1-4 2 8 河童 (2013 年 8 月 8 日撮影、福岡県久留米市田主丸)

図 1-5 河童まつり (2013 年 8 月 8 日、福岡県久留米市田主丸)

図 1-6 JR 田主丸駅 (2013 年 8 月 8 日撮影、福岡県久留米市田主丸)

図 1-7 北海道三景之碑 (2013 年 10 月 5 日撮影、北海道札幌市)

図 1-8 二見吊橋から展望した豊平川のかっぱ淵 (2013 年 10 月 5 日撮影、北海道札幌市定山溪温泉)

図 1-9 かっぱ大王 (2013 年 10 月 5 日撮影、北海道札幌市定山溪温泉)

図 1-10 定山溪かっぱ祭りの様子 画像提供：定山溪温泉観光協会

図 1-11 カッパ淵で来訪者の対応をするまぶりと (2013 年 8 月 13 日撮影、岩手県遠野市)

図 1-12 遠野盆地民俗博物公園構想 出典：遠野市新基本計画策定委員会、遠野市企画財政課（編）『遠野市総合計画』遠野市、1981 年、124 頁、（第 16 図 遠野盆地民俗博物公園構想）

図 1-13 鬼のモニュメント (2008 年 7 月 15 日撮影、京都府大江町)

図 1-14 鬼の交流博物館 (2008 年 7 月 15 日撮影、京都府大江町)

図 1-15 北上市立鬼の館 (2012 年 6 月 8 日撮影、岩手県北上市)

図 1-16 水木しげるロード (2012 年 9 月 9 日撮影、鳥取県境港市)

図 1-17 『朝霧の巫女』の作中に登場する商店の前で解説するプロジェクトのメンバー (2012 年 8 月 26 日撮影、広島県三次市)

図 1-18 夜会 (2011 年 8 月 29 日撮影、大分県臼杵市)

図 1-19 『四谷雑談集』の目的地となったお岩稲荷 (2013 年 11 月 14 日撮影、東京都新宿区)

図 1-20 『四家の怪談』の舞台の一つとなった四家の交差点 (2013 年 11 月 20 日撮影、東京都足立区)

第 2 章

図 2-1 鶴塚 (兵庫県芦屋市)

図 2-2 《大森彦七屏風》(部分) 出典：美濃部重克、美濃部智子『酒吞童子絵を読む まつろわぬものの時空』三弥生書店、2009 年

図 2-3 「以津真天」鳥山石燕『今昔画図続百鬼』1779 年

図 2-4 海北友雪「頼政怪獣退治図」1635 (寛永 12) 年、清水寺蔵 出典：土居次義『絵馬—清水寺—』清水寺、1981 年

図 2-5 後藤頭乗「鶴退治図小柄」寛永 13 (1636) 年、根津美術館蔵 画像提供：根津美術館

図 2-6 『花洛絵馬評判』正徳 6 (1716) 年 出典：新修京都叢書刊行會『新修京都叢書 第八巻』臨川

書店、1968 年

図 2-7 『扁額軌範』二編卷之上、文政 4 (1821) 年

図 2-8 「源頼政鶴退治」1700 年 北野天満宮（京都府京都市）蔵 出典：京都市文化観光局文化財保護課（編集発行）『京都の絵馬』1979 年

図 2-9 「鶴退治図」正徳甲午（1714）年、愛宕神社（岩手県江刺市）蔵

図 2-10 「源頼政鶴退治図絵馬」1724（享保 9）年、愛宕神社（宮城県仙台市）蔵 画像提供：仙台市教育委員会

図 2-11 「鶴退治図」1733（享保 18）年、江島若宮八幡神社（三重県鈴鹿市）蔵 出典：立見賢司（編）『江島若宮八幡神社「絵馬群」』2003 年

図 2-12 高嵩谷「鶴退治」1787（天明 7）年、浅草寺（東京都台東区）蔵 出典：金龍山浅草寺『金龍山 浅草寺 絵馬図録』1978 年

図 2-13 芍薬亭長根（作）、葛飾北斎（画）『國文字鶴物語』1808（文化 5）年 出典：『京都大学蔵大惣本稀書集成 第四巻』臨川書店、1995 年

図 2-14 『東京パック』9 巻 6 号、東京パック社、1913 年 2 月発行、国立国会図書館蔵

図 2-15 『古今百物語評判』巻四、貞享 3（1686）年 6 月

図 2-16 鳥山石燕『今昔画図続百鬼』1779 年

図 2-17 「鶴退治」舞台写真、『演藝畫報』第 20 巻第 3 号、1926 年 3 月、演藝畫報社

図 2-18 鶴伝承分布図 筆者作成

図 2-19 戦前の京都の絵葉書 筆者蔵

図 2-20 都記（寛永平安町古図）

図 2-21 神明神社に奉納された矢じり 筆者撮影

図 2-22 現在の鶴池の様子 筆者撮影

図 2-23 めえ塚 筆者撮影

図 2-24 宝塚大歌劇星組 舞踊劇 舞台写真（第 3 場）「うつぼ舟（めえ塚物語）」1956 年 9 月 出典：『宝塚グラフ』10 月号（通巻 113 号）、1956 年

図 2-25 鶴塚まつり（2012 年 8 月 24 日撮影、大阪府大阪市都島区）

図 2-26 鶴ばらい祭り（2012 年 1 月 28 日撮影、静岡県伊豆の国市）

図 2-27 日本交通公社広告『読売新聞』1966 年 6 月 19 日朝刊

図 2-28 伊豆長岡温泉入口看板（2013 年 7 月 1 日撮影、静岡県伊豆の国市）

図 2-29 鶴ばらい祭り（1970 年 1 月 28 日）伊豆長岡町役場（編集発行）『町報伊豆長岡』第 81 号、1970 年 2 月 20 日

図 2-30 鶴ばらい祭り（1979 年 1 月 28 日）伊豆長岡町役場（編集発行）『広報伊豆長岡』第 173 号、1979 年 2 月 15 日

図 2-31 鶴の再創造モデル 筆者作成

第 3 章

図 3-1 大歩危遠景 筆者撮影

図 3-2 コナキジジの伝承が残るアザミ峠（徳島県三好市山城町） 筆者撮影

- 図 3-3 街道沿いに設置された一つ目入道の像（徳島県三好市山城町） 筆者撮影
- 図 3-4 妖怪まつりの様子（2012 年 11 月 25 日撮影、徳島県三好市山城町） 筆者撮影
- 図 3-5 妖怪屋敷の展示風景 筆者撮影
- 図 3-6 妖怪屋敷と石の博物館平面図 筆者作成
- 図 3-7 妖怪街道ウォーキングの様子 筆者撮影
- 図 3-8 ワークショップで描かれた「エンコ」（左）と妖怪まつりに登場する着ぐるみの「エンコ」（右）の比較
- 図 3-9 ワークショップで描かれた「一つ目入道」（左）と妖怪まつりに登場する着ぐるみの「一つ目入道」（右）の比較
- 図 3-10 妖怪まつりで担がれるお神輿 筆者撮影
- 図 3-11 伝承者が描く「こなきじじい」
- 図 3-12 山爺の里の案内板 筆者撮影
- 図 3-13 山伏を祀るヒジリゴウサン 筆者撮影
- 図 3-14 ミサキ神社 筆者撮影
- 図 3-15 山ヂチの着ぐるみ 筆者撮影
- 図 3-16 山城町における妖怪文化の活用モデル 筆者作成

第 4 章

- 図 4-1 竜骨碑（2013 年 2 月 9 日撮影、群馬県富岡市）
- 図 4-2 妖怪伝承の創造モデル 筆者作成
- 図 4-3 八日市不思議マップ
- 図 4-4 ガオが来るぞ！大作戦（2013 年 2 月 3 日撮影、滋賀県東近江市）
- 図 4-5 ガオのお札
- 図 4-6 金ヶ崎表小路の景観（2012 年 6 月 8 日撮影、岩手県胆沢郡金ヶ崎町）
- 図 4-7 不思議所案内図
- 図 4-8 幽霊・化け物・妖怪画展（2012 年 8 月 18 日撮影、「大松沢家住宅」における展示風景）
- 図 4-9 幽霊・化け物・妖怪画展（2012 年 8 月 17 日撮影、「旧坂本家住宅」における展示風景）
- 図 4-10 《黒沢の早朝お化け 悪羽妖》2010 年
- 図 4-11 《鬼石首の爪》2013 年
- 図 4-12 大成哲雄、竹内美紀子《上鰻池名画館》2009 年
- 図 4-13 墨東地区の路地園芸の例
- 図 4-14 サントピア通り de ワシントン祭り（2012 年 5 月 27 日撮影、茨城県水戸市）
- 図 4-15 首切り地蔵（2012 年 8 月 27 日撮影、荒川区南千住）
- 図 4-16 『江戸名所図会』1836（天保 7）年
- 図 4-17 「天保改正御江戸大絵図」（部分）、1843（天保 14）年
- 図 4-18 「早わかり番地入東京市全図」（部分）、1921（大正 10）年
- 図 4-19 レクチャーの様子（2013 年 5 月 18 日）
- 図 4-20 まち歩きの様子（2013 年 6 月 22 日）

図 4-21 隅田川神社の赤いイカリ (2013 年 3 月 20 日、東京都墨田区)

図 4-22 参加者 E のワークシート

図 4-23 『江戸名所図会』1836 (天保 7) 年

図 4-24 物語創作型の活用モデル

結章

図 5-1 妖怪文化の現代的活用モデル 筆者作成

第 1 章

表 1-1 定山溪かっぱ祭りの変遷

表 1-2 岩手県遠野市における文化によるまちづくりの動向

表 1-3 ミニ独立国の建国状況

表 1-4 全国のかっぱ村

表 1-5 「ふるさと創生事業」における 1 億円の使途に関する調査 出典：地方自治制度研究会 (編)『地方自治』519 号、ぎょうせい、1991 年 2 月、18-19 頁。

表 1-6 鳥取県境港市における妖怪文化を活用したまちづくりの動向

表 1-7 実施主体と活用形態による妖怪文化の現代的活用の分類

第 2 章

表 2-1 鵺出現年表 出典：藤沢衛彦『図説日本民俗学全集第四巻 民間信仰・妖怪編』あかね書房、1960 年

表 2-2 鵺の表象の諸本比較 出典：中野貢「源三位頼政《鵺退治》と郎従・猪早太考—三ヶ日町の伝説及び伊豆長岡鵺ばらい祭に寄せて—」

表 2-3 質問 1 に対する回答結果

表 2-4 質問 2 に対する回答結果

表 2-5 知っている妖怪の名前を挙げる質問項目に対する回答結果 (自由記述／回答数上位 20 位まで)

表 2-6 上記の妖怪に関する情報源を問う質問項目に対する回答結果 (選択肢式)

表 2-7 鵺について知っていることやその情報源に関する回答結果

第 3 章

表 3-1 妖怪図鑑における「こなきじじい」の掲載状況

表 3-2 石の博物館・妖怪屋敷入館者数の推移

表 3-3 知っている妖怪の名前を挙げる質問項目に対する回答結果

表 3-4 小学校の周りにいる妖怪の名前を挙げる質問項目に対する回答結果

表 3-5 ワークショップで描かれた妖怪たち

第 4 章

表 4-1 ほない会による「ガオ」「ヨナイボ」に関するアンケート結果 (n=142)

表 4-2 鶴見俊輔『限界芸術論』における「芸術の体系」

表 4-3 芸術分類と社会的公的投資の関係（加藤種男 1999.12、配布資料より） 出典：小暮宣雄「「限界芸術」領域におけるアーツマネジメント理論の構築とその実践」日本アーツマネジメント学会編集委員会（編）『アーツマネジメント研究』第 8 号、美術出版社、2007 年、55 頁

表 4-4 アートプロジェクトと妖怪伝承の比較

表 4-5 千住七不思議

表 4-6 各回の活動概要

表 4-7 プロジェクトの中で妖怪の発想源になっている場所

表 4-8 プロジェクトにおける創作妖怪の分類

参考文献一覧

【単行本】

- ・荒川区教育委員会（編集発行）『南千住の民俗』1996年
- ・荒川区民俗調査団（編）『荒川区民俗調査報告書（四）南千住の民俗』東京都荒川区教育委員会、1996年
- ・荒川区役所（編集発行）『新修荒川区史 下』1955年
- ・荒川史談会（編集発行）『郷土あらかわを語る』1983年
- ・石井正巳『昔話と観光ー語り部の肖像』三弥生書店、2002年
- ・石子順造『キッチュ論』喇嘛舎、1986年
- ・石子順造ほか『通俗の構造ー日本型大衆文化』太平出版社、1972年
- ・伊豆長岡町教育委員会（編集発行）『伊豆長岡町史 下巻』2005年
- ・伊豆長岡町文化財保護審議会（編）『町史資料第5集「温泉編」』田方郡伊豆長岡町教育委員会、1993年
- ・市川秀行『「民俗」の創出』岩田書院、2013年
- ・市原麟一郎（編）『土佐の妖怪』一声社、1977年
- ・岩井宏實（編）『日本列島活性化シリーズ 博物館づくりと地域おこし』ぎょうせい、1991年
- ・上原輝男『藝談の研究ー心意傳承考一』早稲田大学出版部、1972年
- ・越後妻有大地の芸術祭実行委員会（編集発行）『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2000』2001年
- ・江馬務『日本妖怪変化史』中央公論新社、2004年
- ・落合知子『野外博物館の研究』雄山閣、2009年
- ・香川雅信
- ・河童連邦共和国（監修）『日本のかっぱー水と神のフォークローア』桐原書店、1991年
- ・金沢康隆『歌舞伎名作事典』青蛙房、1959年
- ・金ヶ崎伝統的建造物群保存対策調査委員会、東北大学建築学科伊藤邦明研究室（編）『旧仙台藩要害金ヶ崎一城内・諏訪小路地区ー伝統的建造物群保存対策調査報告書』金ヶ崎町教育委員会、1997年
- ・川勝平太『「内発的発展」とは何かー新しい学問に向けて』藤原書店、2008年
- ・菊池一新『遠野まちづくり実践塾』無明舎出版、2007年
- ・菊池幹『遠野路ー民話のふるさと』海南書房、1975年
- ・北上市立鬼の館（編集発行）『北上市立鬼の館常設展示図録』1995年
- ・北田耕也『大衆文化を超えてー民衆文化の創造と社会教育ー』国土社、1986年
- ・北豊島郡農会（編集発行）『北豊島郡史』1918年
- ・京都市文化観光局文化財保護課（編集発行）『京都の絵馬』1979年
- ・京都大学文学部国語学国文学研究室（編）『京都大学蔵大惣本稀書集成』第四巻、臨川書店、1995年
- ・暮沢剛巳、難波祐子（編著）『ビエンナーレの現在 美術をめぐるコミュニティの可能性』青弓社、2008年
- ・小池淳一（編）『〈歴博フォーラム〉民俗学的想像力』せりか書房、2009年

- ・講談社社史編纂委員会『クロニク講談社の90年』講談社、2001年
- ・後藤春彦『景観まちづくり論』学芸出版社、2007年
- ・後藤春彦、佐久間康富、田口太郎『まちづくりオーラル・ヒストリー「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く』水曜社、2005年
- ・小林進『コミュニティ・アートマネジメント いかに地域文化を創造するか』中央法規出版、1998年
- ・小松和彦『異人論—民俗社会の心性』青土社、1985年
- ・小松和彦『妖怪学新考—妖怪からみる日本人の心—』小学館、1994年
- ・小松和彦（編）『記憶する民俗社会』人文書院、2000年
- ・小松和彦（編）『日本妖怪学大全』小学館、2003年
- ・小松和彦（編）『妖怪文化の伝統と創造—絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』せりか書房、2010年
- ・五味文彦ほか（編）『現代語訳 吾妻鏡 11 将軍と執権』吉川弘文館、2012年
- ・斎藤次男『妖怪都市計画論—おばけからのまちづくり』彩流社、1996年
- ・今野圓輔『日本怪談集—妖怪篇—』社会思想社、1981年
- ・笹本正治『蛇拔・異人・木霊—歴史災害と伝承—』磐田書院、1994年
- ・境港市（編集発行）『境港市三十五周年史』1991年
- ・境港市（編集発行）『境港市四十五周年史』2001年
- ・佐藤有文『日本妖怪図鑑』立風書房、1972年
- ・澁谷美紀『民俗芸能の伝承活動と地域生活』農村漁村文化協会、2006年
- ・新修京都叢書刊行會『新修京都叢書』（第8巻）臨川書店、1968年
- ・末広恭雄『魚と伝説』新潮社、1964年
- ・すみだ郷土資料館（編）『隅田川の伝説と歴史』東京堂出版、2000年
- ・瀬川拓男、松谷みよ子『日本の民話 7 妖怪と人間』角川書店、1973年
- ・関戸明子『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版、2007年
- ・武田明『祖谷山民俗誌』古今書院、1955年
- ・武田明、守川慎一郎『阿波の伝説』角川書店、1977年
- ・武田静澄『落人伝説の旅—平家谷秘話—』社会思想社、1969年
- ・立見賢司（編）『江島若宮八幡神社「絵馬群」』2003年
- ・田主丸町誌編集委員会（編）『田主丸町誌 第一巻 川の記憶』田主丸町、1996年
- ・田村正（編）『三名村史』徳島県三好郡山城町役場、1968年
- ・中央大学人文科学研究所（編）『民衆文化の構成と展開 遠野物語から民衆的イベントへ』中央大学出版部、1989年
- ・常光徹（編）『妖怪変化』筑摩書房、1999年
- ・津屋崎郷土史会（編集発行）『福津の絵馬』2008年
- ・鶴見俊輔、小林和夫（編）『祭りとイベントのつくり方』晶文社、1988年
- ・出口弘、田中秀幸、小山友介（編）『コンテンツ産業論 混沌と伝播の日本型モデル』東京大学出版会、2009年
- ・鐵道省（編）『郷土の傳説』東亜旅行社、1940年
- ・土居次義『絵馬—清水寺—』清水寺、1981年

- ・東京日日新聞社会部『風景お國自慢』四海書房、1927 年
- ・遠野市『92 世界民話博 IN 遠野報告書』1992 年
- ・遠野市『遠野風誌 遠野市市制施行 50 周年記念誌』2004 年
- ・遠野物語研究所（編集発行）『『遠野物語』ゼミナール'99 講義記録 昔話の世界-その歴史と現代』2000 年
- ・遠野物語研究所（編集発行）『遠野物語研究』第 7 号、2004 年
- ・遠野物語研究所（編集発行）『遠野文化誌』第 15 号、2002 年
- ・遠野物語研究所（編集発行）『遠野文化誌』第 30 号、2005 年
- ・遠野物語ファンタジー制作委員会（編集発行）『市民の舞台 遠野物語ファンタジー 感動の 30 年』2005 年
- ・特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT『混浴温泉世界 場所とアートの魔術性』2010 年
- ・中野貢『源頼政・菖蒲御前伝説とその回廊』静岡教育出版社、2005 年
- ・中村禎里『狸とその世界』朝日新聞社、1990 年
- ・那谷敏郎『「魔」の世界』新潮選書、1986 年
- ・日本古典文学大辞典編集委員会（編）『日本古典文学大辞典 第四巻』岩波書店、1984 年
- ・日本地域開発センター（編）『トオノピアプラン自立する都市・遠野からの報告』清文社、1982 年
- ・日本民俗研究大系編集委員会『日本民俗研究大系 第 8 巻心意伝承』国學院大學、1988 年
- ・布山裕一『温泉観光の実証的研究』御茶の水書房、2009 年
- ・野村典彦『越境する近代 10 鉄道と旅する身体近代 民謡・伝説からディスカバー・ジャパンへ』青弓社、2011 年
- ・萩原康子、熊倉純子（編）『社会とアートのえんむすび 1996-2000—つなぎ手たちの実践』ドキュメント 2000 プロジェクト実行委員会、2001 年
- ・廣末保『悪場所の発想—伝承の創造的回復』三省堂、1980 年
- ・藤岡和賀夫『DISCOVER JAPAN 40 周年記念カタログ』PHP 研究所、2010 年
- ・藤川治水『子ども漫画論』三一書房、1967 年
- ・藤浩志、AAF ネットワーク『地域を変えるソフトパワー アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験』青幻社、2012 年
- ・牧野武夫（編）『趣味の旅行案内』（『中央公論』第 49 年第 6 号附録）中央公論社、1934 年
- ・増淵敏之『物語を旅するひとびと コンテンツ・ツーリズムとは何か』彩流社、2010 年
- ・街かどで拾ったよもやま話集編集委員会（編）『街かどで拾ったよもやま話集』東京都荒川区教育委員会、1990 年
- ・松平誠『祭りのゆくえ—都市祝祭論』中央公論新社、2008 年
- ・三浦佑之『村落伝承論『遠野物語』から』五柳書院、1987 年
- ・三加茂町民話伝説収集委員会（編集発行）『手書き三加茂百話第三集』1988 年
- ・水木しげる『水木しげるの妖怪画集』朝日ソノラマ、1970 年
- ・宮尾しげを（監修）『東京都名所図会 北郊之部』陸書房、1969 年
- ・宮田登『都市民俗論の課題』未来社、1982 年
- ・宮田登『妖怪の民俗学 旅とトポスの精神史』岩波書店、1985 年

- ・宮田登『歴史と民俗のあいだ 海と都市の視点から』吉川弘文館、1996 年
- ・宮田登（編）『現代民俗学の視点 3 民俗の思想』朝倉書店、1998 年
- ・柳田國男『木思石語』三元社、1942 年
- ・柳田國男『妖怪談義』修道社、1956 年
- ・柳田國男『民間伝承論』第三書館、1986 年
- ・柳田國男（編）『全國昔話記録 阿波祖谷山昔話集』三省堂、1943 年
- ・山田野理夫『日本妖怪集』潮文社、1969 年
- ・山田野理夫『おばけ文庫②ぬらりひょん』太平出版社、1976 年
- ・山田野理夫『怪談の世界』時事通信社、1978 年
- ・山田野理夫（編）『日本伝説集』宝文館、1990 年
- ・山田野理夫『東北怪談全集』荒蝦夷、2010 年
- ・やまだようこ（編）『この世とあの世のイメージ 描画のフォーク心理学』新曜社、2010 年
- ・山野真悟、宮本初音、黒田雷児（編集）『福岡の「まち」に出たアートの 10 年 ミュージアム・シティ・プロジェクト 1990-200X』ミュージアム・シティ・プロジェクト出版部、2003 年
- ・山村高淑『アニメ・マンガで地域振興～まちのファンを生むコンテンツツーリズム開発法～』東京法令出版株式会社、2011 年
- ・吉田司雄『オカルトの惑星 1980 年代、もう一つの世界地図』青弓社、2009 年
- ・米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店、1989 年
- ・歴史まちづくり法研究会（編）『歴史まちづくり法ハンドブック』ぎょうせい、2009 年
- ・Edward Relph, Place And Placelessness, 1990（邦訳：高野岳彦、阿部隆、石山美也子『場所の現象学』筑摩書房、1999 年
- ・John Urry, THE TOURIST GAZE; Leisure and Travel in Contemporary Societies, 1990（邦訳：加太宏邦『観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995 年）
- ・21 ふるさと京都塾（編）『ふるさとづくり読本⑤緑と伝説の大江塾-京都府大江町の町づくりと塾運動』かもがわ出版、1995 年

【展覧会図録】

- ・茨城県立歴史館（編集発行）『特別展 妖怪見聞』2011 年
- ・公益財団法人三井文庫三井記念美術館（編集発行）『特別展 大妖怪展一鬼と妖怪そしてゲゲゲ』2013 年
- ・遠野市立博物館（編集発行）『「遠野物語の 100 年」―その誕生と評価』2010 年
- ・千葉瑞夫、菅沼緑、平澤広ほか（編）『街かど美術館 アート@つちざわ〈土澤〉advance』街かど美術館実行委員会、2008 年

【雑誌】

- ・『演藝畫報』第 20 巻第 3 号、演藝畫報社、1926 年 3 月
- ・『演藝畫報』第 35 巻第 6 巻、演藝畫報社、1941 年 6 月
- ・『怪 Vol.0023』角川書店、2007 年

- ・『怪 Vol.0025』角川書店、2008 年
- ・『怪 Vol.0030』角川書店、2010 年
- ・『月刊社会教育』第 243 号、国土社、1977 年 11 月
- ・『月刊社会教育』第 285 号、国土社、1981 年 1 月
- ・『週刊少年マガジン』第 8 巻第 11 号（1966 年 3 月 20 日発行）、講談社
- ・『週刊少年マガジン』第 8 巻第 15 号（1966 年 4 月 17 日発行）、講談社
- ・『伝統と現代』第 13 巻第 1 号、伝統と現代社、1982 年
- ・『東京パック』9 巻 6 号、東京パック社、1913 年 2 月
- ・『パハヤチニカ』Vol.23、パハヤチニカ編集委員会 2009 年
- ・『比較日本文化研究』第 15 号、比較日本文化研究会、2012 年
- ・『The まちづくり View』1989—Vol.4、第一法規出版、1989 年

【論文】

- ・芦尾長司「「ふるさと創生」考」地方自治制度研究会（編）『地方自治』512 号、ぎょうせい、1990 年 7 月
- ・飯倉義之「都市伝説化する「想像力」－「大きな物語の喪失」と陰謀論的想像力」『比較日本文化研究』第 15 号、比較日本文化研究会、2012 年
- ・梅野光興「解釈の技法・記憶の技法—高知県大豊町の蛇淵伝説—」小松和彦（編）『記憶する民俗社会』人文書院、2000 年
- ・浦達雄「温泉観光地のまちづくり」『地理』52 巻 6 号、古今書院、2007 年 6 月
- ・香川雅信「妖怪／フィギュア論」『比較日本文化研究』第 15 号、比較日本文化研究会、2012 年
- ・河野眞「フォークロリズムの生成風景—概念の原産地への探訪から—」日本民俗学会（編集発行）『日本民俗学』第 236 号、2003 年
- ・川村清志「都市民俗学からフォークロリズムへ—その共通点と切断面—」日本民俗学会（編集発行）『日本民俗学』第 236 号、2003 年
- ・小泉元宏「地域を超える「地域」への想像力～「アートプロジェクト」の時代における「地域とアート」の関係性～」社団法人日本住宅協会（編集発行）『住宅』60 号、2011 年 9 月
- ・澤井安勇「「ふるさと創生推進本部」からの中間報告」地方自治制度研究会（編）『地方自治』545 号、ぎょうせい、1993 年 4 月
- ・白石太良「地域づくり型ミニ独立国運動の変容」『流通科学大学論集—人文・自然編—』第 4 巻第 1 号、1991 年 9 月
- ・白石太良「地域づくり型ミニ独立国運動の変容（Ⅱ）」『流通科学大学論集—人文・自然編—』第 5 巻第 1 号、1992 年 9 月
- ・中山光治「コンテンツを活用した地域振興について」社団法人中国地方総合研究センター（編集発行）『季刊中国総研』2010 年 9 月
- ・橋本善太郎「第三次全国総合開発計画について」「道路と自然」編集委員会（編）『道路と自然』5 巻 3 号、道路緑化保全協会、1978 年 3 月
- ・（対談）羽田孜「「列島改造」から「ふるさと創生」へ」『中央公論』103 巻 8 号、中央公論新社、1988

年 8 月

- ・ 久元喜造「「ふるさと創生」関連施策の動向について」地方自治制度研究会（編）『地方自治』519 号、ぎょうせい、1991 年 2 月
- ・ 松浦妙子「「聖地巡礼」は新世紀の「ディスカバー・ジャパン」か？」社団法人中国地方総合研究センター（編集発行）『季刊中国総研』2010 年 9 月
- ・ 松平誠「地域文化の再生とテレビーNHK 番組『ふるさとの歌まつり』の社会文化的実証研究ー」『女子栄養大学紀要』第 27 号、香川栄養学園、1996 年
- ・ 道場親信「一九六〇年代における「地域」の発見と「公共性」の再定義 未決のアポリアをめぐって」『現代思想』第 30 号第 6 巻、青土社、2002 年
- ・ 森浩「第三次全国総合開発計画について」日本環境衛生センター（編集発行）『生活と環境』23 巻 1 号、1978 年 1 月
- ・ 八木康幸「祭りと踊りの地域文化ー地方博覧会とフォークロリズム」宮田登（編）『現代民俗学の視点 3 民俗の思想』朝倉書店、1998 年
- ・ 山村順次「日本における温泉地の発達と温泉地域社会の構築」『地理』52 巻 6 号、古今書院、2007 年 6 月
- ・ 山本吉左右「『義経記』おぼえがきー文体と方法について」『伝統と現代』第 47 号、伝統と現代社、1982 年

【行政刊行物】

- ・ 伊豆長岡町役場広報室『町報伊豆長岡』第 37 号、1966 年 2 月 20 日
- ・ 伊豆長岡町役場広報室『町報伊豆長岡』第 69 号、1969 年 2 月 20 日
- ・ 伊豆長岡町役場広報室『町報伊豆長岡』第 81 号、1970 年 2 月 20 日
- ・ 伊豆長岡町役場広報室『町報伊豆長岡』第 99 号、1972 年 2 月 25 日
- ・ 伊豆長岡町役場『広報伊豆長岡』第 137 号、1976 年 2 月 25 日
- ・ 伊豆長岡町役場『広報伊豆長岡』第 173 号、1979 年 2 月 15 日
- ・ 伊豆長岡町役場『広報伊豆長岡』第 209 号、1982 年 2 月 15 日
- ・ 伊豆長岡町役場『広報いずながおか』第 329 号、1992 年 2 月
- ・ 鳥取県境港市役所『市報さかいみなど』687 号、1988 年 5 月 6 日
- ・ 鳥取県境港市役所『市報さかいみなど』693 号、1988 年 8 月 8 日
- ・ 鳥取県境港市役所『市報さかいみなど』703 号、1989 年 1 月
- ・ 鳥取県境港市役所『市報さかいみなど』707 号、1989 年 3 月
- ・ 鳥取県境港市役所『市報さかいみなど』711 号、1989 年 5 月
- ・ 鳥取県境港市役所『市報さかいみなど』717 号、1989 年 8 月 5 日
- ・ 三島市役所『広報みしま』214 号、1969 年 3 月

謝辞

本論文を執筆するにあたり、以下の皆様に多大なるご協力とご支援を賜りました。末筆ながら、御礼申し上げます。

筑波大学芸術学系の岡崎昭夫先生には、主査としてご指導賜りました。同芸術学系の直江俊雄先生、教育研究科の和田学先生には、副査としての的確なご指導を賜りました。同芸術系の齊藤泰嘉先生には、副査として、また指導教員として長きにわたってご指導を賜りました。

2012年度から2年間にわたり、特別共同利用研究員として国際日本文化研究センターにお世話になりました。小松和彦先生をはじめ、共同研究員の皆様から賜った貴重なご助言は、本論文を執筆する上できわめて重要なものでした。

第4章の実践研究にあたっては、日本科学財団による笹川科学研究助成により、研究の一部を実施いたしました。御礼申し上げます。

各地での調査にあたっては下記の個人または機関の皆様のご協力を得ました。（五十音順・敬称略）

青笹地区センター、天野行雄、綾織地区センター、荒川区、飯倉義之、石田久男、伊豆の国市観光協会、伊豆の国市教育委員会、伊豆の国市立伊豆長岡中学校、伊藤正之、いろり火の会、臼杵ミワリークラブ、NPO 法人千住すみだ川、海老江重光、太田隆宏、大平克之、大平昌代、大歩危妖怪村役場、小田伸次、金ヶ崎まちづくり研究会、株式会社山城しんこう、菊池信代、北上市立鬼の館、吉川光彰、工藤さのみ、後藤美穂、菰田馨藏、島田恵美子、下岡昭一、下山孝、勝呂克彦、関口千歳、高杉郁也、高柳俊郎、滝下朋之、田主丸河童族、千葉周秋、土淵小学校、土淵地区センター、堤吉男、遠野市立博物館、遠野物語研究所、中村説子、長谷川浩、林田武、平田政廣、藤田公一郎、紅乙女酒造、ほない会、本田敏秋、丸濱宏美、三次市役所産業観光部観光課、三好市立上名小学校、三好市立下名小学校、望月澄夫、脇眞二

今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

資料1-1 妖怪文化の活用に関する年表

西暦	和暦	妖怪文化の活用に関するできごと	法整備の動き	行政・民間による地域文化動向
1945	昭和20			
1946	昭和21			
1947	昭和22			
1948	昭和23			
1949	昭和24			
1950	昭和25		5月、文化財保護法制定 5月、国土総合開発法制定	
1951	昭和26	清水崑、『小学生朝日新聞』の創刊に際し、「かっぱ川太郎」の連載開始 小川芋銭を顕彰する「河童の碑」建立(茨城県牛久市)	12月、博物館法制定	
1952	昭和27			
1953	昭和28	清水崑、『週刊朝日』誌上に「河童天国」の連載開始 中川雄太郎らを中心に、第一回かっぱ展が開催される(静岡県静岡市)		
1954	昭和29		文化財保護法の改正 ・重要無形文化財の指定制度の導入 ・「有形文化財」から「民俗資料」が独立	よさこい祭り開始(高知県)
1955	昭和30	◎7月、河童族結成(福岡県田主丸) 黄桜のCMキャラクターとして「かっぱ」が使用され始める(当初は清水崑、後に小島功)		
1956	昭和31			全島エイサーコンクール(1977年に沖縄全島エイサー祭りに改称)開始(沖縄県コザ市) 大東京祭(1982年に「ふるさと東京まつり」に改称し、1997年まで継続)開始
1957	昭和32	1月、殺生石が栃木県指定史跡指定(栃木県那須郡那須湯本) 3月、『日本六十余州伝説繪物語』(東京日日新聞社、東京日日新聞社)		高円寺阿波踊り開始(東京都杉並区)
1958	昭和33	静岡かっぱまつり開始(静岡県静岡市)		
1959	昭和34	「都民の日」のキャラクターとして「河童」が採用される。清水崑(1976年以降は小島功)のデザインによる「河童パッチ」が販売される(～1997年)		尾花沢まつりと花笠おどり開始(山形県尾花沢市)
1960	昭和35		所得倍増計画	
1961	昭和36			
1962	昭和37	史跡鶴塚頭彰會結成(大阪府大阪市都島区)カッパ祭り復活(岐阜県揖斐川町)	全国総合開発計画	北上みちのく芸能まつり開始(岩手県北上市)
1963	昭和38		観光基本法施行	10月、NHKで『新日本紀行』放送開始(～1982年3月)
1964	昭和39	ノータリクラブ結成		しもきた阿波おどり開始(東京都世田谷区)
1965	昭和40	定山溪温泉で河童をモチーフにしたまちづくりが始まる。(北海道札幌市)		
1966	昭和41	1月、鶴ばらい祭り開始(静岡県伊豆長岡)	古都保存法制定 風土記の丘設置構想	NHKで『ふるさと之歌まつり』放送開始(～1974年)
1967	昭和42	トオノピアプラン策定(岩手県遠野市)		
1968	昭和43	1月、テレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」(第一シリーズ)放送開始(～1969年3月)		「妻籠を愛する会」設立
1969	昭和44	2月、鶴ばらいがNHK「ふるさと之歌まつり」に出演(静岡県三島)	新全国総合開発計画	観阿弥祭開始(三重県名張市) 中津川ジャンボリー開始(岐阜県中津川)
1970	昭和45			「ディスカバー・ジャパンキャンペーン」開始 ▶▶▶新しい「旅」の形の提案 3月、『an an』(平凡出版)創刊 10月、日本テレビ系列で『遠くへ行きたい』放送開始 京都、奈良、鎌倉の市民団体を中心に「全国歴史的風土保存連盟」結成
1971	昭和46	遠野駅前に遠野物語碑設置(岩手県遠野市) 10月、テレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」(第二シリーズ)放送開始(～1972年9月)		5月、『non-no』(集英社)創刊 7月、「妻籠を守る住民憲章」
1972	昭和47			将門まつり開始(茨城県岩井市)

1973	昭和48		10月、大規模小売店舗における小売業の事業活動の調整に関する法律(大店法)成立(2000年6月廃止)	
1974	昭和49			長野県南木曾町妻籠、名古屋市有松、奈良県橿原市今井町のまちなみ保存運動家を中心に「町並み保存連盟」結成 大塚阿波踊り開始(東京都豊島区) 米子がいな祭り開始(鳥取県米子市)
1975	昭和50		文化財保護法改正 ・伝統的建造物群の追加 ・「民俗資料」から「民俗文化財」への改称 ・「無形文化財」から「無形民俗文化財」が独立	
1976	昭和51			8月、松江だんだん祭り開始(島根県松江市) 湯布院映画祭開始(大分県湯布院町)
1977	昭和52		第三次全国総合開発計画 ・定住圏構想	
1978	昭和53	4月、『民話の手帖』創刊 ふるさとカーニバル阿波の狸まつり(徳島県徳島市)		
1979	昭和54	三次市歴史民俗資料館開館(広島県三次市)		一村一品運動(大分県) 八王子いちよう祭り開始(八王子)
1980	昭和55	遠野市立図書館博物館開館(岩手県遠野市)		4月、三州足助屋敷開館() 平野の町づくりを考える会結成(大阪府平野区)
1981	昭和56	うしく河童祭り始まる(茨城県牛久市)		井上ひさし『吉里吉里人』刊行
1982	昭和57	4月、田主丸子河童族発足(福岡県田主丸) 大江山酒呑童子祭り開始(京都府大江町)		岩手県上閉伊郡大槌町、「吉里吉里国」として独立宣言 ▶▶▶「ミニ独立国ブーム」の口火を切る。
1983	昭和58			4月、東京ディズニーランド開園 長崎オランダ村開園 ▶▶▶「テーマパーク」の時代へ
1984	昭和59	伝承園開館(岩手県遠野市)		
1985	昭和60	5月、宮城県北部を流れる北上川流域の登米町、東和町、中田町、津山町による「みやぎ北上連邦」が結成され、石ノ森章太郎によって描かれたかっぱが連邦の旗のデザインとして用いられる 6月、旭川かっぱ村開村(北海道旭川市) 10月、テレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」(第三シリーズ)放送開始(～1988年2月) 銚子かっぱ村開村(千葉県銚子市)		
1986	昭和61	11月、静岡かっぱ村開村(静岡県静岡市)		路上観察学会設立 テーマパーク「日光江戸村」開園(栃木県藤原町)
1987	昭和62	3月、河童をモチーフにしたキャラクター「活平くん」誕生(宮城県色麻町) 兵庫県立歴史博物館において「おぼけ・妖怪・幽霊…」展開催(7月11日～8月30日)	第四次全国総合開発計画 ・多極分散型国土の構築 ・地域間交流のネットワーク構想	総合保養地整備法(リゾート法)
1988	昭和63	鬼と平和の里づくり事業(岩手県北上市) 2月、八代河童共和国建国し、同年8月に「第一回全国河童サミット」を開催、「河童連邦共和国」設立が発表される(熊本県八代市) 9月、利根川かっぱ村開村() 11月、紀泉かっぱ村開村、1990年4月に「塚かっぱ村」に改称(大阪府堺市) 浅草かっぱ村開村(東京都台東区)	ふるさと創生事業	11月、川崎市市民ミュージアム開館
1989	昭和64 ／平成 元	2月、牛久かっぱ村開村(茨城県牛久市) 4月、「ツチノコ共和国」建国(下北山村) 5月、川越かっぱ村開村、同年10月に川越かっぱ祭りを開始(埼玉県川越市) 10月、藤橋城の近くに「河童大明神」が祀られる。同時に、小島功によって描かれた「かっぱの藤太郎」がシンボルキャラクターとなる(岐阜県藤橋村) 越前かっぱ村開村(福井県金津町) かっぱ交番建設(岩手県遠野市)	ふるさと創生事業	テーマパーク「サンリオピューロランド」開園(東京都多摩市)

1990	平成2	鬼と平和の里づくり推進委員会発足(岩手県北上市) 天竜リバーランド構想着手(長野県駒ヶ根市) 5月、菱刈ガラツバ王国建国(鹿児島県伊佐郡菱刈町) 6月、みの河童村開村(岐阜県揖斐川流域) 10月、「天狗王国」独立宣言(栃木県湯津上村) 10月、駒ヶ根天竜かつば村開村(長野県駒ヶ根市)		「空気神社」建立(山形県朝日町) ▶▶▶日本における「エコミュージアム」の展開 テーマパーク「スペースワールド」開園(福岡県北九州市)
1991	平成3			
1992	平成4	ふるさと創生事業の一環として、河童の形をした田主丸駅舎完成(福岡県久留米市田主丸)	6月、地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律(お祭り法)制定 世界遺産条約批准	YOSAKOIソーラン祭り開始(北海道札幌市)
1993	平成5	4月、「日本の鬼の交流博物館」開館(京都府福知山市) つちのこ館開館(岐阜県東白川村) 駒ヶ根市おもしろカッパ館開館(長野県駒ヶ根市) 川崎市市民ミュージアムにおいて「妖怪」展開催		平野町ぐるみ博物館開始(大阪府平野区)
1994	平成6	6月、「鬼の館」開館(岩手県北上市)		テーマパーク「志摩スペイン村」開園(三重県磯部町)
1995	平成7			4月、NHKで『ふるさとの伝承』放送開始(～1999年3月)
1996	平成8	1月、テレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」(第四シリーズ)放送開始(～1998年3月)		
1997	平成9	8月、四日市祭に登場する大入道をもチーフにしたキャラクター「こにゅうどうくん」誕生(滋賀県四日市市)		
1998	平成10	2月、水木しげる、「木槌の誘い」連載(～1999年3月) 12月、物怪プロジェクト三次活動開始(広島県三次市) 臼杵ミフリークラブ結成(大分県臼杵市) 「鬼の館」開館(香川県高松市女木島)	3月、「21世紀の国土のグランドデザイナー」地域の自立の促進と美しい国土の創造一」が閣議決定 3月、特定非営利活動促進法(NPO法)制定 6月、中心市街地の活性化に関する法律	
1999	平成11	5月、児啼爺の伝承が発掘される(徳島県三好市山城町) 「じーも」誕生(福岡県北九州市門司区) ほない会結成(滋賀県八日市市)		平野郷HOPEゾーン協議会設立(大阪府平野区)
2000	平成12	3月、宇河弘樹、『YOUNGKINGアワーズ』(少年画報社)に「朝霧の巫女」連載開始(～2007年) 10月、物怪まつり開始(広島県三次市) 雪おんな探偵団結成(東京都青梅市)		越後妻有アートトリエンナーレ開始(以降3年ごとに開催、2003年・2006年・2009年・2012年) 7月、みうらじゅん『ハイパーホビー』誌上において「ユルキャラ民俗学」の連載開始
2001	平成13	国立歴史民俗博物館において「異界万華鏡 あの世・妖怪・占い」展開催(7月17日～9月2日) 11月、児啼爺石像除幕式(徳島県三好市山城町)	12月、文化芸術振興基本法制定	別府八湯温泉泊覧会(大分県別府市)
2002	平成14	3月、雪おんな縁の碑建立(東京都青梅市) 3月、八日市商工会議所会館で「妖怪まちおこしパネルディスカッション」が開催される。参加地域は大分県臼杵市、鳥取県境港市、広島県三次市 ほない会による八日市伝承調査 8月、ほない会による世界最長肝試し、ミステリーツアー、百鬼夜行実施(滋賀県八日市市) 11月、白糸まちなみ交流館において白糸組による「不思議展」開催(岩手県胆沢郡金ヶ崎町)		
2003	平成15	「水木しげる記念館」開館 那須九尾まつり開始(栃木県那須郡那須町) 『もっこくつぞー金ヶ崎の不思議所 化物 伝承人』発行(岩手県胆沢郡金ヶ崎町)		
2004	平成16		文化財保護法改正(文化的景観の追加) 6月、景観法制定 6月、コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律(コンテンツ促進法)制定	

2005	平成17		国土交通省総合計画局、経済産業省商務情報政策局、文化庁文化部「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」	
2006	平成18	幽霊・化け物・妖怪画展開始、以降毎年開催(岩手県胆沢郡金ヶ崎町)	観光立国推進基本法成立	4-10月、「長崎さるく博」の開催 ▶▶▶「まち歩き」ブームの到来 11月、京都国際マンガミュージアム開館 B級グルメの祭典「B-1グランプリ」開始 ▶▶▶「B級グルメ」の認知度が高まる
2007	平成19	4月、テレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」(第五シリーズ)放送開始(～2009年3月) 4月、牛鬼をモチーフにしたキャラクター「もーに」誕生(愛媛県宇和島市) 愛媛県歴史文化博物館において「異界・妖怪大博覧会ー『おばけ』と『あの世』の世界ー」開催(7月10日～9月2日) 「うながっぱ」誕生(岐阜県多治見市) 遠野遺産認定制度制定(岩手県遠野市)	エコツーリズム推進法成立	国宝・彦根城築城400年祭のキャラクターとして「ひこにゃん」誕生 ▶▶▶「ゆるキャラ」ブームの火付け役
2008	平成20	任意の団体として、山城・大歩危妖怪村を結成、農村漁村地域力発掘支援モデル事業として採択(徳島県三好市山城町) 南丹市立文化博物館において「妖怪大集合!!」展開催(7月19日～8月31日)	観光圏の整備による観光旅客の来訪及び滞在の促進に関する法律(観光圏整備法) 農村漁村地域力発掘支援モデル事業(行政刷新会議による事業仕分けによって平成21年度で廃止)	「ゆるキャラ」という言葉が「新語・流行語大賞」にノミネート
2009	平成21	2月、「ガオがくるぞ大作戦」開始(滋賀県東近江市) 3月、『亀城下異談』発行(大分県臼杵市) 兵庫県立歴史博物館・京都国際マンガミュージアムにおいて「妖怪天国ニッポンー絵巻からマンガまで」開催(兵庫:4月25日～6月14日、京都7月11日～8月31日) 遠野「語り部」1000人プロジェクト開始(岩手県遠野市)		混浴温泉世界開始(以降、3年ごとに開催、2012年)
2010	平成22	1月、文福茶釜をモチーフにしたキャラクター「ぼんちゃん」誕生(群馬県館林市) 3-9月、NHK連続テレビ小説で「ゲゲゲの女房」放送 11月、「超烏人ガイナ、妖怪だるだる」誕生(和歌山県田辺広域市町村圏) 11月、「カムロちゃん」誕生(千葉県佐倉市) 「妖怪屋敷」開館(徳島県三好市山城町)		瀬戸内国際芸術祭開始(以降、3年ごとに開催、2013年) ゆるキャラグランプリ開始
2011	平成23	ケンムンふえすた開始(奄美市)		2月、前橋まちなか博物館発足
2012	平成24	「東近江のガオさん」誕生 株式会社四国の秘境山城・大歩危妖怪村結成 10月、「隅田川妖怪絵巻」開始(東京都荒川区)		
2013	平成25	1月、鶴をモチーフにしたキャラクター「ぬえざえもん」命名(静岡県伊豆の国市) 3月、河童をモチーフにしたキャラクター「くるっぱ」命名(福岡県久留米市) 9月、四国の秘境 山城・大歩危妖怪村がサントリー地域文化賞を受賞		

資料2－1 絵馬馬所在リスト

寺院名	作者	奉納者	奉納年／制作年	干支	寸法	所在地	備考
清水寺	海北友雪		寛永12(1635)年	乙亥		京都府京都市東山区清水	
北野天満宮			元禄13(1700)年	庚辰	110 * 160	京都市上京区馬喰町	
愛宕神社			正徳4(1714)年	甲午	120 * 150	岩手県奥州市江刺区愛宕字下川原	
愛宕神社		伊達吉村	享保9(1724)年	甲辰		宮城県仙台市太白区向山	仙台市指定文化財
江島若宮八幡神社		天満屋三郎太夫	享保18(1733)年	癸丑	32.5 * 57.0	三重県鈴鹿市江島町	三重県指定文化財
岩蔵寺	田中屋敷		宝暦10(1760)年	庚辰	70 * 70	宮城県岩沼市志賀字葉師	
峰定寺	前川雪旦		安永5(1776)年	丙申	78 * 84	京都府京都市左京区花背原地町	
浅草寺	高嵩谷		天明7(1787)年	丁未	265 * 352	東京都台東区浅草	国指定重要美術品(昭和9年)
臨済宗金剛山庚申寺	沢木其柳		文化11(1814)年	甲戌		静岡県浜松市浜北区宮口	
誓固神社	斎藤秋圃		文化12年	甲亥	160.5*253.5	福岡県福岡市中央区天神	
春日神社	鳥居清忠		文化12(1815)年	甲亥		千葉市長柄町	
長谷寺(ちょうこくじ)	南月		天保3(1832)年	壬辰	81.6 * 154.0	滋賀県高島町音羽	
大己貴神社	五嶺		天保4(1833)年	癸巳	70*97	福岡県三輪町弥永	
観音堂			天保4(1833)年	癸巳		岩手県大船渡市	
池田八幡神社			天保9(1838)年	戊戌			
諏訪神社			天保10(1839)年	己亥	178 * 106	福岡県福津市本町	
真言宗智山派徳祥寺			天保13(1842)年	壬寅		埼玉県戸田市美女木	
内門観音堂	雀斎	山崎口	弘化5(1848)年	戊申	135*180	宮城県大郷町山崎	
二本松神社		丹羽長富	嘉永4(1851)年	辛亥	150*254	福島県二本松市本町	二本松市指定文化財(昭和55年)
阿蘇神社	[賀]樵		安政2(1855)年	乙卯	89.5*116.7	福岡県福岡市城南区片江	
須留田八幡宮	絵金		文久元(1861)年	辛酉	67.7*111.7	高知県香南市赤岡町	
天満宮			文久元(1861)年	辛酉	114.5*177	福岡県久留米市安武	
安禪寺不動堂			慶応4(1868)年	戊辰	48.2*69.3	茨城県総和町磯部	
雲南神社		當村／昌口口	明治2(1869)年	己巳	40*60	宮城県中田町浅水	
出世稻荷神社			明治3(1870)年	庚午	42*53	東京都練馬区旭町	
老松宮	富安友記		明治5(1872)年	壬申	100*153	福岡県久留米市山本	
長淵日吉神社	井上		明治12(1879)年	己卯	150*180	福岡県朝倉町長淵	
天満宮	菊池南嶺		明治13(1880)年	庚辰	101*133	福岡県吉井町富水	
鹿島神社	晴岸	當村／高橋口口	明治14(1881)年	辛巳	65*100	宮城県大郷町上野	
氷川神社			明治21(1888)年	戊子	49*59	東京都練馬区高野台	
毘沙門堂		東多賀村／遠藤清五郎	明治23(1890)年	庚寅	26.5*35	宮城県名取市杉ヶ袋字前沖	
大亀神社	泉寅松	大亀／泉寅松	明治28(1895)年	乙未	44*71.5	宮城県富谷町大亀字和合田	
山神社			明治30(1897)年	丁酉	108.6*85.9	福岡県福岡市早良区曲洲	
龍(うがみ)神社			明治32(1899)年	己亥	125*103	福岡県福津市福岡南	
亀王天満宮	南嶺		明治35(1902)年	壬寅	90*132	福岡県田主丸町亀王	
熊野神社	勇斎	鈴木早苗、他6名	大正7(1918)年	戊午	120*150	宮城県大郷町山崎	
虚空蔵菩薩			大正9(1920)年	庚申	38*50	福岡県北大洲	
八幡神社	鈴木	三ヶ内／安海辰次郎	大正9(1920)年	庚申	45*60	宮城県大和町落合字三ヶ内	
万蔵稻荷神社	松陽露岳	福島県／一心講	大正12(1923)年	癸亥	110*200	宮城県白石市小原字馬頭山	
八幡宮	吉村百耕		昭和7(1932)年	壬申	93.3*132.8	福岡県福岡市中央区平尾	
東光寺	香雲、平山	庄司勝治、勝郎	昭和34(1959)年	己亥	75*116	宮城県名取市下増田字丁地	
成田山新勝寺		藤倉禪	昭和時代		31*31		
宇津神社						広島県呉市豊町	
今宮神社	規礼				110 * 140	京都市北区紫野今宮町	
頼政神社						茨城県古河市錦町	
妙見寺						群馬県高崎市引間町	
羽黒神社						奥能登珠州市	
成道山光明寺						愛知県知多郡南知多町豊浜鳥居	
御調神社						愛媛県内子町	
八幡神社					77 * 121	東京都練馬区中村南	
愛宕神社						福島県大玉村玉井	
黒沼神社						福島県福島市松川町	
小椎尾神社					93.5*147.5	福岡県小塩	
佐野古大神宮神社					90*108	福岡県小郡市	
愛宕神社	龍園				66*89	宮城県登米町赤生津字山通寿崎	
侍浜稻荷神社					70.5*55	宮城県石巻市侍浜字西山	
						東京都葛飾区東金町	葛飾区登録有形民俗文化財

【参考文献】

- ・福岡県博物館協議会、福岡県立美術館(編集発行)『平成八年度歴史資料調査報告書 福岡県の絵馬 第一集―北筑後・南筑後教育事務所管内篇―』平成9年
- ・宮城県教育委員会『宮城県文化財調査報告書第133集 絵馬調査報告書』平成2年

しずおかけん い ず く に し ようかいかん じったい かん
静岡県伊豆の国市における妖怪観の実態に関するアンケート

回答の方法

- ・アンケート用紙は表紙を含めて計 6 枚あります。質問 1 から順番に回答を始めてください。
- ・質問に対して選択肢せんたくしが示されている場合は、当てはまる数字に○をつけてください。
- ・自由記述の場合は、枠内に自由に記述してください。スペースが足りない場合は余白部分や裏面を使ってもかまいません。

当てはまる□に✓を入れてください。

学 年	<input type="checkbox"/> 中学 1 年生	<input type="checkbox"/> 中学 2 年生	<input type="checkbox"/> 中学 3 年生
性 別	<input type="checkbox"/> 女性	<input type="checkbox"/> 男性	
出 身	<input type="checkbox"/> 伊豆の国市内	<input type="checkbox"/> 伊豆の国市外（静岡県内） <input type="checkbox"/> 静岡県外	

質問1 「妖怪(ようかい)」に興味がありますか。該当するもの1つに○をつけてください。

- 1 興味がある
- 2 どちらかというに興味がある
- 3 どちらかというに興味はない
- 4 興味はない

質問2 「妖怪」についてどのように思いますか。該当するもの全てに○をつけてください。

- 1 こわい
- 2 気持ち悪い
- 3 かわいい
- 4 わからない
- 5 きたない
- 6 危ない
- 7 かっこいい
- 8 美しい
- 9 古い
- 10 暗い
- 11 いない
- 12 やわらかい
- 13 くさい
- 14 強い
- 15 冷たい
- 16 やさしい
- 17 明るい
- 18 弱い
- 19 つまらない
- 20 おもしろい
- 21 醜い(みにくい)
- 23 なつかしい
- 24 その他(→どのように思うかを書いてください_____)

質問2-2 上で選んだ選択肢の中で、最もよく当てはまるものを一つ選んでその数字を書いてください。

回答_____

質問 3 「妖怪」という言葉を聞いて思い出す妖怪の名前を自由に挙げてください。(いくつ回答してもかまいません。スペースが足りない場合は、余白や裏面を使ってください。)

質問 3-2 上に挙げた妖怪の中で、いちばん妖怪らしいと思うのはどれですか。一つ選んで回答してください。

回答 _____

質問 3-3 質問 3-2 に回答した方に質問です。それがいちばん妖怪らしいと思ったのはなぜですか。その理由を自由に書いてください。その際、質問 2 の言葉を参考にしてもかまいません。

質問 5. 伊豆の国市（伊豆長岡）に関わりのある妖怪を知っていますか。

- 1 知っている →質問 5-2 に進んでください。
- 2 知らない →ページをめくって質問 6 に進んでください。

質問 5-2 質問 5 で「知っている」と回答した方に質問です。その妖怪の名前や特徴について自由に書いてください。（いくつ回答してもかまいません。言葉で表現するのが難しい場合は絵を使ってもかまいません。スペースが足りない場合は、余白や裏面を使ってください。）

質問 5-3 質問 5-2 に回答した方に質問です。質問 5-2 で回答した妖怪に関する知識はどのようにして手に入れましたか。質問 4 を参考に、自由に回答してください。

質問 6 鵜（ぬえ）ばらい祭りを知っていますか。

- 1 知っている →質問 7 に進んでください。
- 2 知らない →質問は以上です。

質問 7 鵜（ぬえ）ばらい祭りに参加したことはありますか。

- 1 参加したことがある
- 2 参加したことはないが、見たことはある
- 3 参加したことも、見たこともない

質問 8 鵜（ぬえ）は「妖怪」だと思いますか。

- 1 思う
- 2 思わない

質問 9 鵜（ぬえ）についてどのように思いますか。質問 2 を参考に、自由に回答してください。

質問 10 鵜（ぬえ）ばらい祭りは、これからも伊豆長岡で続けていくべきだと思いますか。

- 1 思う
- 2 思わない

質問 11 質問 10 のように回答したのはなぜですか。今の鵜ばらい祭りについて思うこと、これからの鵜ばらい祭りに望むことなどについて、自由に回答してください。

資料2-3 静岡県伊豆の国市における妖怪観の実態に関するアンケート調査結果
1年生(n=25)

Q1 妖怪に興味はありますか。

1	興味がある	3
2	どちらかというと興味がある	12
3	どちらかというと興味はない	8
4	興味はない	2

Q2 妖怪についてどのように思いますか。(クロス分析)

		1	2	3	4	計
1	こわい	2	11	3	1	17
2	気持ち悪い	1	4	4	1	10
3	かわいい		2			2
4	わからない		8	4	1	13
5	きたない	1	1	3		5
6	危ない	1	8	3		12
7	カッコいい	2	1			3
8	美しい					
9	古い	1	5	4		10
10	暗い	1	7	3	2	13
11	いない		3	2	1	6
12	やわらかい					
13	くさい		1	1		2
14	強い	3	3	1		7
15	冷たい	2	4	1		7
16	やさしい	1	1			2
17	明るい	1				1
18	弱い	1	1			2
19	つまらない		2	1		3
20	おもしろい	1	3			4
21	醜い	1	2	2	1	6
22	なつかしい					
23	その他		2			2

→ きしょい
人間とは少しちがう
見たことがない

Q3 上で選んだ選択肢の中で最もよくあてはまるものは。(クロス分析)

		1	2	3	4	計
1	こわい	2	4	1		7
2	気持ち悪い		1	2	1	4
3	かわいい					0
4	わからない		1	2	1	4
5	きたない					0
6	危ない		1	1		2
7	カッコいい		1			1
8	美しい					
9	古い		1			1
10	暗い		1			1
11	いない			1		1
12	やわらかい					
13	くさい					0
14	強い	1				1
15	冷たい					0
16	やさしい					0
17	明るい					0
18	弱い					0
19	つまらない					0
20	おもしろい		1			1

21	醜い			1		1
22	なつかしい					
23	その他		1			1

妖怪という言葉聞いて思い出す妖怪の名前を挙げる質問3-1に対する回答(A)と、その中で最も妖怪らしいと思うものを一体挙げる質問3-2に対する回答(B)ならびにその理由を問う質問3-3に対する回答(C)。

	A	B	C
てんぐ	5	2	なんとなく 鼻が長いし羽がはえてるから／自分がてんぐが好きだから
カッパ	7	2	かわいいし、本当にいそうだから かっぱはようかいだときいたことがあるから
一つ目こぞう	10	4	一目こぞうは、目が一つしかないから 目が一つしかないから きもちわるいから 一つ目こぞうは、みんなみると、ちょっとこわい感じがする
ろくろっくび	10	3	人間に首がのびる人なんていないから 首がのびてこわいから おもしろいから
ゆうれい	2		
顔なし男	1		
いったんもめん	12	4	空にういているから／人の形ではないから 空も飛べて、体もうすくて、人間とは全然違うから 飛んでるから？ もめんに目があってういていることが不思議で強そうだし人間とはちがうから。物に命がやどった感じだから。
ぬらりひょん	5	1	姿が異様だし妖怪の中では有名な方だから
ぬりかべ	7		
ざしきわらし	3		
あずきあらい	4		
あずきとぎ	1		
化猫	1		
がしゃどくろ	1		
きたろう	5	1	なんとなく
ねこむすめ	3		
すなかけばばあ	7	1	気持ち悪そうだから
妖怪人間ベム	1		
ちょうちんおばけ	1	1	最後に「おばけ」ってつくから、古い昔話に出てきそうだから
ゾンビ	2		
口さけ女	4	1	醜い
ミイラ	1		
海坊主	2		
人魂	1		
雪女	4		
一つ目入道	1		
からかさおばけ	3		
のっぺらぼう	1		
おばけ	1		
さだこ	2		
めだまおやじ	2		
キョンシー	1		
うちゅう人	1		
ねずみおとこ	1		
ねずみこぞう	1		
ヌエ	2		
おに	1		
ばけぞうり	1		
こなきじい	2		

氷女	1	1	昔ばなしにもでてくるし、マンガにもでてきている。人をおそったということを書いたことがあるから。(昔ばなしで)
とぐろ	1		
らいぜん	1		
むくろ	1		
よみ	1		
首なし女	1		
まくら返し	1	1	人が寝ている時が一番の弱点で、まくらをひっくりかえされたら、悪夢を見ると一生起きないから
首長女	2	1	きもいから／首がのびるとがおかしい
かまいたち	1		
あかなめ	1		
キンタロー	1		
顔なし	1		
雪男	1		

Q4 妖怪に関する知識をどのように手に入れたか

自分で体験	7
中学校時代	0
小学校時代	6
小学校以前	2
地域での行事や誰かに聞いた	2
祖父母	1
父母	5
兄弟姉妹	3
近所の人	1
友だち	6
学校の先生	0
誰から聞いた	2
その他	0
本を読んで知った	17
地域に関する	1
ものがたり	6
美術の本	0
絵本	1
図鑑	4
マンガ	8
雑誌	2
新聞	0
その他	0
その他のメディア	20
映画	5
テレビ	20
ラジオ	0
インターネット	3
その他	0

Q5 伊豆の国市(伊豆長岡)に関わりのある妖怪を知っていますか。

	計
知っている	7
知らない	15
無回答	3

Q5-2 妖怪の名前や特徴について

名前	特徴	情報源
ヌエ	頭がサル、体がトラ、しっぽが蛇	ヌエ祭り、自動車

ヌエ	頭はたしか、さるで体がとらでしっぽがへびでという感じです。	家族から聞いてイベントがあることも知った(ヌエばらい)。
ぬえ	3つの生き物がつながってできている。(へび、とら、?)	聞いた(→友、お母さん)。おまつりでみた。テレビでやってた。新聞にのってた。
鵺(ぬえ)	しっぽが蛇で、顔が猿で体がトラ	近所のお祭りなどで(商工祭)
ぬえ	頭がさるで体がトラでしっぽがへびの妖	お祭り、おばあちゃんからきいた
ぬえ	頭がとらで体はさるでしっぽがへび	
ぬえ	何種類かの動物の体の一部がある。	学校の勉強で知った。(小学校)

Q6 鵺ばらい祭りを知っていますか

	計
知っている	17
知らない	7
無回答	1

Q7 鵺ばらい祭りに参加したことはありますか

参加したことがある	4
参加したことはないが、見たことはある	10
参加したことも見たこともない	3

Q8 鵺は妖怪だと思いますか

思う	16
思わない	1

Q9 鵺についてどのように思いますか

●鵺を妖怪だと思う場合

- ・かっこいい
- ・こわいけどやさしい心の持ち主
- ・古い、昔のこと
- ・本当はいい奴
- ・こわい。危ない。
- ・やさしいかこわいか心があるかないかわからないけどたくさんの動物が合体しているから妖怪じゃないかと思う
- ・ふつう
- ・きもちわるい 動かないでほしい
- ・よく分からない生物
- ・こわそう
- ・ちょっとこわそうだけど実は優しいかもしれない
- ・こわい
- ・ぬえはみにくい感じがします。どうぶつが三しゆるいぐらいまざってることを聞いたから。
- ・少しぶきみ
- ・顔はこわいけど、性格が優しそう

●鵺を妖怪と思わない場合

- ・伊豆長岡の、歴史ある物。

Q10 鵺ばらい祭りをこれからも続けていくべきだと思いますか

思う	17
思わない	0

Q11 今の鵺ばらい祭りについて思うこと、これからの鵺ばらい祭りに望むことなど

- ・長く続けている祭だから、やめる必要もないと思う。
- ・特にない
- ・ぬえばらいまつりは今まで伊豆長岡でやってきたことだから
- ・伝統だと思うから
- ・楽しいから
- ・ぬえはどのような性格なのかによって進めるべきだと思う。
- ・楽しいから
- ・いちよ鵺は伊豆長岡にいないとだめだと思う
- ・伊豆の国市の伝統だから。
- ・楽しそうだから

- ・鵜は悪い方の妖怪かもしれないしもし災いがおきたらこまるから
- ・ようかいはおいはらったほうがいいから。
- ・いったことはないけど地域の人がいっぱいいそうだから。
- ・なんとなく
- ・ぬえばらい祭をするのは、良いことだけど、これからのぬえばらい祭りは、参加人数を増やして、祭りをする。

2年生 (n=28)

Q1 妖怪に興味はありますか。

1	興味がある	9
2	どちらかというに興味がある	5
3	どちらかというに興味はない	4
4	興味はない	10

Q2 妖怪についてどのように思いますか。(クロス分析)

		1	2	3	4	計
1	こわい	2	3	3	3	11
2	気持ち悪い	3	1	4	6	14
3	かわいい	1		1	1	3
4	わからない	2	2	1	2	7
5	きたない	4		3	4	11
6	危ない	4	1	2	2	9
7	カッコいい	1	1	1		3
8	美しい	1		1		2
9	古い	2	3		5	10
10	暗い	4	2	2	2	10
11	いない	1		2	6	9
12	やわらかい				1	1
13	くさい	3	1	2	3	9
14	強い	3	1		3	7
15	冷たい	1	2	3		6
16	やさしい			1		1
17	明るい			1		1
18	弱い	2	1	2	1	6
19	つまらない	1	2	1	3	7
20	おもしろい	4		2		6
21	醜い	2		1	4	7
22	なつかしい	2				2
23	その他			1	3	4

→ サインをもらいたい
悪霊
何も思ったことない
非化学的

Q3 上で選んだ選択肢の中で最もよくあてはまるものは。(クロス分析)

		1	2	3	4	計
1	こわい	1	3		2	6
2	気持ち悪い	3		1		4
3	かわいい					0
4	わからない		2			2
5	きたない				1	1
6	危ない					0
7	カッコいい					0
8	美しい	1		1		2
9	古い	1				1
10	暗い	1			1	2
11	いない				4	4
12	やわらかい					
13	くさい				1	1
14	強い	1				1
15	冷たい			1		1
16	やさしい					0
17	明るい					0
18	弱い					0
19	つまらない					0
20	おもしろい					0

21	醜い				1	1
22	なつかしい	1				1
23	その他			1		1

Q4 妖怪という言葉聞いて思い出す妖怪の名前を挙げる質問3-1に対する回答(A)と、その中で最も妖怪らしいと思うものを一体挙げる質問3-2に対する回答(B)ならびにその理由を問う質問3-3に対する回答(C)。

	A	B	C
てんぐ	1		
カッパ	7	4	実際にいるから。テレビでやってたから。 いちばん有名だから よく日本の昔話とかに出ているから かっぱは、気持ち悪そうだし、みにくいから。
一つ目こぞう	3	2	めが1つだから 目が一つだから
ろくろっくび	1		
いったんもめん	9	1	いったんもめんは人間になることはできないから
ぬらりひょん	8	2	見た目 わるそうだから／つよそうだから
ぬりかべ	13	2	でかいぬりかべはかべだけどしゃべるから
サザエ鬼	1		
あずきあらい	1		
あずきじい	1		
きたろう	14	2	なんとなく ゲゲゲの鬼太郎の主人公だから。
ねこむすめ	10		
すなかけばあ	13	2	行動が腹たつから いちばん妖怪らしいと思ったから。
むらさきババア	1		
じんめん魚	1	1	こわいから
妖怪人間ベム	1		
ちょうちんおばけ	1		
口さけ女	1		
海坊主	1		
雪女	3	1	キレイだから。美人だから。
羽衣狐	1	1	九尾の妖怪で、狐は怪異などでも有名だからです
狂骨	1		
首無	1		
いばらきどうし	1		
しゅてんどうし	1		
しょうけら	1		
からかさおばけ	2		
のっぺらぼう	4	1	なんとなく
さだこ	1		
テケテケ	1		
すきま男	1	1	みどり色ですきまからいつものぞいているから。
めだまおやじ	14	4	目玉きもい 目玉 なんとなく
ねずみおとこ	14	1	きたないから
大入道	1		
おに	1		
こなきじい	1		
こなふきじい	1		
オバケ	1	1	おどかしてくるから、そして、みためがこわい
ザビエル	1		
山下	1		
かまいたち	1		
ミート生人	1		
バックベアード	1		
アボカドロ	1	1	最強！

バリトル	1		
ミミミミ	1		

Q4 妖怪に関する知識をどのように手に入れたか

自分で体験		16
	中学校時代	2
	小学校時代	11
	小学校以前	4
地域での行事やイベント		2
誰かに聞いた		15
	祖父母	3
	父母	3
	兄弟姉妹	6
	近所の人	
	友だち	10
	学校の先生	
	誰から聞いた	1
	その他	2
本を読んで知った		21
	地域に関する	2
	ものがたり	10
	美術の本	
	絵本	5
	図鑑	7
	マンガ	13
	雑誌	1
	新聞	1
	その他	2
その他のメディア		25
	映画	5
	テレビ	23
	ラジオ	
	インターネット	5
	その他	1

Q5 伊豆の国市(伊豆長岡)に関わりのある妖怪を知っていますか。

	計
知っている	14
知らない	11
無回答	3

Q5-2 妖怪の名前や特徴について

名前	特徴	情報源
ぬえ	頭がさるで、体がとらで、しっぽがへび	学校行事にあるので
ぬえ	頭がサル、体がとら、しっぽがへび	小学校で話をうけた
ぬえ	顔がさるで体がとらでしっぽがへび	ぬえばらいまつり
ぬえ		学校 イベント
妖怪きつねおババ		テレビ
ぬえ	顔さる 体トラ 尾へび	学校
ぬえ	トラとへびとサルがまざったもの	小学校でしった
ぬえ	しっぽがへびで体がとら	地域のシンボルみたいになっているから。
鶴	顔がサル、体がトラ、しっぽがへび	本など。
ぬえ	顔…さる 体…とら しっぽ…へび	学校で習った
ぬえ	特徴は分からないが色々動物がまざっている	友達に聞いた。
ぬえ	へび、さる、トラ	何か知ってた

ぬえ	頭…さる 胴…とら 尾…へび	テレビ(忍たま乱太郎)
ぬえ	さるととらとへび	見た。にせものを。

Q6 鶴ばらい祭りを知っていますか

	計
知っている	27
知らない	1

Q7 鶴ばらい祭りに参加したことはありますか

参加したことがある	1
参加したことはないが、見たことはある	19
参加したことも見たこともない	7

Q8 鶴は妖怪だと思いますか

	計
思う	18
思わない	9

Q9 鶴についてどのように思いますか

●鶴を妖怪だと思う場合

- ・このよのしんび
- ・こわい
- ・ちょっとこわい
- ・きもーい！！
- ・妖怪にしてはカッコいい。
- ・ペットにしたい。
- ・カッコいい
- ・おかしい。
- ・こわい
- ・本物見たことないけどこわそう
- ・友達にする
- ・かわいい
- ・体や、顔が別々で気持ちわるい、遊んでみたい
- ・見た目かわいい
- ・気持ち悪い
- ・すごい。
- ・会ったことがないからよくわからない
- ・怖い 大きい

●鶴を妖怪と思わない場合

- ・ふつう
- ・ぬえは怖くないから。
- ・分かりません。
- ・だって本物見たことないから。
- ・おもしろい
- ・いない。
- ・何も思わない。
- ・だってニセモノだし。架空のもの。

Q10 鶴ばらい祭りをこれからも続けていくべきだと思いますか

思う	25
思わない	2

Q11 今の鶴ばらい祭りについて思うこと、これからの鶴ばらい祭りに望むことなど

●思うと答えた生徒

- ・ずっと続いているから。
- ・なんとなく。
- ・でんとうだから
- ・少しでも、地域として役立つのであれば、続けられればいいと思う。
- ・イベントはいいことだから。
- ・たのしいからイイと思う

- ・昔から続いているものなら
- ・ぬえばらい祭りは伊豆の国市の有名なものだから。
- ・でんとうだから
- ・地域の伝統だから
- ・地域の行事として大切に続けていってほしい
- ・みんな観てるから。伝統だから。
- ・特になし
- ・地いきの伝統的な行事はのこしておくべきだと思うから
- ・みんなが楽しそうに、見ているから。
- ・楽しく続けていきたい
- ・でんとうだから。
- ・とてもよいから。
- ・伝統だから。
- ・いいことだと思ったから。楽しい。
- ・続けてほしい。
- ・たおす。
- ・これがずっとつづけていたから。
- ・こわいけれど伊豆の国市の大事なイベントだから

● 思わないと答えた生徒

- ・意味がないから。
- ・鵜がかわいそう

3年生 (n=33)

Q1 妖怪に興味はありますか。

1	興味がある	10
2	どちらかというと興味がある	8
3	どちらかというと興味はない	8
4	興味はない	7

Q2 妖怪についてどのように思いますか。(クロス分析)

		1	2	3	4	計
1	こわい	3	6	6	4	19
2	気持ち悪い	3	5	5	5	18
3	かわいい	4	2	1		7
4	わからない	3	4	4	5	16
5	きたない	1	1	1	3	6
6	危ない	3	3	3	1	10
7	カッコいい	6	1	1		8
8	美しい	3	2			5
9	古い	3	5	2	5	15
10	暗い	5	5	4	2	16
11	いない	1	2	3	5	11
12	やわらかい	1	1			2
13	くさい	1	1	3	4	9
14	強い	5	2	4	1	12
15	冷たい	2	2	1		5
16	やさしい	2	1			3
17	明るい	2				2
18	弱い	1				1
19	つまらない	1			4	5
20	おもしろい	7	1	2		10
21	醜い	2	2	3	3	10
22	なつかしい	3				3
23	その他	2	1	2		5

→ ふしぎ
 身近にいるもの
 キモい
 |
 おいしい
 きみよう・めずらしい

Q3 上で選んだ選択肢の中で最もよくあてはまるものは。(クロス分析)

		1	2	3	4	計
1	こわい	1	3	1	2	7
2	気持ち悪い	1	1	2	2	6
3	かわいい	1				1
4	わからない		2	2		4
5	きたない				1	1
6	危ない			1		1
7	カッコいい	1				1
8	美しい					0
9	古い		1			1
10	暗い			1		1
11	いない			1	1	2
12	やわらかい					
13	くさい					0
14	強い					0
15	冷たい					0
16	やさしい		1			1
17	明るい					0
18	弱い					0
19	つまらない				1	1

20	おもしろい	3				3
21	醜い					0
22	なつかしい	1				1
23	その他					0
	無回答	2				2

妖怪という言葉聞いて思い出す妖怪の名前を挙げる質問3-1に対する回答(A)と、その中で最も妖怪らしいと思うものを一体挙げる質問3-2に対する回答(B)ならびにその理由を問う質問3-3に対する回答(C)。

	A	B	C
てんぐ	5	4	てんぐは、人間の体をしていて、鼻が長くてウソップみたいだから。 なんか、つばさがはえてて、はなが長くて、おもしろいから。 人間じゃないから
カッパ	16	7	みじかにいそうだから かっぱは、だれも見ただことは、ないけれど、かっぱの骨や「かっぱを見た」と言う人を見るから 川にひきづりこまれたらこわいから。 知名度が高い妖怪だから。いちばん存在しそうだから。 妖怪がそれしか分からないからやらなくていいと思う 怖いから なんかみためが妖怪だから気持ち悪いから。
一つ目こぞう	7	1	目がひとつしかないから
みつめこぞう	1		
ひとつ目	3	1	妖怪という顔している。人間でもなく、どうぶつでもなから。
ひとつめじい	1		
ろくろくび	8		
いったんもめん	16	1	うすいし、きもちわるいし、ういてるし、くさいから。
いったんもんめ	1	1	うすっぺらくて、手も足もあって空を飛んでるから。
いったんもんめん	1		
おやじ	1		
ぬらりひょん	6		
ぬりかべ	17	3	なんとなく ぬるぬるしているから 大きいから
かべぬり	1		
コロポックル	1		
大百足	1		
にゅうどう	1		
くびなし	1		
けじょうろう	1		
なっとうこぞう	1		
あおたぼう	1		
くろたぼう	1		
つちぐも	1		
骨女	1		
赤舌	1		
あかなめ	3	1	妖怪は、少しこわいというイメージがあるので、あかなめ以外はみんな、かわいく、やさしいイメージがあるから、あかなめが1番妖怪らしい。
すねこすり	1		
あぶらすまし	1		
かわうそ	1		
からすてんぐ	1		
あずきあらい	3		
あずきおばば	1		
お歯黒べったり	1		
おはぐろ	1		
アマビエ	1		
いわな坊主	1		

いそがし	1		
おどろおどろ	1		
犬神	1		
火車	1		
わ入道	1		
見上げ入道	1		
よぶこ	1		
おばけやしき	1		
きたろう	17	2	鬼太郎が好きだから。かっこいいから。やさしいから。 テレビのアニメで見たから。
ねこむすめ	11		
ねこ女	1		
ざしきわらし	8	2	よく、「ざしきわらし」のしわざとかみみにするから。 りょかんに出るといわれているから
すなかけばばあ	17		
船ゆうれい	1		
トトロ	1	1	死神だから。
はな子さん	1		
ぬえ	3		
くびなが	1		
きゅうび	1		
ばけ狐	1		
ねこまた	1		
ひひ	1		
もくぎょだるま	1		
おいてけぼり	1		
ぺたぺたさん	1		
ぜん	1		
妖怪人間ベム (ベラ・ベロ)	5	2	こわい 妖怪の人間だから。 人げんから、ようかいになるから？
雪女	7	1	よくわからないけど雪ふらせたりこおらせたりできるから？
雪男	4		
クウナ？	1		
からかさおばけ	1		
かさこぞう	1		
のっぺらぼう	2		
さだこ	1		
めだまおやじ	13	3	非現実的だから。 目が生きてるから。 目が一つしかないから。
ねずみおとこ	11	1	見ためが妖怪っぽい
ねずみこぞう	2		
ねずみおやじ	1		
大入道	1		
おに	3		
こなきじい	7		
なまはげ	1		
かまいたち	1		
あまのじゃく	1		
がしゃどくろ	1		
妖狐	1		

Q4 妖怪に関する知識をどのように手に入れたか

自分で体験		16
中学校時代		3
小学校時代		13

	小学校以前	3
地域での行事やイベント		5
誰かに聞いた		15
	祖父母	3
	父母	3
	兄弟姉妹	2
	近所の人	1
	友だち	9
	学校の先生	1
	誰から聞いた	8
	その他	1
本を読んで知った		20
	地域に関する	1
	ものがたり	6
	美術の本	1
	絵本	4
	図鑑	6
	マンガ	16
	雑誌	1
	新聞	1
	その他	
その他のメディア		32
	映画	13
	テレビ	31
	ラジオ	
	インターネット	5
	その他	1

Q5 伊豆の国市(伊豆長岡)に関わりのある妖怪を知っていますか。

	計
知っている	8
知らない	20
無回答	5

Q5-2 妖怪の名前や特徴について

名前	特徴	情報源
ぬえ	みなもと氏が京都のあやめござんをどうにかしたようなかんじ 体→虎、尾→へび、顔→さる	分らない ただしった。
なみこぞう		人やテレビ
海女		人やテレビ
ぬえ	しっぽはへび あたま(さる) からだはとらのばけもの	ぬえばらいまつりでしった。
ぬえ		地域にぬえたいじの行事があるから
ぬえ		父がしょうこうさいのやくいんでそのよう
ぬえざえもん		なしごとをしているから
	どろどろしてる つよそう こわそう	
ぬえ	頭がトラ 体がサル しっぽがへび	地域の「ぬえばらい祭り」を長中の生徒が行っていて知った
きたろう		
	絵で表現	

Q6 鵺ばらい祭りを知っていますか

	計
知っている	32
知らない	0
無回答	1

Q7 鵺ばらい祭りに参加したことはありますか

参加したことがある	4
参加したことはないが、見たことはある	22
参加したことも見たこともない	6
無回答	1

Q8 鵺は妖怪だと思いますか

	計
思う	22
思わない	11

Q9 鵺についてどのように思いますか

●鵺を妖怪だと思う場合

- ・見た目が怖いから、ごかいされているけど、本当は、他の妖怪たちを守ってくれるやさしい妖怪
- ・どうぶつなのか、妖怪か、はっきりしてほしい
- ・少しこわい。
- ・怖い妖怪
- ・なぜとらとさるとへびが合体するのかがわからない
- ・とら・さる・へびの合体したやつ。
- ・きもいのであればはようかいですね。
- ・いろんな動物がまざってるから妖かいと思う。
- ・気持ち悪い
- ・ふさふさしてそう。怖い。
- ・しっぽがへびで、かおがとらのけもの
- ・ししまいみたいだから
- ・こわい。みにくい。
- ・なんとも
- ・いいと思う
- ・かんじがむずかしい
- ・強そう かっこいい
- ・すごい強そう
- ・こわいけど、かわいい
- ・やさしい心のもち主。つよい。かなしいやつ。
- ・かわいくて、たいじしなくてもいいと思う。

●鵺を妖怪と思わない場合

- ・ただのぬえ
- ・何とも思わない
- ・きもちわるい、こわい
- ・動物!! もうじゅう。
- ・妖怪だとは思わない。
- ・わかりません。見た目はこわいと思う
- ・ただ動物があわさったいきもの
- ・良いと思う
- ・妖怪なのか、神様なのかわからない。
- ・ししまいみたいな感じをしている。
- ・こわい。

Q10 鵺ばらい祭りをこれからも続けていくべきと思いますか

思う	27
思わない	5
無回答	1

Q11 今の鵺ばらい祭りについて思うこと、これからの鵺ばらい祭りに望むことなど

●思うと答えた生徒

- ・毎年こうらしいの行事で、ふるくから伝わってきたものを急にやめるのはよくないから。
- ・地域の行事として長中生もさんかしているので協力してがんばってほしい
- ・地域の活性化につながるから。
- ・中学生のパフォーマンスなのでこれからも続けていった方が良くと思う。
- ・たのしいしょうちえんせいのたいこなどが見たいし、おもちなげがあるから。やるべき！！

- ・ここ伊豆の国市で有名にしたいから
- ・いい祭りだと思うから。
- ・この行事によって、長岡が発展していったらうれしいから。
- ・なんとなく大切だと思ったから。
- ・参加してみて楽しかったし、ぬえを知ってもらう機会にもなると思うから。鵜ばらい祭り以外の行事にも少し出さしてもらえともっといいかなと思います。
- ・長岡の伝統行事として定着してほしいから
- ・でんとうにしていったほうが思う
- ・なくなるのはさびしい
- ・鵜をはらうための祭りなので、はらっておいた方がいい。何十年もつづけているなら、つづけたほうがいい。
- ・もっと、みんなに知られるようにした方がいい
- ・伊豆の国市以外の人たちに知ってもらえて、その人たちが観光をしにきていて、いいから
- ・はらってほしい！
- ・伝統だから
- ・もっとふりつけにバリエーションつけたほうがいいと思う。
- ・鵜が来てはきもちわるのでしっかりはらってほしいですね。
- ・でんとうのまつりだから
- ・伝統的だから 愉快だから
- ・もっと続けてほしい
- ・地域の人たちがあつまって昔のはなしとか昔をふりかえることができるからよいと思う。
- ・とくになし
- ・妖怪について興味をもってほしい

● 思わないと答えた生徒

- ・伊豆の国との関係が分からないから。
- ・やっている時間が人の少ない日で見にこれる人がいないから。
- ・何をやっているか分からないから
- ・あまりきょう味がないから
- ・あってもなくてもいい

資料3-1 こなきじじいに関する聞き取り調査

日時 2012年4月13日(火) 14:00-15:00

対象 A(伝承者本人)、B(紹介者/大歩危妖怪村メンバー)、C(伝承者の配偶者)

インタビュアー 市川(調査者)

A: どうも。

市川(以下、市): 筑波大学の市川です。5年ぐらい前から大歩危で妖怪の調査をさせていただいております。

A: いやー、もう仕事はしよらん、忙しいことはない。気晴らしに。ボケ防止にしよるぐらいのことで。

市: いえいえ。こういう形ですね、山城大歩危妖怪村の活動を踏まえて妖怪と地域の方々がどういう形でかかわってらっしゃるのかなということを研究しているものですから。で、その中で山城町ですと、こなきじじいが一つの大きなきっかけになっているのが非常に大きいところだなと思っておりますので、ぜひお話を伺えればと思ひまして、ご紹介いただいた次第です。よろしくお願いします。

A: それが、前からもう、NHKさんもおいでになってな、だけど私も小さい時にこなきじじいっちゅうのを聞いた程度でな、実際その、物心つかんうちに聞いた話でな、あんまり詳しいことは分らんのですわ。まあ、それ言われたら、小さい子どもらは怖かったという程度ですわな。

市: ずっと住んでいらっしゃったのはここのお家だったんでしょうか。

A: いや、それはあの、この上名の方で、こっちではこなきじじいっちゅうのを聞いたっていうのは、たまーにおるぐらいであんまり聞かん。こっちは聞くまい。下名では。

B: 聞かん。

A: 上名だけじゃな、その話が出とるのは。何人かは聞いたということはあるんじゃないけど。

市: そうなんですね。

A: 私は、なにせ、4つか5つの、もうちょっとうすうすの記憶ぐらいでな。

市: ちなみに、失礼ですけど、今おいくつでいらっしゃるんでしょうか。

A: 数えて、80になる。

市: で、4、5歳ということは、75年とかそのぐらい前の。

A: 学校へ、まだ、学校へその家から、1年か、2年頃まで、そこから通ったんよ。おばあさんと。家から。まあ、戦時中でもあったしな。

市: そうですね。名前っていうのはやはりコナキジジイという名前でご記憶されていらっしゃるのでしょうか。

A: それは、まあ、そうそう。

市: どういう、例えば道を歩いているとコナキジジイが出てくるとい話なのか、コナキ

ジジイがどこかからやってくるとかいう話なのかというのは。

A：あの一、一歳半や二歳ちょっとの分かりかけた赤ちゃんがな、グズグズ言うたり、泣いたりしよったら、そのおばあさんの人が、コナキジジイが連れにくるよと、そしたら、子どもさんは怖いという気があるんよね。

市：じゃあ、どこかからか連れにやってくるような。

A：そうそうそう。

市：例えば、子どもが愚図ったりしたときに。

A：そうそう。

市：そういうお話をされる方は、お父さんお母さんの世代よりも、おじいさんおばあさん世代の人から聞くことの方が多かったのでしょうか。

A：そうじゃな。明治生まれの人から。

市：このコナキジジイっていう名前自体、この言葉を聞いた時に、どんな印象、ご記憶の中ではやはり怖い存在だったのでしょうか。

A：まあ、その頃は、その小さな頃にそれをよけ言うた方やけれど、自分はそれ連れにくる言うたりしても、自分はそれほどあれではなかったんだけど、やっぱり、夜やは怖かったわな。夜なったらもう。

市：なるほど。そうですね。その頃ですと、今みたいに街灯もない時代ですし。電気も。

A：ないないない。電気もぼんやりした、定額料金払ってぼんやりした電気じゃった。

市：闇の濃い時代というか。

A：そうそう。門燈やそんなの全然なかった。外は真っ暗に、暗かったけんに、まあ、それはやっぱり晩に言われたらちょっと怖いわな。

B：その頃っちゅうのは、広い家でも、中に裸電球の細いのが、一つばかりしかなかった。あんなところ、ちょっとくりぬいて、そこの真ん中に電球があって、両方が見えるような感じやった。

C：もちろん、こんな天井もなかった。

A：今だったら、こんなガラスの傘があったら、骨董品になるんだけど、棄ててしもうた。

C：もちろん、天井もないから、ちいとぐらい電気つけても、余計暗いわな。上高いから。で、囲炉裏焚くでしょ。囲炉裏。その頃は囲炉裏焚いて、そいで、自在おろして、それであの、お茶沸かしたり、しとったから。

A：もう、夜なべする言うても、草履つくったり、あれじゃ、繕いもんはもちろんできなんだわな。

市：そうですね。手元が見えないですね。

A：見えない。草履つくったり、あのあたりはもう手加減でできよったけど、年寄りでも。それする程度で、いよいよできなんだわな。

市：暗い時代。

A：お風呂や、行くや言うても、外のお風呂だったら、提灯じゃ、カンテラつけてな、行か

なんだ、暗いけん。

市：この、コナキジジイのお話は、昔話のような感じで語られていたのか、それとももう、実際に今でも現れるような感じの話として語られていたのかというのはどんな感じなんですか。

A：さー、それはちょっと私じゃ判断ができません。昔はいたんだろうな。それ出てくるといって、言われたところを見たら。

市：昔はいたかもしれないと。

B：その当時っちゅうのは、ほんま、昼は別として、夜じゃけん。夜っていうのは、今みたいに、街路灯が付いてるのじゃなしに、もうお月の、月夜の明かりか、もう蠟燭か、それから昔は油たきよったろ。

A：カンテラっちゅうて。

B：それからもう、その電気の始まりじゃけん。

A：電気があの上ついたの昭和の初め頃じゃな。

市：このお話を聞いていた頃は、電気が付きはじめぐらいの時代なんですか。

A：そうじゃね。ぼんやりした、今で言うたら、一番、豆球よりちょっと明るいくらいの電球が一つ家の中に大きな部屋にあったくらいで。

市：この、お話される場っていうのは、東北の方に行くと、囲炉裏端でおばあさんが孫とかに語って聞かせるような語りが多いんですけども、どういう場で話されていたものなんですか。

A：それがな、あの、小さい子どもがお母さんが畑仕事に出ていたら、お母さんに負うて、泣いたりしよったら、言いよった言葉でな、子どもがそれ連れに来られる言うたら、怖いっちゅうんで泣きやむのを目的でな。

市：じゃあ、特に決まった場で急に語り出すというよりは、何かしら、子どもが泣いてしまったり、言うことをきかなかったりした時に、ある種の羨みみたいな感じで語られていたんですか。

A：うん。そんな、こう、囲炉裏端で座って、その話は聞いた記憶ないなあ。

市：ないですか。じゃあ、そこの語られ方が、生活の中で出てくる言葉としてあったんですね。

A：そうそう。

市：暮らしの中で。非常に、生活に密着したお話だったんですね。

A：いたか、その、コナキジジイがいたということは、誰も見たという人はおらんけど、ほけど、何かは、もとはあったもんじゃはな。見た人のとこみたら、水木さんのマンガと同じ名前が出てきて、それが大正何年にあれ調べとるわな。

B：あれは昭和13年。

A：いや、その前調べとった。

市：確か、一番最初は昭和入ってから。言葉になったのは。

C：昭和 13 年。

A：13 年じゃった。うちにもあれ、どこか、置いてあるんじゃ。

市：まさに、あの言葉を柳田國男が採録した場所があそこら辺で、その頃、この名前が語られていたのは事実でしょうから。

A：それは事実じゃろうな。伝説はあったみたいじゃけん。そしたら、水木しげるさんのマンガはそれからずっと後できたんじゃな。

市：そうですね、1960 年に入ってから。

A：えっと、こっちの方に権利は。

市：名前は発祥なんですけどね。

A：そこらあたりがおかしい。

市：面白いところですね。

A：マンガはほら、水木さんのマンガじゃけん。

市：そうですね、あのイメージが。

A：それもな、私も年がたってなかっただろ、もう小学校 6 年か中学校じゃったらかなり覚えとるけん、5、6 歳では薄々の記憶だけですわ。

市：ということは、小学校に入る前ということですね。

A：前。

市：小学校入った頃はもう聞かなくなったということでしょうか。

A：あんまり聞かなんだな。もう、背も大きいなって。

市：そうですね。おぶっていて、泣くようなことはなくなってきましたよね。

A：そう。いや、それが戦時中だって、そこの雇われていた家の主人がな兵隊に行って、そいで、山を、山を持っとったけん、ミツマタいうのしよったんよ。今頃から山へ小屋してな、分けては泊まり込む、分けては通ってな、家から食料焚いて持っていったりしよったんよ。その時に、山へようついていって、山でお守り、守さんをしたんよ。そういう関係で、ちょこっとそんな話を泣いて手に負わん時にな、あの、お腹すいたりした時に泣くけん、言いよったら横から婆さんがそう言って、あやしたというか、そういう言葉を聞いているのは覚えてる。

市：やっぱりでも、お婆さんが話すことが多いんですね。

A：そうそうそう。私なんかはそれ、あんまり、子どもも信用せんしな。それももう、ああ、コナキジジイの話の際に、それはわしも聞いたよってことになったんよ。

市：そうなんですね。4 歳か 5 歳ぐらいの頃にお話を聞いていて、その後大人になっていく過程で、記憶の片隅の方に薄れていったと思うんですが、それがやはり数年前に多喜田さんが聞き取りにきたことによってふっと記憶が蘇ったんでしょうか。

A：そうそう。戦時中は戦争が激しうなってな、ぱーっとそんな話は消えてしもうたんよ。そしたら、みんな忘れとった。

市：その途中で、水木しげるがこなきじじいというキャラクターにしていたんですけれど

も、そのキャラクター自体は御存知でいらっしゃるのでしょうか。

A：ええ、それは、あの、もうテレビやで放映しよったけん、見て、ありや、こなきじじいっつうのがこんなところへ出てきた、あんなに、とりついておさえられたら動けんようになって重たいちゅうて、そんな。

市：では、テレビとか見たときは、自分が思い描いていたコナキジジイとはなんかちょっと違う。

A：雰囲気は違うたわ。思ってたのとは。違うこなきじじいだったわな。

市：実際に石になるとかいう話は伝わってないわけですね。

A：それは全然聞いてなかったな。

市：じゃあ、実際にテレビで水木しげるが描いたこなきじじいが出ていた時は、こなきじじいという名前自体聞いた覚えがあるという認識はあったのでしょうか。

A：うん。あれは、ここのコナキジジイがマンガになったなと思うくらいで、見よったら違うような、石の頭みたいなやつだった。

市：そこら辺のは、こなきじじいという名前を聞いたことがある人にとってはあのマンガやテレビアニメを見たときはそういう反応があったのでしょうか。

A：あつつか。

B：まあ、その頃には皆さんそれぞれええ大人になって、そんなような、今でこそこなきじじいって結構売れてきとるけども、マンガが出たころってというのは、そんなに。

A：ここのこなきじじいは売れてなかった。これは面白いマンガじゃなって、見よったわな。あんまり。

市：じゃ、その頃は特に今みたいな感じでどういふのだったかな、という話にはいかなかったという感じですね。

A：ええ、それは人が寄っても、あれここのこなきじじいと違うのとも言わんし、誰も。言う人なかったわな。

市：違うところのこなきじじいかもしれないという感じでしょうかね。実際にこなきじじいという名前の妖怪が伝えられているのはおそらく全国でも限られた地域だというのがここ数年でますます明らかにされていると思うのですが、その前の段階と今とで、こなきじじいについて考え方が変わったのはありますでしょうか。

B：こなきじじい自身がな、こっちがこなきじじいの発祥の地だというのが分かったのが2000年じゃけん、それからじゃけん、話としては、この辺りで皆、こなきじじい、こなきじじいって言いかけたのは。そういう、水木しげるさんのマンガがあっても、この辺りでこなきじじいという言葉自身が、さらに日常的に会話に出てくるのはまずなかった。2000年までは。

市：なるほど。それが明らかになったことで、また日常的な言葉として。

A：2000年じゃったかい、あれ。

B：あそこの石像つくったのが、11年前の話。

A：そうかそうか。ああ、そうじゃそうじゃ。その頃まではそんな話してなんだ。
市：出なかったですか。
A：終戦で、もうそれからいや、そんな話するゆとりもなかったわ。
市：本当に、このこなきじじいという名前が一般的になってきたのは、2000 年以降改めて再生されたというところなんでしょうね。
B：多喜田さんがこっちに調査に入ってからじゃな。
市：やはりそこが非常に大きなきっかけだったんですね。
A：で、調査に入ったのが 2000 年前、12 年が 2000 年のはずじゃけん、そうすると、それより前じゃけんな、平成の 10 年、平成の 10 年ぐらいじゃけんな、じゃけん、1998 年やそのあたりじゃろうな。多喜田さんが入ってき始めたのが。記録見たらそんなんになった。
市：多喜田さんもあんまり本を出さずに、あの小さい冊子だけで。
B：あれだけじゃな。
市：すべて語っていたので、非常に情報も限られていて興味深いところなんです。
A：名前を、わしも忘れた。
B：多喜田さん。
A：ああ、多喜田さんか。よう、あの、こなきじじいで、ちょこちょこ、家にもおいでよった。ああ、あの人が多喜田さん。もう、名前を人のを忘れて忘れて。
市：では、多喜田さんの聞き取りに来て、こなきじじいを調べてるっていう時に、こういう子どもの時にこういうことがあってという話を改めて話してらっしゃったということなんでしょう。
A：いや、それはあんまり多喜田さんは聞き取りはせなんだな。あの、まあ、色々に聞いては歩いたけどな、だろうと思うんじゃけど、こちらへ来てもそんなに、どうだったこうだったのはあんまり聞かなんだ。それで、あれをした、ビデオはな 2 本か、家に送ってくれとる。
市：ビデオがなんかあったんですか。
A：あれはあの、水木しげるさんのビデオかなんか。あれ、ようけ見とらんで。最初見たけど。まわしとらんだら、カビくるんよ。あの、前の。
B：ああ、VHS か。
市：そうなんですよ。ビデオテープは延びちゃったりしますもんね。
A：他の県にもこなきじじいっちゃうのはあるんですか。
市：似たようなので、ゴギヤナキとかオンギヤナキとか。
A：ええ、ええ。
市：っていうのは四国もけっこう多いんですけども、逆にそういうゴギヤナキとかっていうお話を聞いた記憶はあるでしょうか。
A：ここのしらべやったら、あの、部落の人がそんな泣き方を聞いた時に、こんな泣き方す

るのおるけんど、わしもあの、かりの山で泊まって、ログしよった折にな、先仕事済んだんじゃけんど、先いぬるわけにいくまいって言うけん、一緒に泊まってな、3月の終わり頃なのに、井川町の町長さんがおって、ストーブも出してくれて、管理棟で泊まらせてくれたんや。そんで泊まったら、わしがみなのいびきが邪魔になって、寝れんけん、外へ出て、ちょっと歩きよったの、スキーのあのコースを。そしたら、歩きよったら、みな、どこ行くぞ、あれ外へ出ていったって、戻ってこんって言うんで、心配しよったっちゅうが。みんな酒飲んだら、ごうごういびきかいて、寝られん。そんで外歩いたら、そんな、何かあれ、狼でもないけんど、なんか妙なギャーギャーいうて鳴きよるの山にはおるわな。そんな声をみながちょっと言いよったけど、ま、そんな声は聞いても別にあれ、動物が鳴きよるんじゃないかって。ヒルタカいうのもおるしな。

市：確かに、今よりも闇が深いと、音はよく聞こえますよね。

A：聞こえる。あの、山の上行ったら、自動車は通らんし。静かで。

市：そうですね。だから山鳥の鳴き声だったり、動物の鳴き声だったり。

A：あの、たぬきやでも鳴くんよな。

市：そうなんですね。

A：いやもう、あんまり大きくなって聞いとったらよう憶えとんじゃけどな、もう、若干聞いた程度のことで。

市：でも、そのかすかに聞いた記憶であっても、残っているということは、何かしらインパクトのある言葉ではあったんでしょうか。こなきじじいっていう響きが。

A：さあ、その頃はもう感じるその、まだ知恵がなかったわけ。あ、怖いのがおるんじゃないなっていうぐらいで、ま、自分も暗くなったらその、あ、怖いと思って、外へ一人でよう行かんようになったわな。

市：その他に、例えばエンコの話だったり、妖怪の話で記憶に残っているものはありますか。やはり、一番こなきじじいが印象に残っているのでしょうか。

A：いや、エンコやそれは聞かんけんど、あの、くわん淵のなんとかいうの、ほれ、あれは聞いたわ。

B：くわん淵。

A：くわん淵の、あれは子どもの時聞いたけんどな。いわやへ上ってきよって、あの、針を、縫いものの、食べたらな、正体出て、大蛇だったっちゅう、その話は年寄りから聞いたわ。

市：じゃあ、このくわん淵の話も。

A：は、実物みたいに、あの、伝わったわな。

市：これも、こなきじじいの話を聞いていたぐらいの年代の頃に、4歳とか5歳とかの頃に聞いてらっしゃったんでしょうか。

A：うん、まあ、5、6歳の時じゃな。

市：5、6歳の時に。

A：もう、4歳っていったら、ゆうゆう記憶はあんまりないような時代じゃ。
市：そうですね。普通4歳の頃の記憶はないですね。
A：5、6歳にならなんだら、記憶残ってないわ。
市：くわん淵の話もそのくらい前から。
A：あった。
市：事実、伝説として残っていたと。
A：野鹿野池に大蛇がおる話やらな、それはちょこちょこ年いった人が言いよった。それと、日浦の方には干し物干して、麦とか豆とか干しとっても、雨が降り出したけんに、はよ入れなって、帰ってきてみたら、それ家ん中入れてくれとった。
市：はあ、そういう話も。それは、誰が入れてくれたんでしょうか。
A：それがその、山の何かがあったんじゃろな。
市：何か山の神みたいな。
A：山の神。日浦にはなんとかいうのがあったな。
B：日浦には、あそこの熊野さん。
A：権現さん。熊野さんや。
B：熊野さんのところにある石碑にな、天狗の話もあると彫ってあるわ。
A：天狗かなんかあったんじゃけん。そして、あと横着してな、雨降りだした後、早よ、入れなあかんで、あれどこか知らんが人が言うて、楽な入れてくれる言うたら、入ってなかった。ずぶぬれになつてた。
市：あらら、じゃあ、ちょっと余裕を見せちゃったんでしょうかね。
A：余裕。うんうん。ひけびらかしたというんか、腹立てて、その前は慌てて帰ったらきれいいに入っとった。
市：なるほど。じゃあ、それで味をしめてそういう風に言ったら、今度は濡れちゃったんですね。
A：あとは、小豆、ようは吉川はな、奈良の方からネゴロ入道って来たんじゃ。
市：ネゴロ入道ですか。
A：そしたら、調べたら奈良じゃっちゅうはその出里は。行者じゃと。ネゴロ、ネゴロ言いよるはのお、あそこ。あだ名が、苗字じゃなしに、あだ名がネゴロ。そしたら、吉川のなにが調べて聞いてもろうたら、奈良の山奥から来とるんじゃと。行者じゃと。そしたらあそこには小判が埋まっという、あの、だいぶ探知機で調べたけどわからん。どっか埋めたん。そんじゃけん、あそこの、子どもさんはみな一風変わつとるわな。
B：あの、石川もそうやな。
A：石川は、大夫さん。
B：大夫さんというか、あれ山伏でしょう。
A：ああ、山伏じゃ。ま、行者も山伏もよう似とるんよな。わしらの、うすうすの記憶にや、その髯生やしたり、あの宝鉢きいて、袈裟かけてな、で、鞆かけて、その杖っちゅうの

がな、あの、金の輪っばみたいな、錫杖。あれの杖、提げていた。ジャカンジャカンやって来たんよ。それも怖かったな。

市：やはり、それも怖い存在ではあったんですね。

A：そうそうそう。ほな来たって、家の中入って、それがまた人相も悪いんよ。髯生やして。それは実物見た。

市：それは実際に。

A：実際に、あれ来たって。そしたら、その当時はお金はやるものがないけんに、大麦とかな、何かをちょこっとすくっていたら、この袋持っとるけん、それ広げて、それで、あれしよったわ。それは記憶にある。実物みた。

市：やっぱり、子どもにとってはそれは怖い存在だったんですね。

A：そうそうそう。それは怖かった。はっはっはっ。

市：実際にお話し聞いていると、遍土さんと言うんですかね。

A：うんうん。遍土のちょっとまだ、上品な方やな。お客様と違うんで。行者って言うんよな。

市：たまにやってくる、怖い山の人という、そういうイメージが原型にあるのかなというのは思っていたんですけども。

B：やっぱり、目に見えるのが一番怖いという風には。

A：あの、いのうちから来よったっちゅうのは、はいでよう泊まるんよ。石段で桶に水汲んでいてな、石段で裸になって、まあ、言うたら昔じゃけん、六尺ふんどしだけでな、石段でまだ明るいうちに、その水かぶってな、そして、家の中入って、もう何か文言言っておがみよるの聞こえたわな。隣じゃけに。それは本当の行者だったわな。髯もこのくらいこう生やしてたわ。

市：そうですか。

B：昔は、そういう部類の人がいっぱい来よったっちゅうこと。

A：来よった。それは。何人もはこなんだけどな、決まったように、年に一回戻って来よった。

市：それはお一人ではなく。

A：一人、一人。一人で歩くんよ。そしたら、こっち上に、金のついた錫杖やな、あれついたあれで、ジャンガンジャンガンいうて、ついて歩くんよ。

市：じゃあ、近付いてくると、何となく、あっ、来たっていうのが子どもとしても分かるんですね。

A：そうそう。外におっても家の中へ入ってな、こっち来よると思ったら。そしたらお婆さんが袋に、その、これで、銭じゃない麦入れてるので、麦をな、麦をちゃんと、このくらいのお椀ですくって、持って行ったら袋に入れて。

市：へえ。そうして、麦をもらうと、家からまた隣の家に移動するって感じなんですね

A：隣へ。今の托鉢みたいに、行して歩きよるよな。それは実物見たことあるけんどな。戦

争がまだ激しならんうちじゃそれは。

市：このコナキジジの名前を聞いた時に、思い描いていたイメージっていうのは、今水木しげるが描いているのはこういう感じのものですけれど、これではなかったと思うんですね。

A：うーん。まあ、人間の恰好して、とは思ったわな。それが大きいかこまいかは、まだその時じゃけん、区別ができなんだけんどな。確か、あの、歩いてくる行者を見たけんによ、あんな恐ろしい人だろうなとは、思ったわな。

市：では、コナキジジのイメージって、こういう感じというよりは、むしろ行者とか、こっちに近いようなイメージを。

A：そうそうそう。入道みたいな感じ。

市：入道のような。

A：いっぺん、NHK がここに来た時に、それ言うて、どんな感じだったでっというけに、あの時はまだ水木しげるさんのあの銅像もつくってない時期じゃけんな。

市：ああ、そんな早い段階に。

A：ええ、話で来たわ。そんで、いやあ、怖い感じというか、見たのも覚えてもないし、見もせなんだけんど、見たのはとにかく、あの、怖いと思ったのは、行者つつちゅて、修行して歩きよる、あの人は怖いと思うたと言うて、NHK さんにも言うたんよ。家の中入って障子の破れたところから覗き込んで見たのは覚えてるって言うたんよ。そんで、やっぱり、ああいう系統のコナキジジイと違うんかいなと言うたんじゃけん、それはね、はっきり記憶にないって言うたんじゃ。

市：でもそこらへんは非常に面白いところで。

A：微妙なんや。

市：私も、今、地元で描いてもらったものなんですけれども、その頃出会った妖怪がどういうイメージをしていたかというのを、こなきじじいじゃなく、ヤマジジを描いていただいて、そういうお話をされたんですけれど、これを踏まえると、こなきじじいというのはまた、ちょっと違う感じでしょうか。

A：ああ、ちょっとこう髯生やしてるかなと思ったんよ。

市：もし、よろしければちょっと。

A：いやあ、それはちょっと絵を描くの苦手なんよ。

市：完成度と言うよりは。

A：いや、素人がこんな描いたってって、記憶にあんまりないけん。あそこで、描いてあるかと思ったけど。

市：妖怪の原イメージが分かってくると面白いと思うのですが。

A：これちょうど頭みたいになったんよ。つくりよったら、木が。こんな顔でなかったかと思って、ま、想像で描いたんよ。

市：もう既に形になってるんですね。でも、こういう感じということは、今のあれとは全

く違うような雰囲気。

A：ちょっと怖そう。

市：そうですね。

A：描いてみよったんじゃないけど。

市：素敵な絵だと思います。

A：これ、妖怪屋敷へ、妖怪の顔描きよったら、そんな人間になってしもうた。へへへ。鉛筆で描いとった。そんなん、二つ三つできたんよ。あの、あれ切りよったらな、木を。頭みたいに。

市：でも、こういうイメージだったんですね。やっぱりおじいさん。

A：じゃなあ。

市：で、山伏で、さらに髯がここにさらにつくような感じでしょうか。

A：そうそうそう。まあ、歳いってから、そう言われたりするけに、こんなイメージだろかと思うんで、子どもの頃にはっきりこんなんだったという記憶はないんよ。

市：なるほど。服装としてはどんな感じでしょうか。

A：どんな着物だろうなあ。

市：なかなか今、水木しげるが描いたことで、こなきじじいが全国的に有名になったと言う功績がある一方で、もともとその地域に暮らしていらっしゃった方々の怖さというか、キャラクター以前の部分が失われてしまっているんじゃないかというのが関心の対象なんですけれども。

A：水木さんのこなきは、もう銅像みたいなものになってしもうて。

市：もしよろしければここに付け加えていただけるとありがたいんですが。

A：そんなに。

市：いやいや、私もそんなにうまい絵じゃなくて、すいません。

A：顔は、これぐらいじゃわな。

市：はい。髯は。

A：髯は、そうじゃな、これも、もじゃもじゃじゃわな。あの。

市：髪の毛は生えているというイメージ。

A：生えとると思う、想像だよ。

市：もちろん、見たことないので想像でしかないと思うのですが。

A：ただ、たぶん、着物着とったと思うんじゃ、こう。手があるけん、これで、手はここに錫杖、こう、杖をついとったな、ジャンカジャンカするのついた。

市：その音がして。

A：こっちの手はどうなつとると考えても、思いつかんのよ。

市：そうですね。でも、今は完全に蓑を着ている感じですけども、イメージとしては着物を着ているような。

A：着物だつつうなあ。裸じゃ歩かんし。

市：そうですよね。

B：昔の、あの、何て言うんじゃ。あわせって言うんかい。ああいうもんだろなあ、聞いてると。

A：こうなったような感じでな。足は草履履いとったやら、靴履いとったやら、それ分かん。

市：では、裸足というよりは何かを履いていた感じ。

A：そうそう。何かは履いとつつろうけんどな。持とつたろうけん、分かんけど、まあ、この着物はこうかためて、ゆわとつた。ここに帯を、さあ、それがなあ、昔じゃけん、きれいな帯はしとらんわな。縄の帯をしとつたかも分かん。

市：なるほど、簡易な帯でしめて。基本的に山の中を歩いているイメージなんですね。

A：そうそう。そんでこれも下へ、こんなのも、ボールペンで描いてみたんよ。

市：これもかわいいですね。

A：なんぞつけな、殺風景じゃけん。これがほとんどないけん、そしたらこんなのつけていてやったらと思って、妖怪にならんのだよ、それが。つくりよつたんじゃけど。もう細かいの。のっぺらにしてしたら、こんな風にならんけど、わざわざ。

市：今、ちょうど妖怪屋敷に寄ってきた時に、これが売ってたものですから。

A：ああ、あそこに出しとんよ。うちの商品よ。

市：これは焼いて。

A：焼き版。これはもう商品にならんけん。ここ、焼き版切れたんよ。押したら。

市：それで、こういう顔を。

A：そうそう。自分が思ったのを、想像で描いてみたんよ。

市：でも、こういうのは非常にいいですね。

A：これ、もっとボールペンの濃いので描いて、鉛筆でちょっと描きよつた、そこで。なんか面白いのおと思って。

市：これが本当の、この地域で思い描かれていた妖怪という、今はどうしてもキャラクターになってしまっているの。

A：いや、これもここ切れたけん、ここへこう、手つけて、杖だけでも入れてみてやろうかと思って、はっつけてな、してみたんじゃけど、そしたら版が押せんようになるんよ。版押して気付いたんよ。これまあ、頭ができれば、ちょん切って、落としてしもうたら値打ちないけん。マジックででも、消えんように描いたらええんや。鉛筆で、ちょこちょこつと描いてんのやったら。子どもは喜ぶかも分かん。これ、土産品にな、あそこへ出しとんよ。

市：そうですよね。これが山城のというか、上名のこなきじじいというイメージで売り出しても、それはそれでいいような気がするんですよね。水木さんが描いたものとは違うご当地妖怪としてのこなきじじいってこんなもんだったというのを、お話を聞いたことを記憶されていらっしゃる方がつくっているというリアリティが興味深いですね。

A：いや、若い者はあんまり、これもあの、あそこらへ、大歩危の岩や山をイメージしてあんなに、木をこう、とんがらせたり山に見せたりしてな、あれをそういう風に山で生まれとるけんにするけん、都会の人はあれ、こんななんんで丸にせんのかなと思うけど、今日も木を切ってきて、今日も行ってきたとこよ。その山に似たり岩に似たりしたのをこうして使うのが好きでな。

市：新しい商品が毎回来るたびに増えてるので、それ楽しみで来てるんですけれども。

A：こんなあまり売れはせんをやけど、ま、自分もボケ防止に思いつき思いつきつくりよる。こんな誰もアドバイスしてくれんけん、自分が思った通りや。まああの、こういう版をこしらえるのには、これはまあ看板のだったんじゃないけども、妖怪村っちゅうのも、こんなはんこしらえてきたんよ。そしたらそれはやっぱり、会のあれでな、了解得なんだらいかんことがあったけど、それも了解すぐくれて、使うてもええっちゅうことになった。そしたらまんなかさんも、あの、社長に言ったら、ええどうぞどうぞ言われたけん、それも写真撮ってきて、はんこ屋へ頼んで、今あそこへ、版押してんのそうじゃけど、色塗れ言うけん、色塗ったらちょっと色が濃ゆすぎたようなと思うんじゃないけど、やっぱり私は白木の仕事しとるけん、白木は塗ってごまかすっちゅうわけにはいかんのよ。昔から、白木でごまかししとらんけん。

市：もともとはお仕事としては何をされていらっしゃったんですか。

A：建具。木工業。家具屋さんへは、塗りでごまかしてな、すきまあっても、上手いこと詰めて、塗ってごまかせるんけん、私やはもう、白木細工で。

市：そうだったんですね。

A：そじゃけん、旅行に行っても、もう神社仏閣は、ように、みんな行ってしまうのに、まだじーっと、ああ、この仕事はやっぱり昔の職人で、かなりうまかけとるなあ、そんなの見て歩く。

市：では、見る観点が。

A：まあ、何年か前に、もう今から 300 年も前にそんなに、道具使うたんかなと思って、そんなことを考える。目だって、ちょっとこう、見る目が違うてくるような。自分がつくっても、こんな変木、わざわざ木を切って、こんなぐらいあてる木でもな、わざとこんな歪んだ木をあててるんよ。そしたら、専門の年のいった人や見たら、これまあ、変木よう使うたもんじゃなあって見てくれるけん。売れる売れんはもう別にして、この頃趣味にしよる。

市：本当に妖怪屋敷は地元の方の手作りのものをいっぱい売っていて、非常に興味深いですけれど。

A：もう細いもん、こんなのや、これはもうちょん切ってな、角をこすりよったんじゃないけど、もうちょんと首細うにしたらよかったのと思った。まあ、作ってみちゃあ研究したい。ちょっとくっつけといてやったら、また子どもの見る目が違うかなあと思って。これものつぺらの木に描いたら、もう値打ちないけん、なんぼか木集めてな、もう一

段重ねたらええんよ。それはまあ試作品じゃけん。これどうでよって、評価してもらわないかん。はっはっはっ。こんなのはお土産品につくってるようなとこないはな。パズルっちゅうのをな、デーサービスや持っていったらな、プラスチックよりかは木のパズルにな、先手がいくって。もうプラスチックは慣れきつとるだろ。で、やっぱり、木のぬくもりっちゅうのを、年いったデーサービスや行きよる人は、木を触りたいらしいな。ま、都会の人は知らんでよ。家も、今、コンクリばかりじゃなしに、木造はぬくもりがあると、體にええっちゅうところもあるし。そら、商売にしようと思ったら、大量生産にせなんだらいかんけど、趣味でしよるなら、自分のボケ防止やと思って。

市：貴重なお話をありがとうございました。

資料4-1 ほない会に対する聞き取り調査

日時 2013年1月14日（土）16:00-17:00

場所 八日市商工会議所

対象 A（ほない会メンバー）、B（商工会議所職員）

インタビュアー 市川（調査者）

市川（以下、市）：よろしくお願いします、私が現在、妖怪まちづくりについて研究しております、ここ数年は徳島県三好市で調査をしてきたのですが、最近是比较対象として様々な地域の事例を調査しつつ、博士論文に向けて研究しているところです。

A：三好はこなきじじいですね。

市：はい。今日はぜひ、八日市の取組みについてお話を伺えればと思っております。まず、活動が始まったきっかけのようなもの、何年頃にこういう動きが始まって、どういった方が関わりながら活動が展開していったのかという点について。

A：流れですね。

市：そうです。

A：平成11年に、商店街の活性化で、若手って、当時は僕らもまだちょっとは若手に入る部類やったんですよね。若手後継者を集めてグループをつくって、まちの、商店街の活性化の話をしてたんですわ。で、そこで、まあ、自分らの地域のことも知っとかなあかんやろうということで、郷土史を地元ではる方、先生を呼んで、郷土史の勉強会をしたんです。で、その時が出てきたのが、あの八日市という八の日に市が立つという、聖徳太子伝承から伝わってくるという話なのですが、その先生曰く、別に聖徳太子がきはったこともないんやで、そういう資料は一切ないし、という話を、ただ太子講とか色々あって、ここら辺、職人さんぎょうさん住んではったんで、そん中で聖徳太子にあやかって、そういう風な伝承ができてきたという話を言わはって、で、そっかと、もともとあるもんやなくて、ゼロからでもなんかできるんやなという、そういう昔から当たり前と思って、ほんまに事実かと思ってたことが、実は誰かがつくったことやという、まあ、そういうことがあったのと、その中で、その先生がほない商人というのがここら辺もともとベースに活動していたというのがあって、近江商人の源流になるのか得珍保内という永源寺の高僧の荘園がここら辺にあって、そこをベースに伊勢と交易をしていた商人群というのがちょっと変わってて、牛とか馬を何頭も連れて、キャラバンで、天秤棒で担ぐという近世の近江商人やなくて、ほんまの商隊を組んで刀刺して移動するという、そういう形態をしてる商人で『国盗物語』や何かでもほない商人というのが出てくるので、それをあやかって「ほない会」というのをつくろうかと地元密着で。で、そこから始まって、で、妖怪がいつ出てくるかというと、そんなんやってても、あんまりイベントとして商店街の活性化としては、何か

違う、全国的にも注目できることがないかなということで考えてたネタが、僕自身が青年会議所、JC 入ってた頃に企画してたイベントが妖怪がらみで、そのもともとのきっかけは今から 30 年近く前の初期の初期のワープロで、当時はそんな辞書機能もたいしたことない、ワープロソフトで誰でも嬉しいんで、自分の住所をまず打ってみたら、「ようかいちし」って打ったら、妖怪が死に到ると出て、すごいところに住んでるんだなって。それが、シャープの、うちのメンバーでも同じことがあって、「ようかいちし」って打ったら妖怪が死に到るって出たって話が、それで話盛り上がり、これ何かできるんちゃうかって、それで妖怪を切り口にしたイベントをしようかっていうことで。

市：もうだいぶ前の話なんですね。

A：もう、ここのきっかけは、具体的にイベントが何かっていうのを考えたのはもつとずっと後の方なんですけど、もともとの八日市っていうのを妖怪に引っ掛けるっていうのはその辺りで、平成 14 年に 2 年ぐらちょっと先進地を僕らも見学して、それでちょうど境港が有名になりかけた頃で、それと広島三次市、あの稲生物怪物語の。それと大分県の臼杵市のミワリークラブ、あそこもダジャレで始めてやったんで。三次行ったとき、三次の小田さんが、でも八日市って何もないんですわって、うちね稲生物怪物語にからめんとあかんさかいにそれに手足縛られたような感じやさかい、あんたらいいよね、何でもできるでって。で、何でもありかみたいな話になって、で、境港もやっぱり水木さんにかからめないとだめっていうあれがあるし。フリーハンドで絵が描けるんやったら、うちのそれがかえって強みになるのかなっていうことで、で、イベントとしては最初 3 本柱で考えて、ひとつはほんまに八日市、八日市って言っても、妖怪があるんかいなって、聞いたことないでって、ま、近くに阿賀神社があって、その太郎坊の天狗が有名くらいで、あとあまり聞いたことなかったんで、老人会とかに、当時はまだ合併前で八日市市やった時代に、アンケート調査を市内全部にかけて、伝承文化をいろいろ聞き出して、ホームページに 4 つぐらい不思議マップという、あれが老人会のあれで、あと 2 作品が東近江市になってからのやつが二つある。そこら辺を、意外と出てくるもんやなと、そういう伝承をちょっと掘り起こすという方向と、もう一つはやっぱり面白いことせなあかんねということで、肝試ししようかっていうことで、当時あの、888mある裏山を、ちょうど近江鉄道の駅の向こう側で、もともと延命寺という古いお寺があった山で、そこで肝試ししようかという、で、まあどうせ名乗るんやったら言うたもんがちやということで、世界最長にしようということで、世界最長の肝試しを。それともう一つは、絵画展という、子どもらに妖怪の絵を描いてもらって、妖怪ファンをつくるというのと、子どもらにも親しんでもらえるという、それが平成 14 年に始めて、そこで二回目に百鬼夜行というのを始めたんですわ。それが、まあ、市民参加でもっと気軽に参加してもらえへんかなという、肝試しが当時、グループごとにやってたので、せいぜい 200 人かそれぐらしか回れない

し、もっと誰でも参加できるようなものができないかということで、妖怪地百鬼夜行という仮装パレードをしようっていう、それが今の原型になってるんですね。ところが、その、ただ、聖徳太子の伝承の話だけではないんで、その伝承も八日市市民やったらほとんどみんな知ってはって、ま、四天王寺の瓦を焼くのに、瓦屋寺っていう山で瓦を焼いたのが始まりで、その時に八の日に市を立てなさいって聖徳太子が言ったのが八日市の始まりやと。実際、その瓦屋寺には古い瓦を焼いた窯元とかがあるんやけれども、それを何か妖怪にからめようということで、で、実は四天王寺の瓦を焼くには霊験あらたかな土が必要やと。で、ここは箕作山系で太郎坊もあって、もともと古墳群もあって、言うたら霊験あらたかな土地やったんやけど、そこは、当然のことながら、霊気がいっぱいあるんで、妖怪がいっぱい住んどったと、で、聖徳太子がここで瓦を焼かしてくれと、ここを妖怪地やと認めるから、妖怪の土地やと認めるから、その願い、申し入れが受け入れられて、八日市は妖怪地になりましたというのがイベントの骨子になったって、これも百年続いたらほんまになるかなあというぐらいの感じで、誰かが最初に思いついたことなんで、伝統っていうのも大事やし、それを守っていくのも大事やけど、ゼロからつくる、一からつくっていくという、そういうこともしていく必要があるのかなということで、新たにそれを付け加えて始めたのが今の流れなんですよ。

市：非常に興味深いですね。妖怪伝承を活用したまちづくりをするにあたって、最初にコンテンツがあるかどうか大きな分かれ道じゃないかと思うんです。遠野市も境港も三次も最初にコンテンツありきで、そこから展開していくパターンと、大分県臼杵市だとコンテンツよりもむしろ個人的に掘り起こした伝承に基づいていてという段階があって、またゼロからつくっていく八日市の事例があって、あと最近私が調査しているのが岩手県の新金ヶ崎で、ここでは毎年夏に幽霊・化け物・妖怪画展を開催していて、中には伝承に根差したものもあるのですが勝手につくったものも入り乱れているというのが面白いなと。そのところ、八日市のスタートのお話も興味深いですね。

A：軽いノリから始まってるので、商店街がらみで商工会もからんでくれはったんで。

市：商店街っていうのはどこの商店街にあたるんでしょうか。

A：最初はね、商店会連盟やったよね。八日市市内に、当時は9つあった商店街の連盟があって、そのメンバーが集まった。

市：では、基本的な目的は商店街の活性化というところが一番大きい。いっぱい人に来てもらおうと。

A：それとまあ、いろんなまちづくりのこととかやってて、けっこう JCOB も多かったんで、まちづくりで、商店街の活性化ってなんやって考えたときに、自分の住んでるまちが活性化せんと、商店街だけが活性化するということはありえへんよねということで、まち活性化させるんやったらまちづくりやで、もうちょっとだから売り上げに直結するんやなくて、まちをにぎわい持たせるようなことで、イベントを考えられない

かなってということで、範囲が広がって、売り出しじゃないやつをしようと、なんかあほなことやっとなでみたいなことでもちょっと注目されるのもねらいながら、この地名的にもよそが真似できない、八日市は妖怪地やってこれはうちしかできないことやさかい。

市：商工会議所も最初から一緒に活動をされていたんでしょうか。

B：まあ、そうですね。もともとの商店会連盟の事務局が商工会議所でしたので、それで活性化を考えていただいていたので、そこから派生して、その時点で手を引くわけにもいきませんから、発想に乗って面白いやないか、ということで、最初に世界妖怪会議をした時には、市もかなり乗り気になってて、ちょうど八日市市の最後ということで盛り上がったイベントができたんじゃないかなと。

市：ちょうど最後の年だったんですね。

A：そう、平成 16 年、世界妖怪会議が 3 回目やったんです。で、ちょうど合併で東近江市になるということで、何かさよならイベントみたいな感じで、予算も出はって、勝手に僕らが引っ張り出したみたいな感じもあったけれど、その時に境港の久留米さんとけっこう色々と親しくさせてもらって、角川にも紹介してもらって、こっちに来てもらったという。直談判に行って。だからもう、八日市最後やさかいにもう二度とこういうのはできへんさかいに来てくださいみたいな話を。でもお金ないですみたいな。

市：最初の段階では、八日市市の頃は市からも若干お金が出ていたと。

A：ええ。今でも出て。

B：今でも市から補助金はいくらか出てます。

市：それは、地域活性化のための補助金のような枠で。

B：ええ。

市：実際に始まる段階で商店会や商工会議所の中で、境港だと反発があったという話も聞きますが、八日市はいかがでしょう。

A：今でもあります。だからメジャーにはならないですよ、なかなかね。最初はでも電話あったもんね、妖怪なんかやめときとかって、イベントを告知したとたんに。

市：あったんですね。

A：団塊世代から上の方ってけっこうアレルギー持ってる方が多いなって。かえって、10 年ぐらい前、80 ぐらいのおじいさんとかおばあさんはけっこう面白がってくれはる方が多かって、老人会とかでも協力的な方がけっこう、うちのはなんか体験したか、知り合いとか親が体験してたりとか、そういう身近な人が多かって、でも次の世代の団塊世代前後ぐらいは、自分たちが育った時代がたぶん大正ロマンの時代の方が親にはって、って勝手に思ってるんやけど、大正時代というのは明治それ以前を否定しはるような形で近代化になって、その影響で育てられたのが団塊世代で、そういう方々は否定しはると。

市：そうなんですね。

A：勝手にこう思ってるんだけど、だいたいこう年代別にするとそんな感じで、まあ、ただ団塊世代でもすごく好きな方もいてはるし、協力してくださる方も多くいてはるんで一概には言えないですけど、毛嫌いしはる、アレルギーっていうかそういう方あるんですね。

市：なんかこう怨念みたいな認識でしょうかね。

A：おどろおどろしいみたいな感じの。

市：堤さんご自身は妖怪には最初から興味があったんでしょうか。

A：妖怪には興味はあったんですが、そんなに詳しくなかったんです。今でもそんなに詳しくないんですけど。口だけでなんか、巻き込んでしまったような。いまだに悪の権化と言われて。

市：では、本当にきっかけとしては、変換ミスというか、それが大きかったんですね。

A：はい。

市：で、この伝承の掘りおこしは興味深いのですが、この時はどういう方法をとったんでしょうか。例えば、民俗学者の方が入ったりとか。

A：郷土史研究してはる方とか、その関係の八日市文化研究会だっけ、そういうような郷土史とかそういう文化研究してはるアマチュア集団、まあ長老みたいな人のグループがあって、そういう人らがけっこう面白いやんかって言ってくれはって、いろいろな情報をくれはったんです。そういうのと、老人会のアンケートとか、あと、そういう人らのつてから呼び出されて行ったのもあったよな。四ツ家町っていう落武者がもとになった集落があるんですけど、そこのおじいちゃんが、ちゃんと本も出してる郷土史の研究してる人間なんやけどって言って、けどな、そういう妖怪の話とかは学者なんでちゃんと文章に残せへんや、お前書いとけみたいな、話といたるさかい、そういう裏の話を全部言うてくれはって。

市：その時にとったアンケートの結果などはまだ残っているんでしょうか。

A：残ってるはずです。どこかデータ化してあるんで、探したら出てきますけど。

市：地図見てももちろん面白いんですけど、その背景でどういう調査がされてああいう伝承が掘り起こされてきたのかは非常に興味深いですね。

A：老人会連合会に頼んで、各老人会にアンケート用紙を配って、それを回収した。それを分類別に分けて、面白そうなやつだけマップに入れたという。

市：では、まだお蔵入りしてる伝承も中には。

A：でもね、面白そうなのは全部地図に入れてしもうて、後はね、やたら多いのは狸や狐にばかされた話はすごく山ほど出てきて、重複した話が多かったんで、もっと2回3回もっとやるか、もっと10年ぐらい前にやってたら、もっと面白い話出てきたかもしれないんですが、そこまでちょっと掘り下げて僕らもやってなかったんで。

市：では、伝承の掘りおこし自体は最初の段階でやってからは特にやっていないと。

A：そうですね。

市：その時の情報をもとに発信しているんですね。ちなみに、その郷土史家の方はご健在なんでしょうか。

A：いてはりますよ。このガオがくるぞも色々とお手伝いいただいたりとか、出立式と帰着式にお祝いしてとか、けっこう仲良くさせてもらってて。

市：伊藤さんは最初から商工会議所の立場でかかわってらっしゃったんでしょうか。

B：ええ。

市：横から見ててどんな印象だったのかなと伺いたいですけど。

B：まあ、最初はですね、私も、みんな若かったのすご燃えてたところもあって、これ面白いなって、マスコミもすごいくいついてきよったんで、テレビもよく出はってね、あの時はほんまに、やりがいもあって燃えていたんですけど、やはりちょっと年をとってくるとだんだんイベントはしんどいなあとか、ちょっとマンネリ化してるのかなあということです。私も、このイベント関わってから、妖怪の京極先生の本読んだりもけっこうしましたが、中には気持ち悪いという職員もいましたけど。

市：今は年間を通してどのようなスケジュールになっているんでしょうか。

A：4月から年度始まるので、夏がメインなんです。7月の末から8月の頭のあたりで八日市は妖怪地っというイベントするんで、そこで今肝試しと百鬼夜行と絵画展をするんで、それに向けての、4月始まるとだいたい企画から準備に入るんです。それがおわると今度は11月に二五八祭りっという、二と五と八の日に市が立った。

市：入口の所に天狗のキャラクターが。

A：ああ、はいはい。あれ、二五八天狗っという天狗で祭りのキャラクターなんですけど、これはもう地域の言葉で市場言葉で二五八にしときましょっという、そういう言葉があって、それを青年会議所が、これはこんなものにしときましょ、なあなあにしとこうとか、値切りあいでもこんなものにしとくかってことで、二五八にしときましょみたいな、そういう地域言葉を残しながらまちづくりはできへんかなということで始めた二五八祭りがもう、40…。

B：30回は超えて、40回ぐらい。

A：そのイベントの一部で子ども向けに肝試しをするのがあって、最近は組み立て簡単にした肝試しコースをつくるようにしたので、そこで出店してやってるという。僕らも、JC時代のOBが多いのと、二五八祭りの実行委員長した人間が僕も含めて何人もいるんで、そこにからんでいたりとかで、やってて、それが11月3日なんです。それがおわると今度、ガオがくるぞ大作戦を節分の頃にやるという。

市：2月3日に。

A：今年はちょうど節分と重なった。第一日曜日を。

市：これはいつ頃から。

A：4回目やったっけ、5回目やったっけ。

B：4回目って新聞に出てたから、たぶん5回目。21年の2月かそこら。

市：けっこう募集はくるんですか。

A：20軒ぐらい。こっちもまわれるのは20軒ぐらいいし、ちょうどうまいこと20軒ぐらいいの。小学校低学年、小学校2年生以下のお子さんがいはる家庭というのをターゲットに募集。

市：イメージとしてはなまはげと同じような感じと考えて大丈夫なのでしょうか。

A：これも、もともとはこのイベント一番最初始めるときに、妖怪って、八日市ってガオがおるでなあって言われて、僕ら小っちゃい時もそれで育てられたんだけど、忘れてたんですよ、全然。ガオってなんやろうなってみんなで話してて、その老人会のアンケートにもガオってなんですかってみたいなのを書いたけど、結局正体不明のまま。

市：なるほど。では、ガオっていうのはいわゆるオバケに相当するような感じの、夜に何かやってるとオバケがくるぞ、ガオがくるぞみたいな。もともとあった言葉ではあるんですね。

A：そうです。もともと、ガオがくるぞって、悪いことしたらガオに食べられるぞとか、早く寝んとガオがきよるぞみたいな感じで言われたお化けの総称やろうなあと思うんですけど、それがあつたんで、で正体探しをしようと思ったけど、結局、奈良の元興寺にガゴジ・ガゴゼが出るというあれがガギグゲゴ系のお化けが全国に多いもんだとか、柳田國男さんは囃むぞからきたとか、ここら辺独特の説で言うと、ここは佐々木六角氏がもともとここにいて、信長が攻めてくるときの家臣に種村氏というのがいて、そのやりとりの中で、佐々木六角氏に対して種村氏という家臣が反論した時に、そんなこと言うてると蒲生が来よるぞと言うたのが、蒲生氏郷が隣りなので、これが蒲生がガオに変わったという説と、だから色々あって、あえて正体追求せんとか、だから、あくまでも正体不明で、ガオがくるぞ大作戦も、あくまでもこういう面をしながら廻るのはガオの使いであって、ほんまのガオは分からへんで、子どもさんらが自分らで想像して恐がりやという子どもらの想像力の方が実際の形にするよりはもっと、僕らも正体不明やてどんなんかみんなで話したけど人それぞれイメージが違うんやけど漠然としたって分からへん、それもそのままだいいよって。

市：怖い部類に入るので、やっぱり子どもは泣きますか。

A：もう泣きまくり。

市：そうですね。何人ぐらいで行くんでしょうか。

A：だいたい基本的にはガオの使いの主になるのが一人と眷属が二人という、怖いお面被ってるのが三人が一組になって家庭という。僕らが勝手にこれつくったルールなので。そんで、事前に会議所の方から親御さんに連絡とってもらって、その家庭の打ち合わせをちゃんとして、ちょつときつめとかちょつと柔らかめとか、でその家の独特の好き嫌いをしないとか、学校に行く準備をさっさとするとか、妹をいじめないとか、名前とそういう風なの聞いといて、で、玄関先でなんちゃらこっちへ来いと呼びつけて、みんな親に背中押されながら出て、泣きながら約束をするという。それから最後にこ

のお札を約束した後に、これは僕らがオリジナルでつくったお札で、このお札が見とるからな、約束破ったらガオが来よるぞって、その代わり約束守ってるとガオさんの霊力で守られるさかいなといって、貼っとけえ言うて帰るんですよ。

市：いい企画ですね。ガオの大作戦が始まる前、例えば10年ぐらい前の段階で、日常生活の中で今の親が子どもに対してガオが来るぞって言葉は使っていたりしていたんでしょうか。

A：勝手に言っていたんですけど、絶滅危惧種の妖怪になってたっていう、僕自身が子どもに使ってなかったんで、その反省もあって、しまったな使うとけばよかったなって、その頃はそんな非科学的なことで子どもを脅しつけて言うことを聞かすとかそういうのはって、というような感じで、やっぱり懇切丁寧に諭してちゃんと理屈を分からしめてと思ったんですけど、今考えたらあかんものはあかんとはっきりさせといた方が理屈じゃないんやというのを思ったので、そしたらあんまりみんな使っていないところも多かって、これは子育てもう一回見直しかけた方がいいということでこれを始めたのもあるんですよ。

市：このキャラクター自体が始まったのは、企画が始まった頃。

A：いえ、これはね、去年できたところなんです。着ぐるみでつくったのが去年で、ご存じのように滋賀県はゆるキャラ、ひこにゃんを筆頭にいろいろ有名な県やし、ゆるキャラじゃあかんねん、こわキャラにしようと、怖いキャラクターで独自のキャラクターをつくって、これあくまでガオさんのイメージキャラクターにしようと、だからあんまり顔の表情もはっきり分からん、怖いというイメージのつりあがった眼ときばと大きい裂けた口という、で角があるという、怖い要素だけをチョイスしたキャラクターで正体不明に近いような感じでイメージキャラとしてこれをつくって去年の夏にデビューさせたんですよ。

市：ということは2012年ですね。こっちの方が後なんですね。

A：そうです。これは後付けで。ちょっと親しんでもら部分も必要やといおうこと。

市：このこわい仮面のイメージはどのようにできあがっているんでしょうか。

A：これは、うちのメンバーでそういうのが好きなメンバーがいるんです。もう彼におまかせで、ほとんど紙粘土と段ボールでつくってしまうんで、かなりリアルな、全部手作りで、うちの売りとしては、オブジェ系とか仮面系がすごくクオリティが高いというか、その子一人がつくってんやけど。

市：静岡で拝見した記憶があります。大きな髑髏のような。

A：がしゃどくろ、あれは彼の指示のもとみんなで作って、あとは廃物廃品を利用したちょっとエコな妖怪で。去年もまた声かけてもらって、静岡で展示させてもらってたんですけど、その時はガオさんもデビューしたてで、これも持って置いてたんですけど。

市：また話が戻ってしまうのですが、先ほどの二五八天狗のキャラクターはいつ頃できた

んでしょうか。ほない会さんとは関係ないかもしれないですけど。

A：いや、もともとね、太郎坊さんの天狗というので、天狗がキャラクターになりつつあったんで、何年前やろう、25年ぐらい前。JC入って、初めて委員長した時に、あの天狗僕が描いたんですよ。それをもうちょっと人に受けるように、キャラクターをもうちょっと親しみやすい、親しみやすい天狗やなかったんで、それを二五八天狗にしようと、勝手に僕が描いて、しばらくずっと使われてなかったんですけど、なんかまたああいうのに使うから使わせてとかっていう話になって。

市：では、ゆるキャラブームが始まるずっと前ですね。

A：もう25年ぐらい前。

市：二五八祭りもそれだけ続いているという。

A：ええ、もう40回ぐらい続いていますわ。

市：それでは、また新しい企画も色々と考えてらっしゃるようなところも。マンネリ化というお話もありましたけれど。

A：まあ、組織のありようみたいなもんもこれからちょっと考えていかな。僕らも10年やって、最初の頃は面白いし受けるさかいに力任せのこともできたんで、けどだんだんみんな年取って無理もできへんよなあって、新しい人を入れなあかんやけど、それをどうしていこうかな。ほんまやったら大学生とかからんでくれはると一番いいんだけど、毎年毎年それやってたら絶対飽きてくるし、マンネリ化してくるんで、ある程度入れ代わりのある組織とからんでいくのがいいのかなと、でもなかなかそこがうまくいかないんですよ。

市：なるほど。今のほない会の構成員はどういった方々で何名ぐらい。

A：名簿でいくとね、20数人。もともとは商店街の若手後継者で始めたことなんですけれども、やっぱりメンバーでもマンネリ化してくることによって出ていったりとかするメンバーもいたんで、逆に商店街メンバーやなくっても、このイベントが面白いし興味あるし、で入ってきてくれるメンバーもいたんで、今は商工会議所の会員ということで、中心市街地の活性化ということがほない会の本来のお題目というか活動目標なので、それに賛同してくれる人ということで、商工会議所有志になってるんですよ。

市：先ほどのお話にもあったように、大学生とか若い世代が入ってくるとますます。

A：そうなんです。文化人類学みたいな学部がこの近くにあったりとかすると一番ありがたい。そこらへんが課題なんですよ。うちの。

市：わりと他の地域で課題を伺うと、行政がほとんどかんでこないからといったものも多いのですが、八日市ではその課題はなさそう、わりとコンスタントにつかずはなれず。

A：つかず離れずやね。どっぴりからんでくれることはないんで。

伊：やっぱり、合併してからは前の八日市市ほどはちょっと支援も、まあ、行政も財政が厳しくなっているので、補助金に頼らずに自立してやってくださいという話になりつ

つあるので、その辺でさっきお話しましたような二五八祭り、そんなんでちょっとずつイベントで収益を上げて、それを活動費にまわすということを少しずつ考えていただいて。

市：肝試しは入場料収入があるという。

A：そうですね。ま、あんまり子どもの財布からあんまり、子どもばかりが多いんで、1回100円にしてあるんで、夏の時で400人ぐらい、2時間ぐらいしかしてないんで、もったいないんですけど、一日だけ何で、400人ぐらい。二五八祭りの時はけっこう時間も長い子どもらも多いんで、1,000人近く通るんですよ。それを収益に、もうちょっと値段上げようとかという話もあるんですけど、やっぱり子どもの財布からとるのは100円ぐらいかなあと。

B：設営も値段を上げると凝らないと、これでこの値段でって。

市：特に大人が入っちゃった時に。肝試しの反応はどのような感じで。

A：最初山でやってる時は、グループ限定で事前申し込みしてもらってやってたんで、かなり凝ってたんで、滅茶苦茶怖かったと思いますわ。市街地までけっこう悲鳴が聞こえたみたいで、山全体から悲鳴が聞こえたんでとか言われて、長さも888mあって、リハーサルもやって、地元の子ども会使ってリハーサルをして、子ども会は事前にそれが通らせてもらえるというのがあって、やったんですけど、天気にも左右されると、雨天やったらね、前も台風が来そうになってたいへんやった時があって、それと商店街との人の交流というのがなかなか線路の向こうなんでね、これをちょうどこの湖東信用金庫という地元の信用金庫の本店が移転することになって、旧本店跡が空き家になったんですよ。それを借りて妖怪銀行みたいな信用金庫の建物をコースにして設営してやったんです。これもけっこうストーリーも組んでやってたんで、かなり精度の高いやつを、それから富士Qハイランドのお化け屋敷なんかも見学に寄せてもらうて舞台裏も全部見せてもらったりとかしてて、そういうのも取り入れながらやってたので、ただここも耐震補強もできてないので、改修に入ったまま途中で終わったので使えなくなったんです。で、次考えて、3年ぐらい前からやってるのが、うちのメンバーの中に段ボール屋さんがいて、それがあの、アメリカ海兵隊の空輸やらに使うような段ボールで、滅茶苦茶丈夫な濡れても何でもないようなのをつくってるんで、それを壁にして迷路型の組み立て型の肝試しコースを今つくってるんです。それだったらどこでも組み立てられるんで、それをここ3年ぐらい。

市：では、わりと手を変え品を変え、その年によって変化していく。

A：変化せざるを得ないという、条件が変わってくるんで。

市：3つ目の企画でやっている絵画展は、基本的には子どもの絵を展示している。

A：そうです。年齢は全然大人の方の応募でも受け付けますけど、市内の幼稚園保育園小中学校までは募集要項を直接学校に配らせてもらってるんで、毎年コンスタントに100点ぐらいは集まる。

市：テーマは妖怪の絵を描こうという。

A：えーと、厳密には世代間交流を狙ってたんで、おじいちゃんおばあちゃんに聞いたとか、お家の人とか近所の人とかに聞いたお化けの話を描きましょうという形やけど、応募は全く無視した感じで自分の思った通りのことを描いてきはるんで、もうあまり細かいことは言うてないんですけどね。

市：中にはありますか、実際に聞いて描いてそうなものは。

A：たまにね、何点かはね、不思議マップに乗せたような話を載せてくる子がいるさかいに、そういう賞を選ぶときにやっぱりここまでこだわってくれる子がいたらちょっと絵下手でもなんか賞あげたいなとか言うてる時が。

市：妖怪の絵自体は妖怪っぽく描いているのか、ポケモン系のが多いのかというところも気になる場所ですが。

A：マンガチックなのは少ないですわ。

市：では、どちらかというこのガオ系というか。

A：ちょっとオカルトっぽいのもけっこうあるんですけどね。

市：この絵は基本的に返却されているかと思うのですが、写真に撮ったりはしているんでしょうか。

A：一点一点は撮ってないんですけど、作品自体は預かってはいるんですけど。

市：返却は。

A：せず。

市：返却しないということで預かっているんですね。面白いところを厳選した展示をやったりするといいのかなと思うのですが。

A：なかなかそれもできへんで、預かるだけ預かってずっと山積み。ほんまはポスターなりいろんなところで、ホームページとかでこういうの出していこうかという話も言うてたんですけど、なかなかそこまで手が回りきれなくて。

市：私も今後の研究課題の一つとして考えているのが、地域社会で表象される妖怪の分類には興味があるので、絵を素材として、大衆文化からとったもの、民俗的なものなどを見られるといいかなと思いますので、いずれ拝見できればと思います。

A：分類もせずにバサッと置いてある。

市：こちらにいただいた資料の中でまだご説明いただいていないものがあれば。

A：去年の夏のイベントで、だいたいイベントの内容としては肝試しとオブジェ展、オブジェ展は最初は肝試しの中で使ってたんですけどね、みんな怖がってる最中でじっくり見てもらえないので、せっかくなのでオブジェ展を開催したり、去年からガオさんを、東近江のガオさんという名前にしてますけど、「探偵ナイトスクープ」で「ガオーさん」が出てくるので、ちょうど長原成樹が「ガオーさん」やり出したのとうちが「ガオさん」やり出したのがちょうど同じ時期ぐらいで偶然重なったんで、いっぺんオファーが入ったんですよ。で、探偵の内容としては、調査の内容としては、どうも長原成樹

が滋賀県でアルバイトしてるらしい、ガオさんみたいの出てるという話で取材にくるということで、実はうちも昔からの伝承文化の中でガオがあって、やってますにやという話になって、じゃあ、ガオさん人気やさかい、大阪まで来て脅かしてもらえますかという話して、大阪行って子ども泣かして帰ってくるという。一回出たことあって。

市：やっぱりそうやってメディアに出ると地域の知名度も上がって。

A：地域の知名度としてはすごいあると思います。子どもらも、絵画展の募集全部配るんで、今もう二十歳過ぎぐらいの子までは、このイベントを、もう 10 回やってるんで、小学校の頃からずっと馴染んで知ってるんです。そういう意味で言うと、もうひと頑張りすると、この子らが社会に出てくるから、そこらへんでもうちょっとからんでくれる人が増えるかなと淡い期待をしながら、その子らは別に妖怪にアレルギーもないし、ごく当たり前の存在として受け取ってますしね、こういう子らがどんどん社会に出てくると、ちょっとまた違う展開もあるんじゃないかと。もうちょっと頑張らなあかなと。なるかどうかはちょっと分からないですけど、子どもらは確かにもう知ってて、八日市は妖怪地って言うたら東近江市内の子どもやったらたいてい聞いたことあるし、中には 1 回目の肝試しからずーっと二十歳超えて今 20 代真ん中やけど毎年肝試し来てるという子もいますからね。そんなんで、あとほんとう、けっこう受けるのが妖怪メークの体験コーナーという、これも百鬼夜行で仮装パレードするのに、そのままメークしてすぐにでも参加できますよっていうのをやってるんですけど、当初そういうつもりでやったんやけど、今どっちかって言うと小さい子どもがメークしてもらいとうて、お母さんも面白いさかいに、ベビーカー押してきてこの子に妖怪してあげてみたいな。

市：小さい子ってそんなに小さい子なんですね。

A：あの、ベビーカー乗ってる小さい子にちょっと鼻黒くてひげ描いて、きつねみたいなので、そんな感じにしたってという話があったり、小学校ぐらいの子どもらとか、けっこう浴衣着て、ちょうど盆踊りの時と一緒にするんで、その子らがばーっと、来ては、妖怪のメークして走り回ってるという。

市：こういうイベントだとなかなか入場者数だとかはかれないかと思うんですけど、傾向としては増えているのか横並びぐらいなのか、印象としてはどのような感じでしょうか。

A：どうなんやろう。効果測定がしづらい。いつも、大きい聖徳まつりという盆踊りと共同開催してるんで、これに対してどんだけ来てくれはるかというのはなかなか読み取れないし、なかなかやっぱり仮装パレードも、当初に比べて参加者がちょっとずつ減ってきてるんで、もうちょっとこれはやめて、去年の夏からはガオさんと歩くパレードに、ゆるキャラを、こわキャラをつくって、それと一緒に妖怪の恰好をして歩きましょうという、どっちかと言うと見て楽しむ人の方が多いなあ。たまには親子で参加してくれはる方とかあるんですけど、でも、毎年毎年妖怪のネタを考えるのは大変で、3

年ぐらい連続で参加しはると、次たぶんネタが切れたんやろうなと。ちょっとう、一般参加しやすい、何かこう、若いグループとかうまいこと引っ張り込めると、もつとにぎやかになるんやろうなと、京都の大將軍商店街もうまいことやって。こっちの仮装パレード参加してもらったり、うちが参加してたりしてたんで。

市：京都ともつながりがあるんですね。

A：うちけっこう、ハブ的な要素あるよね。妖怪のまちづくりのサミットも、世界妖怪会議と絡めて、妖怪サミットをやったのもうちで、けっこうどことも交流が。

市：地理的にも。

A：どっちかっていうと、いちばん東の端っこになるんですよね。なんでかしらんけど、関西が多いでしょ。ああいうイベントやってるの。

市：確かに。

A：青梅はやめはったって聞いたんで。あそこも、参加してもらって、一回目の雪おんなの時には行かせてもらったりとかして。

市：コンテンツとしてはいいんですけどね。

A：後はほんまに遠野とかあっちの方はあるんでしょうけど、そういうちょっとイベント的にアホっぽい感じでやってるっていうのは西に多くって。

市：妖怪パレード系は西に多いですよ。始めるにあたっては、三次の方をご覧になったりしたんでしょうか。

A：妖怪パレード。たぶん、三次よりうちの方が早かったと思う。あの、三次も世界妖怪会議しはったあれがきっかけでは。で、うちも妖怪パレード参加してて、あそこもうちの企画と同じで、妖怪サミットみたいなものをしはって、それに出てくれと言われて僕も行って、その前から交流はあったんですけど、あそこは「稲生物怪物語」とマンガの「朝霧の巫女」の二本立てでやってはったんで、かの様相はなかったんです。うちもいっぺん来いなという話をして、遊びにもきてはって、そんな中で妖怪パレードもしはったんやと思いますわ。それまでは、最初お付き合いした時はそんな話全然なかったですし、どっちか言うと青梅が最初に妖怪パレードをしはって、青梅一般参加ではなかったんですけど、それをね、一般参加にしたら面白いんじゃないかなあと、で、世界妖怪会議の時は妖怪の恰好してきたら入場料 500 円引きっていうのをやってたんで、その時はすごい多かって面白かったんですけど。

市：こういうのが始まったのは 2000 年前後に各地で同時多発的な現象だったので、その影響関係が分かると面白いですね。

A：どっちかって言うとなんて後発やったんで、やってる時は境港はもうブレイクしてましたし、ちょうど盗難騒ぎがあったりして、その後有名になったあとで、三次も稲生物怪録で何回か、3 回ぐらいしてはったあとぐらいですね。臼杵はもうちょっと前から、齊藤さんがやってはったんで、ネットで検索かけたらこちら辺が引っかかってきたんで、こっちから連絡とって、いろいろと地域間交流にもなるし面白いという

話で、今でもいろいろとお付き合いさせてもらってるんですけど。

市：ほない会自体は団体としては法人ではなく、任意の団体でやってらっしゃるんでしょうか。

A：そうですね。任意団体になりますね。前に法人化の話もあって、NPO にしようかともあったんやけど、そうすると縛りがきつくなりすぎて。

市：ガオがくるぞ大作戦も無料で。

A：そうですね。全部基本的に無料なので、どこかで有料にしたいんやけど、最初にタダにしまうと、後からお金とれんように、なかなか。お金とるとそれだけ責任も。まわるお家はやっぱり気を利かせてくださって無料でいいんですかって言うてくださる家もあるし、前はお宮さんの関係みたいな感じでお酒とかあったりとか。

市：さっき、図書館から歩いてくる途中に獅子舞が回ってましたが。

A：今日はここら辺そうです。お正月からずっとここら辺まわってますので。ガオがくるぞ大作戦の出立式と帰着式やるのは図書館の前のあのお宮さんなんです。あそこで。ガオにはなんのいわれも関係ないんですけど。ほんまは聖徳太子の関連のある一宮さんというお宮さんがあって、そっちでしようとか言うてたんですけど、あっちの宮司の方がノリがよかったというか、絡んでくれはる。

市：ぜひ、一度拝見してみたいですね。

A：それではまた、ガオの使いになってもらって。あれやるとけっこう癖になるみたいです。はじまりは分からへんけど、いつの間にか地域に根付いたってなると。

市：ガオも、百年ぐらい続くと、「なまはげ」なみの知名度になってくる可能性もあって、そこら辺も楽しみですね。

A：どうなるか、途中でやめてるかもしれないし、あれですけど。ま、僕らの狙いとしてはどっちかって言うと教育に、普段の生活の中でも使ってもらえるようになるのが、最近、たまにね、ほんまに使うてはる若いお母さんがいはるんです。聞くことあるんですよ。そんなことしたらガオ来よるでって。使うてはるやんって、ちょっとは効果が出てきたのかなって。

市：いいですね。それは、絶滅危惧種だった妖怪を再生させたという意味では。

A：このイベント自体がどうっていうよりは、こういう風な躰、教育に地域の伝承を使ってくるというのがただ一ついいかな。それとやっぱり、やっぱり商工会議所がバックアップやってるんで、経済活性化にもつながらないとだめ、一番の課題はそこなんですけど。

市：目に見える効果はないですか。今のところは。

A：マスコミは相変わらずよう取り上げてくれはるんで、年にテレビ、ラジオ、新聞やら10回ぐらい色んなところで出てくれはるんで、その分、この八日市という地名は広がるんですけど、常設のほんまは欲しいんですよね。それこそオブジェやらあって、そこを企画展みたいな感じにして何かできる基地的なことがあるといいっていうので、

ちょっと今、新しい取り組みで、僕らがやってるんじゃないですけど、「フェアリードア」っていう、「かりぐらしのアリエッティ」みたいな、ああいうので、家の軒先とか森なんかにちっちゃい妖精のドアとか、知り合いの芸術家関係の人がつくってやってはるんです。で、妖怪もコラボしようなという話をいただいて、うちの店、アピアの店には、名刺の裏に書いたんですけど、僕自身は「うんちく茶坊主」という妖怪があるんで、うんちくばっかりたれとるんですわ。そのうんちく茶坊主の家がサンプルでつくったのがあって、それをどっかに、植込みの下にでも置いといて、子どもらに探してもらおうという。何人かうちのメンバーもオブジェつくってるんで、それをからめて、そいつの家なり門なり何かがあって、まちの中を徘徊しながらそういうのを探してもらうのが面白いやろうということで、ちょっと進行中の新しい取り組みとして。

市：回遊性というか、常設的な何かができるかもしれないという。

A：ほんまはオブジェ展をしようという話でこれやり始めたんですけど、なかなかうまくと定着しないままきたので、ちょうどこれが、カナダで始まったらしくて、フェアリードア、妖精の扉ですね。これが何かトレッキングコースになるらしくて、なかなか見つけられへんので、世界各地からトレッキング来て、妖精のドアを見つけて歩くというのがあるらしくて、それを取り入れてきはったんで、こっちのオリジナリティで、妖怪と妖精なんてまあ同じようなもんやし、という話で、妖怪と妖精のコラボでっていうと、八日市の商店街でこういうことやると面白いかもしれんし、まあうちのメンバーの友達が宮大工さんがいるんで、こういう家つくったるでとか、言うてくれはるんで、そこもちょっと早く進めないと。イラスト描いてくれって言われて。それともう一つは、南ドイツとかで、クランプス、南ドイツ、オーストリア、ハンガリーあたりの伝承である怪物なんですけどね、いいことしてるとサンタクロースが来てお菓子くれるんやけど、聖ニコラウスが来てお菓子をくれると、サンタクロースのモデルですよ。でも悪いことしてると、クランプスが来て連れてかれるか鞭でうたれるという、こういう伝承があって、これはもともとキリスト教伝来以前の聖ニコラウスまでの、クランプスっていうのは妖怪みたいな感じで、わりとその、歳神様で年に一回来るという、そういうよそからやってくる妖怪みたいな感じで、角が生えた、ものすごいおどろおどろしいかっこうした奴が馬車を引っ張ってくる。これがすごいパレードになったって、まちをあげての大イベントになったんですよ。で、これがけっこうそのクランプスのおっかけやってる人もいはるぐらいで、各町々でそれぞれやるんで、年々人気が出てきて、ものすごいクオリティの高いお面をかぶってやってはるんで。

市：ハロウィンみたいな感じのパレードになると。

A：はい。まあ、YouTube なんかに載ってますんで、一回パレードを見ていただければ。それを、そういうところにこれ、ガオがくるぞをもっていけたらなって。最初、ガオの使いのパレードをだーっとして、悪い子はおらんか言うて、見に来てもらうような

とこまでいけると。

市：観光資源として新たな展開を見据えて。

A：やっぱり、怖い、子どもしつけしたいお母さんやは子ども抱いてきて、見てみ、おるでえっていう話で、見てもらうという、そういう風にならへんかなあと。そこも、だんだんクオリティが上がってきて、今、村とかの在所の、向こうの方の地域コミュニティの中の若い子はみんなそれを着たがるという風になってきて、もう何十人というパレードなんですよ。観光客もこれを見に集まってくるという、そこまでいけたらいいなっていう。

市：ガオがくるぞ大作戦は、家でやっているということは、なかなか見学という関わり方はないですね。

A：そうなんです。20 軒ぐらいだけなんで、それをマスコミに取り上げてもらって話題になったというだけやったんで、それで去年から出立式というのを始めて、僕らもお札を清めてもらうのと、霊力を宿してもらうのと、僕らもやっぱり廻るやさかいに、子どもの健やかな健全を祈りながら、僕らもちょっと穢れてるさかい清めてもらおうかと、ガオの使いも。それでお宮さんの方の宮司さんをお願いして、で、ちょっと家に来てもらうのには怖いけど、ちょっと見てみたいという人向けにその出立式見に来てくださいということで去年から始めて、まだそんなにインフォメーションしてないので、ばらばらとしか来てあらへんのですけど、それもちょうと今年はそれからもう一歩進めて、こわキャラの東近江のガオさんとあと二体ぐらいは怖いガオの使いを置いて、お宮さんにその間、僕らが市内を回ってる間、常駐してもらってて、お札欲しいけど家に来てもらうのは怖いという人に来てもらおうかと、そういう感じなんです。それがだんだん発展していったって、クランプスみたいなパレードになったらいいなという思いは持ってる。なかなか足腰が付いてこないんで、企画だけ言うて。

市：でも、広がりか。

A：やっぱり躰とからめると、こういうのができるかな。まったく僕らが考えてたのと、まさかヨーロッパで同じ趣旨でやってはると思ってなかったんで、考えたときはサンタクロースの裏版やということで、思ってたんですよ。サンタクロースを信じるくらいの子どもにはガオの使いも効くやろうという話を言うてたら、聖ニコラウスがいい子はお菓子もらえるけど、悪い子は鞭で打たれて連れ去られるという、やっぱり人が考えることは洋の東西問わず一緒なんやなあという、なまはげもそうやし。

市：教育に還元できていくというのは健全な状況というか。

A：やっぱり、なまはげも PTSD やないけど、そういうのを心配しはる方もけっこう、で、うちもあくまでも希望のあった家に、しかもきちっと打ち合わせして、行きますよということで、そんであんまりばっと広がるんやなくて、で、会議所の方からは終わった後、訪問した家庭をどうでしたかっていう話を、ま、今のところみんなよかったよかったと言うてくれはるんで、もっとやってくれてもよかったとか。凝りひんのかとい

う話。

市：毎年という方もいらっしゃるのでしょうか。

A：あることはあります。

市：慣れないんですかね。

A：いや、でも、親が楽しんではるんです。子どもはもうびびって待ってるんですけど、いい子にしてみましたとか言うてるんです。

市：やっぱり何回来ても怖いことは怖い。

A：もう、小学校2年生までやさかいと言うてるんやけど、終わったら、もう年齢も上がったさかいと思ったら、次、弟に来たってというのがあったり。

市：このチラシは学校で配るわけではないですね。

A：市の関連のこととか、手近なところ辺、知り合いのところに貼ってもらったりとか、そんなに大々的に募集してないんです。けっこう、けっこうというか、かなり面白いですよ。子どもには災難やけど。

市：こういう恐怖体験もないと。

A：ちっちゃい時にこういう体験しとく方が、かえって心が強くなるんちゃうかなって勝手に思ってるんですけどね。ちょっと外で打たれたらへなっとなってもうて、そのままというのもあるんで、ちっちゃい時に打たれ強い子にしといた方がいいかなって、それは勝手に思ってるんですけどね。けっこう子どもの精神ってタフなので、僕らもほんまに泣きじゃくってるし、次の日ほんまどうやったかなってすごい心配なんですけど、全然大丈夫ですね。けどガオさんだけは怖がってるという。

市：興味深いお話をありがとうございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

●「ガオ」を聞いたことがありますか。

	建部 瓦屋 寺町	東市 辺町	市辺 町	西市 辺	西市 町	金屋 町	上中 南	建部 上中 町	土器 町	浜野 町	清水 町	御園	上羽 田町	下羽 田町	平石 町	玉緒 地区	瓜生 津町	上大 森町	大森 町	池田 地区	中野 町	東中 野町	今代 町	小脇 町	旭町	今堀 町	柴原 南町	野村 町	平田 地区	上平 木町	合 計
はい		9	12	1	1	10	2	6	2	4	9	12	1	8	1	7	3	3	3	3	3	1	1	5	2	1		1	2	9	122
いいえ							1	1			1	5		1										3							12
無回答	2							2			1			1			1										1				8

- ・近くに森があり夜になるとガオ（妖怪だろうと思う）がくるぞと言いつたえできました。
- ・今でもひ孫に言う事聞かんと、早う御飯食べんと（ガオ）が来よるぞーと時々言っています
- ・おばあさんがゆうてました
- ・雪の降る夜はきつねやたぬきのなきごえはきいてました。私の生れた家は山のちかくです
- ・「ガオ」特に姿かたちはわからないが恐い物（動物）を言ったのです。
- ・親からよく聞かされて私も親になって子供によくいいました。
- ・言いつたえにきており今でも孫に言うこときかんとガオーが来るぞと言っている。泣いた時等すぐ泣き止む
- ・自分の子供にも云った事がある様に想う
- ・ガオーを今も孫に言っています。
- ・子供を驚かす時に、よく「ガオ」の話が出たことがあった。「ガオ」の実態は何なのか判らなかつたが、「ガオ」とは化け物か妖怪の姿ではなく、その鳴声から出たことだろうと思う。
- ・良く父母にそんな事してたらガオが来よる。とかガオに言いつけるほん、と言ってたしなめられた
- ・幼少期は近江八幡地区で育ったので、はやくねないとガオがきてくねられるぞとよく驚かされたことがありました。
- ・「ガオ」と言う話しは一年を通じての事ですすが特に雪ふりの晩、猫の盛の泣声の事と思う「ガオ」が来るで早く寝よと言われました。天井裏には此の頃大ねずみがいて「ガオ」の声は小供には振りが来るほど恐いそんざいで散って蒲団にもぐり込み子供が熱を出し常に（ひやきよう丸）と言う子供薬を座位していた。猫とねずみがあばれだしそこそ稲妻と共に雷の来襲です。大人でも一人でいたら気も冷やします。大人の夫婦が此の頃地震を作りだした。これとようやく朝を向えますコケッココ
- ・私達の子供の頃、ヤンチャ云うたり、いう事をきかない何時時も何時も、ガオの話でおこられた記憶がある
- ・何時も聞かされていたが、何んのことかよく分らない。「ガオ」とは化物の総称ではないかと思っていた。
- ・ダダを決めて何時迄も泣いていると（ひつらく泣く）と「ガオ」に食べさすぞ」「ガオ」が出て来るぞ」と云われていた（金屋地区）
- ・子供の頃祖母から良くききました
- ・子供の頃親の言う事を聞かなかつたりするとガオが来るよと言ったり、泣いたりするとガオが連れていってしまうぞと言われた。
- ・ガオといふ言葉は私が小さい頃明治初期生れの祖母から「駄々をこねるとほらーそんな事言ふてたらガオがくるぞ」とよく言はれた事が有りました。ガオとは鬼かなにかの事ではないでしか
- ・ガオは夜ねる時に早ようねんとガオがきよるぞと言われた事を思い出しました。
- ・ガオは此の世で一番こわいやつと聞きました。
- ・脅し文句、子供の頃、手を前にだし手首からだんと下にしてガオーと脅かされた
- ・（ガオ）と言うのは架空の動物で子供のしつけのため使われた用語です。
- ・河童でないかと思う？
- ・ガオ＝河童（ガワタロ、ガオタロウの別名ある）日本各地に河童伝説は非常に多い。日本各地で一番良く古くから知られた、川や池、沼など水界に住む日本特有の妖怪。頭の上に皿を乗せ、童児の姿をしているのでおかつば頭と言う。「ガオ」はキュウリが大好物でー寿司のキュウリ巻をカッパと言う。性格一相撲を好み滑稽な所があるが、非常にどう猛で川に遊ぶ子供を溺死させたり、馬や牛、鳥らを川に引込み殺し食くすと言はれる。古来日本固有のどう猛妖怪で田畑、家畜を殺害するので農民百姓より一番に恐れられた妖怪。水神祭や川、沼祭には、「ガオ」にキュリーを供へて水難の被害最小を祈る地区が多いと聞く。
- ・ガオとは現在ねこの事思ます。2月3月頃になく
- ・子供心に架空のものと思って居ました
- ・よく親から言うことを聞かんと「ガオ」に食べさすぞと云われたのは記憶にあります
- ・みんなも昔親から言ふ事をきかないとガオがきよるわるい事をしたらガオがきよるとよく言われてきて今又自分が親になって子供にも同じ事を言ってきた。みんなも何の事かわからないけれどガオガオとねこがなくのねこのなき声かなの・・・
- ・あまり夜おそくまで田んぼで仕事をして居るど「ヨタカ」（ガオ）が出てさらって行かれると云うように聞いて居りました。
- ・私の実家の隣りに楠木の古木があつて何でも子供の頃に父から聞いたのですけれど300年ははっきり経っていると言われていました。いたずらしたら「隣のあの木から「ガオ」が出るぞ」とよく言われました。本当に夜になるとガオガオとよく鳴く声が聞えて来ました。夜は外え出るをおびえていたのが記憶に残って居ります。
- ・私が子供の頃に良く言われた言葉です。悪い事をしたらガオーに食わすと言われてしゅんとなったものでした。
- ・「ガオ」とは特定の妖怪の名ではなく、恐いものの総称であつた様に思う。例えば、猫の泣き声をして聞いても「それガオが来たからはよ寝よ」とか
- ・悪い事をすると「ガオ」に食わせるぞ、云う事を聞かないと「ヨナイボ」につれて行つてもらうぞと良く親に云われた。
- ・親から子供、幼児の頃「泣いたらガオが噛みに来るよ」と言われました。「ガオ」とは獣の啼く声の事だと思います。
- ・『泣いたら「ガオー」が「ガオーガオー」と、ほえながら食べに来るから、泣くな！』と、おどされて育つたし、又、私たちも子供を、同じことを言うて育てた。
- ・夫は家の外から、鳴き声（ガオーの）出したり、雨戸をたたいたりして、演出したものだ。ナツカンイ〜。ただ「ガオー」の形については、聞いたコトがない。
- ・（ガオオ）と聞いた様に思います。
- ・[ガオー]と言っていました。昭和30年代自分の子供が幼児のとき使っていましたから（ごく普通に）。親の言うことをきかない児に軽いおどしの意味で色々な場面で。
- ・犬上卸、稲枝方面で子供が云う事を聞かない時に大人が云っている。
- ・子供心に（ガオ）は人をさらう鬼の様な怪物だと想像していました。夜にガオが来ると言われると親にしがみついて震へていた事を覚えています。
- ・何事でも子供に言う事を聞かす時に「ガオーツ」が見ているぞ」とか「ガオーツ」が来るぞとか「ガオーツ」のところにやるぞと言われたものです。やっぱりそれを言われるとこわかって言う事を聞いたように思います。
- ・私の父と子供の頃はよくお話をしてくれました。ガオを聞いた時は私が夜中によく歯がいたくてねれない時父は、ガオが来るから早くねないと、と言って泣くのをおつかせ、ほほをなせてくれた事を思い出します。
- ・祖母よりよく言うこと聞かんと「ガオ」が連れていくぞと注意された。黒い布を頭からかぶってよく悪いことをすると「ガオ」が出たぞとおどろかされたこともあった。
- ・子どもをしかるときに「言うこときかんとガオーがきよるぞー」とおどしたものです。どんなよういかはわからない
- ・昔は私達の若い自分には暗い所へ行つたらガオが出てきよると云はれた事は覚えてゐる。平木の昔言葉で田んぼから帰りに人から別れる時にさようなの代りホンジヤマーと云ふ独特な挨拶もあつた。
- ・よるなくとガオ、ヨナイボがくるといわれた
- ・昔（ガオー）とは正体不明の話で今から思へば忠告のいましめではなからうか。泣くと親から早く泣きやまんと（ガオー）が向いに来てつれて行くどと言つてなめてくれた事を思い出します。又友達の所へ遊びに行つて来ると言ふと（ガオー）がまっているよと早く帰つてこいよと忠告をして来れました。
- ・ガオは子供の頃よく聞きました。
- ・よく悪い事をしていると暗い所へつれていかれて（ガオ）が出るぞとおどされたものです。昔で云う（ガオ）とは（こわいやつ）と云う意味だと思います。

●「ヨナイボ」を聞いたことがありますか。

	建部 瓦屋 寺町	東市 辺町	市辺 町	西市 辺	西市 辺町	金屋 町	上中 南	建部 上中 町	土器 町	浜野 町	清水 町	御園	上羽 田町	下羽 田町	平石 町	玉緒 地区	瓜生 津町	上大 森町	大森 町	池田 町	中野 地区	東中 野町	今代 町	小臨 町	旭町	今堀 町	柴原 南町	野村 町	平田 地区	上平 木町	合 計
はい		2				4		1			2	4				1		1						2						1	18
いいえ		7	10		1	6	3	4	1	4	5	12		9	1	3	3	2	2	3	2	1		6	1	1		1		8	96
無回答	2		2	1				4	1		4	1	1	1		3	1		1		1		1		1		1		2		28

- ・「ヨナイボ」についても時々聞いたことはあるが、何だったかは全く判らない。
- ・子供頃母親の生家へ行くとおばあさんがよく「ヨナイボ」が出てきよるから夕方早く帰えてくる様に言われた事を思い出しました。母親の生家は今代町
- ・聞いたことないのですが、気ナイボ、苦ナイボ、ヨナイボ良い事ではない様に思います
- ・ヨナイボに付きましてわ昔わ極薬もなくうろうろと走り歩く人もあってその事を云った事でしょう
- ・使用例「大きな西瓜ができた「ヨナイボ」されるか分らんぞ」
- ・ヨナイボ(ケナイボ)が夜おそくまで遊んでいると来るぞとか笛やハーモニカを夜にならずと来るぞとよく言われたものです。
- ・昔の御澤神社に大きな柳の木がたれさがっていました。よく夜になるとホタルをつかみに行きました。ふとたれさがった枝に光っているのでホタルと思いつかみかけるとポーと消えてしまいます。ゆうれいかなと思える位消える時遠くに白く線が残りました。あれがヨナイボかなーと思いました

資料4-3 金ヶ崎まちづくり研究会聞き取り調査

日時 2012年6月8日(金) 14:00-16:00

場所 大松沢家住宅

対象 A(金ヶ崎まちづくり研究会代表)、B(金ヶ崎まちづくり研究会メンバー)

インタビュアー 市川(調査者)

市川(以下、市): 私が研究しているのが、妖怪を活用したまちづくりや博物館活動についてなのですが、これまでにフィールドとして見てきたのが、徳島県三好市や大分県臼杵市や岩手県遠野市などで調査をしてきたのですが、その中で金ヶ崎の妖怪幽霊画を武家屋敷で展示しているという記事をどこかで拝見いたしまして、その時から興味を持っていたのですが、今回連絡をした次第です。今日、お話を伺いたいのは、これまでの取り組みや活動のきっかけなどについてお話を伺えればと思います。はじめに、きっかけについてですが。

A: この、金ヶ崎まちづくり研究会という団体なのですけども、ここの結成の理由っていうのがですね、なぜ、そういう会をつくろうかってなったかって言うと、まあ、飲み仲間なわけですよ。飲み仲間というか、いろいろ話したりとかして、ほら話語ったり、夢物語しゃべったりとかして、で、それで、話だけじゃとっても、もったいない。いい案とかも出てくるわけですね。で、それを実現していこうということで、まちづくり研究会っていうのを立ち上げて、その中で、イベントをやっていきましょうっていう、その、できるだけイベントはいっぱいやっていきましょうっていう中の一つですね。

市: その、まちづくり研究会が結成されたのは何年なんですか。

A: 平成19年。

市: 平成19年ということは、もう5年目ですね。

A: そうですね。まず最初、ここの建物、これが空き家になってて、雑草ばあって背丈ぐらいの雑草で、屋根もない状態だったんですよね。ないというか、雨降ればざぶーんっていう状況で。で、持ち主が福島の方なんですけども、すごくいい場所だし、伝建群にとっても拠点でもあるし、門とかもいいんだけども、内部に江戸時代の庭園、そこに築山があるんですけども、これも外からじゃ見れないということで、何とかこれを見せてあげることできないかっていうことで、門を開いたと、それがまず最初の活動です。

市: 伝建に指定されたのは。

B: 平成13年。

市: ということは、伝建に指定された後も、あまり手入れされずにそのままになっていたということなんですね。

A: そうです。そうです。空き家だったんです。

市: では、それまでは公開もせずに。

A：ないですね。ま、もちろん、持ち主いなかったし、門開けても、見れるところじゃなかったの、雑草、草がひどくてね。草刈りやって、まず見せましようっていうのがスタートですね。

市：それが最初の、この金ヶ崎まちづくり研究会のメインの活動だったんですね。

A：そうですね。で、今度、屋敷の方も貸してくれないかということで、こっちの屋敷も整備して、ここを拠点に活動していきましようっていうことで。

市：今の拠点としては、この建物が中心になって活動していると。

A：そうですね。

市：まちづくり研究会は特に町とは関係なく、任意の団体のような形で実施しているということですね。

A：そうです。ただ、一か所、旧坂本家の指定管理者にはなってるんです。

市：そうなんですね。で、その中の活動の一つとして、今日中心にお話を伺いたい妖怪の展示をしてもらっしやるということで。

A：もともと、幽霊・妖怪については興味深いところもあって、幽霊・妖怪のことを語らせたならば、右に出る者はないというぐらいの研究者です。

市：ぜひぜひ、語っていただければと思います。そこで、幽霊・妖怪に目をつけるというか、その経緯が非常に興味深いところなのですが、例えば徳島県三好市の場合、こなきじじいの伝承の発祥地がその地域だったということが、郷土史家の調査によって明らかにされたことがきっかけになっているのですが、それとはまた違うきっかけが地域毎にあると思うのですが、金ヶ崎の場合はこういったところに発想の原点があったんでしょうか。

B：研究会の前にね、もう、20 も歳違うのね。この、若い人たちが何人か集まって、ごそごそやってたんだよね。で、その時に何かやりたいなって言って、あの、不思議展というのを最初にやったんですよ。その時にとにかく変なものを何でもいいから持ってきてって行って、展示会をした時に、私が妖怪の情報を提供して、彼に、高杉さんに妖怪マップをつくってもらったんです。

市：そういうのがあったんですね。

B：それから、毎年やってもいいよなって話になって、それで、こじつけたのが江戸文化の一つだっていうんでね。

市：妖怪が。

B：妖怪、で、実際、全生庵で毎年やってるわけで。それを、うまい、うまいっていうか、どのように表現をしていったらいいのかっていうようなことから、いずれその、そういう展示会をしてるという。しかも 8 月 1 日からやってるのに触発をされて、まず一つは江戸文化だということですよ。それからもう一つは祖先供養だという。で、私らも 8 月のお盆の期間に、祖先供養で。それから、もう一つは金ヶ崎のまちがちょっと元気ないので、商売繁盛・五穀豊穰という、そういうのを付け加えていったんですね。だから、

ここがその、武家町、伝建のね、武家町というところの、武家のいわゆる江戸時代の文化というのに触発されたのが一番ですね。で、それと同時に、何か他でやってないことをやらないと、だめだという、だめだというかね。受けは悪いんですよ。

市：確かにこの活動を知った時に、他の地域の妖怪でまちづくりしているところと何か違うなというような感覚を持ちまして、そこが興味を抱いたきっかけではあったんですけども、そこはもう意図的に、あえて他の地域ではやっていないという観点でということだったんでしょうかね。

B：そうですね。あの、同じことしてもだめだというよりも、結局、江戸文化の一つをきちんと見直してもらいたいということの方が、意味的には強かった。五穀豊穰、商売繁盛、祖先供養は後から付け足したので、第一はその江戸文化だということだね。江戸文化の一つとしてこういうのがあるんだよというのを、この町と結び付けて考えていきたかった。

市：最初の不思議展の時に妖怪の情報を提供されたということですが、その時の妖怪はこの金ヶ崎に伝わる妖怪だったんでしょうか。

B：そうです。金ヶ崎の妖怪を、たまたまりストアップを私がしてたので、そのここにこういう妖怪がいる、ここにいるという。

市：へえ。それをマップに。

B：それをマップに。

市：その時のマップというのはどういうものだったんでしょうか。

B：ありますよ。

市：あるでしたら、後ほど拝見させていただければと思います。

B：後ほど、どうぞ。

A：もっこくっぞだな。

市：けっこうな種類の妖怪は、やっぱりこの地域にも伝わっていたんでしょうか。

B：ああ、そうですね。結局、ありきたりですけどね。

市：例えば、どんな感じの話が。

B：そういうのを、実は谷川健一さんにそんなのどこでもあるって言われたな。同じ質問されて。しゃべってて、そんなのどこでもあるって。

市：谷川健一さんとお話されたんですね。それは貴重な。その妖怪の伝承は口頭で伝わっているものか、それとも文字で残されてきたものかというのは。

B：3分の2が、結局捉え方ですけど、口頭で話したものを文字化したものから拾い上げたのと、それからあと、私の体験。

市：その、体験というのがまた面白いですね。

B：というのは、じいさん、ばあさん、親父から、お袋はあんまりしゃべらなかったけど。

市：実際に聞いて。

B：うん。聞いたので。そのことはよく分かんなかったんだけど、大きくなって、妖怪のこ

と、化物のことを考えるようになってから、あっ、妖怪のことを言っているんだみたいなね。

市：なるほど。その中で例えばどんなお話が。

B：あんまり、あの、ギャーギャーって子どもが泣いたりすると、かます男が来るぞっていうのがね。で、がっとなって、かますさ入れてね。

市：そういう、ちゃんと名前を憶えているんですね。やはり。

B：それは孫にもしゃべってたから、親父がね。

市：そうなんですか。

B：だからむしろ、しゃべってた、そう、俺が言われたことよりは、孫にしゃべってたことの方が多いかもしれないな。

市：そういう話が。では、千葉さんもずっとこの辺りにお住まいで。

B：あの、私は金ヶ崎に生まれ育って。

市：そうですか。その意味では、そこで実際にお話を聞いた妖怪というのは、確かにこの地域の妖怪といってまぎれもない事実ですよ。

B：だろうと私は思ってるんだけどね。例えば、山犬がいます。本当だったんだけど、山犬がいるっていうのになって、実際うちの姪を食われたんだよ。

市：えっ。そうなんですか。

B：それは俺、山犬かどうか見たわけじゃないから。ただ、朝行ったつけ、姪がいないっていう。傷つけられたとかで。で、それは山犬だって言ってるわけ。で、山犬ってなんだべって言ったら、山犬なんだって。なんだかんだ。

市：なるほど。その頃は、今よりもやはり山というか、森が鬱蒼としていたんでしょうかね。環境として。

B：あっ、あの、今、交通整理。私は農村の生まれなので、周りが全部田んぼだったんだけど、生まれたところはね。だけど、交通整理前だから、ノッコっていうのがあったんだよ。いわゆる空き地。ちょっと盛り上がっていたり、それから畦畔も太い畦畔があったりというね、そういうのが、いわゆる自然のままの田んぼがまだたくさんあって、で、そういうところに茅がいっぱい生えるからさ、茅刈りをして、備えていくとかね、何とか。かつこよく言うと、里山がちょっとこう整理されたような、地域っていうかね。昭和 30 年代の話でしょうかね。

A：その頃はいっぱいいたんだべな。

市：そうですね。その中でも地域ならではの、これはという妖怪はありましたでしょうか。

B：で、結局は、何か自分が思い出したのは、全部、思い出したりすることは、全部、何かに、あの、水木さんのところに全部、やっぱり集約されてるよね。

市：やはり。そうなんですね。

B：だからやっぱり、改めてすごい人だなと。

市：どこをこうつついても、何でも描いているのは確かにすごいところだなと。その分、影響力も非常に大きいので。

B：そうだよね。それ全部整理。

市：なかなかその呪縛から逃れるのは非常に難しいんですけれども。

B：難しいよね。それは。

市：その点、今、私が三好の方でどのような調査をしているかといいますと、実際にこなきじじいが描かれる前の段階で話を聞いていた人がいるわけですね。で、それが民間伝承として語られてきたのですが、その語られていた時、例えば小さい頃にその話を聞いた人がどのようなイメージを持っていたかというのを実際に絵に描いてもらって、そのイメージと実際に現在のまちづくりで使われているこなきじじいは完全に水木しげるが描いたものなんですけど、そのイメージのズレを見つつ、そのどっちかを否定するわけでもないんですけれども、その二つを考えた上で、妖怪が一つの地域社会の中でどうやって変容され、受容されていったかというのを見ているところがあります。

B：あー、なるほど。

市：その観点から見たときに、この実際に水木タッチではない妖怪画をどうやって展示しているのが非常に興味深いなと、なので、ここで出発点として絵というメディアを選んだきっかけ、出発点、まあ、展示するというのも大きいとは思いますが、そのこのところはこういった感じなのかなというのが気になるところなのですが。

B：あの、私がね、あの、思ってるのが、私以上に水木ファン。

A：いやいやいや。

B：隠れ水木ファン。ところが、絶対それが出てこないんだよね。そこがね、私いつも感心してるというか、頼もしいと思ってる場所なんですよ。

市：なるほど。

A：別に反発する気も何もないんですけど、それ、今の話聞いた通りで、その、こなきじじいって今話出ましたが、まったくその通りなんですよ。こなきじじいっていうと、イメージするのが水木さんのこなきじじい。

B：もう、それしかないもんな、極端に言うよね。

市：そうなんですよ。

A：全部の妖怪を定義化してしまったとかね、そんな感じしますね。

市：無形文化を有形化したという。

A：そう。

市：功績は大きいんですけど、その反面というところですよ。

A：そうそう。ちょっと悔しいなっていう部分もある。だから、できるだけ、なんだ、描こうとしているものは外して、で、地域密着型で、この地域の妖怪は何なんだろうなと、ということです。そういうのを意識しますよね、やっぱり。

市：なるほど。地域にとっての妖怪。

A：やっぱり、その、水木さんも実際に目で見えてたのかどうかというのは分からないんですけども、その、イメージして描いているものっていうのもあるじゃないですか。そうすると、よく憶えてるのはぬりかべの話なんですけど、水木さんが戦時中に、椅子、じゃない、切り株かなんかに座ってて、よし、じゃあ、山の中を歩いていて、ラジオで、水木さん語ってたんですね。山の中歩いてたら、もう疲れて疲れて前に進もうと思ってもなかなか進めない。で、ちょっと切り株のようなところに腰を下ろして、煙草に火をつけて、で、よし行こうかという、またそこから進むことができると、あれはぬりかべだったんだという話だったんですけど、その、エピソードですよ。なんか、あっ、ちょっと普通の日常生活の中であまりなかったことが今ぽっと起きたということが妖怪に結びつけることができるのかなと。そこにあの、石のぬりかべがいたわけじゃないですよ。

市：そうですよね。

A：だから、その、変だな、あそこの林の中ちょっと気持ち悪いな、なんかこんな妖怪いそうだなとか、そういう風な想像を働かせて。

市：きっかけとして。その意味では、最初は妖怪って、形がないものというか、目に見えないもので、活用しようと思っても本来できないものだと思うんですけども、それでもこういう形で活用できているというところが今の地域社会の問題で見たときに面白いのかなと思っています。私も、研究のフィールドが民俗学ではなくて芸術学なものですから、芸術の観点からどうやって妖怪を見ていくかというところで、最近はやりの地域密着型アートプロジェクトの調査をしていたものですから、その中で妖怪ってどんな意味を持っているのかなという、作者がいないという、共同体の中で育まれてきた妖怪を地域ならではのものとして形にしていくかという視点で見たときに、また新しい妖怪の見方ができるんじゃないかなと思っています。で、この活動自体は何年から始まったものなんでしょうか。これが1回目ですよ、平成18年。その前の年に「不思議展」でしょうか。

A：前の年だったかな、その前の年か、それぐらいですね。不思議展。

B：前年。

市：で、今年が7回目ということで、6回の間に何か変化はありましたでしょうか。活動の変遷も含めてですが。

A：変化。みんな上手になってくるよね、やっぱり。上手になってくる。

B：何回目からだか、あっ、どうぞどうぞ。

A：いや、そのぐらいですよ。上手になってくる。

市：これをぱっと見たところ、一回目は幽霊画ですよ、ほとんど。それが、ちょっとずつヴァラエティに富んできてるというのか、どうかという印象を受けますが。ちなみに、これを描いている人たちというのはどういう立場の人たちなんでしょうか。

A：もう、ランダムですよ。

B：知人を、われわれの知人を頼って、頼ってというか、もう、声をかけて。
市：毎回描いている方もいらっしゃるのでしょうか。
B：あっ、最初から描いているの、うちの会長がずっと。
市：そうなんですね。最初の頃、渡辺晃さんも描いてますけれども。
B：渡辺さんも1回目から。
A：描いてますね。
B：彼は手塚治虫のファンなんです。よく絵を見てください。
市：あー、なるほど。
A：そういうことだったのか。
市：中には、実際に作家というか、画家として活動しているような方もいらっしゃるのでしょうか。
B：一人でねえか。3回目ぐらいまで、あの、一人。小原さんという。
市：確かに。後は、地元の方が多いんでしょうかね。基本的には。
A：あっ、その方もですね。Fさん。
市：そうですか。
A：その方も、無形文化財なみ、級の人。
市：えっ、そうなんですか。実際に、この金ヶ崎に伝わる妖怪を描いている割合というのはどのくらいなのでしょう。
A：あんまり、テーマを特に設けてないから、自由にみんな描いてくるんで、どこの地域のものとかではなく、頭の中に何か猫のお化けとかって浮かべば、それを描くっていう、自由な感じですね。
B：この間、Wさん（調査者注：金ヶ崎まちづくり研究会メンバー）が来て、偶然いろいろ、今年も季節きたねなんて話した時に、彼はやっぱりその、彼の今までの中での、あの時のあれが気持ち悪かったとかね、それから、あの、未だにあの夢を見るとか、同じ夢をね、何回も見るところのものを彼は描いてる。
市：やはり、自分の体験を。
B：あと、会長はね、会長はこの地で、今見えているものっていうのか、なんかそういう感じ、私自身は思っているのね。
市：なるほど。
B：あの、全然この地域から離れたものではなくて、ちょっと会場がここだったりね、というところ、ここからの、この地域の視点で、こう彼自身が今まで体験してきたこと、考えてきたこととうまくこう組み合わせさってくるというね、なんかそういうことを私自身は感じている。
市：舞台としてこの地があると。では、最初のテーマの設け方として、特に金ヶ崎の妖怪っていう形ではなく、募集の仕方としては妖怪画あるいは幽霊画みたいな形で、括りとしては大きく募集をかけるんですね。この図録を作成する上で、ここに図版解説が掲載

されているんですけれども、こちらはどなたが執筆されていらっしゃるのでしょうか。

B：それはずっと私が。

市：そうなんですね。これはどういう観点で解説を執筆されていらっしゃるのでしょうか。

B：これ、私は絵を描いたのは去年からで、それ以前は私がこの部分を担当するっていう風に決めてましたし、それから、あの、全生庵の幽霊の本ありますよね。あれを、一応真似て書いてるつもりなんです。

市：なるほど。では、解説というか。

B：私自身で見たのをですね、見て感じたものを私自身が書いてる。かなり苦痛にはなってきました。

A：あはははは。

市：毎年続くと、そうですね。でも、だいぶそのおかげで読みごたえが。

B：あと、この、金ヶ崎の風土というね、私が書いてる。

市：何か、不思議なカタカナの名前の妖怪が出てきた回があったんですけれども、ここの金ヶ崎の風土5で、ニノデェノニネゴっていうのは、この地に伝わる妖怪でしょうか。

B：ああ、そうですそうです。いわゆる、巨大蛙ですね。ニノダイというところの、えーと、蛙という。あの、ニネゴと書いてるのは、美しい年の子どもという、ミネゴという風に言うらしいですね。それを地元ではニネゴという、ニノデェノニネゴという。で、この場所も、あつ、ここにいたんだという場所もね、確かめに、一応は行ったつもり。

市：それはそれは。ある種民俗誌的な観点も踏まえて。

B：これ、これです。

市：なるほど。いいですね。

A：それです。

市：また、これは多分水木しげるが描かない感じの、これがまたいいですね。

B：うれしいねえ。さんざんね、松ぼっくりでねえかって。

市：いやいや。でも、こういう解釈というか、妖怪は本当は多様であるべきだと思うんですけれども、それをこういう形で実践されていらっしゃるというのは非常に興味深いところですね。これを実際に見にいらっしゃる方はどのくらい、毎年増えていたりするのでしょうか。ロコミとかで。

A：だいたい、何人ぐらいだろうな、300人。

B：来てつかもしれないね。

市：だいたい会期は10日ぐらいでしょうか。

A：一週間、二週間ですね。

B：最近ちょっと長くなってる。

市：今年はぜひ会期中に見にこようかなと思っているんですけれども。

A：ああ、ぜひ。

市：さっき、坂本家住宅でお話伺った時に、展示の仕方もどういう形で展示しているのか

なというのが気になっていたもので、聞いてみたところ、わりと場所に合わせて、障子に展示したり、天窓というか、天井に展示したりというお話をされていたので、その展示の仕方ですぐ工夫されていらっしゃる点があれば。

A：ああ、まあ、思いつきで、部屋を見て、その、これはこっちだべ、こっちだべってね、相談しながらやってますし。

B：まず、彼がね、展示は、ほぼ 100%。こっち持ってこいと言え、はいつて持ってくるぐらい。

A：いやいや。

B：こっち、周りはね。高杉さんが全て、ぱっとう、作品を見て、あの、この部屋とこの部屋で、こういう風に組み立てるってやってる。

A：そう言ってもらえると、なんかかっこいいな、なんか俺。

B：それがまたね、すごくいいですよ。

市：現場もぜひ見てみたいんですが、これまでの展示現場の写真などは撮っていらっしゃるのでしょうか。

A：あります、あります。

市：もしよろしければ、後ほど拝見させていただければと思います。で、坂本家住宅が公開になったのは最近ですよね、確か、新聞記事を見ますと。

A：ああ、はい。2年で、今が3年目になりますね。坂本家はあっちの方。

市：はい。

A：そうですね。

市：では、展示会場はずっとあそこだったわけではないですよね。

A：違います。えっと、ここでもやりました。ここ、同時開催なんですけど、同時開催で、2年ぐらいやったかな、あつ、1年か。

B：3年。同時開催は3年。

A：同時開催3年。

市：では、平成21年からということでしょうか。

A：白糸まちなみ交流館って、あそこでもやったことがありますし。

B：大沼家。

A：大沼家でもやりましたし。

B：あとはここだね。

市：すると、その意味ではある種の回遊性を促せるような仕組みとして使っているんですね。

A：そうです、そうです。

市：いらっしゃる方の反応はどんな感じでしょうか。どういうのを期待して見にいらっしゃるのかなど。

A：楽しんでてもらってるんです。子連れのお客さんもけっこういて、来てもらえば子ども

にも描いてもらいますよ。筆と紙置いといて、そうするとだいたい鬼太郎とかそういう系統に、一反木綿とか、だいたいそういうの描いていくんですけれども。ただ、反応はどうなんだろうな。ま、冊子もつくってるんですけれども、興味のある人はね、もうとことん見てくし、冊子も買ってくし、あとは、そうでもない人はぱらっと見て。

市：これに合わせて、怪談の会とか、そういうのは特に企画としてはやらずに、展示一本でやってるんでしょうか。

A：そうですね。今のところは、展示、収集。

B：最初に、何回目だかの時には1回やったんですよ。お話をしますと言った時に、誰も来ないからそれはそれで終わり。

市：そうだったんですか。

A：ま、周知方法もね、こうやって何回かやっていくうちに、だんだん。

B：あの、感じとしてはすごく、こう知れ渡ってきたなという、気持ちはありますね。

市：この地元で。へえ。毎年続けて恒例イベントというか、恒例の展示としてこれかも続けていく計画なんでしょうか。

B：私としては10回をまず、10回目までは。

A：今6回、今度7回目。

市：7回続けるのも大変なことですよ。

A：ま、今回幽霊ということであれなんですけど、幽霊とあと、馬展。馬展もこれ、あの、伝説みたいなね、話になってくるから、ひずめの跡とか、そういうので、かなり妖怪チックな、伝説的なあれですよ。だからぜひ馬展というの、そこに図録ありますので。なんかそういうドラマがやっぱある。

市：その目に見えない伝承というか。

A：今、妖怪と馬と、あとはひな祭りとかね、そういう風なので、月一イベントみたいな感じでやってる。その中の一つ。

市：金ヶ崎まちづくり研究会は今メンバーは何名くらいいらっしゃるんでしょうか。

A：23、4人。

市：では、けっこう、けっこうと言っていいのかわかりませんが。

A：ええ、けっこう。

市：毎月やるといっても大変でしょうけれども、皆さんやはり、他にお仕事されてらっしゃって、休日だったり、お休みの日だったりに活動しているという形で。

A：そうです。

市：年齢構成でいうと、どのくらいの世代の方が一番多いでしょうかね。

A：えー、まあ、今の20何人というのは、作業員として管理で関わってる人もいますので、管理だけやってる人もいますけども、で、イベントを組み立てたりとかするのは、その中の4、5人ぐらいでやってますね。その管理やってる人たちは、シルバー関係の60代70代の人もありますし、あとは、一番多い年代、もうバラバラですよ。多い年齢。

市：では、一番年齢低い人ですとどのくらいでしょうか。

A：低い人だと、20、あっ、30 いてるのか。30 か。

市：でも、30 代ぐらいからは構成員がいらっしゃるんですね。

A：そうですね。30 代も二人いますし、40 代も二人。そんな感じですね。

市：皆さん、ほぼ金ヶ崎に住んでいらっしゃる方なんではないですか。

A：ほぼ、ほぼですね。

市：全員というわけではなく。

A：全員じゃない。

市：ただ、近隣の。メンバーは増えてますでしょうか。傾向としては。

A：立ち上がりから関わってた人たちはそのままですけども、あとは、その、作業関係をお手伝いもらってる人たちは、一時期からするとちょっと減ったんですが、今また新しい団体、新しいというか、ボランティア団体でこの地域を守っていこうというので、そのメンバーの中から、だぶってるというか、人たちがいるので。

市：なるほど。では、先ほど向こうで公開している時にいらっしゃった女性の方もメンバーなんではないですか。

A：そうですそうです。メンバーです。

市：やはり、公開するとなると、管理というか、そこにいらっしゃる方は絶対に必要になってくるので、それは大変ですよ。その中でも、主に妖怪の企画に携わってる人というのが。

B：一応骨子は私がつくって、で、坂本家の彼女が、事務的な。で、骨子はつくって後は相談当然するんですけど、こうしようとかって。

市：ちなみに、これは普通の人でも参加できるんじゃないですか。

A：大丈夫ですよ。郵送で送ってもらえれば。

市：そういう形の遠方からの参加者もいらっしゃるんじゃないですか。

B：いや、隣町の人でね、東京に行った人がいるんだよな。で、その人は、郵送で、友達の。

市：そういう参加の形も可能なんですね。

B：だから、一回参加すればもう、ね。

市：だいたい、名前見れば分かると思うんですが、描いてる方もリピーターが多いんじゃないですか。

A：そうですね。後は、盛岡ですよ。

市：さすがに茨城からは。

A：いないですよ。描いたりもするんですか。

市：前はけっこう描いていたんですけども。毎回、新しい参加者は。

A：いますいます。

市：どんな感じで新規メンバー入ってくる感じでしょうか。

A：もう、一本釣りですよ。

B：なんか、絵描かないとか、知り合いになると、まず、絵描けるとか。

市：そこから、でもそうやって輪を広げて。これもまた、描いていく人が増えると、いいデータベースというか、貴重な資料になるんじゃないかなと思うんですよね。実際に絵を描いてもらう時も、なかなか絵なんて描けないよって言って描いてもらうの大変なんですよけれども。

B：うんうん。そうだよな。

市：そこをこういう企画を通して、本当に自分が考える妖怪観というか、妖怪をどういう形で絵に表していくかというところが、今後ますます広がっていくと興味深いですね。これにあわせてまた、こういう活動を通して新しい金ヶ崎の妖怪伝承が発掘されたりとかいうのはありますか。

B：あのね、かなり、付け足しをしていかないとだめだと思って。一応目録をつくっているんですね、私が。妖怪目録をつくってて、それに付け足さなきゃいけないのが、結局日常っていうか、今までそういう観点で見なかったんだけど、なんかこういう作業したり、妖怪のことをずっと考えたりすると、あっ、それが妖怪だったのかみたいなことがあって。あるいは、あの、こういうことやってると、いところが俺こんな話聞いたんだよ、みたいなね、そういうことがあって、あの何十という数が増えていくわけじゃないんだけど、ポツリポツリとね。

市：なるほど、それはいい波及効果というか。

B：で、それが、例えば、あの、僕の家はずっと西の方なんですけど、生まれたところは、そこさ行く途中に 10 人が 10 人怖いって言う場所があるんですよ。あったの、昔。今そこちょうど高速道路が通って、よく分からなくなってしまったんだけど。で、実は、私のいところがばあちゃんから聞いたって言うので、そこ行くと、あの、朝早く行くと、声かけられるんだ。林の中から。で、ご飯食べてきたかどうかって、と、ご飯食べてきたって言えば、そのまま通っていいとね、で、あっ、違う。ご飯食べてきたかって言うと、食べてきたって、ね、そうずっと、膳の湯飲んできたかって聞かれるんだって。次。あの、食後に。

市：膳の湯。

B：膳の湯ってね、白湯をね、茶碗で飲むんですよ。今もうほとんどなくなったけど、茶碗で飲む風がある。それを膳の湯って言うのね。で、膳の湯飲んできたかっていうと、飲んできたっていうと行けって言われる。飲んでこねえって言うと、殺されるっちゃうわけ。無茶苦茶。

市：ええ、怖いですね。だいぶ極端な。

B：で、あの、腹裂かれて、ご飯全部とられるっていう。

市：という話が伝わっていると。

B：という話をばあちゃんから聞いたことがあるって言うんです。

市：それはまさしく妖怪ですよな。

B：妖怪ですよ。で、私はダルの仲間じゃないかと思ってる。

市：確かに。

B：ね。

市：では、それを言われないうちに、ちゃんと食事はしっかり最後までっていう感じなんじゃないかな。教えとしては。そういう形で伝承が増えていくという現象が生じていくのは面白いですね。

B：最初はね、何やってるのか分からなかったんだけど、私的にはこういうのを、図録をつくって見せたりあげたりすると、なんていうところからそういう話がね。

市：確かに、いきなり聞いても話は出てこないけど、こういう土台があると。

B：そうそうそうそう。

市：こういうのがあると出やすいというのは、妖怪の話についてはそれありますよね。

B：みんながそれが妖怪だということに気が付いていくとかね。

市：これも非常に興味深い観点ですね。またそのデータベースというか、目録が増えていったら、新しい地図に落とし込んでいくと。

B：そうです。こう付けていけばいいなと。

市：かつては柳田國男などがそういうことをやっていたんでしょうけど、また時代が変わって、臼杵などはそういうところがあると思うのですが、実際に地域住民が地域に残っている話を新たに掘り起こしていくような作業、妖怪伝承の新しい段階というか、そういうのが地域文化を考える風潮の中で、妖怪もそういう段階にきたのかなとは感じているところなので、それが妖怪にどっぷりつかって関心がある人だけじゃなくて、何となくこういうきっかけがあつてそういえばって振り返るような人たちが考える妖怪の層が厚くなってくると面白いんじゃないかなと思うところなので、今みたいなお話伺うと今後楽しみです。

B：もっともっているんだよね。たくさんね。

市：人の数というか。いるはずなので。

B：人の数。で、見境がつかなくなる。

市：これじゃ収まらなくなってしまう。私も、いずれやりたいのが、その地域地域の、例えば、金ヶ崎妖怪事典みたいな形のをいろんな地域でつくっていけば面白いだろうなとは思っているところで、それは水木しげるに描いてもらわんじゃなくて、その地域の人描いた妖怪図鑑をつくっていくと面白いというのは前々から思っているのですが、それには時間がかかるので。その意味では、蓄積していった段階です。

B：去年、若い子が訪ねてきたんですよ。坂本家に。で、何で訪ねてきたかっていったら、これをやってるというので、話をしたいというので来て、色々言ったら、彼女自身も、水木しげるの妖怪はまず、ちょっとこう置いといてという話になって、で、私がつくった目録を、これで北上の子だったんで、北上版をこれからね、やっていきましょう、いきませんかというので、彼女と話して、すごく意気投合しちゃったんです。で、それ

を、今まったく同じように、私も旧市町村のね、そういう妖怪事典のようなものをつくって、岩手県全部が網羅できれば面白いなど。

市：面白いですね。それは、本当にやってみたいなど思ってる場所なんですね。でも、金ヶ崎はそこに一番近いところにあるので。

B：今、その入り口をどこに求めるのかという、それをやるためのね、で、あの、ちょっと出かけたなら、その地域の図書館に必ず行くことにしているんですが、民話・伝説と市町村史をまず読むと。で、実は昔話というのは、昔話という風に言われていて、しゃべっていることは実は妖怪の話だったり、伝説も、まったくそうなんだけど、そっからどれだけつりあげられるかという、その整理をしなきゃないと思ってるわけ、私は、今ね。

市：岩手県はその意味では豊富なので、うらやましいですね。妖怪自体はもともと興味は昔からあったんでしょうか。

B：いや、それは水木さんと出会ってから。

市：やっぱり、きっかけは。

B：基本的にはね。

市：どの段階での、例えば貸本時代とか、少年マガジン時代とかいろいろあるかと思うのですが。

B：最近なんです。そんなにね、私はあの、水木さんと、水木さんにとっていうか、どうのこうのっていうのではない。ただ、私あの、昔話、伝説が好きで、ずっとそういうことを見てきたつもり。と、それからあとは『遠野物語』を一応は一回以上は読んだと。で、そういうことの中から、水木しげるという人がいて、で、「ゲゲゲの鬼太郎」があるんだけど、そこで、なんかボンと鬼太郎さんにこう、ボンと飛び越える。

市：では、最初の興味の対象としては、やはり昔話とか伝説とか、そちらの方だったんですね。

B：そうですね。

市：それはもう、お若い頃から。

B：もう、単純にそれが好きだっていう話。単純に昔話、伝説。伝説って不思議じゃないですか。ね。ただそれだけの話。さっき言ったように、馬の足跡がべたっとなつてるといっただけの話なんだけど。うん。

市：今私が鶴の伝承がどういう形で地域に伝播していったのかというのを調べているのですが、鶴も出発点は『平家物語』という大きな物語の中に出てくる歴史上の存在というか、それが各地に伝わっていくと民間伝承に変わっていくというところがあって、で、字際に鶴塚が残っていたりというのを辿りながら研究しているので、非常に興味深いですね。

B：頼政と関係がありますよね。

市：関係が深いですね。

B：あの、掛け軸がほら。

市：何かあるんですか。

B：うちで今掛けている掛け軸が、三位頼政が書いてあって、で、変な鳥がいてさ、お地蔵さん、弘法大師かなんかが拝んでる。

市：でも、鶴はもともと鳥なので。トラツグミなので、何かそういう寓意があったりするんでしょうか。

A：トラツグミが正体なんですか。

市：鳴く声鶴にぞ似たりける、なので、本当はあれは鶴ではなくて、鳴く声が鶴に似た化け物なんですけど、いつの間にかそれが鶴になっちゃったという。

B：もう少しちゃんと理路整然といきたいなと思っていたところで、6月は三位頼政かけた。

市：それはそれは。

A：10回目標にしてたってさっき言いましたけど、その、7回目8回目あたりになると、こうさっきも疲れたってなるけど、こういう風な話でね、わざわざこう訪ねてこれると、よーしってまた。

B：なるよな。

A：20回まで頑張るかなって。

市：何よりですね。

B：あの、岩手日日新聞というのがね、岩手県内域に出てる新聞社の記者が、うんと励ましてくれるんだ。

市：そうですか。

B：かなり、疲れた時期に。だけど、大丈夫だ、10回やったら、文化賞あげるから。ただそれだけで10回を。

市：でも、本当に文化賞ものですよ。

B：だけどほら、他の人たち何だか分からないわけだ。彼女はやっぱり民俗学を専攻してきた記者なので。すごくそういった意味では思いを寄せてくれる。

市：この、意味を十分に理解できるという。

B：10回やったら文化賞あげるからというので、僕は当面10回頑張る。もらうもらわないは関係なくね、10回やろうぜって。

市：でも、その蓄積が大事ですよ。

A：鶴の尻尾はやっぱり蛇みたいになってるんですか。

市：蛇みたいになってるんですよ。ただあれも、蛇の頭の方を描くのか、蛇の尻尾を描くのかっていうので、江戸時代に論争があったようで、あれは画工が面白おかしくするために蛇の頭に描いているけど、尻尾が蛇っていったら普通に考えたら蛇の尻尾を想像するんですよ。なので、そこら辺は絵師の遊び心があったんじゃないか。で、本によっては尻尾が狐とか、色々組み合わせがあって、面白いなと思っているところなんです。

A：一晩じゃ足りないもんね。一週間ぐらい合宿で話し合わない。

市：ぜひぜひ、今度夏にでも。ちなみに、高杉さんの妖怪の原体験ってどういう感じでしょうか。

A：原体験というのは。

市：原体験というのは、興味を持ったきっかけとか。

A：やっぱ、一番最初、妖怪という言葉を知ったのは多分水木しげる。小学校の頃から、テレビでもやってましたし、あと単行本もね、俺、2冊目に買った本が『ゲゲゲの鬼太郎』なんですよ。1冊目は『ど根性ガエル』なんですけど、なんでそんなの憶えてるんだって。最初に買ったレコードは「デビルマン」だった。

市：いいですね、その時代。

A：だから、その何というか、まあ、妖怪、結局、「デビルマン」もそうなんですけど、『ど根性ガエル』もここにカエルがくっついてて。

市：そうですね、あれもある種の妖怪的な。

B：妖怪だよな。

A：そういう不思議なものっていうのはやっぱり興味出ますし、惹かれるっていうか。

市：その、マンガ・アニメはまさにそうですね。1960年代 70年代にそういうのが続々と出てきて。

A：だから、その、子どもの頃って、今でもそうなんですけど、暗闇とか怖かったり、お化けいるんじゃないとか、怖いんですよね。ただそれを面白おかしく形にして、その、ただそこにひそんでいるものは、そういう思いがあって、なんか、悔しかったからそこにいた、で、それを叶えるっていうか、解決してあげることで、その妖怪か幽霊かも浄化してくっていうかさ、なんかそういう風な、ただおっかないだけでなく、ストーリーになって、じゃ、そんなにおっかなくねえもんなんだなってなると安心するじゃないですか。こうわけのわからないのがそこにいて、近付いただけで顔を見るとかだと怖いけど、さっきのご飯。

B：膳の湯。

A：膳の湯飲んできたかって、いや、飲んできたって言えば、そこで解放されるわけですよね。

市：そうですね、解決策があるっていう。

A：そうそう。だから、そういうのを一生懸命勉強したくなるっていうか、知りたくなってくるんですよね。おっかないけど、おっかない本を読むっていうのも、なんかそういうところからきてるのかなって。おっかないものなんか見たくないんだけど、なんか、見て、怖いけど、なんかこう、どっかで理解しようとしてるっていうかね、受け入れようと、いこうとしているような何かがあるんだろうね。

市：妖怪っていうと、真っ先に「ゲゲゲの鬼太郎」が出てきちゃうというのは違う体験のあり方も重要視したいところですよ。

A：だから、その妖怪とか、さっきの膳の湯もそうなんだけど、やっぱ生活の中で、夜に爪

切るとか。

市：あつ。さっきそう言えば、夜に爪切ると鳥がやってくるとかいう話を向こうで聞いたんですが、そういう話ってあるんですか。

B：それ、私が考えてしゃべったの。キシヤドリって分かるでしょ。

市：はい。

B：ここにいるやつ。あれ、実はこれ私が、私のストーリーなんですけど、爪を切るというのはキシヤドリが来るからだっていう話で、いわゆる、昔パチンと切ると、どっか飛んできますよね、夜。で、見えない。で、その鳥は大好物が爪なわけですよ、人の。で、軒下にいつも潜んでて、爪を狙ってるわけ。で、ところが、これは私が水沢で聞いたんですが、なんかその、鳥が来て、部屋の中ば一つ飛ぶっていうんだよね。で、飛ぶと、飛んでる時に盛んに血を吐く鳥なんだって。が、いるんだよ。で、それが実はその着物とか寝具にその血がしたり落ちると長生きできないっていうね。そういう話があって、オニドリとかなんとかっていう、その水沢の人が言ったのさ。で、そんなオニドリなあんて、って言ってた時に、それもう 20 年以上考えてたんだね。いらいらして。そした時に、あの、キシヤドリっていうのが、突然小松さんのデータベースにキシヤドリって、ただそれだけが出てて、それ気が付いたのがほんとここ 4、5 年前で、ひょっとすると、軒下にいて伺ってるっていうのはキシヤドリじゃないかっていうね。で、世を詰めるっていうのは、夜爪を切るなんていうのは世を詰めるからだって言うけど、本来的に、あの世を詰めるっていうのは当然、キシヤドリの、キシヤドリイコールその血を吐いて飛ぶ鳥かどうかっていうのはまた別なんだけど、その鳥の血を浴びるともう長生きできないっていう、そういうことで、私的にはキシヤドリとピンと一致したっていう。

市：なるほど。

B：で、オニグルマドリって本当は読みたいところなんだけど、妖怪伝承データベースではキシヤドリって言うてるから、じゃ、まあ、キシヤドリにしましょうみたいな。世を詰めるという、夜爪を切るなんていうのはそういうことなのかなあとか。そういう、なんかこういう考えて考えていると、そういうことと結びついてくるから、楽しいことだなあとね。

A：尽きないよなあ。

B：だから、蚊帳をつつて寝るっていうのはもちろんね、夏に蚊帳をつつて寝るっていうのは、決して蚊の予防だけではなくて、実は夏は暑くて、戸をあけて寝るわけだ、だから鳥っこ入ってきやすいんだよね。

市：そうですよね、確かに。

B：だから、それを防ぐということと。それから、最近読んだのは、七草の時に唐土の鳥と日本の鳥とっていうのは、キシヤドリだっていう、何かで読んだな。そのために、七草の時に唱える鳥っていうのはキシヤドリだって。

A：どんどん出てくるな。今朝、テレビ番組だったんですけど、その中であの、孫の手、あ

れって孫の手って書くんですけど、もともとは中国のマコっていう、手の長い妖怪だかなんだか分からない、その手だっていう、マコの手が本当だっていう話がね、なんか面白いなと思って。

B：いいね。

市：それが、そういう名前として生きてるんですね。今はてっきり孫の手だから、背中を程よくかいてくれるぐらいの感じなのかと思ったんですけど。

A：それも妖怪ですよ。

市：そうですね、あらゆるところに。

B：青森の妖怪にデングリガエルっていうのが、いるんですよ。

市：やっぱりカエルの。

B：いや、じゃなくてね、これわらべ歌に残ってるっていう。デングリガエルっていうのがいて、実は妖怪だっていう、言ってるんだけど。俺たち小学校の時に、マット敷いてさ、こう、あれデングリガエルって言うじゃない。で、実は、人がそういう風に動くっていうことは基本的にはあり得ないっていうかね、あるいは、人が地面から離れて存在するっていうことが、おっ、でんぐり返ったなって言うのは、滑って体が浮いて落ちたという。これは私友達と歩いてて、ウって聞こえたんだよ。ひょっと横見たら、友達の体が横になってるわけだ、滑って、そのまま下にドーンとなった。で、俺でんぐり返ったなって言ったっけ、彼もがいてるわけよ。でも、反射的に起きたんだけど、で、その時に初めて、あっ、これ妖怪の仕業として考えていいんだなって。と、青森でデングリガエルって妖怪がいるっていうことはね、まさにぴょんとかえること、あるいは、というような、その日常の中の色んなできごと、私たちが自力で飛び上がるのではなくて、滑ったことが妖怪の仕業として、地面から体がこうなって。だから、まだまだものすごくいるんじゃないかなってね。そういうのをどういう風に、リストをつくって対応していかないと。なかなか難しい、難しいというか、やるべきことがまだまだたくさんあるね。

市：興味深いですね。

B：ただ、それを、これでうまくあらわしていけるかどうかって言うと、また、これやっぱりかなり難しい。すごく難しいなと。

市：いきなり完璧なスタートはきっと切れないところがあるので、でもそれでもやっぱりこれが蓄積していくことによって先ほどお話にもあったように、そういう様々な伝承がこれをきっかけに掘り起こされて広がってっていう方の広がり方がどういう風になっていくのかなというのが、蓄積していくことで何か見えてくることもあるんじゃないかなと思いますね。

A：なんか、お話聞いてて思ったのは、この幽霊・妖怪画展というものもなんだけど、もっこくっぞの方がなんかあってますね。もっこくっぞっていう図録もあるんだけど、それはほんとそういう話のがと入ってる。

市：そうなんですか。

B：さっき言った目録というのがそれ。私がつくったね、目録。怪大賞に応募したんですがね、だめでした。

市：あら。

B：で、もっこが総称なんですよ。で、谷川健一さんにもっこだって言ったら、それは当たり前だって、お前、もっこの意味分かってんのかって言うから、いや、それ分かんないんですよって言ったら、違うあれは狼なんだよって。も一、あれは狼なんだよ一って。でも、谷川さんが、君ね、もう一回これ洗い直しなきゃないんだよって、日本の妖怪っていうのをね、彼はそういう風にしゃべったんです。それで僕が、谷川先生が手紙を書くから、協力してくれって言って別れたのさ、某所で。だけど、連絡はこない。だから、俺は小さな単位で目録をつくって、自分の周辺のことだけのことはやっていかなくちやいけないという。そこから、実は私自身がそういう風に考えるようになったのね。

市：なるほど。それは何年ぐらい前でしょうか。

B：何年ぐらい前かな。10年はいかないかな。10年、あつ、これやる、10年ぐらいになるかもしれないね。こうしてしゃべってね、解散したんですよ。で、君、ちょっと来いって言われてね、あの、外寒い日にね、寒い日だったのさ、それをわざわざ外にね、連れて行かれてそこでもう延々と、延々っていうか、その話をされたわけ。で、日本の妖怪をもう一回やらなくちゃだめだよ。もうすごく言われてね、君頼むぞとか何とかって。

市：でも、本心ですよ。呼び止めてっていうことは。

B：そう。この状態で別れたのじゃなくて、終わってから、ちょっと来いって言われて、そこでやって、じゃあ、金ヶ崎の妖怪言ってみろって、もっこって言ったらそんなことは、バレデンつつうのがいるってどこでもいるって言われて。ガンガン言われた。そんなどこでもいるって。だから、けっこうね、そういった意味では、たったね、何分でもないんだけど、谷川さんと話したことが、すごく私自身にとってはやらなきゃないというところに結びついているしね。で、最近こういう肩書を。

市：はい。それで、最初の話に、地域文化学研究所ということで。

B：あの、地域文化でとめちゃだめだっていうね、地域のそういうこときちっと整理をして、残すことによって、今度はそれを学問としてね、深めていかなくちやいけないというので、あえてね、学というのをつけたんですよ。その昔はね、暮らしと文化を記録する会ってやってたわけ。

市：はあ、脱衣婆のところは確かそういう名前が出てたような気が。

B：ああ、そうそうそう。脱衣婆もなんか、去年、脱衣婆彼は描いてくれてね。これ、なかなかね。で、こういう風にこうしてくれるところがね、なかなかいいし、それから、これをやったことによって、例えば地域文化学、地域文化のことで、ウバという、その地名ね、ウバ・オバ、そういう地名から何を考えることができるのかということ、それか

ら十王という地名ね、十王堂というのがあって、で、それが何を意味しているのかというね、ことも今、私個人的には考えているわけ。で、あの、ウバというのは、姥石とかね、これ婆岩の台座ってのも、婆岩って言ったら、これ以上奥が、ここまでが里でよ、こっから先が奥なんです。あの、永徳寺の、今の行き止まりさ。あの、下。で、ちょうどその、婆岩というのが、その堺。ババというね。で、そのババが、実は脱衣婆。だから、本来はあの世とこの世の境。里と山の境。だから、ババってつく地名をよく考えて、今、これからやろうとしてるんだけど、というようなことをね、やっぱり妖怪の範疇で考えてた中から、そういうことを。で、ババから、今度は十王という地名。で、なんでさ、お寺がないのに十王という、脱衣婆がいて、脱衣婆がいるところは、十王様がいるところなので、なんでそれが、例えば、江刺のヨネサトの、もうこれ以上行くとこねえんじゃねえかっていうところに、十王堂っていう停留所があるわけ。山の中に、ぼろっと。で、そういうことをどういう風に考えていくのかっていうと、それは私たちの祖先がね、境として、この世とあの世と、境として決めた場所ではないかというのを、どういう風に立証できるかどうかは分からないんだけど、そういうこっからさらに広がっていくところまで今目指したいなと思っているんだけどね。単なる、その地域文化の枠をね、やっぱぶっ壊して、それを学というところまでいかないと、という風にね思っただけは持ってるつもりなんだけど、あとは。例えば、そういうことっていうのが、その、この絵の中にすごく私はあらわれてると思うのね。100 年も 150 年も経った家が復元されたんですよ、坂本家が。で、私らは何の気なしに、空いたかーとか、あー疲れたー水飲ましてくれとかって行くんだけど、実は、まだまだこういう人たちが、俺すごく学ばされた。あんまりこの人にはしゃべったことないんだけど。

A：そういう目で見てたのか。

B：そういった意味ではね、そこの歴史の蓄積というか、そういうこと。

市：そうですね、場所の記憶というか、妖怪を考える上でも場所の意味や記憶って重要な観点で、それは確かに地域文化学としてとらえるべきでしょうね。

B：捉えていかないとね、ただ単に怖い話で収まってしまうとね。

市：マンガの世界だけではなく。数年前に小松先生が出した『創造学』っていう本があるんですが、それを読むと本当に、妖怪だけではないんですが、それらを創造と結びつけるかという本を出して、ああ、こういう風に展開していくと、従来の民俗学だけで縛られていたものから解放できるなど、はっとする本があったのですが。

B：創造学っていうの。

市：そうです。その環境を考える上で。

A：今、せっかくその話出してもらったので、その絵を描いたのが、もてなしの心っていう、あそこオープンして、色んな人に見てもらいたいという気持ちがあるじゃないですか。で、それはじっちゃんもばっちゃんも子どもも、みんな来てくれ、で、それは人間だけでなく、動物も、あとはこの世に存在しない人たちも、みんな、とにかく選ばずね、

みんないらしてくださいっていう気持ちでもてなしをしましょうっていう。

市：そういう意味で、人も人じゃないものも。でもこうして実際に描いた方のお話も聞けるとありがたいですね。そういう場って、今のところ設けてたりするんでしょうか。例えばギャラリートークみたいなものってあるんでしょうか。

A：ああ、一応、あの、話は聞いている。どういう感じだったの、とかって聞きながらやるので、それを聞きながらは。

市：では、それがここに反映されているんでしょうか。

A：やっぱ、居心地がいいところっていうのは、誰にとっても居心地がいいところになるはず。だから、ここの下に狸住んでるんですけど、縁側、座敷の下から入る、ちょうどあの椅子の下のとこに穴掘っているんですが、あと、カモシカが来たりとか、リスはもうしょっちゅうぴょんぴょんぴょんぴょん飛んでますし、だから、そういう、人はそもそも自然の中から生まれて、自然に育って、こういう頑丈に住んでるからだけのことで、もともとはやっぱ自然ですもんね。そういう動物。

市：分け隔てなく。

A：で、まあ、庭内っていうことはないけれども、その厄払いみたいなことが必要なんでしょうけども、そうした人たちとも仲良くできたらいいな。仲良くできる方法はないものかなと。だから、妖怪とかっていうと、どうしても空想の中と、あとは伝説っていうか、昔話の中から、親が言ってたとかじいちゃんが言ってたという風なところから想像することしかできないですけども、幽霊とかっていうのは、実際に見えてる人いるわけじゃないですか。で、幽霊を今そこに三人いるとかさ、言う人もいる。で、そんなわけねえべじやって信じない人もいる。でも、見えてる人もいる。で、それをどっちだって、賛成派、反論派みたいなのでね、話すんですよ、よくやるんですけど、そうすると、絶対いるわけがないと、あと、占い師とかでも、会っただけで、あなたの家の玄関のところにこういうのがあるでしょ、それは裏に片づけて、そこに黄色いもの置きなさいとか、あつ、ある確かにあるとかって言うと、それは何か違う、何にでも当てはまるようなことを言ってるだけだということで、すごい反論するんですよ。否定派なんですよ。

市：否定派なんですね。

A：否定派なんですけど、でも、俺はその、いう風なのをちょっと信じたいなと、で、そのパワーがあるんだったら、俺もちょっとそのパワーを利用してみたいなというがあるんですよ。だから、幽霊が見える人とかって言ったり、占い師とかって言うと、すごいしつこく聞くんですよ。どういう風に見えるのとか、いる、ここにいるとか、そっちに今ずっとこっち見ているとかっていう話聞くと、わくわくしてきて。

市：どれで、これも幽霊・化け物・妖怪ということで、並列して表記しているのは、その多様性というか。

A：そうですそうです。

市：けっこう、妖怪と幽霊って一緒に扱っている事例って少ないんですよ。妖怪はやっ

ぱり妖怪だけでキャラクター文化として成立しているのが大きいので、妖怪だけで、そこに何かしらの幽霊的な要素、ここで言うところの祖霊崇拜につながってくるところだと思ってくれるけども、そういうのも結び付けて、あえて幽霊・妖怪・化け物っていう3つの言葉を使っているところもある程度意図的なところが。

A：そうですね。もう、それも、何でも OK みたいな。

市：間口を広く。

A：その、不思議なものは OK みたいな。

市：でも、今のようなお話聞くと、そういう風な解釈なんだな、というのがよくわかります。実際に、絵を見ても、妖怪画の展示で、ここら辺になってくると、妖怪画といってもしっくりくるかと思うのですが、最初の頃の幽霊画がいっぱい描かれているところを見ると、妖怪ファンがくると、これは妖怪じゃないよって言うような人がいるはずなんですよね。そういうところも広く捉えてやっているのは面白いですね。

A：だから、まあ、不思議なものに単純に興味がある、で、こっちが専門だからというのはないですね。俺的には幽霊も当然好きだし、何ていうか、興味あるし、妖怪も興味あるんだけど、やっぱり、人に見えているというので、今確認できるのは幽霊しかないわけですよね。だから、その見える人に会ったら、もう聞くしかない。もう、ぼんぼん聞いて、すごい面白いですけど、あそこ、腰から下ない人がこうやって出てくるとか、そういう話ね。それ描いた方がいいよ。

市：そういう話も。

B：こちらを。

市：ああ、これですか。

B：一番最後ちょっと見てください。ここに。

市：これですか。わくわくしますね。この時の絵を描いたのはどなたが。

A：その絵ですか、絵は私描かせてもらいました。

市：そうですか。いい感じですね。ここにでも、ニノデュノニネゴがいますね。

B：この地図と、内容を、中身をちゃんとうまくあうようにしないとだめなんだよね。

市：これ面白いですね。これを出されたのが 2003 年。これは事典形式で載っているんですね。

B：それね、千葉幹夫さんの、それを踏襲しました。一応、書き方はね。

市：こういう民話関係の研究をされていらっしゃって、これはまさにあの『日本妖怪事典』の形式を。

B：で、これをまあ、一応、旧村単位、今、町村合併がいっぱい、市町村合併が進んだので、できれば、市町村合併前の単位でやれたらいいかなあというのはね、思っていました。これから。

市：ここからまた、増えているということですよ、伝承が。

B：そうですね。ちょっと、ちょっといいですか。これで、これがね、その一番最初のあ

れなんですよ。

市：これが不思議展。

B：これ、あの、2版までいったんですよ。ちょっと、ほぼ完売なので。

市：これ、いただいてもいいんでしょうか。

B：いいですよ。古いのが残ってたので。

市：ありがとうございます。

B：もとはとりましたので、おかげさまで。これ全然もととれないんだけど、で、こういう風になったのは研究会に出してもらおうって。で、この段階は自費で頑張ってやんだけど。

市：そうですよね、ここら辺のは製本が。

B：こういう風にしたのは、もうだめだって、売れる分だけつくるべっていうことで。

市：それで、置いてあるある冊数もそんなに多くなかったんですね。こういうのつくるのも大変ですもんね。

A：ちょっと『もっこくっぞ』、しばらく見てなかった。

B：遠野のカップパ淵のあたりは、できすぎてると思いませんか。

市：そうですよね。だから、カップパ淵がどうやってあんなったのかっていうのを今調べたいなと思っているんです。

B：ああ、そっか。カップパ狛犬とかね。

市：カップパ狛犬。なんで、あんなに集まってるのかなっていうのが不思議なんですよ。お話を聞くと前からあったとは言うんですけど。

B：でもあそこにね、十王堂があるんですよ。

市：そうですよね。あそこら辺は宗教的に見た時にも、カップパ淵があるところの常堅寺さんは、当時の宗教の曹洞宗の中心地ではあったので、そういう視点も必要ですよ。こういう伝承がたくさん残っているところを、伝承めぐりのような企画ってやったことあるんでしょうか。

B：いや、まだ。まだって言うか、あの、やりたいなと思ってるんだけど、気持ちとしてはね、ただ、もうちょっと私自身が太らないと、頭の中で。

市：十分かなって思いますが。

B：ただ単な、ただ単な、お遊びに終らせたくないと思いがあるので。

市：どうせやるなら、しっかりとってというのは確かにそうですね。

B：で、昔っていうか、現役の時はね、けっこう地域の文化財めぐりみたいな時に、紹介はしたんですよ。だけど、ほとんど反応ゼロ。なんでこんなところに止まるのかなって、ここがね、こうなってこうなって、ニノデノニネゴってのがここさいたんだって言ったって、結局いきなりそれしやべっても、やっぱり難しいな。

市：まあ、ものがない難しさというか、やっぱりでも、そこの想像力が乏しくなっちゃってるのは空しい気もするのですが。

B：復活させねばね。

市：そうですね。

B：なかなか、ちょっとやっぱり、対する考え方が、ちょっと変わってるっていうか、なんて言ったらいいのかな、もうちょっと、こう、私が説得力がもう少し持てればいいかなという風には思ってる。

市：そのストーリーというか、場所と物語の関係みたいなのが。なんで、遠野で売ってるキティちゃんの河童は緑色なんだって話を力説している人もいますが。赤にしなきゃダメだろっていうところの。

B：でも、キティだってところでもうアウトですから。ね。キティの段階でもうダメなんですよ。やっぱり遠野の人が、キティにくっつけばいいつつうもんじゃねえんだよ。

市：そこのお土産の展開も面白いですが。

B：湯本さん。あの、そういった意味で、変なもの買うようになったのは、湯本さんっていう人がいるんだっていうので。

市：でも、なかなかの。

B：やっぱりね、すごいなと思う。あの、鬼の館っていうのがあって。

市：実は、午前中行ってきたんです。初めて。

B：あの、あそこの時に少し、ちょっと私も手伝ったっていうか、手伝ったっていうほどでもないんだけど、あの時に、川崎市市民ミュージアムの河童がほぼ、こっちへきて。あんまり私はそれ賛成じゃなかったんだけど。

市：こっちきてっていうのは、展示ですか。

B：じゃなくて、おそらく、鬼の館の河童が市民ミュージアムの河童にかなり近いんじゃないかと、私は。

市：なるほど、そういうことですか。

B：思ってる。で、キュウリにうんとこだわった記憶はあるんだけど、ブツブツがあるとかなないとかって。

市：でも、顔だけはちゃんと赤くなって。鬼の館は学術的にしっかり鬼を位置づけようとしているところは驚きましたね。なので、展示内容もちゃんと系統だっていて、びっくりしました。

B：まあ、そういった意味では非常に、限られたスペースの中で。

市：いやあ、充実してました。

B：で、やっぱ、あの、あそこやった門屋さんという人とも。

市：門屋さん、あのお近くにお住まいだったようで。

B：そうです。で、あれの発想は、金ヶ崎の人が。鬼の館の発想は。

市：えっ、そうなんですか。

B：うん。ここに、金ヶ崎の人がこうやって話をしている時に、ぽつと話したのが、門屋さんが整理をして、いただきますって、で、鬼の館になった。

市：意外なつながりが。

B：澤藤さんが。

A：この中に出てきますよね。

B：これ、これを描いた人なんですよ。

市：澤藤さん。

B：澤藤範次郎という人が、あの、張子作家なので、彼、そもそもが北上の出身なんですけど、鬼剣舞の面をつくってる、お父さんがつくり出して、彼もそれを引き継いでやってる人なんですよ。で、ま、彼自身も鬼というものに対して、並々ならぬ、郷土玩具。

市：あつ、これをつくってらっしゃるんですか。

B：そうですね。で、ま、あの、「鬼・おに・オニ」っていうのを、門屋さんが県立博物館にいる時に、展示をしたんですよ、企画展をやった時に、まあ来てて、で、そこからいろんな話をした時に、ま、これ。

市：この範というのは、お名前の頭文字なんですね。

B：それと、あの、当時の1億円。市町村に1億円。ふるさと創生基金だかなんだかっていうのと、上手く結びつけて、整理をして、そしてあそこまでいった。

市：それはそれは。

B：でも、その割には、ちょっと鬼の博物館は元気がない。

市：ちょっと立地が駅から遠いでしょうか。好きな人はもちろん行くとは思いますがけれども。

B：ちょっと発信が足りないよね。手作りでもいいからやっぱりポスター出すとか、発信をしないとね、もったいないよね。

市：常設展示自体は非常に充実しているの。

B：昔のこと知ってるから余計そう思っちゃうんだよね、門屋さんの思い分かるから。

A：あんなに素晴らしい施設なのに。

B：やっぱり、鬼学をちゃんとやるぐらいの、鬼学講座っていうのをやってるんだけど、なんか、もう、俺の伝建群を歩こうみたいに、メンバーが固まってしまっさ。

市：なるほど。

B：ちょっとその後の、ただ単な、観光施設になってしまうのか。

市：本来であれば、鬼の研究拠点とかになり得るところだと思うのですが、実際に岩手県の県名の由来でもありますのでね。

A：すごいんだけどね、あの、本、絵本見たんですけど、鬼、全部、湖ができたのも川ができたのも山ができたのも、全部鬼の仕業、北上のあの辺のね、一帯の、山も、湖も、紹介してる。ジャンプした時の穴が3つとかね。そこまで全部鬼かよ。

B：ぐらいやってる。

市：そうですね、巨人というか大人というか、西日本の鬼とは違う感じの鬼ですもんね。東北の鬼は。さっき、向こうで『東北の鬼』買いましたけども。東北の鬼は東北の鬼で

特徴的なものがあるのかなと。

B：来訪神につながるようなね、来訪神そのものが、やっぱり、神仏の源流にいく可能性っていうのがすごい強い。捉えなおさなきゃない。

市：この世とあの世の関係を考える上では非常に重要なキーワードですよ。

B：もう考えるだけで。本当に、何か、面白いことがいっぱいあり過ぎてね、そのことに気が付くのが遅すぎた。俺が 40 代であなたが 20 代だったらまだ面白かった。そういう、でも、まず少しずつね、やっていかないとね、私の方も情報は発信していきます。

市：ぜひとも、よろしくお願いします。また、分からないことあったら連絡するかと思うのですが、よろしくお願いします。ありがとうございました。

B：8 月にはぜひ、またおいで下さい。

A：時間あったら描いてくださいよ。

市：そうですね。図録に自分のが載るのかと思うと、ありがたいですが。ちなみに、これは全員分載っているんですよね。展示したものについては。

B：あのですね、これは、えっと、新作だけ。今までたまってきた、出してもらってる人のものは全部展示しますけども。

市：では、出してるけど載ってないものはないという認識でよろしいでしょうか。

B：そうです。ここに載ってるやつは今まで全部出たやつです。もっとね、展示できる場所が、ほんとではできればね、で、もうここじゃなくてほんとでは、あっちの町の通りでやれる場所があればね、一か所二か所って増えていけばいいかなと思ってる。その前にやっぱり妖怪が友達だっていうことをね、楽しいものだっていうことを、広めていかないとね。やんたって言われるからね、いやだって言われるからね。

市：やっぱり言われますか。まだまだ市民権は得ていなかったんですね。今後が楽しみです。

資料4-4 《隅田川妖怪絵巻》において創作された妖怪リスト

No	妖怪の名前	大分類	中分類	具体的な地点名	特徴	実施日
1	コツほりヂヂイ	道	道	コツ通り	細い道にしゃがんで土をほっているおじさんがいる。そのおじさんは、はげている。ほねが大きい。あつめてたべている。おじさんは、ほねを食べる前のようにきれいにもどしてきえる。うすぐらいゆうがたにあらわれる。(5時～5時半ごろ)おじさんは、すぐくやせほそっている。(ほねみたい)	2012年10月27日
2	デントウ	道	道	そこら辺にある電灯	見た目はふつうの電灯だけどたまに強い光を放ちそれをあびた人はあびさせた電灯の(光)パワーになり終わりに人が消える。	2012年11月11日
3	手の道(道手)	道	道	日光街道	日光街道に住みついている妖怪。自分の住居を破壊されたくない為、都電を延ばす時に工事を止めるように悪さをした。事故などをおこした。そのお礼に大空しゅうの時に被害から大きな手で守った。	2012年11月11日
4	万頭喰らい	道	道	汐入地区	お地藏様のお供えをいつの間にか食べる妖怪	2012年12月8日
5	サンリ駄足祖人	道	道	千住大橋から日光街道付近	(注)芭蕉の旅立ちにサンリに疚をしてひざの痛みを抑えた いわれ—昔々、江戸を離れて日光方面(みちのく方面)へ旅立ちの人が足腰の弱い老人、子供が目的地に到着するまでの苦難を助ける姿は不気味だが心やさしい妖怪。無事目的に到着したらその地の道祖人ホコラにワラジをそなえる。これをしない人は一じんの竜巻に襲われ、神かくしに会ってしまう ピョンピョン上下にハネながら旅人の弱った足と入れ替る ☆芭蕉の矢立ての地から連想した。「千住と云ふところにて船を上がれば前途三千里のおもひ胸にふさがりてまぼろしのちまたに離別の涙をそそぐ」	2013年1月14日
6	骨出し(ホネダシ)	道	道	コツ通り	コツ通りより夜な夜な掘り出した、頭蓋骨(人の骨)などからダシを出し、雨の降っている時などにおでんなどを売り歩く。 この骨出し自身、小塚原刑場で処刑された罪人で、他の処刑されて、供養されていない仲間を掘り出して人に食してもらう事で、せめてもの供養をしてもらおうと思っている。	2013年1月14日
7	クルマヤジャヤ	道	道	車屋の看板がある所	出現時間…屋すぎから3時頃 かたち…道具、複合型(食物) 大きさ…大八車くらい その当時は賑わっていたであろう地に大八車にお茶やお団子、おにぎり、お新香など、当時出していた品物を乗せて、走りまわっている妖怪。	2013年5月18日
8	つんつん	道	道	日射しが強い場所なおかつ人氣が少ない	出現時間…日射しが強い時間帯 かたち…人間 大きさ…人間(女性)の手と同じくらい 指は長め ぼうしをかぶっている人の後ろに現れてその人のぼうしをツンツンする。ふりむかれる前に姿を消す。幽霊ではなく、妖怪。人がちょっと怖がっているのを見るのが楽しいらしい。	2013年6月22日
9	時計戻しの山谷堀入道河童	道	道	土手通り界限	出現場所…土手通り界限 出現時間…日付の変わる頃 かたち…動物と自然物の複合型 手足の水かきが歯車 江戸の「にぎわい」が時代と共に廃れてきた時間軸を元へ戻し昔の名惜りを留めさせようとする妖怪 姿形は決して見る事は出来ないが、時が淀んでいる様なゆっくりとした時が流れていく 比較—1日が50年のサイクル	2013年6月22日
10	おとなし(おとなしい)	道	道	浄閑寺⇄泪橋付近	かたち…人間、動物、道具 大きさ…人間と同じサイズ 働く人をはじめ、人々の心を癒す妖怪。一切物音をたてず、一見ではわからないが、気配を感じるだけで心が落ちつく。音無川の由来にも? 川の上にパンダの公園があったのも納得できる。	2013年6月22日

11	いたずら小僧	道	道	泪橋	出現時間…屋間の晴れた日 かたち…人間 大きさ…子供 おしおき場におくられた親ぞくをみおくった子供のようかい。いたずら好きで、夏に肌がろしつしているところ、道、うで、足などに水てきをかけていたずらをするようかい。後ろから水てきをかけ、ビックリさせることが喜び。	2013年6月22日
12	なまけ電柱	道	道	レンガトンネルの近く	かたち…建物 人が見ていないと気を抜いて倒れる	2013年6月22日
13	久し振りに出て来た天の邪鬼	道	道	石浜神社に向かう道	出現時間…3時頃 かたち…人間 大きさ…子供 天の邪鬼の像がある石浜神社に向かう集団を嗅ぎつけてやって来た。自分が妖怪のくせに、他人を妖怪呼ばわりをしてから来てたが、いつの間にか居なくなった。人なつこくて、たいした害はない。	2013年7月15日
14		道	路地		古い道を通して新しい建物に行こうとすると迷わせる。 路地 古い町並みから新しい町並みを見た時の何ともいえない感情。寂しさ、なつかしさ、ねたましさ、これらの感情の違いから、妖怪も変わる。※時代によって妖怪も変わる	2012年10月27日
15	コツコツ	道	路地	路地	歩いていると前からコツコツという音がする。	2012年10月27日
16	紙好き	道	路地	路地	ポストからポストへ手紙(紙)を求めて移動していく紙が大好きな妖怪。大事な手紙を食べてしまうので、郵便物・新聞が届かないと苦情が…素早いので姿を見たものはほとんどいない	2012年11月11日
17	路地ふさぎ	道	路地	路地	近道しようすると通せんぼ 大きな毛玉みたいなもの	2012年11月11日
18	道はばみ	道	路地	路地	特に細い路地裏を通っている時に現れる。歩いていると次々に前や後ろから自転車や車が通るが、それは妖怪道はばみの仕業である。道はばみに実体はない、もやもやとした存在である。人が多ければ多いほど道はばみは人を困らせようと路地裏に自転車や車を呼びよせる。いたずら好きな妖怪である。	2013年2月23日
19	ウラの細道	道	路地	足立区河原町	出現時間…うす暗くなる頃 かたち…建物 大きさ…街 裏路地に迷い込むと、どこまでも深みにはまって二度と出られなくなる。北千住は奥の細道への出発点だと云われるが、別の迷い路への入り口にもなっている。	2013年5月18日
20	ことだま返し	道	交差点	泪橋交差点付近	その昔、刑場に向かう最後の身内またはゆかりの人との別れが出来ない亡霊の変化 この妖怪は現世人との交信をするがその声が出せず、妖気で訴える。この異変を感じる人には悪さをしないが感じ取る事が出来ない人は耳を削ぎ取られてしまう。 この妖怪の発信方法は心霊波を人に発射するのが木霊(コダマ)の様なので波状的な異変を感じるのでこの名がついた。	2013年1月14日
21	白帯	道	交差点	泪橋交差点	出現時間…夏の夕暮れ かたち…頭と白帯 首塚に向う死体を運ぶリヤカー、三谷に住む浮浪人が、夏の夕暮れ時に役人から仕事をもらい死体を首塚にリヤカーで運ぶその時、上空に、白帯妖怪が風に乗って夕暮れ時に現れる。	2013年6月22日
22	角ギツネ	道	曲り角	街角	出現場所…街角 出現時間…子どもの帰宅時間 かたち…動物、植物 大きさ…手の平ぐらいの大きさ 角に現れる。 子どもたちと遊びたくて出てくる。 ギツネに似ているが、小さくなって現れる。 子どもにしか見つけられない。現われるのはいつも角。 街中のギツネたちの中でいつも小さく、輝くように夕方から出現する。下を向いている子に驚きを与える。	2013年5月18日

23	渋滞をおこす妖怪	道	高速道路	高速道路	高速道路の渋滞を作る妖怪で、誰も見た事がない。たまにしようと事故を見て楽しんでいる。	2012年12月8日
24		道	橋	千住橋下	千住大橋の下の道に「助けてくれ」という文字があって、その場所がどうしても暗く、妖怪でそんな雰囲気だった。 ↓想像 すみだ川のこいが人間に目をとられたので、こいがこの文字を表した。その文字を、ずっと見てしていると水の中に気づいたらいて、こいに食べられてしまう。目もとられる。	2013年2月23日
25		道	橋	千住大橋	神社など宗教的な場所が多い中で、千住大橋の手前の空地にはラクガキやゴミが多かった。鎮守様などに守られたり、人の目が多い橋周辺のちょっとした所に街のスキがあり、人々にゴミポイ捨てやラクガキをさせてしまうスポットになっている。	2013年2月23日
26	石橋オバケ(欄干坊)	道	橋	橋(新しい橋)	かたち・・・石のらんかん 大きさ・・・新しい橋のとなり 橋のらんかんから出てきて、もう一つの橋のげんえいを出し、通る人をまどわし、川へおとす。	2013年3月20日
27	追いかケキツネ	道	橋	千住大橋のたもと	出現時間・・・昼夜問わず かたち・・・動物 大きさ・・・キツネくらい 橋のたもとにいて、罪人が通ると追いかけて回し、つかまえる。マチの安全を守る妖怪。	2013年5月18日
28	つなひき狐	道	橋	旧日光街道	かたち・・・動物 大きさ・・・尾の長さは数10メートル～数100メートル 熊くらいの大きさ 千住の大綱引で使われていた綱が妖怪化した姿。千住大橋をわたっていると、大勢のにぎやかなかけ声が聞こえてきて、ぼんやりと両岸で綱引きをする男たちの姿がうかんできて、仲間に加わるように誘われる。祭りの熱気に包まれ、力をこめて引っ張り続けているうちに、気がつくと対岸に渡っていた良／川に落とされていた悪 その時の虫の居所によって、誘われた人間を川に落としたり、何事もなく橋を渡らせたりする。	2013年5月18日
29	千住岩神	道	橋	岩影	出現時間・・・屋のみ かたち・・・動物、複合型(岩に密着) 大きさ・・・30cm位 岩の間に忍んでいる。岩と一体化している。 じっと見るとだれにも見つけられる。 千住橋の近くの岩のあちこちに居る。 船荷がくるたびに、お迎えをする妖怪。古くからいるので、岩と一体化してしまったのである。	2013年5月18日
30	妖怪「力足」	道	橋	大橋の両端	出現時間・・・つな引きの時 かたち・・・身体の部分、肌色 大きさ・・・たいして大きくはない つな引きをする。力持ち。かわいいキャラクター。お祭り好き。つな引き大会に負けまいと人間に力を貸そうとしてつな引き競技の時に表われる。複数いる。	2013年5月18日
31	<はしたもののジョン>とくおしろいマシヨ->のペア妖怪	道	橋	千住大橋のたもと	出現時間・・・夜10時ころ かたち・・・人間、動物 大きさ・・・人間サイズ、大型犬 ほろ酔いかげんの間屋の旦那さんが、犬の姿をしたくはしたもののジョン>に吠えられ、逃げようとする と、美女のおしろい狐が現われ、こつちこつとと助けられるが、実は、おいしいお酒を飲まされて、お財布をすっからかんにされる。犬よりおそろしい「魔性の女」の美女妖怪です。 南千住の橋わたりは橋のたもとがおもしろい。 犬と美女のペア妖怪です。「唄えるスナックジョン」という看板から生まれた。 今日の午前中に弥生美術館で「魔性の女」展を見たばかりなので・・・。 (実は、かかしの化けた妖怪です。)	2013年5月18日

32	すがりい	道	歩道橋	線路上の橋	出現時間…問わない かたち…人間、動物 大きさ…全長30cm～ 通りすがりの人にすがりつくことで引きとめようとする妖怪。昔は泪橋で、仕置き場に向かう身内、家族にいけないでと涙を流し引きとめた人や動物の意を継いでいる。そのため人のような犬猫のような格好。(首切地ぞうのところに犬猫のくようするようなものがあつたので、そこから想像)しかし泪橋は姿を消してしまったため、現在は線路上に移動して通りかかる人に(たぶん仕置き場に行く人だと思ひ込んでいる)行かないでと引きとめている。なので、歩いている人は橋がゆれているように感じてしまうが、実はこの妖怪が揺らしているのかもしれない。しかし、揺れに気づく人と気づかない人がいたので、大きさはあまり大きくはない。	2013年6月22日
33	ようかいキモチガエ	道	堀	日枝神社付近	キモチガエとは日枝神社のとなりにあるコンクリートのかべからでられない子どものようかいです。そのまわりで楽しそうにしている子どもたちのことをうらやましく思っている。自分も外に出て楽しく遊びたいけど出られないので自分の悲しい気持ちと楽しそうにしている子どもの気持ちをすりかえてしまう。その子はなぜ悲しくなったのかはわからない。なぜかなみだが出てくる… 楽しい気持ちをすりかえて10秒ほどわらっている。キモチガエはすぐになくなってしまいますのでつねに気持ちをすりかえている。悲しい気持ちをもらってしまった子どもはいつのまにか水色のドアの前へ…そのドアはキモチガエと会える道へつながっている。	2013年2月23日
34		道	空き地	ジョイフル三ノ輪商店街	夜一人で歩いていると今欲しい物が売っている不思議な自動販売機があらわれる。買おうと思いいふからお金を出すと消えて空き地のドアにもどっている。	2012年11月11日
35	三ノ輪橋駅の終点のかべの妖怪	駅・電車	駅	三ノ輪橋駅	電車がぶつかってきそうでいつもおびえている	2012年11月11日
36	事故減らし	駅・電車	駅	南千住駅	頭が四つあり、交通事故になる車やバスなどを見分け、ガソリン切れにしたりして交通事故を減らす。一日に減らせる数は決まっている。 駅にいる。 南千住内でのみの交通事故を減らす。 おそなえしないと不幸がおとずれる。	2012年11月11日
37	墨田カワウソ	駅・電車	駅	隅田川(貨物駅)	出現時間…昼・夕方(人が働いている時間帯) かたち…複合型(人+カワウソ) 大きさ…110cmくらい(たて) ・大正時代に貨物駅周辺に流れていた川にいたカワウソ。 ・川が干上がって一匹のこされてしまった。 ・そのさみしさから貨物駅周辺で働いている人々にイタズラをする(事故とか) ・子供にカン違いされることが多い。	2013年7月15日
38	フロッタージュチンチン妖怪	駅・電車	都電	都電荒川線	フロッタージュのイベントの期間2週間フロッタージュ作品を展示したフロッタージュ都電が1台運行していた。イベントが終わった後もその思いが残った「フロッタージュチンチン妖怪」三ノ輪橋駅を終電が出た後、透明な都電だがチンチンの音と前方の灯と天井に貼られたフロッタージュだけが見える電車が走る	2012年11月11日
39	クサツル	駅・電車	花壇	都電荒川線の花壇	花だんに入ろうとした人の足をつかみ、土の中に引きずりこむ。こうして仲間を増やしている。 都電によってつぶされた土地のうらみによってできたようかい 花だんの中にある土をなげつけると、ひるむので、そのすきににげればよい。	2012年11月11日
40	愚痴タイル	駅・電車	公衆トイレ	三ノ輪橋駅トイレ	三ノ輪橋駅のトイレにて人の悪口を言うと出てくる妖怪。「もっと言えー!」とけしかける百個の口。	2012年11月11日

41	のぞき穴	駅・電車	公衆トイレ	三ノ輪橋駅トイレ	<p>天じょうからぶらさがって用を足している人の顔をのぞきこみ、目をあわせると顔をなめられる。ただのいたずらなので気にしなくてよい。うわさによると、男のほうにはかみの毛のないもので、女のほうにはかみの毛がゆかにつくほど長いものがでるらしい。</p> <p>昔、近くに住んでいたいはずら好きな子どもが、おなかがいなくなったときにお世話になったトイレにばけてできるようになったようかい。</p> <p>目をつぶって「いたずらするぞ！」と三回唱えれば、いたずらされるのがいやで逃げていく。</p>	2012年11月11日
42	人食いイヌ	暮らし	市場	やっちゃ場付近	<p>出現時間・・・やっちゃ場営業中</p> <p>かたち・・・動物</p> <p>大きさ・・・普段は犬くらい変身すると家くらい</p> <p>やっちゃ場を見張っていて、泥棒が現れると巨大化し、泥棒を食べる</p>	2013年5月18日
43	厄除けネギ坊頭	暮らし	市場	千住河原町界わい	<p>出現時間・・・やっちゃ場活動中の早朝</p> <p>かたち・・・植物？</p> <p>大きさ・・・ガス状の気球大の大きさ</p> <p>千住ネギの化身</p> <p>ガス状の巨大形 ネギの形</p> <p>毎日ネギが入荷されている中、仲間の鎮魂を願って青物商店の守り神として毎朝出現する。</p> <p>人に危害を加えない。</p>	2013年5月18日
44	雨乞い老車(アマゴイロウジャ)	暮らし	市場	やっちゃ場外→隅田川防潮場付近	<p>出現時間・・・深夜(雨天シトシト雨の)</p> <p>かたち・・・道具</p> <p>大きさ・・・大八車の車輪</p> <p>やっちゃ場で永年労役して朽ち廃たれ捨てられた大八車の残ガいの物怪。</p> <p>焼かれ処分された魂が火アブリされた苦しみから水を欲しがり、雨を呼びおこす。人に危害は加えないが、物の大切さを訴求しているやさしい妖怪。</p>	2013年5月18日
45	鬼八車(仮)	暮らし	市場	やっちゃ場通り	<p>出現時間・・・未明</p> <p>かたち・・・道具</p> <p>大きさ・・・乗用車でいど</p> <p>朝まだ暗い時間帯に、霧に包まれてどこからか声がきこえてくる。声のするほうに誘われていくと「やっちゃばー、やっちゃばー」という声が次第に大きくなる。少し霧が晴れて姿を現したのは、往時やっちゃ場で使われていた大八車の妖怪であった。恐ろしいが何故か逆らうことができず、誘われるまま通りの奥へ。ある野菜問屋の入り口をくぐり、さらに建物の奥へ。最奥部の土蔵にたどりつくと声で大八車は消えて、駐車場のまん中にぼつんととりのこされていた。一説によると、やっちゃばの記憶を語り継ぐようにと、大八車が妖怪と化して蔵の幻影を見せたものだという・・・。</p>	2013年5月18日
46	市場わらし(やっちゃっ子)	暮らし	市場	やっちゃ場(市場)	<p>出現時間・・・昼下がり～夜</p> <p>かたち・・・人間</p> <p>大きさ・・・5～6歳の子どもくらい</p> <p>○人間のいない静かな市場を守るため</p> <p>○見た目は影のように暗い</p> <p>○広い市場で隠れんぼや走ったりしながら遊んでいる</p> <p>○誰もいない市場に子どもたちの笑い声が聞こえる</p> <p>○姿は見えない</p> <p>○倉庫の中から出現してくる</p> <p>○朝は大人たちの賑やかな声で憶劫になって出てこれないが静かになったら出てくる</p>	2013年5月18日
47	演芸場妖怪	暮らし	商店	栗本商店	<p>笑いに関する妖怪。</p> <p>今のカナモノ屋さんに入るとなんか出る。</p> <p>建物自体が妖怪。</p> <p>栗本商店の前を通る時、店に入った時、中の商品のヤカンやぼうきとかカラカラ鳴る。</p> <p>漫才の笑い声がしみこんでいる建物が、笑いを求めてさわいでる。</p> <p>そこを通る人が、拍手したり、笑ったり、お金を投げてリアクションすると喜ぶ。</p> <p>通をはさんで、刑場が昔あったので、通る人がこわくないと思ひ込もうとするとか</p>	2012年10月27日
48	妖怪“シャッターおろし”	暮らし	商店	ジョイフル三ノ輪商店街	<p>商店街の閉店時間になるとやって来て、シャッターをおろして回る</p>	2012年11月11日

49	顔ダンス	暮らし	商店	家具屋	引き出しを開けると顔がのぞく。お話を聞いた道具屋さんのダンス。	2012年11月11日
50	こちょ栗太郎	暮らし	商店	甘栗屋	甘栗屋さんの栗の中に、普段、隠れている。栗を食べて笑うような事があればコイツの仕業。	2012年11月11日
51	栗ムシ羊怪	暮らし	商店	ジョイフル三ノ輪商店街	三ノ輪橋の名物妖怪。隣の隣りの味ソ屋と前のおでん屋さんの匂いが強いので羊カンなのに味ソとオデンの匂が強い妖怪	2012年11月11日
52	ボロボロの店先のれん	暮らし	商店	ジョイフル三ノ輪商店街	人けのいない夕方、通る人にいらっしやいとでてる	2012年11月11日
53	ぬかみそじじい	暮らし	商店	ジョイフル三ノ輪商店街		2012年11月11日
54	三ノ輪ぼっ子	暮らし	アーケード	ジョイフル三ノ輪商店街	商店街のアーケードの上を走り回る子どもの妖怪。登ってきた子どもは容赦なく蹴下とされる。	2012年11月11日
55		暮らし	アーケード	ジョイフル三ノ輪商店街	2階 使わない窓からのぞいている(アーケード) 目が光る小鬼 子どもみたい 鬼、ひとつめこぞう いくつもうごいてる	2012年11月11日
56	裏壁波板天板妖怪	暮らし	民家	ジョイフル三ノ輪商店街	建物と建物の間で普通は目に触れないが隣りが解体され見えるようになった錆た波板鉄板の妖怪 色々な錆がミックスしたパッチワークの様な姿がユニーク。但し建主が錆がキタナイので新建材のサイディングで覆われてしまい今では表れていない	2012年11月11日
57	福すわり	暮らし	民家	人の家の前にある小さなベンチ	知らぬまにベンチに座って休けいしている。見に行くとすばやく逃げちゃうので、見るときはそっとしなければならぬ。福をもたらしてくれる。 知らないところから来た小人のような存在。どのようにしてできたかは不明。 ベンチの上にあめを置いておくとと福をもたらしてくれる。 福がほしくない人は、ベンチの上に「くるな」と書いてクシャクシャにした紙を置いておくと二度とその家にはこなくなる。ただし、そうすると逆にびんぼう神がくることがあるので注意。	2012年11月11日
58	ワタシロウカカラ	暮らし	民家	奥に長い家(商家)の建物と建物をつなぐ様な場所	出現時間・・・朝と夕方 かたち・・・建物 大きさ・・・人がひとり通れるくらいのはばの道(はしご、渡し廊下) 各家の2階どうしをつなぐ渡し廊下。 行きたい気持ちと時間が一致すると現れる。 直線で行けないうので曲者は使えない。途中で落ちてしまう。 渡し廊下からから客が来ると楽しい、びっくりする。	2013年5月18日
59	床嘗蛙	暮らし	民家	大黒湯	出現時間・・・夜中 かたち・・・動物 銭湯がおわった真夜中、とこなめガエルがあらわれて、銭湯のそこらじゅうをなめてまわる。	2013年6月22日
60	お化けビア	暮らし	民家	玄関	出現時間・・・夕方 かたち・・・植物 大きさ・・・二階の建物より大きい。 路地で玄関前で栽培していたビアが大きくなり、どんどん実をつけ、繁殖しようとする。家庭の玄関前でタネからはっぽうシチロールのようきをはみだし根を地面までのばし、大きくなり、実をつけ、他に繁殖の場所をもとめるために、近ずいてタネをまいてもらおうと、実が光り、人をよせつけて、繁殖のきかいを見つかけようとしている。また、このへんは、根をのばせば水はほうふなようなので。	2013年6月22日
61	かくれんぼ	暮らし	すきま	建物のすきま	出現時間・・・タ暮れ かたち・・・人間 特に古い建物の間にいる妖怪。誰かに見つけてもらいたくていつも明るい方を見ている。この地の様々な時代、人々の心残りの塊が集まって1つの形になっている。	2013年6月22日

62	くろめ	暮らし	すきま	すきま	出現時間…活動は昼 かたち…自然物 大きさ…てのひらサイズ 屋間少しあいたマドやトビラのすきまから外を見ている。目が合うとひっこむ。 何があるかわからない暗闇への恐怖や好奇心のかたまり	2013年6月22日
63	妖怪団地	暮らし	団地	団地	他の団地の間に入り込んで見る人をまどわす。でも誰もたどり着けない。	2012年12月8日
64	ヒャクメビル	暮らし	団地	汐入地区全体	出現時間…24時間(一旦出現すると) かたち…建物 大きさ…低層から超高層まで ○平地があると次から次へとニョキニョキと生えてくる。 ○人間をのみこんで吐き出す…をくり返す無機質な都市型妖怪 ○地震の揺れに強いものから弱いものまでいろいろ ○夜間に発光する ○強風や豪雨にはとても強い ○サイカイハツという化物が汐入に生み落とされた。	2013年3月20日
65	ヒャクメノモリ(百目の森・守)	暮らし	団地	隅田川近くの大きなマンション群	出現時間…いつも かたち…建物 大きさ…7～8階建て 隅田川沿いに建てられている大きなマンション群 窓の1つ1つが目になっている 東京大空襲で川に逃げて死んだ人たちがのりついて川をいつも見守っている。 防水堤や防火堤になって人々を守る。	2013年3月20日
66	小部屋小僧	暮らし	旅館	日泊りの旅館	出現時間…夜 かたち…人間、建物 大きさ…小僧 宿の部屋がどんどん小さくなって、せますぎると現れるようになった。せまいよお～、せまいよ～とさげび、せまい部屋を歩きまわる。	2013年6月22日
67	マンマル	暮らし	巨大構造物	ガスホルダー		2012年12月8日
68	石浜力比べ	暮らし	巨大構造物	ガスホルダー付近	出現時間…うしみつ時 かたち…建物、自然物(石)、複合型 大きさ…MAXガスホルダーぐらい 力石は昔から力比べに使われていた。近年、すたれてしまったが、ガスホルダーができたことから、おもさ比べをしてほしくて、ガスホルダーにばけてでてくる。3つあるガスホルダーが、4つにみえる時がある。	2013年7月15日
69	げん太鬼	神社仏閣	神社	豊川稲荷	豊川稲荷に人の届かない所に札が貼ってある。 げん太という名前の鬼が貼ったとかなんとか、…	2012年10月27日
70	もどれないぎつね	神社仏閣	神社	豊川稲荷	豊川稲荷きつねが時々つれだつて、隅田川のふなつきばから、船にのって遊びに出かけていた。浅草でたのしく他のおいなりさんのきつねをたずねて遊んで、帰ってこようとしたら、近くに、新しく魚屋さんができていた。その魚屋さんは、なんと犬(犬竹魚店)という名前だったのだ。きつねはもどつていけなくなり、今だに豊川稲荷にはきつねがいないのである。そして、帰りたいきつねは南千住のあちこちで目撃されている。時々、歩いていて何気になって、今来た道をもどってしまった時が、そばにきつねがいる時である。	2012年10月27日
71	石浜妖怪神社	神社仏閣	神社	石浜神社	中に妖怪達がかくれ住んでいるので、建物を移動しなきゃならない。妖怪を守る神社。	2013年1月14日
72		神社仏閣	神社	素戔鳴神社	牛頭天王の祭礼でみこしをかつぐ人が鬼形をしていたが、いつのまにか鬼の姿をしたものは見えなくなった 千住橋の綱引きは、あらそいに発展してケガ人が出たりしたから“是も絶えり”。なので、これも鬼の姿をした人が消えた、本当に鬼になっちゃったからなくなったのかも…!? 本当は道順とか、身支度の作法があったけど、伝わらなかつたり、まちがえてしまった。(くつを午後におろしちゃう感じ!!)→キツネつくよ! だから、今でも、鬼がかついでるかもよ。 ☆人にまぎれて消えていく。一人でいるところは見えない。 人の顔はない 赤くぬったのつべら、みようとしてみえない。逆に誰の顔にも見える。虎皮に染めたパンツ	2013年1月14日

73		神社仏閣	神社	日枝神社	日枝神社の社の中に虫歯菌妖怪がうじゃうじゃいた。子供を連れていったら、歯みがきをする様に教育したらいいと感じた。	2013年2月23日
74	とうろうの力士	神社仏閣	神社	熊野神社	熊野神社の社の前におかれている「とうろう」は、橋を守るために、力強い力士がそんきょをしている姿を模してつくられている。長い間に、つくも神となり、力士の姿になって、あらわれるようになった。特に、千住大橋のつなひきの時、こちら側の引き手の中に、くつきょうな力士がいたら、まちがいなく、とうろうの力士である。	2013年2月23日
75	ウタレガメ	神社仏閣	神社	隅田川神社裏手	出現時間・・・夜、満月の日 かたち・・・動物 大きさ・・・玉子、ゴルフボール位。 神社の境内の裏手に、手作りの打ちっぱなし場のよう なものが作られていて、数えきれない位のゴルフボールが落ちていて、それが亀のたまごのように見えたので。 亀の神さまが手荒く扱われるたまごを夜な夜な泣きながら集めている。いつまでもふかしないたまごを神社の神様(亀)が集めて泣いている。	2013年3月20日
76	刃物キツネ(橋戸稲荷神社)	神社仏閣	神社	橋戸稲荷神社と市場	出現時間・・・夜、暗くなってからと、市場が始まる前 かたち・・・動物 大きさ・・・神社にある石の3びきのキツネ 稲荷の彫刻にあった、三条小鍛冶が、刃物を打っている ので、近くには、魚をあつかった市場があり、夜ごと 刃がカケた刃物を神社へもって来て、なおしてまたもとへもどしている。	2013年5月18日
77	石濱入道	神社仏閣	神社	石濱神社の横	出現時間・・・常に かたち・・・複合型(道具・建物・自然物) お参りに来る人を上から見下ろしている。たまに話しかけてくる。 隣のカスホルダー ほろが着物 神社と土地を入れかえた時おいてけぼりになった神様。	2013年7月15日
78	目黄不動	神社仏閣	寺院	永久寺	目黄不動(黄色一ツ目)。関東大震災、空襲でもなぜか残った。 もう1つの目たちがどっかにいて、ピンチの時は仲間をよんでくる。5色そろとう強い。あいまいでふよーとしてる よわそう おちた目だから弱くてドロツとしてる。ピンチの寺の色がリーダーになる。でも、弱いから、他の寺までは範囲に含まれない。そんなに守りきれません。	2013年1月14日
79	妖怪逆さスタンプ	神社仏閣	寺院	木母寺	出現時間・・・常時 かたち・・・自然物(空気のようなもの) 大きさ・・・高さ1.5m／幅2m 木母寺の記念スタンプを押す台の前において、スタンプを逆さに押させてしまう妖怪。押した人を驚かせて喜ぶ、いたずら好きな妖怪。害はないが、訪れた人にちょっとした後悔をさせて喜んでる。	2013年3月20日
80	弁天蛇	神社仏閣	寺院	木母寺	かたち・・・複合型(大蛇) 梅若の守り神	2013年3月20日
81	屋根若小僧	神社仏閣	寺院	梅若念仏堂の向かいの階段下	出現時間・・・いつも かたち・・・道具？、建物？ 防災上の都合から、本体であるお堂は防火ガラスの中に納められた。 入りきらなかったもので、向かい側の階段下にそっと置かれている。 背中を向けているけれど、いつも梅若塚を見守っている。 一番近いと思っている人間は梅若なので、少年の姿をとる。 特に何もしない。見守っている。 ※防災拠点建設にひっかかるのは本当。だからガラスケースに入ってる理由もたぶん本当。でもなんの屋根かは妄想です。	2013年3月20日
82	わらい蛇	神社仏閣	寺院	木母寺付近	かたち・・・動物 大きさ・・・控え目 土地の開発で本来の居所から断ち切れひと所に集められてしまった歴史的な遺物達。そんな存在を代表する怪異は自分達の境遇を笑うしかない。	2013年3月20日

83	くちなわ弁財	神社仏閣	寺院	木母寺	かたち・・・動物 大きさ・・・大蛇 元のスミカを奪われてしまった仕掛として漁船のモヤイ船のイカリを逆さにして、船を流出させてしまった。メスの大蛇なので弁天様が悟して祀られた。	2013年3月20日
84	カエサズ	神社仏閣	寺院	浄閑寺	出現時間・・・人が来た時 かたち・・・墓石 大きさ・・・墓石くらい 通り道をふさいだり、墓石の配置を変えたりして人を迷わせおまいりに来た人をなかなか家に帰らせてくれない。そこにねむっている人(遊女達とか)が来た人に帰ってほしくないという寂しさから現れるようになった。耳をすますと風で木が揺れている音に交じってクスクス笑ったり、シクシク泣いたりする音(声)が聞こえる。	2013年6月22日
85	扶養霊	神社仏閣	寺院	浄閑寺付近	出現時間・・・昼間 かたち・・・人間 大きさ・・・160cm なぜ：無縁で帰るところがなく、亡くなった遊女の霊。結婚願望への執念(さびしさ)が残る。 特徴：結婚していない30代以上の女性にとりつく。(結婚願望が強い)取りついて、結婚願望を叶えようとする。タイプのイケメンの男を襲う場合もある。	2013年6月22日
86	いの子まり	神社仏閣	寺院	浄閑寺	出現時間・・・夕方 かたち・・・人間、動物 大きさ・・・ドッチボールくらい 吉原でかわいがられていたいのししは、今でも遊女の近くにいるでしょう。 遊女たちの遺品は何もないけれど、いのししがいる景色は、確かに遊女の思い出のかけらでしょう。 小さい頃売りに出された遊女がいたならば、その人は子どもの時からまりつきして遊んだり出来なかったでしょう。 いのししは丸くなってまりになり、大好きな遊女たちと今でも遊んでいるんでないかしら。 きつとつかれたあとに花でも咲かせて、遊女たちと遊んでるこんせきをたまに人に見せたりするはず。 浄閑寺に花はなかったのは、まりをついている時しか花が現れないからさ...と。 ※遊女の墓があるわりには花がないな...と。ふと思ったので...。	2013年6月22日
87	ひょっこり妖怪	神社仏閣	寺院	浄閑寺でてすぐの所	出現時間・・・昼 かたち・・・人間 大きさ・・・子ども(小学生くらいの) 浄閑寺からでていった人を見送るように現れる。いい妖怪。 幼い子を亡くした親が墓参りに来たときに現れたのがはじまり。 後ろをふり返ってみると現れるかも	2013年6月22日
88	居酒屋 蛸	神社仏閣	寺院	浄閑寺	出現時間・・・アフター5 かたち・・・動物 大きさ・・・2階建ての家くらい 会社帰りのお父さんを居酒屋へ連れ込んでしまう。立ち止まったら最後、酔いつぶれるまで帰してくれない。しかし子どもへのプレゼントを持ったお父さんには手を出さないやさしい妖怪。	2013年6月22日
89	罪人裁き	神社仏閣	寺院	仕置所	出現時間・・・一日中 かたち・・・人間、複合型(神様) 大きさ・・・人の10倍くらい 仕置所にて罪人として送られてきた人のうち、反省している人にはやさしさを、反省していない人には心を鬼にして天罰を与える 普段は笑顔でいる	2013年6月22日
90	川の手	川	川	隅田川	全部の川のぬし 道の手と友だち。ふういんのつぼがある。 かた目の大ひごいのかためをとるためわざとエジをおこしたようほん人。こいつをたおすと全部の川のぬし。ジャンけんずき いたずらずき	2012年12月8日
91		川	川	隅田川	水神橋の近くに主(水神)を守るため川にスミをはく。 ＝川を黒くして外から見えないようにする妖怪 炭田川＝隅田川	2012年12月8日

92	柳下風吹かし猫	川	川	隅田川付近	出現時間…気まぐれ かたち…複合型(柳、猫) 大きさ…3mくらい 風を起こす。調節をしないため、心地良い風をつくることもあれば、火事を悪化させるような強い風をつくることもある。仲間はいるが、同じ時間帯には陣地争いによって出沒できない。「ナァ〜〜〜」と鳴きながら現れる。	2013年3月20日
93	大しじみ貝(しじみ)	川	川	隅田川	出現時間…霞にかかった日 その他…貝 かすみがかかった日に、船や人を写し、川へ引きずり込もうとしている。	2013年3月20日
94	ヒキズリダコ	川	川	汐入の川岸(隅田川が湾曲しているところ)	出現時間…天候が荒れたとき かたち…複合型(タコ+イカリ) 大きさ…体高5mほど 隅田川を上り下りする川船を水底に引きずりこむ。隅田川神社の水神により、体を真っ二つにされたが、二つに別れてなお、お互いを求め合い、間を通ろうとする船に、両側からとりつき沈めようとする。今は1対の赤いイカリに姿を変えられ、隅田川神社の境内の隅に身を潜めている。ちなみに水神大橋の下に棲む大蛸の眷属である。	2013年3月20日
95	浮洲の碇返し(モヤイクずし)	川	川	隅田川神社対岸地帯	かたち…複合型(船、大イタチ) 隅田川に(白髭橋にも)スミカしている大イタチが家族用に獲った魚を土中に埋めて保存していたが近隣村人が、そこを狙ってとってしまった。仕返しに漁師がケイ留している錨を逆さにして船を流してしまう。	2013年3月20日
96	千手の渡し	川	川	千住大橋	出現時間…明るい時間帯 かたち…ほぼ人間 大きさ…巨大 (大昔)橋が無かった時代、川を渡るのに存在した妖怪。 千本の手で川岸を渡し、両岸が栄える。 川の上に橋が建てられ、行き場を失った「千手の渡し」があばれて水面が激しくゆれる。 川に葦が多いのは、「千手の渡し」がイジけて、…逆立ちした「足」の名残りである。商売繁盛がモットー。	2013年5月18日
97	石浜のそぞろ金色カモメ守	川	川	石浜神社～真崎稲荷の渡し	出現時間…月夜 かたち…動物(カモメの化身) 嵐で傷ついたカモメを石浜村長が助けたが、羽を痛めたため、村長夫婦は手に余り隅田川へ漂わせた。心配してしばらく様子を見に行ったら二人は浪間に見えかくれしたが、その後、姿を見なくなり死んでしまったと嘆いた。ある夜、浜へ出かけたところ月光をあびた金色に輝く羽を失ったカモメを見た。それっきり二度と姿を表さなかった。その後、石浜の人々は村を疫病や災害から守ってくれた守り神としてうやまつた。	2013年7月15日
98	かわ嘘	川	川	隅田川	出現時間…昼間 かたち…動物 大きさ…50cm おまつりの中でカワウソ狩りをやっていたことへの恨み 霊の集合体 かわいいものに化けて、うそをついて川にひきずりこむ(怪力) 集団行動	2013年7月15日
99	カワウソ小学生	川	公園	小学校 公園の近く 水けのある場所	出現時間…休日・放課後 かたち…人間・動物 大きさ…人間・カワウソ 観光客を見つけると目的地まで導く(ついてくる) キックボードに乗っている。 いつものまにかいなくなっている。(観光客が目的地に到着したのを確認すると) 昔いたカワウソがビルなどの建築によって居場所を失い、人間の姿となって、現れるようになった。(人間に化けて生活する)	2013年7月15日
100	Ankyo de Inkyo	川	川の跡(暗渠を含む)		かつて貯木場だったと思われる場所にある公園から熊野神社、山王清兵衛の祀(日枝神社)、砂尾堤跡の祀などを巡った。暗渠らしき路地などもあり、水辺に関連した歴史の古い土地柄だという事がよくわかった。この様な土地では人々は水辺を恐れ、不用意に近づく者を水中に引き込み溺死させる様な妖怪を想像した筈だと思う。現在では暗渠の中や水が無くなった公園の片隅で暇そうにしているのではなかろうか。	2013年2月23日

101	もっとあそ坊	川	川の跡(暗渠を含む)	川の跡、昔の土地の高低差が残っているところ	出現時間…夕方、うす暗くなる頃 昼間も雲があつて少し暗くなる時 かたち…人間+動物 大きさ…人間の子供位の身長、やややせ型 川があつたときは、人間の子供達と遊んだ河童。川がなくなってもまだ同じ場所に住み続け、人が通ると「あそぼう…」と声を掛ける。大人はあまり気づかないが子供は姿が見える。悪いことではないが、一緒に遊ぶと大喜びする。子供が帰ろうとすると泣き出すので、なかなか帰れなくなり、夜になってしまう。大人が連れ戻しにくると、あっさり帰してくれる。	2013年6月22日
102	橋のぞき	川	川の跡(暗渠を含む)	思川	出現時間…人がいない時 雨が降ったり又は日でりの時など かたち…半魚人 大きさ…子供くらい 川の水が多すぎたり少なくなりすぎた時、橋をとりのぞき、人が通れなくなったり、迷ったり、いなくなったりする原因をつくる。川をせき止めたりつないだりする時もある。	2013年6月22日
103	妖怪☆ナミダバシ	川	川の跡(暗渠を含む)	雨が降って水がふえと思川のあつたあたりに現れる	出現時間…夕方～明るくなる迄 かたち…建物 大きさ…幅3m、長さ20mくらい 雨で水が増え、思川のあつたあたりに出現する。薄暗くなる頃にあらわれるので、妖怪と気付かず渡ってしまう人がいる。そんな人々を、限りなくあの世に近い不思議な世界へ導く。そこで、未知なる体験をした人間はその出来事を夢だと思って、少しずつ忘れていってしまうためナミダバシはさみしくて、雨が降る度に色々な人を誘い込む。因みに普段この橋を使うのはカツパくんである。 ※ほおおんという風の鳴るような、人がむせび泣くような不気味な声を出す。しかし、この声に、何故か人は引き寄せられる。	2013年6月22日
104	浄閑うなぎ	川	川の跡(暗渠を含む)	日本堤・土手通り 浄閑寺～浅草 隅田川方向	出現時間…土日休日 浅草に行く途中に会うかもしれない！ かたち…動物 大きさ…約1,500m 亡くなったあとなのですから休日くらいは好きに遊びに行けますように	2013年6月22日
105	水でっぼう	川	川の跡(暗渠を含む)	思川	出現時間…時間はきまっていない かたち…道具、自然物 水不足で渇水したりすると、どこからともなく水でっぼうがあらわれて、水を出す妖怪	2013年6月22日
106	井戸の怪	川	井戸	井戸	何時の頃からか、真夜中井戸を使う音がする。すると翌日必ず雨が降る。不思議に思った男が三日三晩見張ったが何事も起らなかった。 しばらくして井戸に人形を置いておくと何事も起らない事が分かった。 近年では運動会の前日等にてるてる坊主のように人形をつるす風習が残っている。 ジョイフル三ノ輪にて一体三百円にて販売しているらしい。	2012年11月11日
107	イカリひろい	川	井戸	隅田川神社井戸、川岸	出現時間…夜 かたち…人間 井戸から顔をだし、つりばりを投げて、川に流れるものをひっかけてとる。雨風がつよい日・川の水量が多い日にはイカリを投げて自ら泳いで川に流れるものをひろう。そのつもりはないがときどき偶然人も助ける。木にひっかかった梅若もこいつがひろった？	2013年3月20日
108	聴きガエル	跡地	跡地	弁天湯跡	昔弁天池に住み、弁天様のびわの音色を思い出し、地中よりときおり顔をのぞかせる。	2012年11月11日
109	弁天湯 男湯女湯仕切りノレン妖怪	跡地	跡地	弁天湯跡	解体され今は老人施設になってしまった弁天湯の男湯と女湯の仕切りに使われていたノレン 昼間は弁天様のヤシロにいたが夜になると男、女ベアで飛び出してもとのノレンがかかっていた場所をさがすため老人施設の周りを飛びまわっている	2012年11月11日
110		跡地	跡地	弁天湯跡	のれん浮かんで涙でぬれる	2012年11月11日
111	じわじわ	跡地	跡地	弁天湯跡	沼地後、うめられた沼から出てくる。雨の夕方へびみたい。	2012年11月11日

112		跡地	跡地	ラシャ場付近	南千住ラシャ場←たたかい→農村からの変貌 綿の西洋妖怪 谷中生姜・汐入大根・三河島菜の消滅の精(侍のすがた形)	2013年1月14日
113	カベズリ崩し	跡地	跡地	貯木場跡	妖怪コロニー(集団生活)地区 貯木場跡で集団生活している 妖怪は水生動物の化身 昔、水運が活況を呈している中で悪さをして、人間に懲められその退避場がコロニーになった。 人家の魚をすべて盗み食べる 人間がカワウソの食べ物をかくすと家壁をうち崩してしまう。 やがて天王様、熊野神社、日枝神社の各神様がコロニーから夜な夜出沒する妖怪をいさめさとし、悪さをしなくなった。以来、この付近に住まいの人は各神社へ隅田川で獲れる魚を添えた。 妖怪の正体は巨大カワウソだった。 今ではそなえ物を忘れると夜な夜な不気味な犬の遠吠えのような声が響き渡る。 顔ーカワウソ 体ー虎 尻っぽーブーメラン型	2013年2月23日
114	空の手	空	空	空	ジャンけんずき・ふういんのつぼをさがす こいつをたおすとそらがなくなる 道の手が川の手のとまだち・いたずらずき	2012年12月8日
115		地下	地下	地下	地中に潜んでいる 開発が進み、行き場を失ったが、住みなれた土地を水神はなれたくないので、建物のすき間から出てきた化身。	2012年12月8日
116	ようかい白黒	地下	地下	地下	うめたてられた沼にすんでいたようかい？ 沼がトンネルとつながっている。地下にもっと、トンネルがつながっている 炭(隅田川にはこぼれてきていた)・・・黒 胡粉・・・白 炭の黒と胡粉白とあわさって、ようかい白黒が、トンネル地下にすんでいる。	2012年12月8日
117		町全体	町全体		ジョイフル三ノ輪のアーケードが多足動物(ムカデ)となっている。足は路地	2012年11月11日
118	しおiri様	町全体	町全体	汐入地区	汐入地区の堤防は、汐入様の袋になっている。古いものにとられず日々姿を変えていく。川の氾濫をいっども防いでいる。	2012年12月8日
119	汐入土女	町全体	町全体	汐入地区	汐入地区の2つの橋(水神大橋、白ひげ橋)。この2つの橋は実は妖怪、汐入土女の角である。この2つの角を伸ばして、人間の世界を便利にして、この妖怪は一体この先、何をたくらんでいるのだろうか？	2012年12月8日
120		町全体	町全体	汐入地区	川の主が水門から入ってきて、街の巨大な主になった。巨大なモノー団地、ガスタンク、スカイツリー、高速道路 主が巨大なモノに変わる、まぼろし	2012年12月8日
121	汐入入道	町全体	町全体	汐入地区、石浜神社周へん	かたち・・・その他(土地のかたち) 大きさ・・・屋はあまのじゃく(石像)夜は巨大化する 東京の悪いものを石浜神社の口から体内にとり込む土地の形をした巨大な妖怪。夜な夜な悪い気をあつめる。ひる間は、あまのじゃくの石像に入っている。 悪所と言われた所で、その悪い気が集まり、入道となった。	2013年7月15日
122	みずあげようかい	無分類	無分類			2012年11月11日
123	じょうろすびん	無分類	無分類			2012年11月11日
124	ホウキ	無分類	無分類	町にある一部のほうきだから出場所は町	勝手に夜動き出し人をはいて弱くなってきたらパワーにかえ大きくなりそのうちその町のひとをはいつくす。	2012年11月11日
125	ちょうちん炎火	無分類	無分類			2012年11月11日
126	バケツけむり	無分類	無分類			2012年11月11日
127	デロンデロン	無分類	無分類			2012年11月11日